

大里郡寄居町

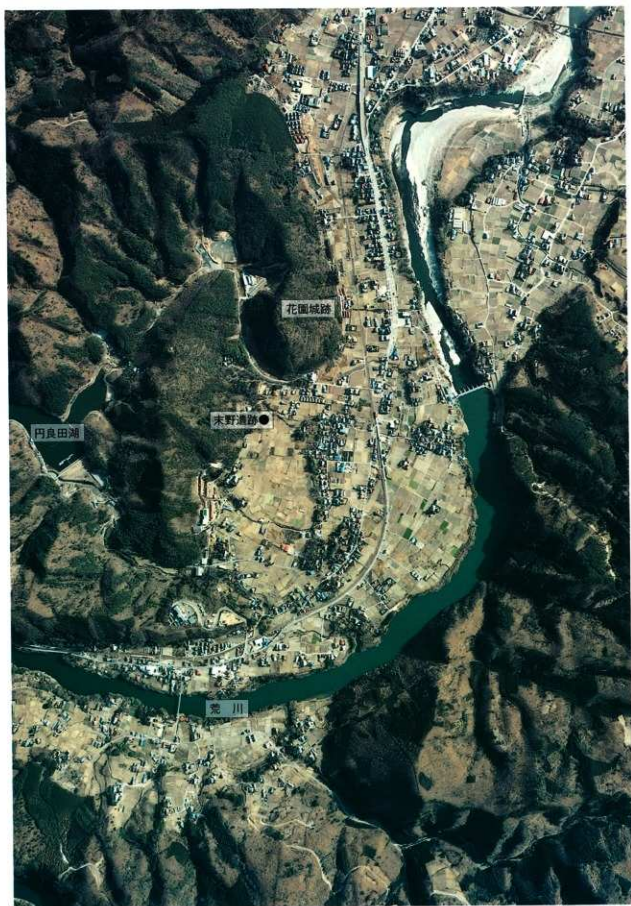
末野遺跡 II

県道広木折原線関係埋蔵文化財発掘調査報告

— IV —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



末野遺跡と荒川



末野遺跡（東から）



末野遺跡E・F全景（南から）



末野遺跡F区全景



末野遺跡E区全景



東側灰原跡出土大甕



東側灰原跡出土獸脚硯

序

埼玉県では、「新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくり」を施策方針の一つとしております。その一環として、交通の要衝としての地理的条件を生かし、県民の生活圏の拡大や、高度化する産業活動の円滑化を図るため、生活環境の保全と、道路交通の安全性を重視しながら、総合的な道路交通網の整備が進められています。

特に、県内を結ぶ幹線道路の整備については、地域間の連携を高めるために、県内1時間道路網構想を目指して進められ、県道広木折原線の建設がそれらの一つとして計画されました。

この路線は、国道254号線の児玉郡美里町広木から円良田湖を経由して、国道140号線の寄居町折原を結ぶ道路です。

寄居町の道路建設予定地内には、末野遺跡など4遺跡の貴重な遺跡が知られていました。これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査については、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県道路建設課の委託を受け、実施することになりました。

寄居町は、町の中央を流れる荒川の景観が県指定名勝「玉淀」として、つとに知られており、荒川を中心に緑豊かな山里が広がり、古くから人々の生活が営まれてきました。町内には、古代武蔵の大窯跡である末野

窯跡群や国指定史跡の鉢形城跡などがあります。

末野遺跡の発掘調査では、古墳時代から平安時代にかけての須恵器を生産した窯跡や工房跡・須恵器を作るための粘土を採掘した跡などが発見されました。須恵器生産に携わった工人たちは、末野の起伏に富んだ地形と森林資源を巧みに利用したことでしょう。

本書は、古墳時代後期から奈良時代へと大きく変化した時代の須恵器窯跡の発掘調査であります。窯跡から出土した須恵器は、大和地方を中心とした国家の整備が武蔵国にもおよんだことを示し、なかでも役所で使われた獣脚碑の発見は、関東において初めての出土例であり、貴重な資料を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護及び普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、同熊谷土木事務所、寄居町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡寄居町に所在する末野遺跡に関する発掘調査報告書の第2冊目である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
末野遺跡 (SEN)
大里郡寄居町大字末野字金場1206番地他
平成7年8月17日付教文第2-79号
3. 発掘調査は、県道広木折原線(寄居地内)建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県土木部道路建設課の委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は第1章の組織により実施した。本事業のうち末野遺跡の発掘調査については、赤熊浩一、佐藤康二、中山浩彦が担当し、平成7年8月1日から平成8年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は、赤熊が担当し、平成9年4月1日から平成11年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量と空中写真、空中写真測量は株式会社東京航業研究所に委託した。土器のカラー写真は小川忠博氏に委託した。土器胎土分析は第

四紀地質研究所に委託した。炭化材の樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社委託した。

6. 発掘調査時の遺構写真撮影は赤熊、佐藤、中山が行った。遺物の撮影は赤熊、大塚道則が行った。
7. 出土品の整理・図版の作成は永井いずみの協力を得て、赤熊が行い、縄文時代の石器については西井幸雄が、瓦塔は高崎光司が行った。
本文の執筆は、1-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外は赤熊が行った。
8. 本書の編集は、赤熊が行った。
9. 本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
荒井健司・池田敏宏・石塚三夫・石田広美
内山敏行・大江政行・神谷佳明・亀田修一
恋河内昭彦・木津博明・小林 高・酒井清治
櫻岡正信・鈴木徳雄・高橋 訓・鶴間正昭
鳥羽政之・中沢 悟・菱田哲郎・福田健司
古郡正志・望月精司・渡辺 一・綿貫邦夫
寄居町教育委員会・さいたま川の博物館

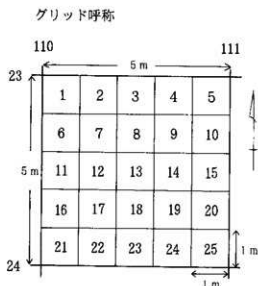
凡例

- 本書の遺跡全体図におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標数値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
 - グリッドは5mを大グリッドとして設定し、大グリッド内に1mの25の小グリッドを設定した。遺構の配置等の表記は、大グリッドを基準とした。
 - 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、その他のものについてはスケールで示している。
- | | | |
|-----|-----------|------------|
| 遺構図 | 跡跡・住居跡・土坑 | ……………1/60 |
| | 灰原分布図 | ……………1/250 |
| 遺物 | 須恵器・土師器 | ……………1/4 |
| | 須恵器甕腹部破片 | ……………1/5 |
| | 縄文時代の石器 | ……………1/3 |
- 出土遺物は、分布図に○壺 ▲壺・長頸壺 ● 圜 ■ 高台付圜 ★皿・高台付皿 ◆瓶 △鉢 ☆蓋 ×その他で示した。

須恵器は断面に黒塗りを施している。

5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
6. 遺物観察表は次のとおりである。
- ・口径、器高、底径は、cmを単位とする。
 - ・（ ）内の数値は推定値である。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものについて次のように示した。
- A—片岩粒、B—石英粒、C—白色微粒子、
D—雲母、E—酸化鉄粒子・赤色粒子・黑色粒子、
F—長石、G—砂粒・小石、H—角閃石
- ・焼成は3段階に分けた。
- A—良好、B—普通、C—不良
- ・残存率は器形全体に対するもので、5%単位で示した。

7. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25000地形図、寄居町都市計画図を改図・転載したものである。



大グリッド 110-23 遺跡の基本単位

小グリッド 110-23-1 遺物取り上げの基本単位

灰原層位呼称

表	土	
灰 原	5	(灰5)
灰	原	(灰原)
灰 原	一 面	(一面)
灰 原	二 面	(二面)

目次

口絵 序 例言 凡例 目次

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過 1
2. 発掘調査・報告書作成の経過 2
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織 4

II 遺跡の立地と環境 5

III 遺跡の概要 11

IV 遺構と遺物

1. 住居跡と出土遺物 16
2. 土塙と出土遺物 30
3. 竈跡と出土遺物 35
4. 粘土採掘坑と出土遺物 45
5. 不明遺構と出土遺物 51
6. 東側灰原跡と出土遺物 54
 - (1) 第5号竈跡の灰原(灰原5) 54
 - a 坏・皿・高台付坏 60
 - b 長頸壺・壺 83
 - c 鉢 87
 - (2) 東側灰原跡(灰原・一面・二面)と出土遺物 93
 - a 坏 96

- b 蓋 108
- c 甕・高台付甕・高甕 118
- d 高台付坏 131
- e 碗・鉢・すり鉢 132
- f 高坏 142
- g 小型壺・長頸瓶・短頸壺・平瓶・横瓶・
提瓶など 143
- h 甗 156
- i 硯 156
- j 坏蓋 158
- k 壺 170
- l 甕 190
- m 坏・皿・高台付坏・高台付皿 277
- n 瓦・瓦塔 281
- o 土師器 294
- p その他 296

V まとめ 305

1. 生産器種と生産量 305
2. 口縁部形態に見る変化—甕・壺を中心として— 317
3. 平安七器のくせ(形態的特徴) 324
4. 末野遺跡の様相と編年的位置 328

付編

- 末野遺跡出土土器胎土分析鑑定報告 337
- 末野遺跡の須恵器窯燃料材等の樹種 352

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	5	第35図	粘土採掘坑 a	46
第2図	末野窯跡群分布図	7	第36図	粘土採掘坑 a 出土遺物(1)	47
第3図	周辺の遺跡分布図	8・9	第37図	粘土採掘坑 a 出土遺物(2)	48
第4図	末野遺跡の地質柱状図	12	第38図	粘土採掘坑 b 出土遺物	49
第5図	調査区周辺の現状	13	第39図	粘土採掘坑 b	50
第6図	グリッド網図	14	第40図	第12号不明遺構	51
第7図	末野遺跡E・F区全測図	15	第41図	第12号不明遺構出土遺物	52
第8図	第4号住居跡・出土遺物	17	第42図	第13号不明遺構・出土遺物	53
第9図	第4号住居跡カマド	18	第43図	灰原跡全体図	55
第10図	第5号住居跡	19	第44図	灰原跡断面図(1)	56
第11図	第5号住居跡遺物分布図・出土遺物	20	第45図	灰原跡断面図(2)	57
第12図	第5号住居跡カマド	21	第46図	灰原跡断面図(3)	58
第13図	第6号住居跡	22	第47図	灰原跡断面図(4)	59
第14図	第6号住居跡カマド	23	第48図	灰原5 Ⅱ(底部) 出土分布図	61
第15図	第6号住居跡遺物分布図	23	第49図	灰原5 Ⅲ(底部) 出土分布図	62
第16図	第6号住居跡出土遺物(1)	24	第50図	灰原5 高台付Ⅱ(底部) 出土分布図	63
第17図	第6号住居跡出土遺物(2)	25	第51図	灰原5 出土遺物(1)	64
第18図	第7号住居跡・遺物分布図	27	第52図	灰原5 出土遺物(2)	65
第19図	第7号住居跡出土遺物	27	第53図	灰原5 出土遺物(3)	66
第20図	第8号住居跡・遺物分布図・第33号土壌	28	第54図	灰原5 出土遺物(4)	67
第21図	第8号住居跡カマド・貯蔵穴	29	第55図	灰原5 出土遺物(5)	68
第22図	第8号住居跡出土遺物	30	第56図	灰原5 出土遺物(6)	69
第23図	第30・31・32号土壌	31	第57図	灰原5 出土遺物(7)	70
第24図	第30・31・32号土壌出土遺物	32	第58図	灰原5 出土遺物(8)	71
第25図	第34号土壌・出土遺物	34	第59図	灰原5 出土遺物(9)	72
第26図	第5号窯跡周辺全体図	35	第60図	灰原5 出土遺物(10)	73
第27図	第5号窯跡	36	第61図	灰原5 出土遺物(11)	74
第28図	第5号窯跡工具痕・遺物分布図	37	第62図	灰原5 出土遺物(12)	75
第29図	第5号窯跡出土遺物(1)	38	第63図	灰原5 Ⅴ・高台付Ⅲ・鉢出土分布図	82
第30図	第5号窯跡出土遺物(2)	39	第64図	灰原5 出土遺物(13)	83
第31図	平場跡	41	第65図	灰原5 出土遺物(14)	84
第32図	平場跡出土遺物(1)	42	第66図	灰原5 出土遺物(15)	85
第33図	平場跡出土遺物(2)	43	第67図	灰原5 出土遺物(16)	88
第34図	粘土採掘坑 a 遺物分布図	45	第68図	灰原5 出土遺物(17)	89
			第69図	灰原5 出土遺物(18)	90

第70图	灰原5出土遺物09	91	第107图	灰原跡出土遺物07	149
第71图	灰原跡遺物分布概念図(1)	93	第108图	灰原跡出土遺物08	150
第72图	灰原跡遺物分布概念図(2)	94	第109图	灰原跡出土遺物09	151
第73图	灰原跡遺物分布概念図(3)	95	第110图	灰原跡出土遺物10	152
第74图	灰原跡環C出土分布図	98	第111图	灰原跡出土遺物11	153
第75图	灰原跡平底坏出土分布図	100	第112图	灰原跡出土遺物12	154
第76图	灰原跡出土遺物(1)	102	第113图	灰原跡出土遺物13	157
第77图	灰原跡出土遺物(2)	103	第114图	灰原跡出土遺物14	158
第78图	灰原跡出土遺物(3)	104	第115图	灰原跡出土遺物15	159
第79图	灰原跡出土遺物(4)	105	第116图	灰原跡壺出土分布図(1)	172
第80图	灰原跡出土遺物(5)	106	第117图	灰原跡壺出土分布図(2)	173
第81图	灰原跡出土遺物(6)	107	第118图	灰原跡壺出土分布図(3)	174
第82图	灰原跡壺出土分布図	110	第119图	灰原跡壺出土分布図(4)	175
第83图	灰原跡返り壺出土分布図	112	第120图	灰原跡壺出土分布図(5)	176
第84图	灰原跡出土遺物(7)	114	第121图	灰原跡出土壺(1)	177
第85图	灰原跡出土遺物(8)	115	第122图	灰原跡出土壺(2)	178
第86图	灰原跡出土遺物(9)	116	第123图	灰原跡出土壺(3)	179
第87图	灰原跡出土遺物10	117	第124图	灰原跡出土壺(4)	180
第88图	灰原跡壺出土分布図	120	第125图	灰原跡出土壺(5)	181
第89图	灰原跡高台付壺・高盤出土分布図	122	第126图	灰原跡出土壺(6)	182
第90图	灰原跡出土遺物11	124	第127图	灰原跡出土壺(7)	183
第91图	灰原跡出土遺物12	125	第128图	灰原跡出土壺(8)	184
第92图	灰原跡出土遺物13	126	第129图	灰原跡出土壺(9)	187
第93图	灰原跡出土遺物14	127	第130图	灰原跡出土壺10	188
第94图	灰原跡出土遺物15	128	第131图	灰原跡壺出土分布図(1)	192
第95图	灰原跡出土遺物16	129	第132图	灰原跡壺出土分布図(2)	193
第96图	灰原跡出土遺物17	130	第133图	灰原跡壺出土分布図(3)	194
第97图	灰原跡碗・高台付坏・高坏出土分布図	134	第134图	灰原跡壺出土分布図(4)	195
第98图	灰原跡鉢出土分布図	136	第135图	灰原跡壺出土分布図(5)	196
第99图	灰原跡出土遺物18	138	第136图	灰原跡壺出土分布図(6)	197
第100图	灰原跡出土遺物19	139	第137图	灰原跡壺出土分布図(7)	198
第101图	灰原跡出土遺物20	140	第138图	灰原跡出土壺(1)	199
第102图	灰原跡出土遺物21	141	第139图	灰原跡出土壺(2)	200
第103图	灰原跡出土遺物22	142	第140图	灰原跡出土壺(3)	201
第104图	灰原跡長頸瓶出土分布図	144	第141图	灰原跡出土壺(4)	202
第105图	灰原跡短頸壺出土分布図	146	第142图	灰原跡出土壺(5)	203
第106图	灰原跡出土遺物23	148	第143图	灰原跡出土壺(6)	204

第144图 灰原跡出土甕7)	205	第181图 灰原跡出土甕44)	248
第145图 灰原跡出土甕8)	206	第182图 灰原跡出土甕45)	249
第146图 灰原跡出土甕9)	207	第183图 灰原跡出土甕46)	250
第147图 灰原跡出土甕10)	208	第184图 灰原跡出土甕47)	251
第148图 灰原跡出土甕11)	209	第185图 灰原跡出土甕48)	252
第149图 灰原跡出土甕12)	210	第186图 灰原跡出土甕49)	253
第150图 灰原跡出土甕13)	211	第187图 灰原跡出土甕50)	254
第151图 灰原跡出土甕14)	212	第188图 灰原跡出土甕51)	255
第152图 灰原跡出土甕15)	213	第189图 灰原跡出土甕52)	256
第153图 灰原跡出土甕16)	214	第190图 灰原跡出土甕53)	257
第154图 灰原跡出土甕17)	215	第191图 灰原跡出土甕54)	258
第155图 灰原跡出土甕18)	216	第192图 灰原跡出土甕55)	259
第156图 灰原跡出土甕19)	217	第193图 灰原跡出土甕56)	260
第157图 灰原跡出土甕20)	218	第194图 灰原跡出土甕57)	261
第158图 灰原跡出土甕21)	219	第195图 灰原跡出土甕58)	262
第159图 灰原跡出土甕22)	220	第196图 灰原跡出土甕59)	263
第160图 灰原跡出土甕23)	221	第197图 灰原跡出土甕60)	264
第161图 灰原跡出土甕24)	222	第198图 灰原跡出土甕61)	265
第162图 灰原跡出土甕25)	223	第199图 灰原跡出土甕62)	266
第163图 灰原跡出土甕26)	224	第200图 灰原跡出土甕63)	271
第164图 灰原跡出土甕27)	225	第201图 灰原跡出土甕64)	272
第165图 灰原跡出土甕28)	226	第202图 灰原跡出土甕65)	273
第166图 灰原跡出土甕29)	227	第203图 灰原跡出土甕66)	274
第167图 灰原跡出土甕30)	228	第204图 灰原跡出土甕67)	275
第168图 灰原跡出土甕31)	229	第205图 灰原跡出土坏・皿・高台付坏(1)	278
第169图 灰原跡出土甕32)	230	第206图 灰原跡出土坏・皿・高台付坏(2)	279
第170图 灰原跡出土甕33)	231	第207图 灰原跡出土坏・皿・高台付坏(3)	280
第171图 灰原跡出土甕34)	232	第208图 灰原跡瓦・瓦塔出土分布图	282
第172图 灰原跡出土甕35)	233	第209图 灰原跡出土瓦(1)	283
第173图 灰原跡出土甕36)	240	第210图 灰原跡出土瓦(2)	284
第174图 灰原跡出土甕37)	241	第211图 灰原跡出土瓦(3)	285
第175图 灰原跡出土甕38)	242	第212图 灰原跡出土瓦(4)	286
第176图 灰原跡出土甕39)	243	第213图 灰原跡出土瓦(5)	287
第177图 灰原跡出土甕40)	244	第214图 灰原跡出土瓦(6)	288
第178图 灰原跡出土甕41)	245	第215图 灰原跡出土瓦塔(1)	290
第179图 灰原跡出土甕42)	246	第216图 灰原跡出土瓦塔(2)	291
第180图 灰原跡出土甕43)	247	第217图 灰原跡出土土師器	292

第218図	灰原跡その他の出土遺物(1)	295
第219図	灰原跡その他の出土遺物(2)	296
第220図	灰原跡その他の出土遺物(3)	297
第221図	灰原跡その他の出土遺物(4)	298
第222図	末野遺跡生産器種(1)	306
第223図	末野遺跡生産器種(2)	307
第224図	末野遺跡生産器種(3)	308
第225図	末野遺跡生産器種(4)	309
第226図	末野遺跡生産器種(5)	310
第227図	末野遺跡生産器種(6)	311

第228図	末野遺跡生産器種(7)	312
第229図	甕の口縁部形態分類図	318
第230図	レ点文様の変遷図	321
第231図	甕の口縁部文様(1)	322
第232図	甕の口縁部文様(2)	323
第233図	平安土器分類図	325
第234図	桜沢泉跡出土遺物	327
第235図	末野遺跡編年図	329
第236図	周辺遺跡分布図	332
第237図	城見上・末野遺跡概念図	334

表 目 次

第1表	県道広木折原線の調査工程表	3
第2表	第4号住居跡出土遺物観察表	17
第3表	第5号住居跡出土遺物観察表	19
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表	25
第5表	第7号住居跡出土遺物観察表	27
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表	30
第7表	第30号土壇出土遺物観察表	33
第8表	第31号土壇出土遺物観察表	33
第9表	第32号土壇出土遺物観察表	33
第10表	第34号土壇出土遺物観察表	34
第11表	第5号窯跡出土遺物観察表	39
第12表	第5号窯跡出土遺物計量表	40
第13表	平場跡出土遺物観察表	44
第14表	平場跡出土遺物計量表	44
第15表	粘土探掘坑a出土遺物観察表	48
第16表	粘土探掘坑b出土遺物観察表	49
第17表	第12号不明遺構出土遺物観察表	52
第18表	第13号不明遺構出土遺物観察表	53
第19表	灰原5出土遺物観察表	76
第20表	灰原5出土遺物観察表	86

第21表	灰原5出土遺物観察表	92
第22表	灰原跡出土遺物観察表	160
第23表	壺口縁部形態分類表	171
第24表	灰原跡出土壺観察表	184
第25表	灰原跡出土壺観察表	189
第26表	甕口縁部形態分類表	193
第27表	灰原跡出土甕観察表	234
第28表	灰原跡出土甕観察表	246
第29表	灰原跡出土甕観察表	267
第30表	灰原跡出土甕観察表	276
第31表	灰原跡出土埴・皿・高台付埴遺物観察表	280
第32表	灰原跡出土瓦観察表	288
第33表	灰原跡出土瓦塔観察表	291
第34表	灰原跡出土土師器観察表	294
第35表	灰原跡その他の出土遺物観察表	296
第36表	灰原5出土遺物破片数計量表	299
第37表	灰原5出土遺物重量表	300
第38表	灰原跡出土遺物破片数計量表	301
第39表	灰原跡出土遺物重量表	302

第40表	一面出土遺物破片数計量表	303
第41表	一面出土遺物重量表	303
第42表	二面出土遺物破片数計量表	304
第43表	二面出土遺物重量表	304
第44表	灰原跡出土遺物総破片数計量表	314
第45表	灰原跡出土遺物総重量表	314
第46表	灰原跡出土小型器破片数計量表	315
第47表	灰原跡出土小型器重量表	315
第48表	平安出土遺物破片数計量表	316

第49表	平安出土遺物重量表	316
第50表	竪口縁・空口縁部形態分類表	317
第51表	竪口縁部形態と段数・沈線の関係表	319
第52表	竪口縁の形態と櫛痕の関係表	320
第53表	灰原5底径別個体分析表	325
第54表	灰原底径別個体分析表	326
第55表	S F 5底径別個体分析表	326
第56表	坏G底部調整法個体数	331

写真図版目次

図版1	木野遺跡遠景（南から） 木野遺跡遠景（西から）
図版2	F区全景 第5号窯跡と灰原
図版3	第E区全景 第4号住居跡
図版4	第5号住居跡 第6号住居跡遺物出土状況
図版5	第6号住居跡粘土溜り 第6号住居跡遺物出土状況
図版6	第5・7号住居跡 第7号住居跡遺物出土状況
図版7	第8号住居跡 第8号住居跡カマド
図版8	第30号土塼遺物出土状況 第30号土塼
図版9	東側灰原（東から） 東側灰原（西から）
図版10	第5号窯跡 第5号窯跡断面
図版11	第5号窯跡

	第5号窯跡断面
図版12	第5号窯跡 第5号窯跡
図版13	第5号窯跡奥壁工具痕 左壁 右壁 左壁 右壁
図版14	第5号窯跡と灰原5 灰原5遺物出土状況
図版15	粘土採掘坑a 粘土採掘坑a遺物出土状況
図版16	第13号不明遺構 第34号土塼
図版17	灰原跡遺物出土状況 灰原跡遺物出土状況
図版18	灰原跡遺物出土状況 灰原跡断面（E-E'）
図版19	灰原跡断面（B-B'） 灰原跡断面（B-B'）
図版20	灰原跡断面（G-G'）

灰原跡断面 (G-G')

図版21 F区全景

粘土採掘坑b

図版22 北斜面木器出土状況

北斜面木器出土状況

図版23 第6号住居跡出土遺物

図版24 第6号住居跡出土遺物

図版25 第7号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物

第30号土壇出土遺物

第31号土壇出土遺物

図版26 第31号土壇出土遺物

第8号住居跡出土遺物

第32号土壇出土遺物

粘土採掘坑b出土遺物

図版27 第5号窯跡出土遺物

平場跡出土遺物

灰原5跡出土遺物

図版28 灰原5跡出土遺物

図版29 平場跡出土遺物

粘土採掘坑a出土遺物

図版30 灰原5跡出土遺物

図版31 灰原5跡出土遺物

図版32 平場跡出土遺物

粘土採掘坑a出土遺物

図版33 灰原5跡出土遺物

図版34 灰原5跡出土遺物

図版35 灰原5跡出土遺物

灰原跡出土遺物

図版36 灰原跡出土遺物(1)

図版37 灰原跡出土遺物(2)

図版38 灰原跡出土遺物(3)

図版39 灰原跡出土遺物(4)

図版40 灰原跡出土遺物(5)

図版41 灰原跡出土遺物(6)

図版42 灰原跡出土遺物(7)

図版43 灰原跡出土遺物(8)

図版44 灰原跡出土遺物(9)

図版45 灰原跡出土遺物(10)

図版46 灰原跡出土遺物(11)

図版47 灰原跡出土遺物(12)

図版48 灰原跡出土遺物(13)

図版49 灰原跡出土遺物(14)

図版50 灰原跡出土遺物(15)

図版51 灰原跡出土遺物(16)

図版52 灰原跡出土遺物(17)

図版53 灰原跡出土遺物(18)

図版54 灰原跡出土甕(1)

図版55 灰原跡出土甕(2)

図版56 灰原跡出土甕(3)

図版57 灰原跡出土甕(4)

図版58 灰原跡出土甕(5)

図版59 灰原跡出土甕(6)

図版60 灰原跡出土甕(7)

図版61 灰原跡出土甕(8)

図版62 灰原跡出土甕(9)

図版63 灰原跡出土甕(10)

図版64 灰原跡出土甕(11)

図版65 灰原跡出土甕(12)

図版66 灰原跡出土甕(13)

図版67 灰原跡出土甕(14)

図版68 灰原跡出土甕(15)

図版69 灰原跡出土甕(16)

図版70 灰原跡出土甕(17)

図版71 灰原跡出土甕(18)

図版72 灰原跡出土甕(19)

図版73 灰原跡出土甕(20)

図版74 灰原跡出土瓦(1)

図版75 灰原跡出土瓦(2)

図版76 灰原跡出土瓦塔

図版77 土鍾・羽口・羽釜・支脚

図版78 石製品(紡錘車・当て具・打製石斧)

図版79 付編2 図版1 炭化材(1)

図版80 付編2 図版2 炭化材(2)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快速でうろのおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高企画道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道広木木野線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から県道広木木野線の建設に先立ち、平成4年8月26日付け道建第270号で、文化財の所在及びその取り扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成4年10月2日付け教文第720号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
寄居町Na189 遺跡	集落跡	縄文・奈良 ～平安	寄居町木野 字拾人小路 1518-1、 1518-3、 1531ほか

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画止やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘の実施については当課と別途協議してください。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成7年8月1日から平成8年3月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

平成7年8月17日付け 教文第2-79号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

本事業に伴う発掘調査は、城見上、末野、花園城、箱石の4遺跡を、平成3年度から5年度、7年度の4カ年に渡って行った。調査面積は15,300㎡である。調査全体の工程については第1表に示した。

本書で報告する末野遺跡E区・F区東側の竪穴1基と東側灰原については、平成7年度に調査を行った。以下では日誌に従って、その概要について報告する。

今回の発掘調査は、末野遺跡第2次調査にあたり平成7年8月から平成8年3月まで行った。

8月、発掘調査の準備を行う。調査にかかる事務的な手続きを行い、現場事務所の設置と補助員の募集を行った。併せて、重機による調査区の表土削除を開始した。まず、E区の桑を撤去したのち表土掘削を重機により行った。現地表面から約30cmほど掘り下げたところで地山面のロームを検出し、遺構確認面とした。F区は第1次調査に引き続き畑地の丘陵斜面部と谷部分の表土掘削を行った。中旬には補助員を導入し遺構確認作業を行い、調査区西側のE区から遺構の調査に着手した。また、基準点測量を行い方眼杭を調査区全体に配った。

9月、F区において竪穴を検出し、谷部に灰原の存在を確認した。このため、灰原の範囲と深さを把握するため土工を導入し谷部に東西方向の幅1m、長さ30mのトレンチを入れた。その結果遺物堆積層が深さ約1mから1.5mに及び谷部全体に広がることを判明した。湧水がひどく印座に、動力線の工事と水中ポンプの稼働を行った。また、谷部のため廃土除去を効率的に進めるため8輪ダンプとベルトコンベアーの導入を図った。E区は、住居跡を5軒検出し、カマドを主軸として十字ベルトを設定し掘り下げた。

10月、E区は杭を基準に遺物・遺構の図化を行い、各遺構の写真撮影を実施した。F区の第5号竪穴の調査に着手。竪主軸方向と直行方向に3本のベルトを設定した。主軸のベルトは谷部分の灰原まで延長し竪と灰原の関係を把握することを目的として調査を進めた。

この、南北方向に設定したトレンチによって、灰原は、最初の東西トレンチで3層の土器層を確認、加えて、第5号竪穴の灰原5と呼称した堆積層の存在を含め4面の土器層を確認した。灰原の調査は、最上層の平安時代の第5号竪穴に伴う灰原5とその下層にある灰原層の面まで順次掘り下げた。灰原5の遺物出土状況の写真撮影を行った。一部の遺物については出土分布図面を作成したが、主に1mグリッドで取り上げを行った。

11月、第5号竪穴の断面図、遺物分布図の作成、併せて、竪穴東側の平場部分の調査と西側の粘土探掘跡の調査に着手。灰原調査は、灰原層まで全体を掘り下げた。灰原の遺物出土状況の写真撮影を行った。一部の遺物については出土分布図面を作成したが、1mグリッドで取り上げを行った。

12月、第5号竪穴はさらに掘り進め断面図の作成を行った。また、平場部分と粘土探掘跡の写真撮影および平面図の作成を行った。灰原調査は、さらに下層の灰原一面へと掘り下げた。部分的に堆積層は乱れており全体を面を追うことができないところも存在した。また、大量の土砂や岩石により層位が逆転するなど調査は難航した。E区を工事の着手による引渡しのため航空写真撮影および地形測量を実施した。さらに、地層調査のため埼玉大学の堀口萬吉氏とボウリング調査を実施。

1月、第5号竪穴の完掘写真撮影、平面図作成を行った。灰原は灰原一面の遺物出土状況の写真撮影を行った。一部の遺物については出土分布図面を作成したが、1mグリッドで取り上げを行った。さらに下層の灰原一面へと掘り下げた。28日には、現地説明会を開催し、507名が遺跡を訪れた。

2月、灰原は灰原二面の遺物出土状況の写真撮影を行った。一部の遺物については出土分布図面を作成したが、1mグリッドで取り上げを行った。灰原谷部に設定したベルトセクション図を作成し、ベルトをはずした。灰原を完掘し、F区の航空写真撮影と地形測量を実施した。

3月、各遺構の地上写真撮影および平面図の作成を行った。28日に調査を終了し、器材を撤収した。

なお、本調査期間には、既に報告されたF区の1次調査で調査できなかった第1号竪坑の焼成部と煙道部の調査と今年度報告の花岡城跡の調査についても平行して行った。

(2) 報告書作成

平成9年4月1日から11年3月31日まで行った。

[平成9年度]

4月、遺構図および遺物分布図は第2原因を作成、遺物は、水洗後注記を行い、6月から11月まで土器の分類・計量作業を進めた。併せて、接合・復元作業を

行った。12月、出土遺物の統計処理、竪口縁の分類作業を行い、人型の甕は委託写真撮影を行った。1月、遺物実測、拓本、遺物分布図の作成を行った。

[平成10年度]

4月、遺物実測、遺物観察表の作成、拓本取り、遺物トレースを進め、順次図版を作成した。平行して分布図の作成を行った。9月、実測した個体のうち撮影を行う遺物については復元作業を進め、写真撮影を行った。10月、遺構図面のトレース、遺物図版の作成を行った。11月から原稿執筆、割り付けに入った。2月に原稿執筆、割り付けを終了し、3月に本書の印刷を終了した。

第1表 県道広本折原線の調査工程表

遺構名	調査面積	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成7年度	主な検出遺構	報告者
永野遺跡 (F区)	3000㎡					古墳：竪坑3基 灰原跡1箇所	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集
木野遺跡 (E・F区)	1800㎡					古墳～平安：灰原跡1箇所 粘土探堀坑3基 竪坑1基 竪穴住居跡5軒 土壇5基	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集
木野遺跡 (C・D区)	3000㎡					旧石器：石器集中箇所4箇所 奈良・平安：竪穴住居跡3軒 土壇 溝 粘土探堀坑2群 中・近世：掘立柱建物跡4棟 井・2井 溝	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
城見上遺跡	2600㎡					縄文：住居跡1軒 埋藏1基 奈良・平安：竪穴状遺構1基 土壇 粘土探堀坑2基 中・近世：地下式竪坑3基	
花岡城跡	3300㎡					中・近世：溝2条	
箱杉遺跡	1600㎡					古墳：古墳1基 平安：竪穴住居跡8軒 土壇 S X 6基 中・近世：掘立柱建物跡1棟	

遺構名	掲載地区	遺構名	掲載地区	遺構名	掲載地区	遺構名	掲載地区
S J - 1	C区	S F - 1	F区西側	S X - 1	C区	S K - 1 ~ 8	C区
S J - 2	C区	S F - 2	F区内側	S X - 2	C区	S K - 9 ~ 24	D区
S J - 3	D区	S F - 3	F区西側	S X - 3	C区	S K - 25 ~ 29	欠番
S J - 4	E区	S F - 4	欠番	S X - 4 ~ 10	欠番	S K - 30	E区
S J - 5	E区	S F - 5	F区東側	S X - 11	D区	S K - 31	E区
S J - 6	E区	粘土探堀坑 a	F区内側	S X - 12	E区	S K - 32	E区
S J - 7	E区	粘土探堀坑 b	F区東側	S X - 13	F区東側	S K - 33	E区
S J - 8	E区					S K - 34	F区東側

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

〔平成7年度〕

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 新井 秀直
理事兼調査部長 小川 良祐

<管理部>

庶務課長 及川 孝之
主査 市川 有三
主任 長滝 美智子
主任 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一

主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

<調査部>

調査部副部長 高橋 一夫
調査第一課長 坂野 和信
主任調査員 赤熊 浩一
調査員 佐藤 康二
調査員 中山 浩彦

(2) 整理作業

〔平成9年度〕

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 塩野 博
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

<管理部>

庶務課長 依田 透

主査 西沢 信行
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

<資料部>

資料部長 谷井 彪
主幹兼資料部副部長 小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長 坂野 和信
主任調査員 赤熊 浩一

〔平成10年度〕

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

<管理部>

庶務課長 金子 隆
主査 田中 裕二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一

主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

<資料部>

資料部長 増田 逸朗
主幹兼資料部副部長 小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長 坂野 和信
主任調査員 赤熊 浩一

II 遺跡の立地と環境

末野遺跡は、埼玉県大里郡寄居町大字末野字金場1206番地他に所在し、秩父鉄道波久礼駅の東約1kmに位置する。寄居町の市街からは北西に約2kmほど離れている。東経139°10'16"、北緯36°07'11"付近、標高130m前後である。

埼玉県西半分を占める山地は、大きく奥秩父山地、外秩父山地、上武山地に分かれる。遺跡は外秩父山地と上武山地を分かつ荒川の河岸段丘上に立地し、遺跡の背後には上武山地が連なり、前方には外秩父山地を間近に臨むことができる。

遺跡の立地する河岸段丘を含む山地は、群馬県下仁田町南部から埼玉県越生町まで広がる三波川帯の結晶片岩を基盤とするものである。第4図に堀口萬吉氏によるボーリング調査の結果を柱状図で示したが、岩盤の上には粘土層が厚く広がっていることがわかった。谷地形部ではこの粘土層までの距離がわずかなため粘土採取に占地され調査によっても谷部には多くの粘土採掘跡が検出された。末野遺跡D区や城見上遺跡で確認された粘土採掘坑は、この粘土を採取するためのものである。

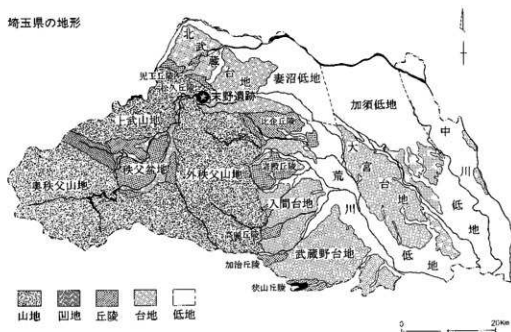
遺跡の約1km南側には荒川が流れる。寄居町は荒川の上流域から中流域の境にあたり、向岸に江南台地と櫛引台地が広がり、波久礼を項頂とする荒川扇状地が開析され、河岸段丘が形成されている。遺跡の立地する左岸の河岸段丘は、右岸の江南台地に対比されるものである。荒川からは、扇状地の河岸段丘の寄居面Ⅰ・寄居面Ⅱの更に1段上の3段目に当たる。

遺跡のある河岸段丘は、荒川に注ぐ逆川や少林寺川などの小河川により開析され、更に、枝状に複雑に内部を開析している。F区の竈跡は、この小河川が開析した谷を利用して構築されたものである。

本書で報告する末野遺跡は、武蔵4大竈跡群として知られる末野竈跡群に含まれる。末野竈跡群については、寄居町教育委員会・埼玉県立歴史資料館による分布調査で、7世紀末から10世紀にかけて19支群90基以上の竈跡が明らかになっている。(第2図)

竈跡の分布は荒川左岸に限っても、東は桜沢竈跡から西は長瀬町上下郷小坂の第19支群までの約8kmの広がりを持つ。中でも鍾撞堂山の南西麓、円良田湖を起点とする谷筋に分布の中心がある。古墳時代後期の

第1図 埼玉県の地形



窯跡については第1支群Aが知られるのみで、6世紀代については確認されていない。木野遺跡Iで報告された第1～3号窯跡は、第5支群に属し、6世紀末から7世紀にかけてのものである。8世紀の窯跡は、第2・3・5・6・11・16支群において確認されている。第11・16支群以外は、いずれも鐘撞堂山の南西麓、円良田湖を起点とする谷筋に位置する。9世紀の窯跡は後半以後に急増する。分布も鐘撞堂山の山麓のみではなく、平地部分にも広がる。10世紀には、折原窯跡や桜沢窯跡に見られるように更に拡散すると考えられる。

木野窯跡群は、これまでに寄居町教育委員会により2回、東京大学により3回、寄居町郷土研究会により1回の調査が行われている。

第4支群赤岩窯は、寄居町郷土研究会により4基が確認され、その内の1基が調査されている。現在、明らかになっている資料は瓦のみで、「那珂郡那珂郷」のへう書きあるもの等が知られている。(吉田1954)

第5支群寄居保養所構内窯は、1953年に東京大学により調査され、平安時代の窯跡5基が確認され、甕、坏、蓋の生産が明らかになっている。(吉田1954)

第7支群清見寺窯跡は、東京大学により1953年に1基の窯跡が調査され、甕と坏・皿、瓦の生産が明らかになっている。(吉田1954)

第8支群正龍寺窯は、1976年に町教委により2基の窯跡が調査され、9世紀後半の坏・皿を中心とする生産が明らかになっている。(野部・高木1977)

第17支群折原窯は、1983年に町教委により2基の窯跡が調査され、10世紀前半の高台付坏中心とする生産が明らかになっている。

桜沢窯は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、1992年に2基の窯跡が調査され、10世紀前半の坏と高台付坏を中心とする生産が明らかになっている。(疑問1994)

また、本事業に伴う調査でも、城見上遺跡、木野遺跡D区で奈良・平安時代の粘土採掘坑が、木野遺跡E区では工房と考えられる9世紀後半の住居跡群が、F

区東側では平安時代の窯跡と古墳～平安時代の灰原が調査された。

木野遺跡の周辺には旧石器時代から近世まで、多くの遺跡が知られている。ここでは、木野遺跡と関係する古墳時代後期から平安時代の遺跡について概観することにした。(第3図)

古墳時代後期の集落は、荒川左岸では、本書で報告する調査区の周辺と、鐘撞堂山北東に、木野遺跡(石塚、井上1994)、城見上遺跡B区(寄居町1984)、用上前峯(石塚1996)、用上北沢(石塚1996)が知られている。これらの集落から出土する須恵器は、ほとんどが木野窯跡産である。用上前峯遺跡では湖西産の出土が知られている。

今回の調査区にごく近い木野遺跡、城見上遺跡では、7世紀前半・7世紀末の住居跡と粘土留りが確認されている。住居跡内にも粘土が置かれており、工房との関係が予想される。

用上前峯遺跡・用上北沢遺跡では7世紀の集落が調査されている。特に用上前峯遺跡では、7世紀の住居跡が20軒以上調査されており、大規模な集落と考えられる。

荒川右岸では、むじな塚遺跡(今関1990、井上1996) 竹柏原遺跡(井上・井上1996)が調査されている。特にむじな塚遺跡では木野窯跡の製品が多く出土している。

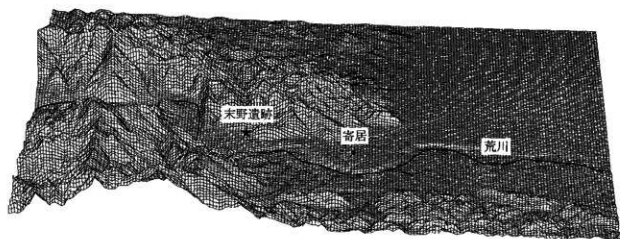
古墳群は荒川左岸では寄居面I上や上武山地山麓に立地している。箱石(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994)、谷津(寄居町1984)、藤田(埼玉県1960)、樋の下(岩田1994)、小前田(瀧瀬1986・石塚1994・1995・1996・1997)、黒田(塩野・小久保1975・酒井1984)、一本松(中村1980)、猪俣(丸山・中沢1996)の各古墳群が知られている。いずれも6世紀中葉から7世紀の横穴式石室を主体部にもつ古墳群である。石室の形態は無袖、片袖、胴張りがある。

中でも箱石遺跡で確認された6世紀後半から7世紀初頭の古墳は、時期的にも木野窯跡の採掘との密接な関係が推定される。

第2図 末野黨跡群分布図（埼玉県立歴史資料館 1987より転載）



（埼玉県立歴史資料館 1987より転載）



第3図 周辺の遺跡分布図



また、樋の下、小前田、黒田、猪俣の各古墳群では、末野窯跡産と考えられる須恵器が出土しており、末野窯跡の集落との関係が注意される。

荒川右岸では江南台地の縁辺部に立地する立ヶ瀬、上郷、小関、伊勢原、赤浜（寄居町1984）の古墳群が知られている。詳細は不明だが、赤浜古墳群が6世紀に遡る可能性があり、その他は7世紀のものとして推定されている。いずれも川墳である。

7世紀後半には、鐘撞堂山の尾根上に馬騎の内庵寺が造営される。（高橋1982）礎石立ち建物を含む16の平場が確認されている。軒丸瓦は素弁10葉蓮華文軒丸瓦、複弁7葉蓮華文軒丸瓦、複弁8葉蓮華文軒丸瓦の3種類がある。軒平瓦は三重弧文である。平瓦は、同心円の当て貝痕、平行叩き貝痕が見られ、須恵器工人との関係が指摘されてきた。末野窯跡群と直接関係のある寺院である。

奈良時代の集落としては、荒川左岸では用土前峯、用土北沢、沼下（駒宮・大和・今井1982）の鐘撞堂山東麓に立地するものか知られている。いずれも数件程度の調査で、全容は不明だが、末野窯跡産の須恵器が出土している。

荒川右岸の遺跡はいずれも江南台地上に立地する。古墳時代後期とは対照的に灰田原（石塚1997）露梨子（井上1997）、むじな塚（今関1990、井上1996）、東伴場地（井上・石塚1995、石塚1995）、善光寺東（石塚1995）稲荷窪（寄居町1984）などの多くの遺跡が知られている。特に東伴場地遺跡では寺院跡と考えられる基壇状遺構の周辺に、同時期の集落の広がりか明らかになっている。善光寺東遺跡からは南比企窯跡産の甃が出土している。

寺院は、左岸では馬騎の内庵寺が、引き続き中葉まで継続し、右岸では東伴場地遺跡で複弁八葉蓮華文の軒丸瓦をはじめ多量の瓦が基壇状遺構から出土している。

平安時代の集落は、左岸では、末野周辺の上段の段丘面、鐘撞堂山東麓の柳町台地上、荒川に近い鐘撞堂山南麓、やや下流の寄居面Ⅰ上に分布する。これらの

遺跡から出土する須恵器は全て末野窯跡産である。

末野遺跡では、本事業に伴って調査したC・D・E区で、8軒の住居跡が調査されている。粘土の集積があることから丁房と考えられる。また、町教育委員会の調査では9世紀後半の火災を受けた工房から焼成前の平瓦がまとまって出土している。

鐘撞堂山東麓では、用土前峯、用上北沢、沼下、丸山（中沢1996）の各遺跡で、引き続き大規模な集落が10世紀まで営まれる。

南麓の寄居面Ⅰでは至近に寄居庵寺が位置する大正寺南遺跡、29軒の住居跡が調査された樋の下遺跡で、10世紀前半の集落が調査されている。

やや下流の花岡町黒田では9世紀から10世紀の58軒の住居跡が調査された耕田地遺跡（酒井1984）が知られている。製鉄炉や印章鋳型や獸脚鋳型をはじめとする多くの製鉄関係遺物が出土する9・10世紀の製鉄遺跡である。

右岸の折原窯跡の周辺では、南大塚、灰田原、折原石道（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998）の各遺跡ではほぼ同時期の集落が調査されている。特に折原石道遺跡では同時期の土師器環、高台付杯、甕を生産した土器焼成遺構が確認されている。

男会周辺では、庚中塚、稲荷窪（高木1981）の両遺跡が調査されている。稲荷窪遺跡では8世紀後半から10世紀前半の住居跡23軒が調査され、円面甃が出土している。

寺院は、左岸の馬騎の内庵寺、吉野庵寺、寄居庵寺（昼間ほか1986）が知られている。

馬騎の内庵寺については詳細は不明だが、寺跡の東側から出土した須恵器や灰釉陶器が出土していることから、この時期の存続が推定されている。（高橋1982）吉野庵寺の詳細については不明である。

寄居庵寺は9世紀後半のもので、平瓦、丸瓦、須恵器が出土している。

以上、末野遺跡周辺の遺跡群についての概観は、『末野遺跡Ⅰ』から転載した。（福田 1998）

III 遺跡の概要

(1) 調査の方法

奥道広木折原線の調査では、便宜的に調査区を現道によってA～L区に分けた(第5図)。各調査区の遺跡との対応は、A・B区が城見上遺跡、C～F区が末野遺跡、J区が花園城、K・L区が箱石遺跡である。G・H・I区では遺構、遺物は検出されなかった。

調査区は、国家座標第IX系に基づく、北西方向から5mピッチのグリッドを設定した(第6図)。グリッドの原点の座標はX=13610、Y=-59610である。

大グリッドは25分割し、1mピッチの小グリッドを併用した。標記は大グリッド-小グリッド(例110-24-25)である。

遺構名称については各遺跡で通し番号とた。このため、末野遺跡では、住居跡がD区で第1～3号住居跡、E区で第4～8号住居跡、土壇はD区で第1～29号土壇、E区で30～33号土壇、F区で34号土壇、竈跡はF区西側で第1～3号竈跡、F区東側で第5号竈を調査した。また、F区の灰原については、東側灰原と呼称した。西側灰原は、第1～3号竈跡の灰原を灰原1・灰原2・灰原3とし、竈は検出できなかったが、平安時代に灰原層を灰原4と呼称した。東側灰原は、第5号竈の灰原である灰原5とその下層に三面の灰原層を検出しそれぞれを、層位ごとに灰原・灰原一面・灰原二面と呼称した。灰原出土遺物の取り上げについては小グリッドを使用した。

(2) 基本土層

末野遺跡の基本土層は、ハンドオーガーボーリングの調査を、2地点(A・B地点)で行った。遺跡は、荒川が秩父山地から関東平野に流出する谷口にあり、荒川左岸の低位段丘より一段高い標高約130mの平坦面に位置している。この平坦面は荒川の中位段丘に相当し、荒川右岸の下流側に発達する江南段丘に続く段丘面であるが、侵食のために変形されその一部が残ったものである。平坦面の北側には花園城址の造られた尾根があり、その尾根の南側山麓部に末野遺跡が位置

し、尾根からの岸錐堆積物によっても段丘地形は変形されている。また、尾根からの沢が深く侵食した谷斜面に、登り窯がつくられている。

地質は、第4図のごとく遺跡発掘面で行った。A地点は、発掘調査地点の西端にある粘土採掘坑である。この穴の底(発掘面)からボーリングを行い、深度1.44mで大きな岩石に突き当たり、掘進を中止した。A地点の地層は、I～VI層に区分した。これらはI～III層が粘土層、IV～V層は軽石質層シルト、VI層は下の岩石とまとめられる。上部の粘土層は、土器の原料として採掘した粘土層の下に続くものであり、結晶片岩の細片を含んでいる。下部の軽石質シルト層は、緑黄色の軽石を含み下部ほど軽石粒が多く軽石層となっている。

B地点は、A地点から東方約80mの発掘範囲の中央に近いところで、地形的にA地点より約5m高くなっている。ハンドオーガーボーリングは、地表面をつくる関東ローム層(大里ローム層)を1m位削り込んだ削平面から、深度5.70mまで掘進した。B地点の地層は、第8図のごとく1～8層に区分した。1～4層は関東ローム層に関連した地層である。埼玉県西北部に分布する関東ローム層は、大里ローム層と新期ローム層および下木吉ローム層に分けられている。1層は大里ローム層下部の軽石層の部分であり、2～4層は新期ローム相当層で北側の尾根をつくる結晶片岩の破片など岸錐性堆積物を含んでいる。5～6層は風化岩片を含む粘土層で、7～8層は岩片の少ない粘土層である。(堀口 1998)。

(3) 遺跡の概観

本書で報告する末野遺跡は、E区とF区の一部である。

調査の結果、末野遺跡E区では、第4号住居跡から第8号住居跡の5軒の竪穴住居跡、第30号土壇から第34号土壇の5基を検出した。末野遺跡F区では、第5号竈跡の1基と第5号竈跡の灰原を含む古墳時代末期

から奈良・平安時代の灰原1箇所を検出した。

末野遺跡E区は、北から南に緩やかに傾斜する南向きの丘陵部分にあたり、標高は約132.0mである。このため、北側に山があり、東側から南を通して西側にいたる180度の眺望が開け荒川を望む温暖な気候を備えた立地条件にある。調査区はこの斜面を幅約12mではば東西方向に走る。

住居跡は地形に規制されるためか、いずれも、南北方向があるいは東西方向に主軸をもつ。第7号住居跡以外はカマドを検出できた。いずれの堅穴住居跡も工房的機能を兼ねていた住居跡と考えられる。第4号住居跡からは、内面に溶解した付着物のある須恵器環、羽口片を出土。第5・6・7号住居跡の覆土中からは廃棄されたと考えられる須恵器と焼土が検出された。第6号住居跡は、住居址南西コーナー部から粘土溜りが検出され、住居内に粘土を貯蔵していたものと考えられる。住居外の西側には第31・32号土塋を検出し、覆土中から多量の須恵器を検出した。第8号住居跡からは当て具と判断される石製品を検出した。また、住居内からは、土師器の環・壺・甗を検出し生活用具は土師器を使用したものと考えられる。窯跡は本区からは検出できなかったが、丘陵南側に伸びる先端部分には、斜面部が存在し窯跡の存在もあり本住居跡の窯場の可能性が考えられる。

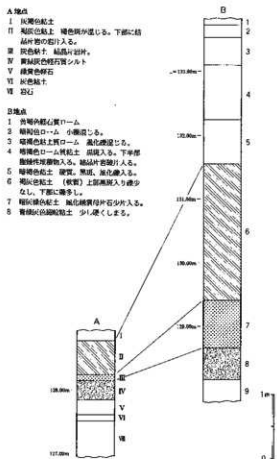
末野遺跡E区の最西端には第30号土塋を検出し粘土採掘と判断した。この採掘坑は西側で調査した末野遺跡D区の谷筋に広がる多数の粘土採掘跡の続きであり、本住居跡群に伴う時期の採掘場も存在していたものと判断される。

末野遺跡F区は北側からの丘陵部分から北東方向から南西方向に開析された谷部へと移行する部分である。この、丘陵斜面部分に平安時代の窯跡（第5号窯跡）を検出した。さらに、窯の灰層（灰原5）が谷部に堆積していた。第5号窯跡の西側には小規模の粘土採掘跡を検出した。また、東側には斜面部分をわずかにカットして平場を形成している。

調査区域外ではあるが、丘陵部の西側と東側に同時

第4図 末野遺跡の地質柱状図

堀口真言 1998『末野遺跡1』『寄居町末野遺跡地形・地質コメント』より



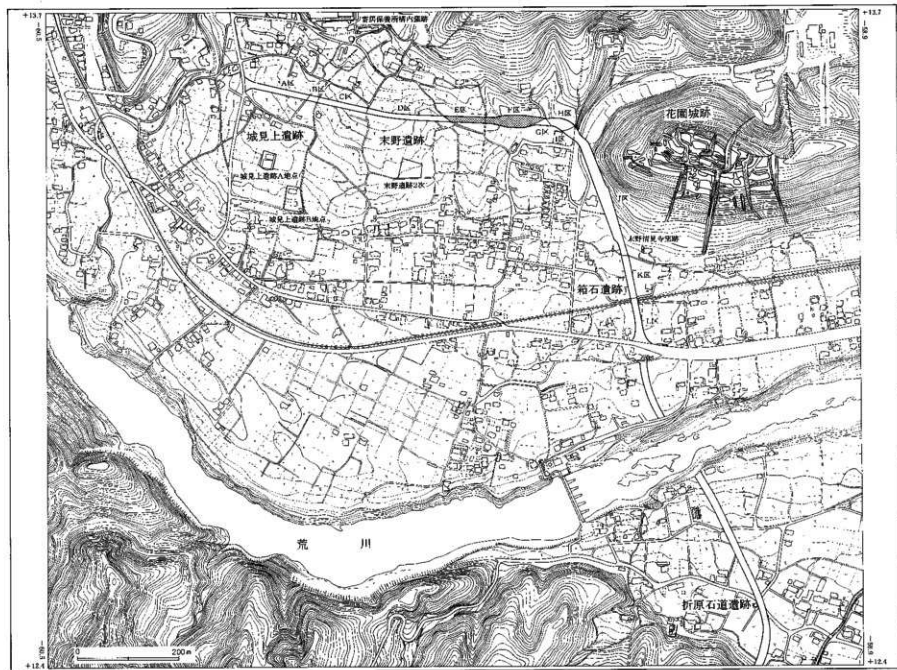
期と考えられる窯跡が存在し、本窯跡からそれぞれ約25～30mほどの距離にある。

灰原の形成された谷部にトレンチを入れると、深さ約1～1.5mほどまで遺物の堆積層を確認し、三層あることを判断した。上層を灰原と呼称し平安時代の遺物を主体とする。中層を灰原一面と呼称し古墳時代末から奈良時代の遺物を主体とした。また、下層は灰原二面と呼称し古墳時代末の遺物を主体とした。しかし、いずれの包含層も大塚の破片が主体でその中に小型製品が混入する出土状況を示し、それぞれの時期の遺物が明瞭に区分できるわけではなく混在している様相をもっていることで複雑化していた。

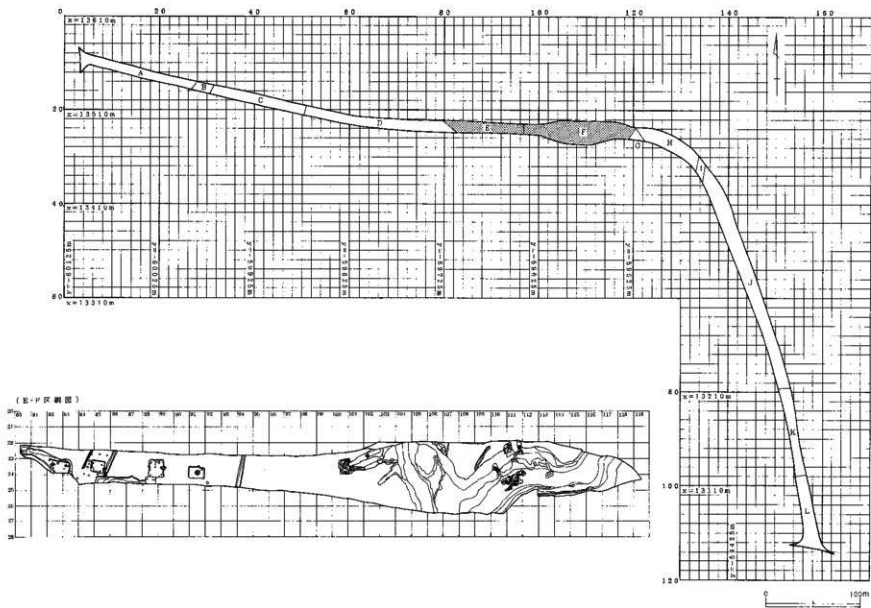
これらの灰原出土遺物を焼成した窯跡は調査区域外にあたり、谷筋の北側奥に存在するものと推定される。

この他の遺物としては、縄文時代の打製石斧、中世の片口鉢、すり鉢、木製皿、椀などを検出した。

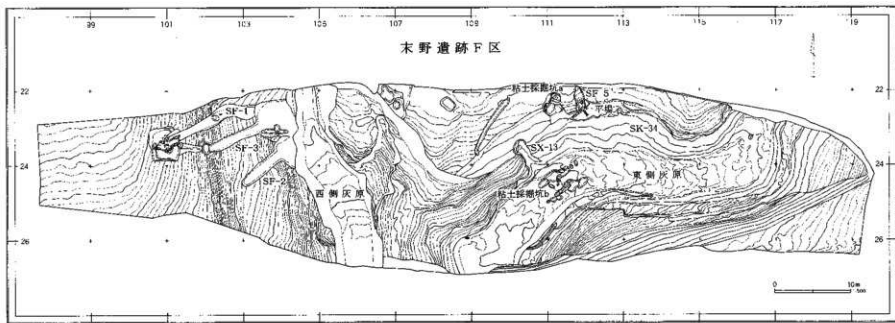
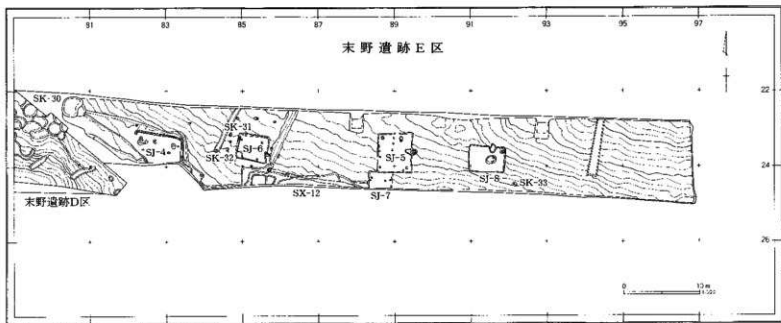
第5図 調査区周辺の現状



第6図 グリッド網図



第7图 末野遺跡E・F区全图



IV 遺構と遺物

1. 住居跡と出土遺物

竪穴住居跡は、5軒検出された。調査区はほぼ東西方向に伸びており、幅約10～24m、長さ約200mの範囲である。台地上には住居跡が位置し西側及び東側は谷地形である。西側には粘土採掘坑群が広がる。東側には斜面を利用して古墳時代と平安時代の窯跡が構築されていた。

竪穴住居跡は、第4号住居跡から第8号住居跡の5軒の調査を行った。第1～3号住居跡は隣接する西側の調査区(本野遺跡C・D区)で検出されている。検出した竪穴住居跡は出土した遺物から第8号住居跡が奈良時代と考えられ、第4～7号住居跡は平安時代の住居跡と考えられる。第4号住居跡は西側にカマドを、第5・6号住居跡は東側にカマドを、第8号住居跡は北側にカマドをもつ。第7号住居跡のカマドは検出できなかった。

本台地上は調査区の様相から判断する限り、奈良・平安時代には工房を兼ねた竪穴住居跡の存在から作業兼居住区域として利用されていたものと判断できる。また、東側の起伏のある地形を利用して窯場が存在し、西側の谷地形では粘土採掘地点として利用されていたこととなる。古墳時代の様相については窯跡しか検出されず、須恵器生産の様相については不明確である。しかし、東灰原の谷底から鬼高期の土師器が出土した規模の小さい粘土採掘坑が検出されていることから、近接する谷部で粘土を採掘していたものと判断される。ここでは、各竪穴住居跡と検出した出土遺物の様相について述べる。

第4号住居跡(第8図)

調査区西側の82・83～23グリッドに位置する。住居跡南は調査区外となり不明である。北から南にかけての緩斜面にあたり、西側は、粘土採掘坑群に広がる谷部に望む。本住居跡の西側約6mの位置には第30号土城が存在し、粘土採掘坑の始まりと考えられる。

住居跡の平面形態は、長方形であった。規模は、長

辺6.46m・短辺3.15m+ α ・深さ0.3mであった。

主軸方位は、N-85.5°-Wであった。

壁は、北側および東側のみ検出できた。いずれの側も幅15cm・深さ5cmの浅い間溝が巡っていた。検出した床面は、わずかな凹凸をもちながらもローム土をベースとし、比較的堅くしまっていた。地山には小石が含まれていた。P4とP5の間には焼土が床面に散っていた。

柱穴は、3ヶ所検出できた。本来の4本主柱穴の位置とは異なり、P2・P3はカマド南側にあたり、主軸方向に沿って並んでいた。P2は幅40cm・深さ27cm、P3は幅30cm・深さ39cmであった。柱穴覆土は焼土粒子・炭化物粒子を含んだ片岩混じりのしまった土であった。P1は北東隅に検出され、幅26cm・深さ7cmと浅い柱穴であった。

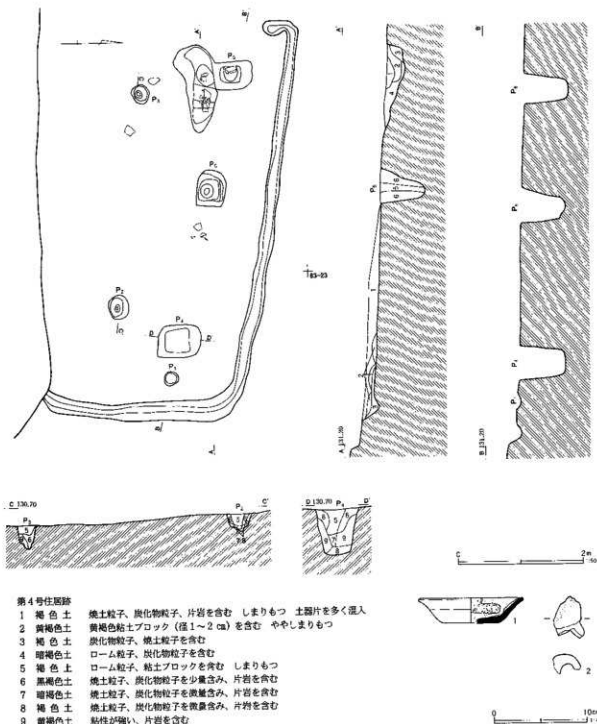
覆土は、片岩粒混じりの焼土粒子・炭化物粒子を含んだ土で、小破片ではあるが須恵器片を混入していた。この層は北側からの流れ込みによる自然堆積であった。西側の覆土は非常に薄く床面の一部が既に表土掘削によって確認された。東側から南側にかけは壁部分を中心に三角堆積がみられ、地山土に似た黄褐色粘土のブロック粒が混入し堅くしまっていた。

カマドは、西壁の北西よりに検出した。形態は長楕円形で焚き口部分はやや狭く緩やかに傾斜をもち落ち込み焼成部分は幅をもち掘り込みが深い。カマド覆土は灰層の確認はできなかったものの第1層では焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。煙道部分は確認できなかった。規模は長辺1.4m・短辺0.64m・深さ0.32mであった。確認状況は既に表土掘削の際にカマドの一部が確認され、覆土はほとんどなかった。上部の袖などは削平を受け残存せず床面で確認した。

貯蔵穴は、検出されなかった。

重複関係は、P4～P6の柱穴によって壊されていた。この柱穴は住居跡の柱穴と覆土の堆積上は近似してお

第8図 第4号住居跡・出土遺物



第2表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(11.0)	2.6	(6.0)	BCDEF	3	灰褐	30	内面溶解物付着
2	羽口	残存長3.5、口径1.5cm							

りさほど時間差をもたないと考えられる。柱穴の配置はほぼ住居跡の北壁に平行して並ぶ。P4の上面では黄白色の粘土を検出し当初の所見はクロコビットの可能性を考慮させたが断面観察の結果、柱穴と判断した。出土遺物は、極めて少なかった。床面からは須恵器の甕胴部破片、カマド内からは土師器の甕の胴部破片を検出した。また、覆土中からは、図示した1の須恵器杯と2の羽口片を検出した。須恵器杯は、底部糸切り難し調整で内側に付着物が見られ、羽口は先端部が発泡し孔径1.5cmで小鍛冶用の羽口であった。鍛冶炉の検出は認められなかったが、鍛冶関係の遺物であり鍛冶工場の可能性も考えられる。

第5号住居跡 (第10図)

調査区やや西側の88・89-23・24グ

リッドに位置する。西側約14mの位置には第6号住居跡、東側約6mの位置には第8号住居跡が位置し南側には第7号住居跡が存在する。本住居跡は北から南にかけて緩やかな斜面に掘り込まれていた。

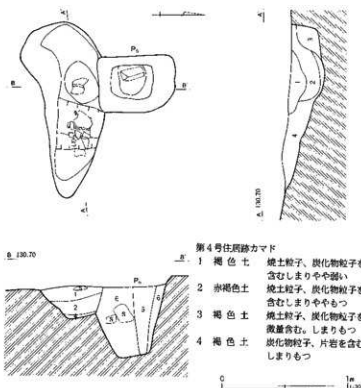
住居の形態は、方形であった。規模は長辺5.24m・短辺4.63m・深さ0.16mであった。主軸方位は、N-92.5°-Eであった。

壁は、確認面から浅く礫混じりの硬い地山を掘り込み、しっかりとしていた。北側部分については、確認の際の掘り込みがやや深く容易に判断できたが、南側部分は掘り込みも浅く地山と覆土の差はあまり認められず検出が難しかった。周溝は検出されなかった。床面は、わずかに、北側から南側にかけて勾配をもつ。全体としては平坦で硬い。

柱穴は、13ヶ所検出できた。住居跡内の壁寄りにP1-P9を検出した。P2・P3・P9・P13は、住居跡覆土から切り込まれ、新しいと考えられた。P1・P5-P8は住居跡に伴う可能性が考えられた。

覆土は、北側からの山土が覆っていたが、焼土粒子、

第9図 第4号住居跡カマド



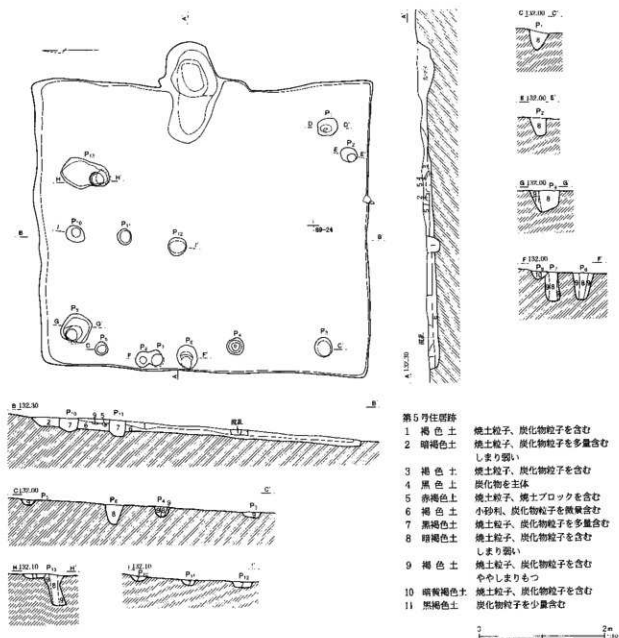
炭化粒子を含む検出は容易であった。カマド前面から北壁周辺にかけて、焼土化した粘土が堆積し、第5層に示したように、焼土ブロックを含む焼失家屋の可能性がある。

カマドは、東壁の中央に検出した。規模は長辺1.6m・短辺0.96m・深さ0.12mであった。軸は検出できなかった。焚き口部から煙道部にかけては、楕円形の浅い掘り込みが見られた。焚き口部から燃焼部には段をもって移行していた。貯蔵穴は、検出されなかった。

重複関係は、第7号住居跡より占った。

出土遺物は、焼土化した粘土覆土中及び、南壁中央部にややまとまって出土した。いずれの出土状況も床面からはやや高く、住居跡廃絶後に廃棄した遺物と考えられる。4は4個体の須恵器杯が重ね焼き時に貼りついたままの状態となり、この住居に棄てられたと考えられる。3はカマド内から出土した。8は鋸のめぐる甕で、南壁際にまとまって破片を検出した。9は石製の紡錘車であった。床直上より出土した。10の鉄製刀子はP1内から出土した。

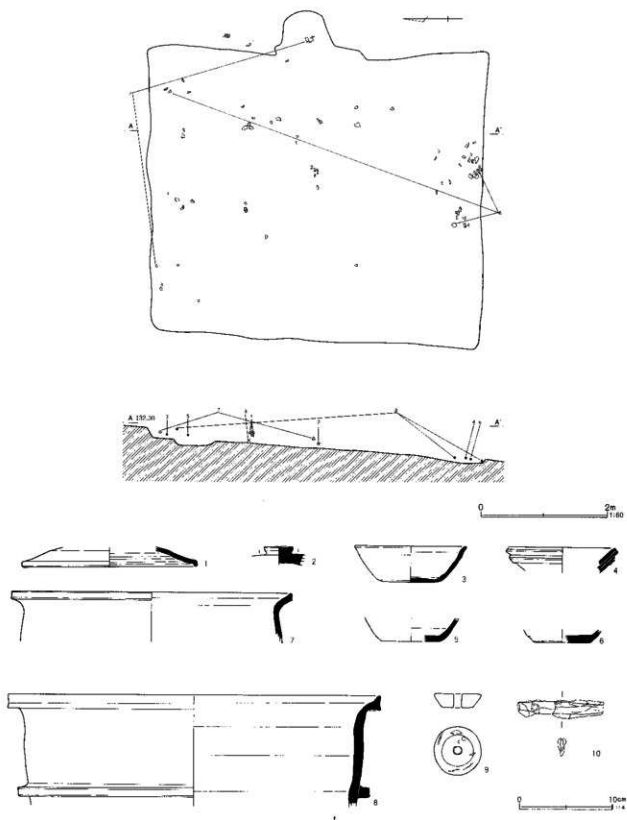
第10図 第5号住居跡



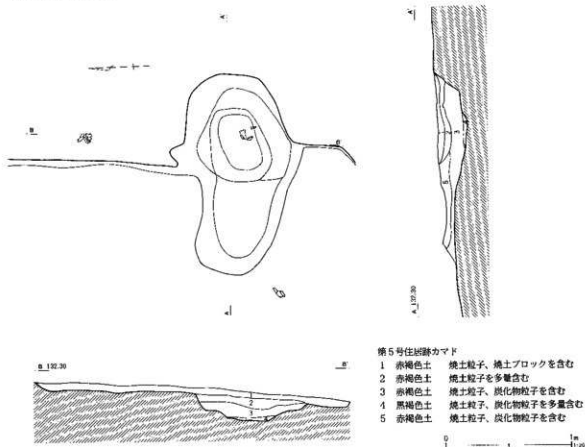
第3表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	校成	色調	残存率	備考
1	蓋	(18.7)	(2.1)		BCE	2	褐	20	No24、25、26
2	蓋		(1.9)		BCEF	1	灰	5	No32
3	環	(11.8)	3.8	6.4	B	3	褐	40	カマF No1
4	環	(11.3)	(2.6)		BE	1	青灰	10	No31、フク1
5	環		(2.5)	(6.0)	BCE	1	橙褐	20	No10、P-13
6	環		(1.4)	(6.0)	BCE	2	淡褐	10	No66
7	鉢	(30.0)	(5.2)		B	1	黒灰	30	カマF、No2
8	瓶	(39.6)	(11.7)		EF	2	灰白	5	No4、60
9	鉄鐙車	広径5.0×伏径3.3×孔径0.9×厚さ1.5cm、重量56.97g							No14
10	刀子	残存長9.1、幅1.7、厚さ0.3cm、重量21.5g							Pit

第11図 第5号住居跡遺物分布図・出土遺物



第12図 第5号住居跡カマド



第6号住居跡 (第13図)

84・85-23グリッドに位置する。北から南に向かって、緩やかな斜面部に掘り込まれた住居跡であった。東側と西側には、新しい時期の地割溝が南北に走る。本住居跡の西側には、第31・32号土壌が位置し、周りにはP4〜P12を検出した。

住居跡の形態は、長方形であった。規模は長辺4.12m・短辺3.51m・深さ0.2mであった。

主軸方位は、S-80°-Wであった。

壁は、地山を掘り込み直立しており、硬い。周溝は南東コーナー部と北西コーナー部で確認できなかった。周溝の幅は場所によって多少の違いはあるもののほぼ12cm前後で、深さ5cmほどであった。北西コーナー部が繋がらず開いていることから入り口などの推定もできるが不明確である。

床面は、北側から南側にかけてかなりの傾斜をもちながらもほぼ平坦で硬くしまっている。南西コーナー

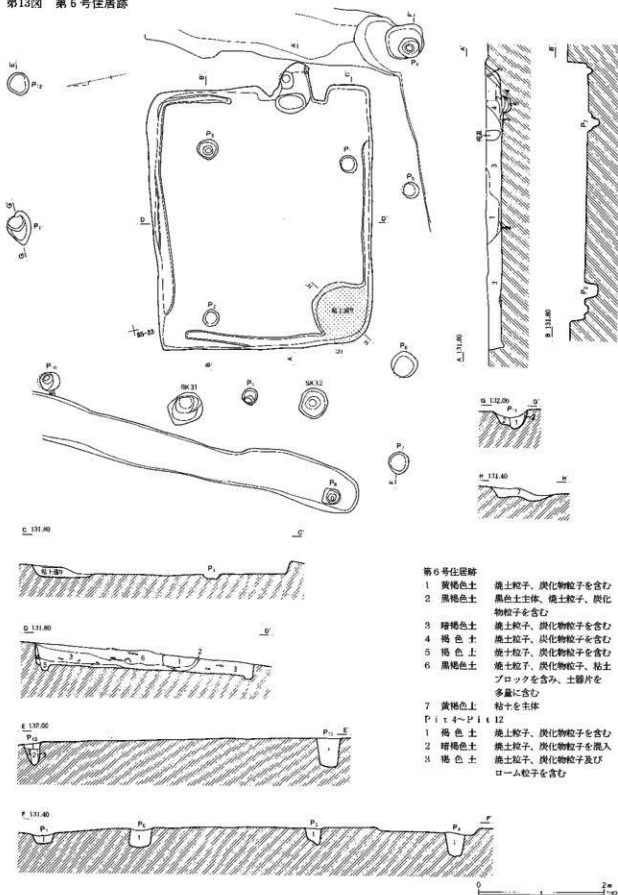
部分には青白色の粘土溜りを確認した。壁コーナー部から96cmの範囲に堆積しており、厚さ14cm程であった。粘土をはがすと、床面が凹形に凹んでいた。

柱穴は、P1〜P3在住居内に検出した。また、屋外にP4〜P12を検出し、住居外に柱を建て、上屋を葺いた可能性が考えられる。特に第31・32号土壌との同時性を考えれば、同一屋内の施設として両土壌と住居跡が一体の工房跡の可能性を示唆させる。

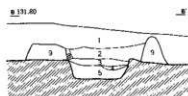
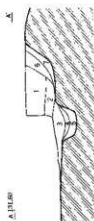
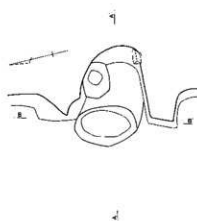
覆土は、自然堆積の第3層が覆い、北側から第1・2・6層とともに多量の土器が棄てられ焼土ブロックも伴っていた。床面よりはやや浮いた状態で検出された。住居跡廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。規模は長さ0.81m・焚き口幅0.65mまた、焚き口部に灰溜りのPitが検出され、掘り込みの深さは、0.14mであった。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居内へ延びていた。

第13図 第6号住居跡



第14図 第6号住居跡カマド



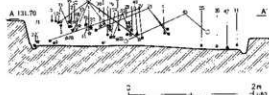
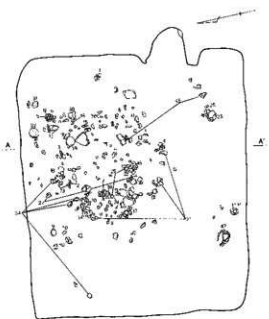
第6号住居跡カマド

- | | | |
|--------|---------------------|---------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物粒子を含む | しまりもつ |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物粒子を含む | しまりややもつ |
| 3 赤褐色土 | 焼土粒子を主体 | |
| 4 黒褐色土 | 炭化物粒子を主体 | |
| 5 黄褐色土 | ロームブロックを主体 | |
| 6 褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む | |
| 7 褐色土 | ローム粒子を含む | |
| 8 黄褐色土 | 粘土ブロックを主体 | |
| 9 黄褐色土 | 粘土ブロック、ロームブロックを含む | |

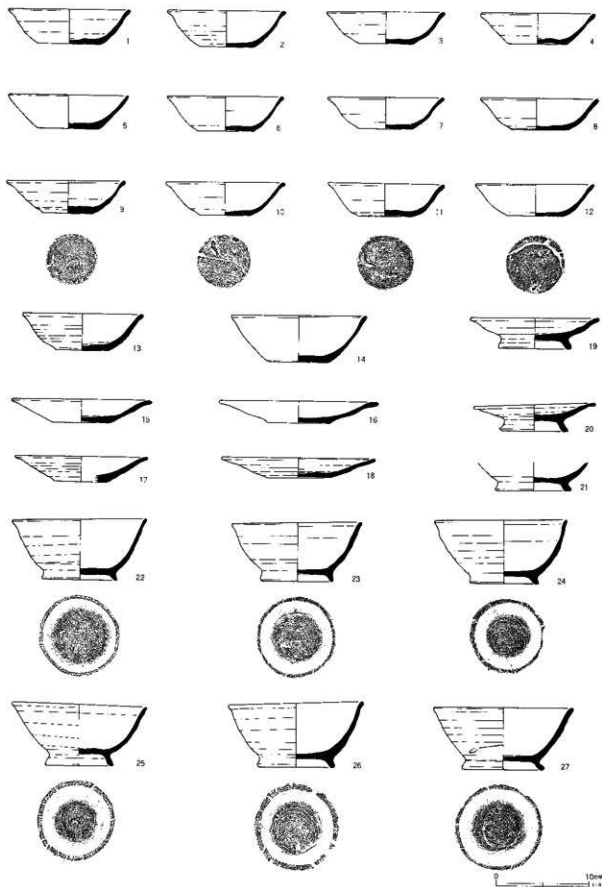
0 1m

貯蔵穴は、検出されなかった。

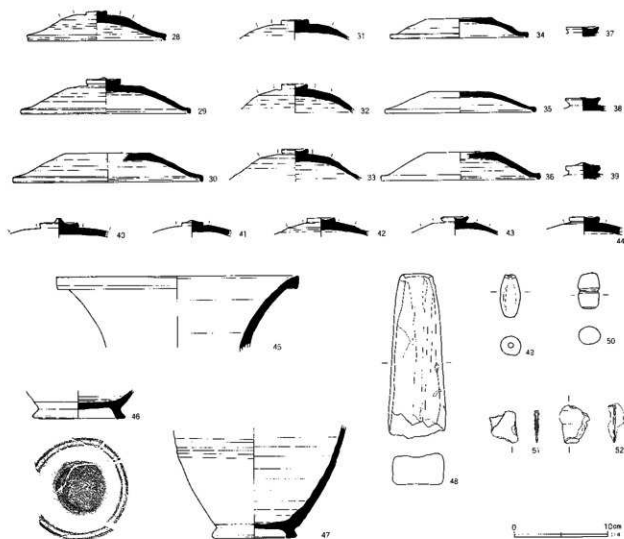
出土遺物は、覆土上層の廃棄されたと考えられる堆積層からは、須恵器の破片のみ検出された。1～13は円で口径12.4～13.0cm、器高3.5cm前後、底径5.6～6.2cmのやや小型化したものである。形態は体部下端にくらみを持ち外傾に内湾して立ち上がり、体部上半から口縁部は外傾に外反して立ち上がり、口縁部は丸く肥厚する。14は坏に比較して法量的にやや大型であるため碗とした。15～18は皿である。坏に比較し底径は6.2～6.9cmやや大きく、口径は14.2～17.0cmである。19・20は高台付皿、21～27は高台付坏で底部糸切り離した後、高台を貼り付けている。形態は、器高が深いものの坏と同様である。28～44は蓋、45は甕、46・47は甕で多器種にわたり出土した。48は廃棄されたと考えられる須恵器の中に混在して出土した。形態は角錐状で右製である。被熱をし赤褐色であった。残存長は17.2cmとやや大きく、支脚と判断される。49は小型の土錘である。50は土製の錘と考えられる。形態は円筒形で中心部分が窪み紐などを締め付ける部分とみられる。その他、鉄片も出土した。



第16図 第6号住居跡出土遺物(1)



第17図 第6号住居跡出土遺物(2)



第4表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第16・17図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.6	6.6	ABF	1	黒灰	50	No183
2	坏	(12.5)	3.8	5.6	ABF	3	赤褐	60	41、40
3	坏	(12.6)	3.3	5.6	ACE	3	灰褐	50	52
4	坏	(12.3)	3.2	6.0	ACE	2	灰	40	No109
5	坏	(12.6)	3.5	6.6	CE	3	赤褐	40	No66
6	坏	(12.6)	3.6	6.1	ACEG	3	赤褐	50	No10?
7	坏	(12.5)	3.3	5.6	ABEFG	3	茶褐	50	No153
8	坏	12.5	3.3	6.2	ACE	3	褐	70	No129、フタナ
9	坏	12.6	3.4	5.3	ABCEF	1	灰	90	No4
10	坏	(12.8)	3.5	5.3	ACE	3	褐	40	フタナ
11	坏	12.4	3.4	5.6	ACE	3	黄褐	90	No143
12	坏	12.6	3.3	6.0	ACE	3	灰褐	100	No58
13	坏	(12.9)	3.8	5.8	ABEF	2	灰	50	No38、フタナ
14	碗	14.5	4.8	6.6	CEF	3	赤褐	50	No13
15	皿	15.0	2.4	6.2	BCE	3	灰褐	40	No26、28
16	皿	(17.0)	2.3	6.6	CE	1	青灰	30	No135、フタナ
17	皿	(14.2)	2.7	(5.8)	B	1	青灰	30	No60
18	皿	16.5	2.1	6.9	BCEG	2	灰褐	100	No179

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	粘 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
19	高台付皿	(13.8)	3.2	7.8	ACE	2	灰	50	Na76
20	高台付皿	13.0	3.8	7.3	ABEF	1	灰	60	Na14
21	高台付杯	(3.0)	(8.1)		E	3	淡灰	20	Na116
22	高台付杯	14.2	6.4	8.0	ACDE	2	赤褐	100	Na180
23	高台付杯	13.7	6.2	7.9	ABCDE	1	灰	50	Na167、フク土
24	高台付杯	(14.0)	6.7	7.4	ACE	3	灰褐	70	Na134
25	高台付杯	14.3	6.4	7.2	ACE	2	灰褐	80	Na146
26	高台付杯	14.4	6.7	8.3	ABCE	1	灰	90	フク土
27	高台付杯	(15.0)	6.5	8.9	ABCEEF	2	灰	50	Na151、156、171?
28	蓋	(14.7)	3.1		ABCDEFF	1	青灰	40	Na5、フク土
29	蓋	18.2	3.8		ABEF	2	灰	70	Na154、フク土
30	蓋	(20.5)	3.0		ACE	3	褐	40	Na70
31	蓋		(2.0)		ABEF	3	淡褐	50	Na181
32	蓋		(3.0)		BEF	1	青灰	40	フク土
33	蓋		(3.4)		BF	1	青灰	30	Na9
34	蓋	14.8	2.1		ABFG	2	灰	60	Na38
35	蓋	16.2	2.2		ACEG	3	赤褐	70	Na145
36	蓋	(17.0)	2.9		ACE	3	赤褐	40	Na84
37	蓋		(1.0)		CDE	1	灰	10	フク土
38	蓋		(1.4)		CDE	2	灰褐	10	フク土
39	蓋		(1.8)		CDE	1	灰	10	フク土
40	蓋		(2.1)		ACDE	2	灰褐	20	Na133
41	蓋		(1.8)		BCE	1	青灰	10	フク土
42	蓋		(2.0)		BEF	1	青灰	10	フク土
43	蓋		(2.0)		ACE	2	青灰	10	フク土
44	蓋		(1.9)		ABDEF	2	灰	10	フク土
45	壺	26.0	(7.9)		ABF	1	暗灰	60	フク土
46	壺		(3.0)	10.0	BCEF	2	灰褐	5	Na166
47	壺		(11.7)	9.0	ABEF	1	灰	40	Na140
48	支脚	残存長17.2、幅6.0、厚さ3.3cm、重量461g							No73
49	土鍔	残存長4.5、幅2.2、孔径0.5cm、重量19.87g							
50	土鍔	残存長3.8、幅2.3cm、重量19.65g							
51	不明鉄製品	残存長3.3、幅2.7、厚さ0.4cm、重量5.8g							
52	不明鉄製品	残存長4.0、幅3.1、厚さ1.4cm、重量18.41g							

第7号住居跡(第18図)

88-24グリッドに位置する。住居跡の北は第5号住居跡、西は第12号不明遺構によって壊されている。南は調査区外となる。

住居の形態は、ほぼ方形と推定された。規模は長辺3.15m・短辺1.98m $\pm\alpha$ ・深さ0.24mであった。南側の壁は検出されていないが、比較的小型の住居跡であった。本調査区で検出された5軒の住居跡の中で最小であった。

主軸方位は、N-1°-Eであった。

壁は、北側の一部と東側を確認できた。周溝は認められなかった。

床面は、平坦であるが、わずかに東から西へ傾斜をもつ。

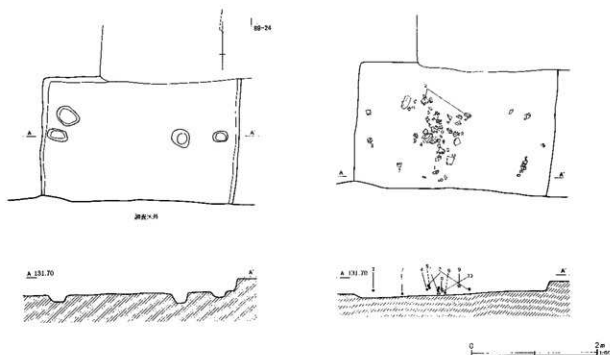
柱穴は4ヶ所検出したが、住居に伴う柱穴は、不明であった。いずれの柱穴も浅く、壁寄りに検出された。

覆土は、片岩泥じりて、焼土粒子、炭化粒子を含む褐色土で覆われ、住居跡中央に土器片がかなりまとまった状態で検出された。住居の床面よりもやや浮いた状態であることから廃棄されたものと考えられる。

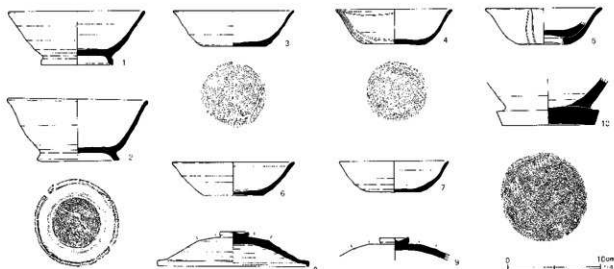
カマドおよび貯蔵穴は、検出できなかった。

出土遺物は、須恵器杯、高台付杯、蓋、すり鉢を検出した。2はやや法景の大きな高台付杯である。4・5に図示した杯の体部外面には火罨の痕跡が認められる。特に、5は重ね焼きにより貼りついた失敗品と考えられる。10はすり鉢の破片である。底部外面はヘラ削り調整を施し、堅く焼きまわっている。須恵器焼成後の不良品を廃絶後の住居跡に棄てた可能性がある。

第18図 第7号住居跡・遺物分布図



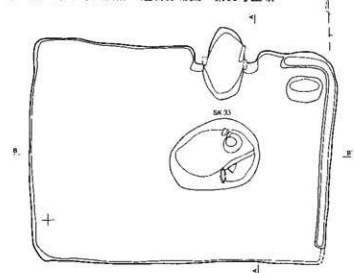
第19図 第7号住居跡出土遺物



第5表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付坏	(14.6)	5.7	(7.6)	B	3	淡褐	30	No42
2	高台付坏	15.0	6.5	8.8	B	2	灰褐	60	No4、57
3	坏	(12.8)	3.8	6.8	ABEF	3	褐	40	No61、フタナ
4	坏	12.3	3.7	6.8	BF	2	青灰	95	No25 外面火だすき痕
5	坏	(12.5)	3.8	5.0	CE	1	青灰	20	No9、19 外面火だすき痕
6	坏	(13.0)	3.5	6.3	CE	1	青灰	50	No34
7	坏	(11.6)	3.3	(5.8)	BF	1	青灰	40	No60
8	蓋	(16.0)	3.6		BF	1	灰	60	No26
9	蓋	(2.4)			BF	2	淡灰	10	No51
10	すり鉢		(4.8)	9.8	BDF	1	灰	20	No17

第20図 第8号住居跡・遺物分布図・第33号土壌



9 132.70

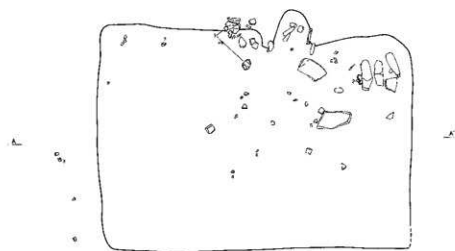


第8号住居跡

- | | |
|--------|------------------------|
| 1 黄褐色土 | ローム粒子、片岩を含む しまり弱い |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物粒子を含む しまりややもつ |
| 3 黄褐色土 | ローム土を主体 粘性もつ しまりもつ |
| 4 褐色土 | ローム粒子、ロームブロックを主体 しまりもつ |

第33号土壌

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロックを含む しまりややもつ |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、ロームブロックを含む しまりややもつ |
| 3 褐色土 | 焼土粒子、ロームブロックを含む しまりややもつ |
| 4 黄褐色土 | ロームブロックを多量含む |



9 132.60



第8号住居跡 (第20図)

90・91-23・24グリッドに位置する。調査区中央にあたる。北側から伸びる丘陵の中央部分でもあるこの住居跡を中心として西側に竪穴住居跡が検出された。東側は、何もなく東端の西斜面部に占墳時代の竈跡第1・2・3号を調査した。本調査区で検出した5軒の住居跡の内、唯一北側にカマドを設けていた。また、貯蔵穴をもつのは本住居跡のみであった。

住居の形態は、長方形であった。規模は長辺4.84m・短辺3.5m・深さ0.24mであった。

主軸方位は、N-2°-Eであった。

壁は、浅く、かろうじて北側半分程が検出され、南側部分については、不明瞭であった。周溝は北壁の貯蔵穴部分から東壁にかけて検出できた。幅18cm・深さ11cmであった。

床面は、緩やかに北から南へ傾斜していた。礫混じりで硬くしまっていた。

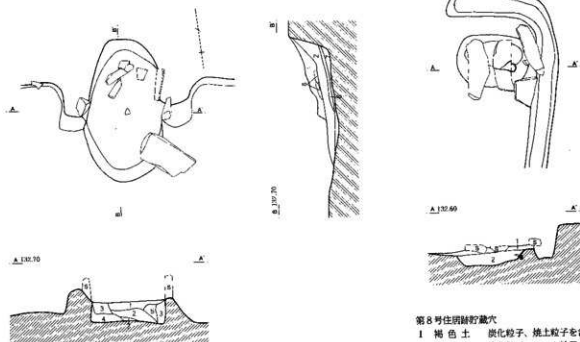
柱穴は、検出できなかった。

覆土は、北側からの自然堆積であった。焼土粒子、炭化粒子を含み破壊された片岩を含む黄褐色土で覆われていた。

カマドは、北壁のやや東よりに検出した。規模は長さ1.13m・焚き口幅0.6m・掘り込みの深さは0.09mであった。構造は、両袖に片岩を建て両袖石の間隔は幅70cmである。天井部はカマド前面で検出した二枚に割れた片岩を利用していたものと考えられる。天井石の長さは82cmであり両袖石の間隔とほぼ合う。

貯蔵穴は、カマド右側の北東隅に検出した。形状は長方形で規模は長辺0.57m・短辺0.42m・深さ0.08mであった。貯蔵穴の上面には、4枚の緑泥片岩を検出し

第21図 第8号住居跡カマド・貯蔵穴



第8号住居跡カマド

- 1 明褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を含む
- 2 赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを含む
- 3 褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を含む
- 4 灰褐色土 炭化物粒子、灰を含む
- 5 赤褐色土 焼土粒子を多量に含む
- 6 赤色土 焼土塊、焼土粒子を主体
- 7 黄褐色土 ローム土を主体、片岩を含む

第8号住居跡貯蔵穴

- 1 褐色土 炭化粒子、焼土粒子を含む
- 2 褐色土 炭化粒子、ローム粒子を含む

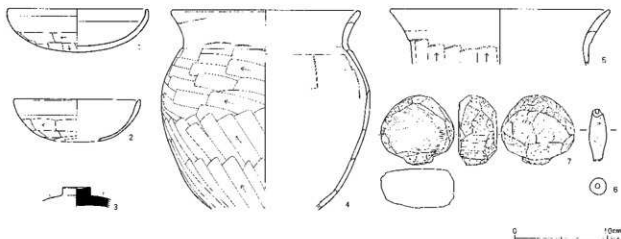
0 1m

た。貯蔵穴の蓋として使用した可能性が考えられる。カマドの構築材や貯蔵穴の蓋材として片岩を利用する特徴をもっていた。

重複関係は、住居跡中央に黑色の覆土をもつ掘り込みを確認した。住居跡に伴うものと考えられる。出土遺物は、いわゆる、北武蔵型の土師器環である。口縁部横ナデ、体部との境に未調整部分を残し、底部にかけてへう削りを施す。形態は、底部丸底で1は口径

14.8、2は口径13.5とやや大きい。3は須恵器蓋である。4は胴部がやや球形に張る甕である。5は口縁部分の破片であるため判断はやや難しいが甕の破片とした。このほか、石製の半球状製品が出土した。表面及び側面は細かく削り込み、器面を整えている。裏面は平滑である。下部に方形の短い突起をもち、柄の装着部とも考えられるが、手のひらに納まる大きさでもある。用途としては、石製で具の可能性が指摘できる。

第22図 第8号住居跡出土遺物



第6表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器環	(14.8)	4.5		BEFGH	1	橙褐	50	Na10、20、フタ4
2	土師器環	(13.5)	(4.5)		BD	2	茶褐	40	Na32
3	蓋		(1.9)		B	2	黒灰	20	Na2
4	土師器甕	(20.2)	(20.8)		BEFGH	1	褐	50	Na19
5	土師器甕	(23.3)	(5.8)		BEFGH	2	橙褐	5	Na35
6	土製	残存長5.5、幅1.8、孔径0.5cm、重量14.94g							Na29
7	石製品	残存長7.3、幅7.8、厚さ4.1cm、重量366.84g							Na9 片岩製

2. 土壌と出土遺物

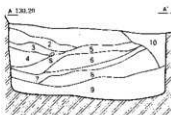
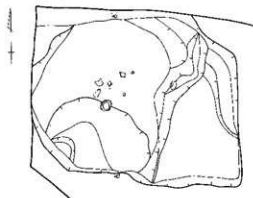
未野遺跡E区で第30～33号土壌を、F区で第34号土壌を検出した。未野遺跡E区の最西端には第30号土壌を検出し、本土壌は未野遺跡D区から連続する粘土採掘坑群の続きと判断した。第6号住居跡の西側には第31・32号土壌を検出した。第33号土壌は第8号住居跡内に検出した。また、第34号土壌は第5号窯跡の南東の斜面部に検出した。ここでは、各土壌と出土遺物の様相について述べる。

第30号土壌 (第23図)

80-22グリッドに位置する。調査区の西端で確認した。北側及び南側は調査区となる。東側は北東方向から伸びる丘陵斜面部にあたる。このため、本土壌は西斜面の掘部に掘り込まれていた。西側には、第1次調査のD区SX11を含む粘土採掘坑が連続して検出されており、谷部に広く展開している粘土採掘坑群の最端部と考えられる。

第23図 第30・31・32号土壌

第30号土壌

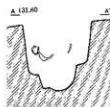
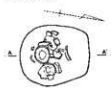


第30号土壌

- 1 珉褐色土 焼土粒子、炭化粒子を含むしまりややもつ
隙小を混入土器片を含む
- 2 黄褐色土 黄ローム、白色粘土ブロック（径0.5~2.0cm）
を主体 粘性強
- 3 黒褐色土 暗い 焼土粒子、炭化粒子をやや多く含む
しまりややもつ
- 4 茶褐色土 明るい 炭化粒子、を多く含むしまりややもつ
隙小を混入 土器片を含む
- 5 黄褐色土 黄色ローム層、白色粘土ブロックを主体
- 6 黒褐色土 第3層と第4層を混入 土器片を多く検出
- 7 黄褐色土 黄色ローム層、白色粘土ブロックを主体
しまりもつ
- 8 茶褐色土 第3層と第4層を混入 炭化粒、焼土粒子は少ない
- 9 黄褐色土 黄色ローム、白色粘土ブロックを主体
- 10 褐色土 炭化粒子、焼土粒子を含む 小塊、ロームブロック
（径0.5cm）を混入 1より強く粘性強い



第31号土壌



第32号土壌



第32号土壌

- 1 褐色土 炭化物粒子を主体（土器を含む）
- 2 褐色土 焼土 炭化粒子を含む しまりやや強い
- 3 黄褐色土 ローム粒子、礫を含む
- 4 褐色土 ローム粒子、礫を含む



平面形態は不整長方形で、規模は長辺3.3m+α・短辺2.76m+α・深さ1.1mである。掘り込みは、テラスを持ちながら深くなり、底面は、緑青粘土層に達して止まる。粘土は、その上層に広がる青白色粘土層を採掘したものと考えられる。覆上は、黄色ロームを主体とし、青白色粘土ブロックを含んだ5・7・9層が竊条に堆積していた。

遺物は、主に第6層からまとも検出された。完形の高台付杯、鉢、杯、土師器甕が出土している。

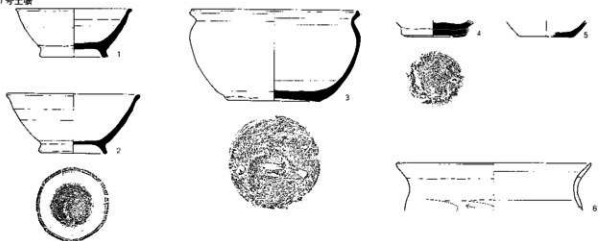
第31号土壌（第23図）

84-23グリッドに位置する。本土壌の南側には、P9をはさんで第32号土壌が検出されており、東側には、第6号住居跡が検出された。平面形態は楕円形で、規模は長辺0.55m・短辺0.48m・深さ0.53mである。

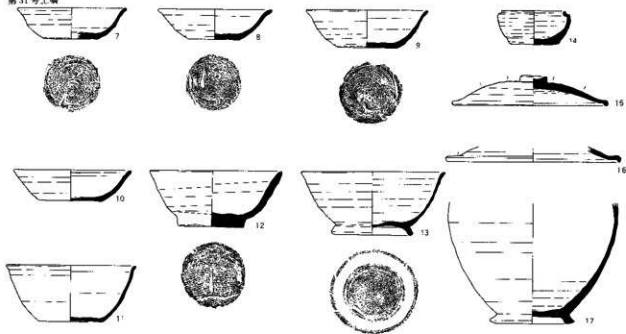
出土遺物は、覆上層から中層にかけて、重なり合うように詰まった状態で多量に出土した。いずれも須恵器であった。7~10は坏でほぼ完形に近い、11は無台の碗である。12は完形の碗であり、器肉の厚い粗雑

第24图 第30·31·32号土壤出土遺物

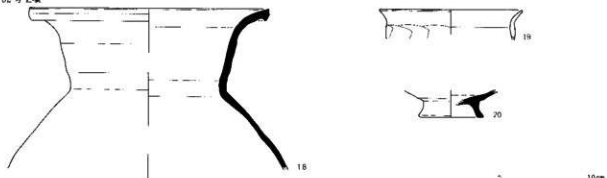
第 30 号土壤



第31号土壤



第32号土壤



第7表 第30号土壌出土遺物観察表 (第24図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付杯	(12.4)	5.1	7.2	ABCE	1	灰	40	No7, 8
2	高台付杯	14.0	6.2	7.3	ABC	1	青灰	100	No9
3	鉢	(17.6)	9.6	9.8	ABCF	1	青灰	60	No5
4	杯	(1.8)	6.3	ABCEF	1	青灰	10	No3	
5	杯	(2.7)	(5.7)	BC	1	灰	5	No4	
6	土師器甕	(20.3)	(5.0)	ABCEFH	1	粉褐	5		

第8表 第31号土壌出土遺物観察表 (第24図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
7	杯	11.3	3.3	5.6	BCEF	1	灰	70	No4
8	杯	(11.9)	3.1	5.5	ABEF	1	青灰	70	No11
9	杯	12.9	3.9	6.6	ABCE	1	暗灰	95	No7
10	杯	(12.8)	3.2	6.6	ACEF	2	茶褐	70	フクナ
11	碗	(13.6)	5.9	6.5	ACEF	3	灰褐	30	フクナ
12	碗	13.8	5.9	7.0	ABEFH	2	褐	100	No2
13	高台付杯	15.2	6.6	8.7	BCEF	1	暗灰	80	No12
14	小型短頸甕	6.8	3.5	5.3	ABEF	1	褐	80	No5
15	蓋	16.5	3.1		ACEF	1	灰褐	80	No3, 6
16	蓋	(18.3)	(1.6)		ACE	1	青灰	5	No1
17	長頸甕		(12.7)	8.9	ABCE	1	青灰	40	No9

第9表 第32号土壌出土遺物観察表 (第24図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
18	甕	(25.4)	(16.9)		ACEF	2	灰	20	No1
19	土師器小型甕	(15.1)	(3.1)		ABDEFH	2	粉褐	5	No1
20	高台付杯		(2.9)	(6.8)	ABCEF	2	灰	10	No1

な調整である。底部調整が静止糸切りであることも特徴である。13は高台付杯である。底部糸切り難しの後、高台を張りつけている。14は小型短頸甕で、褐色である。ロクロ目は細かく丁寧な仕上げである。底部調整は摩滅が著しく不鮮明であるが糸切り難しの後、周辺に回転ヘラケズリを施している。15・16はつまみの貼り付く蓋である。17は焼きしまった還元焼成された長頸甕であり、胴部から底部にかけての破片が出土した。

第32号土壌 (第23図)

84-23グリッドに位置する。第31号土壌の南側にあたると。平面形態は円形で、径0.43m・深さ0.38mである。第31号土壌よりやや小型であるが、ほぼ形態や掘り込みの状態は似ている。土壌の性格は不明であるが、第6号住居跡と関連性があるものと考えられる。覆土の堆積状況から見ると人為的埋土の可能性があり、第31・32号土壌とも掘り込みの中心が深くロクロピットの可能性を示唆させるが、不明瞭であった。

出土遺物は、炭化物粒子を多く含む覆土第1層より

出土した。口縁部無紋の甕、土師器の小型甕、高台付杯が出土している。

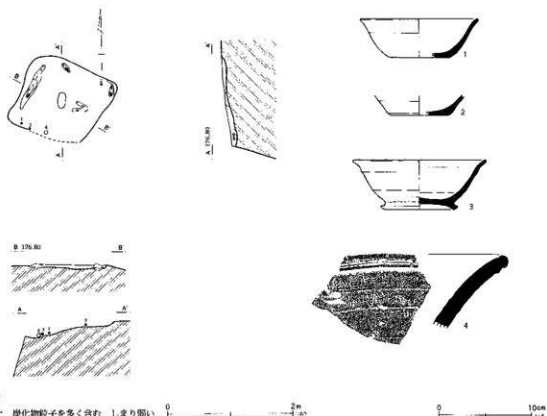
第6号住居跡との接合関係はなかったものの出土遺物の時期から判断して、ほぼ同時期と考えることができる。さらに並列して検出された第31号土壌も同時期とみられ、周辺にはP4-P12の柱穴が方形に確認されており、P6とP9の中間に第32号土壌が、P9とP10の中間に第31号土壌が存在する。両土壌の距離はP9を挟んで2.0mであり、柱間の中央に位置する。

第13図に見られるように第6号住居跡の北側は住居北壁から2.1mの距離にP10-P12の柱穴列が存在する。また、西壁から0.8m程の距離にP6-P9-P10の柱穴列が存在し壁からの距離は東西南北すべてに異なっているが、掘建柱建物跡とするよりも、第6号住居跡を含め竪穴部分と周辺の平坦部分を含めて生活空間として屋根が葺かれていた可能性がある。

第33号土壌 (第20図)

91-23グリッドに位置し、第8号住居跡内に検出し

第25図 第34号土壌・出土遺物



第10表 第34号土壌出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.5)	4.1	(6.4)	ABCF	1	青灰	20	No8
2	坏	(2.1)	(5.8)	BCE		1	灰	5	No1
3	高台付坏	(14.0)	5.2	8.1	ABEF	1	青灰	60	No13
4	甕				ABCEFF	2	灰	5	No16

た。住居跡の覆土を切り込んで造られていたため、住居跡断絶後の土壌である。

平面形態は楕円形で、規模は長辺1.45m・短辺1.12m・深さ0.3mである。

出土遺物は、ほとんどなく住居跡の遺物がわずかに流れ込んでいた。

第34号土壌（第25図）

113-23グリッドに位置する。第5号窯跡の東側にあたり、南側に面した丘陵斜面中段に検出した。標高は、126.60m前後で、第5号窯跡より7.5m程低い位置にあたる。

平面形態は不整形形で、長辺1.4m・短辺1.26m・深さ0.08mである。西側から北側にかけては、壁面が

や被熱し焼土化していた。東壁部分も確認できたが、検出面からの掘り込みはいずれも浅い。南壁は、確認できなかった。底面は、北側から南側に向かって緩やかに勾配をもつ。覆土中には還元焰及び酸化焰焼成された須恵器坏片が出土し、焼土塊や炭化物、炭化材が含まれていた。

出土遺物は、須恵器坏、高台付坏、甕の破片が出土していた。これら、出土遺物の焼成は、酸化焰焼成の赤褐色のものと還元焼成された灰色の須恵器であった。

炭化材の出土から炭焼き窯の指摘も考えられたが、酸化焰焼成された須恵器を伴うことから土器焼成遺構の可能性も考えられる。

3. 窯跡と出土遺物

第5号窯跡（第27図）

111-21・22、112-22グリッドに位置する。標高128.90m～127.70mの東側灰原に面した斜面に構築されていた。窯跡を検出した斜面は、南向きの緩斜面で左右が張り出し、弓状を呈した中央部分に当たる。地山は、北側からの流れ込みによる自然堆積土で表面が覆われており、掘り込みの底面は、礫混じりの硬い黄褐色土であった。窯の西側には粘土採掘坑aが検出された。

窯跡の形態は、無階無段の半地下式であった。

規模は、全長4.6m・焼成部最大幅1.44m・燃焼部幅1.51m・掘り込みの深さは、確認面から1.74mであった。

検出状況は、北側調査区隔で径30cmの煙道部を発見、中央部が黒褐色土で周辺が円形に被熱し赤褐色の焼土化をしていた。天井部はわずかに残存していた。

主軸方位は、N-18°-Wであった。

前庭部は、斜面を削り込んでわずかな平坦面をつくっていた。焚き口部から1m程の南北幅をもち、東南に約3～5m程の広さを保っていると考えられる。この前庭部には、焚き口部分から伸びる「ハ」の字状の溝を確認した。南側は谷に面し急斜面となっていた。

焚き口部分には、中央や東寄りに小ビットを検出した。直径29cm×深さ25cmであった。覆土は焼土粒子・炭化粒子を含みややガラガラした褐色土であった。右側壁には天井部の芯材として使用されていたと考えられる緑泥片岩系の石が立てた状態で検出された。

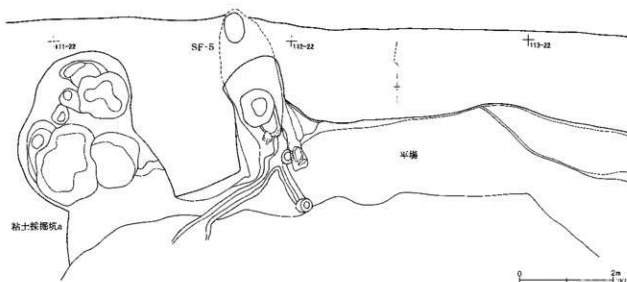
床面は、硬質で還元状態で青灰色をしていた。焚き口幅は1.25mを測る。

焼成部は、独立した状態で検出されていないが、南北セクションで観察された第12・13・14層が細かく認められた付近までと考えられる。幅は、焚き口とほとんど変わらない。両壁はほぼ直立して立ち上がっていた。床面は、前庭部から焚き口・燃焼部にかけて平坦であった。

燃焼部は、燃焼部から比べると床面がわずかに凹み、60cm程の地点から窯床の傾斜角度が17度を測る。窯尻に向かってわずかながら角度が大きくなる。床面は、ほとんど平坦であった。床面の焼成枚数は1枚のみであった。火周りは良く、床及び壁面は還元状態で、直下の地山は、厚さ3cm前後赤褐色に被熱し変色していた。窯壁はドーム状でやや下膨れ気味に丸く立ち上がる。

煙道部は、奥壁から直立して立ち上がり、高さ約66

第26図 第5号窯跡周辺全体図



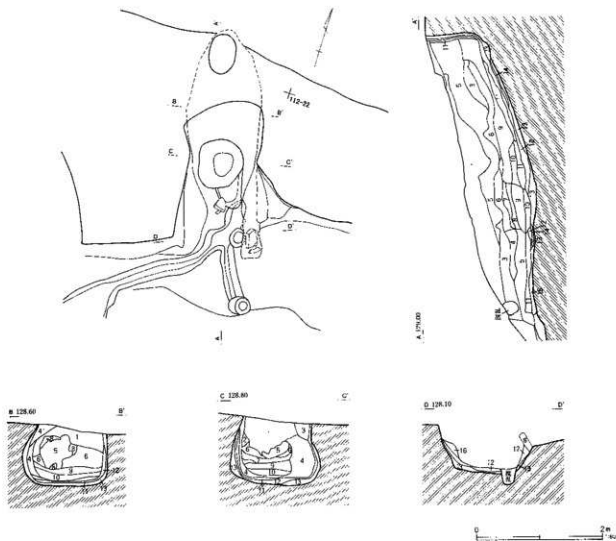
cmを測る。煙道部直下の床面には直径48cm程の浅いピットを検出した。ピット内からは平たい片岩を出土した。

側壁は、非常に硬く被熱し還元状態になっていた。側壁には掘削時の工具痕が認められた。煙道部分では上方から下方にかけて削り込み、両側壁は、焼成部の中央付近が被熱によりぼろぼろで不明であったが、こ

のあたりから煙道部にかけては、窯尻方向に削り込み、燃焼部方向にかけては、焚き口方向に削り込んでいた。燃焼部では上から下の削り込みや、焚き口方向からの削り込みも認められた。

上層は、窯体内で15層に分層した。第1層は崩落後の自然堆積層であった。第5層が天井部の崩落上で赤色土層であった。また、第3・4・6・7層は天井部

第27図 第5号窯跡

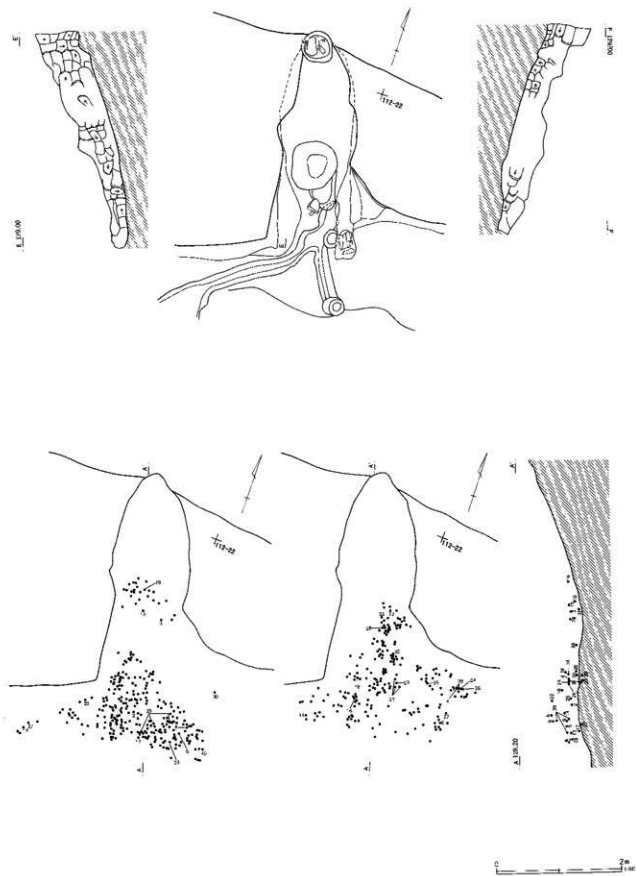


第5号窯跡

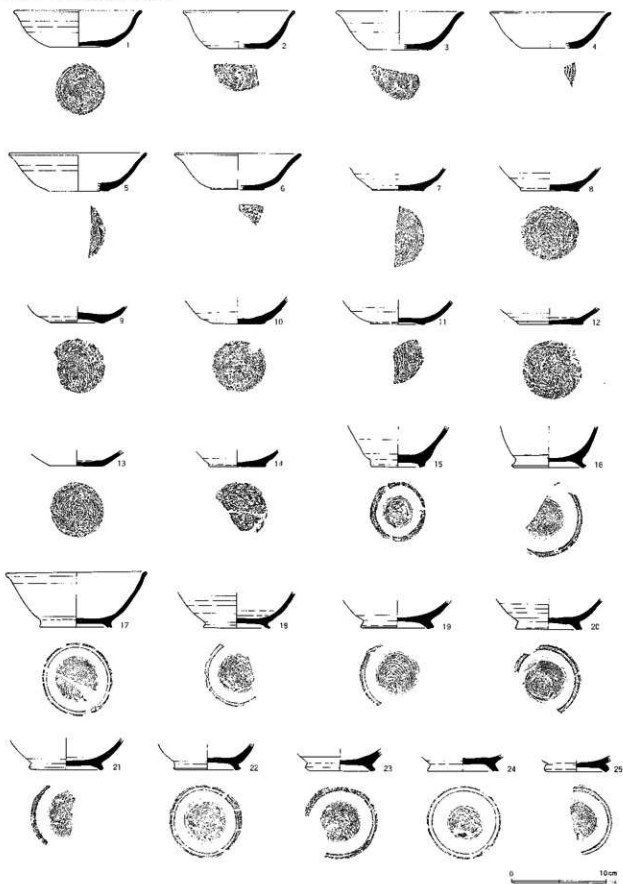
- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|------|
| 1 褐色土 | 片岩粒、炭化粒子、焼土粒子を含む | しまりもつ | 崩落上層 |
| 2 褐色土 | 第1層に比べやや暗い | しまりもつ | 崩落土層 |
| 3 明褐色土 | 片岩粒、炭化粒子、焼土粒子を混入 | しまりもつ | |
| 4 赤褐色土 | 焼土粒子、ブロック(径1~5cm)を主体 | 壁の崩落土 | |
| 4' 赤色土 | 焼土層 | | |
| 5 赤色土 | 焼土粒子、ブロック(径1~5cm)を主体 | 天井の崩落土 | |
| 6 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を含む | | |
| 7 赤褐色土 | 焼土粒子、ブロック(径0.3~1.0cm)を多く含む | | |

- | | |
|---------|--------------------|
| 8 青灰色土 | 壁の内側の還元面の崩落土 |
| 9 赤褐色土 | 焼土粒子、ブロックを多く含む |
| 10 暗褐色土 | 片岩粒子を含む |
| 11 黒褐色土 | 炭化物粒子を混入 |
| 12 青灰色 | 窯全体の還元面、硬質でガラス状 |
| 13 赤褐色 | 還元面直下の赤褐色層の地山 |
| 14 赤褐色 | 還元面の直下で第13層より赤色である |
| 15 青灰色 | 被熱を受け赤色部分を持つ |

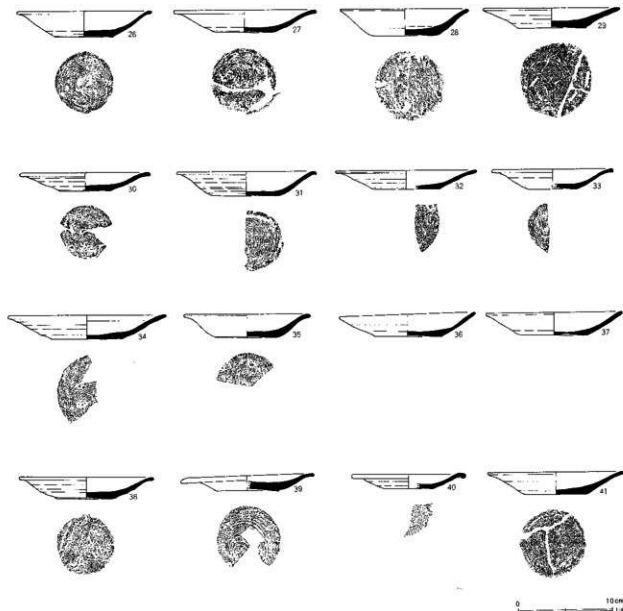
第28図 第5号竊跡工具痕・遺物分布図



第29图 第5号窯跡出土遺物(1)



第30図 第5号窯跡出土遺物(2)



第11表 第5号窯跡出土遺物観察表 (第29・30図)

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
1	坏	(13.6)	3.9	6.1	ABCEF	3	青灰	50	土坑フタ上
2	坏	(11.8)	4.0	(6.2)	ABCEF	1	青灰	20	No.317
3	坏	(13.0)	4.0	(6.6)	ABCEF	1	暗灰	30	No.383
4	坏	(13.6)	3.5	(6.4)	ABCEF	1	黒灰	20	No.220
5	坏	(14.6)	4.0	(6.4)	ABCEF	1	青灰	20	244
6	坏	(13.4)	3.8	(5.4)	ABCEF	1	黒灰	10	No.71
7	坏		(2.4)	5.3	ABCF	1	青灰	30	B
8	坏		(2.6)	6.2	ABCEF	1	暗灰	30	231
9	坏		(1.8)	5.6	ABCEF	2	暗灰	30	No.74
10	坏		(2.8)	5.9	ABCF	1	青灰	30	No.469
11	坏		(2.6)	(5.6)	ABCF	1	暗灰	20	A

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
12	坏		(1.7)	6.4	ABCF	1	暗灰	30	灰原5
13	坏		(1.7)	5.9	ABCF	1	暗灰	30	Na295
14	坏		(1.8)	6.0	ABCF	3	赤褐	30	Na45
15	高台付坏		(4.3)	5.7	ABDEF	3	茶褐	30	Na381
16	高台付坏		(4.4)	(8.0)	ABEF	1	暗灰	40	8
17	高台付坏	14.9	5.7	7.7	ABEF	3	赤褐	70	Na501
18	高台付坏		(3.8)	(7.0)	ABCF	1	灰	40	Na33
19	高台付坏		(3.0)	(7.7)	ABDEF	2	灰	30	Na391
20	高台付坏		(3.3)	(7.1)	ABF	1	灰	30	灰原45-12-15、灰原
21	高台付坏		(3.4)	(7.2)	ABEF	3	赤褐	30	
22	高台付坏		(2.7)	7.1	ABEF	2	茶褐	20	Na67
23	高台付坏		(2.4)	7.5	ABE	3	褐	30	242
24	高台付坏		(1.5)	7.5	ABF	1	灰	20	Na220
25	高台付坏		(1.2)	6.8	ABEF	2	灰褐	20	Na351
26	皿	(14.4)	2.7	6.1	ABF	1	暗灰	40	Na220
27	皿	15.2	2.2	6.9	ABEF	3	赤褐	80	Na502
28	皿	13.6	2.8	7.3	ABEF	2	褐灰	70	463
29	皿	(14.6)	2.1	7.3	ABDEF	3	赤褐	50	431
30	皿	(13.5)	1.9	5.5	ABF	1	暗灰	40	平場Na66 灰層
31	皿	14.8	2.5	6.6	ABDEF	2	淡灰	50	土層フタ上
32	皿	(14.8)	2.1	(7.0)	ABF	2	黒灰	20	土層フタ上
33	皿	(13.0)	2.1	(5.2)	ABEF	3	褐	20	466
34	皿	(16.4)	2.3	(7.8)	ABDF	1	灰	30	Na220
35	皿	(13.4)	2.5	(6.6)	ABEF	1	灰	30	Na212
36	皿	14.4	2.4	7.0	ABFG	3	褐	70	Na429
37	皿	14.3	2.4	7.8	ABF	3	褐	60	Na432
38	皿	14.5	2.2	6.2	ABEF	1	灰	70	Na217、220
39	皿	(14.1)	1.6	6.7	ABF	3	灰	60	Na286、294、平場Na86、B
40	皿	(12.1)	1.6	(5.0)	ABF	1	暗灰	20	Na161
41	皿	(14.2)	(2.3)	6.8	ABEF	3	赤褐	40	灰原5、95-12-16

第12表 第5号窯跡出土遺物計量表

遺物名	坏	皿	蓋	高台付坏	高台付皿	機	高台付機	壺	壺	瓦など	鉢
SF-5番号 破片数	553	63	2	65	0	0	0	21	1	0	0
SF-5復土 破片数	609	54	1	54	0	0	0	19	0	0	0
SF-5番号 重量計	3875	1630	20	1880	0	0	0	915	55	0	0
SF-5復土 重量計	4806	890	5	995	0	0	0	610	0	0	0

及び壁の燃土ブロック及び焼土ブロックを含む層で赤褐色又は、明褐色上層であった。第7・8・9層は焼土粒子が多く8層は青灰色の還元土が混在していた。第11層は炭化物を多く含む層で、灰床の様相をもつ。第12・13・14層は窯床面、第12層が青灰色のガラス質で硬質、第13・14層は還元面直下の赤褐色に被熱した地山層であった。

出土遺物は、坏、高台付坏、皿の破片を検出した。完形に近いものはない。窯の天井高が1.00mと低いことから大窯の焼成には不向きであったと考えられる。出土遺物はほとんど小破片で窯の中央部から前庭部にかけての第11層中および直上の床面から検出された。

坏は、推定口径12.6～13.7cm、底径5.3～6.6cmの範囲が多く検出されている。高台付坏は唯一17cm口径14.9cm、器高5.7cm、高台付7.7cmである。底部糸切り離しの後、高台を貼り付けている。皿は34に見られる口径16.4cmがやや大ぶりのもので、40は口径12.1cmの小ぶりのものが存在する。主体は、13cm代後半から14cm代前半である。形態は底部上げ底気味で、体部は外傾にわずかに内湾気味に立ち上がり口唇部は膨らみ外方に垂れるタイプと体部が外傾に直線的に立ち上がる37の様なタイプが存在する。焼成を見ると坏、皿、高台付坏は灰色に還元焼成されたものと赤褐色に酸化焰焼成されたものが存在する。

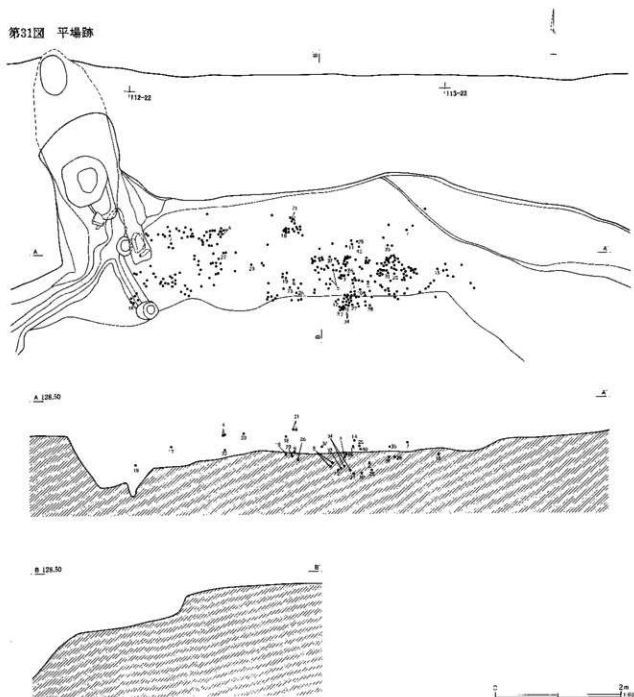
平場 (第31図)

112・113-22グリッドに位置する。標高127.70mである。第5号窯跡の東側に東西方向に伸び、第5号窯跡の掘り込まれた緩斜面部をテラス状に成形し平坦面を造っている。平坦面の位置は、窯跡の前庭部分と同じレベルである。窯作業時の作業場として東側灰原に面した斜面に構築されていた。窯跡を検出した斜面は、南向きの緩斜面で左右が張り出し、弓状を呈した中央

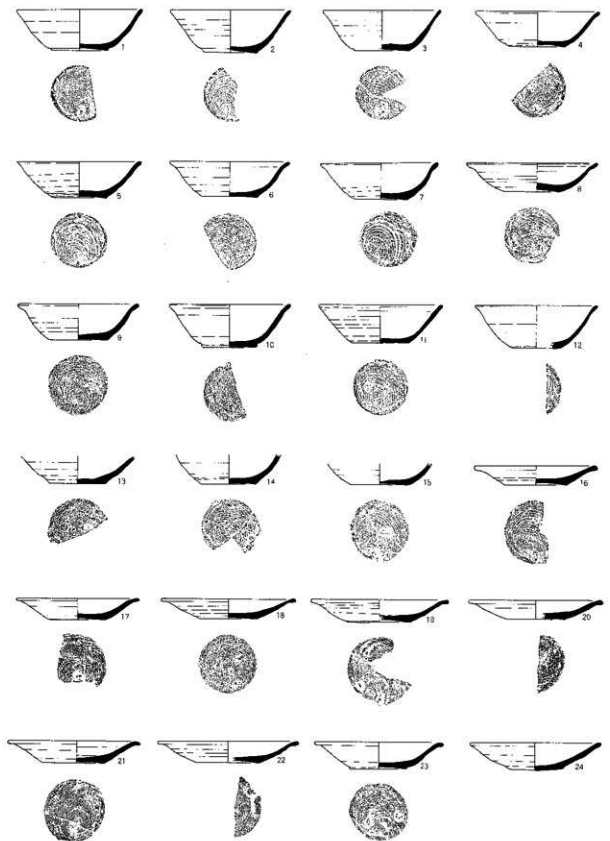
部分に第5号窯跡が位置し西側に小規模な粘土採掘坑aが、東側に平場跡が存在する。本来の地形は、北側から南側に向けた緩やかな斜面地であるが、わずかに北側を掘り込み南側の高さに合わせ、平坦面を造り出していた。

規模は南北1.90m、東西4.60mであった。地山は、礫混じりのローム土であった。覆土中には、須恵器破片とともに焼土粒子、炭化物粒子を混在させる。第5

第31図 平場跡

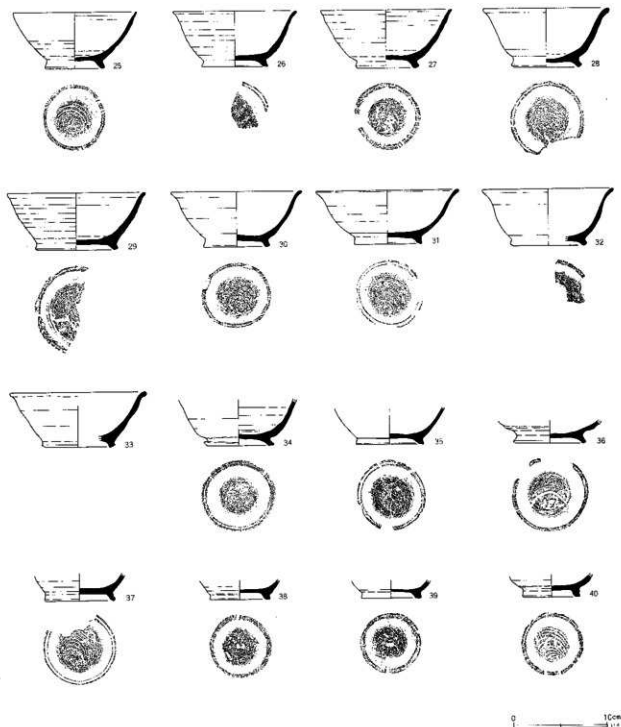


第32図 平場跡出土遺物(1)



0 10cm
1:4

第33図 平場跡出土遺物(2)



号室跡の前庭部から出土した土器との接合関係も認められた。検出された須恵器の広がりは、112-22グリッド全体におよび約東西5mの範囲にわたる。この広がりをみせる範囲が焼成後の須恵器の選別場としての機能をもっていたものと考えられ、作業空間として利用

されていた可能性がある。

出土遺物は須恵器の坏、皿、高台付坏を検出した。坏は口径は推定値を含め12.6～13.2cm、底径5.6～6.3cmの範囲が多く検出されている。皿は口径13.0cm～14.9cm、底径5.8～6.8cmである。高台付坏は口径

第13表 平場跡出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.4)	4.3	6.0	ABCF	2	灰褐	40	112-22-25
2	坏	(12.6)	4.4	(5.6)	ABCE	1	赤褐	30	283
3	坏	(12.6)	4.2	5.7	ABCE	1	赤褐	60	193
4	坏	(13.2)	3.7	6.0	ABCE F	1	青灰	30	No38、39
5	坏	13.2	3.8	5.8	ABCF	1	黑灰	60	No335、336
6	坏	12.8	3.6	6.0	ABCE	1	灰	50	No149
7	坏	(12.6)	3.8	5.7	ABCE F	2	灰	50	No3
8	坏	(13.0)	3.0	5.9	BCE F	2	灰白	30	右排水溝、左排水溝
9	坏	(12.8)	3.8	6.2	ABCE F	2	青灰	50	112-22-24
10	坏	(13.2)	4.0	5.9	BCF	1	素	40	112-22-24、No333
11	坏	(12.6)	4.5	5.8	ABCE	1	灰	30	No7
12	坏	(12.8)	4.5	(5.7)	ABCE	1	灰	30	319、112-22-24
13	坏		(2.9)	6.2	BCE	1	灰	30	112-22-24・25
14	坏		(3.1)	5.9	BCE	1	青灰	40	294、112-22-24
15	坏		(2.2)	6.3	ABCE	1	灰褐	40	258
16	皿	(13.0)	2.1	(6.7)	ABF	1	灰	30	No94
17	皿	(13.1)	2.2	(6.0)	ABCF	2	灰褐	40	No55
18	皿	(14.3)	2.1	6.1	ABFG	1	灰	70	No142
19	皿	14.8	2.3	6.8	ABF	1	暗灰	50	No148
20	皿	14.3	2.0	(6.2)	ABEF	3	灰褐	50	No349
21	皿	13.6	2.3	6.5	ABF	2	暗灰	50	No15、16
22	皿	(14.9)	2.0	(6.6)	ABF	1	灰	30	No120
23	皿	13.8	2.8	5.9	ABCEG	2	青灰	70	No32
24	皿	13.9	2.6	5.8	AEF	3	褐	80	No424、425、433
25	高台付坏	(13.1)	5.9	6.3	CE	1	暗灰	40	No6
26	高台付坏	(13.2)	5.8	7.0	ABE	3	赤褐	30	244
27	高台付坏	15.2	6.1	6.5	ABCF	1	暗灰	40	No334
28	高台付坏	(13.8)	5.9	(7.2)	BCE F	1	灰	40	163、112-22-23
29	高台付坏	(14.6)	6.0	8.8	ABEG	2	褐灰	40	No34
30	高台付坏	(14.0)	5.8	7.0	ABCF	1	暗灰	40	112-22-20
31	高台付坏	(15.2)	5.6	7.2	ABE	1	褐灰	50	225
32	高台付坏	(14.0)	5.9	(8.2)	AE	3	褐	30	112-22-20
33	高台付坏	(14.8)	5.9	(7.8)	ABF	1	灰	40	316
34	高台付坏	(4.9)	7.4	ABEF	1	青灰	40	321、324	
35	高台付坏	(3.9)	7.2	ABEF	3	赤褐	30	No4	
36	高台付坏	(2.4)	7.8	ABEF	1	灰	40	201	
37	高台付坏	(2.9)	7.6	ABEF	1	青灰	20	No11	
38	高台付坏	(2.0)	6.4	ABEF	3	赤褐	20	291	
39	高台付坏	(1.8)	6.3	ABEF	3	赤褐	30	112-22-25	
40	高台付坏	(2.4)	6.2	BCE F	3	赤褐	30	No5	

第14表 平場出土遺物計量表

遺構名		坏	皿	蓋	高台付坏	高台付皿	桶	高台付桶	壺	壺	瓦など	鉢
平場番号	破片数	515	15	7	59	12	0	0	25	2	2	1
平場覆土	破片数	812	18	2	53	0	0	0	45	1	11	0
平場番号	重量計	3250	770	90	1985	40	0	0	920	55	70	30
平場覆土	重量計	6435	420	5	1165	0	0	0	1500	10	240	0

13.1~15.2cm、器高5.6~6.1cm、高台径6.2~8.2cmである。底部糸切り離しの後、高台を貼り付けている。形態は底部上げ底気味で、体部は外傾にわずかに内湾気味に立ち上がり口唇部は膨らみ外方に垂れるタイプ

と体部が外傾に直線的に立ち上がる25の様なタイプが存在する。焼成を見ると坏、皿、高台付坏は灰色に還元焼成されたものと赤褐色に酸化焙焼成されたものが存在する。

4. 粘土採掘坑と出土遺物

末野遺跡の調査において粘土採掘跡はE区から1箇所とF区から2箇所確認された。E区では調査区西側のSK30とした遺構である。F区では粘土採掘坑a、bを検出した。また、末野遺跡D区の東側部分でE区西側のSK-30に連続する粘土採掘坑群が存在する。さらに、調査区西端の城見上遺跡A区の中央部と城見上遺跡B区でも規模の大きな粘土採掘坑群を検出している。

粘土の堆積層は地点によってレベルが異なるが堆積粘土層は同質であり城見上遺跡から末野遺跡の存在する台地にはほぼ層位を成して堆積していると考えられる。末野遺跡E区のSK-30地点で標高約129.00m付近から灰褐色粘土層が確認された。また、E区の台地頂部では確認面から地下1.60m付近で先ほどと同質の粘土層を確認し標高約132.26mであった。F区の粘土採掘坑aの地点では標高約127.60mであった。

粘土採掘坑a (第34・35図)

110・111-22グリッドに位置する。東側には、第5号窯跡が存在する。南向き斜面に掘り込まれていた。標高は128.50mであった。

全体的な形態は、楕円形であった。

規模は、全長3.19m・最大幅2.77m・掘り込みの深さは確認面から1.0mであった。

主軸方向はN-8°-Wであった。全体が大きな土坑状であるが、いくつかの不整形に掘り込まれ、連続した土坑の集合体であった。各土坑の規模は長さ1.2~1.7m程度で深さ15cm前後といずれも浅い。

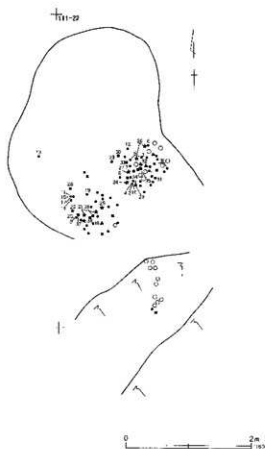
底面は皿状で黄褐色のローム粘土を採掘したものと考えられる。粘土としての質は尾根を形成する結晶片岩の細かな破片が混在している。粘性がやや弱く粗い。採掘坑の掘り込みは浅く採掘量が少なかったと考えられる。土器製作の原料としての粘土採掘坑ではなく窯にとりもなう構築や修復の際に利用された粘土の可能性が考えられる。

土層観察によれば覆土は自然堆積によった。特に第1~3層は斜面地特有の地山土の流れ込みにより、確

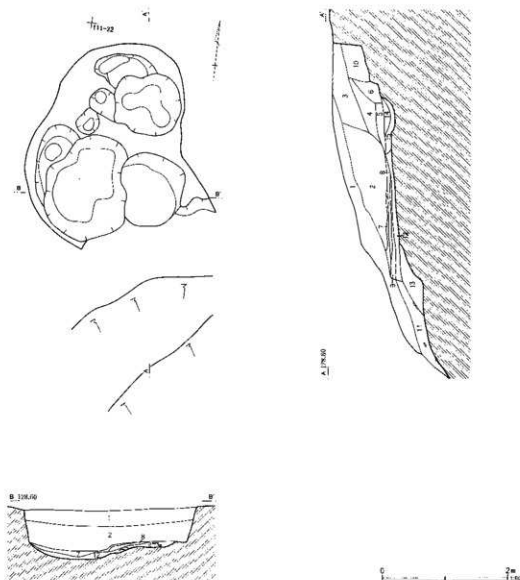
認が非常に難しかった。斜面部に断面がわずかに確認され、中心に南北トレンチを掘り込み粘土採掘坑の範囲を確認した。底面を確認後東西に掘り進め全体をつかんだ。第7層は炭化粒子、炭化物を多く含み、第8層は粘土ブロックを主体とし、しまり強く粘り床の様相をもつ。さらに、その下層の第9、12層は炭化粒子を多量に含んでいる。

出土遺物は、第7・9・12層中および直上から検出された。出土器種は、坏、高台付坏、皿である。坏は、口径12.6~13.7cm、底径5.2~7.0cmの範囲が多く検出されている。皿は23・24・27にある口径16.6~17.1cmとやや大ぶりのものと、21・25・26の口径12.9~13.5cmと小ぶりのものが存在する。形態は底部上げ底気味で、体部は外傾にわずかに内湾気味に立ち上がる。口唇部は膨らみ外方に垂れるタイプと体部が外傾に直線

第34図 粘土採掘坑a遺物分布図



第35図 粘土採掘坑 a



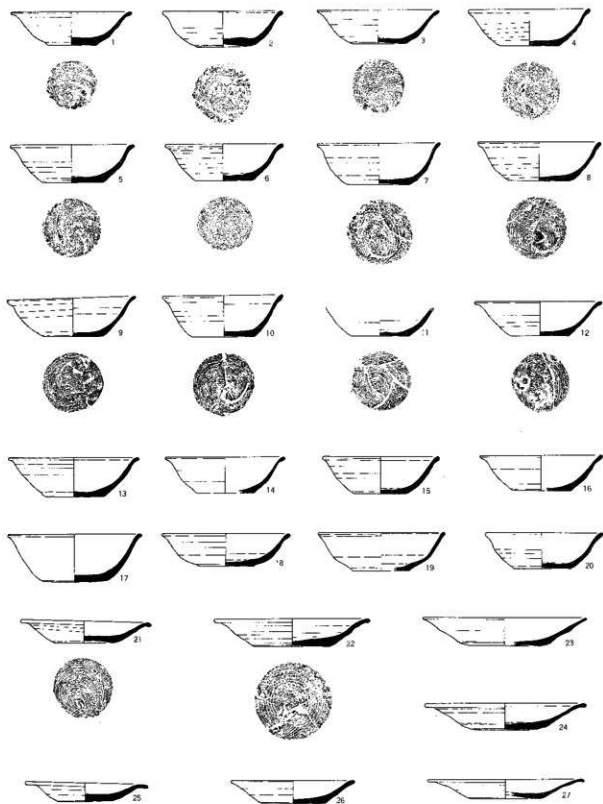
粘土採掘坑 a

- | | | | | | |
|---------|---------------|----------|----------|---------------|------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 粘土粒子、炭化粒子を含む | 片岩粒子混入 | 8 黄褐色土 | 粘土ブロックを多量含む | しまり、粘性ややもつ |
| 2 暗茶褐色土 | 粘土粒子、炭化粒子を含む | しまりもつ | 粘土質の粘土質 | | |
| 3 茶褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を含む | しまりもつ | 9 黒褐色土 | 炭化粒子を多量含む | しまり、粘性もつ |
| | | ローム粒子混入 | 10 黄茶褐色土 | ローム粒子、ブロックを主体 | しまりもつ |
| | | しまりもつ | 11 褐色土 | ローム粒子を含む | 粘土ブロックを混入 |
| 4 茶褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を含む | ローム粒子混入 | | しまりもつ | |
| | | しまりもつ | 12 黒褐色土 | 炭化物粒子多量含む | しまりもつ |
| 5 明茶褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子を含む | ローム粒子、 | 13 暗褐色土 | 砂利、片岩粒子を混入 | しまりもつ |
| | | ブロックを混入 | 14 黄褐色土 | ローム粘土粒子を含む | しまりやや弱い |
| 6 明茶褐色土 | ロームブロックを多量含む | しまり、粘性もつ | 15 黄褐色土 | ローム粘土を混入 | ブロック（径2~3cm）しまり、 |
| 7 黒褐色土 | 炭化粒子、炭化物を多量含む | 土層片を混入 | | 粘性もつ | |

的に立ち上がる23の様なタイプが存在する。高台付坯は28が小型で口径7.1cm、器高4.8cm、高台径7.1cmである。大型のものは推定口径17.8cm、器高7.8cm、高台径

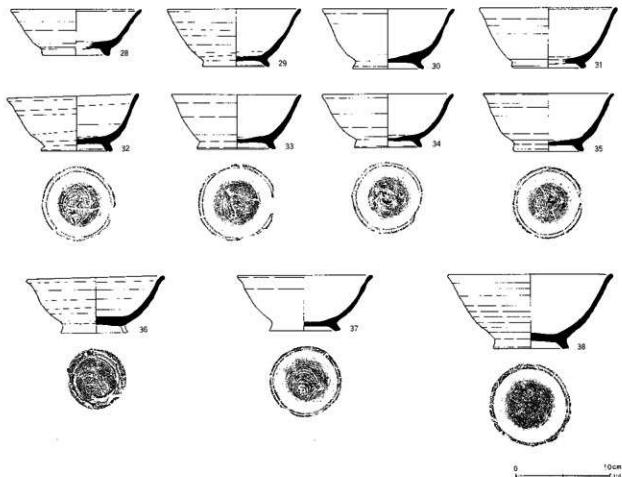
7.8cmである。焼成を見ると坯、皿、高台付坯は灰色に還元焼成されたものと赤褐色に酸化焰焼成されたものが存在する。

第36図 粘土採掘坑a出土遺物(I)



0 10cm
1/4

第37图 粘土探掘坑a出土遺物(2)



第15表 粘土探掘坑a出土遺物觀察表 (第36・37图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.6)	3.5	5.2	ACE	1	暗灰	40	No47
2	坏	12.6	3.8	5.8	AR CDEF	1	暗灰	80	No37, 43
3	坏	12.8	3.5	5.8	ABF	1	灰	70	No61
4	坏	12.6	3.9	6.4	ABCF	1	灰	80	No37
5	坏	13.0	4.0	6.6	ACE	1	暗灰	90	No38, 42, 43, 46
6	坏	12.3	3.9	6.1	ACF	1	暗灰	90	No61, 66
7	坏	(13.0)	4.3	6.6	ABEF	3	淡灰	70	No43
8	坏	13.0	4.0	6.4	ACE	1	青灰	80	No38
9	坏	13.7	4.0	6.6	ABEF	3	赤褐	50	No9
10	坏	(12.5)	4.3	7.0	ABEFG	3	褐	40	No37, 43
11	坏		(3.0)	6.3	ABEF	3	赤褐	40	No6
12	坏	(13.2)	3.6	6.2	ABEF	3	灰褐	70	41
13	坏	(13.9)	4.2	6.4	ABEF	3	赤褐	40	No1
14	坏	(12.6)	3.8	(6.2)	ABEF	3	褐	30	No7
15	坏	(12.3)	3.9	(5.5)	ABCDEF	2	灰褐	30	A
16	坏	(12.9)	3.7	6.5	ABEF	1	灰	40	No74
17	坏	(14.2)	5.0	(7.3)	ABDF	3	灰褐	20	A, B
18	坏	(13.5)	3.4	(5.9)	ABF	1	灰	30	No58, 59
19	坏	(13.5)	4.0	(6.0)	ACE	3	赤褐	20	No70
20	坏	12.1	3.8	6.0	ABEF	3	灰褐	70	No9
21	皿	(13.5)	2.3	6.2	ABF	1	灰	40	No10, 28

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
22	皿	(16.2)	2.9	8.2	ABCE F	2	灰	40	Na8, 13
23	皿	(17.1)	2.9	(7.4)	ABEF	3	赤褐	40	Na39
24	皿	(16.6)	2.8	7.1	ABEF	3	灰褐	40	Na37
25	皿	(13.0)	1.9	5.9	ABEF	3	橙褐	30	Na75
26	皿	(12.9)	2.5	6.9	ABEF	2	淡灰	40	Na44
27	皿	16.7	3.0	7.9	ABEF	3	褐	40	Na37
28	高台付坏	(13.7)	4.8	(7.1)	ABEF	3	赤褐	40	Na5
29	高台付坏	14.1	6.0	7.0	ABEF	3	褐	80	Na37, 43
30	高台付坏	(14.0)	6.3	7.5	ABEF	3	赤褐	40	Na40
31	高台付坏	(14.4)	6.3	(7.9)	ABEF	3	褐	40	Na57
32	高台付坏	13.8	5.8	7.4	ABCF	1	暗灰	80	Na43
33	高台付坏	13.2	5.7	8.3	ABEF	3	赤褐	90	Na42
34	高台付坏	(13.8)	5.6	7.2	ABEF	3	褐	50	Na37
35	高台付坏	13.7	6.1	7.2	ABEF	3	赤褐	100	Na69
36	高台付坏	14.4	5.8	7.1	ABEF	1	灰	80	Na8, 71, 72, 74
37	高台付坏	(14.2)	5.8	7.5	ABEF	3	赤褐	40	Na9
38	高台付坏	(17.8)	7.8	7.8	ABEF	3	褐	80	73

粘土採掘坑 b (第39図)

111-24グリッドに位置する。灰原を形成していた谷部の底面に検出した。北側に第5号窯跡が存在するが比高差は約3.65mである。標高は124.40mであった。

本遺構は上面に厚い灰原の堆積層に覆われていた。最上面が第5号窯跡の灰原層(灰原5)、その下層に検出した灰原面、灰原一面、灰原二面が存在した。さらに、砂利層を抜いた下からの確認であった。灰原5の検出面から約1.15mの堆積層の谷部最底面に当たる。粘土層は谷底の緑青色の粘性をもつ粘土で、礫や砂粒

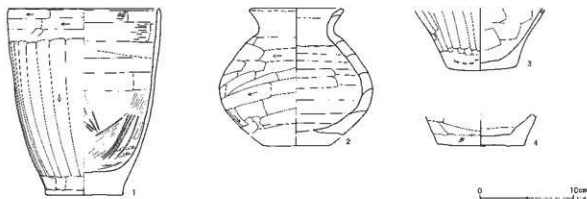
を含む。採掘量も少なかったと考えられる。

規模は、北側の全長が8.00m・最大幅1.80m・掘り込みの深さは谷部底面から0.25mであった。南側の全長が6.50m・最大幅1.70m・掘り込みの深さは谷部底面から0.15mであった。

主軸方向はN-60°-Wであった。ほぼ谷の方向に沿って造られていた。

出土遺物は北側の中央付近の上層内から土師器の小壺を検出した。南側の土壌列の先端には、土師器甕の底部と土師器鉢を検出した。

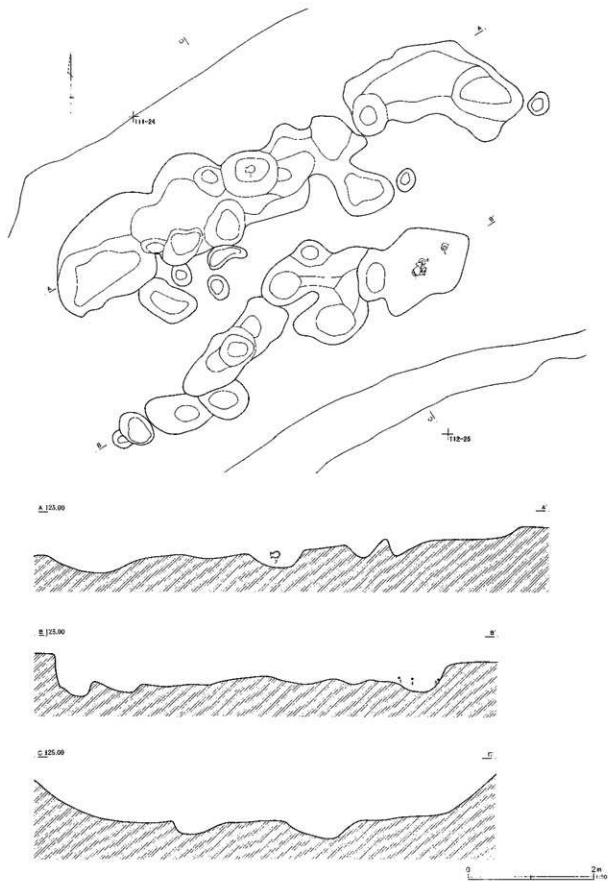
第38図 粘土採掘坑 b 出土遺物

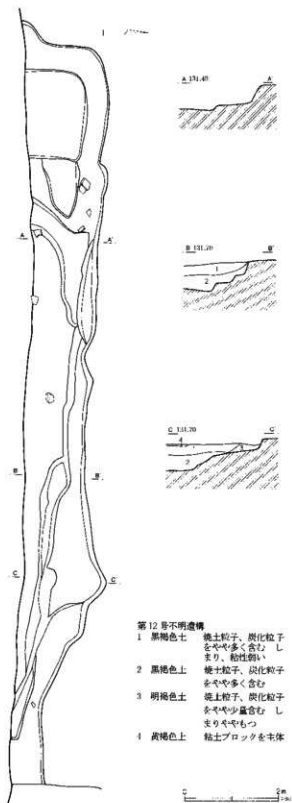


第16表 粘土採掘坑 b 出土遺物観察表 (第38図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器鉢	(15.9)	19.7	6.0	ABDF	3	黒褐	40	Na3
2	土師器壺	(9.4)	(13.2)		ABDF	2	灰褐	40	Na1
3	土師器甕	(6.6)	7.2		ABDF	2	黒	10	Na2
4	土師器甕	(3.2)	9.1		ABF	3	褐	10	Na4

第39圖 粘土採掘坑 b





5. 不明遺構と出土遺物

第12号不明遺構 (第40図)

85・86・87・88-24グリッドに位置する。本遺構は、住居跡の検出された台地上に存在する。東側は第7号住居跡と重複関係にあり、本遺構が新しい。標高は131.40mであった。

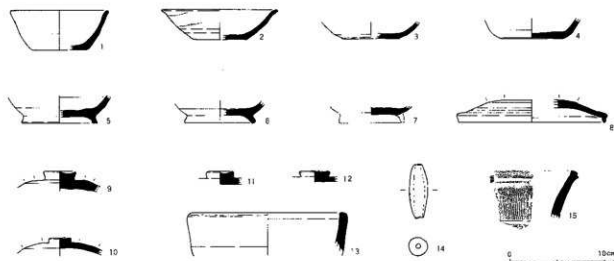
形態は、東西に長く南側が調査区外に伸びる。東西に細長い溝が伸び、西側で約1.8m外側を二重に巡る。また、北側は、掘り込みが階段状に段をもち中心に向けて深くなる。底面は比較的平坦である。南側が調査区域外であるため全体の形態や規模については不明である。規模は、全長16.08m+α・幅2.07m+α・掘り込みの深さ0.66mであった。

主軸方位は、N-84°-Wであった。

覆土は、黒褐色土で焼土粒子・炭化粒子を含み、しまりは弱かった。土器片も混在する。遺構の性格は不明である。

出土遺物は第41図に示した。須恵器の坏、高台付坏、鉢、甕を検出した。土鎌も出土した。1〜4は坏である。いずれも、底部外面は糸切り離し調整である。1は体部の立ち上がり強く、やや外傾に内湾気味に立ち上がる。口径は10.2cmと小ぶりである。2は体部の立ち上がり外方に内湾気味に立ち上がり器高3.2cmとやや浅く、推定口径12.2cm、底径5.5cmである。4は坏の破片であるが推定底径6.5cmとやや大きい。5〜7は高台付坏の破片である。いずれも、底部糸切り離しの後、「ハ」の字状に高台を貼り付けている。高台の端部は凹む。8〜12は巻である。いずれも、扁平の宝珠つまみが天井部に貼り付く。13は鉢とした。全体の器形は不明であるが器肉やや厚く、口唇部は上方に面をもちわずかに内湾気味に立ち上がっている。推定口径15.6cmである。15は甕の口縁部破片である。口縁部外面には刷毛状の工具による条線が縦方向に施文され、その後、条線を切って横方向に沈線区画を施す。小破片であるため区画の本数は不明である。幅0.6cmほどの口唇部外面には、櫛歯きの波状文様が施されている。14は土鎌である。

第41図 第12号不明遺構出土遺物



第17表 第12号不明遺構出土遺物観察表 (第41図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(10.2)	4.2	(5.8)	AB	2	灰褐	20	88-24
2	環	(12.2)	3.2	(5.5)	ACE	1	青灰	20	88-24
3	環		(1.8)	(6.0)	AC	1	青灰	10	88-24
4	環		(2.2)	6.5	BCDEF	2	褐	10	88-24
5	高台付環		(2.9)	(8.0)	ABE	1	淡灰	20	88-24
6	高台付環		(2.4)	(7.1)	BCE	1	灰	5	85-24
7	高台付環				BCE	2	淡灰	5	85-24
8	蓋	(15.4)	(2.4)		ABC	2	暗灰	10	86-24
9	蓋		(2.1)		ABC	1	灰褐	20	88-24
10	蓋		(1.9)		ABC	2	青灰	20	88-24
11	蓋		(1.4)		BCE	2	灰	10	85-24
12	蓋		(1.1)		BCE	2	灰	10	85-24
13	鉢	(15.6)	(4.5)		CE	2	灰	5	85-24
14	土鏃	残存長5.7、幅1.9、孔径0.5cm、重量18.03g						85-24	
15	甕				ABCG	1	灰褐	5	86-24

第13号不明遺構 (第42図)

110-23グリッドに位置する。第5号窯跡と粘土採掘坑aが存在する南側斜面部の一段低い位置にあたる。本遺構は第5号窯跡の灰原5に一部覆われていた。標高は最も高い位置で127.40m、掘り込みの低い位置で125.00mであった。

形態は、南北方向に掘り込まれ、窯跡状の長方形であった。底面は北側の頂部から1.45mまでの位置は約35度の傾斜をもち、中間に平坦な面を1.15m、さらに、南に向けて1.45mほどが約30度の傾斜面をもって掘り込まれていた。

規模は、全長4.05m・最大幅は上面で2.49m、中央

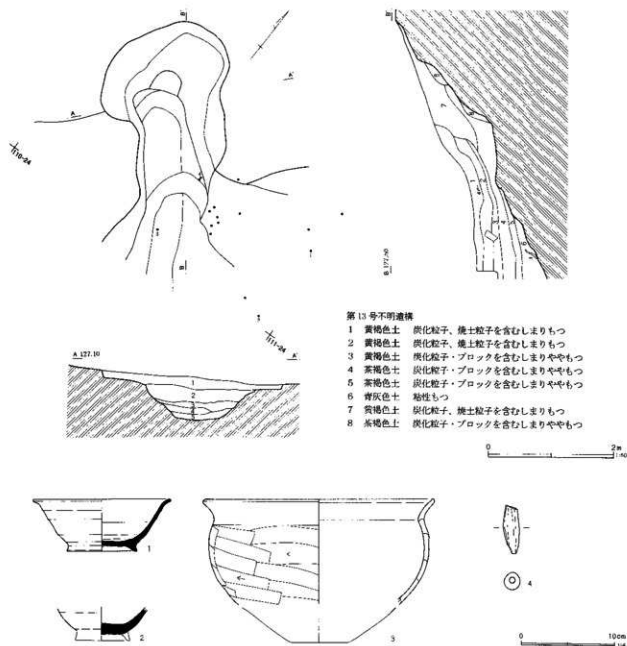
付近の幅1.10m、掘り込みの深さ0.66mであった。

主軸方位は、N-84°-Wであった。

上層は、自然堆積であった。第4・5・8層は茶褐色土層で炭化粒子・炭化ブロックを含む。第6層は青灰色の粘土層である。また、上層の第1～3層は炭化粒子、焼土粒子を含んだ黄褐色土層である。谷部の二次的な自然堆積層と考えられる。

出土遺物は第6層中より土師器の鉢を検出した。口縁部から胴部中位にかけての破片である。底部は欠損しており不明であるが平底と考えられる。推定口径24.2cmである。器肉薄く胴部外面は横方向のヘラケズリを施す。8世紀代によく見られる器種である。本遺

第42図 第13号不明遺構・出土遺物



第18表 第13号不明遺構出土遺物観察表 (第42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付坏	(14.6)	5.5	7.5	ABC	1	灰	50	Na16
2	高台付坏	(2.9)		(5.5)	ABDG	2	灰	20	Na13
3	土師器鉢	(24.2)	(11.0)		BEFGH	2	褐	20	Na12
4	土師	残存長4.9、幅1.7、孔径0.6cm、重量12.28g							Na11

構の性格は不明であるが、灰原5層よりも低い位置で掘り込まれており、平安時代以前の遺構と断定できる。

また、谷部を覆っていた灰原・灰原一面・灰原二面

の堆積層に覆われていたことから、同時期もしくはそれ以前と考えられる。掘り込みのレベル位置や、掘り込み形態から造りかけの窯跡の可能性が考えられる。

6. 東側灰原跡と出土遺物

(1) 第5号窯跡の灰原(灰原5)

東側灰原跡とした地点は「末野遺跡1」の第1～3号窯跡の灰原を西側灰原跡と呼称したこれに対応して本調査区の灰原跡を東灰原跡とする。調査区内で検出された灰原は、クランク状に北側から南側に伸びた谷部に形成されていた。調査区東側では、谷地形が北側に伸び、調査区中央では東西方向に伸びる。また、調査区西側では、南側に伸びる。

谷部の規模は、東西の距離が45m、南北の幅が約10mである。傾斜方向は、北から南に向けて勾配をもち、谷底のレベルは、北側で126.00m、南側で124.00mを測り、45mの距離で約2mの比高差をもつことになる。

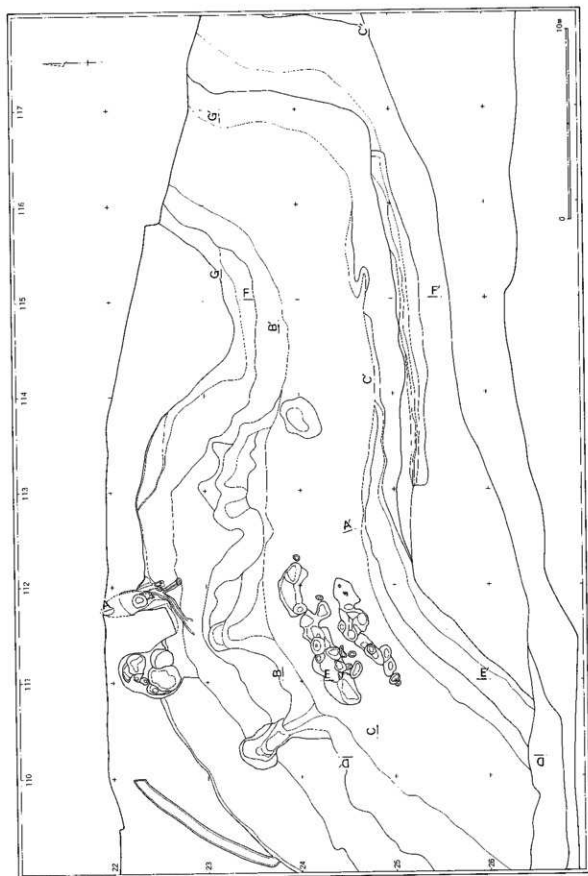
灰原の様相は、第5号窯跡が構築された丘陵の南側に深い谷が存在しここに第5号窯の灰原が存在する。さらにその下部層は、谷全体に厚く灰原が形成されていた。調査区のほぼ8割は谷部に堆積していた灰原であった。

調査は谷部を覆っていた灰原部分にグリッドを設定した。グリッドは5m間隔に西から東に番号を付し、さらに、北から南に付した。5mメッシュの大グリッドの中をさらに1mメッシュの小グリッドを設定した(例110-23-01)。出土した遺物はこの小グリッドの範囲で平面的な帰属をもつ。さらに、重層的に掘り下げた。層位をつかむためにまず、灰原のやや南側寄りに幅1mの南北トレンチを110-24-12～116-24-15に入れた。その結果、灰原は、灰原5(4層)、灰原(6層)、灰原一面(8層)、灰原二面(9層)の4層の堆積層を確認した。これら4層は地点によって堆積の厚さやレベルが異なっており一律的な面を必ずしももっていないことが判断された。東西トレンチは110-24-12～110-26-07に入れた。南に向かうに従って層位は凹凸状に起伏が大きく安定性に欠ける。この1本のトレンチを中心とし、加えて、第5号窯跡から延長線上にA-A'、24グリッドラインに沿ってB-B'、東西トレンチの南壁側にC-C'、南北トレンチの西壁側にD-D'、さらに東側に2本の南北トレンチを入れた。110グ

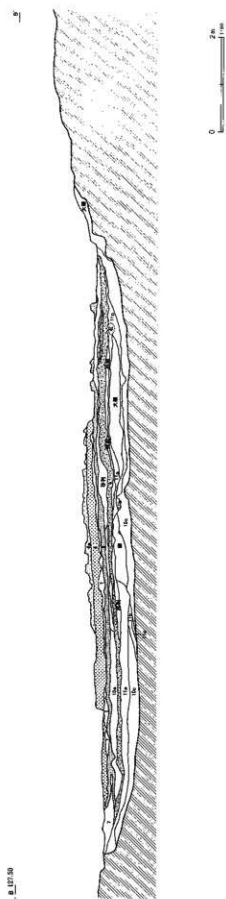
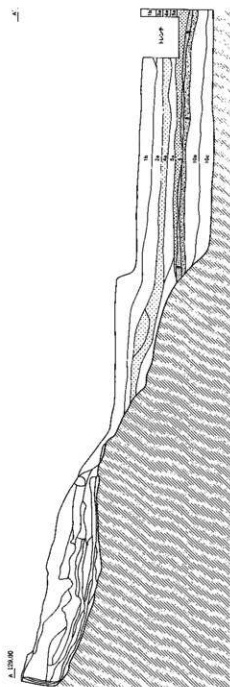
リッドラインにE-E'、115グリッドラインにF-F'、そして、調査区の北端の谷部の位置でG-G'を設定した。各地点の層序はおおむね様相を同じくしている。ただし、G-G'の断面はその堆積層が非常に厚く、谷の上流域にはより窯場に近接していると考えられる。

断面観察によると、基本的な堆積層は、第1層(1a・1b・1c・1d)が表土掘削後の確認面である。黒褐色土層で微粒(1～5mm)の黄色凝灰岩粒子を多量に含み、緑泥片岩粒子、炭化粒子、焼土粒子を混入する。遺物はほとんど検出されない。第2層は緑灰色礫層で片岩の破片が主体に堆積している。第3層は黒色粘土層である。片岩粒子、炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。第4層は大きく4a層と4b層に分かれる。4a層は黒色粘土層で平安時代の第5号窯跡の灰原層である。4b層は窯の検出はないが、C-C'-C''の断面観察によると4a層よりも上層に4b層が堆積していることが理解される。出土遺物は灰原跡の灰原面として区別して取り扱い、第205～207図に環、皿、高台付環は掲載した。また、この4b層からは4a層には検出されていない瓦塔などが含まれており明らかに4a層とは異なり連続性のない土層と判断できる。第5号窯跡の灰原とはほぼ同時期もしくはやや後出的な遺物を混在させる灰原層である。第5層は暗オリーブ灰粘土層で片岩粒子を多く含む。また、炭化物粒子を多く含み、焼土粒も混在させ出土遺物は少ない。第5層の下層には谷部の灰原跡を覆う灰層が3面確認された上層を灰原、中層を灰原一面、下層を灰原二面と呼称した。層位は灰原が第6層、一面が第8層、二面は9層に対応する。第6層と第8層の間には第7層の緑灰色砂層が存在し、砂利と緑泥片岩を含む層である。第8層と第9層は接している部分が多くの地点によって第10a層が間層として存在する。二面の下層は砂利を主体とした第10層が厚く堆積する。この砂利に若干の遺物が混在する。谷部南西の下流D-D'では、第10層の下層に暗褐色の堆積上が認められた。谷部北東の上

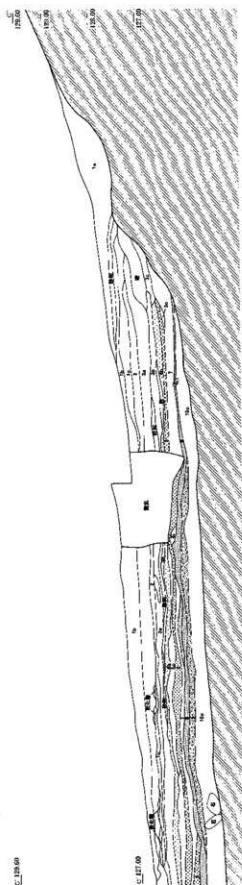
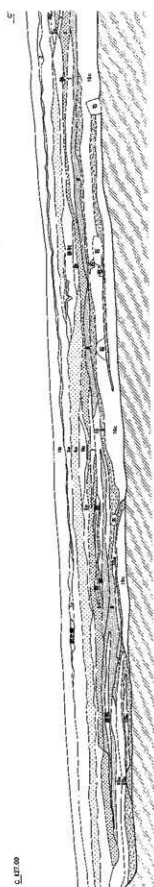
第43図 灰原跡全体図



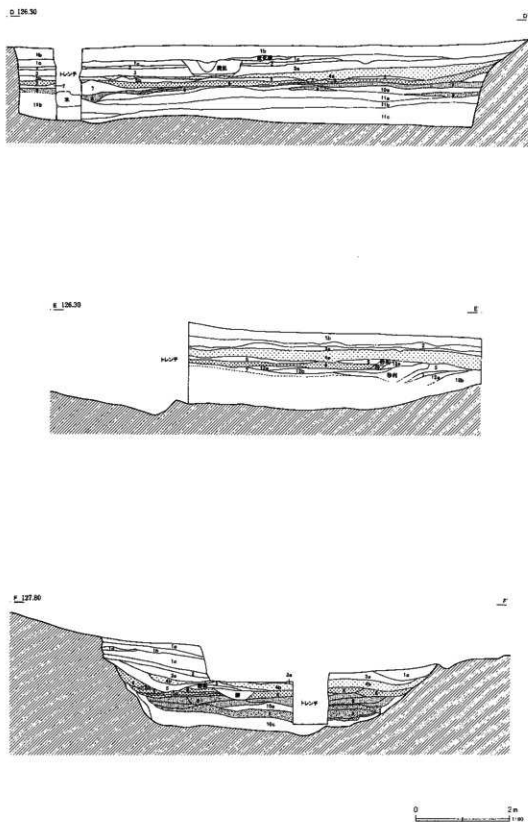
第44図 灰原跡断面図(1)



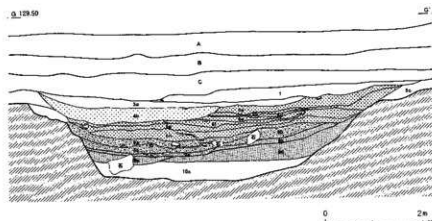
第45図 灰原跡断面図(2)



第46図 灰原跡断面図(3)



第47図 灰原跡断面図(4)



東側灰原 (A-A' ~ F-F')

- 1a 暗褐色土 10YR3/4 粘質土 含有物 1b 層に準拠 色顯明い
1b 黒褐色土 10YR2/3 凝灰物による酸化鉄分、黄緑灰岩 (極端 ~ 5mm) 多量に含む 緑泥片岩粒 (径 5mm) 微量に含む 炭化粒子 (径 2mm) 微量を含む
1c 黒色土 7.5YR3/1 粘質土 土質は 3a 層に準拠 緑泥片岩粒子 がやや多い
1d 黄褐色土 小礫を主体
2 緑灰色土 礫層 片岩片、片岩破砕粒子が主体 褐色細粒混入 炭化物粒子 (径 2mm) 極微量含む
3a 黒色土 7.5YR2/1 粘質土 片岩粒子 (径 1~3mm) 微量に含む 炭化物粒子 (径 3mm) 少量含む 焼土粒子 (径 2~4mm) 微量に散在 土質ほぼ均一粘性强い
4a 黒色土 7.5Y1.7/1 灰層 片岩片、片岩片粒子をやや多く含む 炭化物粒 (径 2~7mm) ややや多量に含む 焼土粒子 (径 2~4mm) 少量含む 土質やや不均一 土器を多く含む
4b 黒色土 7.5Y1.7/1 片岩片やや多い 他、4a 層に準拠
5a 暗オリーブ灰色土 2.5YR3/1 粘質土 粘土自体は 4 層に近い 片岩破砕粒子を含む 色顯明い 炭化物粒子 (径 5~10mm) を多量に含む 焼土粒子 (径 2~4mm) 少量含む
5b 暗オリーブ灰色土 2.5YR3/1 粘質土 片岩粒子多い
6 黒色土 灰層 炭化粒子 (径 1~5mm)、焼土粒子 (径 1~2mm) を含む土器を多く含む
6b 黒灰色土 6 層に比べて礫をやや多く含む 粘土を混入
7 緑灰色土 砂利層 緑泥片岩粒を含む
8 黒色土 灰層 炭化粒子、灰を主体 土器を多く含む
9 黒灰色土 灰層 炭化粒子、灰を主体 土器を多く含む
10a 黒灰色土 砂利層 砂粒、砂利、礫を含む
10b 青灰色土 水性粘土層 炭化物粒子を含む しまり、粘性もつ
11a 暗褐色土 炭化粒子を含む しまり強い
11b 暗褐色土 や茶褐色に近く明るい
11c 暗褐色土 10a 層に近似 しまりややもつ
12a 灰色土 粘土層 炭化物粒子を含む 青灰色粘土ブロックを混入 8 層に比べてやや強い しまり、粘性もつ

東側灰原 (G-G')

- A 褐色土 耕作土
B 黄褐色土 片岩粒子、石英粒を含む しまりもつ
C 灰褐色土 焼土粒子、炭化粒子を混入 しまり強い
1 黒灰色土 炭化粒子を多量に含む 白色片岩粒子 (径 0.5~1mm) 多く含む
3a 黒灰色土 炭化物粒子、焼土粒子を多量に含む しまりもつ
4b 黒灰色土 炭化粒子を多く含む 片岩粒子を含む 硬質土器片を多く含む しまりもつ
6a 黒灰色土 炭化粒子、片岩粒子を含む 土器片多く含む 粘性なし しまりややもつ
6b 黒褐色土 炭化粒子を含む 粘性やや持つ しまり強い
6d 褐色土 砂質土層
6e 黒褐色土 炭化物粒子を含む 粘性ややもつ しまり強い
6f 青褐色土 礫、片岩粒、片岩を主体
6g 黒色土 炭化粒子、灰を含む 土器を混入
6h 黒褐色土 礫、片岩、砂利を主体 土器を多く含む
8a 黒色土 炭化粒子、灰を主体 土器を多く含む
8b 青白色土 礫、片岩、砂利を主体 土器を多く含む
9a 黒灰色土 炭化粒子、灰を主体 土器を多量に含む
9b 黒灰色土 礫を含み 土器を多く含む
9c 黒褐色土 炭化粒子を含む 褐色土を混入
9d 黒灰色土 砂利、炭化粒子、片岩を含む
10c 青灰色土 礫、片岩を主体とした砂利層

流 G-G' では、遺物を含む包含層が厚く堆積していた。平安時代の遺物を主体とする層は第 4 a 層である。灰原層とした 6 層はかなり厚くこの地点では 6 a 層 ~ 6 h 層にまで分層してきた。この中で、6 a 層 ~ 6 d 層からは奈良・平安時代の遺物が混在して出土する。さらに、6 f 層 ~ 6 g 層からは大甕の破片が多く出土した。一面に対応すると判断される 8 a・8 b 層は上

層の 6 層と下層の 9 層とに接している。大礫も多く混在し礫により堆積層に流転した影響がみられ層序の混同が認められる地点も存在する。二面に対応すると判断される 9 a 層 ~ 9 d 層である。本上層は砂利が多く混在し大礫も含まれる。第 10 層は砂利を主体とした層である。本土層中にも土器片が若干混在している。

灰原 5 は第 5 号窯跡の灰原である。第 5 号窯は南向

き斜面に造られその炭化物、焼土粒、灰および焼き損じた須恵器を南側谷部に廃棄した。この層を灰原5と呼称した。灰原5の広がりには第71図に示したとおり第5号窯跡の南側である。窯尻より南西方向に展開することは明らかであるが、北東部分にまで及ぶことは窯の東側に位置する平場との関係によるものと判断される。平場で窯から取り出した須恵器を分別し、焼き損じた不良品を谷部に廃棄すると想定される。こうした作業工程から平場南側までが灰原5の分布範囲であると考えられる。このことから、灰原5の範囲は北東側が、南北グリッド114ラインを境とし、南側は谷筋全体、南西側は稀薄になりつつも南北グリッド109ラインまで広がりをもち、

灰原5は、第5号窯跡から灰原に至る断面観察(A-A')によると1a層は第5号窯跡の上層に堆積していた覆土と近似し、対応関係にあるものと考えられる。3a層はその下層でさらに第5号窯跡の灰層は4a層に対応する。この4a層が灰原5としたものである。

灰原5から出土した遺物は総破片数と総重量を計量した。坏36、547片・358,707g、皿2,148片・43,322g、蓋442片・8,268g、高台付坏5,193片・137,366g、高台付皿10片・561g、高台付碗3片・65g、壺370片・15,426g、瓦5片・1,379g、鉢46片・2,252gであった。計量にあたっては、体部破片が坏、皿と高台付坏の区別が不明瞭であるためいずれも坏に分類し計量を試みた。このため坏の数値が圧倒的に多くなってしまった。

いずれにせよ、第5号窯跡の灰原から出土した器種構成としては、坏、皿、高台付坏の比率が破片数で98%、重量で96%を占めた。破片、重量いずれの計量数値においても同じ様な結果が得られた。第5号窯跡での焼成器種は坏、皿、高台付坏といった日常雑器が主体で、極少量蓋、鉢を焼成したものと判断された。廃棄の状態は第48・49・50図に示した出土分布図で見られるように111-23・112-23グリッドが圧倒的に多く出土し、111-24・112-22・112-24・113-24がやや多く出土した。

灰原5の主体的な広がりは第5号窯跡・平場跡が形成された部分で弓状に成形された地形に面した部分で南北約10m、東西15mの範囲である。

a 坏・皿・高台付坏

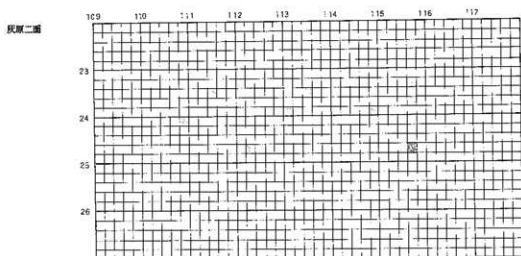
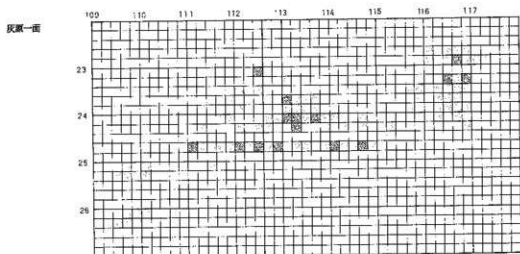
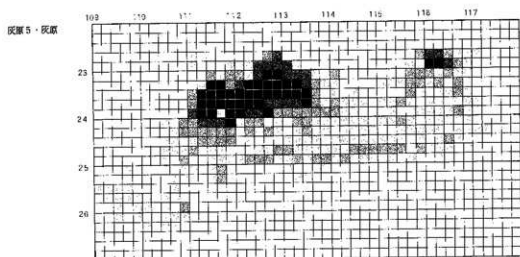
灰原5出土遺物は、第51～62図に示した。実測した個体は坏96個、皿109個、高台付坏91個である。出土遺物は、器種ごとに形態的特徴を観察し分類した。分類にあたっては、坏が1,027点、皿557点、高台付坏1,107点を対象とした。

この中でまず、坏1,027点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。Aは円柱が糸切り離しの際に台状に残るタイプで149点(第51図1～20)、Bは底部糸切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで352点(第51図21～第52図48)、Cは底部糸切り離した後、体部が直線的に立ち上がるタイプで152点(第53図49～60)、Dは底部の糸切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで303点(第53図61～第54図88)、Eは底部と体部との境が弱く体部が丸みをもって立ち上がるタイプで71点(第54図89～96)であった。坏の口径は最小9.8cm、最大15.6cmであった。最大のピッチは12.6～12.8cmであり、前後11.2～14.4cmである。底径は最小4.0cm、最大8.4cmであった。最大のピッチは6.2cmであり、前後5.2～7.0cmである。

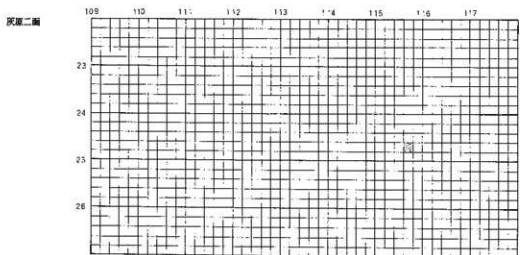
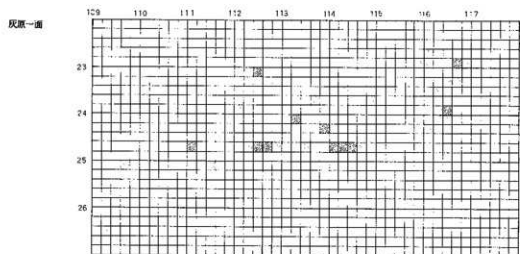
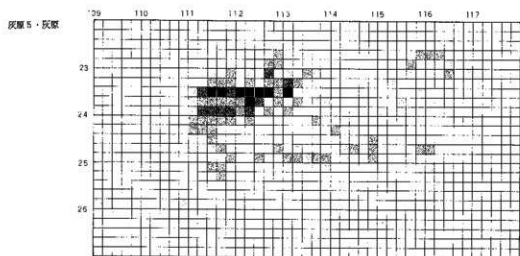
法量的には、第51図1・2は、標準の大きさである。第51図4・22は、器高が5.0cmを越え深みがある。さらに、第51図5・24は3.2、3.3cmと器高が浅い。形態は、いずれも、底部から体部の立ち上がりは緩やかな湾曲をもち、内湾気味に外傾に立つ。口径部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプと、第52図の26にみられるような直線的に立ち上がりほぼ同じ器肉をややもすると器内の薄いタイプが存在する。この違いは、口径端部の調整を指て内外面押正する際に外面を押さえ込む手法の違いによるものと判断できる。

皿557点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。基本的な分類基準は坏と同様である。

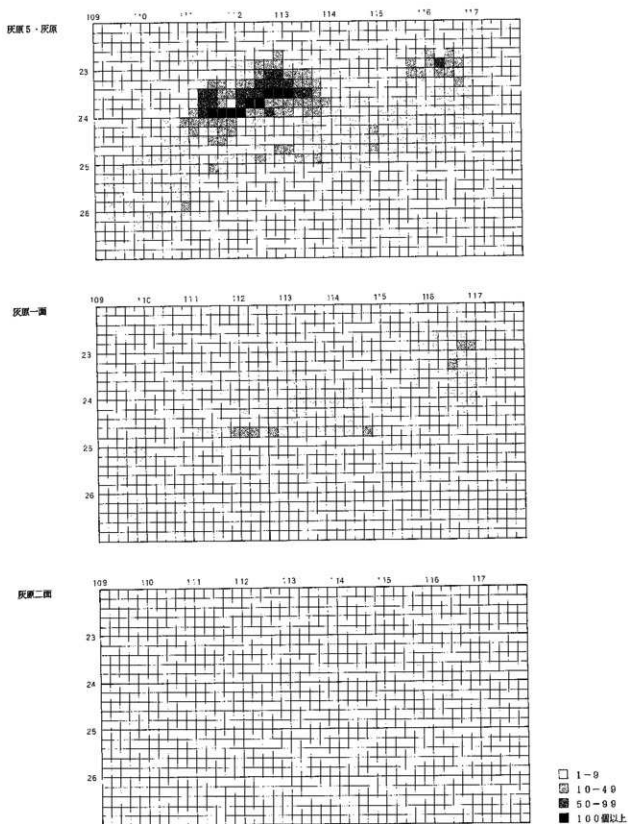
第48図 灰原5 环（底部）出土分布图



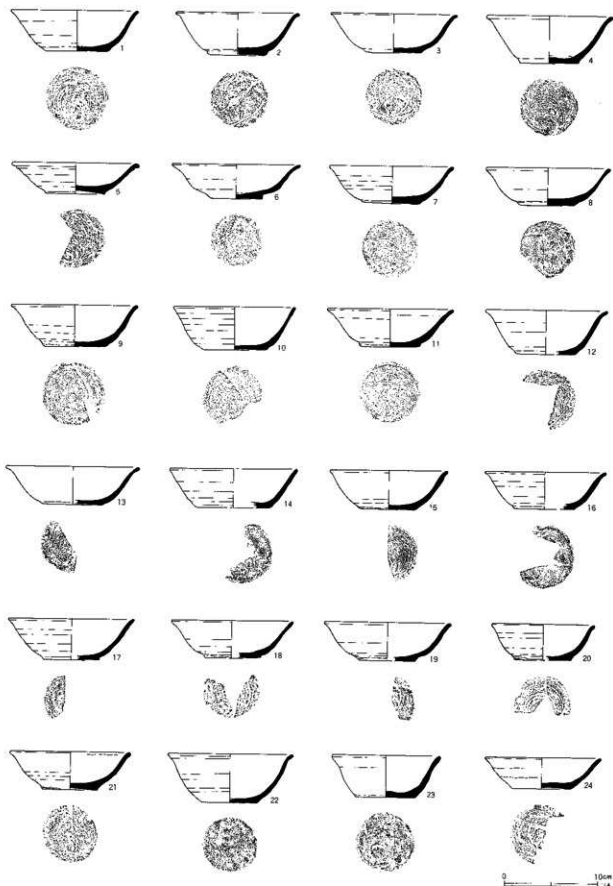
第49図 灰原5皿（底部）出土分布図



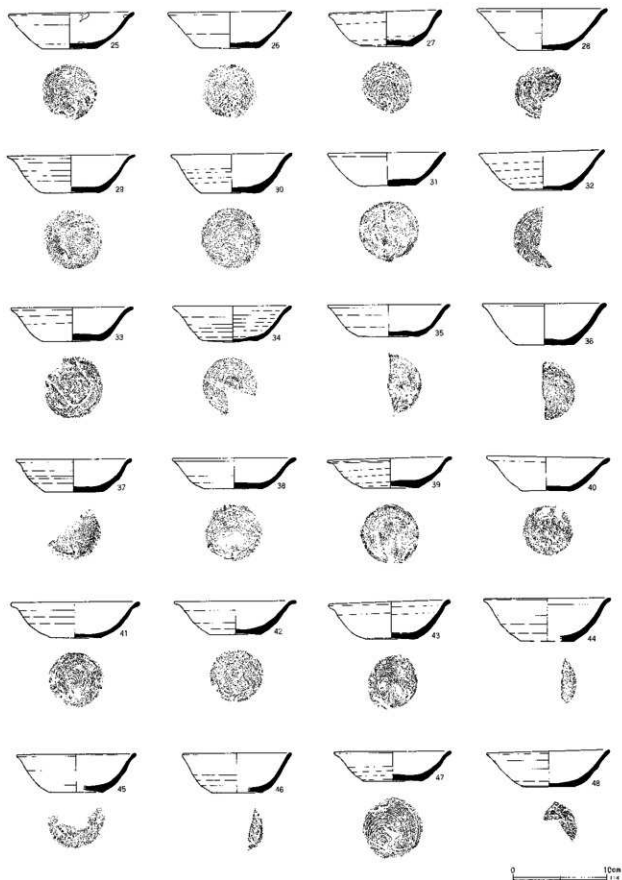
第50図 灰原5 高台付環（底部）出土分布図



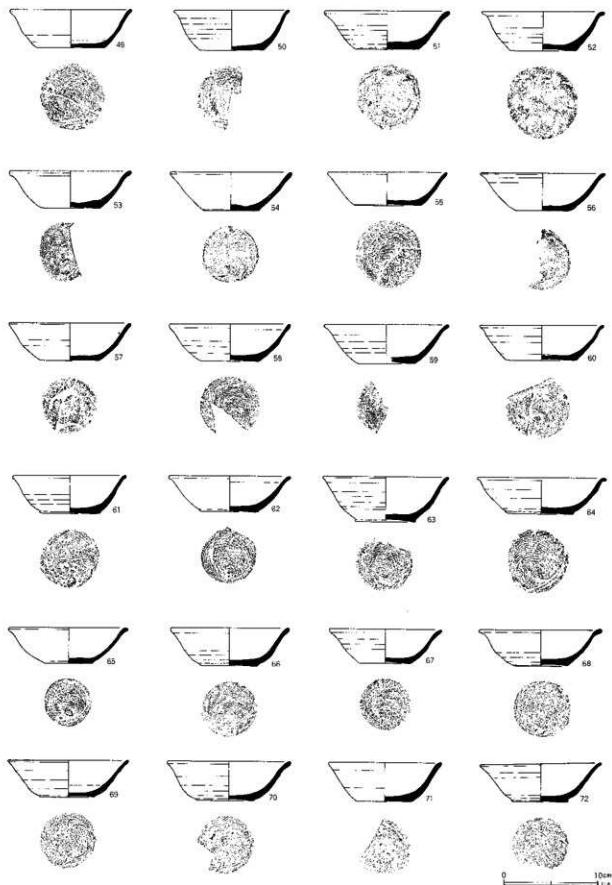
第51図 灰原5出土遺物(1)



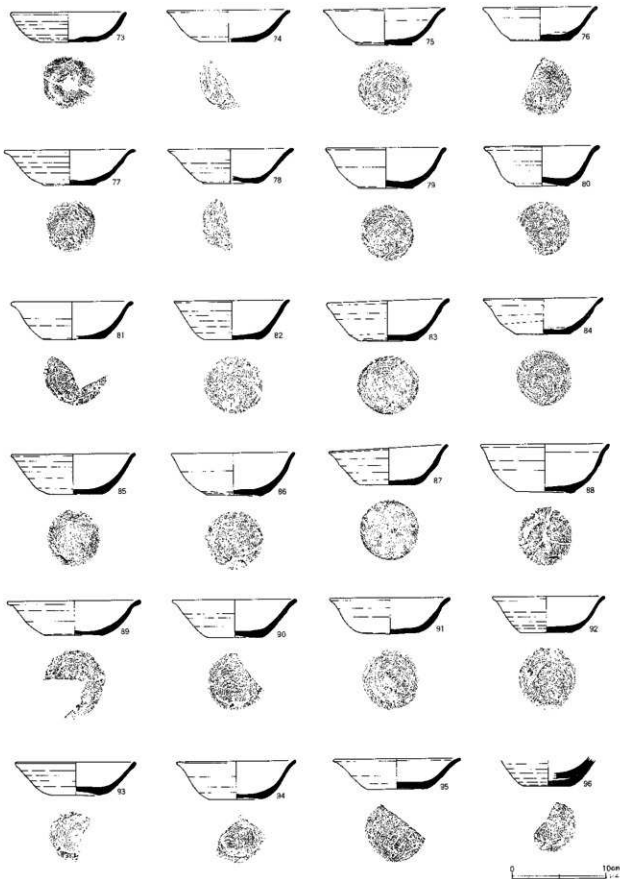
第52図 灰原5出土遺物(2)



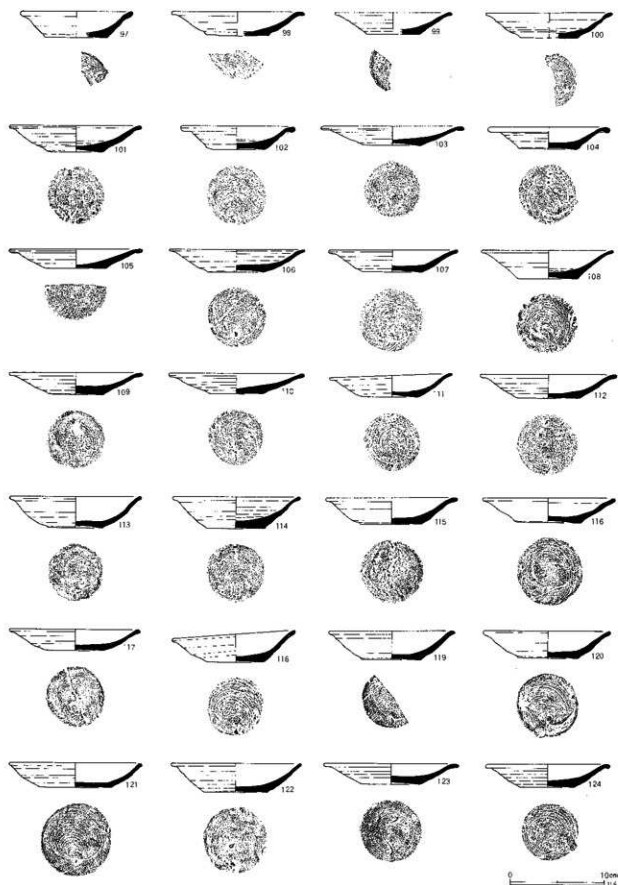
第53図 灰原5出土遺物(3)



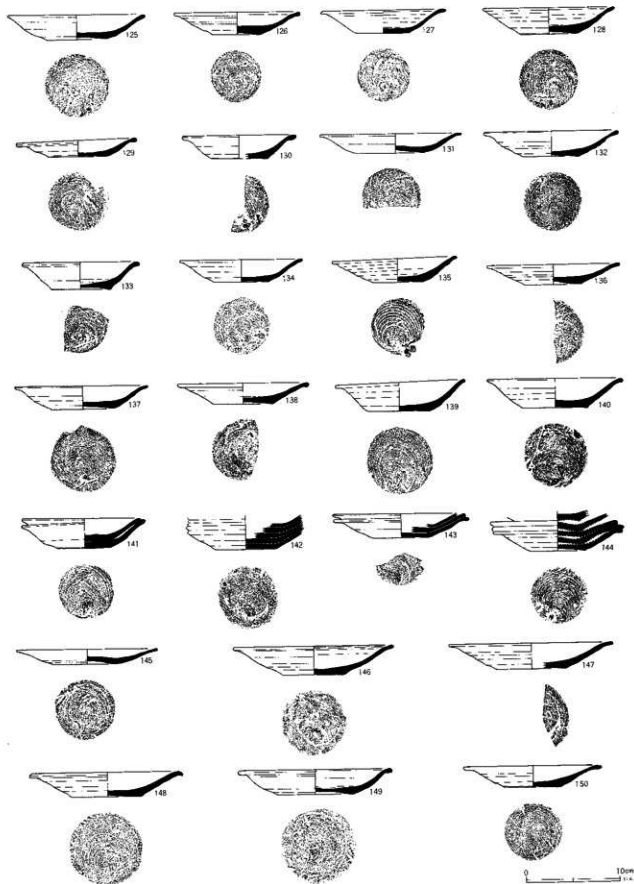
第54図 灰原5出土遺物(4)



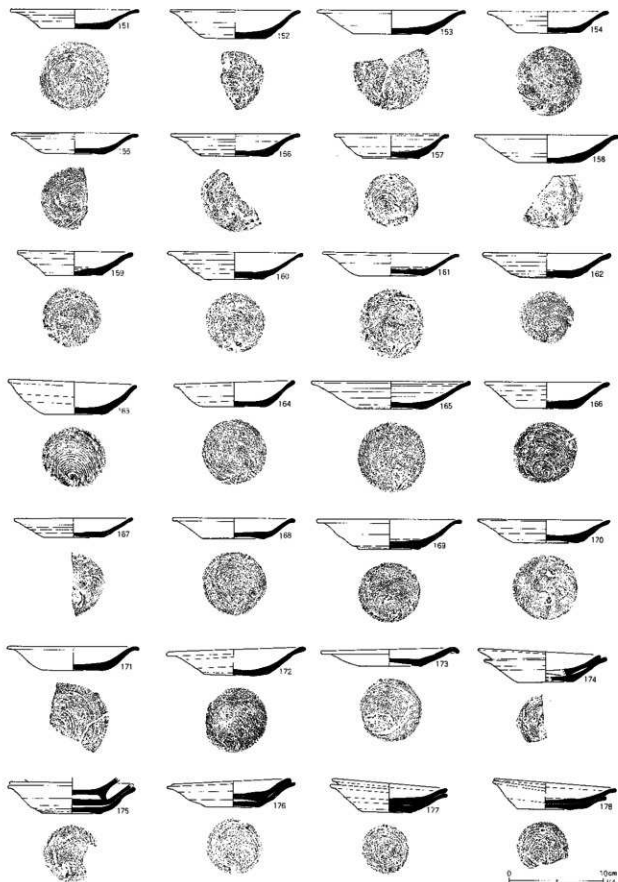
第55図 灰原5出土遺物(5)



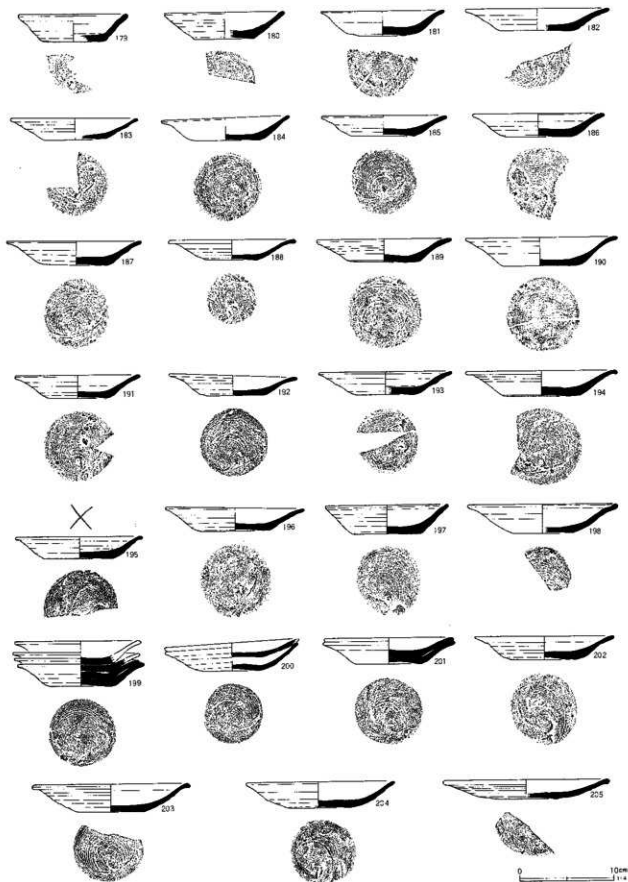
第56図 灰原5出土遺物(6)



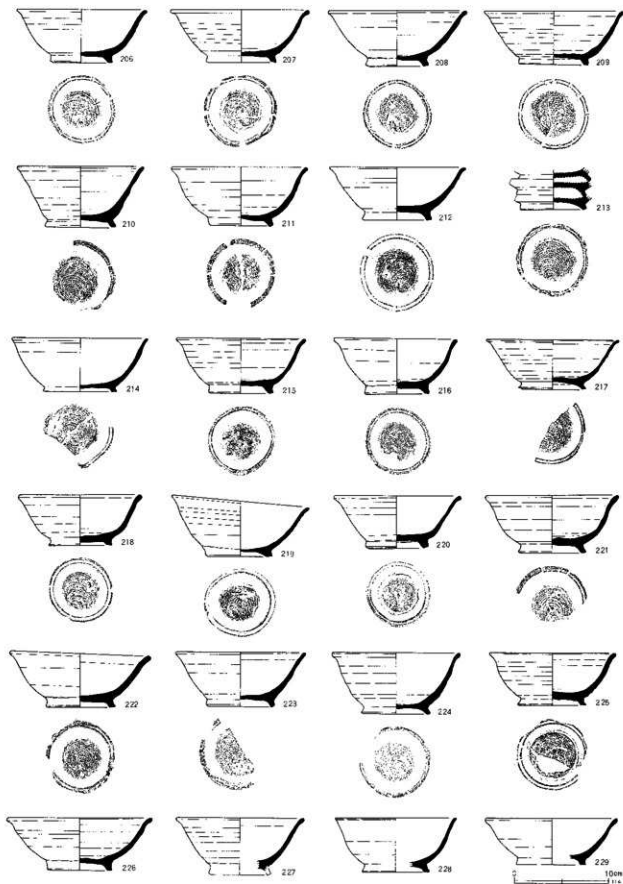
第57図 灰原5出土遺物(7)



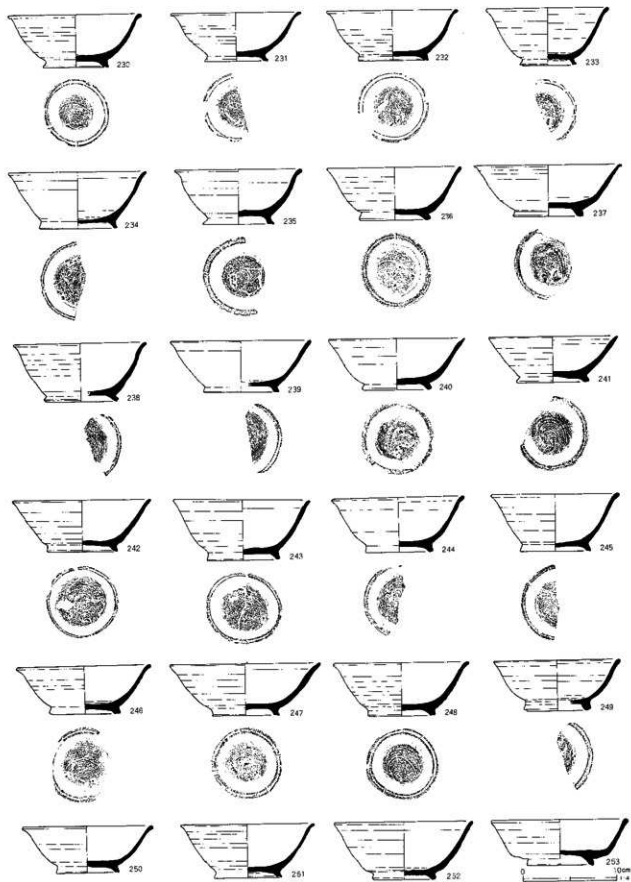
第58图 灰原5出土遺物(8)



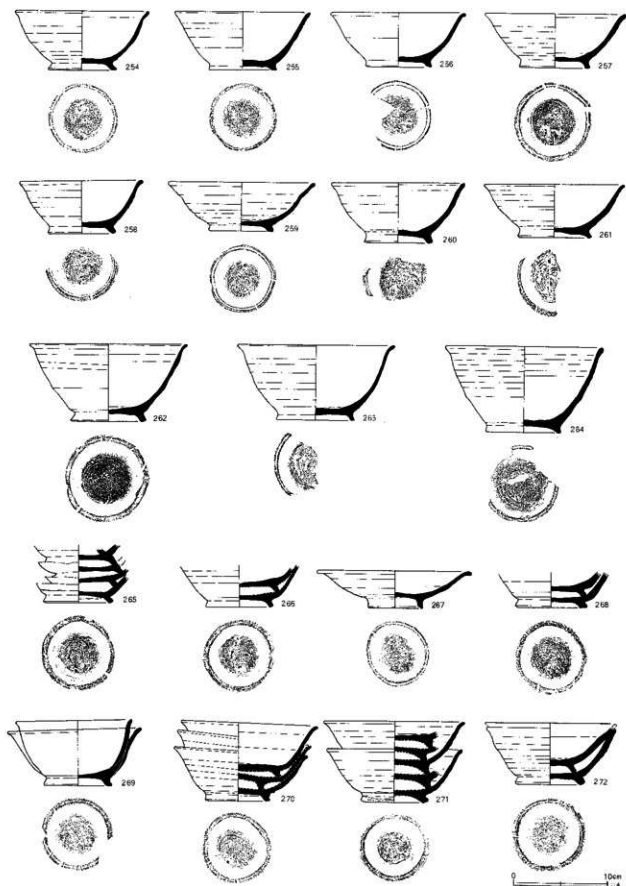
第59図 灰原 5 出土遺物(9)



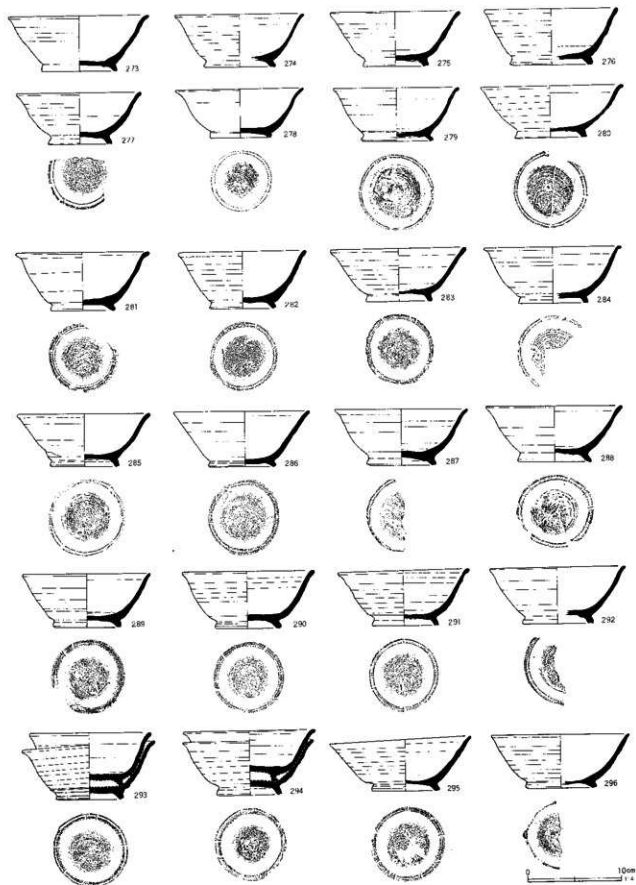
第60図 灰原5出土遺物(10)



第61図 灰原5出土遺物(1)



第62図 灰原5出土遺物(2)



第19表 灰原5出土遺物觀察表 (第51~62回)

番号	器種	口徑	器高	底徑	胎土	焼成	色調	残存率	備 考
1	坏	13.7	4.2	6.6	ABEF	3	褐	100	111-23-13
2	坏	(13.1)	4.5	6.3	ABEF	2	灰	40	111-23-15, No2874, 2880
3	坏	(13.2)	4.1	5.9	ABEF	1	青灰	40	111-23-18
4	坏	(13.4)	5.0	6.1	ABEF	2	灰褐	40	111-23-15, No2872
5	坏	(13.5)	3.2	6.3	ABEF	1	青灰	40	111-23-24
6	坏	13.6	3.7	5.7	ABEF	3	橙褐	50	112-23-7
7	坏	(13.2)	3.9	6.2	ABCF	1	青灰	60	112-23-5, No3721
8	坏	(13.2)	3.8	5.8	ABEF	1	青灰	50	112-23-4, No1204 内面降灰 窓壁一部付着
9	坏	13.4	4.3	6.6	ABEF	2	灰	95	112-23-6
10	坏	(13.0)	4.5	6.4	ABEFG	1	灰	40	112-23-10
11	坏	13.6	4.0	6.3	ABEF	1	青灰	70	112-23-11
12	坏	(13.0)	4.6	6.2	ABF	1	青灰	50	111-23-15
13	坏	(13.4)	4.1	(6.2)	ABEF	1	青灰	30	112-23-7
14	坏	(13.6)	4.0	(6.0)	ABEF	1	青灰	40	112-23-16, No3524
15	坏	(12.6)	4.0	(5.6)	ABEF	1	青灰	30	112-23-18
16	坏	13.0	3.8	6.4	ABEF	1	青灰	50	112-23-12, No3508
17	坏	(12.7)	4.2	7.3	ABF	1	青灰	20	112-23-12
18	坏	13.0	3.9	5.7	ABFG	1	青灰	80	112-23-9, No3434
19	坏	(13.6)	4.0	(6.0)	ABF	1	青灰	20	112-23-6
20	坏	(11.0)	3.8	6.2	ABF	1	灰	30	112-23-17
21	坏	12.6	4.0	6.0	ABCF	1	青灰	40	111-23-15, No2579
22	坏	13.4	5.1	5.8	ABCE	3	赤褐	80	112-22-24
23	坏	(11.4)	4.4	6.2	ABEF	1	青灰	40	111-23-17
24	坏	12.2	3.3	6.1	ABCF	1	暗灰	60	111-23-13
25	坏	12.6	3.7	5.8	ABEF	1	青灰	80	111-23-24
26	坏	(13.2)	3.8	6.0	ABEF	2	乳白	40	111-23-3
27	坏	(11.9)	3.7	5.3	ABF	1	青灰	80	111-23-15
28	坏	(13.7)	4.3	5.4	ABEF	3	淡灰	40	111-23-15, No4
29	坏	13.6	3.9	6.2	ABCF	1	橙褐	50	112-23-5
30	坏	13.0	4.1	6.4	ABF	1	青灰	80	112-23-11
31	坏	12.7	3.5	6.0	ABEF	1	淡青灰	95	112-23-4
32	坏	13.5	4.1	6.1	ABEFG	3	赤褐	40	112-23-6, No3164
33	坏	13.0	3.5	6.3	ABEF	1	灰	50	112-23-12, No3418
34	坏	12.8	3.8	5.7	ABF	1	灰	60	112-23-11
35	坏	13.0	3.3	6.6	ABDEF	3	褐	30	112-23-7
36	坏	(13.2)	4.3	6.2	ABEF	2	赤褐	30	112-23-13
37	坏	(12.4)	3.4	(6.0)	ABF	1	青灰	30	112-23-12
38	坏	13.2	3.2	5.8	ABF	1	灰	80	112-23-6
39	坏	13.2	3.2	6.0	ABEF	1	青灰	90	112-23-11
40	坏	(13.6)	3.4	5.4	ABCEG	3	褐	50	113-23-9, No3904
41	坏	(13.6)	3.7	5.8	ABCEG	3	赤褐	50	113-23-4, No3899
42	坏	(13.1)	3.5	5.5	ABCEF	1	暗灰	60	112-23-8, No3343
43	坏	(13.1)	4.0	5.4	ABCEG	3	赤褐	80	113-23-4, No3899
44	坏	13.6	4.5	5.8	ABEF	1	灰	20	112-23-12
45	坏	(13.2)	3.8	(5.8)	ABEF	1	青灰	40	112-23-12
46	坏	(11.8)	4.1	(5.8)	ABF	1	青灰	30	112-23-12
47	坏	12.3	3.2	6.3	ABCF	1	青灰	90	111-25-9
48	坏	13.0	3.7	5.6	ABEF	1	青灰	90	112-23-12
49	坏	(13.0)	4.0	7.1	ABEF	3	褐	60	111-23-12
50	坏	(12.4)	4.2	(6.8)	ABEF	1	灰	40	112-23-11
51	坏	13.6	3.8	6.7	ABEF	2	淡灰	60	112-23-5
52	坏	(13.0)	4.1	7.0	ABEF	3	灰褐	50	112-23-5
53	坏	(13.0)	3.9	6.2	ABEF	1	青灰	40	111-23-15, No2810
54	坏	13.0	4.0	6.0	ABFG	1	青灰	50	112-23-7
55	坏	12.7	3.5	7.2	ABEF	3	褐	70	111-23-12

番号	器種	口径	器高	口径	船上	焼成	色調	残存率	備考
56	坏	(13.4)	3.9	5.8	ABEF	2	灰白	50	112-23-3, Na1100
57	坏	(13.0)	3.9	6.2	ABEF	3	灰褐	50	112-23-9
58	坏	(12.8)	3.9	6.1	ABF	1	青灰	70	111-23-19
59	坏	(13.4)	4.1	(6.2)	ABEF	1	灰	30	112-23-13
60	坏	(13.2)	3.7	6.6	ABEF	3	淡白灰	50	112-23-7
61	坏	(12.0)	4.0	6.2	ABE	1	灰	40	111-23-18
62	坏	(12.9)	3.8	6.0	ABF	1	青灰	50	111-23-15, Na561
63	坏	(13.4)	4.7	6.4	ABCE F	2	灰	40	112-23-13
64	坏	(13.9)	3.8	6.9	ABEF	1	青灰	60	111-23-23
65	坏	(12.4)	3.7	3.4	ABEF	1	暗灰	30	111-23-15, Na2759
66	坏	12.8	4.0	6.1	BCD	1	灰	60	112-22-24
67	坏	(11.9)	3.6	(5.6)	ABEF	1	灰	40	111-23-12
68	坏	(13.2)	3.8	3.8	ABCE F	1	青灰	60	111-23-16
69	坏	13.0	3.7	6.2	ABF	1	暗灰	50	112-23-11
70	坏	13.2	4.1	6.1	ABFG	1	青灰	75	112-23-11
71	坏	(12.0)	4.1	6.1	ABC	1	青灰	50	112-22-24
72	坏	13.0	4.1	5.8	ABEF	1	青灰	80	112-23-12 内面降灰
73	坏	(12.4)	3.1	6.2	ABEF	3	茶褐	50	112-23-4
74	坏	(13.2)	3.4	(6.2)	ABEF	1	青灰	40	112-23-12
75	坏	13.3	4.0	5.8	ABF	1	青灰	100	112-23-4, Na3679
76	坏	(12.8)	3.5	6.2	ABEF	1	灰	40	112-23-17
77	坏	14.0	3.7	3.4	ABF	1	青灰	40	112-23-5 内面火ダスキ痕
78	坏	(13.4)	4.6	(6.0)	ABF	1	青灰	40	112-23-2
79	坏	(12.6)	4.3	5.8	ABEF	1	青灰	80	112-23-5, Na3741
80	坏	(12.3)	4.2	(5.8)	ABEF	1	淡灰	70	112-23-9, Na3440
81	坏	12.7	4.0	6.4	ABF	1	青灰	50	111-23-13
82	坏	(12.4)	4.0	6.1	ABF	1	青灰	40	112-23-14
83	坏	12.7	4.2	6.3	ABF	1	青灰	90	112-23-7
84	坏	12.8	3.8	5.8	ABEF	1	青灰	60	112-23-17
85	坏	13.3	4.2	5.8	ABEFG	3	灰褐	80	112-23-9
86	坏	13.0	4.6	6.4	ABEF	3	乳白	70	112-23-5, Na3748
87	坏	12.7	3.9	6.2	ABEF	1	青灰	90	112-23-17
88	坏	(13.6)	4.9	6.2	ABEFG	3	橙褐	60	112-23-7
89	坏	(14.3)	3.6	(6.1)	ABEF	3	褐	40	111-23-11
90	坏	(13.2)	4.0	5.8	ABEF	1	青灰	40	111-23-14
91	坏	12.6	3.7	5.9	ABEF	1	青灰	95	112-23-10
92	坏	(12.0)	3.8	5.6	ABF	1	青灰	60	112-23-12 内外面火ダスキ痕
93	坏	12.8	3.5	5.2	ABFG	1	青灰	30	112-23-17
94	坏	(12.6)	4.0	(6.0)	ABC	1	灰	30	113-23-3, Na3871
95	坏	(13.6)	3.2	(6.4)	ABCF	1	青灰	40	111-23-15
96	坏		3.0	(5.0)	ABC	1	青灰	20	111-23-20
97	皿	(11.6)	2.7	(6.7)	ABF	1	灰	10	112-23-12
98	皿	(14.2)	2.5	(6.6)	ABCF	2	淡灰	40	111-23-25
99	皿	(12.4)	2.3	(5.8)	BCF	1	灰	15	112-23-18
100	皿	(13.5)	2.6	(6.0)	AC	1	青灰	40	111-23-18
101	皿	(13.7)	2.7	6.2	ABEF	2	灰	80	111-23-8
102	皿	(12.1)	2.5	6.2	ABEF	1	灰	60	111-23-17
103	皿	(15.2)	2.0	6.3	ABCF	1	灰	70	111-23-8
104	皿	(13.0)	2.3	6.3	ABCE F	2	灰	60	111-23-23
105	皿	(14.2)	2.0	(6.4)	ABF	1	灰	50	111-23-7, Na2781
106	皿	14.5	2.5	6.1	ABCF	1	暗灰	60	112-23-11
107	皿	13.6	2.3	6.4	ABCF	1	灰	70	111-23-13
108	皿	(13.8)	3.0	6.4	ABCF	2	灰	70	112-23-12
109	皿	(14.3)	2.4	5.8	ABF	2	灰	60	111-23-8
110	皿	(14.6)	2.1	6.1	ABCF	2	灰	60	111-23-7, Na2764
111	皿	(12.8)	2.3	5.8	BCF	1	灰	50	111-23-7, Na929

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 上	焼 成	色 調	残存率	備 考
112	皿	(14.5)	2.5	6.8	ABF	2	灰	70	111-23-13
113	皿	(14.0)	3.2	5.8	ABEF	1	灰	50	112-22-24
114	皿	(13.6)	(3.3)	6.2	CE	2	灰	80	111-23-7, No2741
115	皿	(14.2)	2.6	6.5	ABEF	3	褐	80	112-23-4
116	皿	(14.0)	3.4	7.0	ABEF	1	青灰	70	112-22-25
117	皿	13.9	2.2	6.0	ABF	1	暗灰	80	112-22-24 内面火ダスキ痕
118	皿	13.0	2.9	6.0	ABF	1	灰	70	111-23-18
119	皿	(13.4)	3.0	(6.2)	BEF	1	青灰	40	112-22-24
120	皿	13.3	2.8	6.6	ABCF	1	暗灰	90	112-22-25
121	皿	(14.1)	2.6	7.5	ABEF	1	青灰	70	112-22-25
122	皿	(13.8)	3.1	6.7	ABF	2	灰	70	111-23-13
123	皿	(14.4)	2.2	6.2	ABF	2	灰	70	112-23-4
124	皿	(13.0)	2.4	5.8	ABCEF	1	青灰	50	112-23-18
125	皿	14.6	2.6	6.4	ABCF	1	灰	80	112-23-6
126	皿	(13.3)	2.3	5.3	ABEF	1	灰	60	112-23-18
127	皿	13.3	2.4	5.6	ABEF	2	灰	60	112-23-11
128	皿	13.9	2.6	6.2	ABCF	2	暗灰	70	112-23-11
129	皿	12.8	1.8	6.3	BCEF	1	灰	60	112-23-7, No3394-3396
130	皿	(12.2)	2.4	(6.0)	ABCEF	2	灰	30	112-23-9, No3462
131	皿	(14.0)	2.0	6.2	ABCF	1	灰	40	112-23-11
132	皿	(14.0)	2.6	6.2	ABF	2	灰	60	112-23-3, No1083
133	皿	(12.6)	2.9	(6.6)	ABCF	1	灰	30	112-23-7
134	皿	(13.0)	2.3	5.8	ABCF	1	暗灰	40	112-23-17
135	皿	13.3	2.7	5.3	ABCF	1	青灰	80	112-23-18
136	皿	(14.2)	2.6	6.0	ABCF	1	灰	40	112-23-6
137	皿	14.0	2.4	6.5	ABCF	1	灰	80	112-23-11
138	皿	(14.0)	2.2	6.5	ABEF	3	褐	30	112-23-9, No3432
139	皿	13.5	3.1	6.6	ABCF	2	灰	70	112-23-14
140	皿	14.2	3.0	6.8	ABCEF	3	褐	80	112-23-6, No3153
141	皿	12.8	2.7	5.7	ABCF	1	灰	70	111-23-14 二枚重
142	皿		3.6	6.6	ABE	2	灰	40	111-23-19 五枚重
143	皿	14.2	2.1	5.7	ABF	2	灰	30	111-23-25 三枚重
144	皿	(13.9)	2.6	5.8	ABCEF	2	灰	50	112-23-9, No3476 五枚重
145	皿	(15.0)	1.6	6.1	ABCEF	2	灰	50	112-23-4
146	皿	(16.8)	3.0	6.6	ABEF	3	褐灰	60	111-23-13
147	皿	(17.2)	2.8	(7.6)	ABEF	3	灰褐	20	112-23-18
148	皿	(16.3)	2.8	7.6	ABCE	1	灰	70	112-23-4
149	皿	(16.4)	2.6	8.0	BCEF	3	褐	70	111-23-15
150	皿	(14.7)	2.1	6.3	ABCF	2	灰	60	112-23-3, No1083
151	皿	(12.3)	2.0	7.2	ABCF	1	灰	60	112-23-16
152	皿	(14.0)	2.9	(6.0)	ABF	3	赤褐	40	112-23-7
153	皿	(15.8)	2.5	8.0	ABEF	3	赤褐	50	112-23-7
154	皿	(12.9)	2.3	7.0	ABF	1	青灰	50	112-22-20
155	皿	(12.5)	2.2	6.4	ABF	1	灰	40	111-23-13
156	皿	13.4	2.4	7.0	ABC	2	灰	40	111-23-25
157	皿	(12.2)	2.5	6.0	BCEF	1	青灰	80	111-23-17
158	皿	(15.5)	2.9	(7.1)	ABEF	1	灰	40	112-22-20
159	皿	12.3	2.6	6.0	BCEF	2	灰	50	111-23-23
160	皿	(14.4)	2.7	6.3	ABF	2	灰	70	111-23-13
161	皿	14.4	2.5	6.8	BCF	2	灰	90	111-23-7, No2910
162	皿	(13.7)	2.6	5.6	BCF	2	暗灰	70	111-23-18
163	皿	13.7	3.3	6.6	ABEF	3	灰褐	80	112-23-12
164	皿	12.8	2.5	6.6	ABCF	1	灰褐	80	112-23-11
165	皿	(16.6)	2.9	7.1	ABCF	2	暗灰	80	112-23-12
166	皿	13.4	2.8	6.6	ABCF	1	灰	80	112-23-12
167	皿	(12.6)	2.0	(6.2)	ABCF	1	青灰	40	112-22-25

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
168	皿	13.2	2.1	6.6	ABEF	2	灰	50	112-23-5
169	皿	13.4	3.1	6.6	ABCE	1	黒灰	60	112-23-16
170	皿	14.1	2.3	6.8	ABCF	1	灰	70	112-22-24
171	皿	(14.0)	2.4	7.1	ABCE F	3	灰褐	40	112-23-11
172	皿	14.3	2.7	6.8	ABCF	2	灰	70	112-23-14
173	皿	(14.7)	1.8	6.7	ABE	1	青灰	80	112-24-24
174	皿	(12.9)	3.0	(5.7)	BCF	2	灰	20	112-23-16
175	皿	13.3	2.9	6.2	ABF	2	灰	80	111-23-7, No8 皿二枚重内面高台付坏付着
176	皿	(13.5)	2.4	5.9	BCE	2	灰	60	111-22-23 二枚重
177	皿	12.3	2.4	5.1	ABF	2	灰	60	112-23-16 二枚重 内面降灰
178	皿	(13.0)	1.4	5.7	ABF	1	灰	60	112-23-16 二枚重
179	皿	(11.7)	2.8	(6.6)	ABF	2	灰	40	111-23-17
180	皿	(12.9)	2.8	(6.3)	ABF	2	灰	30	111-23-9
181	皿	(12.9)	2.6	(6.8)	ABF	2	灰	40	111-23-7, No502
182	皿	(15.3)	2.3	(7.7)	BCF	1	灰	40	111-23-9
183	皿	(13.3)	2.4	(6.4)	BEF	1	灰	70	111-23-7, No3120
184	皿	13.8	2.6	7.2	ABCF	1	灰	70	112-23-17
185	皿	13.8	2.1	6.7	ABEF	2	灰	60	112-23-4, No1189
186	皿	(14.0)	2.5	7.0	ABCF	1	灰	60	111-23-24
187	皿	(14.2)	2.6	6.8	BCF	1	灰	80	111-23-15
188	皿	(13.6)	2.1	5.4	ABF	1	灰	40	111-23-14
189	皿	14.1	2.4	7.6	ABF	2	灰	100	111-23-9-14
190	皿	16.1	3.0	7.8	ABEF	3	淡褐	80	112-22-24
191	皿	(13.0)	2.4	6.1	ABCF	1	灰	70	111-23-17
192	皿	13.6	2.4	6.8	ABF	1	灰	80	112-23-11
193	皿	(14.1)	2.4	6.3	ABCF	2	灰	60	111-23-16
194	皿	16.0	2.6	7.8	ABCF	1	暗灰	70	112-24-5
195	皿	(13.4)	2.4	7.4	ABEF	1	暗灰	40	113-23-3 内面「X」印のヘラ記号
196	皿	14.6	2.5	7.7	ABCF	2	灰	80	111-23-13
197	皿	(12.8)	3.0	7.2	ABF	2	灰	60	111-23-12
198	皿	(15.8)	3.1	(6.3)	BEF	3	褐	30	112-23-11
199	皿	(14.3)	2.4	7.1	ABEF	1	灰	40	112-23-22 四枚重
200	皿	14.1	2.8	5.8	BEF	1	青灰	90	112-24-24
201	皿	(13.7)	2.3	7.0	ABCF	1	灰	60	112-23-16 二枚重 内面降灰
202	皿	(14.5)	2.5	6.8	ABCF	1	灰	60	111-23-9
203	皿	(16.8)	3.1	7.6	BEF	2	淡乳灰	40	112-23-11
204	皿	16.0	2.7	6.2	ABEF	3	褐	80	112-23-12
205	皿	(17.6)	2.1	(6.4)	ABC	2	灰	20	111-23-19
206	高台付坏	(13.6)	5.7	6.9	BCE	2	灰	40	111-23-13
207	高台付坏	14.8	5.5	7.3	ABCE F	2	褐灰	95	111-23-21-12
208	高台付坏	(14.8)	5.8	6.7	ABCE	1	灰	50	111-23-13
209	高台付坏	(14.8)	5.6	7.3	CDEF	1	灰	50	111-23-9
210	高台付坏	(13.5)	6.4	(7.5)	ABEF	2	淡灰	50	111-23-12-13
211	高台付坏	(14.5)	6.1	6.9	ABRF	3	褐灰	50	112-23-10
212	高台付坏	(14.5)	5.5	7.4	ABCF	2	茶褐	50	112-23-6-11
213	高台付坏		1.5	7.1	ABCE F	1	灰	30	112-23-4, No3691
214	高台付坏	(14.5)	5.6	(7.8)	ABCE F	2	灰	40	112-23-3, No3222
215	高台付坏	(13.8)	5.8	6.8	ABCF	1	灰	50	111-23-15
216	高台付坏	(13.1)	5.8	6.7	ABEF	1	淡灰	60	111-23-13
217	高台付坏	(14.1)	5.2	(7.1)	BCDF	1	灰	30	111-23-15, No370
218	高台付坏	(13.2)	5.4	6.7	BCE F	1	灰	65	111-23-20
219	高台付坏	14.8	5.8	7.0	ABCF	1	茶褐	80	112-23-7
220	高台付坏	(13.4)	5.4	6.7	ABCF	1	青灰	40	112-23-14
221	高台付坏	(14.2)	6.0	(7.2)	ABCF	2	赤褐	80	111-23-18-23
222	高台付坏	15.0	5.7	7.2	BCE F	3	暗灰	60	111-23-14
223	高台付坏	13.6	5.7	7.4	ABCE F	2	灰	40	112-23-3, No3213

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
224	高台付坏	(13.4)	6.4	7.2	ABCF	1	灰	40	112-22-24
225	高台付坏	(13.5)	5.4	7.2	ABCF	2	灰	40	111-23-14
226	高台付坏	(15.4)	5.5	6.8	ABCF	2	暗灰	60	111-25-2
227	高台付坏	(13.6)			ABCF	1	暗灰	40	112-23-7
228	高台付坏	(12.9)	5.7	(7.0)	ABCF	1	灰褐	30	112-23-4
229	高台付坏	(14.0)	4.9	7.3	ABC	1	青灰	30	112-23-18
230	高台付坏	(15.5)	5.6	6.6	ABE	1	灰褐	40	112-23-10
231	高台付坏	(13.8)	6.1	(6.8)	BCE	1	青灰	40	112-23-18
232	高台付坏	(14.8)	5.3	7.4	ABCE	1	暗灰	50	112-23-8-17
233	高台付坏	(12.9)	6.0	(6.0)	CDEF	1	灰	40	112-23-16、No2930
234	高台付坏	(14.4)	6.0	(8.4)	ABF	1	灰	30	112-23-8、No3352
235	高台付坏	(13.6)	5.7	7.6	ABEF	3	赤茶	50	112-23-3、No1091
236	高台付坏	(14.3)	5.5	7.6	ABCF	1	青灰	50	112-23-11
237	高台付坏	(16.2)	5.5	7.6	ABCEF	1	灰	40	112-23-14
238	高台付坏	(14.2)	6.1	(8.0)	ABCEF	3	褐灰	40	112-23-3、No1099
239	高台付坏	(13.2)	5.4	(8.2)	ABCF	3	茶褐	30	112-23-3、No1131
240	高台付坏	(14.4)	5.4	7.4	ABCEFG	1	青灰	40	112-23-19
241	高台付坏	(13.8)	4.8	7.7	ABCEF	1	青灰	40	112-23-12
242	高台付坏	(14.8)	5.3	7.5	ABEF	2	灰	40	112-23-8
243	高台付坏	14.6	6.4	7.8	ABEF	3	赤褐	50	112-23-3、No1090・1092・3223
244	高台付坏	(14.1)	5.7	(7.2)	ABEF	3	灰褐	30	112-23-9
245	高台付坏	(13.2)	5.6	7.6	ABEF	3	灰褐	40	112-23-10
246	高台付坏	(15.0)	4.7	(7.2)	ABEF	1	灰	40	112-23-10
247	高台付坏	(16.0)	5.3	7.1	ABEF	3	褐灰	60	112-23-11
248	高台付坏	12.6	5.6	7.3	BCF	1	青灰	70	112-24-22
249	高台付坏	(13.4)	5.3	(7.1)	ABCF	2	灰	40	111-23-13
250	高台付坏	(13.9)	4.8	6.7	ABCF	1	青灰	40	112-23-7
251	高台付坏	(14.4)	5.5	(7.2)	ABCF	3	灰褐	30	112-23-12、No2515
252	高台付坏	(14.7)	6.1	(6.7)	CD	2	黄灰	50	111-23-8、No580
253	高台付坏	(14.6)	4.8	(7.1)	ABCEF	1	青灰	40	112-23-21
254	高台付坏	(14.1)	6.1	7.2	ABEF	1	灰	80	112-23-4、No1220
255	高台付坏	14.2	6.1	7.2	BCF	2	灰	60	112-23-6
256	高台付坏	(14.4)	5.7	7.0	ABF	1	茶褐	40	112-23-10
257	高台付坏	(15.0)	5.7	7.6	ABCF	1	青灰	40	112-23-12
258	高台付坏	(13.4)	5.4	(7.2)	ABCF	1	青灰	40	112-23-10
259	高台付坏	15.6	5.2	6.9	BCG	1	灰	50	112-23-5
260	高台付坏	14.0	6.3	7.2	ACDEG	3	赤褐	40	112-23-11
261	高台付坏	14.6	5.6	7.5	ABCFG	3	褐	30	112-23-12
262	高台付坏	(16.8)	8.2	8.0	ABEF	2	淡灰	30	111-23-19
263	高台付坏	(16.6)	7.7	(8.3)	ABC	2	赤褐	40	112-23-5
264	高台付坏	16.6	9.0	7.8	ABCF	1	灰	40	112-23-9、No1223
265	高台付坏		3.0	7.4	ABCF	1	灰	50	112-23-14 五枚重
266	高台付坏		4.4	7.3	ABCEF	1	灰	40	112-23-14 二枚重
267	高台付坏	16.4	3.9	5.8	CDEF	1	灰	75	111-23-15、No2892 毫み著しい
268	高台付坏		3.8	7.4	ABEF	1	灰	30	112-23-19 二枚重
269	高台付坏	(14.2)	5.9	7.2	BCF	1	青灰	60	112-23-10
270	高台付坏	(14.2)	5.8	6.8	CDF	1	灰	60	112-23-16、No2931 三枚重
271	高台付坏	(14.4)	5.6	7.2	BCDF	1	灰	40	111-23-24 五枚重
272	高台付坏	(13.8)	6.0	7.4	ABEF	1	灰	80	112-23-9 二枚重
273	高台付坏	(15.0)	5.8	8.1	ABEF	3	淡褐	50	112-23-3、No1093
274	高台付坏	(13.6)	5.6	7.6	ABCF	1	褐灰	50	112-23-14
275	高台付坏	(13.8)	5.8	6.9	BC	1	青灰	90	111-25-3
276	高台付坏	(14.0)	6.0	8.6	ABEF	1	灰	40	112-22-24
277	高台付坏	13.2	5.4	6.6	ABCF	1	暗灰	40	112-23-11
278	高台付坏	(13.6)	5.1	6.4	ABCF	1	青灰	60	112-23-8-10
279	高台付坏	(13.4)	5.6	7.7	CDF	2	黄灰	60	111-23-9、No2812

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
280	高台付坏	15.1	5.4	7.6	ABCDEF	2	灰	75	111-23-9, No3081
281	高台付坏	14.3	6.1	6.8	BEF	1	灰	70	111-24-25
282	高台付坏	(13.6)	6.0	7.0	ABCF	1	青灰	40	112-22-24
283	高台付坏	(14.4)	5.5	7.0	ABCF	2	灰	50	111-23-8
284	高台付坏	(14.6)	5.9	(7.4)	ABCF	1	灰	40	112-23-3, No1115・3228
285	高台付坏	(14.3)	5.4	7.4	ABF	1	灰	50	112-23-3, No1103
286	高台付坏	(14.4)	5.8	7.3	ABCF	1	青灰	40	112-23-6
287	高台付坏	(14.3)	6.0	(7.6)	ABCF	3	赤褐	40	112-23-8, No3350・3353
288	高台付坏	14.6	5.8	7.9	ABEF	2	灰	50	112-23-11
289	高台付坏	(13.6)	5.2	7.6	AHE	1	暗灰	40	112-23-10
290	高台付坏	(14.0)	5.8	7.0	ABCF	1	暗灰	80	112-23-7
291	高台付坏	(13.9)	6.8	7.1	CF	1	灰	75	111-23-15
292	高台付坏	(14.2)	5.9	(7.5)	ABFG	3	褐	30	112-23-4
293	高台付坏	(14.2)	5.7	7.1	CD	1	灰	75	111-23-10, No356 二枚重
294	高台付坏	13.9	5.7	6.9	CDF	1	灰	80	111-23-10, No354 二枚重
295	高台付坏	(14.9)	5.4	7.2	ABF	1	青灰	70	112-23-9
296	高台付坏	(14.4)	5.7	6.5	ABCF	1	暗灰	40	112-23-6

Aは口柱が系切り離しの際に台状に残るタイプで20点(第55図97~100)、Bは底部系切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで245点(第55図101~第56図150)、Cは底部系切り離した後、体部が直線的に立ち上がるタイプで60点(第57図151~154)、Dは底部の系切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで129点(第57図155~178)、Eは底部と体部との境が弱く体部が丸みをもって立ち上がるタイプで103点(第58図179~205)であった。皿の口径は最小10.0cm、図示した中では、第55図97の口径11.6cmである。最大17.6cmで第58図205であった。最大のビークは13.9~14.4cmであり、前後11.0~15.0cmである。底径は最小3.8cm、最大8.4cmであった。最大のビークは6.0cmにあり、前後5.8~7.2cmに多くは存在する。また、少量ではあるが先の底径より大きい7.6~7.8cmほどの底径値をもつ器種も存在する。

皿は、坏に比較して口径、底径ともに大きく、器高は浅い。形態は、第55図100や101にみられるような底部から体部の立ち上がりは緩やかな湾曲をもち、内湾気味に外傾に立つ。口唇部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプと、第57図150や151にみられるような底部から体部の立ち上がりは外反気味に外傾に立ち、口唇部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプがある。また、第57図の167にみられるような直線的に立ち

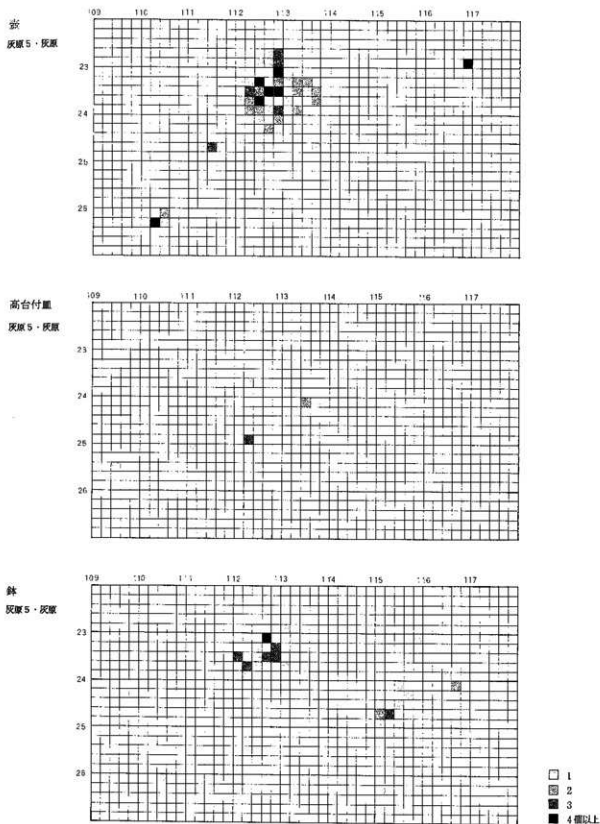
上がりはほぼ同じ器肉かややもすると器肉の薄いタイプが存在する。

第58図195は木野産須恵器の中では極めて珍しいヘラ記号が認められた。底部外面に「X」印がみられた。系切り離しの後、記されたものである。

高台付坏1107点を高台部の形態によって分類した。第一分類は高台の全体的形態でAは直線的なもののタイプで152点(第59図206~214)、Bは押圧によりややつぶれて外側に膨らむタイプで747点(第59図215~第61図272)、Cは箱形に突出するタイプで208点(第62図273~269)であった。高台付坏の口径は最小10.6cm、最大16.8cmであった。高台径は最小5.2cm、最大10.2cmであった。高台については高台端部の形状と高台の接地面の位置によってさらに細分類をおこなった。その結果は、V~5で後述する。

坏、皿、高台付坏の窯詰め焼成方法については、第54図96、第56図141~144、第57図174~178、第58図199~202、第59図213、第61図265~272、第62図293~296に図示したように、同一器種を正位の状態を重ねて居ることが判断できる。この中で、注目されることは、第57図175である。二枚の皿の上に高台付坏が張り付いている。唯一他器種の組み合わせである。

第63図 灰原5壺・高台付皿・鉢出土分布図



b 長頸壺・壺

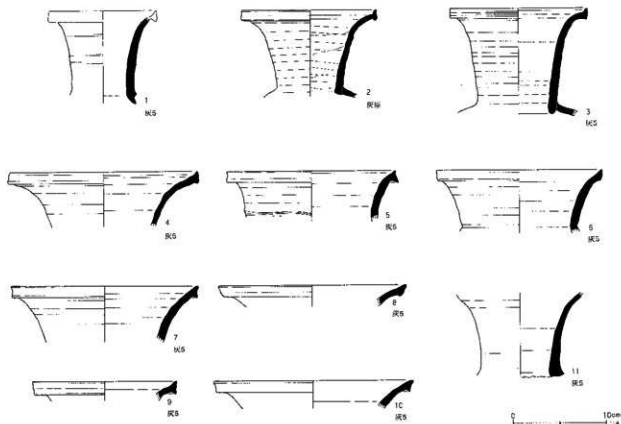
灰原5からは長頸壺の破片が検出されている。また、少量ではあるが4b層とした灰原層からも出土している。第63図上はその出土地点を表したものである。灰原5とした4a層から多く出土していることがわかる。灰原5出土の壺の破片数は370点、重量は15426gである。平安出土遺物の占める割合は破片で1%、重量で3%であった。

第64～66図は長頸壺を図示したものであるが、第64図1は口唇部が欠損しているため正確な口径は不明瞭だが推定口径11.3cmほどである。2・3は推定口径14.3cm、14.6cmで1よりやや大きい。5・6は頸部がやや短く、口径も18.0cm、17.6cmと大きい。4・7・8・10は口唇部が外に大きく開くタイプで、口径も20.0cmを越える。焼成は、7以外いずれも酸化焰焼成で褐色、もしくは、赤褐色をしている。口唇部の形態は、外側に面をもち上方と下方に突出する。造り方は、口縁部と胴部を別造りし、頸部に貼りあわせている。頸部の

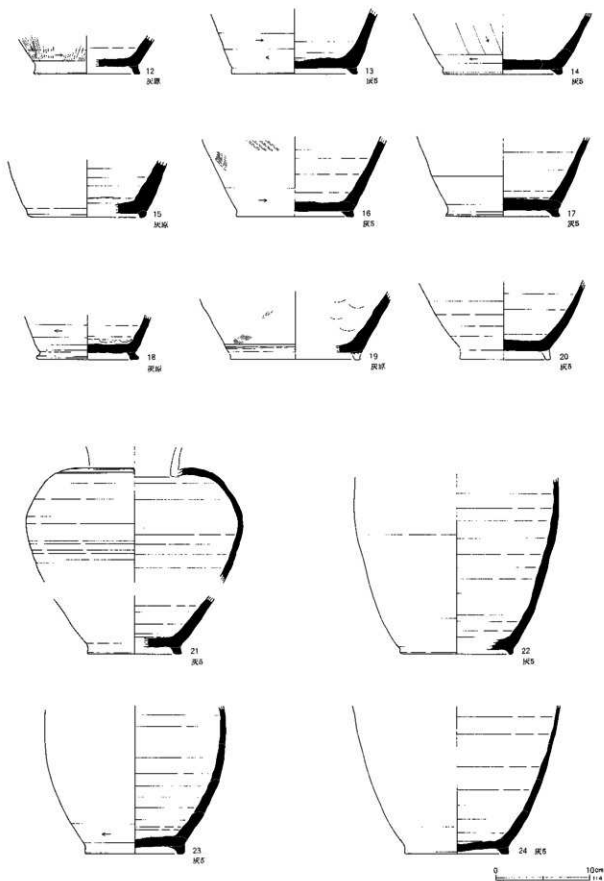
粘土が胴部内面に貼り付けている。2の頸部内面を観察すると、幅1.0cmの粘土紐を巻き上げてロクロ成形している。口縁部の外反部分は、引き延ばしている可能性がある。胴部は器肉が薄い。

第65図12～第66図34は壺底部である。12～25・27は底部に張り付けの高台をもつ。高台は「ハ」の字状に取り付く。底部の造りは大きく二種類、一つは、14に見られるように底部円盤にくの字状に粘土を積み上げるものと、16・17のように底部円盤に立ち上がり部分を積み上げていくものが存在する。体部外面の調整は、ロクロナデの後、体部下端を横方向のヘラケズリ、内面は丁寧なロクロナデ調整である。12は体部外面の下端に縦方向の刷毛を施している。18は乳灰色で粘性をもつ粘土である。20は還元焼成で焼きしまっている。体部は粘土を器面にそって張り込んだためか、片岩のような割離がみられる。底部外面は糸切り難しの痕跡がみられ、高台部が欠損している。第66図26・28～31は平底の底部で、造りや調整から長頸壺の可能性が考

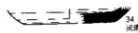
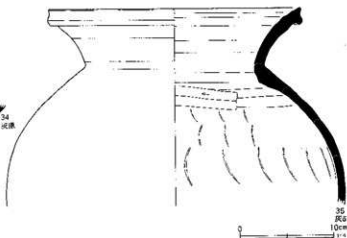
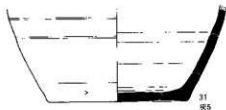
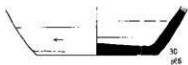
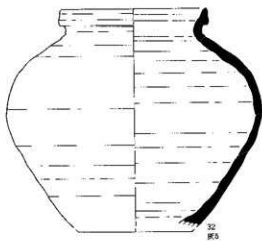
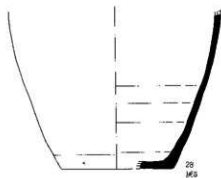
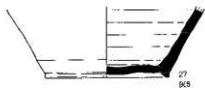
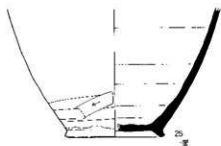
第64図 灰原5出土遺物⑩



第65図 灰原 5 出土遺物(4)



第66図 灰原5出土遺物(9)



第20表 灰原5出土遺物観察表(第64~66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	長頸壺		9.7		ACE	2	赤褐	30	灰5113-23-3-6-7-12
2	長頸壺	14.3	9.1		ABCDEF	2	灰灰	30	灰原115-24-20
3	長頸壺	(14.6)	11.3		ABEF	2	褐	50	灰5111-23-9-18-23, 24-2
4	長頸壺	(19.9)	5.7		BCE	3	赤褐	20	灰5111-24-3
5	長頸壺	(18.0)	5.3		ABC	2	褐灰	30	灰5112-23-8-13-23
6	長頸壺	(17.6)	6.6		BFG	1	赤褐	20	灰5111-23-12, 24-5
7	長頸壺	(20.0)	5.8		BE	2	灰	20	灰5113-23-8
8	長頸壺	(20.0)	2.2		ABCF	2	赤褐	5	灰5112-23-12-14
9	長頸壺	(15.3)	2.0		ABEF	2	褐	5	灰5111-23-13, No2080
10	長頸壺	(21.2)	2.9		ABE	2	乳灰	5	灰5111-23-20
11	長頸壺		8.9		ABDEF	2	褐	50	灰5110-24-21
12	長頸壺		4.1	(11.2)	BCDF	1	灰	20	トレンチ116-24-13
13	長頸壺		6.8	13.2	ABCDEF	2	赤褐	30	灰5No2577
14	長頸壺		6.3	(12.6)	ABRF	2	褐	30	灰5111-23-23-24, 24-3
15	長頸壺		6.0		ABCF	2	灰	30	灰原116-24-6
16	長頸壺		8.4	12.4	ABCF	2	褐	30	灰5111-23-18-21-23, 24-3-8, No2099
17	長頸壺		8.2	12.0	ABRF	2	褐	20	灰5111-23-8, 24-12
18	長頸壺		4.8	(10.8)	ACD	1	灰白	30	灰原117-24-16
19	長頸壺		6.4		ACD	1	灰	20	トレンチ116-24-13
20	長頸壺		8.3	9.0	ABEF	1	青灰	30	灰5No5067
21	長頸壺		(19.5)	(10.0)	BCEF	1	灰	40	灰5No2559, 111-23-12-17-18-22
22	長頸壺		19.0	(12.0)	BCF	2	赤褐	30	灰5111-24-13-14-23, No2048
23	長頸壺		15.6	10.5	ABEF	2	赤褐	30	灰5111-23-13
24	長頸壺		15.5	(11.0)	ABCF	2	褐	30	灰5No2021-2034-2051-2097-2098, 111-23-22, 24-2-3-7-8
25	長頸壺		13.4	(10.6)	ABEF	2	赤褐	30	一面111-24-17
26	長頸壺		14.4	13.0	CD	1	灰	30	一面112-24-19
27	長頸壺		7.5	12.8	ABCF	1	褐	50	灰5111-23-9-19-24, 24-3-7
28	長頸壺		17.0	(11.8)	BEF	2	褐	30	灰5111-23-23-24
29	長頸壺		4.3	14.0	ABCE	2	灰	30	灰原111-25-13
30	長頸壺		5.0	12.8	ABEF	2	赤褐	30	灰5111-23-18-22-23-24, 24-3
31	長頸壺		9.8	14.6	ABEF	2	褐	30	灰5111-24-4-5, No2188-2191-2195-2202-2203-2207-2222-2237-2302-2328
32	壺	15.3	(23.4)		ABCF	1	灰	30	灰5111-25-11, 112-23-9-12-16-17-18, No1178, 2711, 3553
33	長頸壺		3.0	9.2	ABE	1	青灰	10	一面No591
34	長頸壺		1.6		BCF	2	暗灰	30	灰原116-24-16
35	壺	26.6	20.7		ABCF	1	青灰	30	灰5112-23-12-13-18-21-22, 24-1-11-18-19-22, No2176-2177-3235

えられる。26は還元焼成され焼き上がりは良く硬質である。内面底部には自然釉が付着していた。27は底部外面を一方の手持ちヘラケズリを施し、後に、高台部をナデによって貼り付けている。33・34は小型の平底の底部である。器種は小型壺の可能性が考えられるが、33はやや上げ底気味に焼き上がり、外周に蓑状の斥痕がつく、底部の側面は面をもち部分的に段がつく、わずかに残る体部には縦方向のヘラナデがみられる。内面は全面が剥離している。すり鉢の可能性もある。32・35は壺である。還元焼成され焼き色は灰色である。

32は内外面ともナデ調整が施されている。底部は欠損しているが、平底と考えられ、胴部に張りをもち口縁部がしまつて短い。35は外面は丁寧なナデ調整が施され、内面には無文の当て具痕が残る、頸部には横方向のナデ調整を施す。口縁部から胴部上半部まで残存する。胴部は球状をし、張りをもつ。口縁部は外方に開き、口唇部は外側に弱い凹みをもって上下に突出する。焼成は灰～青灰色に焼き上がった還元焼成のものと、褐～赤褐色に焼き上がった酸化焰焼成のものが存在する。

c 鉢

灰原5からは鉢の破片が検出されている。また、少量ではあるが4号層とした灰原層からも出土している。第63図下はその出土地点を表したものである。灰原5とした4号層から多く出土していることがわかる。灰原5出土の鉢の破片数は45点、重量は2,252gである。平安出土遺物の占める割合は破片で0.1%、重量で0.3%でと極少量の生産である。

第67～70図は鉢を図示したものである。形態は短い口縁部が外傾に大きく開いて端部をもつ。胴部は肩部で張りもち胴部はわずかに球状をする。底部に向けて胴部はつばまり、最大径は胴部上半にもつ。口縁部の破片のみで、ほとんどが底部欠損しているため形態は不明である。第69図29は平底の底部が残存する。

鉢は、口縁部の形態によってA～Dの4分類した。A類は、第67図1～7、第68図22、24、第69図29である。口縁部の側面が「上端が凹み下端が膨らむタイプ」である。B類は、第67図8～10、第68図11～13、18、20～24、第69図26～28、30～34である。口縁部の側面が全体に凹み口唇部の端部が「下方に垂れず頸部から直線的に伸びている。C類は、口唇部の側面が全体に膨らむタイプである。第68図の16、19、第70図37、38、42、44である。D類は、口唇部の側面が平坦なタイプである。第68図14、15、17、第69図35、第70図36、39～41、43、45～47である。

焼成は、長頸壺と同様に灰～青灰色に硬質に焼き上がった還元焼成のものと、褐～赤褐色に軟質に焼き上がった酸化焰焼成のものが存在する。

法量は、残存部位の多い口縁部をみると、最小口径は第69図35の推定15.8cm、最大口径は第69図34の推定40.7cmである。その差25.0cmあり、口径の大きさによる鉢の法量分化が存在するものと考えられる。

1、2、4、7、9、11、12、30、46は軟質で外面は灰褐色で内面は赤褐色である。器面はガラガラし粒子は粗い。

8、31は青灰色で焼成も良好である。器内はやや薄く、断面には茶褐色の部分がみられる。頸部内面に輪

積みの痕跡がみられる。10、17～20、23、24、26、28は青灰色で焼成も良好である。15、36、38、41は乳灰色で胎土がやや粉っぽい。21、22は茶灰色で器内は赤褐色である。

29は平底の底部から体部が外傾に内湾して立ち上がり、頸部でわずかにつばまる。口縁部は外方に開き、焼成は悪く、内面はくすべ焼き状で内面から器肉の間まで黒色である。外面は褐灰色である。出土地点は灰原5の下層である灰原面と灰原二面出土の遺物が接合した。

37は焼成が良好で暗灰色である。底部は欠損しているため全体の形態は不明瞭であるが、ヘルメット型に近い。器肌は、白色の細かい粒子が全体に多くみられる。片岩粒子、石英粒子を含む。胴部内面に無文当て具の痕跡がみられる。ほとんどは、ナデ調整により消されている。胴部外面には叩きの痕跡は認められない。丁寧にナデ消されていると考えられる。口縁部は外方に開き、端部はそのまま立ち上がりわずかに膨らみをもち、上方に面をもつ。出土地点は一面であることから古い時期の可能性がある。

38は、焼成やや不良、乳灰色で胎土がやや粗く粉っぽい。胴部の整形は外面に平行叩きが残る。内面は無文の当て具が残る。いずれも、軽いナデ調整が施されている。出土地点は灰原面である。

40は乳褐色で胎土が粉っぽい。43は青灰色で焼成も良好である。器肉はやや薄く、胴部でさらに薄くなる。頸部内面に輪積みの痕跡がわずかにみられる。口縁部の形態も、側面の幅が狭く0.8cmである。出土地点は灰原面である。

44は非常に良く焼きしまっている。色調は外面に自然釉がかかり光沢をもつ。内面は器面に細かな白色粒子が多くみられ灰色である。頸部内面に輪積みの痕跡がみられる。出土地点は灰原面である。

このほか、一部の灰原5から出土した鉢、鉄鉢型土器は第100・101図に掲載した。

第67図 灰原 5 出土遺物(10)



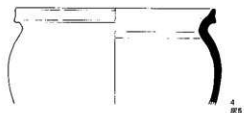
1
灰5



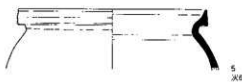
2
灰5



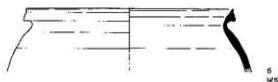
3
灰5



4
灰5



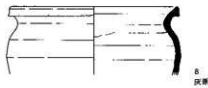
5
灰5



6
灰5



7
灰5



8
灰原



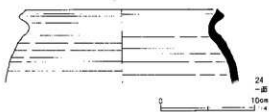
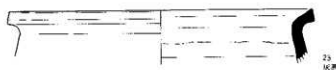
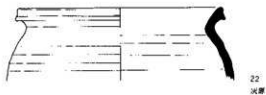
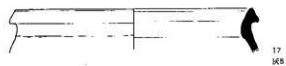
9
灰5



10
灰5

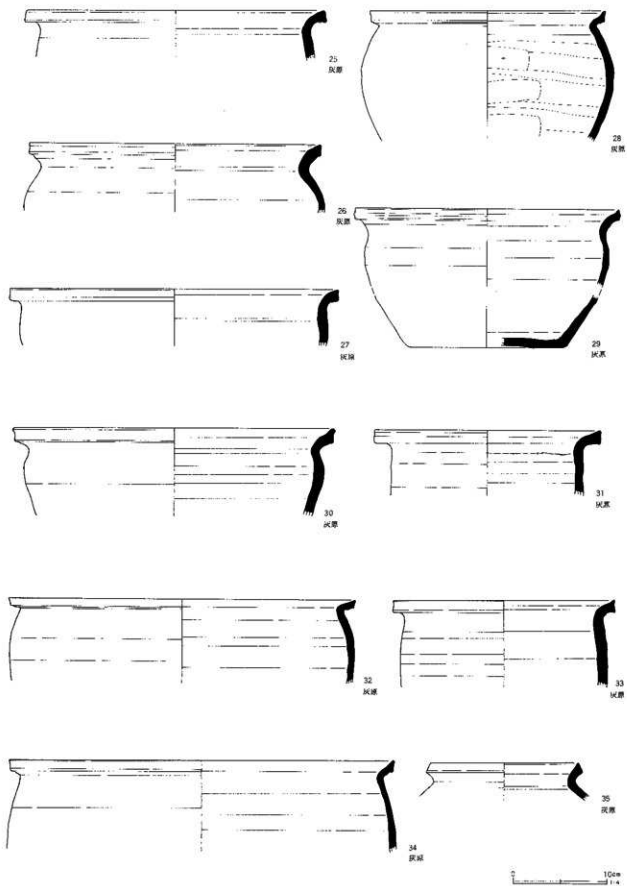
0 10cm
1:4

第68図 灰原5出土遺物(7)



0 10cm

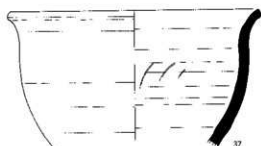
第69図 灰原5出土遺物(8)



第70図 灰原5出土遺物(9)



36
灰原



37
一面



38
灰原



39
灰原



40
灰原



41
灰原



42
灰原



43
灰原



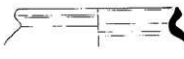
44
灰原



45
灰原



46
灰原



47
灰原

0 10cm

第21表 灰原5出土遺物観察表(第67~70図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(20.0)	11.6		B C E F	2	褐	40	灰5112-23-4・10-15
2	鉢	(26.0)	10.9		A B E F	2	灰	30	灰5111-23-22・23・24、24-3
3	鉢	(18.0)	12.0		B C F	2	茶灰	10	灰5111-23-19
4	鉢	(21.0)	10.0		B C E F	2	褐	20	灰5Na2201・2313・2376、111-23-25、24-3・4・5
5	鉢	(20.0)	6.3		B C F	2	暗灰	5	灰5Na2785
6	鉢	(22.0)	6.6		A C	1	暗灰	5	灰5111-23-8
7	鉢	(31.0)	7.4		A B E G	2	褐	40	灰5111-23-23・24、113-23-6・12
8	鉢	(17.7)	7.2		A B E F	1	青灰	10	灰原111-25-16
9	鉢	(23.0)	13.5		B C F G	2	茶褐	40	灰5112-23-9・10・11・25
10	鉢	(23.0)	10.0		A B C E F	1	青灰	30	灰5111-23-9・22、26・1
11	鉢	(26.4)	8.1		A B C F	3	褐	10	灰5112-22-25
12	鉢	(21.8)	6.8		A B C F	2	褐	5	灰5111-23-25
13	鉢	(21.2)	4.0		A B C F	2	褐灰	5	灰5112-23-17
14	鉢	(18.0)	3.4		A B C E F	2	褐灰	1	灰5111-23-25
15	鉢	(25.0)	8.4		A B F	2	乳灰	5	灰5111-23-9
16	鉢	(21.8)	8.1		A B C F	1	灰	30	灰5111-23-12・13・17・23・24・25、24-3・11
17	鉢	(25.0)	4.2		A B C F	2	褐灰	5	灰5111-23-15
18	鉢	(25.8)	5.5		A B C F	2	灰	10	灰5Na3646
19	鉢	(27.0)	5.6		A B D	1	青灰	1	灰5110-25-18
20	鉢	(29.4)	7.0		A B C F	2	灰	5	灰5111-23-24
21	鉢	(30.3)	7.1		B C	1	灰褐	10	灰原115-24-17
22	鉢	(21.4)	7.6		A B C	2	暗灰	30	灰原113-24-19、115-24-19
23	鉢	(32.2)	5.7		B C F	1	灰	5	トレンチ110-25-22
24	鉢	(20.3)	7.8		A B C E	1	灰	30	一面116-22-25
25	鉢	(31.4)	5.3		A B C	1	灰	5	灰原113-24-25
26	鉢	(30.8)	7.2		A B C F	1	灰	20	トレンチ116-24-9
27	鉢	(34.9)	6.1		B C F	2	褐	5	灰原115-24-17
28	鉢	(24.8)	13.7		A B C F	1	暗灰	20	トレンチ116-24-12
29	鉢	(27.9)	14.6	(16.8)	A B C D H	2	褐灰	30	灰原112-24-25、114-24-20・21・22、116-23-15・20、24-4・13・16、二面No162・163
30	鉢	(34.0)	9.3		B C	2	褐	10	灰原115-24-13
31	鉢	(23.8)	6.8		A B C F	1	灰	10	灰原111-25-4
32	鉢	(36.7)	8.9		A B C F	1	暗灰	60	トレンチ115-24-13
33	鉢	(23.4)	9.2		B C F	1	青灰	10	灰原112-24-24
34	鉢	(40.7)	9.6		A B C F	2	灰褐	5	灰原111-25-17
35	鉢	(15.8)	4.0		A B E F	2	灰	5	トレンチ112-24-13
36	鉢	(31.0)	9.5		A B C F	2	乳灰	10	灰原111-25-9
37	鉢	(23.4)	14.3		A B C	1	暗灰	30	一面113-23-24
38	鉢	(31.6)	9.1		A B F G	2	乳灰	5	灰原110-25-25
39	鉢	(23.1)	9.5		A B D F	1	灰	5	トレンチ116-24-9
40	鉢	(31.8)	5.0		A B E F	2	乳褐	5	灰原113-24-9
41	鉢	(24.1)	6.0		A B C F	1	乳灰	5	灰原111-25-6
42	鉢	(35.0)	6.6		A B C F	2	青灰	5	灰原115-24-3
43	鉢	(23.5)	5.3		A B C F	2	灰	5	灰原113-24-25
44	鉢	(37.0)	7.5		A B C E	1	灰	20	灰原111-25-17
45	鉢	(21.3)	7.2		A B C F	2	暗灰	5	灰原115-24-16
46	鉢	(38.8)	7.8		B C E F	2	褐	10	灰原116-23-23
47	鉢	(17.0)	4.1		A B E F	2	灰	5	灰原111-24-24

(2) 東側灰原跡(灰原・一面・二面)と出土遺物

東側灰原跡とした地点は「木野遺跡Ⅰ」の第1～3号空跡の灰原を西側灰原跡と呼称したこれに対応して本調査区の灰原跡を東灰原跡とする。この東側灰原跡は、調査の際に層位によって分層発掘を試みた。その際に遺物を上層の第6層に対応するものを「一面」、中層の第8層に対応するものを「一面」、下層の第9層を主体とした層を「二面」とした。

出土した遺物は第44・45表のとおりである。小型器種・壺・甕の総破片数は35,654片、総重量は3,569,390gであった。灰原出土遺物の全体量の中に占める割合は、小型器種が破片数で1,209片(約3%)、重量で53,333g(約1%)と極めて少量の生産である。壺も破片数で5,055片(約15%)、重量で226,740g(約6%)と極めて少量の生産である。これに対し、甕は破片数で29,210片(約82%)、重量で3,289,317g(約93%)と圧倒的に多量の生産がある。

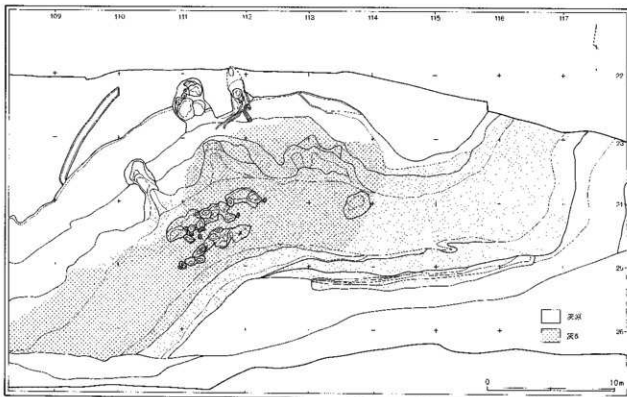
これを層位ごとにみると、下層の二面はいずれの器種も少ない出土で破片数は3,399片(約10%)、重量で

317,830g(約9%)。中層の一面はいずれの器種も出土量が多く、破片数で13,581片(約38%)、重量で1,504,801g(約42%)、上層の灰原は小型器種・壺・甕の占める割合は多く破片数で18,674片(約52%)、重量で1,746,759g(約49%)である。ただし、二面、一面、灰原各面から出土した小型器種の占める割合は約3%といずれも同じであり、各灰層において、遺物の器種構成における生産比率の失敗率を同じと仮定すれば、どの段階においても同等の生産比率を保っていたものと考えられる。

このうち、小型器種については、第46・47表のとおりである。小型器種としたものは、坏G、坏Gの蓋、平底坏(坏Aを含む)、かえり蓋(平底坏の蓋)、高坏、高台付坏(坏B)、碗、鉢、高台付盤(高台付盤・高盤)、盤、短頸壺、長頸壺である。小型器種の総破片数は1,209片、総重量は53,333gであった。以下各器種ごとに記述する。

このなかで、坏G、坏A、坏Bについては飛鳥・藤

第71図 灰原跡遺物分布概念図(Ⅰ)



原宮発掘調査報告書に習って呼称したものである。

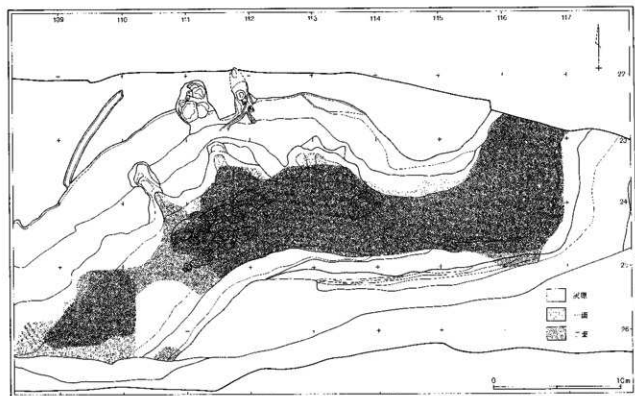
環G（最古の環G・飛鳥Ⅰ期）とは、口径10～11cm、器高3.5cm前後で、口縁部はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、底部外面はへら切りのまゝを原則とする。環Aとは、口径12～13cmで、環Gの直立した口縁部に比べ、口縁部が大きく開く形態をもつ。底部外面は環Gと同じくへら切りのまゝ仕上っている。環B（飛鳥Ⅲ期）は口径15cm前後、器高5cm前後、底部外面をへラケズリし、外方へふんばった高い高台をもつ。いわゆる、高台付環である。

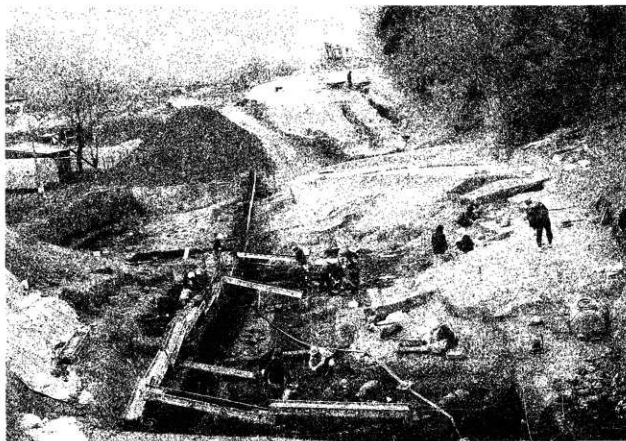
器種の認定については小破片であることから不明瞭な部分も多分に含んでいる。特に、環類、盤類、壺類については計測後に一部変更が生じたものも存在する。

東側灰原の発掘調査における所見と注意点について述べる。調査方法は先にも記したように1mメッシュを既定して層位ごとに上層から掘り進めた。その結果として、灰原面（以下灰原とする）、灰原一面（以下一面とする）、灰原二面（以下二面とする）と層位を分層し遺物を取り上げた。各層位は必ずしも明瞭では

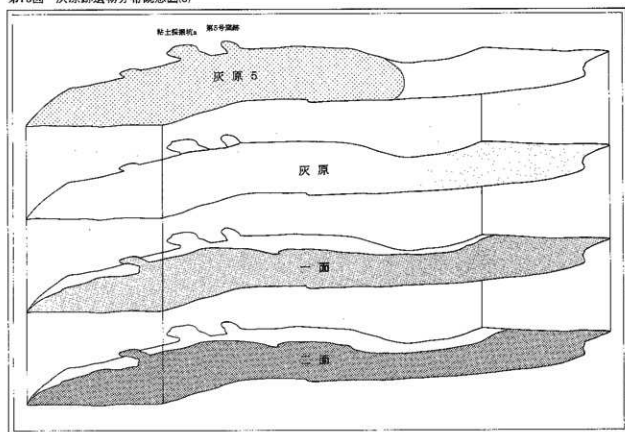
ないが、おおむね堆積層ごとの調査を進められたものと確信する。しかし、調査時点でも明瞭であったが下層から平安時代の環・皿・高台付環などが少量ではあるが検出された。この状況については、第48～50図の出土分布図を見れば明らかである。また、東側灰原出土遺物のうち、小型製品ではあまり明らかにできなかったが、大型製品の壺、甕を整理時において出土状況の詳細を分析した結果、注意を要する点も明らかとなった。第一は、かなりの距離があっても接合関係が認められることである。第117図に示したように最長で約40mにおよび灰原と一面で接合関係があった。また、壺の口縁17は35mの距離で接合関係が認められた。このことがさらに如実に現れたのが甕の口縁部の接合関係である。第132～137図に見られるように、灰原・一面・二面の各層位で接合関係が認められた。大型製品であり重量もある。遺物のもつ特殊性もあるがこの部分を差し引いて考えたとしても層位をまたいで接合関係がこれほど存在したことに驚きを感じた。この点は注意に余りあると考える。

第72図 灰原跡遺物分布概念図(2)





第73図 灰原跡遺物分布概念図(3)



a 坏

坏は、小型の坏Gとやや大きい平底坏とに分類した。

坏G (第76・77図1～54)

坏Gは、灰原跡の各面から検出された。総破片数は136片で小型器種の中に占める割合は11%である。灰原から50片、一面から67片、二面から19片である。総重量は3,429gで小型器種の中に占める割合は6%である。灰原から1,532g、一面から1,550g、二面から347gである。

二面から出土した坏Gは、9、14、19、29、40～43、45、47、51、54である。一面からは1、4～8、10～12、15～18、32～35、39、46、48、50、53である。このほかは灰原およびトレンチから出土しており、全体の器形を残すものではなく全て破片である。

二面から出土した坏Gをみると、13の形態は、底部がやや丸底気味で、体部はわずかに外傾に直線的に立ち上がる。底部と体部の境は明瞭ではっきりしている。体部はやや長く深みである。器肉は全体に薄い。成形は、底部へら切りの後、軽くナデ調整を施す。法量は、口径9.6cm、器高4.1cm、底径7.9cmである。14の形態は、底部がやや平底気味で、体部は外傾に外反気味に立ち上がる。体部はやや短く、器肉は全体に厚い。成形は、底部へら切りのママである。体部下端にロクロ右回転の回転へらケズリがみられるが、へら切り前の削り込みが、そのときのへらの当りの可能性がある。法量は、口径9.8cm、器高3.1cm、底径5.0cmである。19は、丸底気味の底部である。へら切りのママである。底部外周はへら切りの際にあたった回転へらケズリのように見える。40～42はやや丸底気味で、へら切りの後、手持ちへらケズリを丁寧に施している。

一面から出土した坏Gは、1、4、5～8、10～12、15～18、27、28、32～35、39、46、48、50、53である。

1は、体部から口縁部にかけての破片である。内面に自然釉が附着している。焼成は良好で器肉は薄い。底部は欠損して不明瞭であるが、へら切りの後、軽くナデを施したものとみられる。体部は腰をもち緩やかな湾曲をし、口縁部でわずかに開く。4は、焼成良好

で器肉はやや厚い。底部は全面丁寧な手持ちのへらケズリである。5は、内面が灰色、外面は茶灰色、器肉は内外面の色が中間できれいに分離している。底部は、へら切りのママである。7は、体部のやや深い破片で器肉やや厚い。10～12は底部全面手持ちへらケズリである。15は底部へら切りのママ、16はへら切りの後、軽くナデを施している。17は、焼成やや不良で色調は淡茶褐色である。胎土は柔らかく、底部調整はへら切りのママでややへそが出ている。18は、推定口径9.8cm、器高2.2cm、推定底径8.4cmで器高が非常に低い。内面は自然釉が附着している。底部外面は全面へらナデである。28は、推定口径11.9cm、器高4.1cm、底径10.0cmでやや大ぶりである。外面は自然釉が附着しているため調整は不明。形態はやや丸底で口縁部内面に弱い面をもつ。32は、底部平底気味でへら切りのママである。33、39は、底部やや丸底気味でへら切りの後、全面を丁寧な回転へらケズリ調整を施す。器面は内外面とも平滑である。34は底部ナデ調整である。35はやや大ぶりである。底部は全面手持ちへらケズリを施す。46は、外面に自然釉が附着しているため調整は不明、やや丸底の形態をとる。53はやや丸底気味で、底部外面は全面手持ちへらケズリ調整を施す。器面の色調は内外面とも淡灰色で、器肉は褐色である。

灰原出土の坏Gは3、20～26、30、31、36～38、49、52である。3は、体部から口縁部にかけての破片である。器肉は非常に薄く、焼成は良好である。底部調整は、20がへら切りのママでややへそが出ている。21、22、25、26、31は軽いナデ調整。23、24、52が全面手持ちへらケズリ、37、38は回転へらケズリである。

灰原5からは13が出土している。法量は、口径9.6cm、器高4.1cm、底径7.9cmである。器高やや深く、底部は丸底状である。体部は外傾にわずかに内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。底部の整形はへら切りの後、軽くナデ調整を施す。底部外面中央がわずかに凹む。焼成良好で青灰色である。器肉も薄く丁寧な造りである。灰原5の110-25-14グリッド出土であるがこの窯跡の灰原ではなくかなり谷部の下流域であるこ

とから判断して流されたものと考えられる。

周辺地点から出土した遺物をみると環Gの蓋(147、148、152、153)、高盤(313、319)、短頸壺(460)、補強帯をもつ甕(甕の口縁第164図232、235)等が出土し、形態や調整、共存関係から判断して古い段階と考えられる。

平底環(第78～83図55～133)

平底環は、いわゆる環Aと呼ばれるものを含んでいる。環Gと環Aの区分は、体部の立ち上がりや底部の平底化、法量などをあわせて判断した。ただし、第80図の89～93については法量の点で平底環に分類したが体部の形態からすれば環Gに近く、環Gと平底環の中間的形態とも判断できる。第75図で示したとおり灰原跡の各面から検出された。総破片数は173片で小型器種の中に占める割合は14.3%である。灰原から107片、一面から64片、二面から2片である。総重量は3,830gで小型器種の中に占める割合は7%である。灰原から2,459g、一面から1,306g、二面から65gである。

二面から出土した平底環は、115-23-19グリッドから出土した第78図58と112-24-7グリッドから出土した第79図73である。58は推定底径10.2cmである。形態は平底から体部が外傾にやや外反気味に立ち上がる。調整はヘラ切りの後全面手持ちヘラケズリを施す。73は推定口径13.5cm、器高4.4cm、底径10.5cmである。形態は平底から体部が外傾に直線的に立ち上がる。調整はヘラ切りの後全面回転ヘラケズリを施す。

一面から出土した平底環は、第78～81図55、60、64、66、70、72、76、77、81、86、88、90～92、97、98、100、101、103、104、108、109、118、126、128である。

灰原から出土した平底環は、第78図～81図56、57、59、62、63、65、67～69、71、74、75、78～80、82～85、87、89、93～96、99、101、102、105～107、110～117、119～125、127、129～133である。

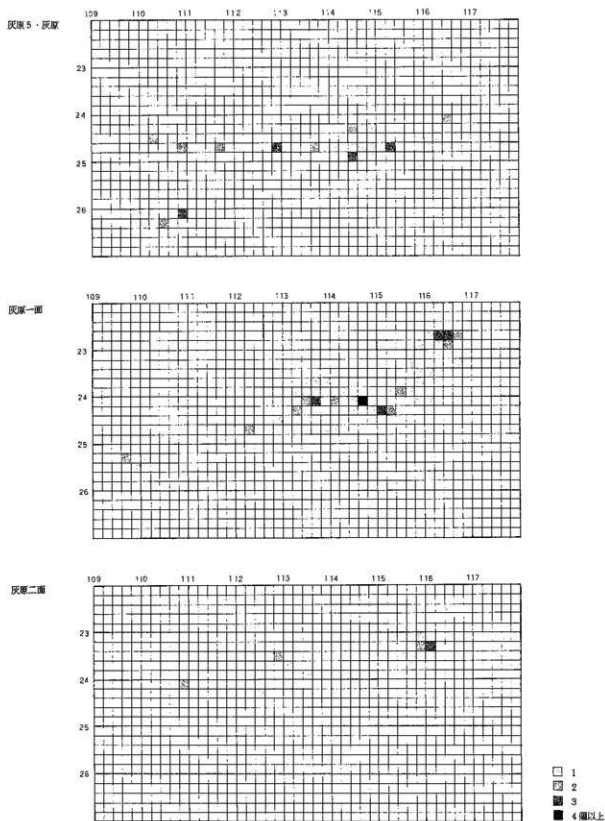
55は、平底で体部が外傾に開き気味に立ち上がる。底部の調整はヘラ切りの後、中心部のへそは残るものの全面手持ちヘラケズリを施す。器面はザラつき焼成不良、色調も灰褐色である。56は、丸底気味で体部が

外傾に大きく開いて立ち上がる。底部の調整はヘラ切りの後、全面手持ちヘラケズリを施す。器面はザラつき焼成やや不良、色調も灰褐色、器肉は赤褐色である。57は底部の破片である。外面はヘラ切りの後、外周部分を手持ちヘラケズリしている。底径も大きく内面は、ロクロ目が明瞭で、青海波の当て具装が見られ盤であった。59は推定底径14.8cmと大きい。60も底径大きく、器肉が厚い。底部外面はヘラ切りのままで、体部との境目にあたる外周は手持ちヘラケズリを施す。61～66、68は全面手持ちのヘラケズリを施す。67は底径は小さいが、底部糸切り離しの後、全面手持ちヘラケズリを施す。第78図70～第79図88までは、底部外面の調整は回転ヘラケズリである。71は、焼成良好で色調は青灰色、器肉は茶灰色である。底部調整は、75、77などと同様に底部中心がケズリ残される。83、87には中心に糸切りがわずかに見られる。78、82、85、86はやや上げ底気味で糸切りの可能性が考えられる。

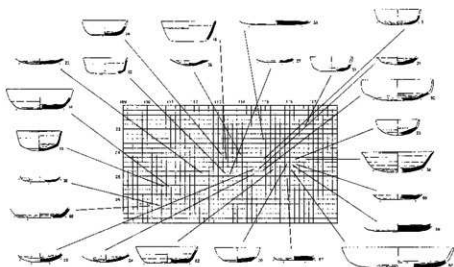
第80図の89～107は体部から口縁部の破片である。89は、体部の立ち上がりが大きく開き他と異なる形態である。口径12.4cm、器高2.9cmと浅い。90は、焼成良好で、色調は青灰色、器肉は茶褐色。ロクロ整形は丁寧に底部外面は手持ちヘラケズリを施す。推定口径12.3cm、器高4.6cm、底径9.4cmである。92は、口縁部内面に浅い沈線を巡らす。96は糸切りの後回転ヘラケズリを施す。105は、口唇部の形態がシャープで、断面三角型をしている。内面にやや幅広い面を向ける。107は焼成良好で、色調は乳白色。口唇部上端には内側に向いた面をもつ。108、109は底部外面回転ヘラケズリを施す。第81図110～125、133は糸切り離しの後、外周を回転もしくは手持ちヘラケズリする。114は、糸切り離しの後、外周回転ヘラケズリを施し、底部外面に「×」印のヘラ描きを施す。125の底部調整は糸切り離しの後外周手持ちヘラケズリを施し、体部下端にも手持ちヘラケズリを施す。126～132はヘラ切りの後、回転ヘラケズリを施している。

133は底部外面の外周に幅6mmほどの沈線が巡る。高台貼り付けのための切りこみの可能性が指摘できる。

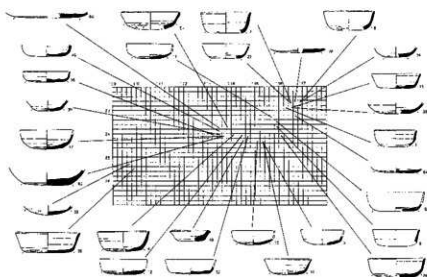
第74図 灰原跡坏G出土分布図



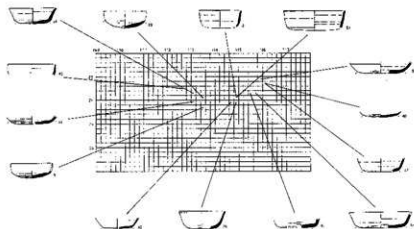
灰庫 5・灰庫



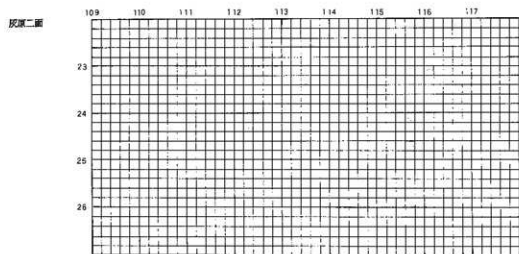
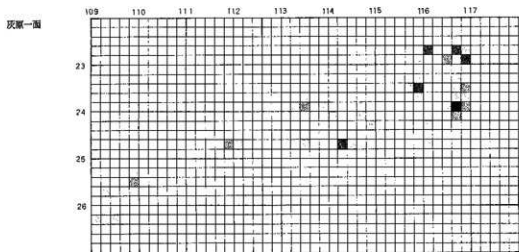
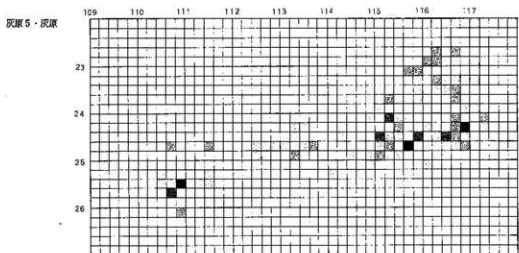
灰庫一圖



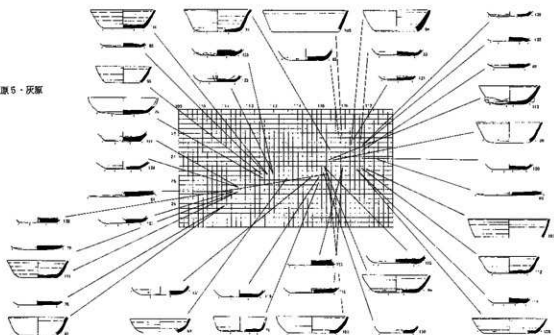
灰庫二圖



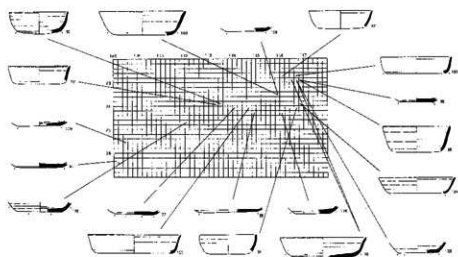
第75圖 灰原跡平底坏出土分布圖



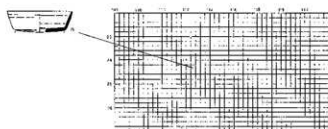
灰原5・灰原



灰原一面



灰原二面



第76図 灰原跡出土遺物(1)



一室



二室



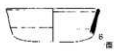
三室



四室



一室



二室



三室



四室



二室



三室



一室



二室



三室



四室



一室



二室



一室



二室



三室



四室



一室



二室



三室

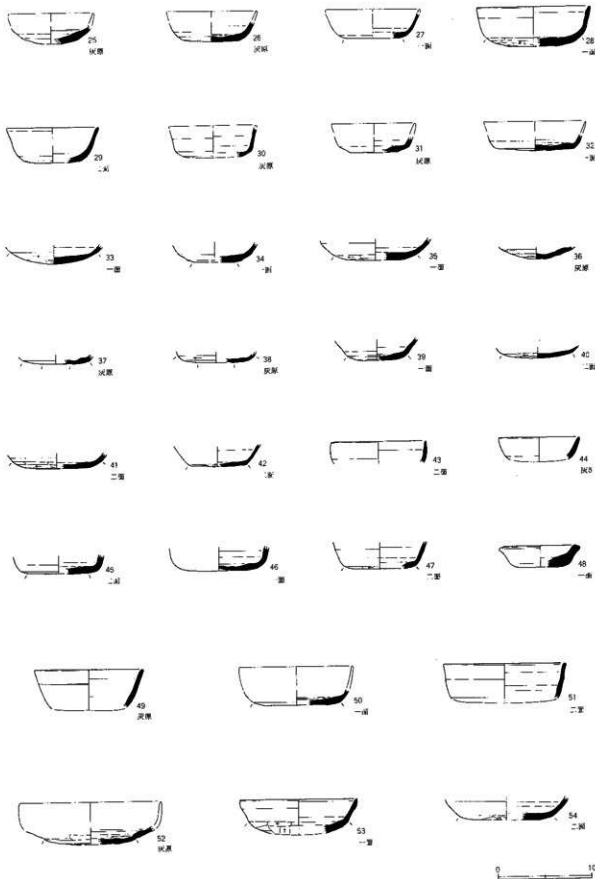


四室

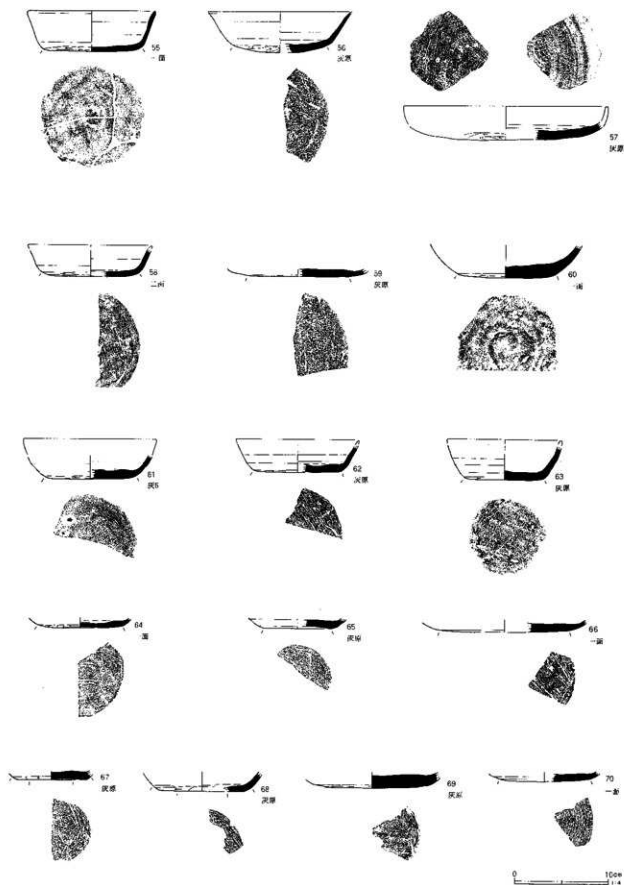


0 10cm
1:4

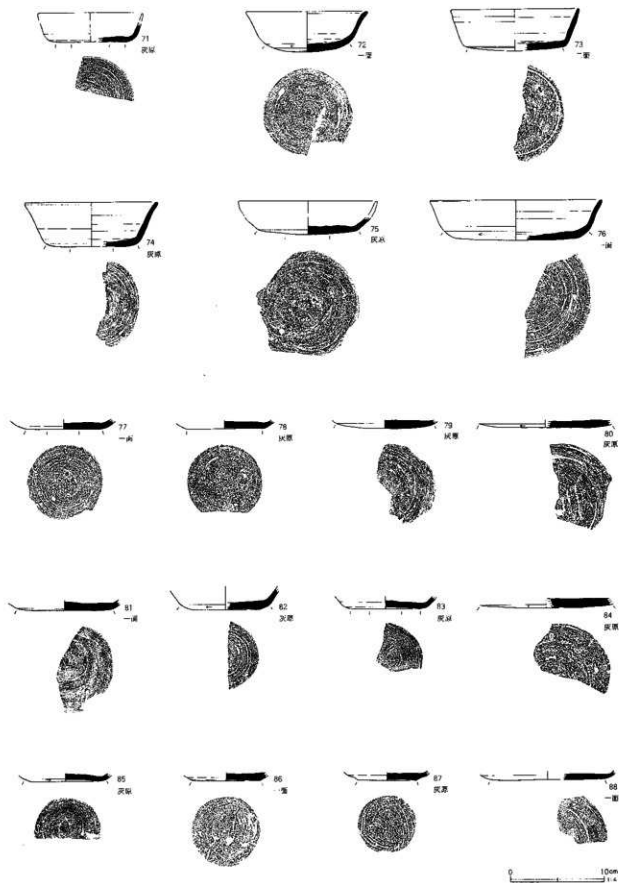
第77図 灰原跡出土遺物(2)



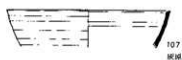
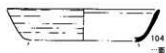
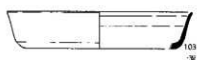
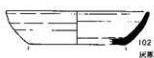
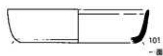
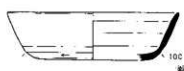
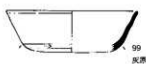
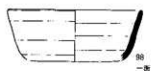
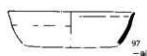
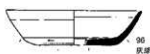
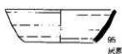
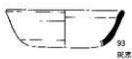
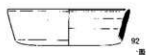
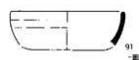
第78図 灰原跡出土遺物(3)



第79回 灰原跡出土遺物(4)

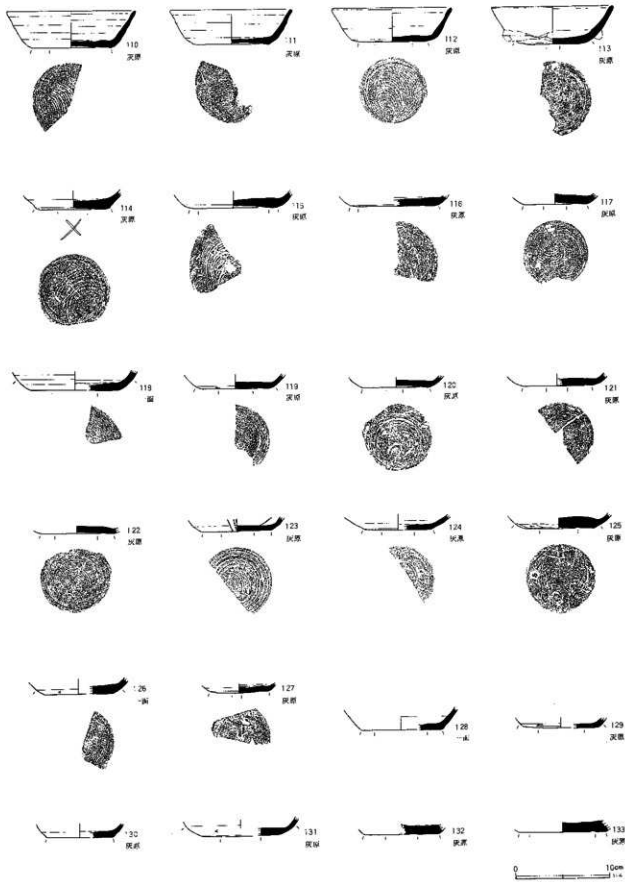


第80図 灰原跡出土遺物(5)



0 10cm

第81図 灰原跡出土遺物(6)



b 蓋

坏Gの蓋 (第84図134~157)

坏Gの蓋は、灰原跡の各面から検出された。総破片数は65片で小型器種の中に占める割合は5.3%である。灰原から42片、一面から16片、二面から7片である。総重量は1,837gで小型器種の中に占める割合は3.4%である。灰原から958g、一面から564g、二面から315gである。

二面から出土した坏Gの蓋は、134、137、139、140、143である。一面からは136、142、144、145、150、154~157である。このほかは灰原およびトレンチから出土したものである。全体の器形を残すものはほとんどが破片である。

二面から出土した蓋はいずれも法量が小さい。口径は、134と143が9.0cm、137と139が9.2cm、140が9.6cmである。つまみの形態は宝珠つまみである。かえりは短く口縁端部より内側に入る。天井部分に張りもち、外面は回転ヘラケズリを施す。貼り付けのつまみ部分がやや窪む。134、143は内面に窯壁片が付着し、137、139、140は外面に自然釉や窯壁片が付着している。

一面から出土した蓋は二面と同様小ぶりの蓋とやや法量を大きくする蓋が存在する。142は口径8.6cm、150は9.9cm、154は10.2cmでありかえりは短く口縁端部より内側に入る。天井部分に張りもち、外面は回転ヘラケズリを施す。136、144、155は10.7~10.9cmとやや大きくする。つまみの形態は宝珠つまみである。かえりはやや長く口縁端部より内側に入る。また、口縁端部からかえりまでの幅がややある。天井部分に張りもち、外面は回転ヘラケズリを施す。

灰原から出土した蓋は、まず、トレンチ出土の135と149である。135は、口径が9.5cmと小型でつまみは乳頭状である。かえりは短く口縁端部より内側に入る。また、口縁端部からかえりまでの幅がややある。天井部分に張りもち、外面は回転ヘラケズリを施す。149は、口径が9.2cmでかえりは短く口縁端部より外側に出る。151は、かえりはやや長く口縁端部より内側に入る。また、口縁端部からかえりまでの幅がややある。天井

部分に張りもち、外面は回転ヘラケズリを施す。138は口径11.0cmとやや大きくである。宝珠つまみが残るが、外面に灰をかぶり正確な形態は不明瞭である。

灰原5からは、147、148、152、153、を検出したが、110-25-4・8・15グリッドのかなり近接した地点から出土している。坏Gでみたのと同様に、第5号窯跡の灰原ではなくかなり谷部の下流域であることから判断して流されたものと考えられる。

かえり蓋 (第85~87図158~240)

ここで示す蓋は、先の坏G蓋以外のかえり蓋である。蓋の組み合わせとしては、平底坏 (坏A) および生産量が少ないがわずかに検出された坏Bと考えられる。第84図158~162は口径がやや大きいために坏Gの蓋であるかは判断できない。中間的大きさである。

かえり蓋は、灰原跡の各面から検出された。総破片数は81片で小型器種の中に占める割合は5.3%である。灰原から42片、一面から24片、二面から6片である。総重量は2,458gで小型器種の中に占める割合は4.6%である。灰原から1,318g、一面から1,020g、二面から120gである。

二面から出土した蓋は、162、163、179、182、205、である。162は推定口径12.6cm、かえりの位置は、坏Gの蓋に比較すると口唇部から1.2~1.3cmとやや短いところにつく。かえりの形態は三角型でシャープである。天井部分にやや張りもち、外面は自然釉が付着する。162は推定口径16.0cmと大きい。口唇部は薄く角張っている。182は端部の破片である。器肉は全体に厚い。205は擬宝珠つまみである。つまみ径は4.0cmとやや大きい。

一面から出土した蓋は、161、167~169、172、173、177、180、185、186、191、197、199、211、215である。

灰原から出土した蓋は、158~160、164~166、170、171、174~176、181、183、184、187~190、192~196、198、201~204、206、207、209、210、212、216、217である。

158~167は法量の差はあるもののかえりの位置が口唇部から1.0~1.2cmのやや短いところにつく。160、

166、167は、天井に張りをもち、口縁部分が外方に反り返る。かえりは下方を向く。口径は160か²14.1cm、166か²14.6cm、167か²13.9cmである。天井部に回転ヘラケズリを施す。焼成はいずれも良好で、色調は灰色である。これらの器種の大器化したものが164、165であると考えられる。164は、推定口径14.6cm、天井部までの器高4.0cmと高い。天井は張りをもち口縁部は湾曲しながら伸びる。口縁部の接地面よりかえりはわずかに内側に取り付く。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面には棒状工具の当りがみられる。全体に器肉は厚く重量感がある。165は、口径17.5cm、天井部までの器高4.2cmと最も高い。天井は張りをもち口縁部は湾曲しながら伸び、わずかに外側に開く。口縁部の接地面よりかえりはわずかに内側に取り付く。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。164と同様、全体に器肉は厚く重量感がある。どちらも、宝珠つまみか²付くと考えられる。168は、焼成普通で、色調は内外面とも淡灰色、器肉は茶褐色である。天井部回転ヘラケズリの後、扁平つまみが貼り付く。天井は平坦であるが口縁部分で大きく内側に器形を屈曲させる。171は、色調が灰色で焼成も良く、かえりは大きく口縁部よりも突出する。推定口径14.5cmで壺蓋の可能性が考えられる。169、170、172～189は口径の大きなかえり蓋となる。かえりの位置は口唇部より1.4～1.8cm奥に貼り付いている。

190、192～217についてはつまみ部および天井部分の破片であり、かえりの形態については不明である。190は擬宝珠つまみか²付く。192は、擬宝珠つまみである。天井部の内面には青海波文がつく。こうした青海波文は、甕や甌の内面の当て具痕と同様の「工」を使用したものと考えられ、甕の内面に多くみられる。193～197、199～201はつまみが明確にしているが、つまみ貼り付けの際の接合技法が特徴的である。つまみは、蓋の天井部外面に切り込み（カキヤブリ）を入れ、接合をおこなっている。切り込みの方法は螺旋状と「×」印状とが存在する。いずれの蓋も口径が大きく、かえりをもつものと推定される。203～205、209は擬宝珠つまみ、つまみ径は203か²3.5cm、204か²2.6cm、205と209

が4.0cmである。202、206、216はつまみの外周部分が高くリング状になり中心はナデつけられ平坦である。207はつまみ部が欠損し天井部外面には糸切り痕を残す。208～211、215は扁平つまみである。212、217はつまみの周縁を押さえつけやや凹み、中心部分が山型に高く突出している。213、216はつまみの中心部分を強く押しつけ円錐状に凹む。214は高く引き伸ばしリング状になる。外面は自然釉が付着している。

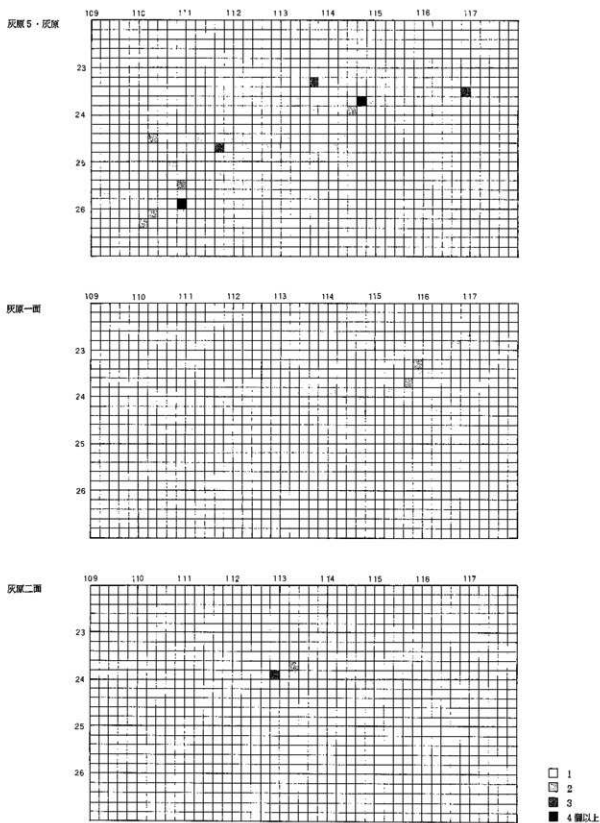
無かえりの蓋（第87図218～239）

かえりをもたない蓋を無かえり蓋とした。無かえり蓋は、灰原跡の一面、灰原・灰原5から検出された。総破片数は471片で、灰原・灰原5から442片、一面から29片である。総重量は8,897gである。灰原・灰原5から8,268g、一面から629gである。

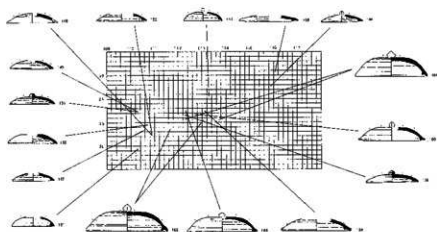
二面からの出土は無い。一面から出土した蓋は222、235の2点であった。222は、還元焼成ではあるがやや甘い仕上がりである。色調は淡灰色。つまみは欠損し天井部の状態は不明である。天井の一部から口縁部にかけて残存し、直線的に伸びる。口唇部の内面に凹みがある。天井部外面に手持ちのヘラケズリを施す。極めて特異な例である。推定口径19.3cmである。235も222同様つまみ部が欠損し、さらに外面が全体に剝離し器面の様相が不明である。しかし、直線的に伸びており、口唇部は外に平坦な面をもち短く鋭角に折り返す。推定口径は20.5cmである。238は灰原5出土である。口縁部は湾曲し、口唇部は丸く折り返す。

これ以外は、灰原出土である。218は、天井を糸切り離した後、扁平つまみを貼り付ける。天井部は平坦で肩に張りをもち口縁部に向け直線的に伸びる。口唇部は折るかえりも無くまっすぐ伸びる。221は天井にやや張りがあり、口縁部の折り返しは爪先立ち状である。223、232は口唇部の折り返しは断面三角状でシャープである。224～228、231、239は口唇部爪先立ち状である。229、234は折り返す屈曲点は丸みをおびる。240については、器肉薄く、焼成は良好で青灰色である。ヘラ切りの後、天井部回転ヘラケズリを施す。ロクロ目の段があり口唇部は外方に開く。内面に自然釉付着。

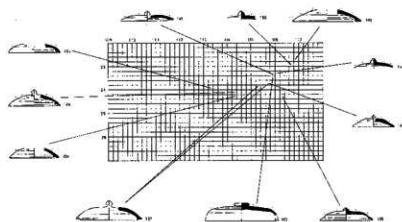
第82図 灰原跡出土分布図



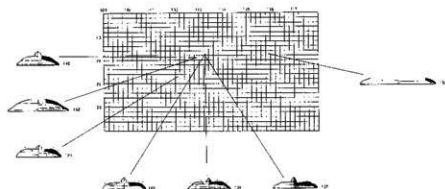
灰原 5・灰原



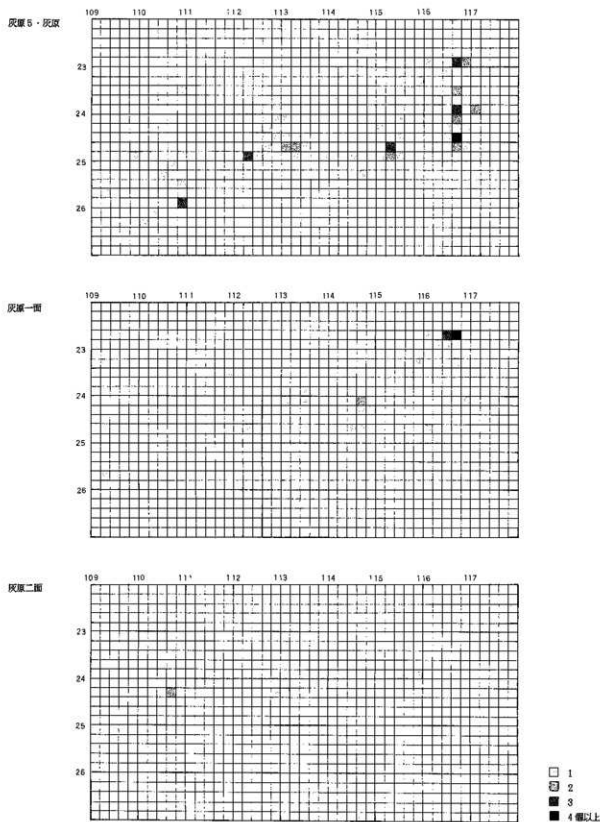
灰原一画

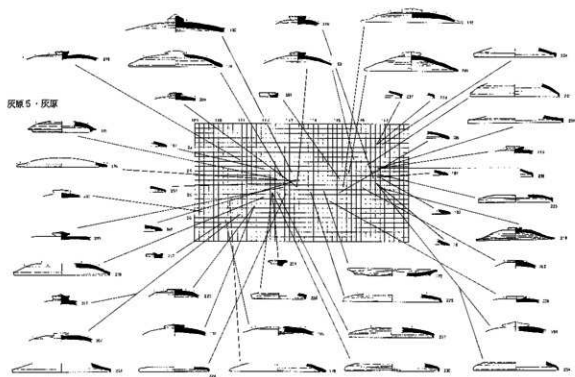


灰原二画

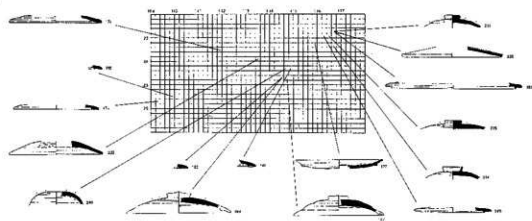


第83図 灰原跡返り蓋出土分布図

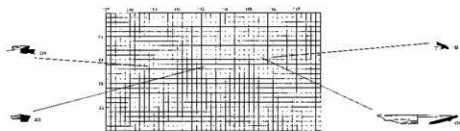




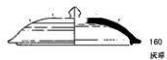
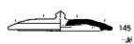
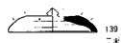
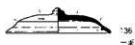
灰椽一面



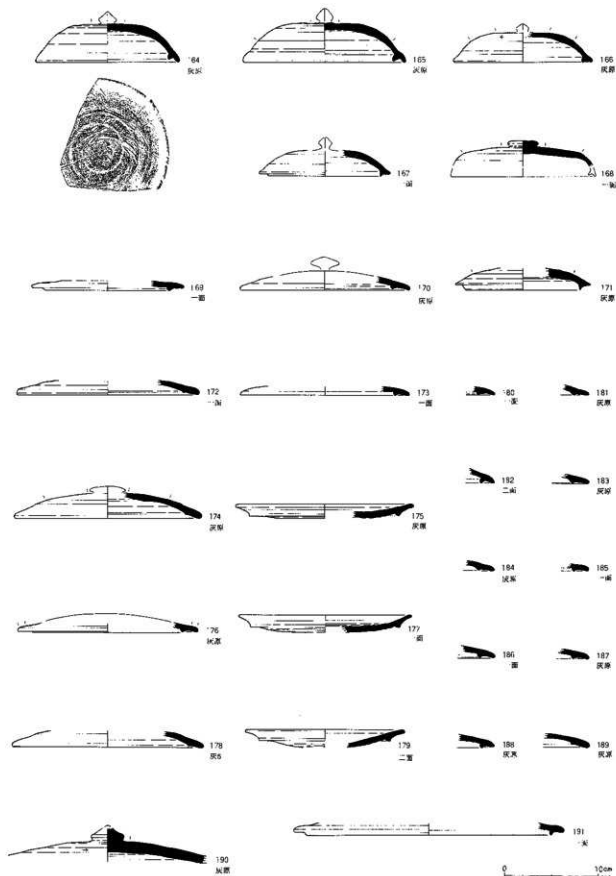
灰椽二面



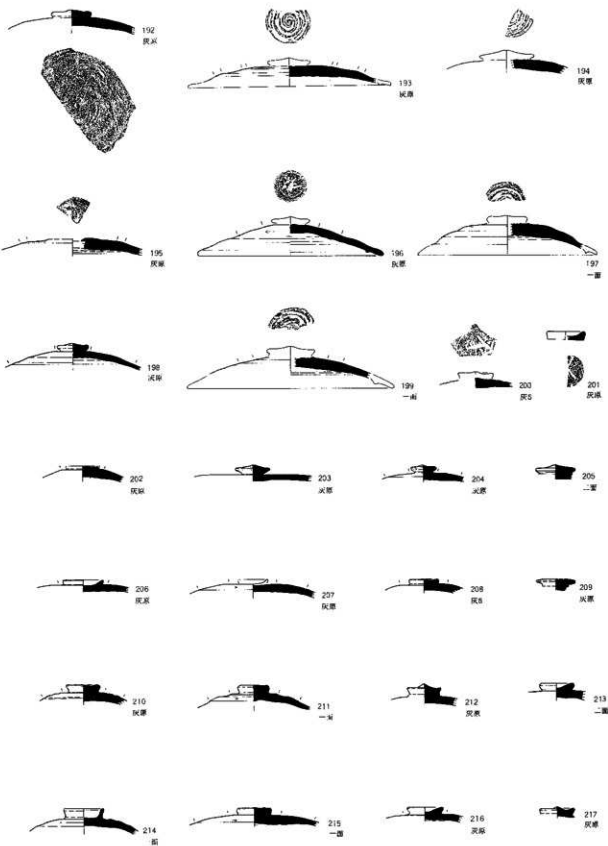
第84図 灰原跡出土遺物(7)



第85図 灰原跡出土遺物(8)



第86圖 灰原跡出土遺物(9)



0 10cm
1:4

第87図 灰原跡出土遺物(Ⅱ)



218
灰原



219
灰原



220
灰原



221
灰原



222
一面



223
灰原



224
灰原



225
灰原



226
灰原



227
灰原



228
灰原



229
灰原



230
灰原



231
灰原



232
灰原



233
灰原



234
灰原



235
一面



236
灰原



237
灰原



238
灰原



239
灰原



240
一面

0 10cm
1/4

c 盤・高台付盤・高盤

盤 (第90~92図241~291)

盤は、ⅢAおよびⅢCを示す。盤の出土状況は第88図に示したとおりである。盤が最も多く出土する層位は一面である。二面からもやや多く検出し、盤がⅢGや、ⅢGの蓋と共に生産されていたものと推測できる。しかも、灰原面からも多く出土しており、各段階で一定量の生産が行われていたこととなる。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は157片で小型器種の中に占める割合は13%である。灰原から57片、一面から71片、二面から29片である。総重量は5,551gで小型器種の中に占める割合は10.4%である。灰原から1,884g、一面から2,600g、二面から1,067gである。

二面から出土した盤は、241、242、244、245、248、255、257、263、271、281、283、287である。

一面から出土した盤は、243、246、249~251、253、258、260、267、269、272、273、275である。

灰原5は、261である。その他は、灰原出土である。

盤の調整は口縁部から内面はナデを施す。底部外面は、坏と同様の調整方法がとられている。大きく4種類に分けることができる。第一はヘラで切り離したママの状態のもの、第二はナデ調整のみのもの、第三は手持ちヘラケズリを施すもの、第四は全体を回転ヘラケズリ調整するものがある。図示したものでみると、43点中二面からはママが2点、ナデが1点、手持ちが1点、回転が8点、一面からはナデ1点、手持ち7点、回転11点、灰原からはナデ3点、手持ち2点、回転5点であった。

形態は器高が低く平底の大きな底部から体部に腰をもち短い口縁部が外傾に直線的もしくは内湾気味に立ち上がる。口唇部の上端に幅5mmほどの面をもつ。この形態は微妙に様々であり、法量の口径は、最小で260の12.0cm、最大で推定口径ではあるが254の36.0cmである。器高は244で2.1cm、275で4.1cmである。法量分化の存在はあると考えられるが、出土資料がいずれも小破片であり、推定口径にとどまり実体が不明瞭で

ある。

214、242、244は口径19.0、20.6、18.8cmと小型である。形態は体部が内傾に湾曲し弱い腰をもつ。口縁部は上方を向き、口唇部は内側に幅5.5mmの面をもつ。底部調整は244がママで、他は回転ヘラケズリである。器肉は薄く、焼成は良好で241が暗灰色、242が褐灰色、244は灰色である。245、248は口径23.9、22.9cmとやや法量を大きくする。形態的特徴は先のものとほぼ同様である。底部調整も回転ヘラケズリである。器肉はわずかに厚く、焼成・胎土とも良好である。246、257は口径22.5、25.1cmである。形態は体部に強い腰をもち口縁部は上方に直線的に立つ。口唇部はやや内側に幅5.5mmの面をもつ。底部調整はいずれもママで、内面に青海波文をもつ。同一個体の可能性がある。器肉はやや厚く、焼成は良好で茶灰色である。282、285も形態は体部に強い腰をもち口縁部は上方に直線的に立つ。口唇部は丸く面はもたない。

250は器高が1.8cmと非常に浅く、推定口径は23.4cmである。形態は平底の底部から口縁が短く立ち上がる。底部外面は回転ヘラケズリ調整である。254は小破片であるが口縁部が大きく外傾に直線的に開く。259は平底の底部で短い口縁部が垂直に立ち上がり面はもたない。底部外面は回転ヘラケズリの後、軽くナデを施す。260はやや丸味をもつ底部で短い口縁部がわずかに外傾に内湾して立ち上がり面はもたない。底部外面は軽くナデを施す。264~266は、器肉全体にやや厚みをもつ。色調は様々であるが口唇部の形態が丸い。特に、264は口縁部外面に幅の異なる2条の沈線を巡らす。また、265は口縁部が波打ち、非クロの成形と考えられる。268は口唇部にやや幅広い面をもち細く伸びる。269、275は器高やや深く3.5cmと4.1cmである。口唇部の面は弱くやや膨らんで外に折れる。底部調整は手持ちヘラケズリである。

290は焼成良好で器面は硬い。色調は灰色で器肉は茶灰色の部分がある。底部は平坦であるが体部の腰は弱く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は内側に面をもつ。底部外面は手持ちヘラケズリである。

高台付盤 (第93図292~309)

高台付盤は皿Bとされている器種である。高台付盤の形態は、盤に「ハ」の字状の低い高台を貼り付けたものである。調整は、回転ヘラケズリを施した底部外面に同心円状に切り込み(カキヤブリ)をつけて高台を貼り付ける。高台部は、ナゲツケにより底部のやや内側に位置したところに貼り付けられている。形態もこのときに同時に整えられられる。

高台付盤の出上状況は、高盤と共に第89図に示したとおりであるが、出上位置図は実測した掲載遺物のみのため二面からの出土は掲載されていない。高台付盤が出土する層位は二面から小破片が出土している。また、一面と灰原からも出土している。

以上のように灰原跡の各面から検出されており、高台付盤と高盤の両方の器種をあわせて計量した。総破片数は80片で小型器種の中に占める割合は6.6%である。灰原から32片、一面から41片、二面から7片である。総重量は5,203gで小型器種の中に占める割合は9.7%である。灰原から1,271g、一面から3,347g、二面から585gである。

一面から出土した高台付盤は293、297、298~300、304、306、309である。その他は、灰原出土である。

293は推定口径22.0cmである。底部中心は器が肉厚く、口縁部にかけて徐々に器肉を薄くする。体部に腰をもち口縁部は外傾に開く。高台部は貼り付けてある。「ハ」の字状に開き、端部に弱い面をもつ。焼成はやや不良である。色調は褐色で器肉は茶褐色である。294は推定口径24.0cmである。底部中心は器が肉厚く、口縁部にかけて徐々に器肉を薄くする。体部の腰は強く口縁部はやや外傾に直線的にたちあがる。貼り付けの高台部は剝離している。剝離部分に同心円状の切り込み(カキヤブリ)がみられる。焼成はやや不良である。色調は褐色で器肉は茶褐色である。

296は口縁部を欠損した高台付盤である。底部の器肉はやや厚く、底部外面は糸切りが中心に残り、外周を回転ヘラケズリする。高台は「ハ」の字状に貼り付く。胎土はきめ粗く、大粒の石英粒と白色粒子が目

立つ。焼成は普通で暗褐色をしている。大型盤の底部切り離し技法として糸切りを使用している。298は推定口径27.5cm、器高5.6cmと深く大型である。底部はほとんど欠損しているが口縁部から高台の欠損部付近まで残存する。形態は平底の底部から口縁部が垂直に直線的に立ち上り、外面は角をもつ。口唇部外面に沈線を巡らし、口唇部上端は弱い面をもつ。調整は底部外面および体部下端に回転ヘラケズリを施す。焼成はやや不良である。色調は淡灰色で器肉は一部茶褐色である。

299~301は高台部分の剝離した底部破片である。剝離部分には沈線状の切り込みを入れている。299と301は2条、300はやや太めの沈線を1条同心円上に巡らす。高台付盤としては、法量がやや小型である。ややもすると、坏Bの可能性もある。

302~308は剝離した高台部分である。302、305は器肉が厚く、「ハ」の字状の高台部が口唇部分でさらに外に開く。303、304、307は剝離した面にボジの部分の沈線を巡り、盤の底部に2条の切り込みを入れ粘土の柔らかい段階で高台を貼り付けたと考えられる。

304と306は高台端部に面をもつ。また、309は推定口径が大きい。高台端部に面をもちその面の中心が凹む。いずれも一面からの出土である。

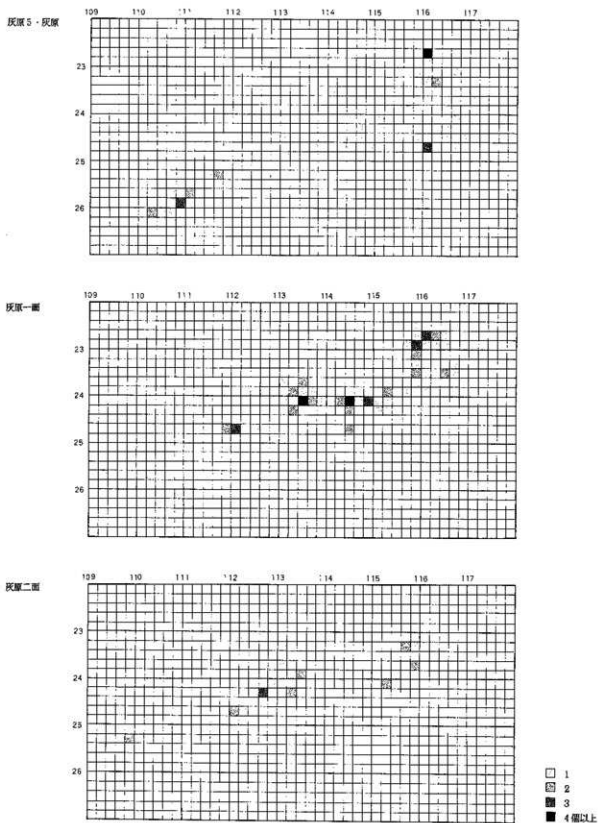
高盤 (第94図310~342)

高盤の形態は、盤に「ハ」の字状のやや高い円筒形の脚部を貼り付けたものである。調整は、底部回転ヘラケズリを施した底部外面に高台を貼り付ける。高台部は、ナゲツケにより底部の中央に位置したところに貼り付けられている。

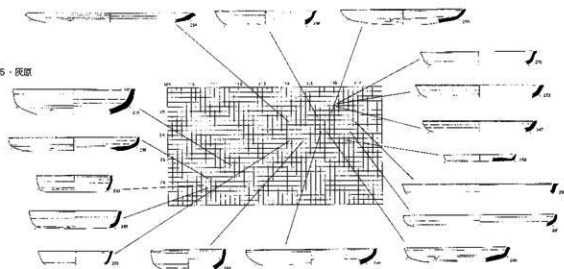
高盤の出土状況は、第89図に示したとおりである。灰原跡の各面から検出されており、出土遺物の計量は前述のとおりである。

二面から出土した高盤は、314、330、332、334である。一面から出土した高盤は310~312、315~317、320、321、323、324、326、327、329、336、340、341である。灰原5は313、333、335である。その他は、灰原出土である。

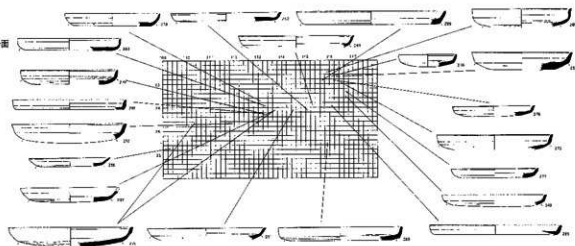
第88図 灰原跡盤出土分布図



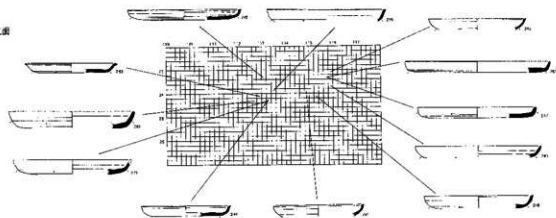
灰層 5・灰底



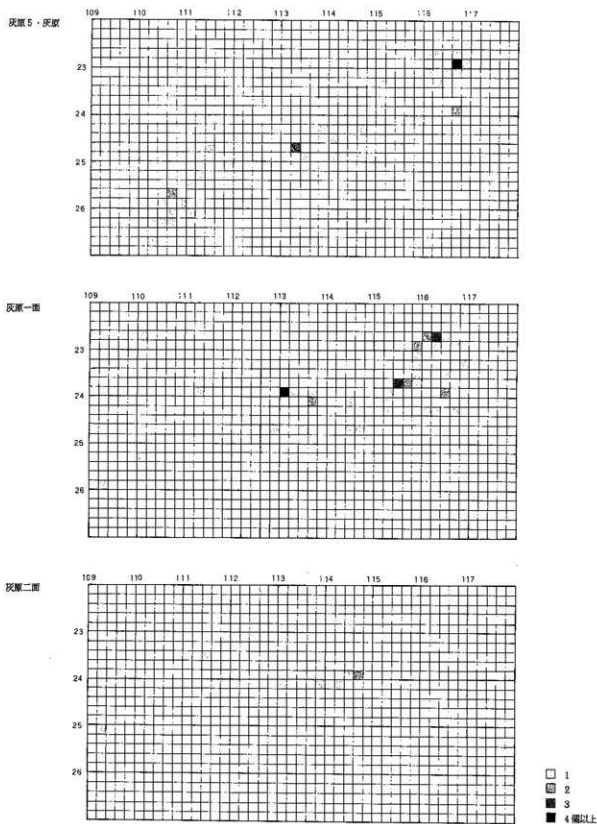
灰層一畫



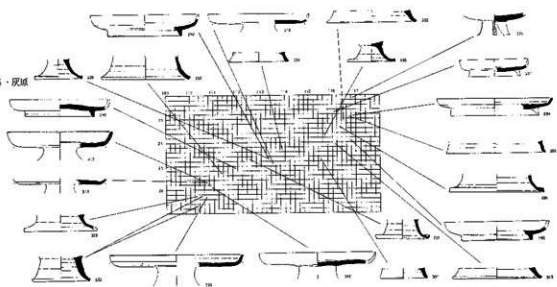
灰層二畫



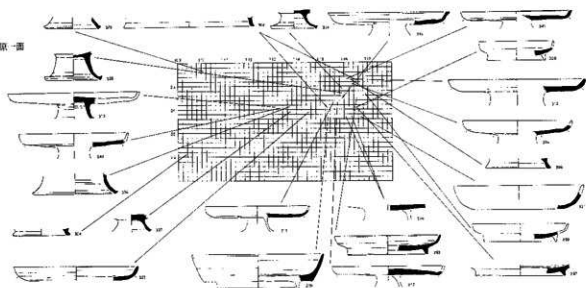
第89図 灰原跡高台付壁・高壁出土分布図



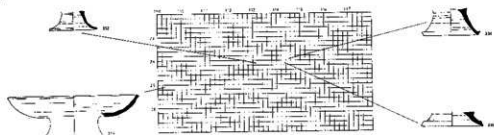
图版 6 · 瓦当



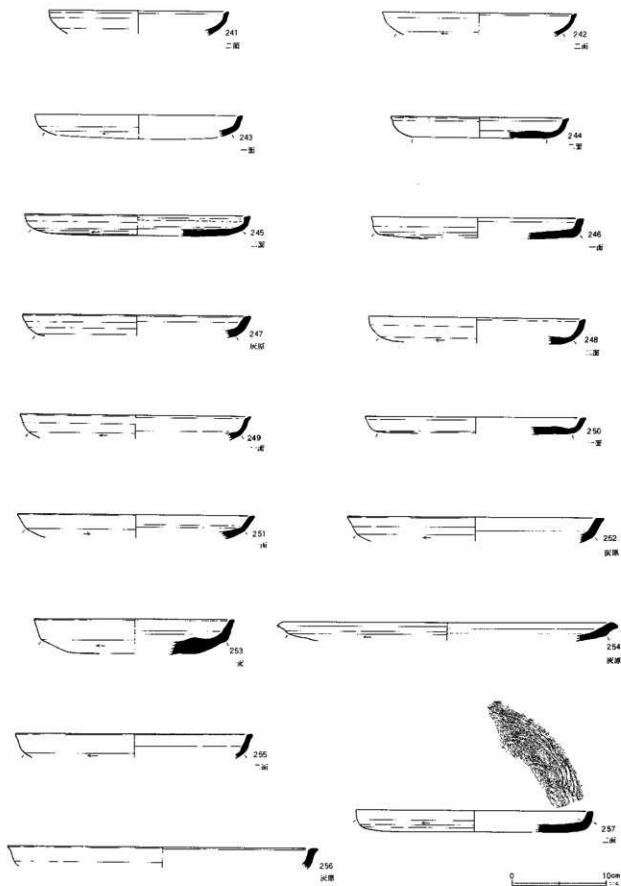
图版 一



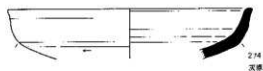
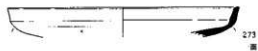
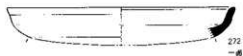
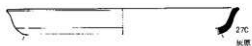
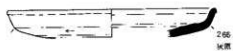
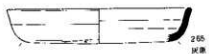
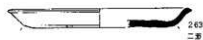
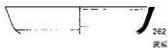
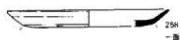
图版二



第90図 灰原跡出土遺物(1)

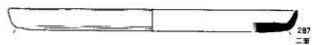
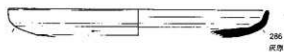
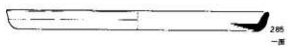
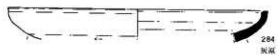
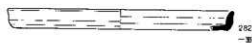
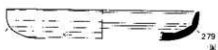
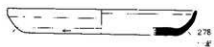
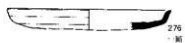


第91図 灰原跡出土遺物(2)



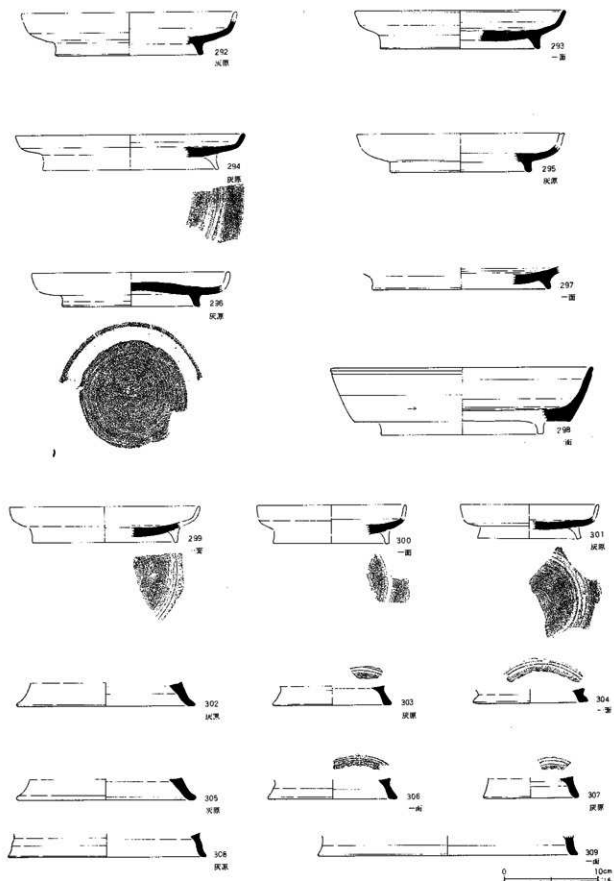
0 10cm 1/4

第92図 灰原跡出土遺物(13)



0 10cm

第93図 灰原跡出土遺物(4)



第94図 灰原跡出土遺物(19)



310
内



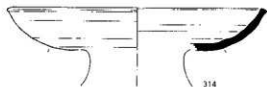
311
一面



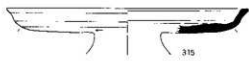
312
裏



313
底5



314
一面



315
裏



316
一面



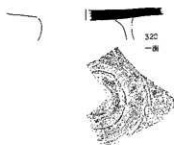
317
一面



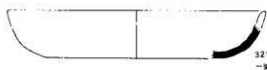
318
底面



319
底5



320
一面



321
一面



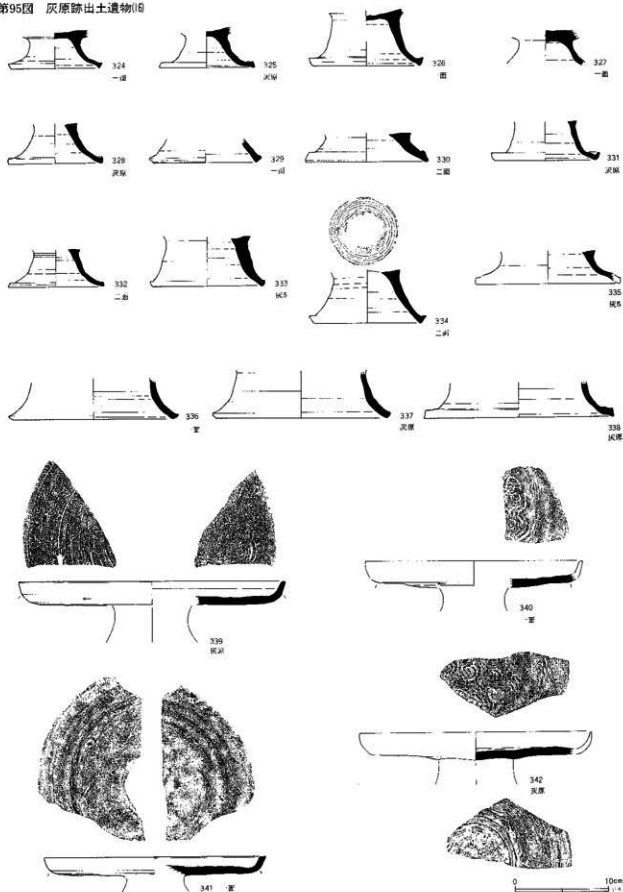
322
底面



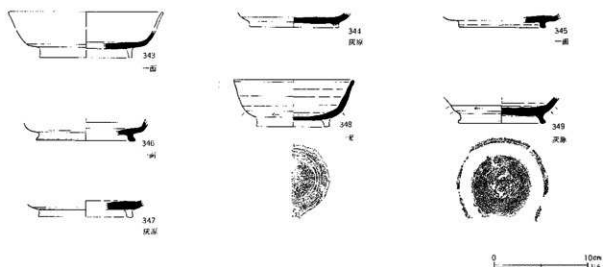
323
一面

0 10cm

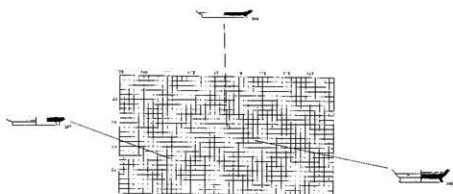
第95図 灰原跡出土遺物(10)



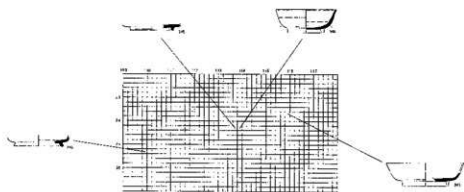
第96図 灰原跡出土遺物(17)



灰原5・祝取



灰原一面



310は高盤の底部から脚部の破片である。脚部はナデツケにより貼り付けられている。脚端部は外に大きく開く。312～315は盤面から口縁部にかけての破片である。313は口径22.0cmとやや小型であるが、他は25.6～27.5cmとやや大きく中型の器種である。314は器高がやや深く、体部が湾曲して立ち上がる。312、315は腰をもち口縁部分が短くやや外傾に直線的に伸びる。口唇部は上方に面をもち先の壁で見たような内側に面をもつものとはやや異なる形態である。底部調整は回転ヘラケズリを基調とする。320は高台貼り付け部分に同心円状の細い刻みをつける。322は脚部が剥離しているカ甲筒もしくは幅の狭い長方形に透かしが切り込まれている。

324～338は脚部の破片である。脚部の高さは最小で330の3.0cm、最大で326の4.6cmである。脚部直径の最小は324の9.4cm、最大は338の20.0cmである。このように形態は、小型のものと大型のものが存在する。「ハ」の字状に開いた脚端部の形態には、側面をもつ。この側面の向きに違いが見られ、側面が下方を向くタイプで小型の脚は324、329、大型の脚は326、333、334である。側面が上方を向くタイプで小型の脚は325、328、332である。大型の脚は338である。このほか、330は脚部の器高が低く「ハ」の字状に開き安定感がある。端部は外側に幅広の押しつけられた面をもつ。331は側面を下方に向けるが、「レ」点状に跳ねる。336、337は端部が方形でそり返しはない。

339～342は高盤の盤面部分の破片である。339、340、342を見ると底部内面に幾重もの青海波文の痕跡が認められる。底部外面は回転ヘラケズリを施す。第90図257の盤とした底部内面にも青海波文が見られた。341の底部内面は指ナゲにより器面の調整を行っている。大きな盤面を成形する方法としては、器面の観察から、指ナゲにより整える方法と、当て具を押し当てて平坦に整える方法が見られた。しかもこのような手法は盤面の大きな高盤に多く見られた。盤として掲載した第90図257の内面にも青海波文が見られた。

d 高台付環 (第96図343～347)

高台付環としたものは、いわゆる、環Bと呼称されている器種である。本灰原跡からの出土状況は第96図に示したとおりである。出土点数は極めて少なく生産器種としての存在は認められるものの、安定した定量の生産とはいえない。末野遺跡の特徴として捉えることができる。また、出土状況は、灰原二面からの検出はなく、一面と灰原からの出土である。総破片数は7片で小型器種の中に占める割合は0.6%である。灰原から3片、一面から4片、二面から0片である。総重量は525gで小型器種の中に占める割合は0.9%である。灰原から213g、一面から212g、二面から0gである。

一面からは343、345、346、348である。灰原からは344、347、349である。

343は、底部から体部にかけての小破片である。底部外面は回転ヘラケズリ調整である。高台剥離部分は、高台付盤の高台貼り付け部分と同様で同心円状の彫り込みの浅い切り込みをもつ。器肉はやや軟質で焼成やや不良、淡灰色である。344も底部から体部にかけての小破片である。ヘラ切りの後、底部外面は回転ヘラケズリ調整である。高台部分は、わずかに残存する。底部と体部の屈曲点は内面に明瞭な変換点をもつ。器肉やや厚く焼成良好で灰色である。345、346は器肉やや薄く焼成良好で器面は堅致である。高台の形態は「ハ」の字状で外側にやや突出した下膨れ状になる。347は高台部分が剥離している。

348も高台部分が剥離しているカ甲筒全体の形態が表現できる。法量は、推定口径12.6cm、底部からの器高4.9cm、環部の底径は7.8cmである。高台の形状については不明である。焼成良好で器壁は堅致である。色調は暗灰色。成形は底部ヘラ切り離しの後、回転ヘラケズリを施す。その後、高台部を貼り付ける。平底の底部から体部は湾曲気味に外傾に内湾して立ち上がる。口縁部にかけて器肉は徐々に薄く仕上げられている。口唇部は直線的に上方に伸びる。349は焼成良好で器壁は堅致である。成形は底部ヘラ切り離しの後、回転ヘラケズリ、高台部ナデツケにより貼り付ける。

e 碗・鉢・すり鉢

碗 (第99図350~366)

碗は、いずれも口縁部分の小破片である。碗としたものの多くは口唇部の外面に沈線をもち、体部の形態が内湾気味に立ち上がるものである。特に、法量による基準はない。出土状況は第97図に示したとおりである。碗が最も多く出土する層位は一面である。二面からも少量検出し灰原面からも多く出土しており、各段階で一定量の生産が行われていたこととなる。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は19片で小型器種の中に占める割合は1.4%である。灰原から6片、一面から11片、二面から2片である。総重量は781gで小型器種の中に占める割合は1.3%である。灰原から260g、一面から445g、二面から76gである。

二面から出土した碗は、352、365である。一面から出土した碗は、350、351、353、358、360~363である。その他は灰原から出土した。

350は小型の碗である。推定口径11.0cm、体部の器肉は均一で口縁部でわずかに薄くなる。口唇部は丸い。内外面ともに自然釉が附着し光沢をもつ。353は器肉やや厚く均一である。口唇部上端に幅8mmの面をもつ。焼成良好で灰色である。354、358は口唇部が丸く膨らむ。355~357は口唇部の上端に幅の狭い面をもつ。359は推定口径17.2cm、口唇部の外面に沈線が巡る。焼成はやや不良で器面は褐色、器肉は赤茶褐色である。360は器肉薄く、体部中央でやや厚くなる。整形は丁寧なロクロ仕上げで口唇部上端に幅の狭い面をもつ。内面に灰が被る。361、363~366は口唇部外面に沈線が巡る。

鉢 (第100・101図367~395)

鉢に分類した器種は様々な形態が存在する。碗よりも法量の大きな鉢、灰原5からの出土である鉄鉢型土器、こね鉢、短頸蓋とすべき小型丸底の鉢、平底の大型鉢などが出土している。いずれも小破片であるため、全体としての器形は推定の部分を含め復元実測した。出土状況は第98図に示したとおりである。鉢が最も多く出土する層位は一面である。二面からも少量検出し

灰原面からも多く出土しており、各段階で一定量の生産が行われていたこととなる。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は197片で小型器種の中に占める割合は17%である。灰原から134片、一面から48片、二面から15片である。総重量は13,524gで小型器種の中に占める割合は26%である。灰原から9,476g、一面から3,135g、二面から913gである。

二面から出土した鉢は、374、387である。一面から出土した鉢は、367~371、373、381、394である。灰原5から出土した鉢は、378~380、389、393である。その他は灰原から出土した。

碗との明瞭な区分はない。ただし口唇部外面の沈線はもたない。また、体部の立ち上がりは外傾に大きく開き内湾して立ち上がる。口唇部の端部に面をもつ点は両者に共通する部分である。もちろん面をもたず立ち上がるものもある。

367は器面の調整は丁寧である。口唇部は上端に幅の狭い面をもつ。焼成良好で灰色である。368、372はロクロ目がややきつく、口唇部上端に幅7mmの面をもつ。焼成不良で褐色である。369、370、373、374は推定口径が25.2cm、30.8cm、27.8cm、29.8cmと大きい。口唇部は内側に向いた面をもつ。焼成やや不良で器壁は柔かい。胎土は粒の大きな片岩粒子を混在する。ややもするといずれも同一器種の可能性もある。375は口唇部上端に面をもつ。口縁部外面に2条の沈線が巡る。焼成良好で器壁は堅致である。胎土はやや粗い。371は外傾に大きく開く口縁部形態である。口唇部は丸い。376、377も同様に口縁部が開き、口唇部の内面に面をもつ。

378~380はいずれも灰原5からの出土である。口唇部が大きく内傾に内湾する。上端に幅広の面をもち、指頭の押圧によるものと考えられるがわずかに中央が凹み、口唇部外端部をシャープに仕立てている。いわゆる鉄鉢型須臾器である。出土量が図示した3片だけであるが、第5号窯跡群・Ⅲ・高台付環・壺などともに焼成していた可能性が考えられる。

381~385は口径が大きく、体部は外傾に内湾して立ち上がる。器肉は厚く、こね鉢と考えられる。381は371と接合した。形態は外傾に大きく開き、口縁部で内湾する。口唇部は鉄鉢型須恵器と同様に内側に向いた面をもち、面の中央部は凹む。口縁部外面に2条の沈線を巡らす。体部外面は工具によるヨコナデ調整を施す。焼成良好であるか灰が付着しやや焼き斑がある。色調は全体に青灰色である。382は体部外面に平行叩きが付く。内面は無文当て具の圧痕を幅2.1cm前後のハケ状工具によって内面底部から口縁部方向にナデ消されている。口唇部はヘラケズリを施し器面を調整している。384は内面の無文当て具痕をナデ消している。外面は灰を被り器面の状態は不明。口唇部はナデによる調整。385は体部外面に平行叩きが付く。内面は無文当て具の圧痕を幅2.9cm前後のハケ状工具によって横方向に丁寧にナデ消している。口唇部は幅広い平坦面をもちヘラケズリを施し器面を調整している。

383~393は鉢として分類したが、短頸の丸底甕である。383は胴部球形である。外面は3cmあたり8本の平行叩きを施し、内面は格子当て具(拓本)による。器肉は非常に厚く焼成は良好。色調は青灰色である。386は小型の丸底鉢と推定される。推定口径は12.6cmである。胴部は細かい格子叩きを下から上に、右から左に施す。内面は無文の当て具である。口縁部は外傾に内湾気味に立ち上がり、やや受け口状になる。胴部中位と頸部に輪積み痕が認められる。焼成良好で色調は青灰色である。387・388は胴部がやや扁平になった丸底の小型鉢である。内外面とも灰を被り黒灰色である。393は小型鉢である。口唇部外面に面をもち上方に伸びる。胴部外面はヘラ状工具によるヨコナデ調整を施す。389、394、395は壺の肩部、または、底部の可能性もある。389はロクロ目が明瞭である。焼成は良好で、いずれも、灰色である。394、395は底部下端に回転ヘラケズリを施す。

すり鉢 (第102図396~412)

396~412はすり鉢である。形態は、器肉の厚い円盤にやはり器肉の厚い体部が貼り付いて立ち上がる。外

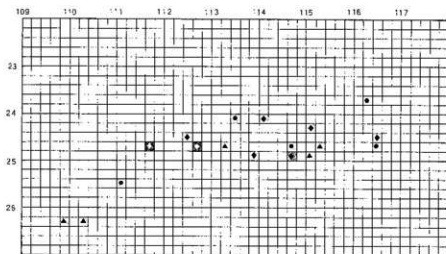
傾に直線的に立ち上がり、口縁部で内湾するものが多い。法量は口径の小さいものは402で12.0cm、大きいものは397で15.2cmである。いずれも、焼成は良好である。

二面から出土した鉢は、406、408である。一面から出土した鉢は、397、399、405、409である。その他は灰原から出土した。

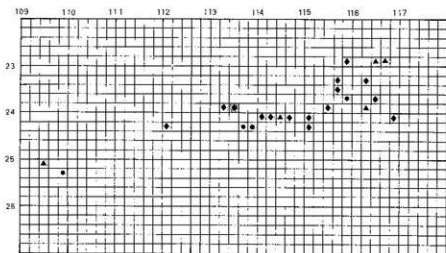
396は、良く焼きしまり灰色である。胎土はきめ細かく丁寧に仕上げられている。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は肥玉し上面に平坦面をもつ。397は推定口径15.2cm、器高8.3cmと大型である。焼成良好で体部大きく開いて立ち上がり、口縁部で内湾し、口唇部に幅8mmの面をもつ。口縁部外面には2.0cmの間隔を置いて2条の沈線を巡らす。399は推定口径14.4cm、器高12.4cm、底径11.7cmである。平底の底部から段をもって体部が上方に立ち上がる。口唇部で内湾する。底部は分厚く中心に径6mmの穴が、調整後に底部外面から内側に向かって開き、貫通している。調整は、底部外面が全面手持ちヘラケズリである。内面には軸が付着している。400は底部外面に乾燥時と考えられるか棒状圧痕がみられる。401は、推定口径13.4cm、器高9.2cm、底径9.1cmである。平底の底部から段をもって体部が上方に立ち上がる。口唇部で内湾する。口唇部外面には2条の沈線を巡らし、上端に幅6mmの面をもつ。底部外面は軽い手持ちヘラケズリ調整を施す。内面には溶解物が付着している。402も同様に2条の沈線が巡る。403は1条の沈線を巡らし、口唇部上端に内側に向いた面をもつ。404は底部内面に体部との剥離面が観察できる。剥離面には2条の同心円文が巡り、カキヤブリと同様の切り込みである。ある種の接合技法と考えられる。406は底部外面に木葉痕が残る。内面は剥離面となっている。407は糸切り痕が残る。408は糸切り離しの後、軽くナデ消している。411は貼り付けの高台をもったすり鉢と考えられ、唯一の出土例である。高台部に窯壁が貼り付いているため詳細な観察はできない。内面は丁寧なロクロ成形で焼成良好、色調は灰色。

第97图 灰原跡・高台付環・高坏出土分布图

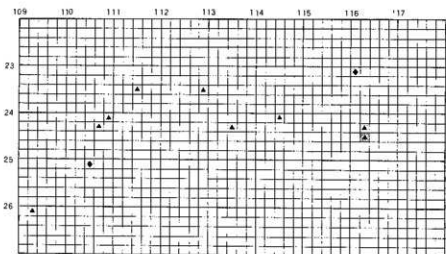
灰原 5・灰原



灰原一面

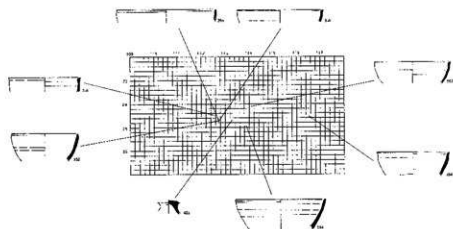


灰原二面

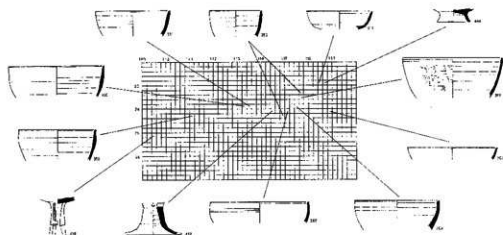


- 灰
- 高台付環
- ▲ 高坏
- 1
- ▨ 2
- 3
- 4個以上

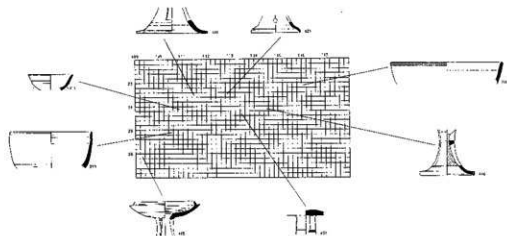
灰原 5 - 灰原



灰原一画

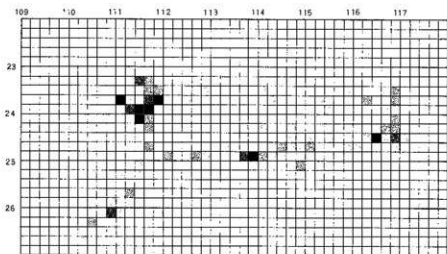


灰原二画

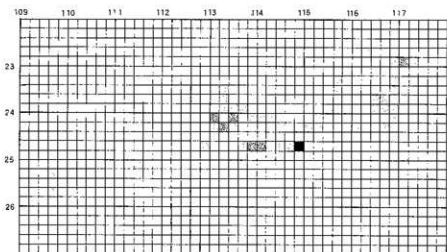


第98図 灰原跡跡出土分布図

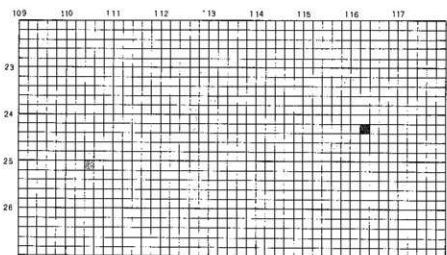
灰原 5・灰原



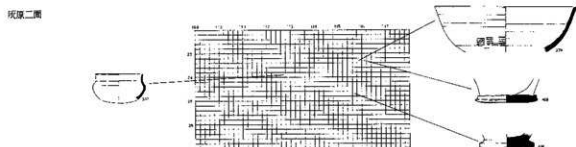
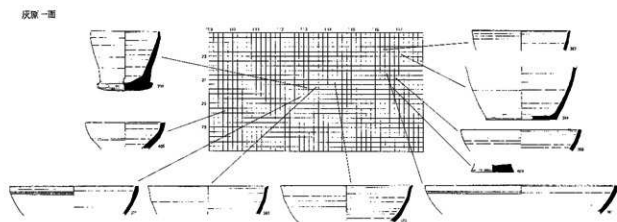
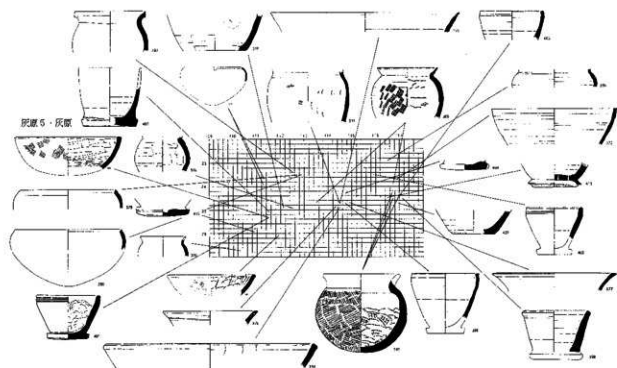
灰原一画



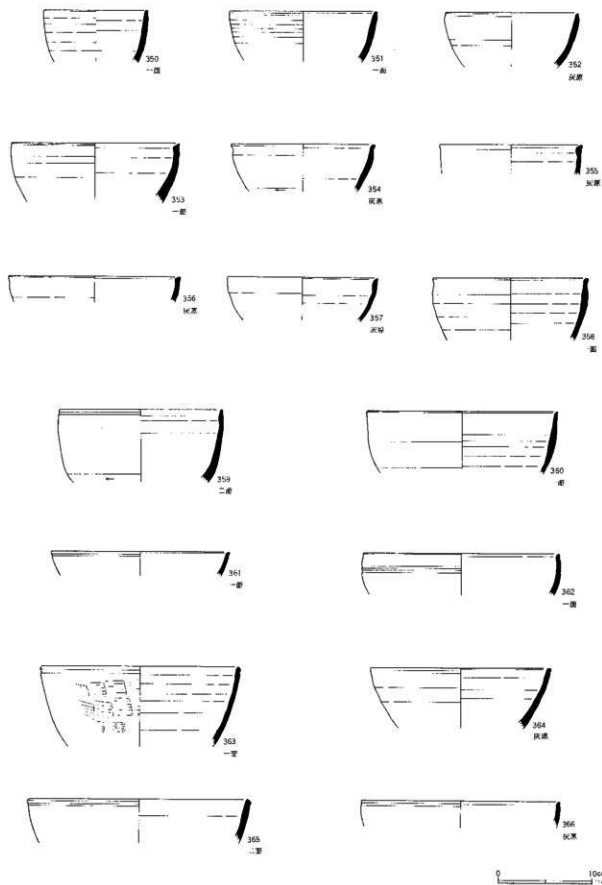
灰原二画



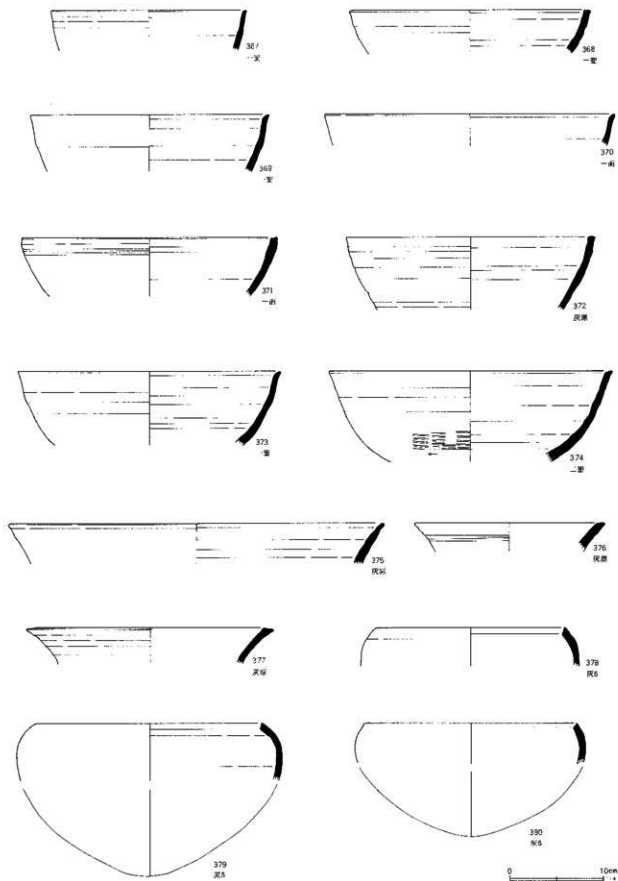
- 1
- ▨ 2
- 3
- 4 個以上



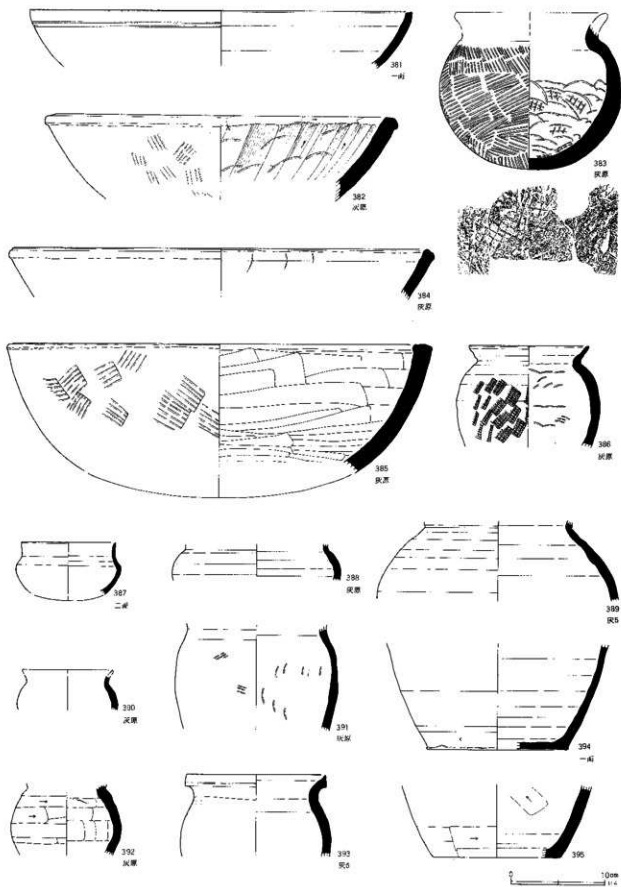
第99図 灰原跡出土遺物⑩



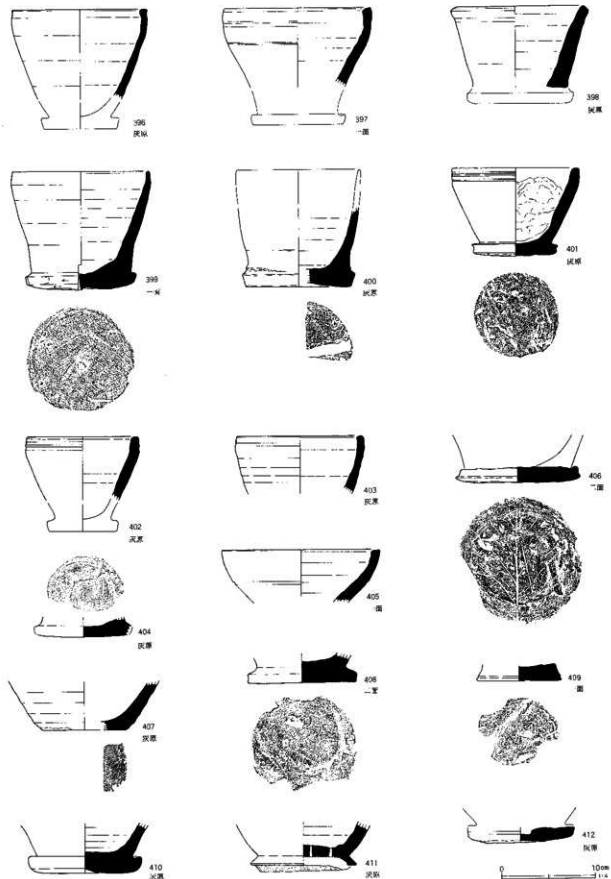
第100図 灰塵跡出土遺物(9)



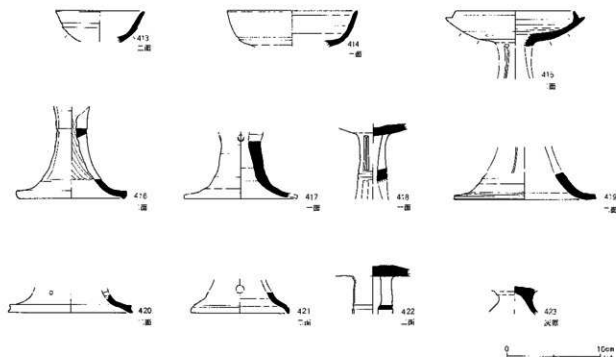
第101図 灰原跡出土遺物②



第102図 灰原跡出土遺物20



第103図 灰原跡出土遺物②



f 高坏 (第103図413~423)

高坏はいずれも小片であるため全体の形態は明瞭でないが、有蓋・無蓋の高坏が出土している。脚部は長脚・短脚が存在する。出土状況は第97図に示した。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は18片で小型器種の中に占める割合は1.4%である。灰原から6片、一面から3片、二面から9片である。総重量は682gで小型器種の中に占める割合は1.3%である。灰原から207g、一面から155g、二面から320gである。

二面から出土した高坏は、413、415、416、419~422である。一面から出土した高坏は、414、417、418である。灰原からは423である。

413と414は無蓋の高坏である。413は体部から口縁部にかけての破片である。体部と口縁部との境に稜をもつ。体部外面は回転ヘラケズリを施す。414は器高の深い身の部分である。成形も丁寧に焼成は良好である。体部と口縁部との境に稜をもつ。415は有蓋高坏である。口径は14.8cmとやや大きい円身である。脚部との接合部分には切り込みが見られ短脚型の透かしが開けられていたものと判断される。体部の外面は回転ヘラケズリ調整。色調は乳白色で焼成良好である。

416、418、419、422は長脚の二段透かしをもつ高坏である。416は長脚二段の二方透かしである。細くしまった脚部が下方に徐々に広がり脚端部で大きく開く。先端部は爪先立ち状に突出する。脚部の外面中央に沈線が1条巡る。内面は絞っている。整形は丁寧に仕上げられ、焼成も良好である。色調は淡白灰色である。418は長脚二段の三方透かしである。細くしまった脚部に細長い長さ3.6cm、幅3~4mmほどの切り込みが三方にある。脚部の外面中央に回転を利用した沈線が2条巡る。整形は丁寧に仕上げられ、焼成も良好である。色調は暗灰色である。419は脚端部のみの破片である。大きく「ハ」の字状に開き、端部先端は側面に幅の狭い面をもち中央が窪み透かしの痕跡がみられ、幅2.1cmの切り込みをもつ三方透かしである。418~422は長脚二段の二方透かしである。細くしまった脚部に細長い長さ3.3cm、幅7~8mmほどの切り込みが二方にある。脚部の外面中央に回転を利用した沈線が2条巡る。417、421には円孔が開く。417は脚部中位に四方に径6mmの円形の穴が貫通している。脚部は下端で大きく開く。420は器部薄く、脚端部は爪先立ち状で中央部分が窪む。割れ口には円孔がみられる。

g 小型壺・長頸瓶・短頸壺・平瓶・横瓶・提瓶など
小型壺 (第106図424・425)

424は、口径5.0cm、残存高7.2cmである。平底と考えられる底部から胴部が球状に立ち上がる。頸部は細くつままり口縁部で開いて立ち上がる。下膨れ状である。調整は、胴部外面は横または斜め方向のヘラケズリ、頸部は器形にそった縦方向のヘラナデである。内面は絞りの痕跡が見られる。口縁部外面には幅8mmの面をもつ断面三角状である。焼成は酸化焰焼成で褐色である。425は口縁部欠損。平底で器肉厚く焼成は酸化焰焼成である。土師器の可能性もある。器面調整はナデにより粗雑である。未製品の可能性もある。

長頸瓶 (第106図426～458)

長頸瓶は、第106・107図に示した。口縁部形態には426に見られるような直線的に開いて立ち上がる素口縁のタイプと428に見られるような直線的に開いて立ち上がり口唇部に緑帯をもつタイプとが存在する。出土状況は第104図に示したとおりである。長頸瓶が最も多く出土する層位は一面である。二面からも検出し灰原面からも多く出土しており、各段階で一定量の生産が行われていたこととなる。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は148片で小型器種の中に占める割合は12%である。灰原から69片、一面から69片、二面から10片である。総重量は6.771gで小型器種の中に占める割合は13%である。灰原から2,920g、一面から3,641g、二面から210gである。

二面から出土した長頸瓶は、444、453、456である。一面から出土した長頸瓶は、427～429、433、435、436、439、441、442、445、448～452、454、455、458である。灰原5から437、443が出土し、その他は灰原から出土した。

426は推定口径11.0cm、頸部長は14.0cmである。細くしまった頸部は、徐々に口縁部に向け開いて立ち上がる。口唇部で外に大きく開き垂れる。上方に伸びる素口縁のタイプもやや異なる。口縁部分に窯壁の塊が付着している。調整はロクロ整形形である。外面中位に1

条の沈線が巡る。内面下半には絞りの痕跡がある。427は口径11.6+αcm、頸部中央の径6.0cm、残存長20.0cmと非常に長い。器肉厚く重量感がある。器面はわずかにザラつくものの焼成は非常に良く、自然釉がたれ良好な仕上がりをみせる。口唇部は欠損する。頸部中央にロクロ回転を利用した2条の沈線が巡る。428は口径10.4cm、頸部中央の径5.0cm、残存長10.5cmである。器肉は頸部下端から徐々に薄くしながら外傾に開いて立ち上がる。器面は平滑に仕上げられ、整った形態である。口唇部は幅1.0cmの緑帯をもつ。緑帯は断面三角状をなし、上方に尖り、下方にもわずかに伸びる。焼成は非常に良く、自然釉がたれ良好な仕上がりをみせる。頸部中央にロクロ回転を利用した1条の沈線が巡る。胴部との接合部分で欠損し、頸部の内面調整粘土が胴部内側にはみ出している。口縁部分に窯壁の塊が付着している。429は頸部の破片である。下部は器肉厚く、内面には絞り込んだ痕跡を残し、上半はロクロナデによって消されている。430は内面に粘土の巻き上げ痕が残る。431は広口の口縁である。胴部との接合部分で剥離している。胎土ややザラつき重量感に欠ける。432は器肉薄くやや小型の口縁部分である。頸部外面には2条の沈線が巡る。433は口唇部に緑帯をもつ。この緑帯は中心部が指頭王痕により凹む。434は頸部と胴部の接合部の始末がきちんと成されている。

438～444は長頸瓶の頸部と判断した。「ハ」の字状に開く高台部が貼り付く。いずれも内底面には自然釉が付着している。438、443の底部外面には「一」のヘラ記号が付く。444は「ハ」の字状に開くやや高い高台が付く。

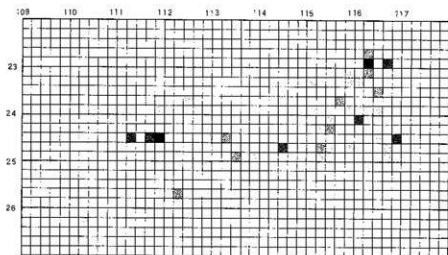
446～458は胴部の破片である。いずれも肩部に強い屈曲をもち、肩部および胴部に文様を飾る。

446～449、452は胴部に上下に各1条の沈線区画を施し、その中に波状文を施文している。胴部下端は回転ヘラケズリ調整を施す。内面はロクロ整形で上端に数条の工具痕が見られる。450は肩部に波状文が施文されている。

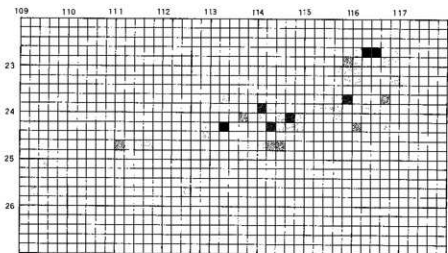
451、453～457は肩部および胴部に押し引き描文

第104図 灰原跡長頸瓶出土分布図

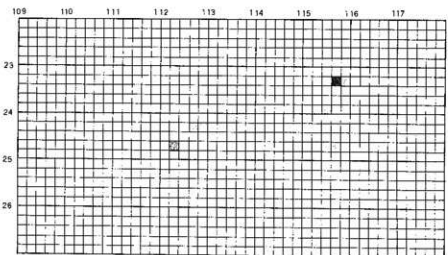
灰原5・灰原



灰原一面

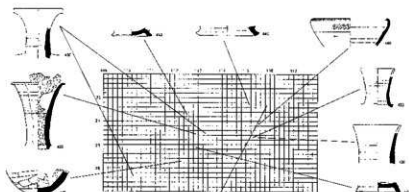


灰原二面

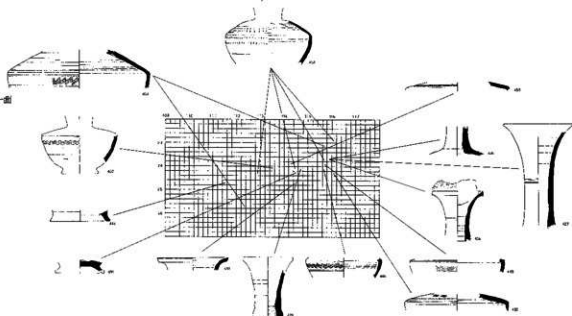


□ 1
 ■ 2
 ■ 3
 ■ 4以上

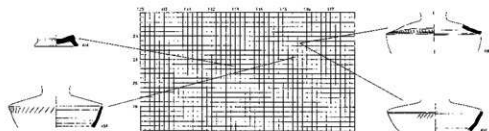
灰厚5・灰厚



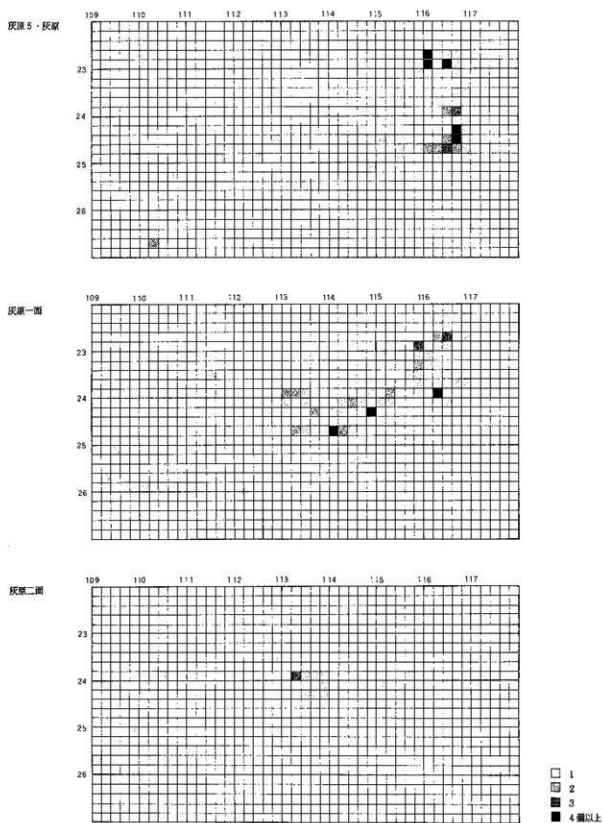
灰厚一面



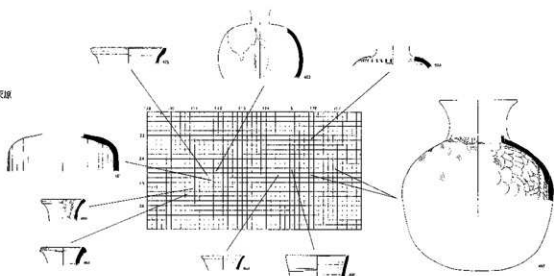
灰厚二面



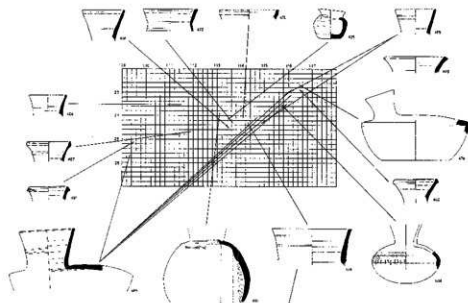
第105図 灰原跡短頸壺出土分布図



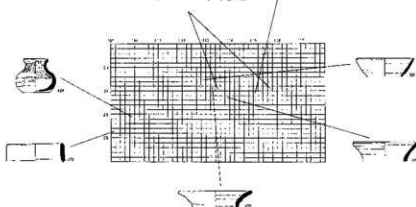
灰层 5・灰层



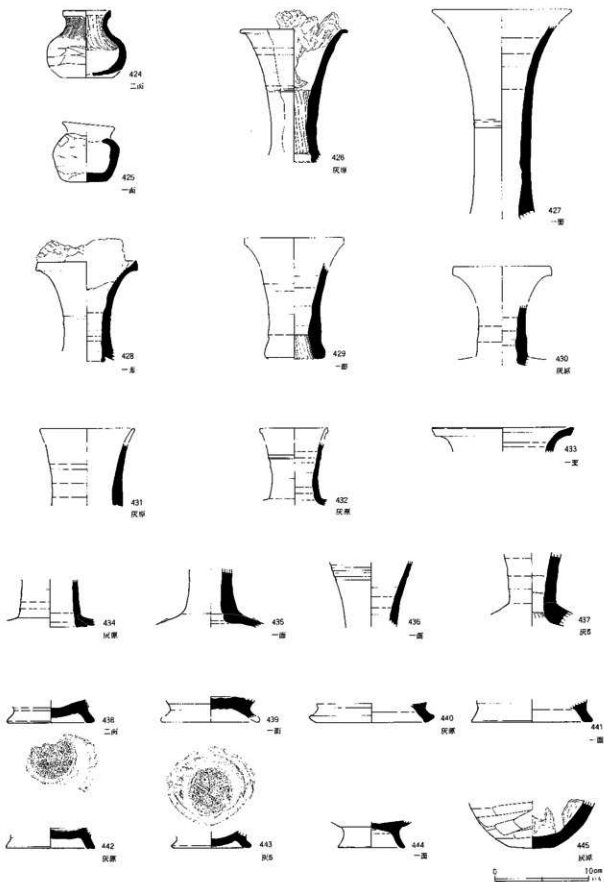
灰层一面



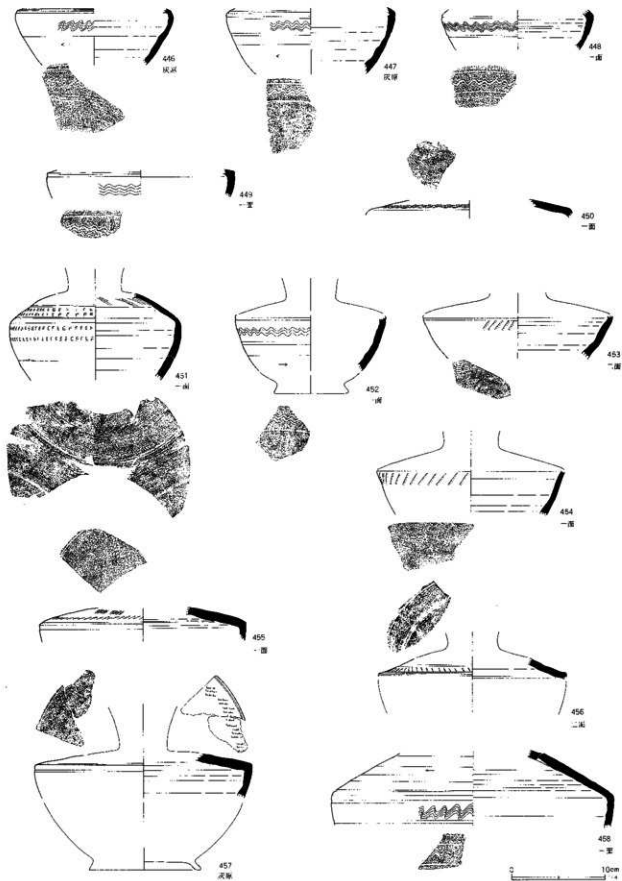
灰层二面



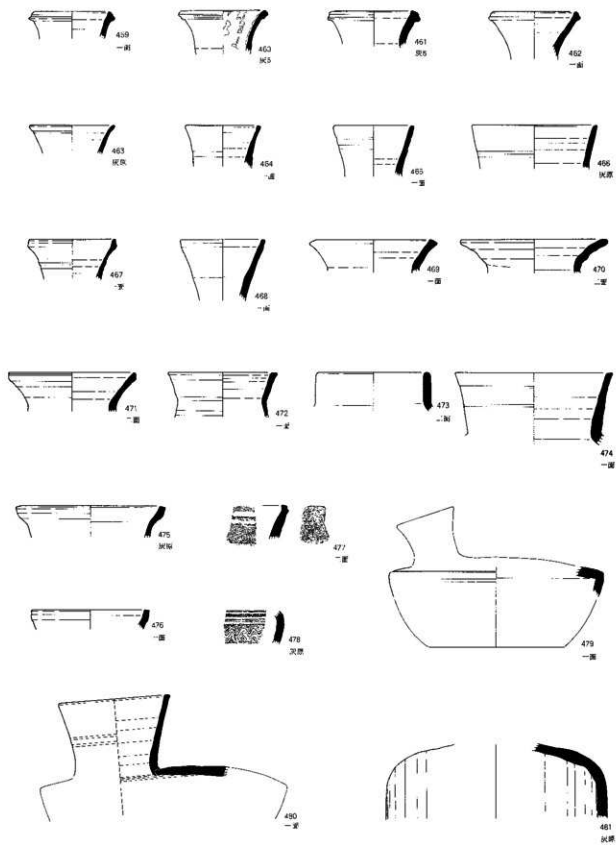
第106図 灰原跡出土遺物23



第107网 灰原跡出土遺物24

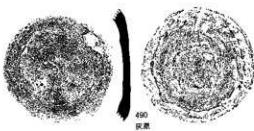
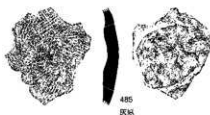
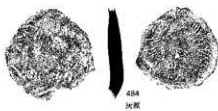
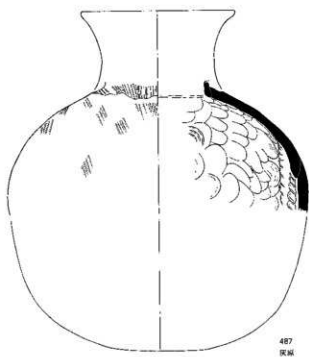
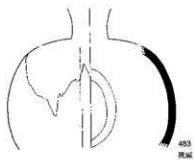
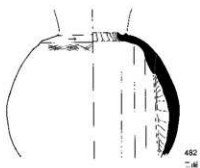


第108図 灰原跡出土遺物(25)

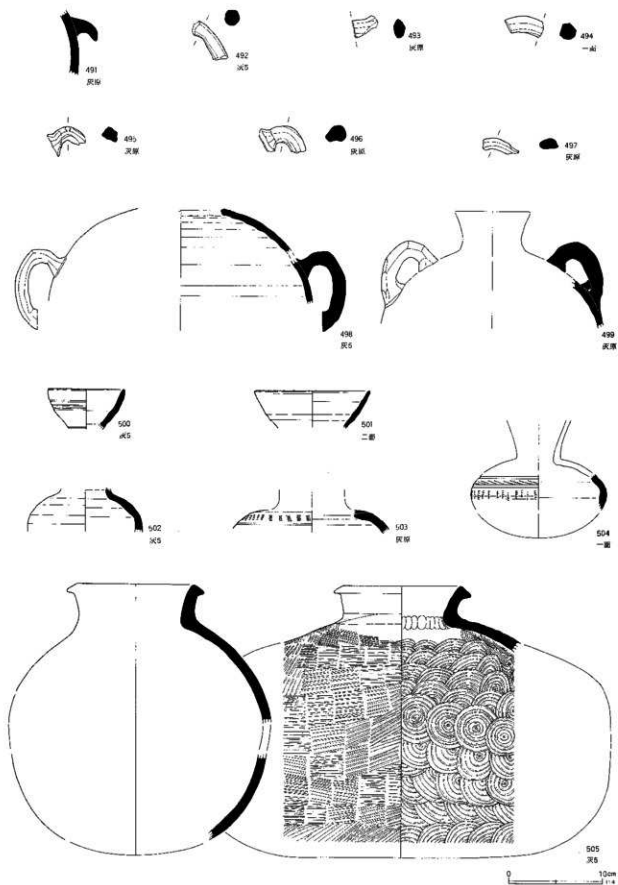


0 10cm
1:4

第109図 灰原跡出土遺物②



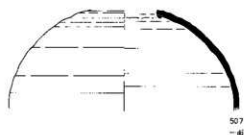
第110图 灰原跡出土遺物⑦



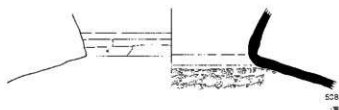
第111図 灰原跡出土遺物②



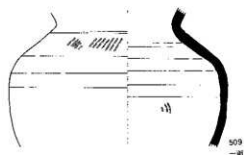
506
灰原



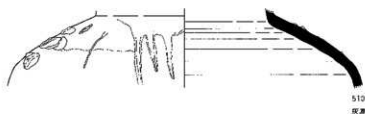
507
一面



508
一面



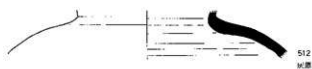
509
一面



510
灰原



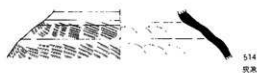
511
灰原



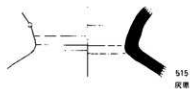
512
灰原



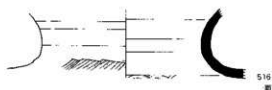
513
一面



514
灰原



515
灰原



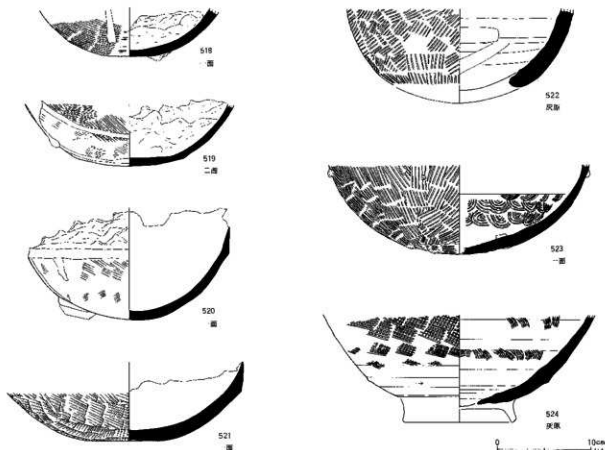
516
面



517
灰原

0 10cm
1/4

第112図 灰原跡出土遺物29



が施文されている。451はやや張りのある形態である。器肉薄く、焼成良好で灰色である。肩部と胴部にそれぞれ二段で巡る。工具は櫛歯3本で左横方向に押しつけて左から右方向に施文する。肩部内面は口縁部に向かって絞り込んだ筆跡が見られる。

453は櫛歯5本で左横方向に押しつけて左から右方向に施文する。焼成やや不良で淡灰色。454は櫛歯8本で左横方向に押しつけて左から右方向に施文する。焼成やや不良で淡灰色。455は肩部に押し引き櫛描文が施文され、中央部分には格子叩きの痕跡がみられる。焼成良好で器面は堅致である。457も同様である。同一個体の可能性がある。456は櫛歯8本で左横方向に押しつけて左から右方向に施文する。焼成やや不良で淡灰色。

短頸壺・瓶 (第108図459～478)

459～478は瓶類の口縁部である。全体の形態が不明なため、器種の認定はやや不明瞭である。ここでは短

頸壺とした。

短頸壺は、第108・110図に示した。口縁部形態には459に見られるようなやや外反して直線的に開いて立ち上がり口唇部に縁帯をもつタイプと464に見られるような直線的に開いて立ち上がる素口縁のタイプとが存在する。

出土状況は第105図に示したとおりである。短頸壺が最も多く出土する層位は一面である。二面からも検出し灰原面からも多く出土しており、各段階で一定量の生産が行われていたこととなる。

灰原跡の各面から検出されており、総破片数は131片で小型器種の中に占める割合は11%である。灰原から58片、一面から62片、二面から11片である。総重量は9,061gで小型器種の中に占める割合は17%である。灰原から3,819g、一面から4,419g、二面から743gである。

二面から出土した短頸壺は、470、471、473。一面か

ら出土した短頸壺は、459、462、464、465、467～469、472、474、476である。灰原5から460、461が出土し、その他は灰原から出土した。

459～462は口縁部が外傾に外反して立ち上がる。口唇部には強い緑帯が表現され、沈線が巡る。463、467、471は口縁部が外傾に外反して立ち上がる。口唇部には弱い緑帯が表現され、沈線が巡る。

464～466、468は緑帯をもたず直行する素口縁である。口唇部は幅の狭い平坦面をもっている。469、470は大きく外傾に開く。器肉厚い。473は短頸壺の口縁部の可能性がある。

474は直口壺の口縁部と考えられる。推定口径16.7cm、口縁部残存高7.6cmと大型である。形態は直線的に外傾に立ち上がり、口唇部上端に幅7mmの面をもつ。口縁部外面に二条の沈線が巡る。全体に自然釉がかけられ、色調は黒灰色である。

平瓶（第108図479・480）

479、480は一面から検出された平瓶である。479は肩部の破片である。480は天井部分から口縁部にかけての破片である。口径は11.9cmである。天井部内面を観察すると、クロロ目の中心から寄ったところに口縁を開け、接合方法は天井部の上に口縁部を載せ、内側に薄く粘土を撫でつけて貼り付けている。口縁部は外傾に直線的に立ち上がる。口唇部上端に幅6mmの面をもつ。口縁部外面に2条の沈線が巡る。

横瓶（第108図481・第109図505）

481は灰原から検出された肩部の破片である。全体の形態は不明である。側面を下にしてクロロ整形したものと考えられる。天井部の一部に口縁部を接合した際についたと考えられるナデの痕跡がわずかに残る。焼成良好。器面には自然釉が付着している。505は口縁部から胴部にかけて残存する。口径は12.5cm、器高28.6cmである。形態は口縁部の立ち上がりが短く、口唇部には緑帯をもつ。緑帯は幅1.3cm、断面三角状で下方を向く。胴部は外面に3cmあたり9本の細かな平行叩きを施し、内面には青海波文の当て具痕が残る。口縁部と胴部との貼り付けは丁寧な仕上がりで、内

面には指頭押さえの後軽いヘラケズリ調整、外面は指によるナデつけを施す。焼成は良好。色調は橙褐色である。

提瓶（第109・110図482～499）

二面から出土した提瓶は482である。一面から出土した提瓶は494である。灰原5からは492、498で、その他は灰原出土である。

482～490は提瓶の胴部破片である。提瓶の器面調整はナデ調整と叩き調整の二種類が存在する。ナデ調整されているものは482である。483もナデ調整であるが、フラスコ形である。484～489は平行叩きを施し、その後、カキ目か施されている。

491～499は提瓶の耳の破片である。鈎状の形態と環状の形態が検出された。498は平安時代の長頸壺の破片と見られる。第64図の口縁部が載るものと推測される。

甕（第110図500～504）

500～504は甕の小破片である。500は灰原5から、501は二面から出土した口縁部の破片である。500の口縁部外面には数条の沈線が巡る。口唇部は上方に伸び面をもたず直線的にそのまま立ち上がる。波状文などの文様の施文はない。502は灰原5から出土した。短頸壺の可能性もある。503は灰原から、504は一面から出土した胴部の破片である。503は張りの強い球形形状をした破片で、櫛歯4本の押し引きによる櫛歯文を施文する。下方には沈線による区画線を引く。504は文様が二段構成で1条の沈線を三本描きその中に文様を飾る。上段は斜方向に押し引き櫛歯文を、下段は縦方向に押し引き櫛歯文を施す。

壺（第111・112図506～524）

506～517は壺の頸部の破片である。506は頸部にも平行叩きを施し丁寧に撫で消している。517は頸部外面に棒状工具により浅い条線を縦方向に描く。518～524は丸底壺とみられる。518～521は内面に溶解物が付着する。いずれも平行叩きがみられ、524は格子叩きを施す。底部に剥離面が見られ高台の存在が推測できる。

h 甗 (第113図525~533)

甗は第113図に示した。灰原5から出土した甗は、525、529、533である。一面からは531でその他は灰原出土である。

525は推定口径28.4cm、器高23.9cm、底径は20.4cmである。出土地点は灰原面と灰原5から出土した破片が接合したため便宜的に灰原5の帰属とした。胴部は直線的に外傾に立ち上がり、口縁部分で外方に開く。口唇部は指先のつまみ上げにより断面三角形をした緑帯状の平坦面をもつ。口縁部から7cm下方に横ナデ調整により上方に反り上がった断面三角状の髷が貼り付く。底部は内側に幅8mmのヘラケズリ調整を施す。焼成良好で色調は青灰色である。526も同様の形態をとる。527は甗としたが口縁部分の破片であり器種の断定はできない。口縁部横ナデ、胴部に平行叩きを施し、内面は丁寧なナデ調整されている。

528は取っ手部分が剥離している。剥離部分の断面は縦3cm、横4cmの長方形で角柱の取っ手が貼り付いていたものと推測される。胴部外面は平行叩きを施し横方向の沈線が巡る。内面は無文の当て具をナデ消している。焼成良好で色調は青灰色である。529は胴部から底部にかけての破片である。胴部外面は平行叩きを施した後、横方向にヘラ状工具によるナデが施され数条の沈線が巡る。内面はクロコ整形による丁寧な横ナデを施す。底部は多孔式の形態である。530は推定口径32.8cm、残存高19.7cmである。灰原面から出土した破片である。胴部は湾曲気味に外傾に立ち上がり、口縁部分で外方に大きく開く、口唇部は指頭のナデツケにより断面三角形をした緑帯状の平坦面をもち上下に突出する。口縁部から8.5cm下方に貫通しない円孔の付いた山型取っ手が貼り付く。胴部外面は平行叩きの後、横方向にヘラ状工具によるナデが施され数条の沈線が巡っている。内面はクロコ整形による丁寧な横ナデを施す。焼成良好で色調は灰色である。529と直接接合しないが、調整方法が似ていることから同一個体の可能性もある。533も同様の形態をした取っ手であるが円孔が貫通している。

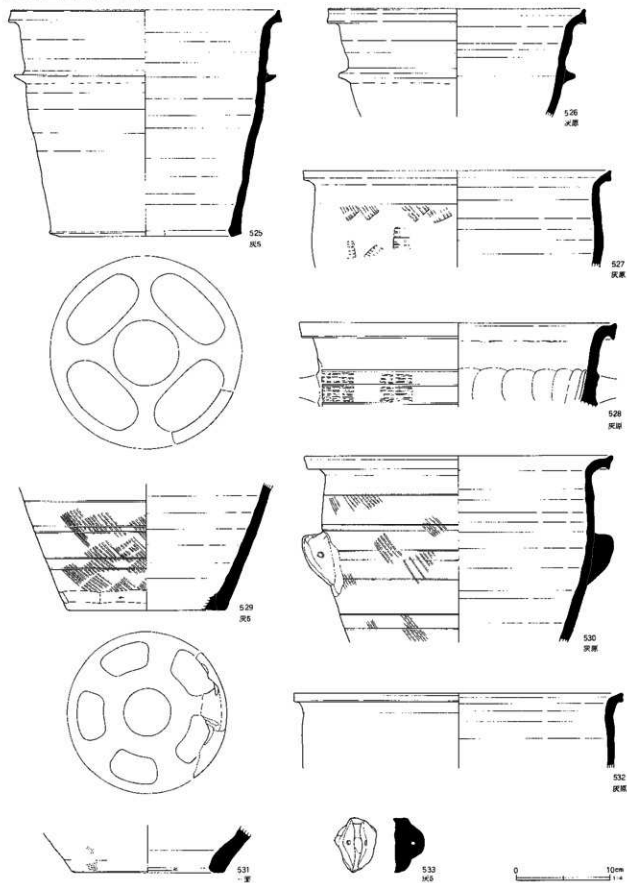
i 硯 (第114図534~538)

硯は第114図に示した5点である。出土状況は第115図のとおりである。二面からは535を検出し、一面から534、538を検出した。灰原からは537、灰原5から536を検出している。

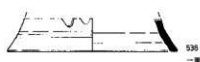
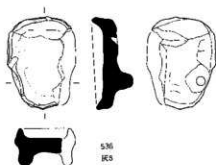
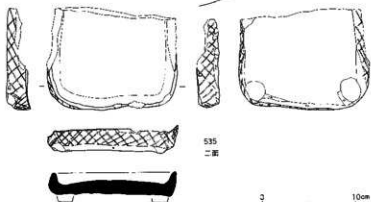
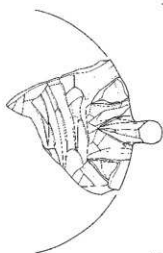
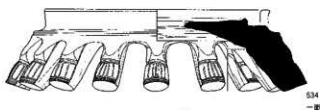
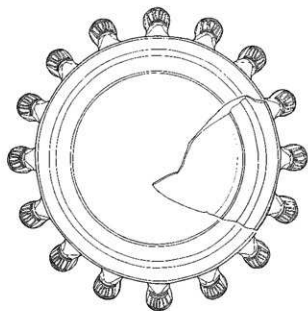
534は獣脚硯である。検出された部位は極一部であった。堤の部分が剥離しており高さは不明であったが復元実測を試みた。法量は、外径26.0cm、推定器高8.2cm、脚部底径32.0cm、陸部の径18.6cm、陸部の厚さは7mmである。形態は陸部の外縁は断面三角状のつまみ上げによって区画されている。硯面は平坦で丁寧なナデ調整により仕上げられている。硯の側面には沈線を施し獣脚を貼り付ける。底面は細かくヘラケズリ調整が施されている。獣脚は、推定で16本、版型によって1本づつ仕上げられ貼り付けられている。脚部の模様は上下に沈線を刻み、その間に縦方向の隆線が6本表現されている。脚部の両側縁に弱いながらも版型を押した筋が縦方向に見える。裏面はヘラによってケズリ込み形を整えている。焼成は良好で自然釉が全体に付着し、色調は暗灰色である。非常に重厚感のある仕上がりである。

535は高さの短い外縁をもつ箱形の硯である。外縁の側面には斜格子状に沈線の刻みが装飾されている。裏面の隅は円形の脚が剥離している。欠損しているため二面硯か、風字状になるのか形態は不明である。焼成良好である。536は小型の硯である。造りは非常にきゃしゃである。平面形態は卵形で外縁をもつ。裏面には2本の孔頭型の脚部が貼り付くと推定される。硯面は平坦に仕上げられているが、実際は2本の脚によってかなりの傾斜をもつことになる。出土位置は灰原5 111-23-12グリッドからの出土であることから平安時代の可能性が指摘できる。537は川面硯である。推定直径13.5cm、残存高4.9cmである。脚部に切り込みがみられ透かしをもつ。全体に自然釉がかかり、色調は暗灰色である。538も川面硯の脚部破片である。切り込みがみられ透かしをもつ。焼成・色調共に537に似ており同一器種の可能性が考えられる。

第113図 灰厚跡出土遺物00



第114図 灰原跡出土遺物(3)

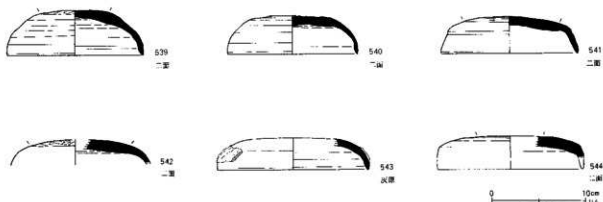


j 坏蓋 (第115図539~544)

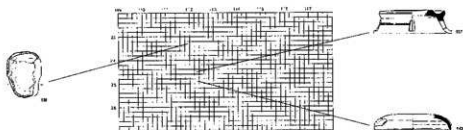
539~544は坏蓋である。第115図に示した6点である。出土状況は第115図のとおりである。二面から出土した坏蓋は539~542、544を検出した。一面からの検出はなく、灰原から543を検出してゐる。坏身は検出できなかった。

539は口径14.4cm、器高は4.7cmと深みである。器肉は全体に厚く重量感がある。特に、天井部の変換点付近が肥厚する。天井部外面は一方の手持ちヘラケズリを施す。540は口径13.8cm、器高4.0cmとやや浅い。天井部外面はヘラ切り離しママである。いずれも、口縁部は内湾する。焼成良好でやや焼き重みをもつ。541は口径14.4cm、器高3.9cmである。天井はやや低く張りも弱く平坦である。天井部から口縁部への変化は屈曲が強く外面に明瞭な稜をもつ。天井部外面の回転ヘラケ

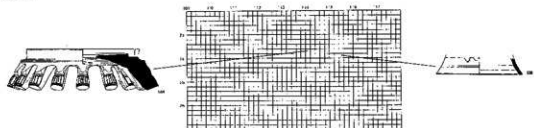
第115図 灰原跡出土遺物②



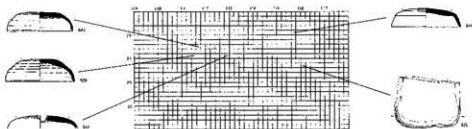
灰原5・灰原



灰原一面



灰原二面



ズリ調整の範囲はこの部分までは行われず、わずかに線を残す。口縁部は「ハ」の字状に開いて直線的に伸びる。焼成良好で仕上がりは非常に丁寧である。色調は淡灰色、内面は淡褐色である。542～544は天井部の

破片である。542は手持ちヘラケズリ調整を施す。543は天井部に降灰を受け調整は不明。口縁部は屈曲し下方に伸びる。544は器肉厚く重量感がある。天井部外面は弱い回転ヘラケズリ調整を施す。

第22表 灰原跡出土遺物観察表 (76~81・84~87・90~96・99~103・106~115図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(9.0)	(3.5)	(6.8)	C	1	暗灰	10	一面116-22-22
2	坏	(8.9)	(3.7)	(7.0)	AB	1	灰	20	二面114-23-25
3	坏		2.0	8.1	BC	1	茶灰	20	灰原114-24-10 外面手持ちヘラケズリ
4	坏	(10.6)	4.2	(8.1)	ACD	1	暗茶灰	30	一面114-24-1 全面手持ちヘラケズリ
5	坏		1.9	(8.0)	ABC	1	茶灰	20	一面No.1309 ヘラ切りのまま
6	坏	(9.7)	(3.5)		CE	1	灰	5	一面115-23-20
7	坏	(10.6)	4.3	8.3	ABCE	2	灰	20	一面116-22-18
8	坏	(10.6)	(4.0)	(8.9)	ACDE	2	灰	5	一面116-22-20 外面手持ちヘラケズリ
9	坏		1.5	7.7	ABC	1	青灰	30	二面113-24-8 ヘラ切りのまま
10	坏		1.3	3.4	ABE	1	灰褐	20	一面115-24-6 全面手持ちヘラケズリ
11	坏		(3.2)	7.1	ABE	1	茶灰	30	一面No.77 ヘラ切り後ナデ
12	坏		1.3	(8.4)	ABCG	2	灰	20	一面114-24-3 全面手持ちヘラケズリ
13	坏	9.6	4.1	7.9	ABCF	1	灰	50	灰5110-25-14 ヘラ切り後ナデ
14	坏	(9.8)	3.4	(5.0)	ABE	1	青灰	40	二面113-23-16 ヘラ切りのまま
15	坏	(10.2)	3.1	7.6	BC	1	暗灰	40	一面116-22-23 ヘラ切りのまま
16	坏	(9.9)	3.2	(7.5)	BCDE	1	青灰	40	一面115-24-7 ヘラ切り後ナデ
17	坏		3.2	(9.2)	ABD	3	茶褐	40	一面113-24-4 ヘラ切りのまま
18	坏	(9.8)	2.2	(8.4)	ABCE	1	暗灰	30	一面113-24-2 全面ヘラきり後ナデ
19	坏		1.8	(8.4)	ABD	2	灰	20	二面113-23-23 ヘラ切りのまま
20	坏		1.2	6.2	ACDE	1	灰	10	トレンチ115-24-15 ヘラ切りのまま
21	坏		1.8	6.7	BEF	1	灰	30	灰原114-24-19 ヘラ切り後ナデ
22	坏		1.8	(8.3)	ABG	1	灰	30	灰原114-24-18 ヘラ切り後ナデ
23	坏		1.2	(8.1)	ABEG	2	淡灰	30	灰原112-24-22 全面手持ちヘラケズリ
24	坏		1.7	(10.1)	ABFG	2	灰褐	30	灰原114-24-23 全面手持ちヘラケズリ
25	坏		(3.2)	(6.3)	BCEF	1	灰	20	灰原116-24-7 ヘラ切り後ナデ
26	坏		(3.2)	(3.1)	BC	1	茶灰	30	灰原113-24-1 ヘラ切り後ナデ
27	坏		2.6	(6.2)	ABC	1	灰	10	一面116-22-18 ヘラ切り後ナデ
28	坏	(11.9)	4.1	(10.0)	ABC	1	暗灰	40	(蓋)一面116-24-1
29	坏	(9.6)	3.7	(6.1)	ABE	1	灰	30	二面114-24-5 ヘラ切り後ナデ
30	坏	(9.3)	(3.4)	(8.1)	ABCE	1	灰	15	灰原113-24-22 ヘラ切りのまま
31	坏		(3.1)	(7.5)	CE	1	灰	10	灰原116-22-24 ヘラ切り後ナデ
32	坏		(3.0)	(8.4)	ABCE	1	暗灰	10	一面114-24-4 ヘラ切りのまま
33	坏		2.0	(9.2)	ABEF	1	淡灰	20	一面109-25-9 全面回転ヘラケズリ
34	坏		2.2	(5.8)	BCE	1	暗灰	20	一面116-22-20 ヘラ切り後ナデ
35	坏		2.2	(8.8)	BCE	1	紫灰	20	一面116-22-23 全面手持ちヘラケズリ
36	坏		1.3	(7.3)	ABF	1	茶灰	20	灰原113-24-5 ヘラ切りのまま
37	坏		1.0	(7.0)	ABCEF	1	青灰	20	灰原113-24-23 外面回転ヘラケズリ
38	坏		1.2	(7.0)	ABF	1	灰	20	灰原110-26-8 外面回転ヘラケズリ
39	坏		2.2	(6.4)	ABCF	1	暗灰	30	一面113-24-3 全面回転ヘラケズリ
40	坏		1.1	7.3	ABE	2	淡灰	20	二面116-23-6 外面手持ちヘラケズリ
41	坏		1.6	(9.5)	AB	1	褐灰	20	二面113-24-1 全面手持ちヘラケズリ
42	坏		2.2	6.2	AB	1	灰褐	30	二面114-24-4 全面手持ちヘラケズリ
43	坏	(10.0)	2.3		C	1	灰	5	二面112-23-14
44	坏	(8.4)	(2.5)		ABCD	1	青灰	10	灰5108-26-9
45	坏		1.9	8.0	BCD	1	灰褐	30	二面115-23-18 全面手持ちヘラケズリ
46	坏		2.5	(8.4)	CE	1	灰	20	一面113-23-23
47	坏		2.8	7.2	CE	1	灰	10	二面116-23-6
48	坏	(8.5)	2.2	(6.3)	BE	1	青灰	30	一面No.1171 ヘラ切りのまま
49	坏	(11.7)	(4.2)		ABE	1	灰	5	灰原113-24-7
50	坏		1.6	(9.2)	ABE	1	灰	5	一面115-23-15 ヘラ切りのまま
51	坏	(12.8)	(4.1)	(11.5)	B	1	灰	5	二面114-23-25
52	坏		(4.4)	(9.5)	ABEF	1	灰褐	30	灰原114-24-20 全面手持ちヘラケズリ
53	坏	(12.4)	(3.7)		BE	1	淡灰	20	一面113-23-20 全面手持ちヘラケズリ
54	坏		2.4	(9.9)	ABE	1	褐	10	二面No.216 全面手持ちヘラケズリ
55	坏	(13.4)	4.3	10.3	ABCE	3	灰	60	一面109-25-15 全面手持ちヘラケズリ

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	給 土	焼成	色 調	残存率	備 考
56	坏	(15.3)	(4.3)	(9.8)	ABEF	2	淡灰	30	トレンチ116-24-9 全面手持ちヘラケズリ
57	盤				ABCF	1	灰	20	灰原116-24-16 外周手持ちヘラケズリ
58	坏		2.8	10.2	ABC	1	灰	30	一面No95 全面手持ちヘラケズリ
59	坏		0.8	(14.8)	ABFG	2	白灰	30	灰原114-23-15 全面手持ちヘラケズリ
60	坏		3.1	10.2	ABEG	3	橙褐	30	一面113-24-4 外周手持ちヘラケズリ
61	坏		2.4	(9.6)	ABCE	1	灰	30	灰5110-25-15 全面手持ちヘラケズリ
62	坏		2.9	(9.4)	ABCE F	2	淡灰	20	灰原115-24-17 全面手持ちヘラケズリ
63	坏	(12.0)	(4.2)	8.5	E	2	淡灰	30	灰原No5022 全面手持ちヘラケズリ
64	坏		1.1	(9.0)	ABDE	2	褐灰	20	一面116-23-9 全面手持ちヘラケズリ
65	坏		1.1	(7.1)	ABCF	1	茶褐	30	灰原116-24-12 全面手持ちヘラケズリ
66	坏		1.3	(13.6)	ABCD	2	灰褐	10	一面113-23-18 全面手持ちヘラケズリ
67	坏		0.9	(7.1)	ABFG	2	灰	20	灰原115-25-5 全面手持ちヘラケズリ
68	坏		2.1	(9.0)	ABC	1	茶灰	10	灰原110-26-6 全面手持ちヘラケズリ
69	坏		1.7	(12.0)	ABCF	2	灰	20	トレンチ116-24-11 全面手持ちヘラケズリ
70	坏		1.0	(9.6)	ABC	2	灰	20	一面116-22-19 全面回転ヘラケズリ
71	坏		(3.0)	(8.8)	ABCF	1	青灰	20	灰原114-23-5 外周回転ヘラケズリ
72	坏	12.8	4.2	8.7	ABCF	1	青灰	70	一面108-26-5 全面回転ヘラケズリ
73	坏	(13.5)	(4.4)	(10.5)	ABDE	2	灰褐	40	二面112-24-7 全面回転ヘラケズリ
74	坏	(14.0)	4.5	(9.6)	ABCEFG	2	淡灰	40	灰原115-23-17 外周回転ヘラケズリ
75	坏		(3.5)	(10.6)	ABCE	2	灰褐	30	灰原112-24-23 外周回転ヘラケズリ
76	坏	(18.0)	4.2	(13.3)	ABD	2	暗灰褐	30	一面116-22-23-24 全面回転ヘラケズリ
77	坏		1.1	8.0	ABDE	2	褐灰	20	一面114-24-7 糸? + 外周回転ヘラケズリ
78	坏		0.9	8.0	ABCF	1	青灰	30	灰原110-26-5 糸? + 全面回転ヘラケズリ
79	坏		0.9	(10.3)	ABFG	1	褐	20	灰原111-25-13 全面回転ヘラケズリ
80	坏		0.8	(12.0)	ABEF	1	灰	20	灰原117-24-2 全面回転ヘラケズリ
81	坏		1.1	(10.0)	ABDE	2	褐灰	20	一面109-26-6 全面回転ヘラケズリ
82	坏		2.5	(7.1)	ABCF	2	淡灰	30	灰原115-23-4 全面回転ヘラケズリ
83	坏		1.4	(7.5)	ABCF	1	灰	20	灰原116-23-9 糸? + 外周回転ヘラケズリ
84	坏		1.0	(14.0)	ABEF	2	白灰	20	灰原111-23-12 全面回転ヘラケズリ
85	坏		0.8	(7.0)	ABF	2	褐	20	灰原112-24-19 糸? + 全面回転ヘラケズリ
86	坏		0.7	7.2	BCD	1	灰	30	一面116-22-25 糸? + 全面回転ヘラケズリ
87	坏		1.0	6.2	ABF	1	灰	30	灰原116-23-19 糸? + 外周回転ヘラケズリ
88	坏		0.9	(12.0)	CE	1	淡灰	10	一面114-24-10 全面回転ヘラケズリ
89	坏	(12.4)	2.9		ABCF	2	灰	20	灰原113-24-22
90	坏	(12.3)	(4.6)	(9.4)	BC	1	紫灰	20	一面113-23-23 全面手持ちヘラケズリ
91	坏	(11.8)	3.5		ABC	2	灰褐	5	一面116-24-4
92	坏	(13.0)	(3.8)		B	2	暗灰	1	一面113-23-22
93	坏	(12.4)	(4.0)		CE	2	青灰	10	灰原110-26-5
94	坏	(14.0)	4.4		BCF	2	灰	5	灰原116-23-12
95	坏	(11.6)	3.4		BC	1	こげ茶	5	灰原112-24-18
96	坏	(14.3)	3.6	(8.0)	ABCF	1	灰	10	トレンチ115-24-11 糸? + 外周回転ヘラケズリ
97	坏	(13.4)	(3.7)		C	1	灰	5	一面116-22-16
98	坏	(14.1)	(5.4)	(10.0)	ABC	1	灰	5	一面116-22-25
99	坏	(14.0)	4.3	(9.6)	AEG	2	灰褐	5	灰原113-24-3
100	坏	(18.0)	4.9	(12.6)	ABDE	2	淡灰	30	一面No51 糸? + 手持ちヘラケズリ
101	坏	(14.9)	(3.4)	(13.4)	BCE	1	灰	5	一面116-22-19 糸? + 回転ヘラケズリ
102	坏	(15.0)	(3.5)	(10.2)	ABCF	1	灰	20	灰原115-24-22 糸? + 手持ちヘラケズリ
103	坏	(19.5)	(3.8)	(16.2)	ABE	1	青灰	5	一面No1036
104	坏	(16.0)	3.3	(11.4)	ABDE	2	灰	5	一面116-23-25
105	坏	(17.8)	(4.6)		BF	1	灰茶	5	灰原113-23-5
106	坏	(15.8)	3.0	(11.0)	ABCE	1	灰褐	5	トレンチ116-24-13 糸? + 回転ヘラケズリ
107	坏	(17.2)	3.9		BF	1	乳白	5	灰原116-24-15
108	坏		0.9	(8.0)	CDE	2	灰褐	20	一面115-23-13 糸? + 回転ヘラケズリ
109	坏		0.9	(9.0)	ABC	2	灰	10	一面109-25-13 糸? + 回転ヘラケズリ
110	坏	(13.6)	3.8	(8.4)	ABEF	2	乳灰	40	灰原112-24-19 糸? + 外周回転ヘラケズリ
111	坏	(12.8)	3.6	(8.0)	ABF	2	淡灰	40	灰原111-25-13 糸きり離しのまま

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
112	坏	12.6	3.5	8.8	ABDF	3	黒灰	80	灰原116-24-14 糸+外周回転ヘラケズリ
113	坏	(12.6)	3.9	(7.0)	ABCE F	1	青灰	50	灰原115-24-2 糸+外周回転ヘラケズリ
114	坏		2.0	8.0	ABEF	1	青灰	30	灰原111-25-8 糸+外周回転ヘラケズリ
115	坏		1.8	(9.2)	ABEF	2	灰	20	灰原115-24-11 糸+外周手持ちヘラケズリ
116	坏		1.0	(9.2)	ABEF	2	灰	20	灰原115-24-15 糸+外周回転ヘラケズリ
117	坏		1.1	6.7	ABC F G	2	灰	30	灰原116-24-13 糸+外周回転ヘラケズリ
118	坏		2.1	(9.5)	ABDE	1	灰	5	一面112-24-16 糸+外周回転ヘラケズリ
119	坏		1.6	(7.2)	ABEF	2	灰	20	灰原114-24-25 糸+外周回転ヘラケズリ
120	坏		1.1	7.0	ABF	2	灰褐	30	灰原116-24-4 糸+外周回転ヘラケズリ
121	坏		1.3	(7.2)	BEF	2	乳白	20	灰原111-25-12 糸+外周回転ヘラケズリ
122	坏		0.8	7.7	ABFG	2	乳灰	30	灰原116-23-14 糸+外周回転ヘラケズリ
123	坏		1.3	7.3	ABCF	2	灰	20	灰原112-24-20 糸+外周回転ヘラケズリ
124	坏		1.7	(7.3)	ABCE	2	灰	20	灰原111-25-8 糸+外周回転ヘラケズリ
125	坏		1.5	7.3	ABCF	2	灰	30	灰原112-24-20 糸+外周手持ちヘラケズリ
126	坏		1.6	(7.4)	ABE	1	灰	20	一面116-24-6 糸+全面回転ヘラケズリ
127	坏		0.9	(6.3)	ACE	1	灰	30	灰原116-23-7 全面回転ヘラケズリ
128	坏		2.3	(8.5)	ABCD	2	暗灰	5	一面116-22-24 糸+外周回転ヘラケズリ
129	坏		1.1	(8.0)	ABEF	2	暗灰	20	灰原116-23-14 外周回転ヘラケズリ
130	坏		1.5	(7.0)	ABCF	1	灰	20	灰原115-24-16 糸+ヘラ切り後ナデ
131	坏		1.8	(8.0)	BEF	1	灰褐	10	灰原114-24-23 糸+外周回転ヘラケズリ
132	坏		0.9	(8.0)	ABG	2	灰	10	灰原115-24-17 糸+外周回転ヘラケズリ
133	坏		1.2	(9.2)	ABF	2	灰	10	灰原115-24-15 糸+外周回転ヘラケズリ
134	蓋	9.0	2.3		BC	1	灰	70	二面113-23-17
135	蓋	(9.5)	(2.3)		CEG	1	灰	20	トレンチ110-24-12
136	蓋	(10.9)	2.6		ABC	1	灰	40	一面116-24-7
137	蓋	9.2	2.3		BC	1	灰	50	二面113-23-22
138	蓋	(11.0)	2.4		ABC	1	暗灰	20	灰原112-24-17
139	蓋	(9.2)	1.6		C	1	暗灰	20	二面112-24-16
140	蓋	(9.6)	2.0		CE	1	青灰	30	二面112-23-25
141	蓋	(8.2)	2.9		BDF	2	灰	10	灰原113-23-22
142	蓋	(8.6)	(2.5)		ABE	1	灰	30	一面115-23-19
143	蓋	(9.0)	1.5		BC	1	青灰	30	二面113-23-17
144	蓋	(10.8)	(3.5)		AB	1	青灰	20	一面114-24-2
145	蓋	(11.0)	(2.1)		ABE	1	灰	40	一面115-23-10
146	蓋	(8.8)	2.0		BCE F	1	灰	10	灰原115-23-15
147	蓋	(8.8)	1.6		ABEF	1	青灰	20	灰5110-25-8
148	蓋	(10.9)	2.1		BCF	1	青灰	15	灰5110-25-15
149	蓋	(9.2)	1.7		BCE F	1	青灰	25	トレンチ110-24-12
150	蓋	(9.9)	1.4		BCE	2	淡灰	5	一面113層
151	蓋	(8.9)	1.9		ABEF	1	淡青灰	15	トレンチ110-26-2
152	蓋	(10.6)	1.6		ABCF	1	青灰	15	灰5110-25-15
153	蓋	(10.3)	1.8		ABCE F	1	青灰	60	灰5110-25-4
154	蓋	(10.2)	2.0		AC	1	暗灰	10	一面114-24-7
155	蓋	(10.7)	1.8		C	1	灰褐	20	一面113-23-22
156	蓋		1.9		ABC	2	褐灰	20	一面116-22-24
157	蓋		2.1		ABFG	1	青灰	30	一面116-23-6
158	蓋	(12.6)	1.3		CEG	1	灰	5	灰原116-22-21
159	蓋	(14.6)	2.5		BEFG	1	青灰	20	トレンチ113-24-11
160	蓋	(14.1)	2.7		ABCF	1	灰	20	灰原112-24-19
161	蓋	(14.0)	2.5		B	1	灰	10	一面116-22-20
162	蓋	(12.6)	2.6		C	1	暗灰	20	二面112-23-25
163	蓋	(16.0)	1.3		ABC	1	灰	1	二面113-23-20
164	蓋	(14.6)	4.0		CEFG	1	灰	25	灰原112-24-22、113-24-24、一面114-24-4
165	蓋	17.0	4.2		ABDF	1	灰	75	灰原111-25-9、113-24-21、一面115-23-10
166	蓋	(14.6)	3.1		ABC F G	1	灰	15	灰原112-24-12
167	蓋	(13.9)	(4.0)		BC	1	青灰	30	一面115-23-19-22

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
168	蓋	(15.4)	(3.7)		ABE	2	淡灰	60	一面No51
169	蓋	(16.0)	1.0		ABE	1	灰	5	一面116-22-22
170	蓋	(18.0)	1.4		BCE F	1	灰	5	灰原115-23
171	蓋	(14.5)	2.3		BCFG	2	灰	20	灰原112-24-8
172	蓋	(19.1)	1.3		ABE	3	褐	5	一面111-23-15
173	蓋	(17.9)	0.9		BC	1	灰	5	一面109-25-17
174	蓋	(20.0)	(3.4)		ABE F	2	灰褐	30	灰原112-24-9
175	蓋	(18.8)	1.5		C	1	灰	10	灰原114-24-23
176	蓋	(19.2)	1.0		CE	1	青灰	5	トレンチ113-24-12
177	蓋	(18.3)	1.8		ABE	1	灰	30	一面No36
178	蓋	(20.3)	1.7		ABCE F	3	褐	5	灰5110-25-8
179	蓋	(16.8)	1.9		ABC	1	灰	30	二面No127
180	蓋		0.9		ABE	2	灰	1	一面116-22-18
181	蓋		1.0		CEG	2	赤茶	5	灰原116-24-14
182	蓋		1.5		C	1	灰	3	二面115-23-25
183	蓋		1.0		A E F	2	淡灰	5	灰原116-24-10
184	蓋		1.0		B E F	2	淡灰	5	トレンチ116-24-9
185	蓋		0.8		ABC	1	灰	1	一面109-25-15
186	蓋		1.3		ABC	1	灰	1	一面114-24-10
187	蓋		1.0		CEG	1	灰	5	灰原112-24-5
188	蓋		1.4		CEG	2	灰	5	灰原113-24-11
189	蓋		1.4		A E F	2	淡灰	5	灰原115-24-21
190	蓋		3.3		ABE	1	青灰	40	灰原113-24-1
191	蓋	(28.4)	1.2		AC	1	灰	5	一面116-22-19
192	蓋		2.6		ABE F	2	淡灰	40	灰原111-25-13
193	蓋	(3.0)			ABCF	2	暗灰	40	灰原115-24-17
194	蓋		2.4		BCF	1	青灰	5	灰原116-24-14
195	蓋		1.9		BCE	1	灰	10	トレンチ110-26-2
196	蓋	(19.8)	4.2		ABFG	2	灰褐	50	灰原115-24-3、一面110-24-17、No632
197	蓋				ABC	1	青灰	30	一面114-24-19
198	蓋		2.8		ABC	1	乳灰	30	灰原113-24-17、115-23-14
199	蓋				ABCE	1	灰	30	一面114-24-18
200	蓋		1.6		ABE	2	淡灰	5	灰5109-25-17
201	蓋		0.8		BC	2	淡灰	5	灰原115-24-6
202	蓋		1.7		ABC	2	灰	20	灰原116-24-16
203	蓋		1.7		BCE F	1	青灰	20	灰原112-24-19
204	蓋		1.8		BEF	1	淡灰	20	灰原113-24-17
205	蓋		1.5		C	1	灰	10	二面113-24-6
206	蓋		1.3		BCF	1	青灰	5	灰原114-25-9
207	蓋		2.0		ABC	2	灰	30	灰原110-25-25
208	蓋		1.5		ACD	2	褐	5	灰5No3432
209	蓋		1.2		ABE F	2	灰褐	10	灰原112-24-22
210	蓋		2.1		ABCF	2	灰	20	灰原116-24-8
211	蓋		2.7		ABE	2	淡灰	30	一面116-22-19
212	蓋		2.3		ABCF	1	暗灰	15	灰原110-25-25
213	蓋		1.9		CG	2	黒褐	10	二面110-24-9
214	蓋		2.8		AB	1	灰	30	一面No3015
215	蓋		2.0		ABC	2	灰	40	一面116-22-23
216	蓋		1.5		C	1	青灰	20	灰原116-23-24
217	蓋		1.2		ABCF	1	暗灰	10	トレンチ110-26-6
218	蓋	(16.6)	2.7	(6.5)	ACF	1	灰	25	灰原116-24-20
219	蓋		2.0		ABCF	2	灰	30	灰原110-23-15
220	蓋		1.8		ABCE F	2	灰	30	灰原111-25-13
221	蓋	(18.6)	2.7		BCF	1	青灰	10	灰原116-23-17
222	蓋	(19.3)	2.8		ACE	2	灰	20	一面No367
223	蓋	(15.6)	1.6		CF	1	灰	10	灰原116-24-4

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
224	壺	(17.0)	1.9		ABC	1	灰	5	灰塚116-22-25
225	壺	(20.8)	1.5		ABE	2	灰	10	灰塚113-24-25
226	壺	(11.2)	1.3		B	1	灰	5	灰塚112-24-22
227	壺	(17.8)	2.1		ABCF	1	灰	10	灰塚112-24-23
228	壺	(20.0)	2.5		ABC	2	灰	30	灰塚111-25-5
229	壺	(14.6)	1.0		BCEF	2	灰	5	灰塚112-24-25
230	壺	(19.8)	1.6		CDEF	1	灰	5	灰塚112-24-22
231	壺	(20.6)	1.8		ABE	2	灰	5	灰塚110-25-25
232	壺		1.3		CE	1	灰	5	トレンチ112-24-15
233	壺				C	1	灰	1	灰塚116-22-24
234	壺	(17.9)	1.8		CDF	2	灰	5	灰塚116-24-14
235	壺	(20.5)	2.2		BC	1	灰	20	一面116-22-19
236	壺		1.5		CEG	2	灰	5	灰塚116-23-24
237	壺		1.5		BE	2	灰	1	灰塚116-22-24
238	壺	(17.4)	1.5		AC	2	灰	1	灰5 No655
239	壺	(20.0)	1.4		ABE	2	灰	5	灰塚116-23-24
240	壺		2.7		BE	1	青灰	10	一面No1204
241	壺	(19.0)	2.4		ABC	1	暗灰	10	二面114-23-25 回転ヘラケズリ
242	壺	(20.6)	2.3	(17.6)	ABC	2	褐灰	10	二面115-23-5 回転ヘラケズリ
243	壺	(21.9)	(2.4)	(19.8)	CE	1	灰	1	一面116-23-14 回転ヘラケズリ
244	壺	(18.8)	2.1	(14.2)	ABC	1	淡灰	20	二面113-24-7 手持ちヘラケズリ
245	壺	(23.9)	2.1	22.3	ABCF	2	褐灰	10	二面113-23-6 回転ヘラケズリ
246	壺	(22.5)	2.2	(21.6)	ABCE	1	茶灰	20	一面13層 ヘラ切りのまま
247	壺	(24.2)	2.3	(21.1)	ABC	1	暗灰	5	灰塚116-22-21
248	壺	(22.9)	2.6	(20.4)	ABC	1	暗灰	20	二面115-24-2 回転ヘラケズリ
249	壺	(24.4)	2.4	(22.5)	ABF	1	暗灰	10	一面115-23-22 回転ヘラケズリ
250	壺	(23.4)	1.8	(21.1)	ABC	1	暗灰	20	一面115-24-1 回転ヘラケズリ
251	壺	(25.0)	2.4	(23.1)	ABCDE	2	淡灰	10	一面114-24-3 ヘラ切りのまま
252	壺	(27.0)	2.5	(25.0)	AB	1	雲灰	10	灰塚116-22-16 回転ヘラケズリ
253	壺	(21.1)	3.6	(19.5)	ABC	1	暗灰	30	一面116-22-17 回転ヘラケズリ
254	壺	(36.0)	1.9		AB	2	暗灰	1	灰塚114-23-11 回転ヘラケズリ
255	壺	(25.2)	2.5	(23.4)	ABC	1	灰	10	二面113-23-23 回転ヘラケズリ
256	壺	(33.0)	2.1		C	1	黒灰	1	灰塚116-23-15
257	壺	(23.1)	2.1	(24.2)	ABCEF	1	茶灰	20	二面234 ヘラ切りのまま
258	壺	(17.1)	1.7	(14.0)	BEF	2	淡灰	5	一面109-25-17 回転ヘラケズリ
259	壺	(15.1)	1.3	(14.4)	BC	1	灰	30	灰塚116-24-8 ヘラ切り後ナデ
260	壺	(12.0)	(2.3)	(10.9)	ABC	1	青灰	30	一面116-22-16 ヘラ切り後ナデ
261	壺	(16.0)	(3.5)	(15.0)	AB	2	暗灰	5	灰5 110-26-3 回転ヘラケズリ
262	壺	(15.7)	2.8		ABC	1	暗灰	5	灰塚114-24-6
263	壺	(19.4)	2.0	(16.0)	ABC	1	黒灰	10	二面112-24-5 ヘラ切りのまま
264	壺	(15.6)	4.3	(14.6)	BC	2	灰	20	トレンチ114-24-9 ヘラ切りのまま
265	壺	(19.2)	(3.6)	(16.4)	ABCDE	3	灰褐	10	灰塚110-26-9 手持ちヘラケズリ
266	壺	(22.0)	3.0	(20.6)	ABE	1	灰	10	灰塚115-23-24 回転ヘラケズリ
267	壺		2.4	(17.0)	ABCDE	3	灰白	10	一面113-24-4 手持ちヘラケズリ
268	壺	(21.3)	2.8	(17.0)	ABCE	3	褐灰	10	灰塚115-23-7 手持ちヘラケズリ
269	壺	(20.8)	(3.5)	(16.1)	ABC	1	灰	20	一面115-22-25 手持ちヘラケズリ
270	壺	(24.6)	2.7	(20.9)	BC	1	暗灰	5	灰塚116-22-16
271	壺		2.6	(22.9)	ABC	1	灰	15	二面113-24-7 ヘラ切り後ナデ
272	壺	(24.0)	(4.0)	(19.6)	ABDE	2	淡灰	5	一面111-24-20 手持ちヘラケズリ
273	壺	(24.3)	3.2	(23.0)	ABCE	1	橙褐	10	一面116-22-23 回転ヘラケズリ
274	壺	(23.8)	5.2	(23.6)	ABCE	1	灰	10	灰塚111-25-9
275	壺		4.1	(21.6)	ABC	2	灰褐	20	一面110-24-17、Na597 手持ちヘラケズリ
276	壺	(17.3)	(2.2)	(15.2)	ABCE	1	灰	20	一面116-22-21
277	壺	(18.3)	1.9	(17.0)	ABDE	2	褐	1	一面116-23-9 回転ヘラケズリ
278	壺	(20.0)	2.6	(18.2)	ABC	1	暗灰	10	一面113-23-16 回転ヘラケズリ
279	壺	(20.2)	3.0		BCDE	2	淡灰	10	一面113-24-7 手持ちヘラケズリ

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	給 土	焼成	色 調	備 考
280	盤	(21.6)	2.4	(20.7)	ABC	1	暗灰	30 一面113-23-22 回転ヘラケズリ
281	盤	(26.2)	3.4	(23.0)	ABC	2	灰褐	10 二面112-24-9 回転ヘラケズリ
282	盤	(23.8)	2.0	(22.6)	ABE	2	淡褐	5 一面113-24-7
283	盤	(26.2)	2.4	(24.0)	ABC	1	青灰	10 二面115-23-20 回転ヘラケズリ
284	盤	(27.6)	3.2	(23.0)	ABC	1	茶灰	5 灰原115-23-23 ヘラ切り後ナデ
285	盤	(27.6)	2.0	(25.8)	ABC	1	灰	10 一面116-23-21
286	盤	(27.3)	2.8	26.2	ABCE	2	乳灰	10 灰原110-25-24 回転ヘラケズリ
287	盤	(30.4)	(2.3)	(28.6)	ABC	1	青灰	10 二面222 回転ヘラケズリ
288	盤	(25.7)	(2.8)	(23.4)	ABC	1	暗灰	10 一面115-25-15 回転ヘラケズリ
289	盤	(31.0)	2.8	(29.1)	ABC	1	灰	5 一面115-22-24 回転ヘラケズリ
290	盤	(26.4)	(3.2)	(23.2)	ABC	1	灰	10 灰原115-23-5 ヘラ切り後ナデ
291	盤	(32.0)	2.4	(30.2)	BE	2	淡灰	5 灰原116-23-24 回転ヘラケズリ
292	高台付盤		(4.3)	(15.7)	BCDE	2	灰褐	10 灰原113-24-23
293	高台付盤	(22.0)	4.0	(17.8)	BCF	3	灰白	20 一面No3351
294	高台付盤	(24.3)	2.4		ABDE	2	灰	20 灰原116-22-25
295	高台付盤		(4.1)	14.8	ABF	1	暗灰	20 灰原116-23-24
296	高台付盤		(3.6)	(14.6)	ABCF	2	暗灰	30 灰原111-25-5
297	高台付盤		2.2	(19.0)	BCE	2	灰	15 一面116-23-23
298	高台付盤	(27.5)	5.6		BE	2	淡灰	10 一面115-24-7
299	高台付盤		1.5		BCE	2	灰	10 一面3399
300	高台付盤		2.6		BCD	2	灰	10 一面116-23-23
301	高台付盤		2.6		BDE	2	淡灰	20 灰原116-22-16
302	高台付盤		2.4	(18.7)	ABC	1	青灰	10 灰原116-23-3
303	高台付盤		2.0	(12.6)	BC	1	灰	5 灰原113-24-10
304	高台付盤		1.4	(12.2)	BE	1	灰	10 一面109-25-22
305	高台付盤		2.3	(18.6)	ABC	1	青灰	20 灰原116-24-1
306	高台付盤		2.1	13.4	ABC	2	淡灰	10 一面116-22-17
307	高台付盤		2.1	(9.8)	BC	1	灰	5 灰原115-24-18
308	高台付盤		2.5	(20.8)	ABE	2	淡灰	1 灰原116-22-24
309	高台付盤		2.1	(27.6)	BC	2	淡灰	1 一面115-23-22、116-22-18
310	高盤		4.5		ABC	2	暗青灰	30 一面113-23-21
311	高盤		1.6		ABC	1	暗灰	30 一面115-23-18
312	高盤	(28.6)	2.8		ABCE	2	灰	20 一面115-24-2、116-22-17
313	高盤	(22.0)	3.4	(18.9)	ABCEF	2	淡灰	10 灰5110-25-19
314	高盤	(27.5)	4.0		E	3	淡灰	30 一面109-25-2
315	高盤	(25.6)	2.5	(22.4)	ABC	1	暗灰	30 一面115-23-10
316	高盤		2.3		BCE	3	灰	10 一面116-22-22
317	高盤		1.2		ABCE	2	灰	10 一面115-23-19
318	高盤		0.9		ABC	1	暗灰	20 灰原113-24-17
319	高盤		1.2	(18.7)	ABCF	1	青灰	5 灰5110-25-19
320	高盤		1.2		BDF	2	灰	20 一面116-24-6-7
321	高盤	(27.0)	(5.0)		BCDE	2	灰褐	10 一面No3194
322	高盤		1.7		BCF	1	灰	10 灰原116-22-25
323	高盤	(26.0)	2.9		BCE	2	灰	10 一面114-24-3
324	高盤		3.9	(9.4)	BCE	1	暗灰	80 一面No21
325	高盤		4.2	10.0	ABC	2	乳灰	30 灰原115-23-19
326	高盤		5.8	(11.2)	ABCDE	3	灰白	70 一面115-23-15
327	高盤		3.6		BC	2	淡灰	30 一面113-24-4
328	高盤		3.2	(10.0)	ABE	2	茶褐	30 灰原113-24-17
329	高盤		2.5	(10.9)	C	2	灰	10 一面110-22-16
330	高盤		3.0	12.7	ABCE	1	暗灰	30 二面114-24-2
331	高盤		4.1	(10.8)	ABCE	2	暗灰	20 灰原112-24-18
332	高盤		3.9	(10.0)	ABC	1	茶灰	20 二面113-24-1
333	高盤		5.3	(11.6)	BCE	2	暗灰	30 灰5110-26-8-17
334	高盤		5.6	11.2	BE	1	乳灰	30 二面114-23-23
335	高盤		3.2		BC	2	灰	10 灰5110-26-7

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 上	焼成	色 調	残存率	備 考
336	高盤		4.3	(17.0)	BCDE	3	灰白	25	一面113-23-24
337	高盤		5.0	(18.2)	ABDE	2	褐灰	10	灰原111-25-7
338	高盤		3.7	(20.0)	ACE	2	灰	10	灰原116-23-7
339	高盤	(28.2)	2.4		BDE	2	灰褐	20	灰原110-26-9
340	高盤		1.4		BC	1	青灰	20	一面113-23-22
341	高盤	(23.0)	2.1		BCD	2	暗灰	30	一面116-22-16
342	高盤		1.2		BCD	1	暗灰	20	灰原110-25-25
343	高台付坏		1.9		ABEF	2	灰褐	10	一面No1539
344	高台付坏		1.6	(9.5)	ABEF	2	淡灰	20	灰原113-24-3
345	高台付坏		1.4	(9.0)	ABE	1	灰	10	一面113-24-9
346	高台付坏		2.3	(10.4)	AB	1	灰	10	一面109-25-10
347	高台付坏				BCE	1	灰	10	灰原111-25-11
348	高台付坏	(12.6)	(4.9)		ABC	1	暗灰	40	一面113-24-10
349	高台付坏		2.7	9.3	CDF	1	灰	10	灰原114-24-19
350	碗	(11.0)	5.5		C	1	灰	20	一面No1421、115-24-6
351	碗	(15.7)	5.3		AC	1	灰	10	一面113-23-23
352	碗	(14.0)	5.7		AB	1	灰	5	灰原112-24-19
353	碗	(17.9)	6.3		AB	1	灰	10	一面115-23-23
354	碗	(15.0)	5.0		AB	1	暗灰	5	トレンチ116-24-13
355	碗	(15.0)	3.1		B	1	灰	1	灰原112-24-13
356	碗	(18.3)	2.7		BEF	2	灰	1	灰原112-24-19
357	碗	(15.9)	4.5		ABCF	2	褐灰	5	灰原114-24-1
358	碗	(16.4)	6.5		ABCF	2	黑灰	20	一面112-24-6
359	碗	(17.2)	7.6		ADE	2	淡灰	20	二面110-25-3
360	碗	(20.3)	6.5		ABC	1	青灰	20	一面113-23-22
361	碗	(18.9)	2.5		ACE	2	淡灰	10	一面116-24-5
362	碗	(20.7)	4.4		BC	1	灰	10	一面115-24-1
363	碗	(21.2)	8.4		ABE	2	乳灰	10	一面No1431
364	碗	(19.0)	6.3		ABEF	2	褐灰	20	灰原113-24-25
365	碗	(23.0)	4.4		ABE	3	褐灰	1	二面116-23-1
366	碗	(20.8)	2.8		B	1	紫灰	1	灰原112-24-19
367	鉢	(20.6)	4.2		C	1	灰	5	一面116-22-17
368	鉢	(25.6)	4.6		ABDF	2	褐	5	一面No3144
369	鉢	(25.2)	6.0		ABDE	2	乳白灰	5	一面No653
370	鉢	(30.8)	3.3		ACDE	2	淡灰	1	一面112-24-9
371	鉢	(27.2)	6.2		ABC	2	青灰	10	一面112-24-20
372	鉢	(26.5)	7.7		ABD	3	褐	10	灰原116-23-20
373	鉢	(27.8)	7.7		ABE	2	淡灰	5	一面114-24-2
374	鉢	(29.8)	9.5		ABDE	2	乳灰	20	二面115-23-10
375	鉢	(39.3)	4.2		BC	1	灰	10	灰原114-24-18
376	鉢	(20.1)	3.0		BC	1	黑灰	5	灰原114-24-20
377	鉢	(26.1)	3.8		BC	1	灰	10	灰原114-24-22
378	鉢	(20.0)	4.1		BCF	1	灰	5	灰5112-23-14
379	鉢	(24.0)	6.0		ABF	2	灰	10	灰5111-23-17-22
380	鉢	(22.5)	4.3		ABF	2	灰	5	灰5112-23-15
381	鉢	(40.6)	5.9		AB	1	青灰	5	一面116-23-18
382	鉢	(36.8)	8.9		ABDF	2	灰	10	灰原111-26-5
383	鉢		(15.4)		AB	1	灰	70	灰原116-24-9、14-15
384	鉢	(44.0)	5.3		ABCF	1	暗灰	5	灰原114-24-23
385	鉢	(50.0)	(16.2)		ABCF	2	暗灰	20	灰原111-25-8
386	鉢	(12.6)	10.6		CE	1	青灰	30	灰原113-24-18、116-23-24
387	鉢	(9.9)	(6.1)		BC	1	黑灰	20	二面112-23-24
388	鉢		3.9		BC	1	灰	5	灰原116-22-23
389	鉢		8.5		ABC	1	青灰	20	灰5Na1418
390	鉢		3.6		C	1	灰	10	灰原110-26-17
391	鉢		11.0		ABCF	2	暗灰	20	灰原114-24-18

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
392	鉢		7.5		ABCF	1	灰	30	灰庫112-24-23
393	鉢	(14.7)	8.6		ABCF	1	暗灰	10	灰5112-23-8
394	鉢		11.1	(15.0)	ABC	1	茶灰	20	一面117-22-21
395	鉢		7.7	(13.6)	ABCF	2	灰	10	灰庫112-24-21
396	ナリ鉢	(14.2)	9.4		ABC	1	灰	20	灰庫114-24-19
397	ナリ鉢	(15.2)	8.3		CF	1	赤灰	30	一面116-22
398	ナリ鉢	(13.3)	(10.2)		ABCF	2	灰	30	灰庫117-24-11
399	ナリ鉢	(14.4)	12.4	11.7	BCF	1	暗灰	60	一面No728
400	ナリ鉢		(12.3)	(11.2)	ABCF	1	暗灰	20	灰庫111-25-3
401	ナリ鉢	(13.4)	9.2	9.1	BCF	1	灰	50	灰庫111-25-8
402	ナリ鉢	(12.0)	6.7		AB	1	灰	10	灰庫115-23-15
403	ナリ鉢	(13.0)	6.1		B	1	青灰	20	トレンチ116-24-15
404	ナリ鉢		2.1	(10.4)	ABCF	1	灰	25	灰庫114-24-9
405	ナリ鉢	(14.6)	5.6		BC	1	紫灰	10	一面109-25-9
406	ナリ鉢		1.6	13.2	AB	1	灰	30	二面116-23-6
407	ナリ鉢	(9.0)	5.2		BCF	1	灰	20	灰庫116-24-20
408	ナリ鉢		3.1	11.4	ABC	1	灰	30	二面115-24-19
409	ナリ鉢		1.7	(8.8)	ABCF	1	灰	30	一面No3193
410	ナリ鉢		5.3	(12.1)	BCF	2	灰	30	灰庫
411	ナリ鉢		5.2	(11.3)	BCEF	2	灰	30	トレンチ116-24-13
412	ナリ鉢		1.6	(11.2)	ABEF	2	赤褐	20	灰庫110-25-25
413	高杯	(9.4)	3.2		AB	1	暗灰	10	二面110-24-5
414	高杯	(13.7)	3.8		ABC	1	黒灰	10	一面116-22-23
415	高杯	(14.8)	7.2		BCD	1	乳灰	20	二面109-26-2
416	高杯		9.7	(11.8)	ABE	1	淡白灰	30	二面114-24-3
417	高杯		7.0		ABCE	1	暗灰	30	一面No1068
418	高杯		6.5		ABC	1	暗灰	30	一面109-25-3
419	高杯		2.8	(15.2)	ABC	1	茶褐	30	二面111-23-13
420	高杯		2.0	(13.2)	A	1	乳灰	5	二面116-23
421	高杯		2.2	(10.3)	C	1	灰	1	二面112-23-15
422	高杯		5.2		ABC	1	灰	10	二面113-24-8
423	高杯		2.9		BCF	1	灰	20	灰庫113-24-17
424	小壺	5.0	(7.2)		ABE	3	灰褐	50	二面109-25-5
425	小壺		5.1	2.8	ABE	3	橙褐	80	一面No623
426	長頸瓶	(11.0)	14.0		BE	1	青灰	30	頸長13.2灰庫112-24-15
427	長頸瓶		20.5		ABCE	1	灰	50	一面115-23-20
428	長頸瓶	10.4	10.5		BC	1	灰	50	一面115-23-20
429	長頸瓶		10.0		BC	1	黒灰	40	一面114-24-4
430	長頸瓶		6.4		ACE	2	灰	20	灰庫113-24-12、トレンチ110-26-7
431	長頸瓶		6.4		ABC	2	灰	40	灰庫115-24-18
432	長頸瓶		6.5		BC	1	茶褐	30	灰庫115-24-17
433	長頸瓶	(15.0)	2.5		BC	1	暗灰	10	一面114-24-18
434	長頸瓶		5.0		BCD	2	黒灰	10	灰庫フタ
435	長頸瓶		6.1		ABCE	1	灰	20	一面No1520
436	長頸瓶		6.9		CE	2	褐灰	20	一面116-28-18
437	長頸瓶		7.7		ABCF	2	淡灰	30	灰3No2747
438	長頸瓶		2.3	9.3	ABCE	1	灰	30	二面112-24-10
439	長頸瓶		2.7	(10.0)	ABC	2	暗灰	10	一面114-24-8
440	長頸瓶			(13.2)	C	1	黒灰	10	灰庫115-23-6
441	長頸瓶		2.3	(12.8)	BC	1	灰	20	一面111-24-18
442	長頸瓶		2.2	9.3	ABEF	1	青灰	20	灰庫112-25-5
443	長頸瓶		1.8	(8.5)	CE	1	灰	30	灰5112-23-18
444	長頸瓶		2.8	(7.0)	BCDE	1	暗灰	45	一面116-22-24
445	長頸瓶		5.0		ABCF	2	灰	40	灰庫112-25-17
446	長頸瓶		6.0		BCE	1	灰	20	灰庫115-24-3
447	長頸瓶		7.0		ABCE	1	灰	20	灰庫115-23

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
448	長頸瓶		4.2		ABE	1	黒灰	20	一面No1801
449	長頸瓶		3.0		BCE	1	黒灰	5	一面115-23-24
450	長頸瓶		1.9		BC	1	灰	1	一面114-23-22
451	長頸瓶		9.0		ABC	1	灰	30	一面No119、114-24-3、116-22-21、灰原115-23-10、灰5112-24-10
452	長頸瓶		5.9		BCE	1	黒灰	10	一面113-24-3
453	長頸瓶		4.5		BCE	2	淡灰	10	一面No232
454	長頸瓶		4.6		BE	2	淡灰	20	一面115-23-23
455	長頸瓶		3.5		ABC	1	青灰	10	一面116-24-6
456	長頸瓶		1.9		ABE	2	褐灰	10	一面No237
457	長頸瓶		4.6		BC	1	青灰	10	灰原115-23
458	長頸瓶		8.1		ABCE	1	灰	20	一面No28、112-25-17
459	瓶	(7.9)	2.9		ABC	1	黒灰	5	一面109-25-3
460	瓶	(8.8)	4.6		CEF	1	紫灰	10	灰5110-25-10
461	瓶	(8.8)	3.9		BCF	1	青灰	10	灰5110-25-14
462	瓶	(8.5)	5.0		ABC	1	灰	10	一面116-22-23
463	瓶	(8.9)	2.9		BC	1	茶灰	5	灰原114-24-18
464	瓶	(8.0)	4.4		ABC	1	黒灰	10	一面111-23-13
465	瓶	(8.4)	5.3		ABC	2	茶褐	20	一面114-24-10、115-23-5
466	瓶	(13.2)	4.6		ABCG	2	灰	5	灰原115-24-11
467	瓶	(9.0)	4.2		ABC	1	灰	10	一面111-24-20
468	瓶	(8.9)	6.4		ABC	1	黒灰	10	一面113-24-18
469	瓶	(12.6)	3.4		ABEG	2	黒灰	1	一面116-22-10
470	瓶	(15.1)	3.5		ABC	2	灰	5	一面113-23-22
471	瓶	(13.4)	4.1		ABE	2	白淡灰	5	一面113-24-10
472	瓶	(11.6)	4.6		BC	1	青灰	20	一面113-24-9
473	瓶	(11.7)	4.1		ABE	1	青灰	10	一面109-25-16
474	直口壺	(16.7)	7.6		ABE	2	灰	30	一面1156、一面115-24-1
475	瓶	(16.0)	3.2		BC	2	灰	5	灰原112-24-18
476	瓶	(12.6)			ACD	1	青灰	1	一面No1146
477	瓶		3.5		ABC	1	暗灰	1	二面113-23-16
478	瓶		3.3		ABE	1	青灰	5	灰原111-23-8
479	平瓶		3.1		AC	1	灰	10	一面116-22-18
480	平瓶	11.9	8.9		ABC	1	青灰	30	一面No1458、109-25-17、114-24-4、116-23-16
481	瓶		7.8		BCE	1	暗灰	10	灰原111-24-24
482	瓶		13.3		ABDE	2	乳灰	20	二面113-23-23、115-23-24、一面113-23-21
483	瓶	(10.6)			ACE	1	黒灰	10	トレンチ112-24-15
484	瓶		9.4		ADG	3	褐	20	灰原116-24-14
485	瓶		10.1		BC	2	淡灰	20	灰原110-24-13
486	瓶				BC	1	灰	30	トレンチ116-24-11
487	瓶	(11.0)	15.1		ABCE	1	紫灰	20	灰原115-24-20、トレンチ116-24-15
488	瓶				BC	2	灰	1	灰原111-25-17
489	瓶				ABC	2	灰	10	灰原116-24-16
490	瓶				C	1	灰	30	灰原116-23-19
491	提瓶				CD	1	灰	5	灰原表様
492	提瓶	残存長5.0、幅1.6cm			BEF	1	青灰	10	灰5110-25-8
493	提瓶	残存長2.7cm			C	1	灰	10	灰原115-24-1
494	提瓶	残存長4.3、幅1.8、厚1.6cm			ACE	1	青灰	10	一面111-23-21
495	提瓶	残存長3.9cm			BCE	2	灰	10	灰原114-23-24
496	提瓶	残存長5.3cm			BCE	2	灰	10	灰原116-22-21
497	提瓶	残存長3.9cm			C	2	灰	10	灰原114-24-17
498	提瓶		12.8		BCF	3	褐	30	灰5111-23-24
499	提瓶		9.2		BC	1	暗灰	5	灰原116-22-22
500	瓶	(8.2)	4.2		AC	1	青灰	10	灰5108-26-7
501	瓶	(12.0)	3.8		ABE	1	灰	10	二面112-23-15

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
502	鉢		4.6		ABCE	2	黒灰	10	灰5 108-25-19
503	鉢		2.5		ABC	1	灰	5	灰原115-23-5
504	鉢		3.8		ABC	1	灰	10	一面No1441
505	模範	12.5	28.6		ABCF	1	橙褐	30	灰原110-25-24・25、灰5 110-24-3、25-20、26-3
506	壺		8.0		ABC	1	淡灰	20	灰原117-23-21
507	壺		10.5		ABEFG	2	褐	20	一面111-24-16・17・18
508	壺		8.5		BCF	1	黒灰	20	一面115-23-23頸部径(8.4)
509	壺		14.6		ABEF	1	灰	30	一面114-24-16
510	壺		9.5		ABCEG	2	灰	30	灰原112-24-22
511	壺		8.4		ABCF	2	灰	25	灰原116-23-18
512	壺		5.1		ABF	1	青灰	30	灰原114-24-12
513	壺		7.2		ABC	3	黒灰	30	一面116-23-20頸部径(6.8)
514	壺		5.3		ABCF	1	灰	20	灰原111-25-13
515	壺		7.4		ABF	1	灰	20	灰原112-24-8
516	壺		7.3		ABCF	1	灰	20	一面116-22-24
517	壺		6.0		ABF	2	灰	30	灰原113-24-14
518	壺		5.1		CDF	1	灰	20	一面115-23-10
519	壺		6.5		ACD	1	灰	30	一面113-24-5
520	壺		11.7		ABCF	1	灰	30	一面113-24-5
521	壺		8.3		ABCE	1	青灰	30	一面No47
522	壺		10.0		ABCF	2	灰	30	灰原116-24-16
523	壺		9.4		ABC	1	黒灰	30	一面116-23-10
524	壺		9.4		ABCE	2	灰	25	灰原116-24-16
525	瓶	(28.4)	23.9	(20.3)	ABCF	1	青灰	40	灰原111-24-1・3・5・15、113-23-11、灰5 No1368
526	瓶	(27.2)	11.3		ABCF	1	青灰	20	灰5 111-23-24・25、24-4
527	瓶	(32.6)	10.1		ABCF	1	青灰	5	灰原110-26-5
528	瓶	(33.5)	8.8		ABCF	1	灰	10	灰原114-24-9、116-24-4
529	瓶		13.3	(16.8)	BF	2	淡灰	20	灰5 112-24-25
530	瓶	(32.8)	19.7		BCF	1	白灰	30	灰原110-26-5・9、116-24-14・16・18
531	瓶		5.0	(16.1)	CE	2	灰	5	一面116-23-15
532	瓶	(35.0)	7.9		ABCF	2	灰	5	灰原115-24-16
533	瓶	残存長5.7、口径0.5cm			BCF	2	褐	5	灰5 116-23-17
534	碗	(26.0)	(8.2)	(32.0)	ABCE	1	暗灰	20	一面No185
535	碗	10.3	2.4	13.5	ABCF	2	暗灰	50	二面116-24-6
536	碗	9.5	3.9	7.2	ABEF	2	灰	60	灰5 111-23-20
537	碗	(13.5)	(4.9)		BC	1	暗灰	15	トレンチ112-24-12
538	碗		3.5	(18.0)	ABC	1	暗灰	5	一面115-23-23
539	坏蓋	14.4	4.7		ABC	1	灰	60	二面No254
540	坏蓋	(13.8)	4.0		AB	1	暗灰	70	二面No259
541	坏蓋	14.4	3.9		ABE	2	褐灰	95	二面No220
542	坏蓋		2.7		ABC	2	青灰	20	二面112-23-25
543	坏蓋	(16.0)	3.3		BCEF	2	青灰	10	灰原112-24-22
544	坏蓋	(15.4)	(3.5)		ABC	1	暗灰	20	二面116-23

k 壺

壺の口縁部（第121～128図1～143）

壺は、口縁部の破片を第121～128図1～143に、胴部の破片を第129～130図1～25に示した。

壺はかなりのバリエーションがみられる。法量、形態、整形、裝飾など様々である。そこで、口縁部の形態を基に分類し、12種類にわたる。焼成はいずれも良好で、口縁部が開くことから自然釉が口縁部内面に付着するものが多い。

1～17は口唇部が丸く緑帯部分に沈線を1本巡らす「沈線一本丸型」。18～24は口唇部が四角く緑帯部分に沈線を1本巡らす「沈線一本角型」。25～39は緑帯部分に沈線2本を巡らす「沈線二本」。40～64は口唇部が丸い「丸型」。65～80は緑帯部分が凹む「凹型」。81～98は緑帯の断面形が三角状である「三角型」。99～104は緑帯部分が膨らみ上下の指頭正痕により突出する「凸型」。105～109は緑帯部分の凹みに沈線が巡る「沈線一本凹型」。110～118は口唇部が内傾に内湾する「内面突出」。119～130は口唇部が角柱状になっている「箱型」。131～135は緑帯部分の両端に沈線が2本巡る「沈線上下二本」。137～143はその他の形態である「その他」。

形態分類した壺の口縁の出土破片数は、灰原5、灰原、一面、二面の各層位ごとに壺口縁部形態分類表に示した。形態と出土層位を比較してみるといくつかの傾向があることに気づく。第一は、いずれの形態も甕の口縁部形態と類似性がある。しかし、最も出土点数の多い三角型は甕の口縁部形態には存在しないことである。第二は、丸型、沈線一本丸型、沈線一本角型、沈線二本は二面および一面に多く検出、灰原面がやや少ない出土である。この傾向は口縁部を丸く作ることに、さらに沈線を加えることが占相として要素を含んでいる可能性が考えられる。第三は、三角形、凹型、沈線一本凹型、凸型は二面、一面よりも灰原出土が多い傾向の見られるものであり新相としての要素を含んでいる可能性がある。これらの傾向は後述する甕の口縁部形態との関係でさらに言及したい。甕造りと壺造りの問題でもある。

灰原跡の各面から検出されており、壺の口縁部の総破片数は758片で灰原出土遺物の中に占める割合は2%である。灰原から418片、一面から270片、二面から70片である。総重量は42,624gで灰原出土遺物の中に占める割合は1%である。灰原から20,143g、一面から18,146g、二面から4,335gである。壺の胴部の総破片数は4,287片で灰原出土遺物の中に占める割合は12%である。灰原から2,555片、一面から1,427片、二面から305片である。総重量は170,277gで灰原出土遺物の中に占める割合は5%である。灰原から98,638g、一面から59,169g、二面から12,470gである。壺の底部の総破片数は190片で灰原出土遺物の中に占める割合は0.5%である。灰原から152片、一面から35片、二面から3片である。総重量は13,839gで灰原出土遺物の中に占める割合は0.4%である。灰原から11,168g、一面から2,496g、二面から175gである。

1～15は沈線一本と分類した口縁部破片である。口唇部は丸く、沈線は下端に巡る。1～4、16、17は直線的に伸びる口縁がやや外傾に開いて立ち上がる。2はヘラの当たりが頸部に見られる。16は外面に溶解物が付着する。17も口縁部から胴部の外面全体に深緑色の釉がびっしり付着している。胴部外面に平行叩き、内面は青海波文が付く。5～11は外傾に開いて立ち上がる。12～15は外傾に直線的に大きく開く。

18～24は沈線一本角型である。口唇部の上面に面をもち、緑帯の側面側に沈線が1本巡る。箱型とは異なり緑帯がある。沈線の位置は沈線一本丸型と同様に緑帯の下端に巡る。丸型も角型も沈線の位置に共通点が見られた。

25～39は沈線二本である。沈線の位置は口唇部の下端に付すもの（27）、中央に付すもの（35）、全体に及ぶもの（30）がある。また、緑帯の付くもの、直線的に伸びるもの、丸く肥圧するものなど様々である。36は口縁部外面に沈線三段区画で波状文を飾る。

40～64は沈線をもたず口縁部の緑帯部分が丸くなる形態で、口唇部の上下端部には面をもつもの（40）や尖るもの（42）など様々な形があり、これをさらに

細分することも可能である。しかし、ここでは同類とした。44、49、54は櫛状1具により頸部を横方向にナデる。58は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部が大きく開き、頸部で屈曲を強め、胴部は水平方向に伸び張りのあることが推定される。胴部外面は平行叩き、内面は粗い青海波文である。全体に自然釉が付着する。61は頸部に平行叩きの痕跡が見られる。内面は溶解物が付着。

65～80は口縁部の緑帯部分が凹み形態である。緑帯の側面を指頭によって押さえつけつまみ上げるため、口唇部上端に尖るもの(65)、面をもつもの(67)、丸く仕上がるもの(69)などが見られる。さらに下端に垂れる傾向にある。この形態は丸型の口縁を整形する際に緑帯部分の面を強く押さえつけることでこの形態になるものと見られる。78は口縁部が外傾にやや外反気味に長く立ち上がる。胴部との接合には口縁部粘土が胴部に食い込んで巻き付いている。広口壺のようである。

81～98は口唇部の形態が断面型で三角になるようなものである。この形態は、丸型と凹型の中間的形態にもとれる。緑帯部分を平坦に造り出し、その際の粘土が下方に伸びる。81は小口径であるが面をもち下方に尖る。87、97はシャープな仕上がりである。焼成も良好で青灰色である。

99～104は凸型で緑帯部分の側面を親指と人差し指によってナデる際に、尖る部分が生じる。または、横ナデ整形の際に指ナデをずらすために突出部が生じる可能性が考えられる。

105～109は沈線一本凹型である。口縁部の緑帯部分に沈線状の凹みをもつ。

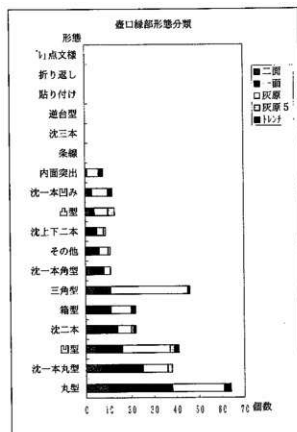
110～118は口縁部が外傾に内湾気味の立ち上がる。複合口縁状をし、粘土が外側に折り曲げられている可能性がある。

119～130は外傾に開いて立ち上がる口縁部が直線的に伸びる。器肉も口唇部までそのまま同じくし、上端部に面をもつ。129、130は口縁部外面に平行叩きを残す。

第23表 壺口縁部形態分類表

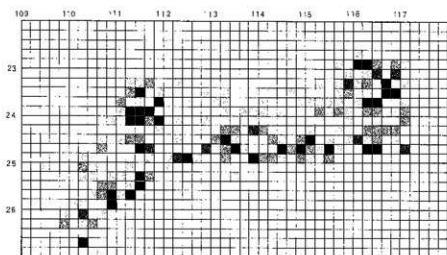
(破片数)

形態	二面	一面	灰原5	トレンチ	合計
丸型	10	28	23	0	61
沈一本丸型	7	18	11	2	38
凹型	4	12	21	2	41
沈二本	2	12	6	1	22
箱型	0	11	9	0	22
三角型	4	7	34	0	46
沈一本角型	2	6	3	0	11
その他	0	6	4	1	11
沈上下二本	0	5	3	1	9
凸型	2	2	6	3	13
沈一本凹み	1	2	7	0	12
内面突出	1	0	5	0	8
条線	0	0	0	0	0
沈三本	0	0	0	0	0
逆台型	0	0	0	0	0
貼り付け	0	0	0	0	0
折り返し	0	0	0	0	0
「レ」点文様	0	0	0	0	0
合計	33	109	132	10	297

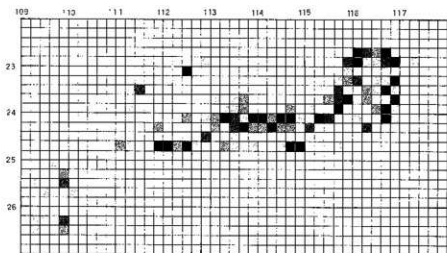


第116図 灰原跡壺出土分布図(1)

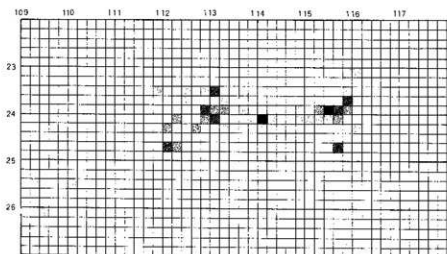
灰原 5・灰原



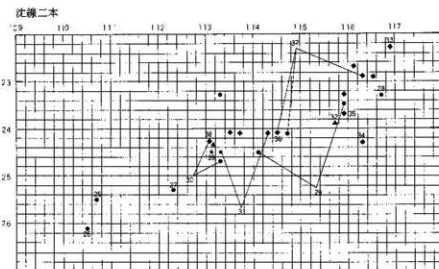
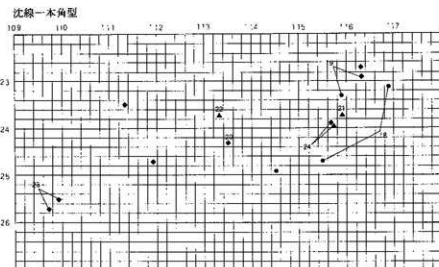
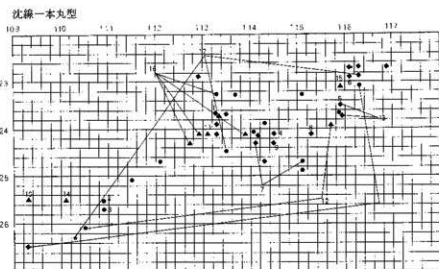
灰原一画



灰原二画

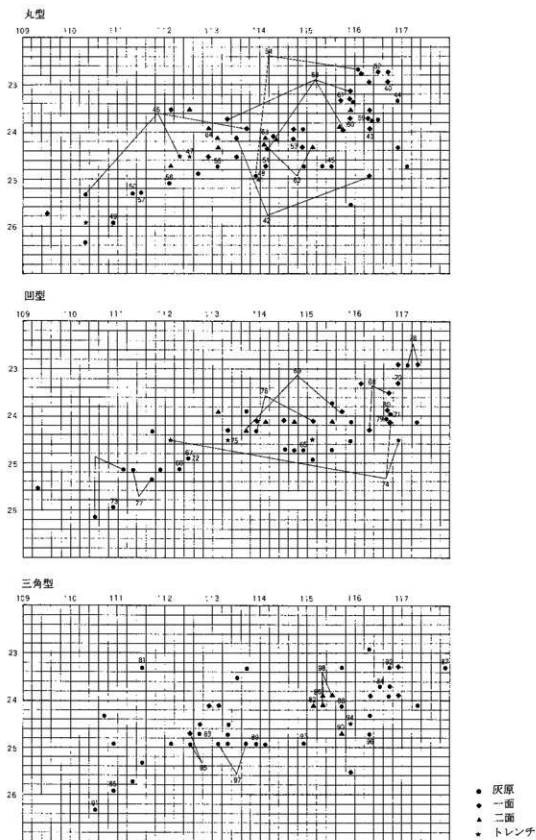


第117図 灰原跡出土分布図(2)

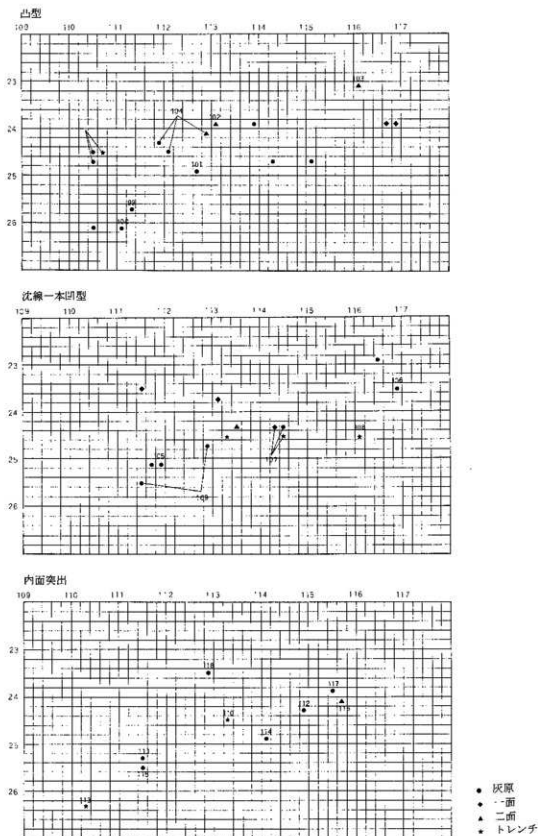


- 灰原
- ◐ 一面
- ▲ 二面
- ★ トレンチ

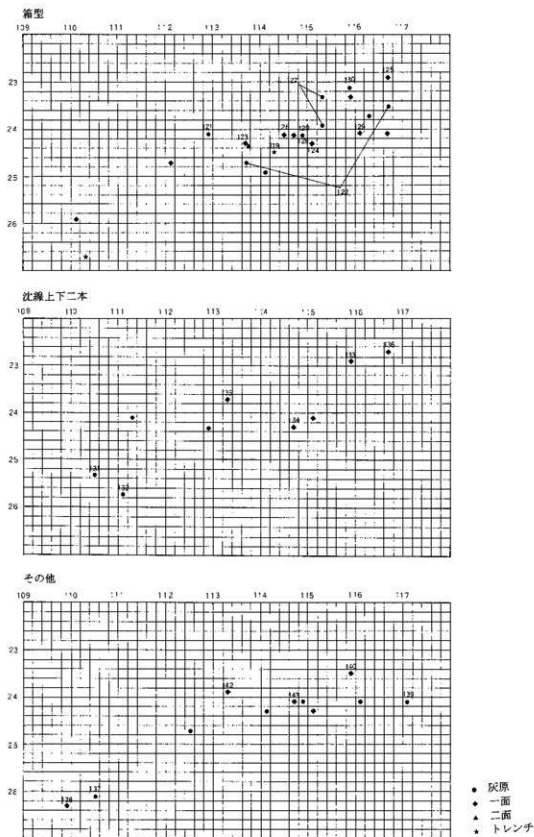
第118図 灰原跡壺出土分布図(3)



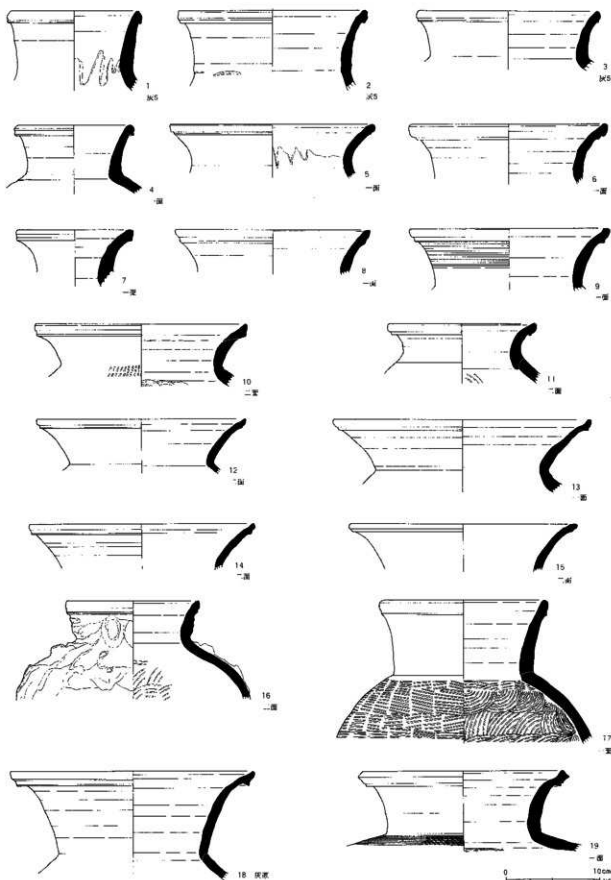
第119図 灰原跡出土分布図(4)



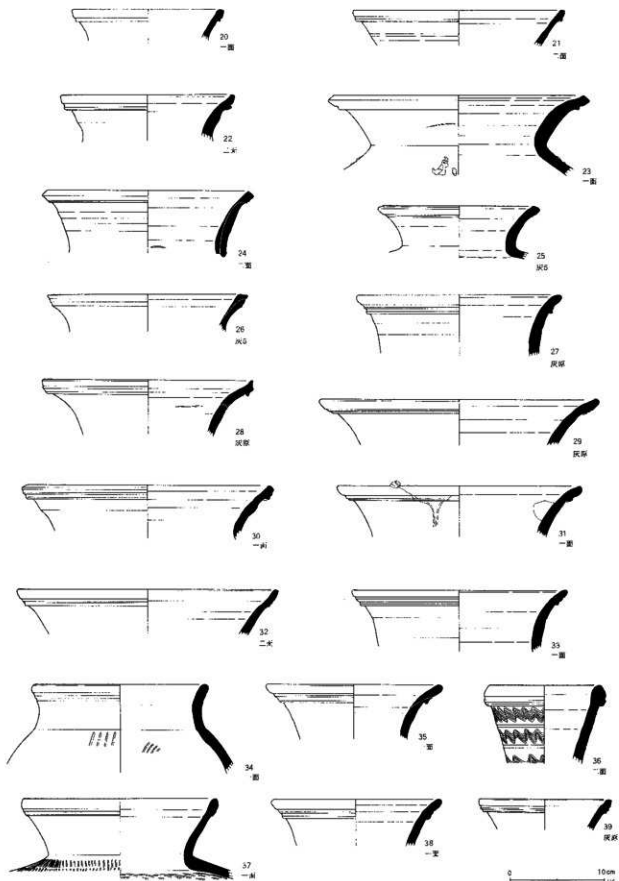
第120図 灰原跡壺出土分布図(5)



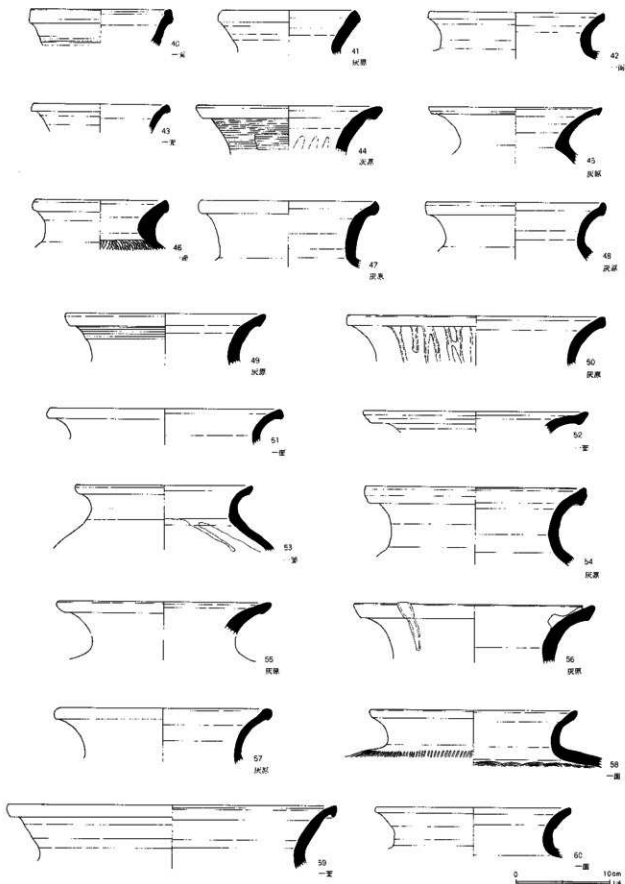
第121図 灰原跡出土壺(1)



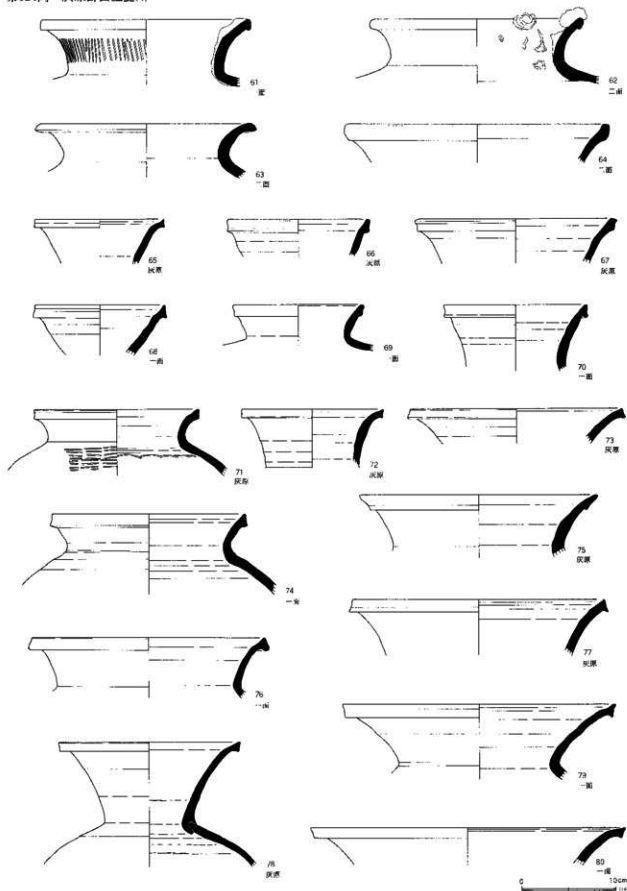
第122図 灰原跡出土壺(2)



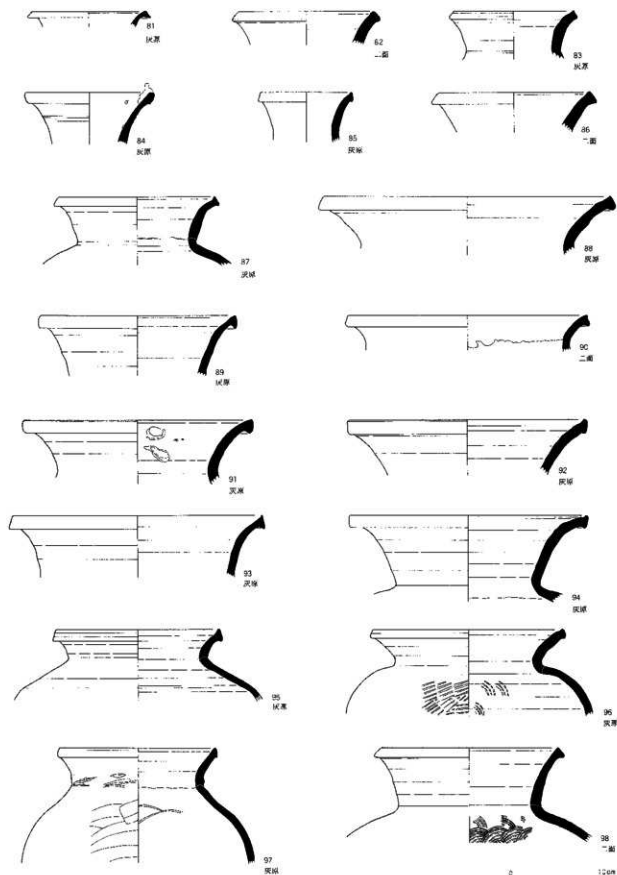
第123図 灰原跡出土壺(3)



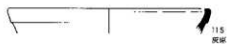
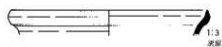
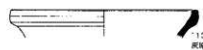
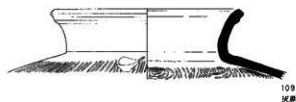
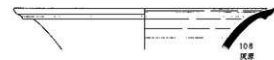
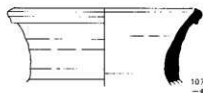
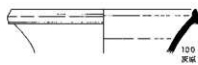
第124図 灰原跡出土壺(4)



第125図 灰原跡出土壺(5)

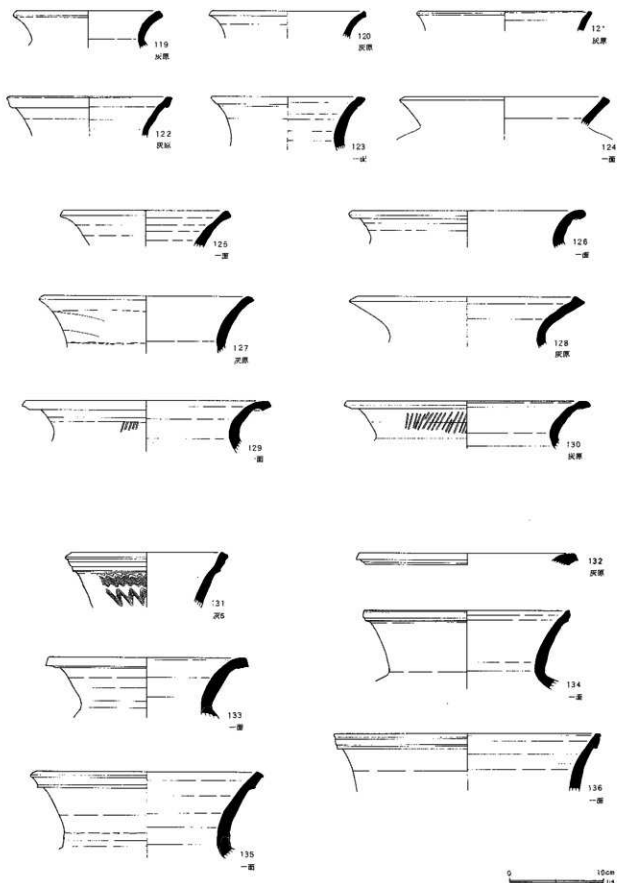


第126图 灰原跡出土壺(6)

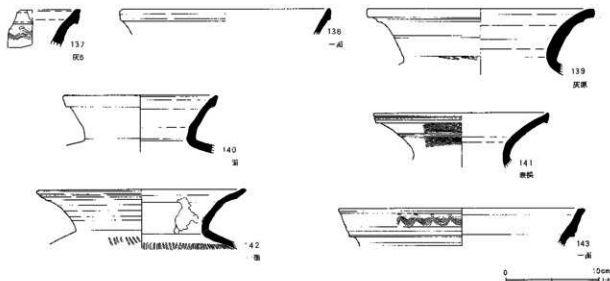


0 10cm
Natural 1:4

第127図 灰原跡出土意(7)



第128図 灰原跡出土壺(8)



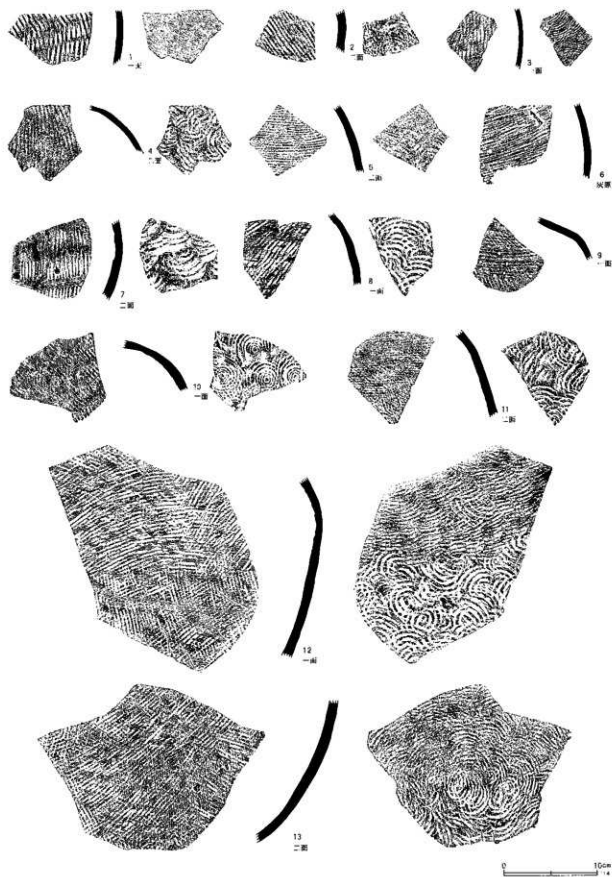
第24表 灰原跡出土壺観察表 (第121~128)

番号	分類	口径	器高	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	沈一本(丸型)	(13.4)	8.4	BCEG	2	暗灰	30	灰5113-23-17	内面に自然釉
2	沈一本(丸型)	(19.9)	(8.4)	ABEF	1	灰	10	灰5110-25-15	
3	沈一本(丸型)	(19.0)	(6.2)	ABEF	1	灰	20	灰5110-25-20	
4	沈一本(丸型)	(11.8)	7.3	ABC	1	黒灰	20	一面114-24-3	内面に自然釉
5	沈一本(丸型)	(21.0)	5.6	ABC	1	黒灰	10	一面116-22-21	
6	沈一本(丸型)	(20.6)	6.3	ABC	2	灰	20	一面115-23-15	
7	沈一本(丸型)	(12.2)	6.3	ABCD	2	黒灰	20	一面114-24-6	頸部にカキ目
8	沈一本(丸型)	(20.6)	4.7	ACDE	2	乳灰	20	一面115-24-2	
9	沈一本(丸型)	(20.0)	6.5	BD	1	灰	20	一面No.1167	
10	沈一本(丸型)	(22.3)	6.6	ABCF	3	淡灰	20	二面109-25-12	内面に自然釉 外面に溶解物付着
11	沈一本(丸型)	(15.4)	6.3	ABF	3	褐	30	二面113-24-1	
12	沈一本(丸型)	(22.2)	5.7	ABCF	2	灰	20	二面115-23-24	
13	沈一本(丸型)	(27.4)	7.6	ABC	1	黒灰	10	一面No.1453	内面に自然釉 外面に溶解物付着
14	沈一本(丸型)	(23.8)	4.8	ABC	2	黒灰	20	二面110-25-11	
15	沈一本(丸型)	(24.0)	5.1	ABC	2	黒灰	10	二面No.208	
16	沈一本(丸型)	(14.0)	10.5	ABF	2	灰	30	二面113-24-5	内面に自然釉 外面に溶解物付着
17	沈一本(丸型)	(17.0)	15.2	ABCD	1	灰	30	一面116-22-22	
18	沈一本(角型)	(25.8)	11.6	ABCDE	1	灰	40	灰原115-24-18	
19	沈一本(角型)	(21.4)	8.5	ABCDE	2	暗灰	20	一面116-22-22	内面に自然釉 外面に溶解物付着
20	沈一本(角型)	(16.2)	3.2	CE	2	灰	5	一面No.655	
21	沈一本(角型)	(22.4)	3.8	CE	2	灰白	10	二面115-23-20	
22	沈一本(角型)	(17.8)	4.8	CE	3	灰白	10	二面113-23-22	内外面に自然釉
23	沈一本(角型)	(26.6)	8.4	BCE	1	灰	20	一面109-25-15	
24	沈一本(角型)	(21.4)	6.6	ABCDE	3	褐	30	二面115-23-24	
25	沈二本	(16.0)	(5.4)	ABEF	2	淡白灰	20	灰5110-25-14	内外面に自然釉
26	沈二本	(20.0)	3.9	BCF	1	灰	20	灰5110-26-3	
27	沈二本	(21.4)	6.4	CD	1	暗灰	20	灰原112-25-7	
28	沈二本	(22.0)	5.9	BCF	2	灰	10	灰原116-23-9	内外面に自然釉
29	沈二本	(29.5)	4.8	ABCF	2	黒灰	10	灰原115-23-15	
30	沈二本	(25.5)	5.6	ABCE	2	灰	20	一面No.746	
31	沈二本	(25.6)	5.4	CE	2	黒灰	20	一面No.1095	内外面に自然釉
32	沈二本	(27.6)	4.8	BCF	1	黒灰	5	二面113-24-6	
33	沈二本	(22.8)	6.5	ABC	1	暗灰	30	一面116-22-10	
34	沈二本	(18.2)	9.3	ABCDE	3	乳白	20	一面116-24-7	

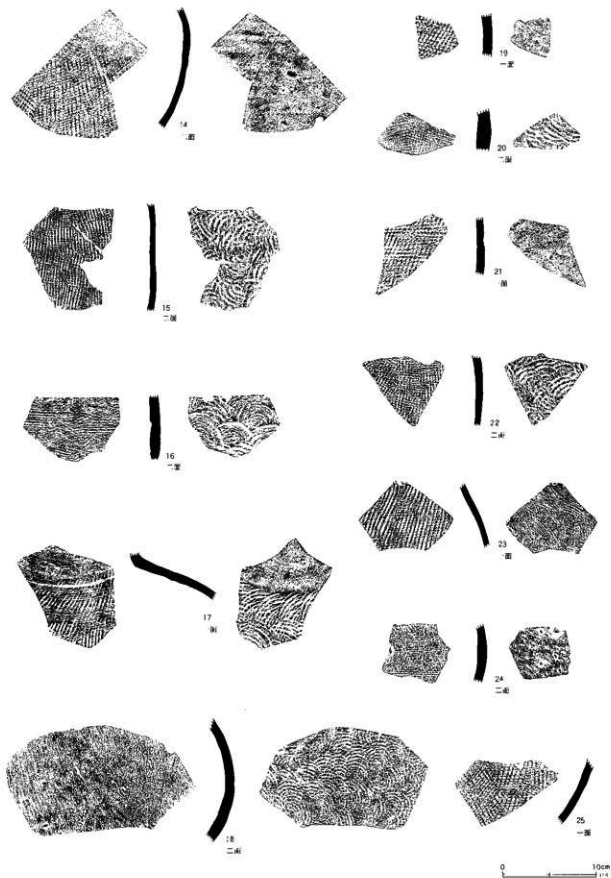
番号	分類	口径	器高	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
35	沈二本	(18.3)	5.8	BCF	2	灰	10	一面115-23-20	
36	沈二本	(11.9)	8.2	BCF	1	淡灰	30	二面115-23-24	頸部外面に波状文
37	沈二本	(20.5)	8.4	ABCF	1	灰	40	一面114-24-4	
38	沈二本	(17.6)	5.0	ABC	2	褐灰	10	一面113-24-6	
39	沈二本	(14.0)	3.2	ABC	1	黒灰	10	トッパ113-24-11	
40	丸型	(15.0)	3.9	BC	2	灰	20	一面116-22-24	頸部外面に沈線2条
41	丸型	(14.0)	4.8	C	1	青灰	25	灰原113-24-25	
42	丸型	(18.7)	4.9	ABCF	2	灰	20	一面113-24-3	
43	丸型	(14.2)	3.0	BCF	2	灰	20	一面116-23-22	
44	丸型	(19.4)	5.2	BCE	1	暗灰	10	灰原116-23-10	頸部外面にハケ目
45	丸型	(18.5)	5.9	BC	1	黒灰	20	灰原115-24-18	
46	丸型	14.0	5.3	BCF	2	暗灰	70	一面113-23-24	
47	丸型	(18.4)	7.1	ABC	2	灰	30	トッパ112-24-18	
48	丸型	(19.0)	6.1	ABCF	2	灰	30	灰原113-24-25	
49	丸型	(21.2)	5.4	ABCF	2	灰	20	灰原110-25-25	頸部外面にハケ目
50	丸型	(27.2)	5.2	BCF	1	灰	20	灰原111-25-7	内外面に自然釉
51	丸型	(24.5)	3.8	ABCF	2	灰	20	一面114-24-16	
52	丸型	(23.8)	2.3	ABCF	2	黒灰	20	一面116-22-18	内面に自然釉
53	丸型	(18.8)	6.8	BCF	2	灰	20	一面114-24-4	内面に自然釉
54	丸型	(23.4)	8.2	ABCF	2	灰	25	灰原116-22-16	
55	丸型	(22.6)	6.2	BC	1	青灰	10	灰原113-24-16	
56	丸型	(25.2)	6.1	ACE	2	灰	30	灰原112-25-1	内外面に自然釉
57	丸型	(22.0)	5.9	ABCF	2	暗灰	10	灰原111-25-8	
58	丸型	21.8	5.9	ABCF	1	灰	40	一面No1340	
59	丸型	(35.0)	6.7	BCF	1	灰	5	一面No3320	
60	丸型	(20.6)	5.2	ABCF	1	灰	20	一面No1531	
61	丸型	(22.0)	7.0	ABCF	2	黒灰	30	一面115-23-9	頸部外面に平行叩き 内面釉付着
62	丸型	(22.0)	6.8	BCF	2	暗灰	20	二面114-24-6	内面に溶解物付着
63	丸型	(22.5)	5.8	BC	2	灰	20	二面114-24-1	
64	丸型	(27.8)	4.1	ABCF	2	灰	20	二面112-23-25	
65	同型	(13.8)	4.8	BCE	2	灰	20	灰原114-24-20	
66	同型	(14.8)	4.0	BCE	2	暗灰	10	灰原112-25-2	
67	同型	(20.6)	4.7	BCE	1	暗灰	20	灰原112-24-23	
68	同型	(13.6)	5.3	ABCE	1	灰	25	一面116-23-19	
69	同型	(13.6)	4.9	ABCE	2	黒灰	40	一面No1605	
70	同型	(15.2)	7.0	BD	1	黒灰	20	一面116-23-10	
71	同型	(17.5)	7.0	ABCD	1	暗灰	15	灰原116-23-24	
72	同型	(15.0)	6.2	ABCE	2	淡灰	20	灰原112-24-23	
73	同型	(22.6)	3.7	BC	2	暗灰	10	灰原110-25-25	
74	同型	20.6	8.5	ABC	2	黒灰	70	一面No3157	
75	同型	(25.2)	6.6	ABCE	1	黒灰	10	トッパ113-24-12	
76	同型	(24.4)	6.3	ABDE	2	乳灰	30	一面No1697	
77	同型	(26.8)	6.0	BC	1	暗灰	20	灰原111-25-2	内外面に自然釉
78	同型	(19.2)	13.2	ACD	2	灰	30	灰原117-22-21	
79	同型	(29.0)	7.9	BCE	1	暗灰	10	一面116-24-4	
80	同型	(33.4)	3.9	BCE	1	灰	10	一面116-23-24	
81	三角型	(12.0)	1.6	C	1	灰	5	灰原111-23-8	
82	三角型	(14.4)	3.5	BC	1	暗灰	10	二面115-24-1	
83	三角型	(12.8)	5.1	ABC	2	灰	20	灰原112-24-19	
84	三角型	(13.6)	5.4	ACE	1	青灰	20	灰原116-23-18	頸部外面に沈線2条
85	三角型	(9.8)	5.2	ABCE	1	青灰	20	灰原110-25-25	
86	三角型	(16.0)	4.2	BCE	1	白灰	5	二面115-23-22	
87	三角型	(16.6)	7.2	BCDE	1	暗灰	30	灰原117-23-16	
88	三角型	(30.0)	6.2	ABCF	2	黒灰	10	灰原112-24-4	
89	三角型	(20.7)	6.3	ABCD	1	青灰	10	灰原113-24-25	
90	三角型	(25.4)	3.6	BCDE	1	灰	15	二面115-24-19	内面に自然釉

番号	分類	口径	径高	胎上	焼成	色調	残存率	出上位置	備考
91	三角型	(24.3)	6.7	BC	1	黒灰	10	灰厚110-26-8	内面に溶解物付着
92	三角型	(25.0)	5.8	ABCE	2	灰	10	灰厚116-23-9	
93	三角型	(26.6)	6.5	AC	1	暗灰	10	灰厚114-24-25	
94	三角型	(25.1)	9.1	ABC	2	灰	20	トッパ115-24-15	
95	三角型	(17.4)	7.6	BCDE	2	暗灰	25	灰厚112-24-18	頸部外面へラケズリ
96	三角型	(20.2)	9.1	ABCDE	2	淡褐	30	灰厚116-24-17	
97	三角型	(16.6)	12.1	ABCD	1	暗灰	30	灰厚113-24-21	
98	三角型	(19.0)	9.7	BC	1	暗灰	20	二面115-23-22	
99	凸型	(25.0)	4.8	BCD	1	黒灰	10	灰厚111-25-17	頸部に二段の短い条線
100	凸型	(19.8)	4.6	BCE	2	暗灰	10	灰厚111-26-1	
101	凸型	(26.0)	5.6	BCDE	2	暗灰	10	灰厚112-24-24	
102	凸型	(21.2)	3.9	ABCE	2	暗灰	15	二面113-23-21	
103	凸型	(20.0)	6.4	ABCDE	2	暗灰	20	二面116-23-1	内外面に自然釉
104	凸型	(23.0)	14.0	ABCDE	2	暗灰	20	灰5 No2166-2172	
105	沈一本(凹型)	(20.6)	6.3	ABCE	1	青灰	20	灰厚111-25-5	
106	沈一本(凹型)	(24.0)	5.2	BCE	1	淡灰	10	灰厚116-23-15	
107	沈一本(凹型)	(19.4)	8.2	BCD	2	暗灰	25	一面No1150	頸部外面に工具の当たり
108	沈一本(凹型)	(27.8)	4.3	BCE	1	暗灰	10	トッパ116-24-11	
109	沈一本(凹型)	(19.6)	7.4	ABCE	1	暗灰	40	灰厚112-24-20	
110	内面突出	(20.0)	2.9	C	1	暗灰	5	トッパ113-24-12	
111	内面突出		5.0	C	1	灰	5	灰厚111-25-8	口縁部外面に波状文
112	内面突出	(15.0)	5.0	BCDE	2	灰白	10	灰厚114-24-10	
113	内面突出	(20.9)	2.7	CE	2	灰	5	トッパ110-26-7	
114	内面突出	(20.0)	3.2	CE	2	褐	15	灰厚114-24-21	
115	内面突出	(21.6)	2.6	BCE	3	褐	5	灰厚111-25-13	外面自然釉付着
116	内面突出	(22.1)	3.8	BCE	1	黒灰	5	二面115-24-4	
117	内面突出	(23.0)	2.7	CE	1	灰	10	灰厚115-23-23	
118	内面突出	(24.0)	2.5	ABC	1	灰	1	二面112-23-15	
119	箱型	(15.2)	3.9	ABC	2	灰	5	トッパ114-24-12	頸部外面に平行印き
120	箱型	(16.2)	2.9	ABC F	2	灰	5	灰厚114-24-5	
121	箱型	(18.0)	2.1	BC	2	灰	5	灰厚112-24-5	
122	箱型	(16.4)	4.2	ABC	1	黒灰	30	灰厚113-24-19	
123	箱型	(16.2)	5.6	BCE	3	灰白	20	一面113-24-9	頸部外面に波状文
124	箱型	(22.2)	3.0	ABE	1	青灰	1	一面115-24-6	
125	箱型	(17.4)	3.8	ABC	2	淡灰	10	一面116-22-24	
126	箱型	(24.8)	3.9	BC	2	黒灰	10	一面114-24-3	
127	箱型	(21.9)	6.1	ABC	2	灰	10	灰厚115-23-7	頸部外面に平行印き
128	箱型	(23.1)	5.4	ABC	1	淡灰	5	灰厚No1021	
129	箱型	(25.9)	5.4	ABC	2	淡灰	1	一面116-24-1	
130	箱型	(25.5)	5.0	ABC	2	青灰	20	灰厚115-23-5	
131	沈上下二本	(16.1)	5.8	BCE	1	黒灰	10	灰5 110-25-8	頸部外面に波状文
132	沈上下二本	(23.0)	1.2	BC	2	灰	10	灰厚111-25-16	
133	沈上下二本	(21.0)	6.4	BCE	1	暗灰	15	一面115-22-25	
134	沈上下二本	(21.8)	8.3	BC	1	黒灰	25	一面114-24-9	
135	沈上下二本	(23.6)	9.2	CE	1	黒灰	20	一面113-23-17	口縁部外面に波状文
136	沈上下二本	(28.2)	6.1	BCD	2	灰	10	一面116-22-19	
137	その他		3.9	BCE	1	灰	1	灰5 110-26-3	
138	その他	21.8	2.7	ABC	1	暗灰	1	一面111-24-20	
139	その他	(24.0)	6.9	BCD	2	暗灰	10	灰厚117-24-1	頸部外面に沈線1条
140	その他	(16.2)	6.1	CE	1	黒灰	10	一面No1489	
141	その他	(18.6)	5.7	ABC	2	灰	5		
142	その他	(21.6)	6.3	ABCE	1	黒灰	25	一面113-23-22	
143	その他	(26.0)	3.9	BCE	2	灰	10	一面114-24-4	口縁部外面に波状文

第129図 灰原跡出土壺(9)



第130図 灰原跡出土壺(10)



131~136は沈線上下2本である。口縁部の縁帯部分に半載した竹管状の工具を押し当てて上下に沈線を施文する。竹管の太さによって沈線の幅が左右されるものと考えられる。131が1.2cm、132が0.7cm、133が0.6cm、134が0.7cm、135が1.0cm、136が1.0cmの幅である。

137~134はその他の形態である。141は細かな波状文が二段施文されている。口唇部にも波状にならない刷毛上の筋りが付く。143の複合状口縁部にも波状文が施されている。

壺の胴部 (第129・130図1~25)

壺の胴部はいずれも叩き調整されている。叩きの種類は平行、擬斜格子、斜格子、格子がみられる。観察表には3cm単位当たりの叩きの本数を示した。内面に見られた青海波文の当て具の径を計った。

1~13、17、18は平行叩きによる。1は6本と粗い。内面は丁寧にナデ消されている。2、3は8本とやや細かい。3の内面青海波文はシャープで細かい。器肉も薄く焼成良好。4は平行叩きのうち横位の刷毛を数条施す。5、6は10~11本の細かい平行叩きである。

7は内外面とも当たりの深い平行叩きである。10は平行叩きの後、細かい刷毛目を施す。

12、13は木目に直行する方向に彫り込んでいるため斜格子状に見られる。いわゆる、擬斜格子である。本来は3cm当たり7~8本の平行叩きであるが、細かい3cm当たり16~17本の木目が直行して刻み状になり格子状の体裁をとる。胴部内面には青海波文が付き、上半部は当て具の先端を細かく当てている。

14~16、19~23、25は格子叩きである。

14、25は幅広の格子である。内面は丁寧にナデ消している。15はやや細かい格子である。16は一方の彫り込みが弱く細いため平行にみえるが、格子に彫り込んだ叩き器具である。19、21はやや粗い。20は非常に細かい彫り込みの間隔の狭い格子叩きである。18は胴部外面に平行叩きを施す。内面は右から左への青海波文を施す。24は胴部外面に自然釉がかかっているため不明瞭であるが平行叩きとみられ、その後、刷毛を施す。

第25表 灰原跡出土壺観察表 (第129・130図)

番号	胎土	焼成	色調	出土位置	叩き種類	縦(本)	横(本)	当て具径	備考
1	BCEF	1	青灰	一面116-22-24	平行	6	—	—	内面当て具痕をナデ消す
2	BCEF	2	淡灰	二面113-23-11	平行	8	—	5.0	
3	CF	1	青灰	一面115-22-25	平行	8	—	有	内面重弧状で中心が見られない
4	ABCF	2	灰	二面110-24-5	平行	7	—	有	外面ハケ目 内面重弧状
5	ABEF	1	灰	二面112-24-4	平行	10	—	4.0	
6	CE	2	青灰	灰原116-22-16	平行	11	—	—	
7	BCEF	1	灰	二面115-23-23	平行	9	—	6.3	
8	ABF	1	灰	一面115-23-22	平行	7	—	6.3	外面ハケ目
9	BCE	2	灰	一面115-23-20	平行	7	—	—	外面ナデ
10	ABEF	2	青灰	一面114-24-6	平行	7	—	5.4	外面カキ目
11	BC	1	灰	二面115-23-19	平行	10	—	4.6	外面ハケ目
12	BCF	1	褐灰	一面116-22-16	擬斜格子	7	10	4.3	外面ハケ目
13	ABF	1	紫灰	二面115-23-24	擬斜格子	8	10	有	
14	BCEF	1	青灰	二面115-24-1	格子	7	10	—	
15	ABF	2	灰	二面115-23-20	格子	9	11	4.2	
16	CE	1	青灰	二面115-24-6	斜格子	12	10	5.0	
17	BCD	1	灰	一面110-26-6	格子	8	6	有	外面ハケ目
18	BCEF	2	灰	二面115-24-1	平行	8	—	4.6	
19	BCF	1	灰	一面114-24-4	格子	8	7	—	
20	BC	2	暗灰	二面115-24-1	格子	9	14	有	
21	CE	1	青灰	一面113-23-19	格子	8	8	—	
22	ABF	2	灰	二面114-23-24	格子	13	10	有	
23	ABC	1	青灰	一面116-22-16	格子	7	11	有	内面細かい青海波
24	BCE	2	灰	二面112-24-17	平行	—	—	—	外面横ハケ
25	BCE	2	灰	一面115-23-15	格子	7	11	—	

1 甕 (第138～204図)

灰原跡出土遺物には多くの器種が検出されたが、その中で甕が圧倒的に多い。甕の出土量は総破片数の約82%、総重量の93%を占めた。甕の形態は人甕の破片が多く見受けられる。甕を中心とした生産が継続的に行われていた可能性が考えられる。大甕の量産が本谷筋における窯場で行なわれていたことをうかがわせる。坏Gに代表される律令食器と共に甕の需要があったことを示唆する。

甕は口縁部、頸部、胴部、底部の部位ごとに掲載した。口縁部は形態分類を行い、形態ごとに掲載した。また、胴部は叩きの種類によって分類し、叩き目の本数を3cmの幅で何本の彫り込みがみられるか観察し、本数の粗密によって掲載した。

甕は多様性があり、バリエーションがみられ、法量、形態、成形、胎土、装飾などの点において様々である。いずれの破片も接合関係があり認められず、もとの形態を復元することが不可能であった。その中で、第147図76は底部から口縁部に至るまで接合し、唯一全体の形態を描き出すことができた。器高89.3cm、口径63.0cmである。形態は第200～204図に示したとおり底部が丸底のもの、平底のものが存在する。胴部は胴部で大きく貼りをもち膨らむ。最大径は胴部上位にあると考えられる。底部に向けて脛をつぼめる。口縁部は大きく伸び外傾に立ち上がる。第171図の310のみが短い口縁である。成形は粘土紐によって積み上げられた胴部を叩き締めて器肉を一定に保ち、張りのある形状に整える。外面は叩きのマダであるが、内面は青海波文をそのまま残し、一部ナデが消しているものもみられる。口縁部は叩き締めて器肉の厚さと形態を整えている。その後、ロクロ整形により円形の形状を整える。頸部の位置で胴部の上に口縁部を載せつなぎ合わせる。その際は頸部の内外面に補強帯と同様に粘土紐を回してナデツケにより接合している。前代まで見られた装飾を兼ねた頸部突帯とは外観を異にするが機能は同様である。このナデは口縁部の中位にまでおよび指圧痕が認められる。このほか、口縁部の器面に

第153図125にみられるような横刷毛が認められるものも存在する。口唇部の形態は指先の技法や工具によって様々である。胎土はきめの細かな粘土を使用しているが灰原に大量に廃棄されていることから判断にて成功率は極めて低かった可能性がある。粘土の成分によるものか粘土の水継などの技術的未熟さによるものかは判断できない。装飾は口縁部外面に行われ、無文のものは数%と極少量である。装飾の大半は波状文を描く、掲載した311点の口縁部破片を分析すると、波状文の歯歯の本数は1本から12本まで様々の工具が使用されている。区画は無区画のものと沈線区画によるものとが存在し、沈線1本と沈線2本とが存在する。区画の段数は口唇部から頸部まで残存しているものを観察すると2段から6段区画まで存在することが明らかとなった。詳細な分析結果については後述する。このほか波状文以外には、第165図238～249にみられる刷毛状工具による条線文様を全体に施すものや第167図256～267にみられるような棒状工具による刺突状の「レ」点文様の装飾もみられた。甕の焼成方法は第203図42～44に示したように丸底の甕を固定するため周囲に甕の胴部破片を数枚重ねえとしている。焼き台として甕胴部の破片を再利用している。

甕の口縁部 (第130～172図1～320)

甕は、口縁部の破片を第138～172図1～320に図示した。

口縁部の形態を基に分類し、18種類にわたる。分類の対象となった資料は636点におよび、二面出土資料が73点、一面出土資料が260点、灰原出土資料が263点、灰原5出土資料が19点、灰原跡トレンチ出土資料が21点である。この内、実測掲載資料は320点である。本分類は、壺の口縁分類と共通性が多く認められる。焼成はいずれも良好で、胎土も緻密なものが多い。

分類基準について簡単に示すと、1～18は緑帯部分の両端に沈線が2本巡る「沈線上下二本」。19～53は緑帯部分に沈線2本を巡らす「沈線二本」。54～80は口唇部が丸く緑帯部分に沈線を1本巡らす「沈線一本丸型」。81～135は口唇部が四角く緑帯部分に沈線を1本

巡らす「沈線一本角型」。136～163は緑帯部分が「凹む」「凹型」。164～194は口縁部外面に粘土紐を貼り付けた隆線で突帯風である「貼り付け」。195～205は緑帯部分が膨らみ上下の指頭玉痕により突出する「凸型」。206～230は口唇部先端が断面層状に閉じ端部に平坦面をもつ「逆古型」。232～236は頸部に断面の形が四角い補強帯をもつ「補強帯」。238～249は頸部に縦方向の櫛描きの装飾を施す「条線文様」。250～255は口唇部が内傾に内湾する「内面突出」。256～267は頸部に「レ」点文様の装飾をもつ「レ点文様」。268～281は口唇部が角柱状になっている「箱型」。282～286は緑帯部分に沈線3本を巡らす「沈線三本」。287～304は口唇部が丸い「丸型」。305・306は口縁部の緑帯部分に波状文様を施す「端面波状」。307～309は口唇部が外側に折り返されている「折り返し」。310・311はその他の形態である「その他」。以上の甕の口縁部は波状文をはじめいくつかの文様を装飾している。しかし、312～320は頸部の装飾はなく無文である。

形態分類した甕の口縁部の出土破片数は、灰原5、灰原、一面、二面の各層位ごとに甕の口縁部形態分類表に示した。出土状況および接合関係については第131～137図に示した。形態と出土層位を比較してみるといくつかの傾向があることに気づく。第一は、多くの形態が壺の口縁部形態と類似性がある。しかし、壺の口縁部形態にみられない沈線三本、逆古型、貼り付け、折り返しの形態が存在する。第二は、沈線一本丸型、沈線一本角型、沈線二本は二面および一面に多く検出し、灰原面がやや少ない出土である。この傾向は口縁部に沈線を加えることが古相としての伝統的な要素を含んでいる可能性が考えられる。第三は、凹型、「レ」点文様、凸型、貼り付けは二面、一面よりも灰原出土が多い傾向の見られるものであり新相としての要素を含んでいる可能性がある。

灰原跡の各面から検出されており、甕の口縁部の総破片数は3,329片で灰原出土遺物の中に占める割合は9%である。灰原から1,651片、一面から1,309片、二面から369片である。総重量は478,374gで灰原出土遺

物の中に占める割合は13%である。灰原から215,218g、一面から21,645g、二面から44,511gである。

甕の胴部の総破片数は2,525片で灰原出土遺物の中に占める割合は72%である。灰原から13,077片、一面から10,010片、二面から2,538片である。総重量は2,772,345gで灰原出土遺物の中に占める割合は79%である。灰原から1,347,800g、一面から1,173,566g、二面から250,979gである。

甕の底部の総破片数は256片で灰原出土遺物の中に占める割合は0.7%である。灰原から200片、一面から54片、二面から2片である。総重量は38,598gで灰原出土遺物の中に占める割合は1%である。灰原から27,406g、一面から10,517g、二面から675gである。

1～18は沈線上下2本と分類し、636点中37点である。緑帯部分の両端に沈線が2本巡る口縁部の緑帯部分に半裁した竹管状の工具を押し当てて上下に沈線を施文する。竹管の太さによって沈線の幅が左右されるものと考えられる。

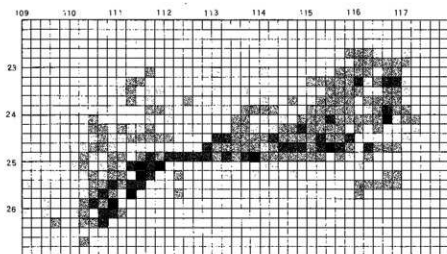
出土状況は二面から5点、一面から17点、灰原から14点であった。中層の一面が多く北東側の谷筋上流域に多く集中して出土している。上層の灰原面が次いで多く一面との接合関係をもつ16・18が存在する。やや南および谷筋の下流域に流された状態で出土している。下層の二面はやや少なく、18の甕はすべての面から出土した破片と接合している。

沈線による区画は1本が9片、2本が1片、沈線区画を持たないものが5片である。段数は4段、5段が各2片である。波状文の櫛歯は1本～12本まで様々である。

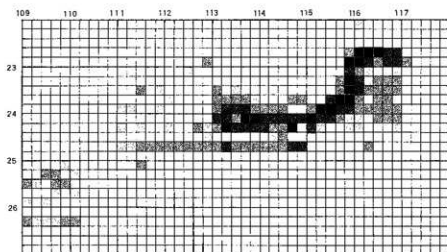
8は器肉の薄い口縁部が外傾に外反して立ち上がる。沈線1本区画により4段までは確認できる。区画線の中に櫛歯1本の波状文が施される。16は推定口径49.0cm、ロクロ回転を利用した沈線1本による4段区画に櫛歯7本の波状文が施される。口縁部下端には平行叩きが残る。18も同様の文様構成である。叩きは格子叩きが残る。推定口径62.6cmである。17は沈線1本による5段区画である。推定口径46.0cmである。

第131図 灰原跡出土分布図(I)

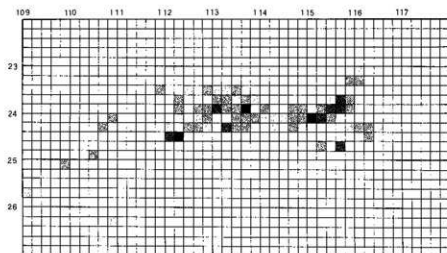
灰層5・灰原



灰層一面



灰層二面



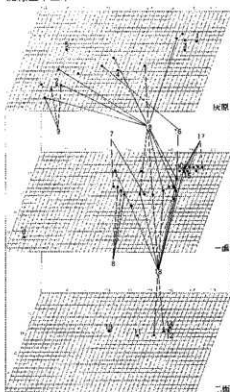
第132図 灰原跡出土分布図(2)

第26表 樋口縁部形態分類表

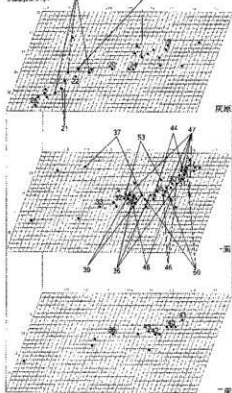
(破片数)

形態	二面	一面	灰原	灰原5	トレンテ	合計
沈一本角型	26	54	38	6	2	126
沈二本	12	42	20	3	3	80
沈一本丸型	7	40	14	1	2	64
沈上下二本	5	17	14	0	1	37
糸線	4	3	6	0	2	15
沈二本	3	7	4	0	0	14
その他	3	3	3	0	0	9
内面突出	3	1	4	1	0	9
丸型	2	21	27	1	3	54
進台型	2	17	16	0	0	35
箱型	2	14	11	0	1	28
貼り付け	1	10	33	0	4	48
折り返し	1	6	3	0	0	10
凸型	1	2	18	2	2	25
「レ」点文様	1	2	9	1	1	14
凹型	0	17	42	1	0	60
補強帯装	0	4	0	2	0	6
端歯波状	0	0	1	1	0	2
合計	73	260	263	19	21	636

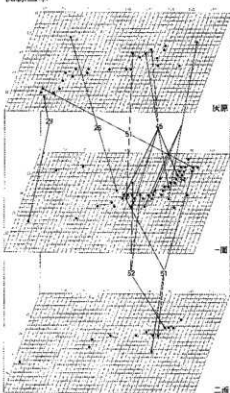
沈線上下二本



沈線二本

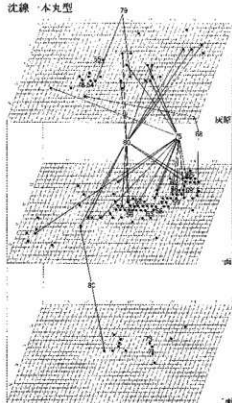


沈線二本

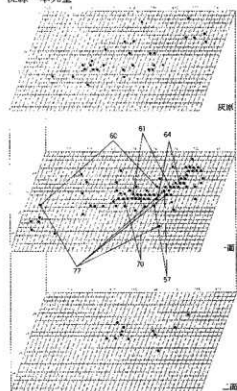


第133图 灰原跡出土分布图(3)

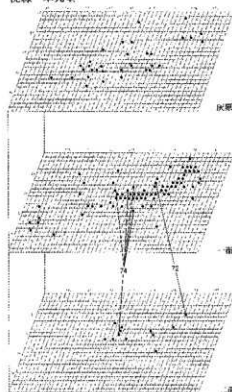
沈線一本丸型



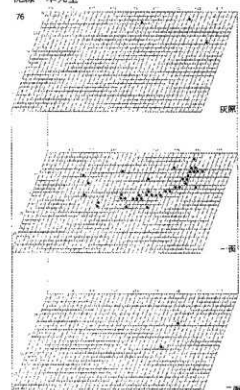
沈線一本丸型



沈線一本丸型

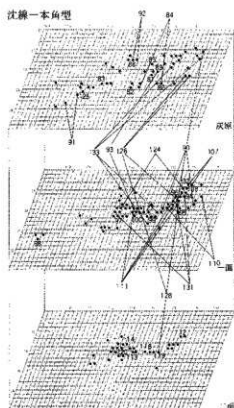


沈線一本丸型

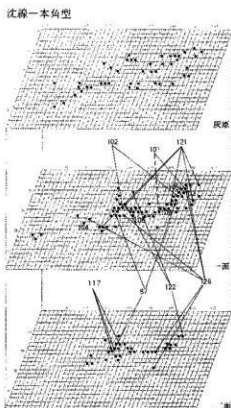


第134图 灰原跡壘出土分布图(4)

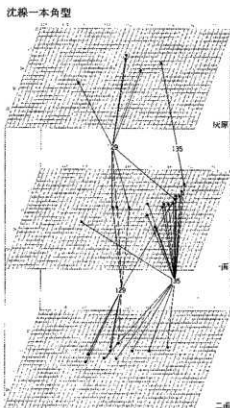
沈縣一本角型



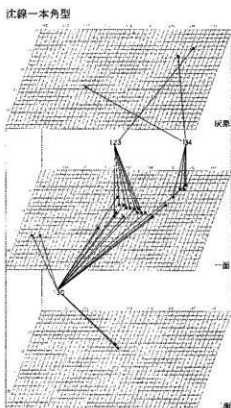
沈縣一本角型



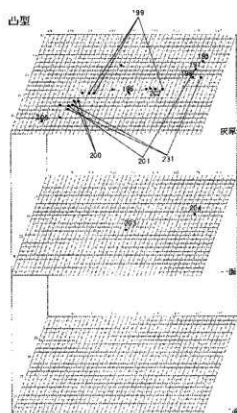
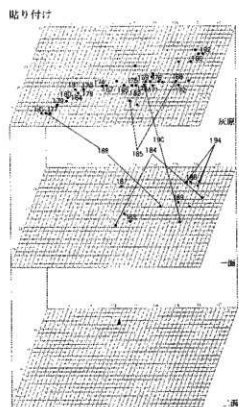
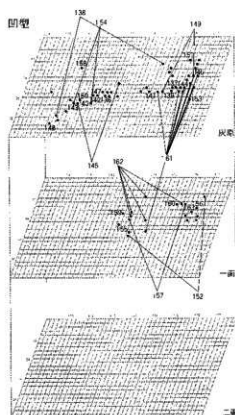
沈縣一本角型



沈縣一本角型

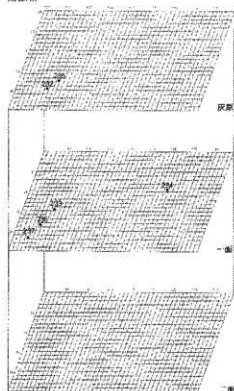


第135図 灰原跡出土分布図(5)

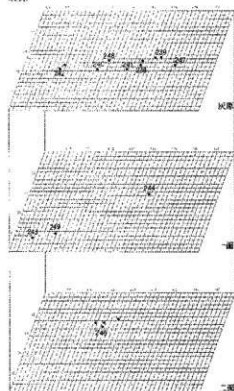


第136図 灰原跡出土分布図(6)

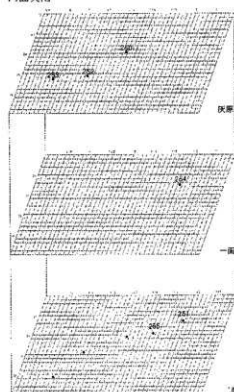
補強柵



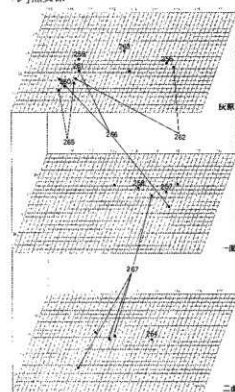
糸線



内面突出

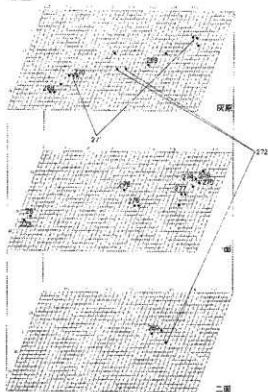


「レ」点文様

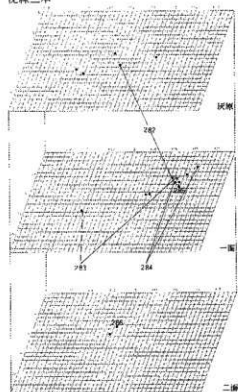


第137図 灰原跡變出土分布図(7)

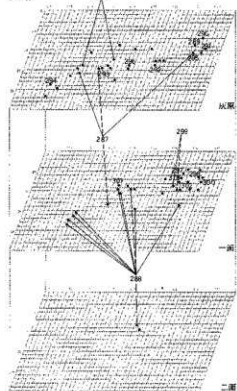
箱型



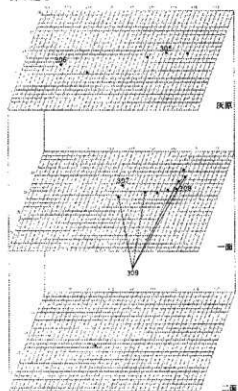
沈堀三本



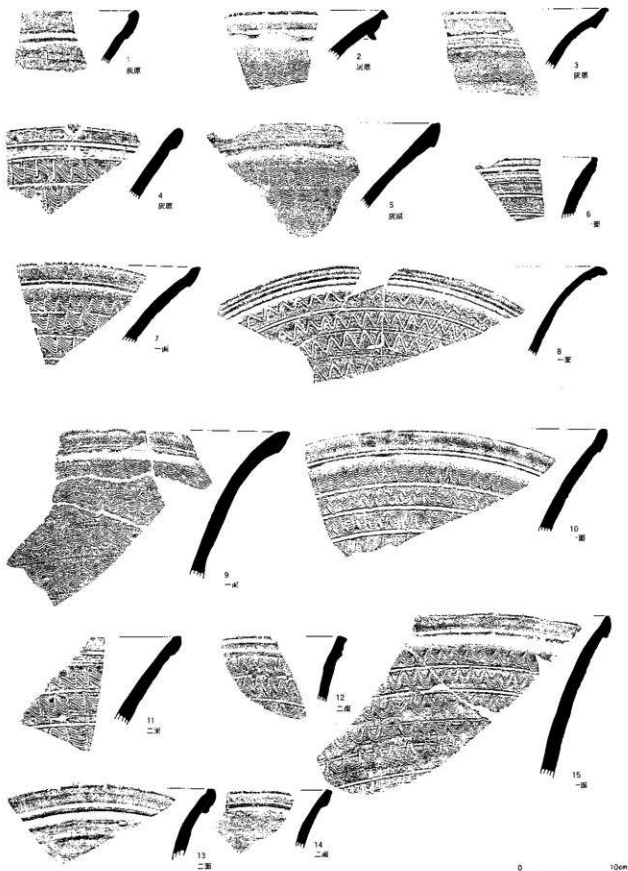
丸型

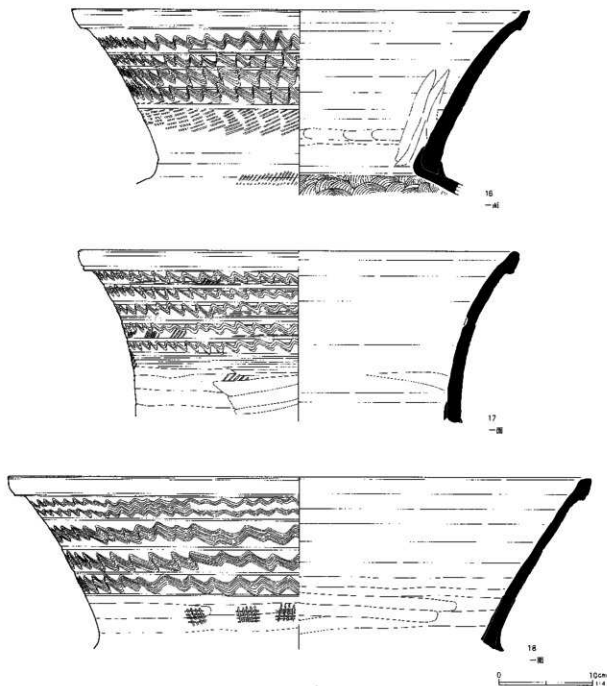


折り返し



第138图 灰原跡出土壺(1)



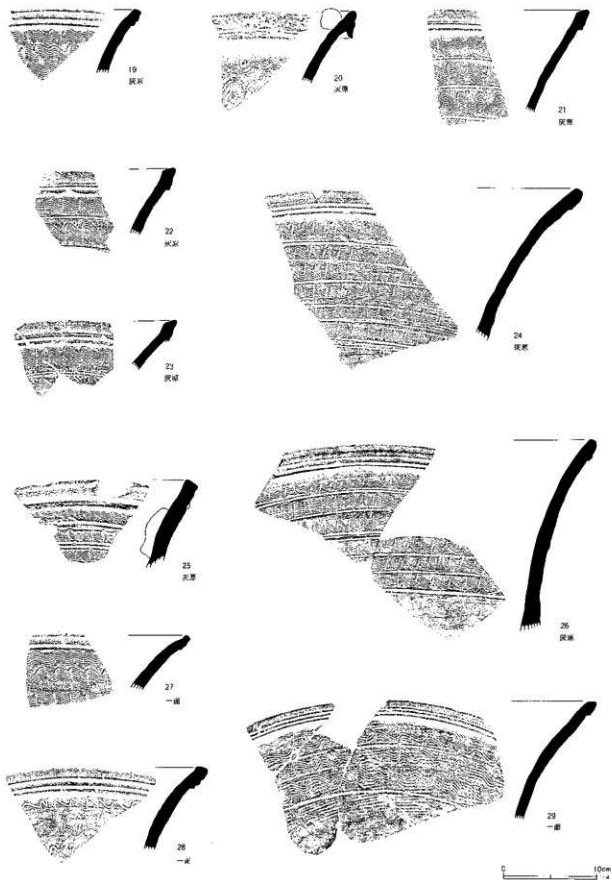


19～53は沈線 2 本と分類した。636点中80点である。沈線の位置は口唇部の下端に付すもの、中央に付すもの、全体に及ぶものがある。また、縁帯の付くもの、直線的に伸びるもの、丸く肥圧するものなど様々。

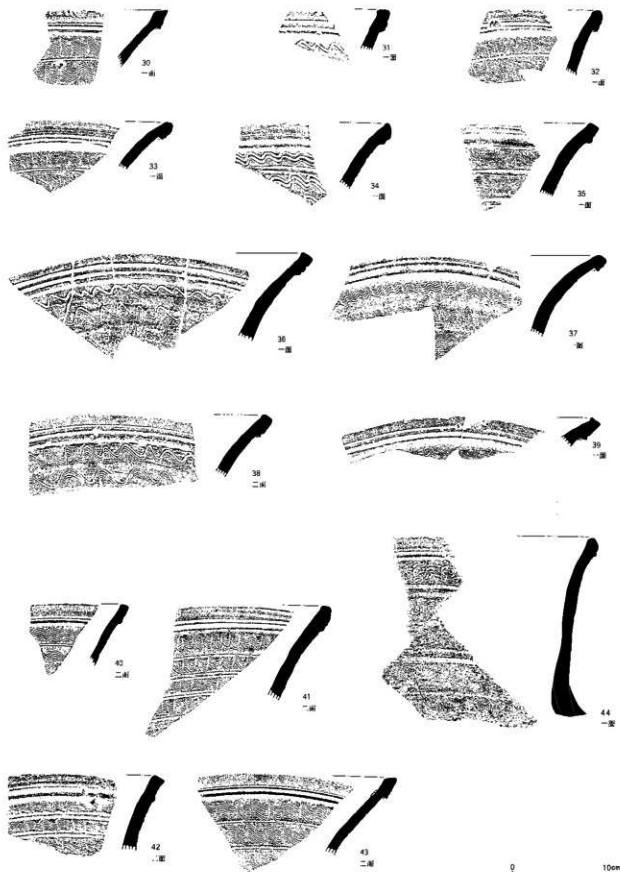
出土状況は二面から12点、一面から42点、灰原から20点であった。中層の一面が多く出上している。上層の灰原面が次いで多く一面との接合関係をもつ26・

29・45が存在する。下層の二面はやや少なく、51の甕はすべての面から出上した破片と接合している。沈線による区画は1本が20片、2本が5片、沈線区画を持たないものが9片である。段数は3段が5片、4段が1片、5段が3片、6段が2片である。他に6段を数えるものは沈線1本に1点あるのみである。波状文の楕歯は1本～10本まで様々である。

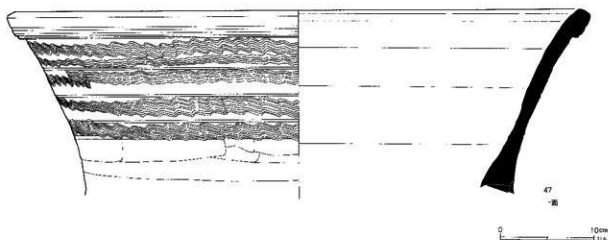
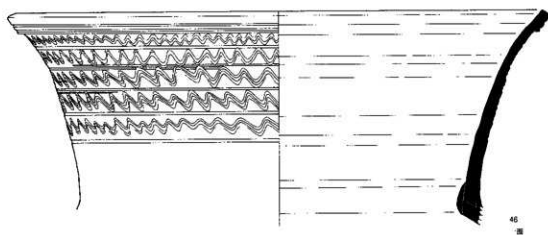
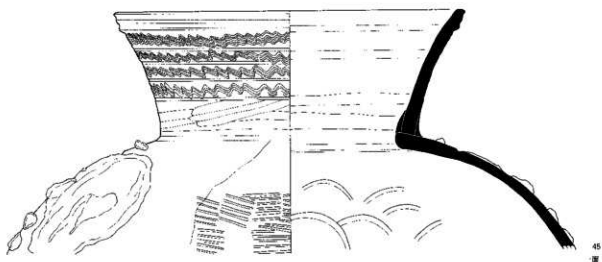
第140図 灰原跡出土壺(3)



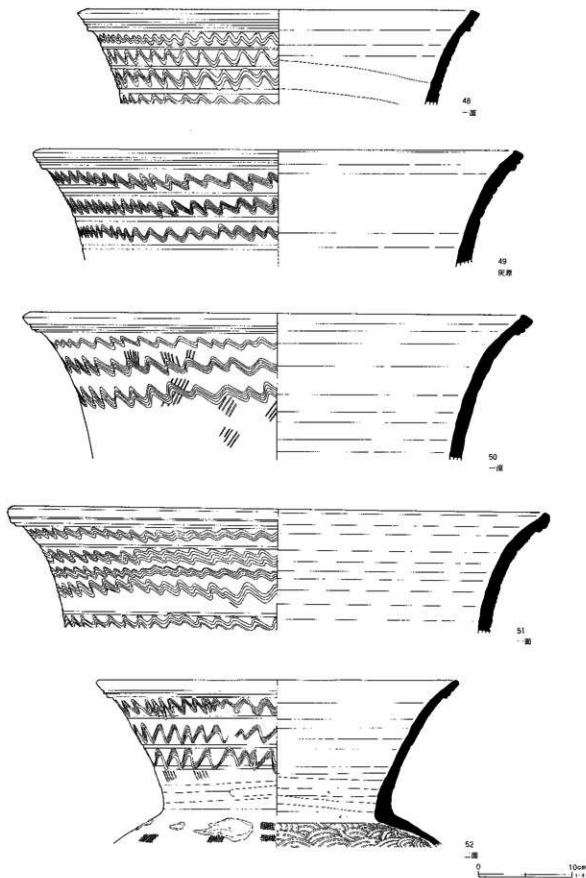
第141圖 灰原跡出土物(4)



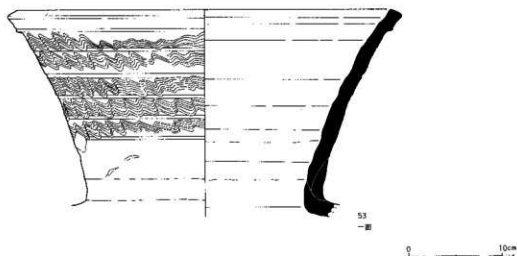
第142図 灰原跡出土壺(5)



第143图 灰层出土甕(6)



第144図 灰原跡出土壺(7)



54～80は沈線一本丸型と分類した。636点中64点である。口唇部は丸く縁帯部分に沈線を1本巡らす。

出土状況は二面から7点、一面から40点、灰原から15点であった。一面が多く、灰原面が次いで多い。一面との接合関係をもつ68・75が存在する。二面はやや少なく、80は全ての面で接合している。

沈線による区画は1本が16片、2本が3片、3本が1片、沈線区画を持たないものが7片である。段数は2段が1片、3段、4段、5段が各2片である。波状文の櫛歯は2本～9本まで様々である。

74・75は無文である。76は口径63.0cm、器高89.3cm、胴部最大径88.1cmである。底部は丸底であるが重圧により扁平化している。胴部は貼りか強く、口縁部は外傾に外反気味に開く。沈線1本による区画線が3段、その中に9本の櫛歯による波状文が割り付けられている。頸部は指ナデ調整が内外面に施される。胴部外面は平行叩き、内面は青海波文が残り、一部ヘラナデ。

81～135は沈線一本角型と分類した。636点中126点である。この形態は出土数が沈線一本丸型とあわせると190点におよび全体の約3割にあたる。

角型は、口唇部の上面に面をもち、縁帯の側面側に沈線が1本巡る。箱型とは異なり縁帯がある。沈線の位置は沈線一本丸型と同様に縁帯の下端に巡る。丸型も角型も沈線の位置に共通点が見られた。

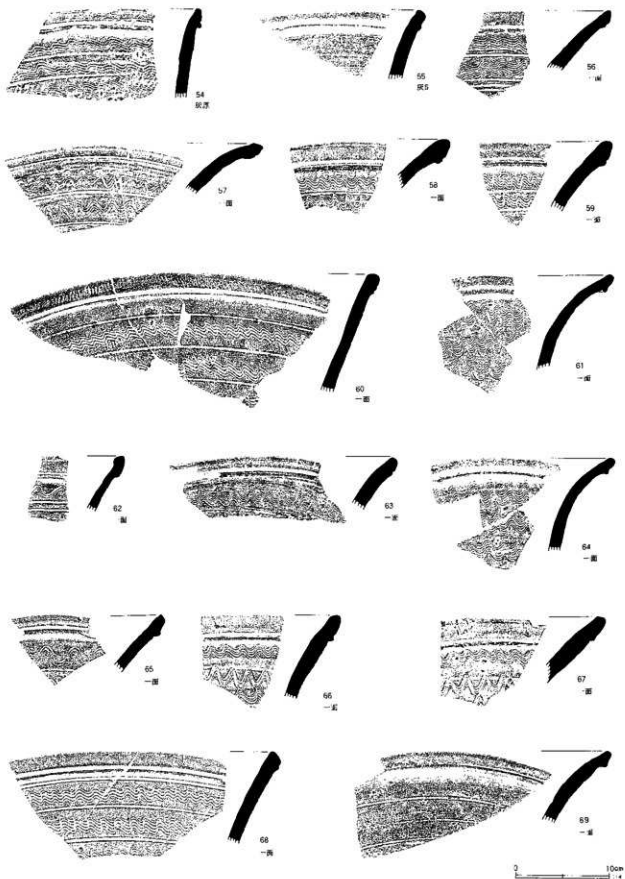
出土状況は二面から26点、一面から54点、灰原から

38点であった。中層の一面が多く谷筋全体から出上している。上層の灰原面が次いで多くやはり谷筋全体から出上している。下層の二面からも多く出上している。第135図には各層位から出土した破片の出土位置と接合関係を示した。灰原と一面との接合関係をもつ90・93・123・133・134が存在する。また、一面と二面の接合関係をもつ87・122・126・130が存在する。さらに、128・129・135はすべての面で接合している。

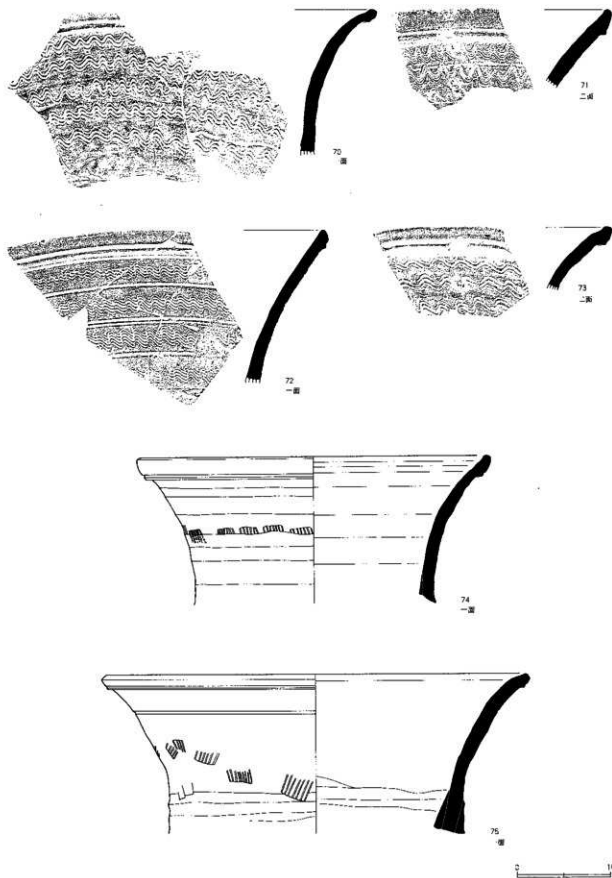
沈線による区画は1本が35片、2本が5片、沈線区画を持たないものが9片である。段数は2段が2片、3段が4片、4段が7片、5段が2片、6段が1片である。波状文の櫛歯は1本～11本まで様々である。

121は沈線2本による区画線が二段、その中に3本の櫛歯による波状文が割り付けられている。122は沈線1本による区画線が五段、その中に3本の櫛歯による波状文が区画線をかなりはみ出して割り付けられている。頸部には接合の際の細かな指ナデがみられる。123は太い沈線2本による区画線がみられるが波状文の施文がない。124・125・130は平行叩きの後、横割け、沈線区画の後、波状文を施している。124は接合の際の指ナデ調整が内外面とも口縁部中位までおよぶ。133・134・135は区画線をもたない。133と134は3段の波状文がみられる。135は2段の波状文が巡る。胴部と接合し、肩部の貼りはやや弱く球彩に近い。外面は平行叩きを内面は青海波文を残す。

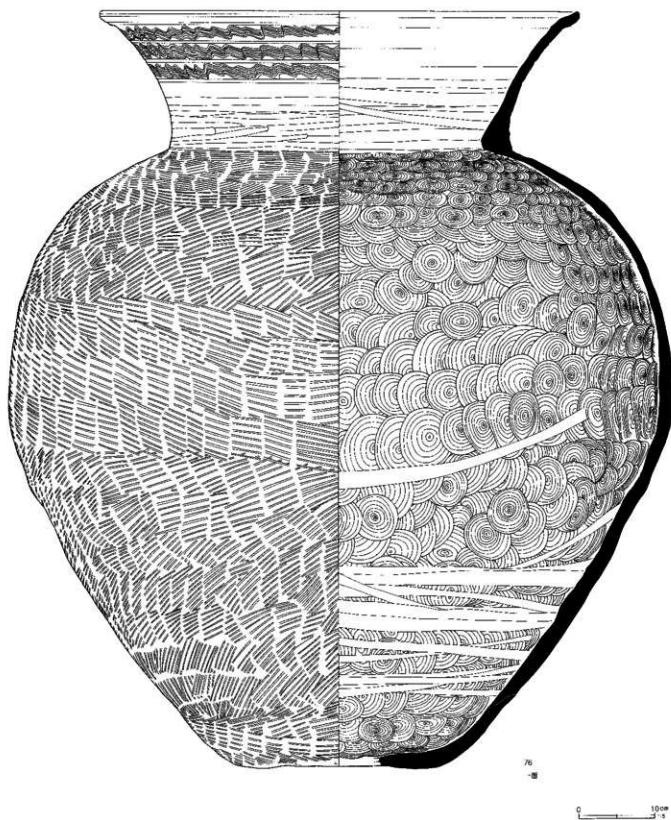
第145図 灰原跡出土甕(8)



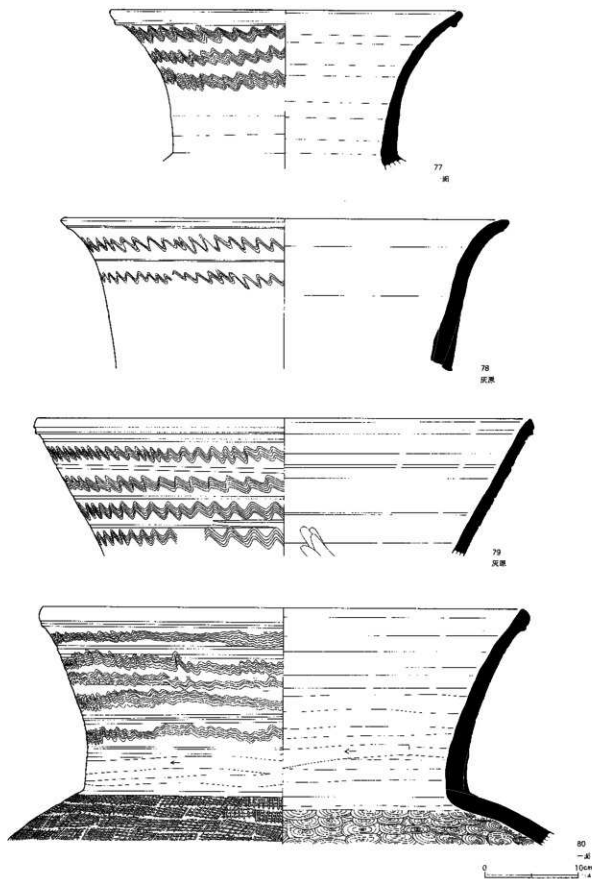
第146図 灰原跡出土壺(9)



第147图 灰原跡出土甕(10)



第148図 灰原跡出土壺(1)



第149图 灰原跡出土壺(12)



81
灰原



82
灰原



83
灰原



84
灰原



85
灰原



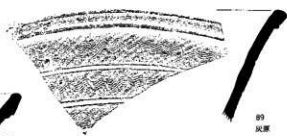
86
灰原



87
一面



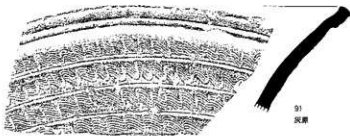
88
灰原



89
灰原



90
一面



91
灰原



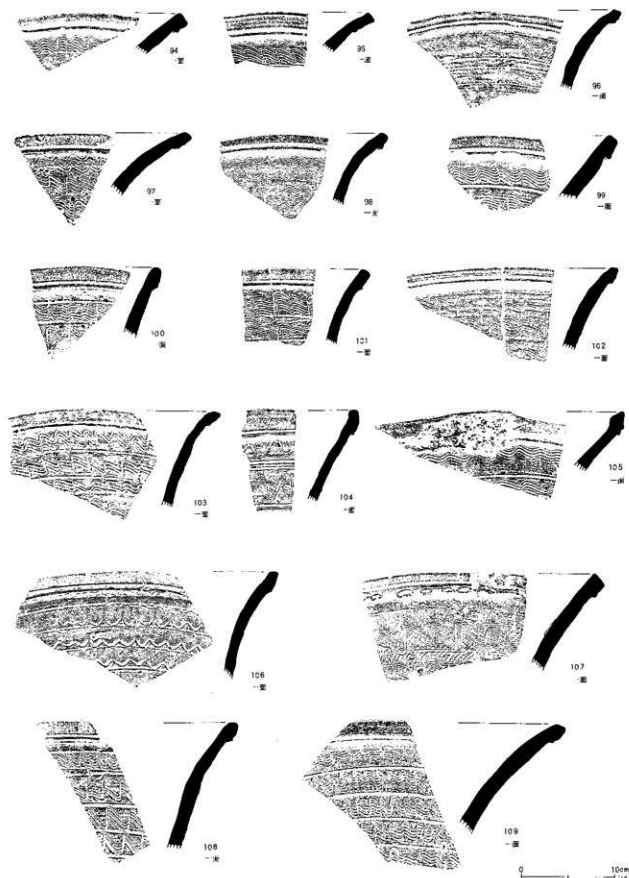
92
灰原



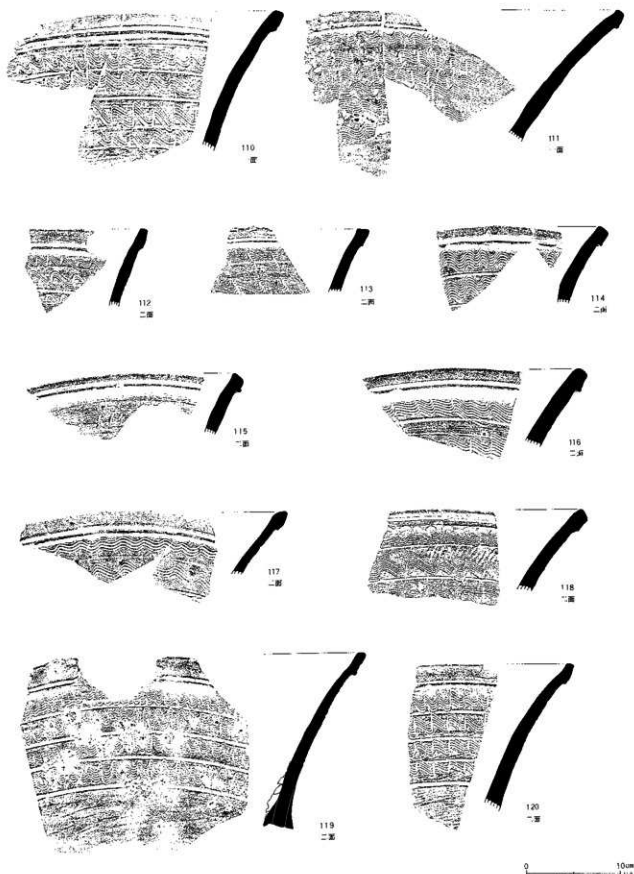
93
一面

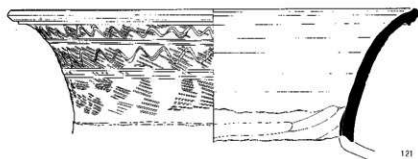
0 10cm

第150図 灰原跡出土壺(3)

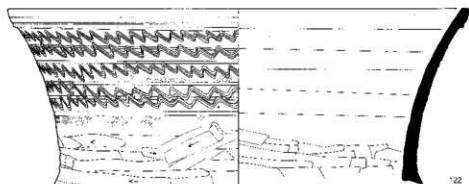


第151図 灰原跡出土甕(4)

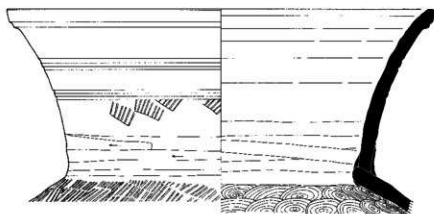




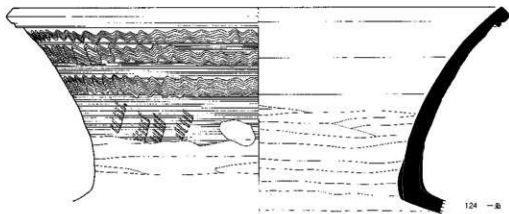
121
一壺



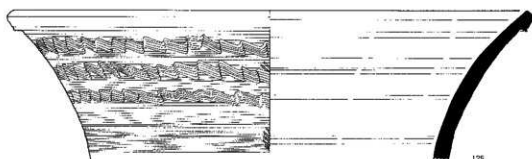
122
一壺



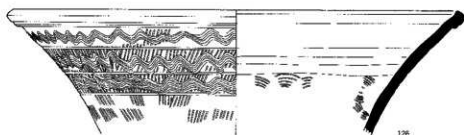
123
一壺



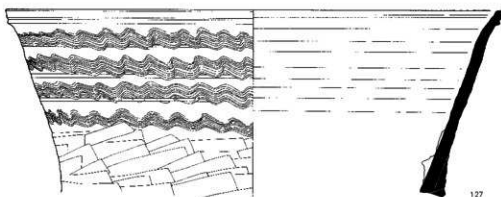
124 一壺
0 10cm 1:4



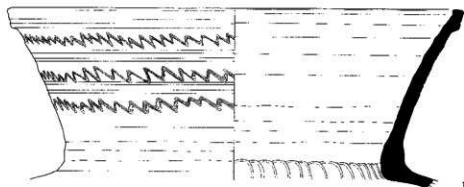
125
灰原



126
一画



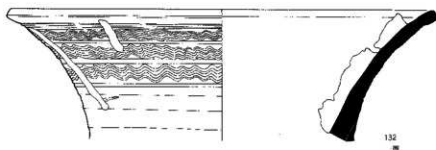
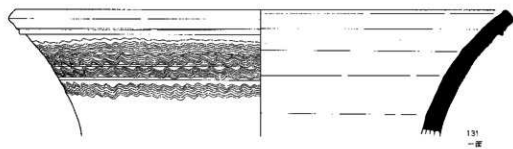
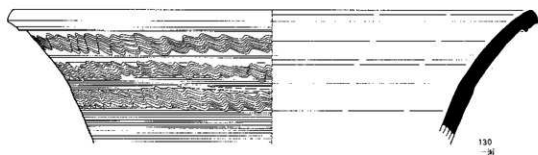
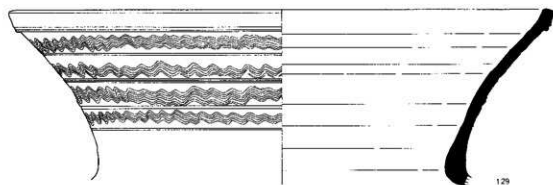
127
一画



128
一画

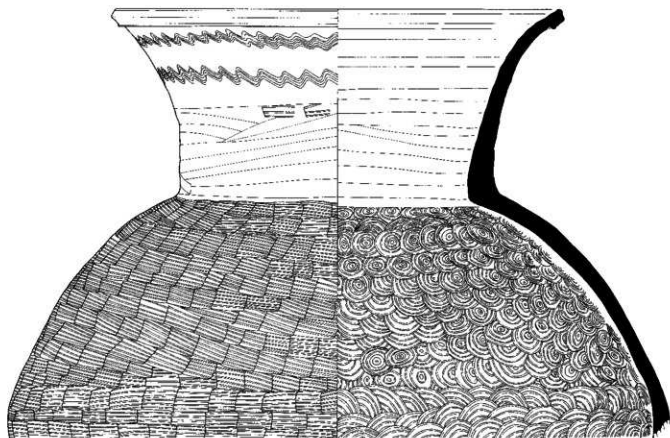
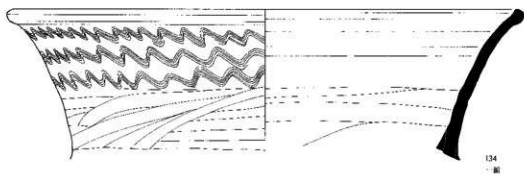
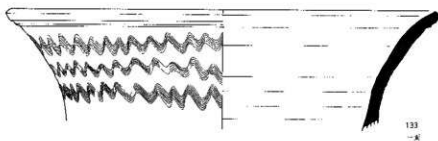
0 10cm
1:4

第154図 灰原跡出土竈(7)

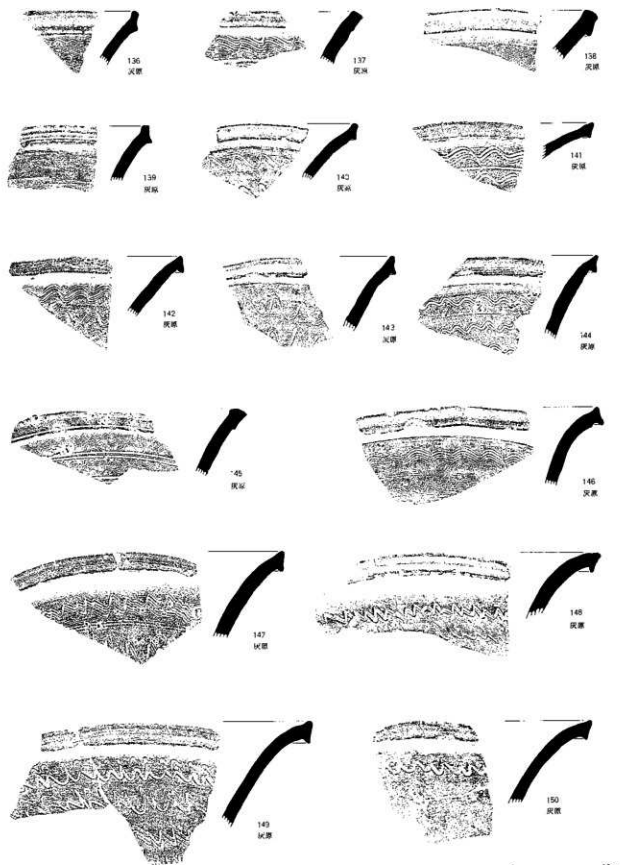


0 10cm
1:4

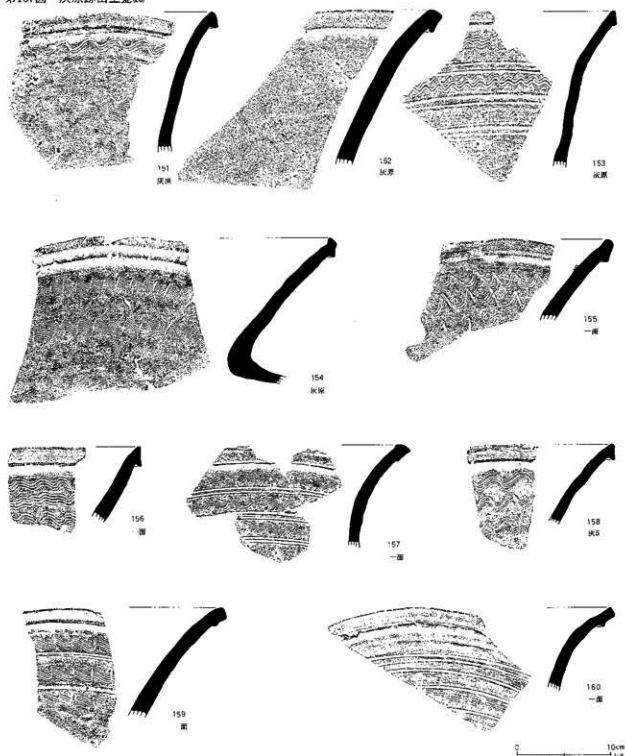
第155図 灰原跡出土壺(8)



第156図 灰原跡出土壺(9)



第157図 灰原跡出土竈鈎

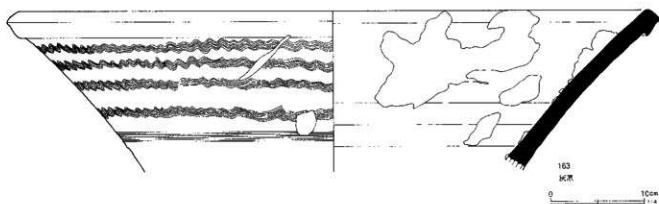
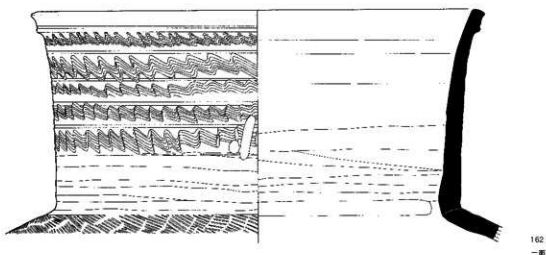
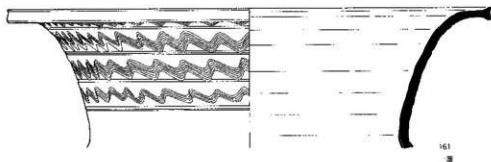


136～163は口縁部の縁帯部分が凹む形態である。凹型と分類した。636点中60点である。縁帯の側面を指頭によって押さえつけつまみ上げるため、口唇部上端に突るもの(156)、面をもつもの(152)、丸く仕上がるもの(151)などが見られる。さらに下端に垂れる傾

向にある。この形態は丸型の口縁を整形する際に縁帯部分の面を強く押さえつけることでこの形態になるものと見られる。

出土状況は二面から0点、一面から17点、灰原から42点である。灰原からの出土が多いことが特徴である。

第158図 灰原跡出土壺(2)



沈線による区画は1本が6片、2本が3片、沈線区画を持たないものが13片である。区画線を持たないものが多い傾向にある。段数は2段が1片、3段、4段が各3片、5段が1片である。波状文の櫛歯は2本～12本まで様々である。160は沈線1本による区画線が5段、その中に6本の櫛歯による波状文が割り付けら

れている。4条みられるが間隔が狭く不揃いである。このため波状文を施文出来なかった可能性がある。161は口縁部の上半が大きく外反し最上段の波状文を隠す。沈線1本による区画線が4段、その中に6本の櫛歯による波状文が割り付けられている。162は器肉厚く上方に直線的に立ち上がる。

第159图 灰原跡出土壺④



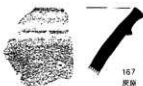
164
灰原



165
灰原



166
灰原



167
灰原



168
灰原



169
灰原



170
灰原



171
灰原



172
灰原



173
灰原



174
灰原



175
灰原



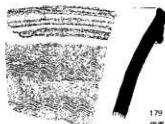
176
灰原



177
灰原



178
灰原



179
灰原



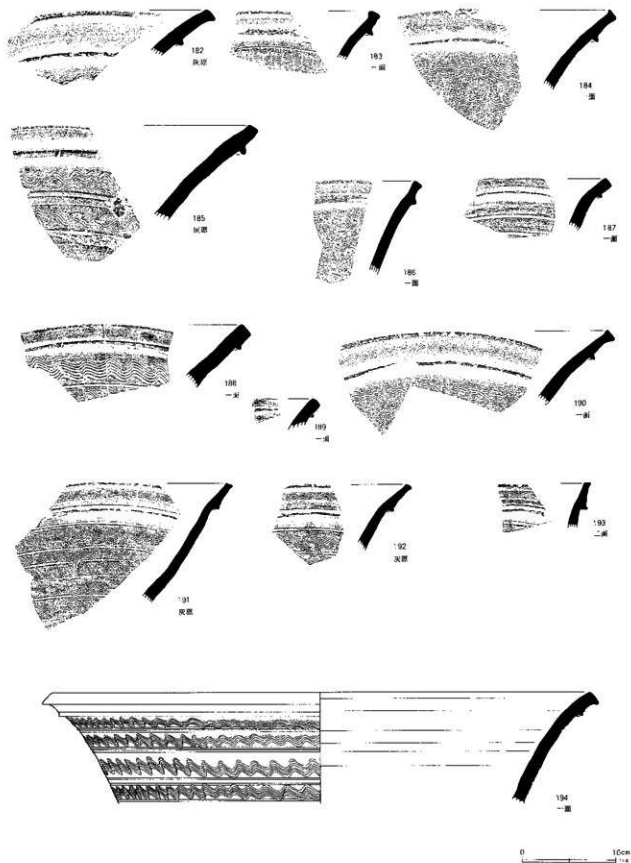
180
灰原



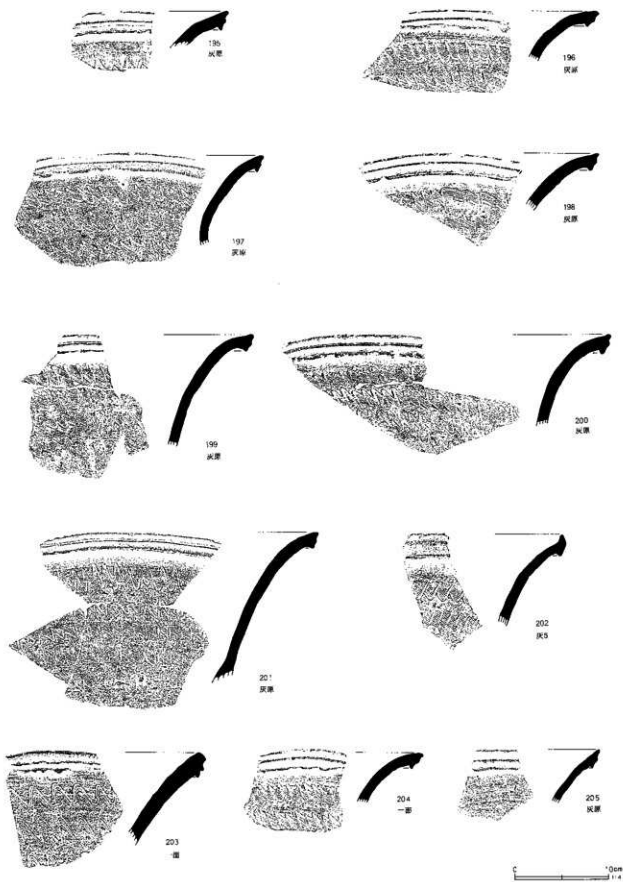
181
灰原



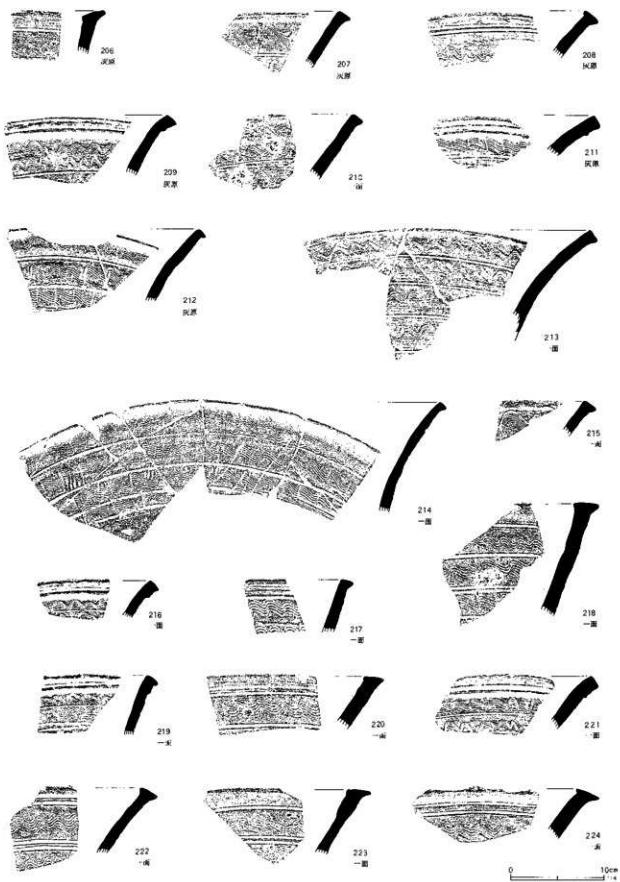
第160图 灰原跡出土墓(2)



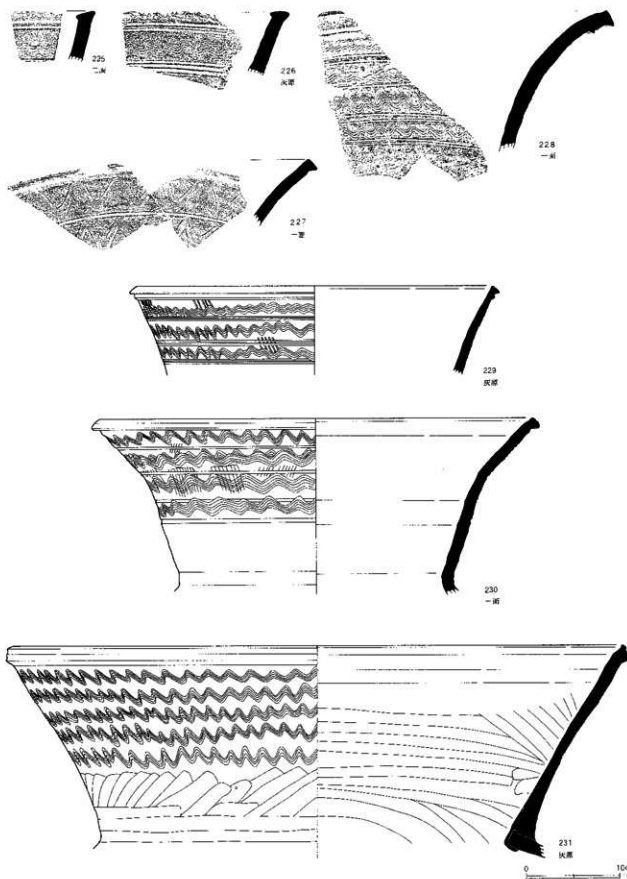
第161圖 灰原跡出土變(2)



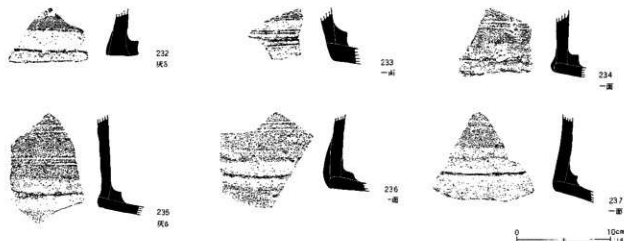
第162図 灰原跡出土壺(29)



第163図 灰痕跡出土壺②



第164図 灰原跡出土裏(7)



164～194は貼り付け型と分類した。636点中48点である。口縁部外面に粘土紐を貼り付け隆線状に表現している。隆線は口縁部から1～3cmほどの位置に貼り付く。191～193はその帯の中に波状文を施す。

出土状況は二面から1点、一面から10点、灰原から33点であった。灰原面の谷筋全体から多く出土している。一面との接合関係をもつ188・190が存在する。

沈線による区画は1本が10片、2本が3片、沈線区画を持たないものが13片である。段数は4段、5段が各1片ではとんど破片であるため不明が多い。波状文の櫛歯は3本～10本まで様々である。

195～205・231は凸型と分類した。636点中25点である。凸型は縁部部分膨らみ上下の指頭平痕により突出する。側面を親指と人差し指によってナデる際に、尖る部分が生じる。または、横ナデ整形の際に指ナデをずらすために突出部が生じる可能性が考えられる。形態はいずれも大きく外反している。波状文は浅く胎土がやや乾燥した段階で施文する可能性がある。

出土状況は二面から1点、一面から2点、灰原から18点であった。灰原面が多い。

沈線による区画は認められず、沈線区画を持たないものが11片である。段数は5段が2片である。波状文の櫛歯は5本～9本までで8本が6片あり多い。

206～230は逆台型と分類した。636点中35点である。口唇部先端が断面斜状に開き端部上面に平坦面をもつ。平坦面の幅は様々であるが224で2.6cmを計る。

出土状況は二面から2点、一面から17点、灰原から16点であった。一面が多く谷筋全体に出土している。灰原面が次いで多く一面との接合関係をもつ210～213・228が存在する。二面は少ない。229はすべての面から出土した破片と接合している。

沈線による区画は1本が11片、2本が10片、沈線区画を持たないものが1片である。段数は3段が1片、4段が2片である。波状文の櫛歯は3本～9本までで4・5本が各5片あり多い。

213は器肉の中央で二枚に刺離する。粘土盤を張り合わせた状態である。

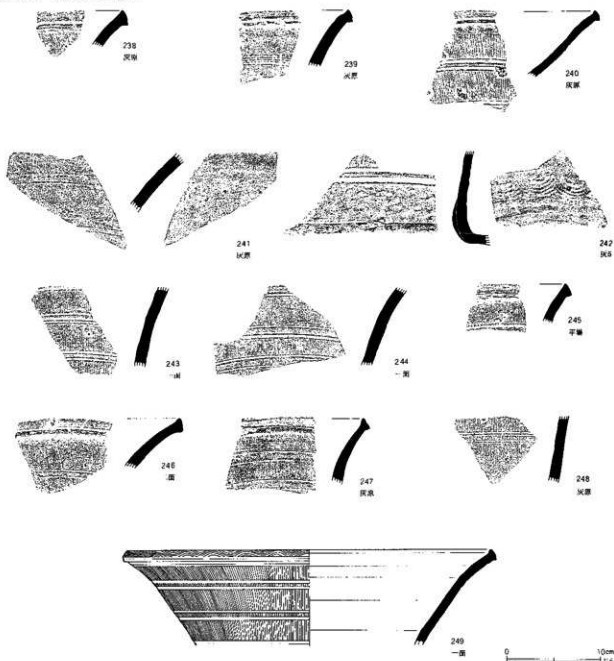
232～237は補強帯型と分類した。636点中6点である。頸部に断面四角い補強帯をもつ。補強帯は上面と側面を指頭によって押さえ粘土紐を断面四角く表現し、装飾的效果をもっている。しかし、本灰原跡から検出された破片はわずかに6点であり主体的な製作手法ではない。大半は粘土紐を押しつけなどでつける手法を取り段を持たずになだらかに引き延ばしてしまう。

出土状況は一面から4点、灰原5から2点であった。一面および灰原5の南西寄りに集中して検出された。

谷筋の下流域でありかなり押し流された位置でもある。坏Gや宝珠つまみをもつ小型の蓋が検出されたりし、時期的な判断としては古い要素をもつ地点である。いずれも頸部の小破片であり、接合関係はみられない。

沈線による区画は2本が1片確認された。段数はいずれも不明である。波状文の櫛歯は6本～9本である。

第165図 灰原跡出土壺②



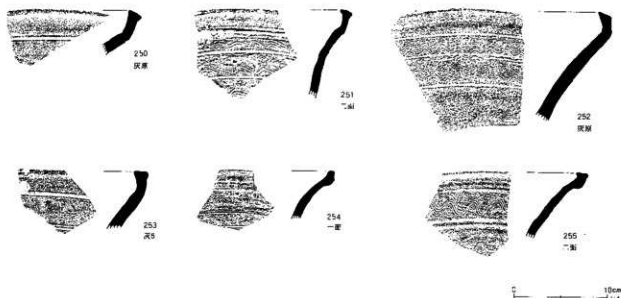
238～249は条線文様型と分類した。636点中15点である。頸部に縦方向の櫛描きの装飾を施す。

出土状況は二面から4点、一面から3点、灰原から6点であった。いずれの面からも平均して出土している。接合関係はみられなかった。

沈線による区画はいずれも2本で10片である。段数は小片であるため不明である。器内はやや薄く焼成は良好である。

238・249は口唇部に波状文の装飾を施し、浅い沈線

が1条巡る。249は推定口径40.0cmである。239・245～247は口唇部が無文であるがやはり浅い沈線が1条巡る。240は口唇部が無文であるがやはり浅い沈線が1条巡る。やや粗い条線を施した後にやや太い沈線が2本一単位で区画する。器内は非常に薄い。242は頸部にかけての破片である。外面は粗い条線を施し、2本の太い沈線区画をもつ。頸部での接合は内面に補強粘土を貼り付けナデ付け、指頭押さえにより圧着している。青海波文が消えれずに残る。焼成良好。



250～255は内面突出型と分類した。636点中9点である。口唇部が内側に内湾して張り出している。

出土状況は二面から3点、一面から1点、灰原から4点であった。沈線による区画は1本が3片、2本が2片、沈線区画を持たないものが0片である。段数は2段が1片でその他は破片であるため不明である。波状文の櫛歯は4本～6本までである。

256～267はレ点文様型と分類した。636点中14点である。口縁部に工具による刺突状の「レ」点文様の装飾をもつ。本来の形態分類からすれば装飾によって区分することは異なった要素である。このためレ点文様の口縁部形態には様々な形態が含まれることになる。256・262・266は沈線上下2本の形態である。260・267は沈線2本、258は沈線1本角型である。文様の構成は、256・260・262・264・266・267の沈線2本区画線を施し、その割付の中に交互に向きを変えたレ点文様が間隔をもって描かれている。259・261・265は沈線区画を持たない、しかもこのために、レ点文様は割付の施文位置を失い明らかに方向性が不規則になっている。しかも、レ点の向きまでもが交互の関係を失い、同じ方向であったり垂直方向になったりと規制のない状態で施文を行っている。

出土状況は二面から1点、一面から2点、灰原から

9点であった。灰原と一面の接合関係をもつ266が存在する。一面と二面の接合関係をもつ267が存在する。沈線による区画は2本が8片、沈線区画を持たないものが2片である。段数は3段、4段が各1片である。

268～281は箱型と分類した。636点中28点である。口唇部が角柱状になっている。

出土状況は二面から2点、一面から14点、灰原から11点であった。一面がやや多く北東側の谷筋上流域に多く集中して出土している。灰原面が次いで多く、二面は少ない。

沈線による区画は1本が3片、2本・3本が各1片、沈線区画を持たないものが9片である。段数いづれも不明である。波状文の櫛歯は2本～8本までである。

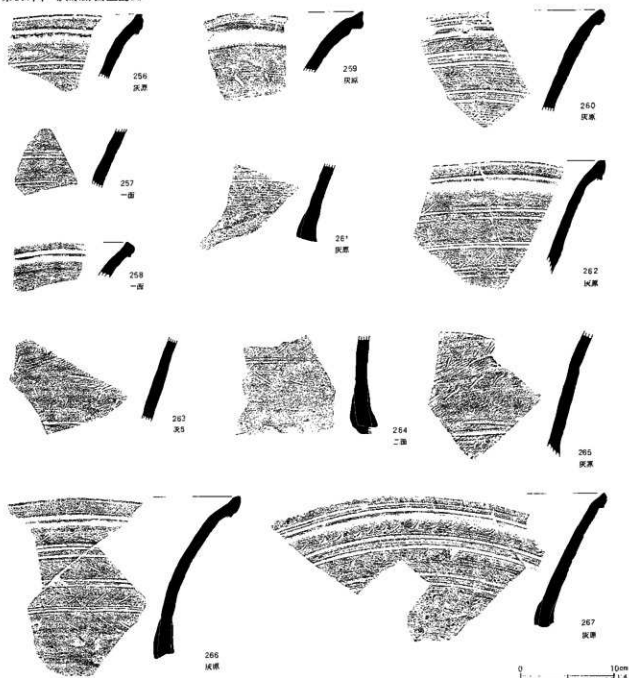
282～286は沈線三本型と分類した。636点中14点である。縁帯部分に沈線三本を巡らす。

出土状況は二面から3点、一面から7点、灰原から4点であった。一面がやや多く谷筋上流域に集中して出土している。灰原面が次いで多く、二面は少ない。

沈線による区画は1本が4片、2本が1片、沈線区画を持たないものはない。段数はいづれも小片であるため不明。波状文の櫛歯は3～9本まで様々である。

287～304は丸型と分類した。636点中54点である。口唇部が丸い。

第167図 灰原跡出土壺③



出土状況は二面から2点、一面から21点、灰原から27点であった。上層の灰原面が多く谷筋全体に遺物が検出された。中層の一面が次いで多く灰原面との接合関係をもつ287が存在する。下層の二面は非常に少なく、288が一面と接合関係にある。沈線による区画は1本が1片、2本が5片、沈線区画を持たないものが11片である。段数は3段、4段、5段が各1片である。波状文の櫛歯は2本~10本まで様々である。

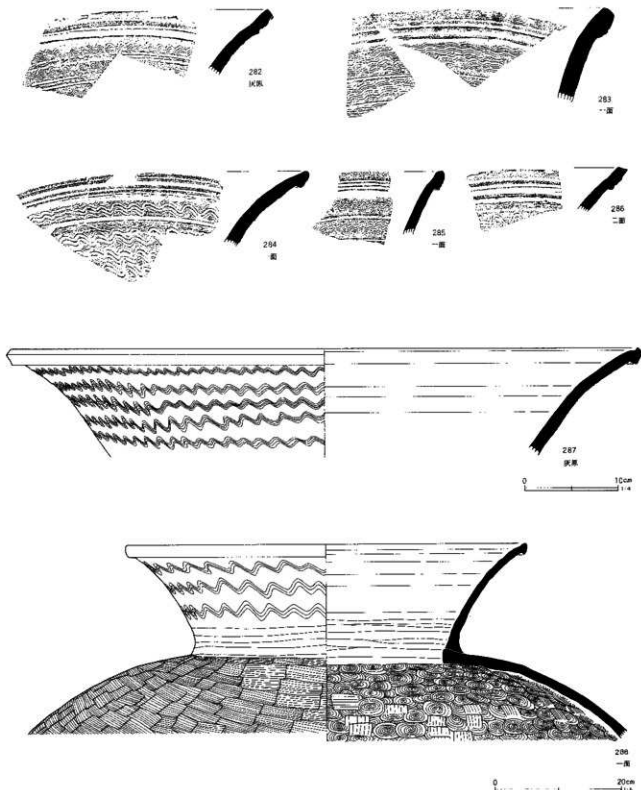
305・306は端面波状型と分類した。636点中2点である。口縁部の縁帯部分に波状文様を施す。この種の形態は条線文様型に掲載した第165図238・240・249などにみられたものと同様である。305・306は波状文を施す点異なるが、口唇部の形態や沈線が1条巡る点など同種形態であり、調整技法と考えられる。

出土状況は灰原から1点、灰原5から1点であった。沈線による区画は2本が1片確認された。段数は不

第168図 灰原跡出土壺(3)



第169図 灰原跡出土甕(32)

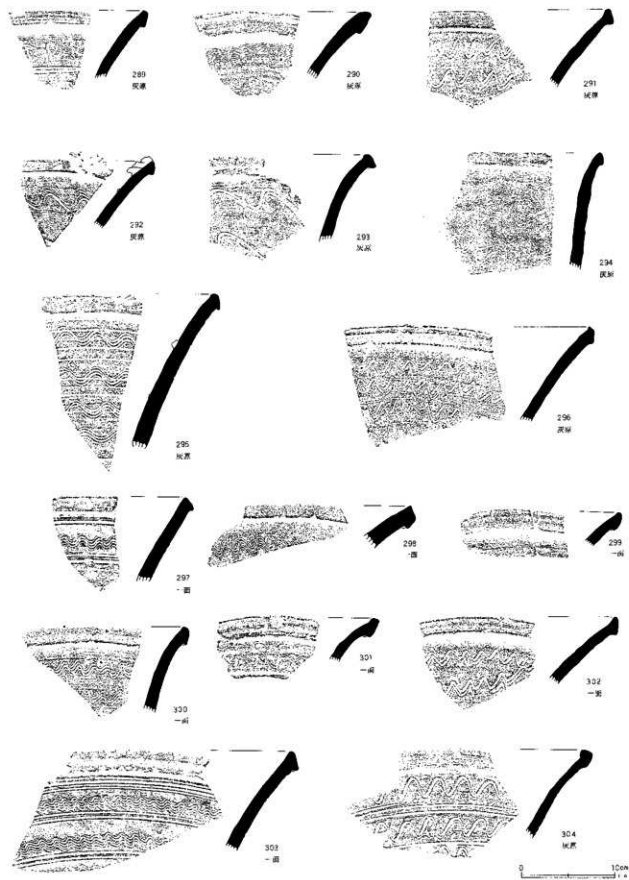


明。波状文の櫛歯は5本が1片、10本が1片である。

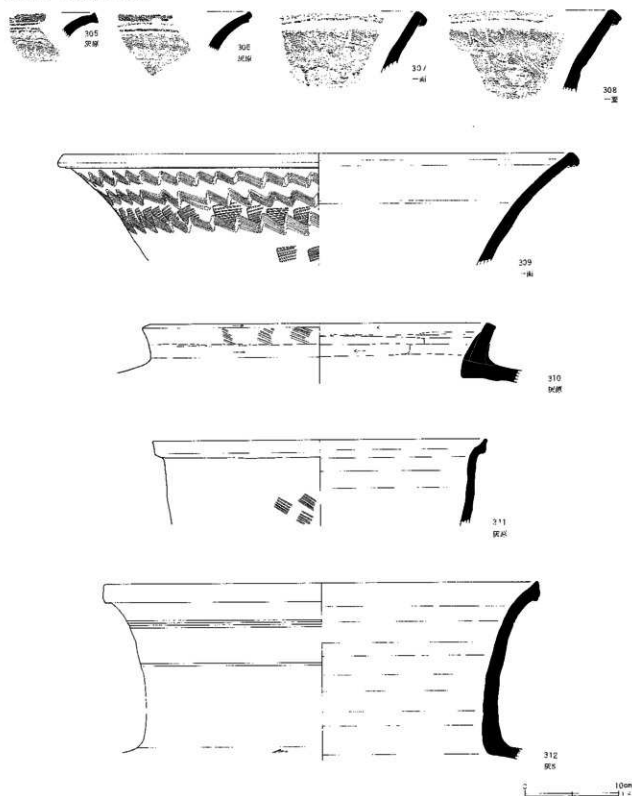
307～309は折り返し型と分類した。636点中10点である。口縁部が明らかに外側に折り返されている。

出土状況は二面から1点、一面から6点、灰原から3点であった。一面の谷筋上流域に集中して出土している。また、上層の灰原面からも出土している。下層

第170图 灰原跡出土竈33



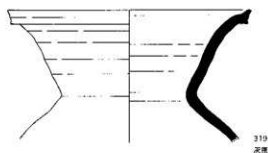
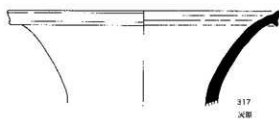
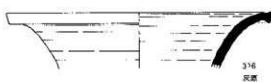
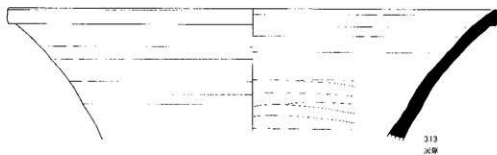
第171図 灰原跡出土壺04



の二面は少ない。いずれも、洗線による区画を持たず、309は、波状文による段数が三段である。波状文の樽面は7・8本である。

310・311はその他の形態で636点中9点である。以上、甕の口縁部は波状文をはじめとするいずれかの文様装飾している。312～320は口縁部無文の甕である。

第172図 灰原跡出土墓(35)



第27表 灰原跡出土土曜觀察表 (第138~172回)

番号	分類	口径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	沈上下二本		BCD	2	灰	5	灰原116-23-15	波2
2	沈上下二本		ABCF	2	灰	5	灰原111-25-16	波11
3	沈上下二本		ABC	1	暗灰	5	灰原116-23-23	波4-波4
4	沈上下二本	(62.8)	ABCF	1	黒灰	5	灰原113-24-24	波5-沈1-波5
5	沈上下二本		ABCF	2	灰	5	灰原110-25-25	波12-波12-波12
6	沈上下二本	(22.0)	BCE	1	灰	5	一面109-26-9	波5-沈2-波8-沈2
7	沈上下二本	(52.0)	ABCE	1	紫灰	5	一面113-23-16他	口唇部キザミ波7-沈1-波5-沈1-波5-沈1-波5
8	沈上下二本	(40.8)	ABCE	1	灰	10	一面113-23-17他	波1-沈1-波1-沈2-波1-沈1-波1-沈1
9	沈上下二本	(50.4)	ABF	2	淡灰	10	一面110-25-25他	波10-波10-波10-波10
10	沈上下二本	(50.0)	C	1	赤紫灰	10	一面115-22-25	波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1-波6
11	沈上下二本		CF	1	青灰	5	二面114-24-2	波7-沈1-波7-沈1-波7-沈1
12	沈上下二本		ABF	1	灰	5	二面115-23-24	波7-沈1-波7-沈1-波7
13	沈上下二本	(19.4)	ABF	2	乳褐	5	二面112-23-25	
14	沈上下二本	(36.0)	BCF	1	灰	5	二面115-23-19	
15	沈上下二本	(49.6)	RCF	1	紫灰	10	一面116-22-22他	波4-沈1-波5-沈1-波4-沈1-波4-沈1-波4-沈1-無
16	沈上下二本	(49.0)	CDE	1	灰	30	一面112-24-13他	波6-沈2-波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1
17	沈上下二本	(46.0)	ABCE	2	灰	60	一面116-22-16他	波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1
18	沈上下二本	62.6	ABCF	2	淡灰	40	一面No1227、灰原No1624他	頸部径(39.2)波9-沈1-波9-沈1-波9-沈1-波9-沈1-格子明きのちナデ
19	沈二本	(59.0)	BCF	1	紫灰	5	灰原115-23-18	波5-波5-波6
20	沈二本		BC	1	黒灰	5	灰原113-24-22	波7-波7
21	沈二本		BC	1	黒灰	5	灰原111-25-12他	波9-沈1-波9-沈1-波9-沈1
22	沈二本		ABC	2	黒灰	5	灰原111-25-9	波9-沈1-波9-沈1
23	沈二本		ABCF	2	黒灰	5	灰原114-24-8他	波9-沈1-波9
24	沈二本	(54.6)	ABCE	2	青灰	10	灰原114-24-22	波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1
25	沈二本	(36.2)	ABC	1	黒灰	5	一面110-26-17	波6-沈2-波6-沈2-波6
26	沈二本	(60.0)	ABC	1	灰	10	灰原110-25-10他	波5-沈1-波5-沈1-波5-沈1-波4-沈1-波4-沈1-波5-沈1
27	沈二本		ABF	1	青灰	5	一面116-22-16	波5-波5-波5
28	沈二本	(52.4)	ABF	2	淡灰	5	一面No1269	波3-波5-波2
29	沈二本	(37.4)	ABCF	2	乳淡灰	10	一面109-25-14他	波7-沈1-波7-沈1-波7-沈1のち平行明き
30	沈二本		BCF	1	暗灰	5	一面115-23-5	波9-沈1-波9
31	沈二本		BDEF	2	乳灰	5	一面115-23-10	波1
32	沈二本		BCF	1	灰	5	一面113-24-9	波7-沈1-波7-沈1
33	沈二本		ABF	1	暗灰	5	一面112-24-19	波6-沈1-波6
34	沈二本	(46.0)	BF	1	乳灰	5	一面No1396	波3-沈2-波3-波3
35	沈二本		ABCF	1	暗灰	5	一面115-23-21	波4-沈1-波4-沈2
36	沈二本	(52.4)	CE	2	淡灰	5	一面116-22-21他	波3-波3-波3
37	沈二本	(54.4)	BCF	1	暗灰	5	一面No1050他	波7-波7-波7
38	沈二本	(52.8)	ABCF	1	褐	5	二面115-24-1他	波5-波5
39	沈二本	(25.0)	BC	1	青灰	5	一面No3296他	波?
40	沈二本		BCF	2	褐	5	二面No85	波8-沈1-波10
41	沈二本	(54.0)	BC	1	淡灰	5	二面116-23-6	波5-沈1-波5-沈2-波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1
42	沈二本		BCF	1	灰	5	二面115-24-1	波5-沈2-波5-沈2-波5-沈2
43	沈二本	(54.4)	CF	1	暗灰	5	二面114-23-24	波8-沈1-波8-沈1-波8
44	沈二本		BC	2	紫灰	5	一面115-22-20他	沈2-波2-沈2-波2-沈2-波2-沈2
45	沈二本	(36.6)	BC	1	紫灰	30	一面No20-671・1159-1558他	波5-沈1-波5-沈1-波5-沈1-波5-沈1
46	沈二本	(56.4)	BCE	1	青灰	25	一面No1769他	波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1
47	沈二本	(60.2)	AC	1	灰	20	一面No17-3158他	波6-波4-沈1-波6-沈1-波8-沈1-波8-沈1
48	沈二本	(41.0)	BC	1	青灰	25	一面No1392他	波3-沈1-波3-沈1-波3-沈1-波3
49	沈二本	(50.2)	BCE	1	青灰	30	灰原111-25-2他	波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1
50	沈二本	(52.0)	BCE	3	灰白	30	一面No132他	波3-波3-波5
51	沈二本	(57.2)	BCE	3	灰白	50	一面113-24-10他	波4-沈1-波4-波4-波4-沈1-波4
52	沈二本	(37.2)	ABCF	1	黒灰	30	二面115-23-18他	波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1
53	沈二本	(40.0)	ABCF	1	灰	30	一面113-24-4他	波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1-波6-沈1

序号	分 类	口 径	胎 土	吨 数	色 调	残 存 率	吊 土 位 置	备 考
54	洗一本(九型)	(43.8)	B C E F	2	灰	5	灰原112-24-22	波6-洗1-波6-洗1-波7
55	洗一本(九型)	(47.0)	B C E	2	赤褐	5	灰5112-23-32	波2-洗1-波?
56	洗一本(九型)		B C F	2	淡灰	5	一面113-24-9	波7-洗1-波6-洗3
57	洗一本(九型)	(49.0)	A B C F	1	暗灰	5	一面115-23-22他	波4-洗1-波4-洗1-波?
58	洗一本(九型)		A B F	1	暗灰	5	一面115-24-6	波4-洗2-波4
59	洗一本(九型)		B C F	1	暗灰	5	一面113-23-19	波6-洗1-波6-洗1-波6
60	洗一本(九型)		B C	1	黑灰	10	一面115-23-22他	黑文-洗1-波7-洗1-波5-洗1-?
61	洗一本(九型)		B C E F	1	灰	5	一面113-24-5他	波9-波9-波8
62	洗一本(九型)		B C F	1	淡灰	5	一面115-23-10	波3-洗2
63	洗一本(九型)	(50.0)	A B F	1	灰	5	一面114-24-9他	波6-波?
64	洗一本(九型)	(40.0)	C E	2	灰	5	一面No470-1268他	波9-波9-波6
65	洗一本(九型)		B F	1	青灰	5	一面116-22-21	波2-洗1
66	洗一本(九型)		A B E F	1	灰紫	5	一面115-23-10	波4-洗1-波4-波4-洗1
67	洗一本(九型)		B C F	1	灰	5	一面114-24-2	波4-洗1-波5-波?
68	洗一本(九型)	(52.6)	B C F	1	青灰	5	一面116-23-15他	波4-洗1-波4-洗1-波?
69	洗一本(九型)	(49.0)	A B C	1	灰	5	一面No3247	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6
70	洗一本(九型)		B C D E	2	淡褐	10	一面No679-1107他	波4-波4-波4-波4-波4-无
71	洗一本(九型)	(54.4)	C	1	灰	5	二面114-24-5	波4-洗1-波4-洗1
72	洗一本(九型)	(52.4)	A B C E F	1	灰	10	一面No207、209、210他	波4-洗1-波5-洗2-波5-洗1-波5-洗1
73	洗一本(九型)	(54.4)	B C F	1	灰	5	二面114-23-24	波3-波3-波3
74	洗一本(九型)	37.1	C E	3	灰白	80	一面113-23-21他	洗1
75	洗一本(九型)	44.8	B C	2	青灰	60	一面No1464他	波9-洗1-波9-洗1-波9-洗1
76	洗一本(九型)	63.0	B C F	1	灰	50	一面116-22-21	波8-波6-波8
77	洗一本(九型)	(37.2)	A C D E F	1	灰赤褐	30	一面No1297他	洗1-波4-洗1-波4
78	洗一本(九型)	(47.6)	A B C E	1	青灰	15	灰原111-24-25	洗1-波5-洗1-波5-洗1-波5
79	洗一本(九型)	(52.2)	A B C	2	青灰	20	灰原114-24-16他	洗2-波8-洗2-波8-洗2-波8-洗2-波8-洗2-波8
80	洗一本(九型)	51.3	A B C F	2	赤褐	80	一面116-22-21他	波1
81	洗一本(九型)		B C E F	2	褐	5	灰原114-24-10	波6-洗1-波5-洗1-波5
82	洗一本(九型)	(38.0)	A B C F	1	青灰	5	灰原114-24-21	波5-洗1-波10-洗1-波5
83	洗一本(九型)		A B C E	1	灰	5	灰原112-14-19	波3-波3-洗1-波3
84	洗一本(九型)		B C E	1	青灰	5	灰原114-24-23他	波9-洗1-波9-洗1-波9
85	洗一本(九型)	(35.0)	A B E F	2	灰	5	灰原114-23-19	波3-波3-波3
86	洗一本(九型)	(56.8)	B C	1	黑灰	5	灰原115-24-18	波5-洗2-波5-洗2-波4
87	洗一本(九型)	(60.0)	A B C F	1	素灰	5	一面115-23-13他	波2
88	洗一本(九型)		A B C F	2	暗灰	5	灰5113-23-14	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1
89	洗一本(九型)	(38.0)	B C E F	1	灰	10	灰原115-24-1他	波5-洗1-波5-洗1-波5
90	洗一本(九型)	(58.6)	B E F	2	灰	5	一面115-23-20他	波5-洗1-波5-洗1-波7-洗1-波7
91	洗一本(九型)	(52.2)	A B C	1	紫灰	10	灰原111-25-9他	波3-洗1-波3-洗1-波3-洗1-波3-洗1
92	洗一本(九型)		A B C E	2	淡灰	5	灰原113-23-14他	波4-波6-波6
93	洗一本(九型)		B C F	2	灰	5	一面No212他	波6-洗1-波
94	洗一本(九型)	(50.0)	A B C	1	黑灰	5	一面115-23-10	波7-洗1-波7-洗1-波
95	洗一本(九型)		A B C	1	青灰	5	一面116-24-1	波8-波8-波8
96	洗一本(九型)	(33.0)	B C	1	灰	5	一面No3210	洗2-洗2
97	洗一本(九型)		B C	1	黑灰	5	一面113-24-7	波4-波4-波4
98	洗一本(九型)	(45.6)	B C F	1	黑灰	5	一面109-25-15	波3-波4-波5-波5
99	洗一本(九型)	(44.8)	B C F	1	黑灰	5	一面114-24-10	波6-洗1-波
100	洗一本(九型)	(46.6)	A B C F	1	暗灰	5	一面114-24-6	洗1-波6-洗1-波6
101	洗一本(九型)		B C	1	暗灰	5	一面116-22-16	波7-洗1-波7-洗1-波
102	洗一本(九型)	(53.6)	B E F	2	乳白	5	一面No1394他	波8-波8-波8
103	洗一本(九型)	(48.2)	A B C F	1	灰	5	一面115-23-10	11号部刺突文波4-洗1-波4-洗1-波4-洗1-波4
104	洗一本(九型)		A B C	1	灰	5	一面111-24-20	波2-洗2-波3-洗2
105	洗一本(九型)	(70.0)	B C	1	黑灰	5	一面116-22-21	波7-洗1-波7
106	洗一本(九型)	(58.6)	A B C E	2	灰	10	一面114-24-9	波11-洗1-波11-洗1-波9-洗1-波11-洗1-无
107	洗一本(九型)		A B C E	2	黑灰	5	一面116-22-17	波?-洗1-波10-洗1-波10
108	洗一本(九型)		B C	1	暗灰	5	一面116-22-17他	洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波5-洗1

番号	分 類	口 径	胎 子	焼成 色 調	残存率	出 上 位 置	備 考	
109	洗一本(角型)		A B C F	2	黒灰	5	一面No.1600	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6
110	洗一本(角型)	(50.2)	A B C F	1	灰	10	一面115-23-23他	洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-無
111	洗一本(角型)	(44.0)	B C	2	灰	5	一面115-23-5他	波6-波5-波5-波6-波5-波6
112	洗一本(角型)	(37.0)	A B C F	2	灰	5	二面115-23-10	波3-条線-波3-洗1-波3
113	洗一本(角型)		B C F	1	灰	5	二面113-24-5	波4-洗1-波4
114	洗一本(角型)	(54.8)	B C	1	灰	5	一面113-23-17	波5-洗1-波7-洗1
115	洗一本(角型)	(43.0)	A B C D E	2	淡灰	5	二面112-24	平行印きのち横ハケメ「レ」
116	洗一本(角型)	(42.4)	C F	1	暗灰	5	二面114-24-3	波7-洗1-波7
117	洗一本(角型)	(39.0)	C E F	1	灰	5	二面113-23-17他	波4-洗1-波7-洗1
118	洗一本(角型)	(50.4)	A B C	1	淡灰	5	二面116-23	波8-洗1-波8-洗1-波8
119	洗一本(角型)	(47.6)	B C F	1	黒灰	10	二面115-24-1	頸部径(25.2)波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1
120	洗一本(角型)	(44.0)	B C E F	1	灰	5	二面113-23-22	波6-洗1-波6-洗1-波5-洗1-波5-洗1
121	洗一本(角型)	43.4	C D	1	灰	70	一面No.85-3385他	波3-洗2-波3-洗2
122	洗一本(角型)	(47.8)	A B C D	1	灰	30	一面113-23-24他	波3-洗1-波3-洗1-波3-洗1-波3-洗1-波3-洗1
123	洗一本(角型)	45.8	A B C	1	青灰	60	一面115-24-2他	洗2-洗2-平行印きのちナデ
124	洗一本(角型)	(52.4)	A B C E	1	黒灰	25	一面113-23-22他	波5-洗1-波8-洗1-波8-洗1
125	洗一本(角型)	(55.0)	A B C E	2	褐	20	灰原111-25-5	条線-波6-条線-波6-条線-波6-条線
126	洗一本(角型)	(47.5)	C E	3	褐	30	一面No.698他	洗1-波6-洗1-波7-洗1-波7-洗1
127	洗一本(角型)	(52.6)	A B D F	1	灰	10	一面115-24-1	波8-洗1-波8-洗1-波8-洗1-波8
128	洗一本(角型)	(46.3)	A B C D	2	茶褐	20	一面114-24-2他	波5-洗2-波4-洗2-波4
129	洗一本(角型)	56.8	A B C F	1	灰	30	二面113-24-1他	波7-洗1-波7-洗1-波7-洗1
130	洗一本(角型)	55.8	C	1	黒灰	70	一面No.135・781・3244他	波8-洗1-波8-洗1-波8-洗1
131	洗一本(角型)	(52.4)	B C F	1	灰黒	20	一面No.1517他	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6
132	洗一本(角型)	(45.4)	A B D F	1	灰	20	一面116-22-16	洗1-波5-洗1-波5-洗1-波5-洗1
133	洗一本(角型)	(44.8)	B C E	2	青灰	40	一面No.1433他	波7-波7-波7
134	洗一本(角型)	(53.8)	B C E	2	褐	30	一面115-22-25他	波5-波5-波5
135	洗一本(角型)	(47.8)	B C	1	灰	40	一面115-23-19	波6-波6
136	凹型		C	1	黒灰	5	灰原113-24-21	波11
137	凹型		B C	1	青灰	5	灰原115-24-15	波8-洗1-波?
138	凹型	(45.0)	B C	1	黒灰	5	灰原110-25-25	波12
139	凹型	(38.4)	B C F	3	茶灰	5	灰原115-24-15	
140	凹型		B C E	2	灰	5	灰原111-25-9	波3-波?
141	凹型	(51.8)	A B C F	1	黒灰	5	灰原114-24-20	波6-洗1-波6
142	凹型		B C F	2	茶灰	5	灰原112-24-22	波7-波5-波5
143	凹み突出		A B C E	1	紫灰	5	灰原111-25-8	波4-波?
144	凹み突出	(55.0)	B C F	1	黒灰	5	トシ116-24-11	波3-波3-波3
145	凹型	(42.0)	B C	1	灰	5	灰原113-24-7他	11号部波4波8-洗2-波8-洗2
146	凹み突出	(50.8)	A B C	1	灰	5	灰原116-23-24	波6-波6
147	凹型	(46.0)	B C	2	灰	10	灰原112-24-23	波6-波6
148	凹み突出	(59.0)	B C E	3	暗灰	5	灰原110-26-9	波3-波?
149	凹型	(67.6)	A C D E	2	褐灰	10	灰原115-24-18他	波5-波5-波5-波5
150	凹み突出		A B C	3	淡褐	5	灰原111-25-4	波1-波1-波1
151	凹型	(42.6)	A B C	1	黒灰	5	灰原116-23-2	波8-波7-波7
152	凹型	(67.6)	A B C E F	1	暗灰	5	灰原113-24-25他	波6-波6-波6-波6
153	凹型		A B C F	2	暗灰	5	灰原116-23-5	波7-洗2-波5-洗2-洗2
154	凹型	(43.0)	B C E	1	灰	10	灰原112-25-7-8	波8-波10
155	凹型	(35.8)	A B C	2	黒灰	5	一面113-24-20	波2-波2-波2
156	凹型		A B C F	2	灰	5	一面116-23-14	波4-波4-波4
157	凹型		B C E	2	紫灰	5	一面No.579・3224他	波6-波7-洗2-波8-洗2-波7-洗2-波6
158	凹型		A B C F	2	暗灰	5	灰5111-23-12	波8-波8-波8
159	凹型		A B C F	1	灰	5	一面113-23-17	波6-洗2-波8-洗1-波8
160	凹型	(39.0)	B C F	1	灰	5	一面No.1426	洗1-洗1-洗1-洗1
161	凹型	(51.4)	B C	1	黒灰	60	一面116-24-9他	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1
162	凹型	46.2	A B D F	1	灰	60	一面No.37・297・298・299・302他	波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1-波6-洗1

番号	分類	口径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
163	同型	(67.6)	ABCF	2	灰	30	灰原112-24-20他	波6-波6-波6-波7
164	貼り付け		ABCF	1	黒灰	5	灰原111-25-9	波9
165	貼り付け	(53.6)	ABC	1	黒灰	5	灰原113-24-24	波7
166	貼り付け		BCE	2	灰白	5	灰原116-23-9	波6-波1-波5
167	貼り付け		ABC	1	黒灰	5	灰原112-24-25	波8-波8
168	貼り付け		BCF	2	暗茶灰	5	灰原116-24-16	波5-波1-波5
169	貼り付け		ABCE	1	紫灰	5	灰原114-24-19	波7
170	貼り付け		BC	2	紫灰	5	灰原111-25-5	波9-波7
171	貼り付け	(38.6)	ABCD F	3	褐	5	灰原115-24-21	波6
172	貼り付け	(66.0)	BCE	2	紫灰	5	灰原116-24-22	波6 波1 波4
173	貼り付け		AC	1	褐	5	灰原114-24-24	波7-波2
174	貼り付け	(45.6)	ABCF	2	淡灰	5	灰原112-24-23	波8 波1
175	貼り付け		BC	1	黒灰	5	灰原114-24-22	波3
176	貼り付け	(54.2)	ABC	1	灰	5	灰原114-24-20	波6
177	貼り付け	(49.0)	ACDE	3	淡褐	5	灰原110-26-9	波9
178	貼り付け	(62.0)	ABCE F	1	赤茶	5	灰原111-25-9	波4-波1-波4
179	貼り付け	(51.2)	ABDG	3	乳灰	5	灰原110-25-25	波8-波8
180	貼り付け	(50.2)	ABCDG	3	淡灰	5	灰原111-25-12	波6-波7
181	貼り付け		ABCF	2	灰	5	灰原110-26-7	波10 波10 波10
182	貼り付け	(64.0)	ABC	1	灰	5	灰原114-24-21	波7
183	貼り付け	(19.0)	BC	2	灰	5	一面113-24-20	波8
184	貼り付け	(47.2)	C	1	灰	5	一面No3066他	波10-波6
185	貼り付け	(50.0)	ABCE	2	灰	5	灰原114-24-17他	波3-波2-波3-波1
186	貼り付け		C	2	紫灰	5	一面116-22-16	波7 波7 波7
187	貼り付け	(42.0)	CDE	1	淡灰	5	一面112-22-25	波1-波1
188	貼り付け	(51.6)	BC	1	黒灰	5	一面115-23-21他	波8-波1-波7
189	貼り付け		CEF	1	淡灰	5	一面115-23-20	
190	貼り付け	(48.6)	ABCF	1	黒灰	5	一面116-24-17他	波10-波7
191	貼り付け	(46.6)	ABCF	2	青灰	5	灰原111-25-3	口髷部波6波6 波1-波6-波1-波6-波1-波6-波1-波6
192	貼り付け		ABE	1	乳灰	5	灰原116-23-10	口髷部波5波1-波8-波1-波8
193	貼り付け		BCF	1	灰	5	二面113-24-7	口髷部波状1-波7
194	貼り付け	(57.8)	BCE	1	青灰	30	一面116-22-18他	波6 波2-波6-波2-波6-波2-波6-波2
195	凸型		AB	1	灰	5	灰原116-23-10	波8
196	凸型		ABCE	2	灰	5	灰原113-24-25	波8 波8
197	凸型	(63.4)	ABCE	2	黒灰	5	灰原116-23-19	波8-波8-波8
198	凸型	(65.0)	ABCD	2	青灰	5	灰原116-24-4	波9-波7
199	凸型		ABCF	2	青灰	5	灰原115-24-18他	波8 波8-波8-波8-波8
200	凸型	(60.0)	ABCF	2	灰	10	灰原111-25-8他	波8-波8-波8-波8
201	凸型	(65.8)	ABCF	1	青灰	10	灰原116-23-19他	波7 波7-波7 波7 波7
202	凸型		BCE	3	灰	5	灰5-114-24-20	波8-波8-波2
203	凸型	(68.0)	CF	1	黒灰	5	一面113-24-20	波5-波5-波5
204	凸型		ABCF	2	灰	5	一面116-23-24	波9-波9
205	凸型		BCE	2	青灰	5	一面110-26-7	
206	逆台型		BCE	2	黒灰	5	灰原114-24-5	波1-波4
207	逆台型		BC	2	青灰	5	灰原116-23-2	波9-波1-波9
208	逆台型	(53.0)	BCE	3	灰白	5	灰原110-26-5	波2 波4
209	逆台型	(62.4)	BCDE	2	褐	5	灰原112-24-22	波3-波3-波1-波3
210	逆台型		BCE	1	青灰	5	一面No696他	波3-波3-波1-波4
211	逆台型		BCDE	2	灰白灰	5	灰原117-24-1	波7
212	逆台型	(56.0)	BCDE	2	褐	5	灰原116-23-9他	波3-波1-波5-波1-波5-波1
213	逆台型	(68.6)	BCE	3	赤褐	10	一面115-23-5他	波3-波1-波4-波1-波4-波1-波3-波1
214	逆台型	(44.0)	ABCE F	3	褐	10	一面115-23-19他	波5-波1-波5-波1-波7-波1-波7-波2
215	逆台型		BCE	1	青灰	5	一面112-24-17	波9
216	逆台型		BCDE	3	褐	5	一面No1002	波3-波1-波7
217	逆台型	(40.0)	CE	2	青灰	5	一面116-23-19	波1-波5-波1-波2
218	逆台型	(46.0)	BCE	2	灰	5	一面No749	波1-波4 波1 波4-波2-波5-波1-波7

番号	分類	口径	胎上	焼成	色調	残存率	出上位置	備考
219	逆台型		B C D E	3	褐	5	一面No484	波2-沈1-波2-沈2
220	逆台型	(47.6)	C E	2	灰	5	一面113-24-9	沈2-波5-沈2
221	逆台型	(42.2)	B C D E	2	褐	5	一面114-24-16	波3-沈2-波3
222	逆台型		B C F	2	白灰	5	一面116-23-14	沈2-波6-沈2-波?
223	逆台型	(61.0)	C F	3	黒灰	5	一面113-24-18	沈1-波4-沈2-波?
224	逆台型		B C F	2	灰	5	一面116-22-16	沈2-波3-沈1
225	逆台型		B C E F	1	灰	5	二面113-24-7	沈2-波5-沈?
226	逆台型		B	2	灰	5	灰層112-24-23	沈2-波5-沈3
227	逆台型	(48.0)	A B C F	2	灰	5	一面No624他	波9-沈1-波9
228	逆台型		B C	1	青灰	5	一面109-25-11他	波6-沈2-波3-沈2-波6-沈2-波4-沈2-無
229	逆台型	(38.2)	C E	3	褐	30	灰層114-24-5他	波4-沈2-波4 沈2 波4 沈2
230	逆台形	(46.4)	A B C	1	灰黒	20	一面No3360	波4-沈1-波4-沈1-波5-沈1-波5-沈1
231	凸型	(63.4)	B C E	1	黒灰	30	灰層111-25-13他	頸部径(40.0)波5-波5 波5 波5 波3
232	補強帯装		B C F	1	灰	5	灰5110-25-23	頸部径(29.6)波9
233	補強帯装		B C F	1	青灰	5	一面110-24-23	頸部径(29.6)波2-沈2
234	補強帯装		B C F	2	淡灰	5	一面No1630	頸部径(22.8)波2-沈2-無-補
235	補強帯装		B C E F	2	黒灰	5	灰5110-25-15	頸部径(15.8)波1-沈2-波6-沈2
236	補強帯装		B C F	1	灰	5	一面110-25-16	頸部径(34.0)条線-沈2
237	補強帯装		A B C	1	灰	5	一面109-26-9	沈2-沈2-波7
238	条線		A B C	2	青灰	5	灰層114-24-18	条線
239	条線		A B C F	2	青灰	5	灰層115-24-7	条線-沈2-条線
240	条線		A B C F	2	黒灰	5	灰層112-24-23	条線-沈2-条線-沈2
241	条線		A B C	1	紫灰	5	灰層113-24-25	条線-沈2-条線-沈2-条線内面波16
242	条線		A C F	1	灰	5	灰5110-24-24	頸部径(28.0)条線-沈2
243	条線		B C F	1	紫灰	5	一面109-26-10	沈1-沈2-沈2
244	条線		A B C F	2	灰	5	一面114-24-4	沈2-条線-沈2-条線-沈2-条線
245	条線		A B C F	1	灰紫	5	平場3112-22-25	条線-沈2
246	条線	(39.0)	B C F	2	青灰	5	二面112-23-22	条線-沈2
247	条線	(36.0)	A B C F	1	灰	5	トッ#110-26-17	条線-沈2-条線-沈2-条線
248	条線		A B C F	2	黒灰	5	トッ#113-24-11	条線-沈2-沈2-条線
249	条線	(40.0)	A B C F	1	青灰	5	一面110-26-6	口唇部波6条線-沈2-条線-沈2-条線-沈?
250	内面突出		A B C F	2	暗灰	5	灰層115-23-23	
251	内面突出		A B F	1	灰	5	一面115-23-10	波5 沈1 波5-沈1-波?
252	内面突出	(61.4)	A B C	1	灰	5	灰層112-25-1	沈1-波6-沈1-波6-沈1
253	内面突出		B C	2	暗灰	5	灰5110-25-8	沈2
254	内面突出		B C	2	青灰	5	一面115-23-15	沈1
255	内面突出		A B F	1	暗灰	5	二面114-23-24	波4-沈2-波4
256	「レ」点文様	(47.8)	B C	1	青灰	5	トッ#115-24-13	「レ」-沈2-逆「レ」
257	「レ」点文様		B C	1	暗灰	5	一面115-23-22	逆「レ」-沈2-「レ」-沈2
258	「レ」点文様		A B F	1	灰紫	5	一面113-23-20	「レ」点文
259	「レ」点文様		A B C	2	灰	5	灰層111-24-7	逆「レ」
260	「レ」点文様	(48.6)	A B C E	2	灰	5	灰層111-25-16	「レ」-沈2-逆「レ」-沈2-「レ」
261	「レ」点文様		A B C	2	灰	5	灰層111-24-23	「レ」-「レ」
262	「レ」点文様	(52.0)	A B C	1	灰	5	灰層111-25-8他	「レ」-沈2-逆「レ」-沈2-「レ」-沈2-逆「レ」
263	「レ」点文様		B C	1	青灰	5	灰5113-23-22	「レ」-逆「レ」-「レ」
264	「レ」点文様		C F	1	紫灰	5	二面114-24-9	「レ」点文-沈2-逆「レ」点文
265	「レ」点文様		B C	2	青灰	5	灰層110-25-25他	「レ」-「レ」-沈2
266	「レ」点文様	(45.8)	B C	1	青灰	5	灰層110-25-9他	「レ」-沈2-逆「レ」-沈2-「レ」-沈2-逆「レ」
267	「レ」点文様	(35.4)	A B C	1	灰	10	灰層110-25-24他	「レ」-沈2-逆「レ」-沈2-「レ」
268	箱型	(60.0)	B C E	1	青灰	5	灰層116-26-4	波7-波7
269	箱型	(41.2)	B C	1	黒灰	5	灰層115-24-16	沈1-波6-沈1-波4-沈1-波4
270	箱型	(44.0)	B C	1	灰	5	灰層111-25-9	波3-波3-波3
271	箱型	(57.2)	A B C	2	褐灰	10	灰層116-23-9他	波3-波3-波3
272	箱型	(51.4)	A B C E F	3	褐	5	灰層113-24-23他	ハケメのち波3-波5
273	箱型		A B C F	1	灰	5	一面109-25-12	波2-沈2-波2
274	箱型		A B C F	1	灰	5	一面116-23-9	波8-沈1-波8-沈1-波?

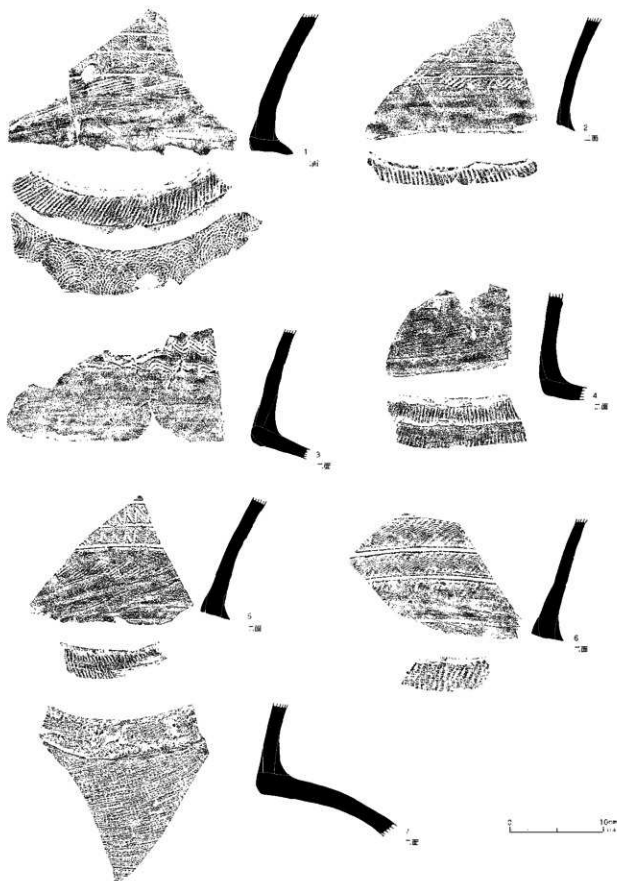
番号	分類	口径	胎上	焼成色調	残存率	出土位置	備考
275	箱型		B C F	1 灰	5	一面116-23-15	波6-波6-波6
276	箱型	(39.4)	B C F	1 灰	5	一面114-24-18	頸部付(19.0)
277	箱型		B C F	1 灰紫	5	一面No3153	波4-波4
278	箱型	(45.0)	B C F	1 暗灰	5	一面113-23-23	波4-波4-波4-波4
279	箱型		B C	2 灰	10	一面116-23-9	波4-波3-波4-波3-波4-波3
280	箱型		B C F	1 茶褐	5	二面114-24-5	波5
281	箱型		B C F	2 灰	5	一面109-25-8	波2 波1 波2 波1
282	沈三本		B C F	1 灰	5	灰層115-24-18他	波6-波2-波6-波2-波6
283	沈三本	(33.8)	B C	1 黒灰	10	一面No1423他	波7-波7 波1 波9 波1 波9
284	沈三本	(68.0)	B C E F	2 淡灰	10	一面115-23-9他	波3-波1-波3-波3-波3
285	沈三本		B C F	1 暗灰	5	一面No1512	波5-波1-波5-波1
286	沈三本		C E	1 灰	5	二面113-23-21	波1-波3
287	丸型	(67.6)	B C E	2 黒灰	25	灰層112-24-23他	波3-波3-波4-波3-波3
288	丸型	(63.6)	A B F G	2 淡褐	30	一面113-23-21他	波2-波2-波2
289	丸型	(57.4)	B C	3 茶灰	5	灰層116-23-19	波10-波2-波
290	丸型		B C E	3 灰白	5	灰層116-23-10	波9-波8
291	丸型	(47.4)	A B C	2 茶紫灰	5	灰層117-23-21	波2-波2
292	丸型	(45.6)	C	1 黒灰	5	灰層115-24-16	波4
293	丸型		B C D E	2 褐	5	灰層112-24-24	波3-波2
294	丸型	(25.0)	A B	3 褐	5	灰層110-25-18	
295	丸型	(47.6)	B C	1 黒灰	5	灰層116-24-4	波2-波4 波2 波4 波2 波4 波2 波4
296	丸型	(70.0)	A B C	2 黒灰	5	灰層113-24-20	波4-波4-波4-波4
297	丸型		B D E	2 乳灰	5	一面115-23-5	波1-波4-波2-波?
298	丸型		B C	2 黒灰	5	一面116-23-9	波6
299	丸型		A B C F	2 赤褐	5	一面115-23-19他	
300	丸型	(53.2)	B C F	1 黒褐	5	一面116-23-15	波4-波4
301	丸型	(45.2)	A B C F	2 灰紫	5	一面113-23-16	波3-波1
302	丸型	(42.0)	A B C F	3 茶褐	5	一面116-23-12	波2-波2
303	丸型	(62.0)	A B C F	2 灰	10	一面No1368	波2-波4-波2-波4-波2-波?
304	丸型	(48.4)	B C	1 青灰	5	灰層113-24-11他	波2-波2-波2-波1-波2
305	断面波状		A B C	2 黒灰	5	灰層114-24-9	口唇部波4波5
306	断面波状		B C F	2 淡灰	5	灰層110-24-19	口唇部波4波10-波2-波10
307	折り返し	(50.0)	A B F	3 褐	5	一面No477	波7-波?
308	折り返し	(46.0)	A B D F	3 褐	5	一面115-22-25	波6-波7
309	折り返し	(53.8)	E	3 褐	30	一面No1072-3231他	波8-波8-波8
310	その他	(36.0)	A B C	2 灰	30	灰層115-24-18他	
311	その他	(35.4)	A B C	2 青灰	5	灰層111-25-8	
312	無文	(45.8)	A B C	1 暗灰	20	灰5 No3926	
313	無文	(51.6)	A B C	1 灰	20	灰層111-25-12-114 24 19	
314	無文	(50.0)	A B C E	1 灰	10	灰層116-24-4	
315	無文	(31.3)	A B C	1 暗灰	10	一面116-22-16	
316	無文	(28.0)	A B C	1 紫灰	20	灰層110-25-25、116-24-11	
317	無文	28.7	A B C	1 黒灰	60	灰層113-24 21、一面113-24-17	
318	無文	(24.5)	A B C E	1 黒灰	20	一面No186	
319	無文	(25.8)	A B C E	1 灰	20	灰層114-24-15	
320	無文	(27.0)	A B C	1 灰	10	灰5 No2769	

頸部の形状 (第173-179図1-46)

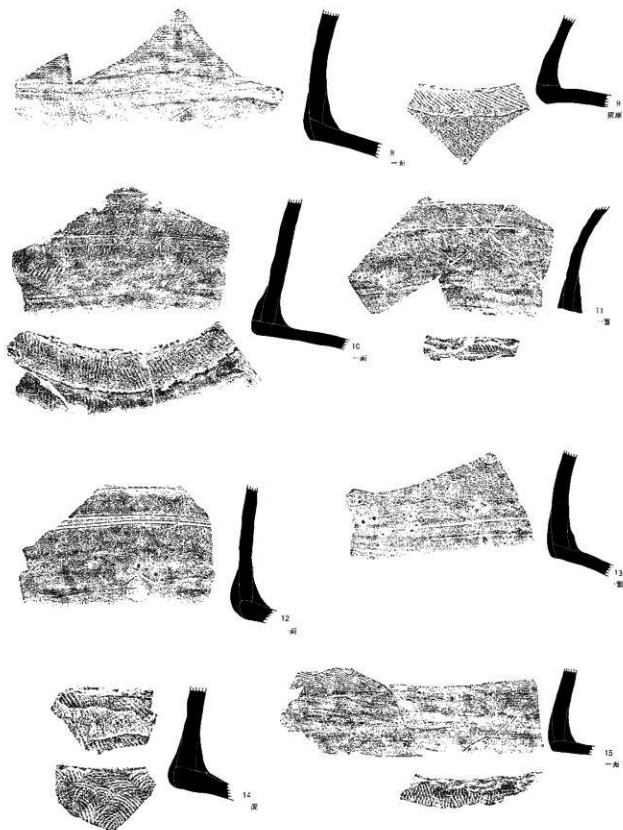
いずれの個体も口縁部と胴部を肩部の位置で接合する。接合方法は、断面四角い頸部補強帯をもつタイプではなく、同じ補強帯でも貼り付け粘土紐を押しつけ

て幅広く引き伸ばし、ナデつけるタイプである。内側にも胴部から口縁部にかけて粘土紐をナデつけている。口縁部の先端は押さえつけられるため筋肉を薄くするものもあるが、本来は、均一の厚さをもった口縁

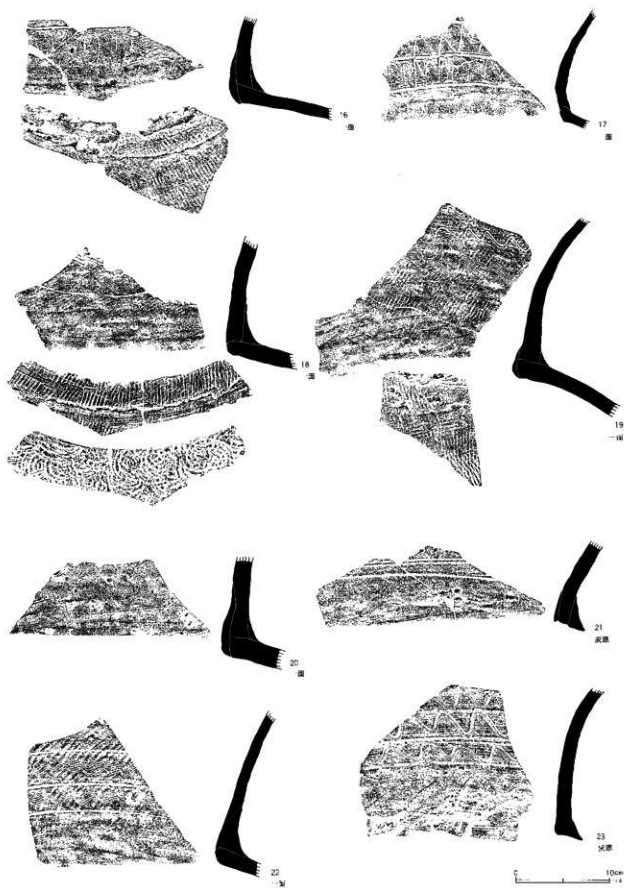
第173図 灰原跡出土壺③



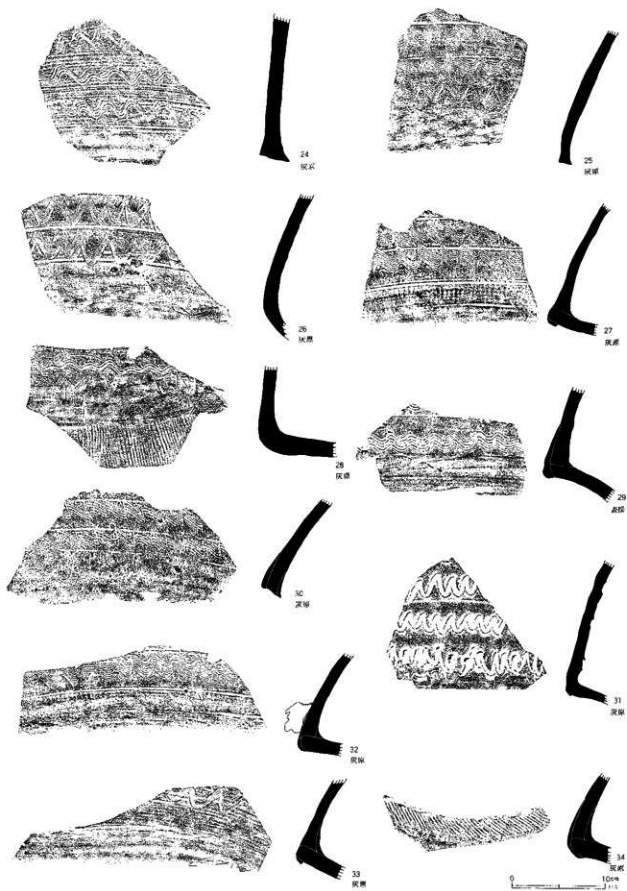
第174岡 灰原跡出土壺(37)



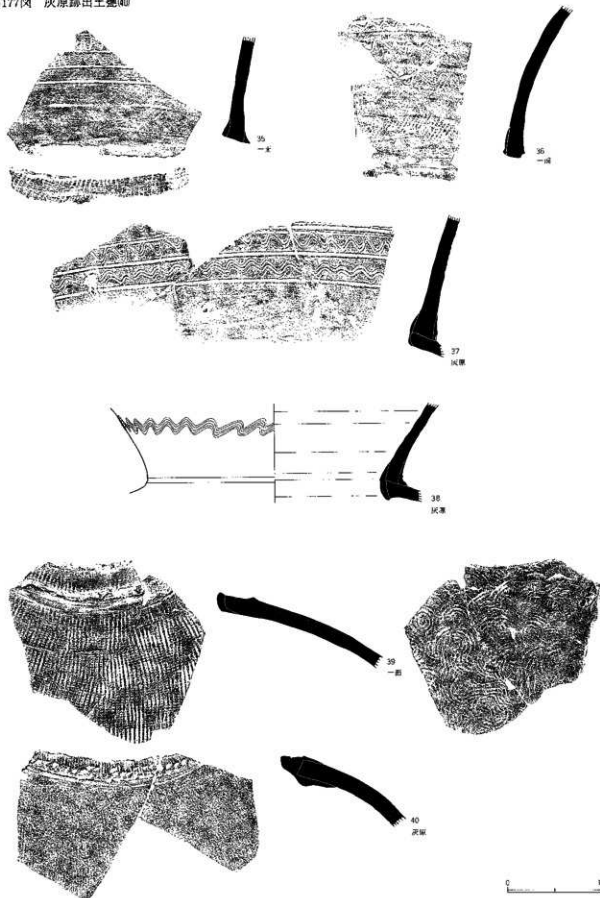
第175図 灰原跡出土壺38



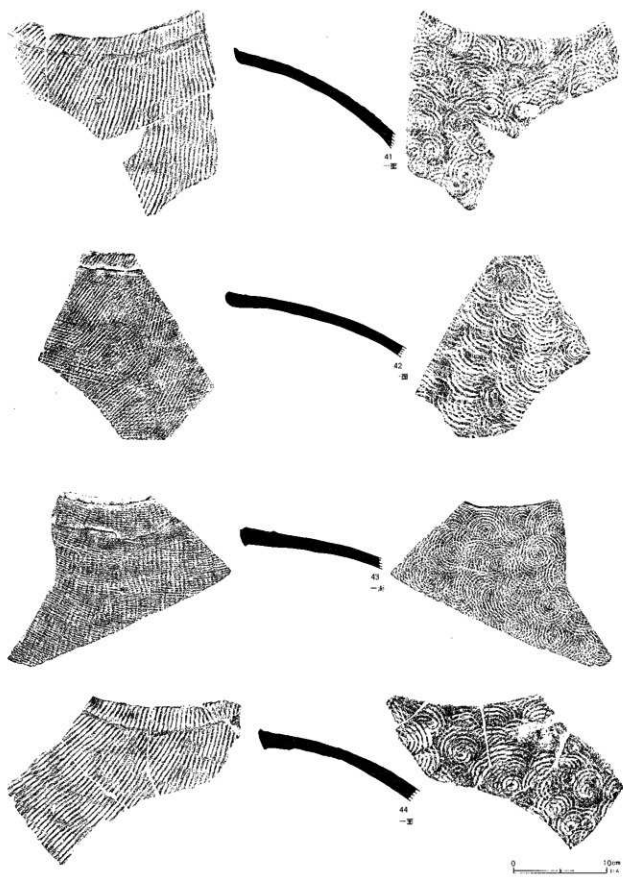
第176図 灰原跡出土壺(39)



第177号 灰厚跡出土壺(40)



第178図 灰原跡出土壺(4)



第179図 灰原跡出土壺(40)

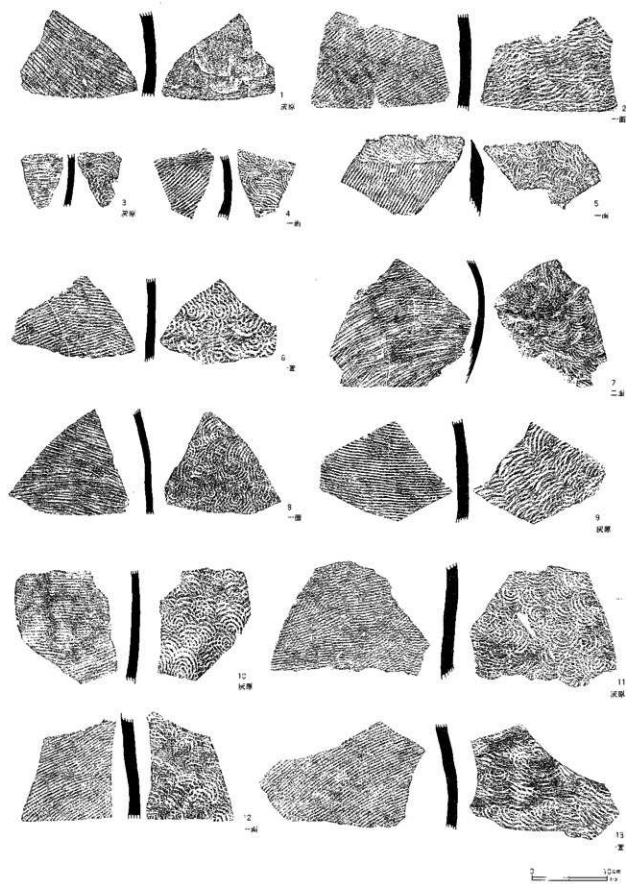


て胴部と接合する端部は四角く整形されている。胴部は成形の際に施された叩き目とそのまゝの状態で残り、口縁部をその上に載せて接合する。叩きの凹凸が接合の強度を増す効果をもつ。40は刺突を巡らす。46は頸部に竹管の押圧を施す。

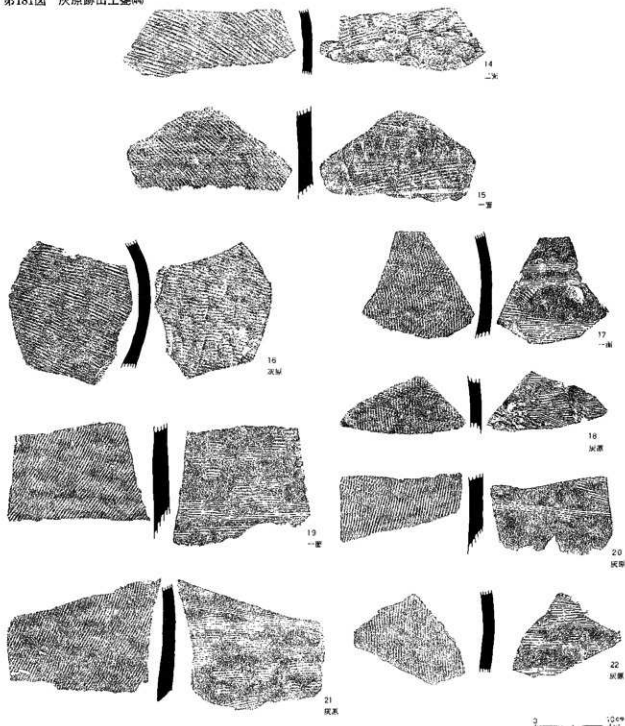
第28表 灰原跡出土壺観察表 (第173～179図)

番号	頸部径	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	29.4	ABCE	2	茶灰	二面114-23-25	波6 波1-波6-波1-波6-波1-平行叩きのちナデ
2	(36.0)	BCF	2	褐	二面113-24-5	波3-波1-波3-波1-波3 平行叩きのちナデ
3	(39.5)	BCEF	1	灰	二面113-24-7	波3 波3
4	(42.5)	ABC	1	灰	二面114-24-1	波2-ナデ
5	(35.4)	ABCF	2	灰	一面113-23-21	波1-波4-波1 波4 平行叩きのちナデ
6	(28.6)	ABCF	1	灰	二面116-24-6	波1-波5-波1-波5-波1-平行叩きのちナデ
7	(37.2)	ABCF	1	暗灰	二面115-24-1	平行叩き12本
8	(34.6)	ABCF	1	黒灰	一面113-24-10	波? カキ目-平行叩き15本
9	(40.0)	ABCF	1	灰	灰原Na1729	
10	(34.0)	ABCF	2	茶褐	一面115-24-1	波1-波? 波? 平行叩きのちナデ
11	(40.2)	ABCF	1	黒灰	一面115-23-20	波2-波1-波8-波1-波8
12	(42.0)	ABCF	1	灰	一面Na153	波6-波2-波6-ナデ
13	40.4	ABCF	1	紫灰	一面Na1243	波6
14	(56.0)	ABF	2	灰	一面113-24-5	
15	(40.2)	ABC	1	青灰	一面114-24-4・8	波7-ナデ
16	(36.0)	BCF	1	紫灰	一面Na1370・1371	波2-波6-ナデ
17	(21.0)	AC	1	青灰	一面111-25-5	波1-波9-波1-波9 波1
18	(48.0)	ABF	2	灰	一面115-23-23	波? ナデ
19	(32.0)	BCE	2	淡灰	一面Na1032	波5-波5-波5-平行叩きのちナデ
20	(25.0)	ABCF	1	灰	一面113-24-2	波6-波6のちナデ
21	(44.0)	ABC	2	灰	灰原113-24-23	波? 波2 波1 ナデ
22	(38.0)	ABCF	1	暗灰	一面114-24-7	波6-波1-波6-波1-波6-波1-平行叩きのちナデ
23	(60.0)	ABCF	1	黒灰	灰原112-24-22	波7-波1-波7-波1 波7-波1 ナデ
24	(32.0)	ABCF	2	灰	灰原116-23-2	波4 波4 ハケ目-波4-ハケ目のちナデ
25	(36.0)	ABCF	2	褐灰	トレンチ113-24-12	波8-波1-波8-波1-波8-波8
26	(36.0)	ABCF	2	灰	灰原111-25-17	波1-波10-波1 波10 波1-ナデ
27	(36.4)	BCF	1	黒灰	灰原113-24-21	波1 波9 波1-波9-波2
28	(46.0)	BCE	1	灰	灰原114-24-25	波3-ナデ
29	(39.4)	BC	2	灰		波2-波1 波7
30	(26.8)	ABC	2	黒灰	灰原111-25-3	波1-波5-波1-波5-波1
31	(34.4)	ABC	1	黒灰	灰原116-23-2	波1-波9-波1
32	(40.0)	ABC	2	黒灰	灰原114-24-22	波1 波1-波1-波1-波1-波1
33	(21.4)	ABC	1	青灰	灰原112-25-1	波1
34	(36.8)	BC	2	黒灰	灰原112-24-19	
35	(40.0)	BC	2	灰	一面116-22-21	
36		ABFG	3	褐	一面113-24-16	波1-波4-波1-波4-波1 波1
37	(40.0)	ABCF	1	灰	灰原116-23-6	波1-波1 波3-平行叩きのちナデ
38	23.0	BCE	3	褐	灰原113-23-25、24 22-24-25	波2-波3-波1-波3-波1-ナデ
39	26.4	ABCF	1	青灰	一面Na135・137・1738	波4
40	(35.0)	C	1	灰	灰原112-24-20	縦格子叩き11×7本
41	(32.0)	ABCF	1	青灰	一面116-22-16	平行叩き6本
42		ABF	1	灰	一面Na127	平行叩き10本
43	(25.6)	AB	1	灰	一面Na1182	縦格子叩き12×6本
44	(45.8)	ABCF	2	灰	一面113-23-23	縦斜格子叩き23×6本
45		ABC	1	茶褐	二面115-24-9	
46		ABC	1	茶褐	灰原116-23-10	

第180図 灰原跡出土墓(43)



第181図 灰原跡出土壺(4)



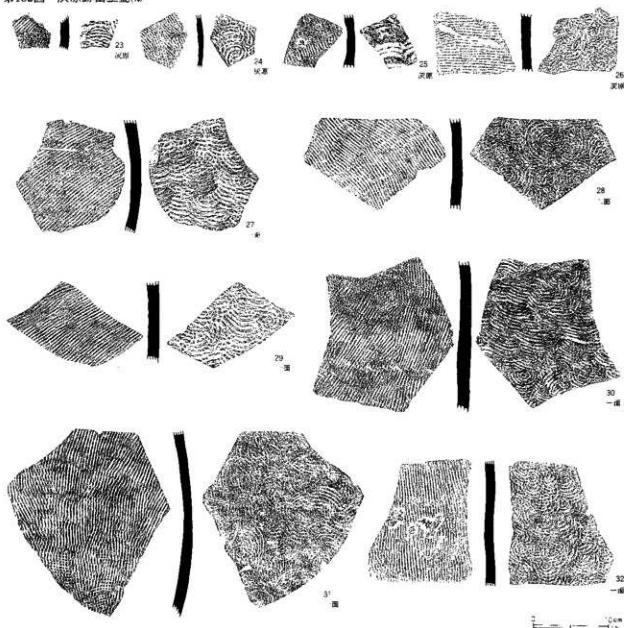
甕の胴部 (第180～199図1～211)

甕の胴部の総破片数は2,525片で灰原出土遺物の中に占める割合は72%である。灰原から13,077片、一面から10,010片、二面から2,538片である。総重量は2,772,345gで灰原出土遺物の中に占める割合は79%である。灰原から1,347,800g、一面から1,173,566

g、二面から250,979gである。

甕の胴部はいずれも叩き調整されている。叩きの種類は平行、擬格子、擬斜格子、格子がみられた。ここで示した「擬」とは木取りによって得られたもので、木目に対して直行方向の平行な彫り込みを持つと、あたかも格子叩きの様な効果をもつ、これらを擬格子叩

第182図 灰原跡出土壺(49)

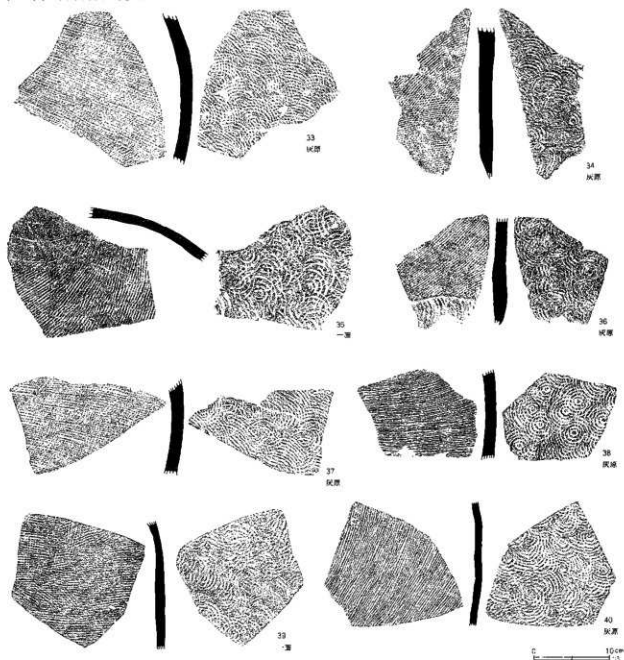


きとした。また、木目に対して斜め方向の平行な彫り込みを持つと、あたかも斜格子叩きの様な効果をもつ、これらを擬斜格子叩きとした。観察の結果、207点の資料を分析し、平行叩きが68点、擬格子が67点、擬斜格子58点、格子14点であった。観察表には3cm単位当たりの叩きの本数を示した。3cm当たりの彫り込みの本数は最小で3本、最大で16本であった。最も多いのは8本で6～10本が多い。内面に見られた青海波文の当て具径を計った。当て具径は器面の傾斜角度や当て具の角度によって異なる。計測値は器面に残された最大

径である。

第180～184図1～55は平行叩きである。1は3cm当たりの彫り込みの本数が6本と粗い。内面に格子当て具がみられる。2・3は7本である。2の内面には青海波文の中心はみられず、シャープで細かい重弧状である。器肉厚く焼成良好。4～13は8本で内面は青海波文を残す。15～17は8本、18～21は9本、22は10本の彫り込みを持つ平行叩きである。内面には14・16は平行当て具を使用している。14は内面に3cm当たり7本の平行の彫り込みをもった当て具と端部に割れのみ

第183図 灰原跡出土竈(40)

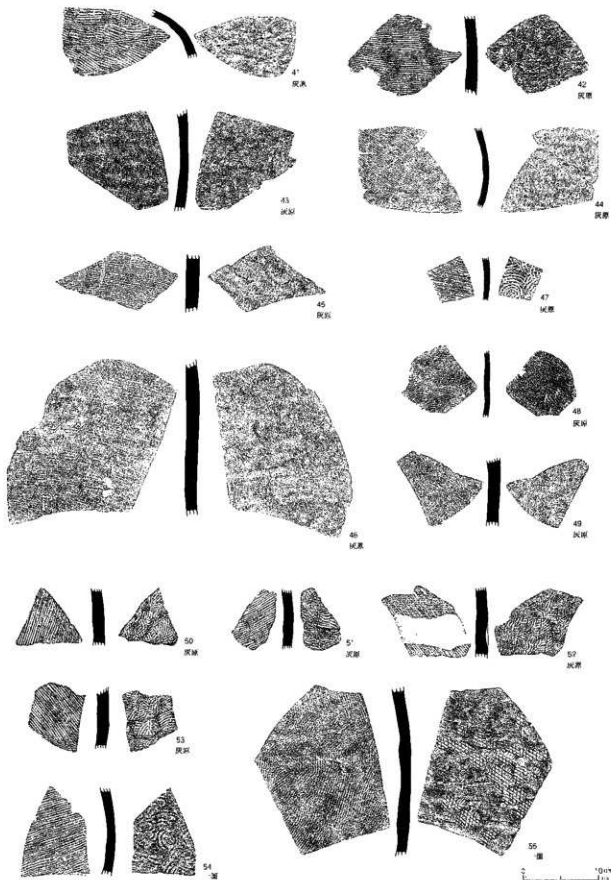


られる青海波文の2種類の当て具を使用している。また、16は14の当て具と類似する。やはり、3cm当たり8本の平行線を彫り込んだ当て具を使用している。それ以外は櫛状工具による横刷毛をもつ。刷毛幅は1.6cm～2.1cmである。23～32は9本の平行叩きである。内面は青海波文が残る。31は粘土紐の輪積み痕が明瞭に観察できる。33～40は10～13本と細かな平行叩きを施す。内面は深い青海波文が残る。41～46・48は外面に細かな平行叩きを施し、内面は無文当て具で、ナデを

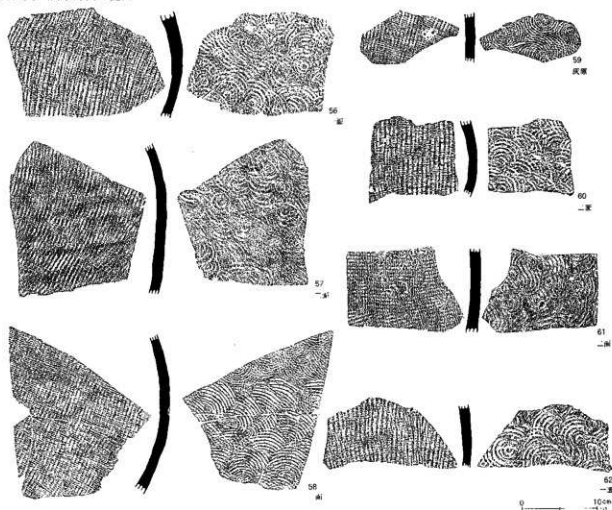
加えるものもある。49は内面に細かな刷毛を施す。50～53は内面に矢羽状の当て具をもつ。54は内面の青海波文に当て具の割れがあり、同心円文に直行する方向に割れ線が伸びる。55は外面に10本の平行叩きの後一部ナデを施す。内面には斜格子状の当て具痕がみられる。

第185～191図56～123は木目に直行する方向に平行叩きを彫り込んでいるため格子状に見える。しかし、本来の掘り方は平行叩きと変わらない見掛けの格子で

第184图 灰原跡出土物(初)



第185図 灰原跡出土甕(48)



あるため擬格子とする。観察表に示した縦×横の本数は縦が彫り込まれた平行叩きの3cm幅当たりの本数である。一方、横としたのは、見掛けて見えた3cm幅当たりの木目本数である。

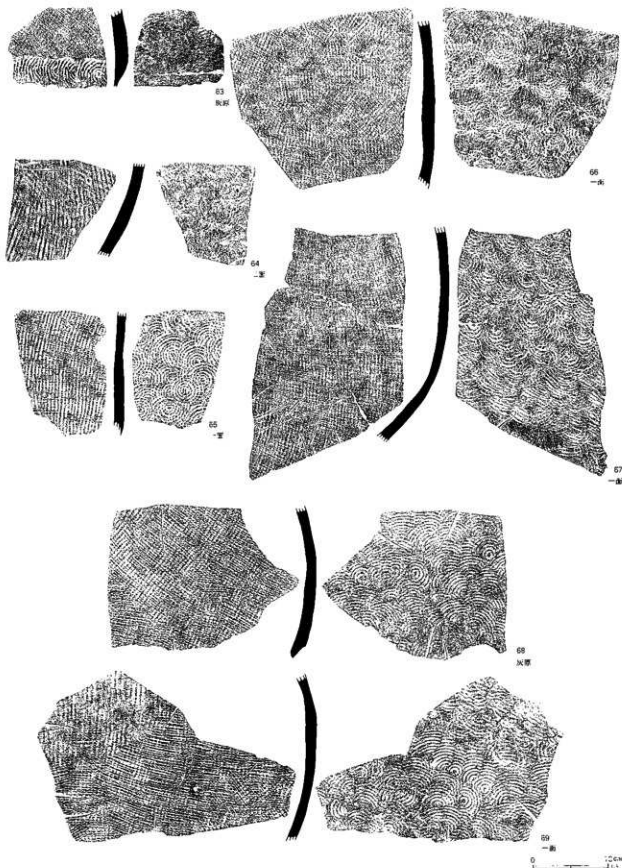
56・57は3cm当たりの彫り込みの本数が5本と粗い。58～69は6本である。57・64は細かな輪積み痕がみられる。58の内面には青海波文の中心はみられず、重弧状のシャープで細かい波文である。器肉厚く焼成良好。59は内面の青海波文が細かいピッチである。63は外面の輪積みの剥離面に青海波文が写し取られている。内面はナデを施す。70～86は7本である。70は内面に青海波文の後、横刷毛を施す。74は内面に無文当て具の後、粗い横方向の刷毛を部分的に施す。器肉は非常に厚く2.1cmである。77の内面は当て具に割れが生じており中心から弧に直行する方向に幅3mmの割れ

目をもつ。78の内面は粗い同心円文と細かな同心円文がみられ2種類の当て具が利用されている。下半の当て具は弧の湾曲が大きく、円形の当て具にしては大きすぎる。上半の当て具は推定直径6.1cmである。焼成良好で色調はサンドイッチ状で器面の内外面はともに茶褐色、器肉は灰色である。

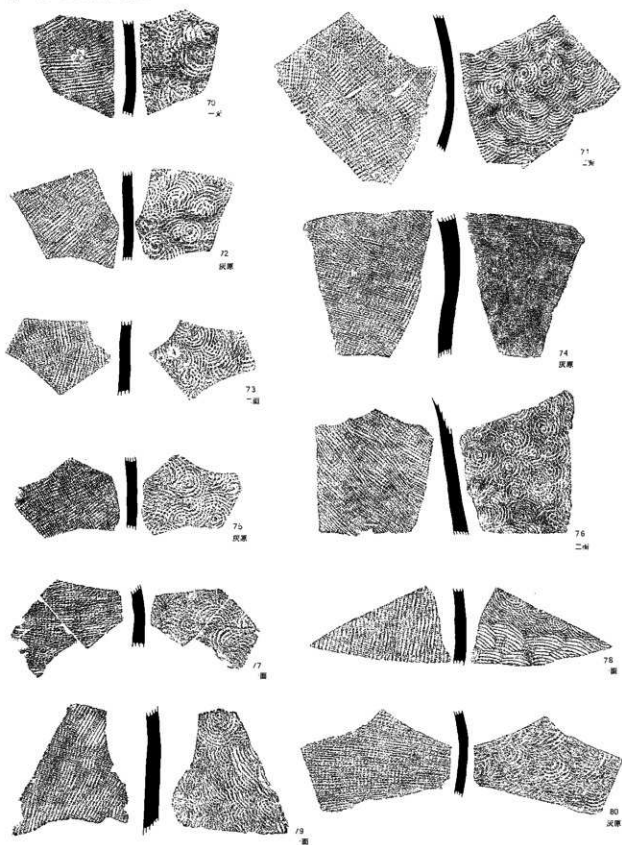
87～100は8本である。87・92の内面は青海波文の後、部分的に横方向のハケを施す。90は当て具に割れが生じている。93・95・97は内面に粗い横刷毛を施す。98・99は細かな青海波文である。100は無文当て具である。101～104は9本である。擬格子叩きもみられるが格子叩きがみられる。2種類の叩き具を使用している。101と104は接合関係はないが同一個体とみられる。

105～123は10本と細かな擬格子叩きである。

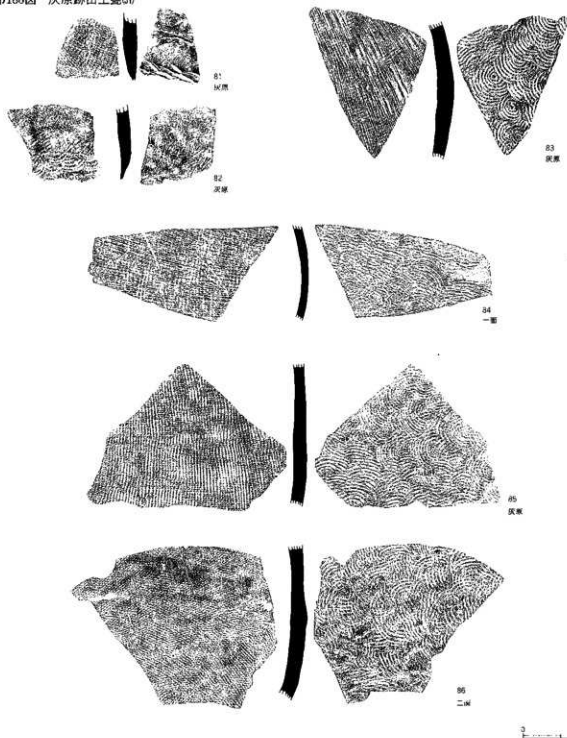
第186図 灰原跡出土壺(49)



第187図 灰原跡出土物(50)



第188図 灰原跡出土壺(5)

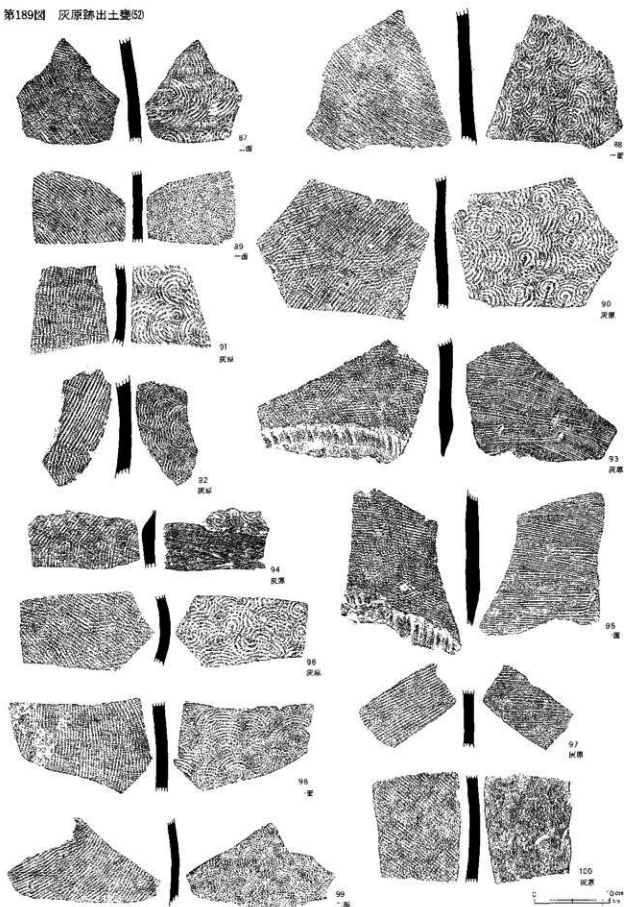


105～117・121は非常に器肉薄く、厚さは5mm前後である。叩きは深く、当て具も深い。色調は内外面が暗灰～黒灰色、器肉は茶褐色である。119は内面に横刷毛を施す。123は青海波文の後、部分的に横刷毛を施す。青海波文には当て具の割れがみられる。

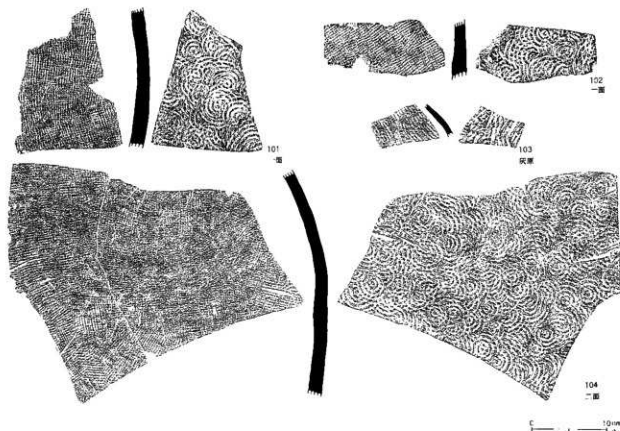
第192～197図124～181は木目に斜行する方向に平

行叩きを彫り込んでいるため斜格子状に見える。しかし、本来の掘り方は平行叩きと変わらない見掛けの斜格子であるため擬斜格子とする。観察表に示した縦×横の本数は縦が彫り込まれた平行叩きの3cm幅当たりの本数である。一方、横としたのは、見掛けて見えた3cm幅当たりの木目の本数である。

第189圖 灰厚跡出土雙(52)



第190図 灰原跡出土甕(3)



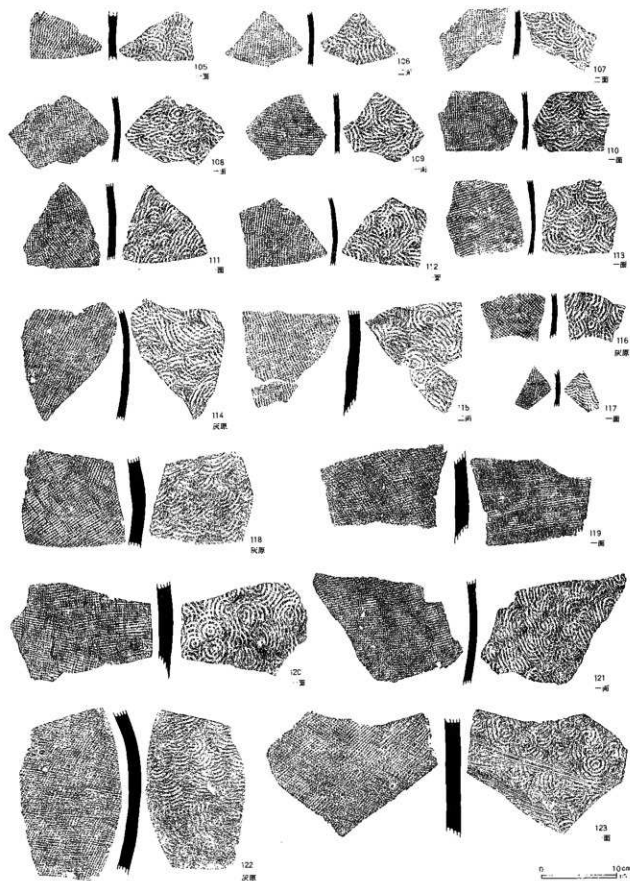
124は3cm当たりの彫り込みの本数が6本と粗い。125～134は7本である。127は外面に横刷毛が施されている。内面には細かなピッチの青海波文がみられる。130は内面に青海波文の後、横刷毛を施す。134は内面の青海波文は押しが深く幅をもつ。135～139は8本である。内面には青海波文がそのまま残る。136と139の剥離面には青海波文が写された状態に残る。胴部内面の当て具とネガ、ボジの関係にある。137の器面は非常に堅く良く焼きしまっている。色調は器面の内外面は青灰色、器肉は淡灰色である。胎土は緻密である。138は器型を大きく屈曲させる。肩部に近い破片か、内面には幅広い彫り込みをもった青海波文が残る。外面は擬斜格子叩きか施され、その後、一部に横刷毛を施している。

140～143の破片は器肉が非常に薄い、小型甕の破片の可能性が考えられる。140の外面は格子叩きのようにも見える。叩きの後、横方向の刷毛を施す。内面の当て具痕は深く押されている。142は内面の青海波文

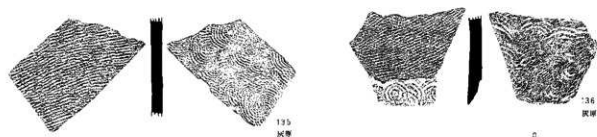
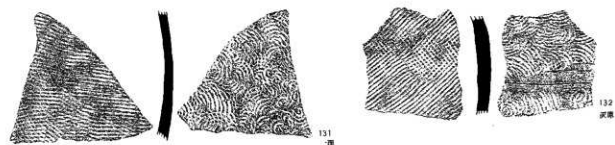
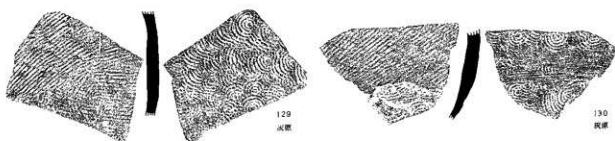
が浅く押し、細かくシャープである。143は内面の青海波文がナデ消されている。一方、144～154は6～9本であるが、内面に横刷毛がみられる。144～147・149・151は2.0～2.3cmほどの横刷毛を施す。148は器肉が薄い、内面の青海波文は押しが浅く同心円の間隔が細かい。器面の色調は外面が青灰色、内面は暗灰色である。152にはやや幅狭く1.7cmである。153・154は青海波文の後、部分的に横刷毛を施す。刷毛幅は1.3と1.8cmである。

155～167は9本である。155は彫りの深い平行線に木目が斜格子状に交わる。内面は幅のある彫り込みの青海波文である。156や160の外面には2種類の叩き具がみられる。157は内面の青海波文が細かい。162の外面には叩きの後、横方向の刷毛を全体に施している。164は器肉が非常に薄い、外面の叩きはやや押しが浅く、内面は無文当て具である。167は器肉が非常に薄く湾曲する。小型の甕の胴部破片と考えられる。内面の当て具も小型である。

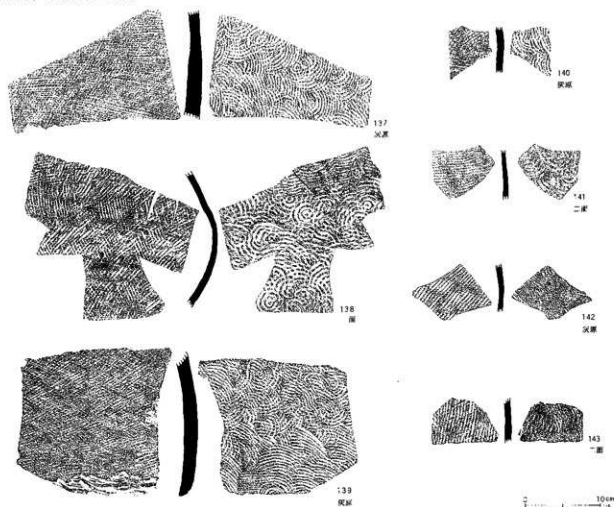
第191図 灰原跡出土壺54



第192図 灰厚跡出土壺(5)



0 10cm



168～176は10本である。168と169は器肉非常に薄く小型甕の破片とみられる。170・172・175は内面の青海波文を横刷毛によってナデ消している。176は器面に凹凸がみられ焼成段階に胎土が膨張したものと考えられる。177は11本である。内面の青海波文を横刷毛によってナデ消している。

178～180は擬斜格子叩きと格子叩きの2種類の叩きが使用されている。いずれも、同一個体の可能性がある。178を観察すると、擬格子叩きは3cm当たりの平行線の影り込みは11本を数える。木目は16条である。格子叩きはやはり3cm当たり縦7×横8本である。内面の当て具は多々器具の違いによる変化はみられず、幅広の青海波文が全体に残る。181は12本を数える外面に非常に細かな叩き具を使用している。

第198図182～195は格子叩きである。叩き具を格子

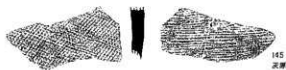
状に影り込んでいる。182と183は縦4×横7本の影り込みでやや長方形に近い。185は縦4×横8本である。184・186・187は縦6×横8本である。188～190は縦7×横8本である。188は内面には間隔の粗い青海波文が残る。外面は淡灰色、内面は橙褐色である。器肉は灰色である。192・193・195は縦8×横8本と正方形になる。195の内面には影り込みの浅い青海波文をナデ消し、その後、部分的に格子当て具がみられる。

第199図196～211は平行叩きの後に、ナデ消しを行っている。平行叩きは196が7本、197は8本で内面には木の葉が押しつけられている。198は10本で内面は平行叩きの磨耗したような当て具である。199～211は10本と細かく、内面に斜格子状の当て具が全体に均一に残る。影り込み線は細くシャープである。3cm当たり縦7×横5本の菱形をしている。

第194図 灰原跡出土壺(57)



144
一箇



145
灰原



146
二箇



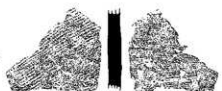
147
灰原



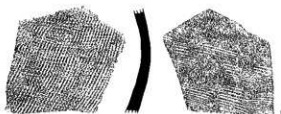
148
灰原



149
灰原



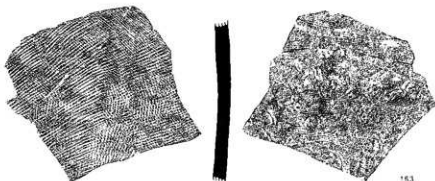
150
灰原



151
灰原



152
一箇



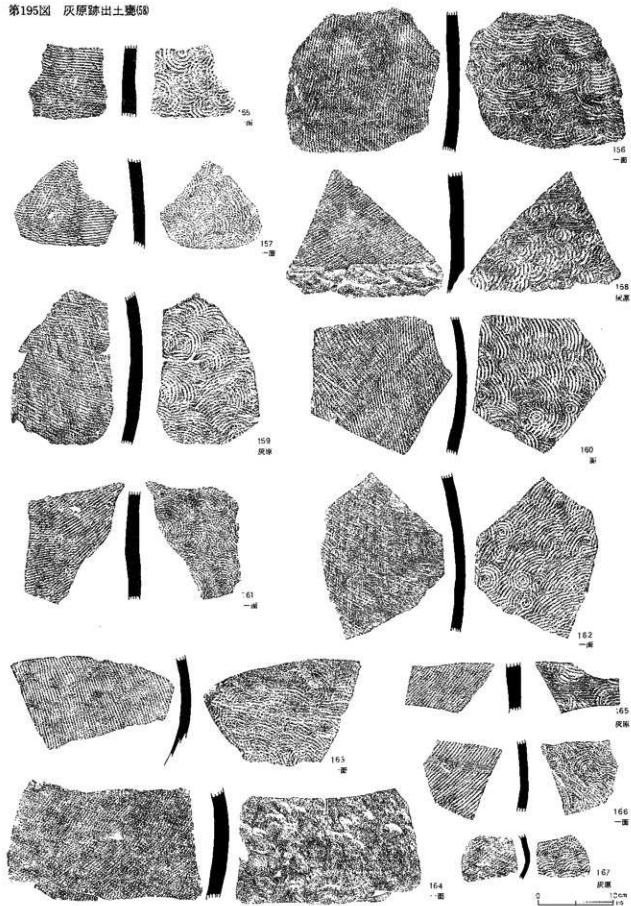
153
灰原



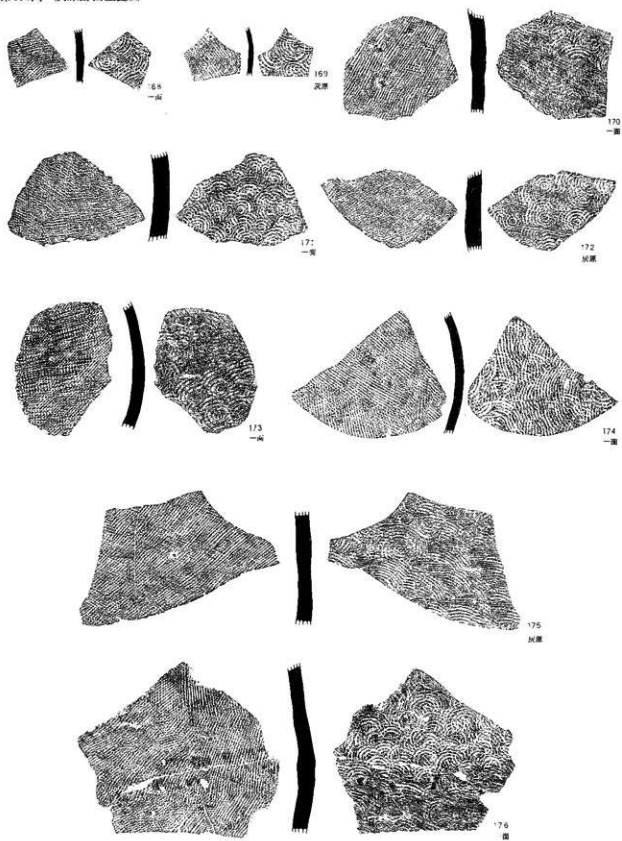
154
灰原

0 10cm
3/8

第195図 灰原跡出土物(58)

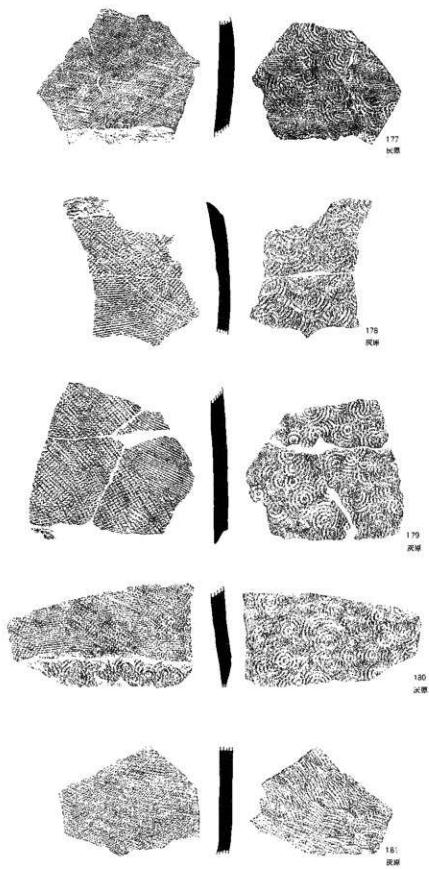


第196図 灰原跡出土壺59

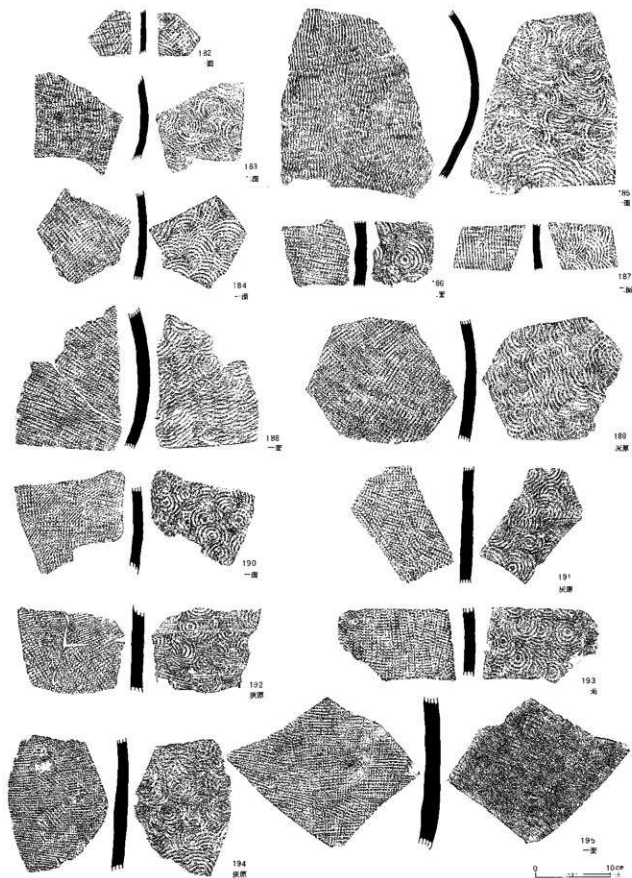


0 10cm
1:5

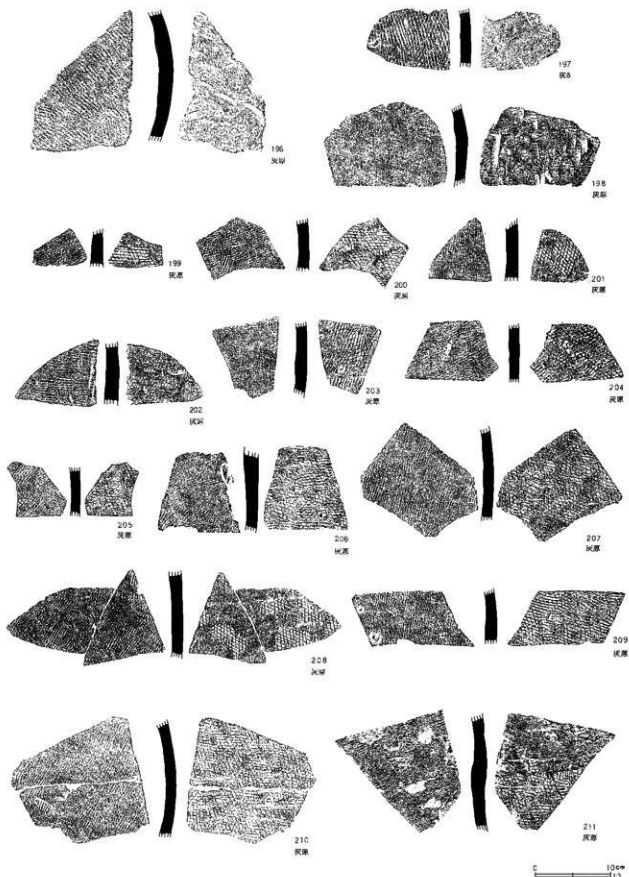
第197图 灰原跡出土變例



第198図 灰原跡出土遺物



第199図 灰原跡出土壺(6)



第29表 灰原跡出土土器観察表 (第180~199図)

番号	胎上	焼成	色調	出土位置	印き種類	縦(本)	横(本)	当り長さ	備考
1	ABCF	2	茶灰	灰原113-24-24	平行	6	—	—	内面に格子当て具
2	BC	1	淡灰	一面116-23-20	平行	7	—	有	内面至弧状で中心が見られない
3	ABCF	1	灰	トンナ115-24-13	平行	7	—	7.8	—
4	BC	1	黒灰	一面114-24-16	平行	8	—	有	内面至弧状で中心が見られない
5	ABEF	2	褐	一面116-22-23	平行	8	—	6.0	—
6	ABF	3	淡褐	一面116-22-18	平行	8	—	6.0	—
7	ABEF	2	赤褐	二面115-23-24	平行	8	—	6.0	—
8	BC	1	青灰	一面113-23-25	平行	8	—	5.6	内面押しは浅い
9	ABCF	1	青灰	灰原115-23-24	平行	8	—	有	内面至弧状で中心が見られない
10	BCD	2	淡灰	灰原111-26-16	平行	8	—	7.3	—
11	BCF	1	青灰	灰原111-25-12	平行	8	—	5.4	—
12	BCF	1	青灰	一面No35	平行	8	—	4.2	内面ナデによるつぶれ 横方向ナデ
13	BCF	2	灰	一面116-22-17	平行	8	—	4.8	内面部分的に横方向ナデ
14	ABCEF	2	褐灰	二面115-24-19	平行	6	—	有	内面7本の平行と青海波文で端部に割れ
15	ABCF	3	淡灰	一面116-22-24	平行	8	—	2.3	内面ハケ状工具によるナデ
16	ABCF	1	青灰	灰原112-24-23	平行	8	—	6.1	内面平行当て具3cmで8本
17	ABCF	2	乳白	一面No38	平行	8	—	—	内面ハケ目1.6cm
18	HCEF	2	乳白	灰原111-24-23	平行	9	—	—	内面ハケ目2.0cm
19	BCEF	1	灰	一面116-22-23	平行	9	—	—	内面ハケ目2.1cm
20	BCEF	2	灰	灰原116-22-17	平行	9	—	—	内面ハケ目1.8cm
21	ABCF	1	灰	灰原114-24-22	平行	9	—	—	内面ハケ目2.0cm
22	BCEF	2	淡灰	灰原112-24-19	平行	10	—	—	内面ハケ目2.1cm
23	BC	1	青灰	灰原114-23-25	平行	9	—	有	内面自然軸付著 外面横位のハケ目
24	BCEF	1	灰	灰原114-24-19	平行	9	—	有	—
25	BCF	1	暗灰	灰原113-24-13	平行	9	—	有	内面押し深く間隔が広い 当て具割れ
26	ABCF	1	青灰	灰原114-24-18	平行	9	—	5.4	—
27	BCF	1	灰	一面No43	平行	9	—	5.5	—
28	BCE	1	乳白灰	二面15層	平行	9	—	6.0	—
29	BCF	1	灰	一面No59	平行	9	—	7.0	内面押しは浅い
30	ABCF	3	黒褐	一面116-22-21	平行	9	10	7.0	—
31	ABF	2	淡灰	一面115-22-10	平行	9	—	6.3	内面押しは浅い
32	BCF	2	暗灰	一面115-23-20	平行	9	—	6.1	—
33	BCF	2	暗灰	灰原110-25-25	平行	10	—	6.3	—
34	ABCF	1	暗灰	灰原115-23	平行	—	—	7.6	—
35	BCF	2	淡褐	一面116-22-25	平行	10	—	7.0	左回転
36	BCEF	2	黒灰	灰原116-23-18	平行	11	—	4.9	—
37	BCF	1	黒灰	トンナ115-24-11	平行	10	—	10.0	—
38	C	1	茶紫	灰原116-23-20	平行	13	—	6.1	内面押しは深い
39	BCF	1	灰	一面114-24-9	平行	10	—	5.7	内面部分的にナデ
40	BCF	1	茶褐	灰原114-24-17	平行	13	—	6.6	—
41	BCE	1	青灰	灰原111-24-23	平行	10	—	—	内面無文ナデ
42	BC	2	乳白	灰原115-24-19	平行	12	—	—	内面無文当て具
43	BCF	2	暗灰	トンナ115-24-15	平行	13	—	—	内面無文当て具
44	ABCF	1	青灰	灰原116-23-9	平行	14	—	—	内面無文当て具+ナデ
45	BCEF	2	青灰	灰原114-24-17	平行	15	—	—	内面無文当て具
46	BCF	1	灰	灰原115-24-20	平行	12	—	—	内面無文当て具+ナデ
47	BCF	1	灰	トンナ116-24-9	平行	15	—	7.8	—
48	BCF	1	灰	灰原116-24-4	平行	16	—	—	内面無文当て具+ナデ
49	BCEF	1	黒灰	灰原115-24-17	平行	—	—	—	内面目の細かいハケ目
50	ABCF	2	淡灰	灰原111-24-23	平行	10	—	有	内面欠羽根状当て具
51	ABCF	2	淡灰	灰原114-24-25	平行	12	—	有	内面欠羽根状当て具 外面細かい平行
52	ABCF	2	褐	トンナ116-24-14	平行	11	—	有	内面欠羽根状当て具
53	ABCF	2	褐	灰原113-24-21	平行	11	—	有	内面欠羽根状当て具
54	BCF	1	黒灰	一面113-23-17	平行	11	—	有	内面当て具割れ
55	BCEF	1	青灰	一面116-23-10	平行	10	—	—	内面格子当て具 外面平行+ナデ

番号	胎土	焼成	色調	出し位置	叩き種類	瓶(本)	横(本)	糸径	備考
56	ABC	1	灰	一面No539	縦格子(平行)	5	13	7.0	
57	BF	1	灰	二面113-23-21	縦格子(平行)	5	14	5.6	
58	ABCE	1	赤褐	一面116-22-21	縦格子(平行)	6	12	8.7	
59	ABCE F	1	青灰	トッパ116-24-12	縦格子(平行)	6	16	6.9	内面押しは浅い当て具 ピッチは細かい
60	BCF	1	乳灰	二面115-23-23	縦格子(平行)	5	15	6.0	
61	BCF	1	黒灰	二面No114	縦格子(平行)	6	14	6.6	
62	BCF	1	灰	一面113-24-5	縦格子(平行)	6	12	6.8	
63	ABCF	1	灰	灰原111-25-7	縦格子(平行)	6	15	—	内面ナデ
64	BCF	1	青灰	二面113-24-4	縦格子(平行)	6	13	5.0	粘土紐の絡み
65	ABCF	1	灰	一面No1435	縦格子(平行)	6	14	6.0	
66	ABCF	1	青灰	一面115-23-10	縦格子(平行)	6	14	6.6	
67	ABCF	1	灰紫	一面116-22-16	縦格子(平行)	6	18	7.0	
68	ABCD	1	淡褐灰	灰原115-24-1	縦格子(平行)	6	9	7.2	
69	ACF	2	乳灰	一面116-22-22	縦格子(平行)	6	10	6.9	
70	BCF	1	灰	一面116-22-16	縦格子(平行)	7	13	6.4	内面部分的横方向ナデ
71	BCF	1	淡褐	二面116-23-6	縦格子(平行)	7	10	7.2	
72	BCF	1	灰原	灰原111-25-8	縦格子(平行)	7	12	7.5	内面ハケ目2.1cm
73	BCF	1	青灰	二面No85	縦格子(平行)	7	11	6.0	
74	BCF	1	灰	灰原112-24-11	縦格子(平行)	7	10	—	内面ハケ目
75	BCDF	1	灰	灰原115-23-17	縦格子(平行)	7	12	6.8	
76	ABCF	1	茶褐	二面115-23-24	縦格子(平行)	7	8	6.4	
77	BCF	2	茶灰	一面115-25-10	縦格子(平行)	7	12	5.4	二種の叩き具使用
77					平行	8	5.4		
78	BCE	1	赤系灰	一面115-23-15	縦格子(平行)	7	14	6.1	内面2mm間隔の青海波文
79	ABCF	2	灰	一面114-24-2	縦格子(平行)	7	13	6.1	
80	ABCF	1	黒灰	灰原115-24-20	縦格子(平行)	7	9	7.6	
81	BC	1	灰	灰原115-24-16	縦格子(平行)	7	12	—	内面ナデ
82	ABCF	1	灰	灰原113-24-22	縦格子(平行)	7	15	有	内面ナデ
83	BCF	2	黒灰	灰原116-23-23	縦格子(平行)	7	13	7.9	
84	ABCF	1	暗灰	一面No1496	縦格子(平行)	7	13	8.5	
85	ABCF	1	灰	灰原113-24-25	縦格子(平行)	7	13	7.0	
86	ABCF	1	灰	二面115-23-22	縦格子(平行)	7	9	7.2	部分的に器肉発露
87	BCE F	2	褐	二面No73	縦格子(平行)	8	13	有	内面青海波文の幾何位のハケ
88	ABCF	1	赤灰	一面115-23-14	縦格子(平行)	8	9	6.2	
89	BCF	1	灰	一面113-23-12	縦格子(平行)	8	22	5.0	内面間隔せまい
90	ABC	1	青灰	灰原111-25-12	縦格子(平行)	8	13	9.6	内面当て具に割れ
91	ABCF	1	暗灰	灰原114-24-5	縦格子(平行)	8	13	8.0	
92	ABF	2	淡灰	灰原115-24-2	縦格子(平行)	8	13	7.0	内面押しは浅い 部分的にハケ目
93	ABCF	2	灰	灰原114-24-15	縦格子(平行)	8	8	—	内面ハケ目1.8cm
94	ABCF	1	青灰	灰原110-25-25	縦格子(平行)	8	20	有	内面横ナデ
95	ABCF	1	灰	一面No1438	縦格子(平行)	8	10	—	内面ハケ目2.0cm
96	BCF	1	青灰	トッパ116-24-13	縦格子(平行)	8	12	7.6	内面当て具に割れ
97	BCE F	2	灰	灰原112-24-19	縦格子(平行)	8	12	—	内面ハケ目2.4cm
98	ABCF	1	灰	一面115-24-2	縦格子(平行)	8	13	7.0	
99	ABCF	1	灰	二面115-23-10	縦格子(平行)	8	11	5.7	
100	BCE F	1	灰	灰原113-23-22	縦格子(平行)	8	12	—	内面無文当て具 押しの浅い叩き
101	BCF	1	紫灰	一面117-21-21	縦格子(平行)	9	11	6.3	
102	ABCE F	1	黒褐	一面114-23-24	縦格子(平行)	9	10	7.6	
103	BCF	1	暗灰	灰原111-25-12	縦格子(平行)	9	14	有	外面横位にハケ目
104	BCF	1	紫灰	二面113-24-4	縦格子(平行)	9	11	5.0	
105	BCF	1	灰	一面116-22-19	縦格子(平行)	10	13	7.9	
106	BC	1	紫灰	二面113-23-22	縦格子(平行)	10	12	5.3	非常に器肉薄い
107	BCF	1	灰	二面114-23-22	縦格子(平行)	10	12	5.5	非常に器肉薄い
108	BCF	1	暗灰	一面116-22-21	縦格子(平行)	10	12	6.5	器肉薄い
109	ABCF	1	黒灰	一面116-22-22	縦格子(平行)	10	12	有	非常に器肉薄い
110	ABCF	1	褐灰	一面113-23-24	縦格子(平行)	10	12	6.1	器肉薄い

番号	胎上	焼成	色調	出土位置	叩き種類	縦(本)	横(本)	寸法	備	考
111	ABC	2	灰	一面113-23-24	疑格子(平行)	10	12	6.3		
112	BCF	1	茶灰	一面115-24-2	疑格子(平行)	10	13	7.5		
113	ABC	1	青灰	一面116-22-17	疑格子(平行)	10	12	6.6		
114	ABCF	1	暗灰	灰層113-24-24	疑格子(平行)	10	11	8.8	芯肉深い	
115	BCF	1	灰	二面113-23-24	疑格子(平行)	10	10	5.6		
116	BCF	1	赤茶灰	一面113-24-11	疑格子(平行)	10	10	5.6		
117	C	2	乳灰	一面113-23-21	疑格子(平行)	11	13	9	内面押しは深い	
118	ABCF	1	褐灰	一面112-24-13	疑格子(平行)	10	10	8.5		
119	ABCF	2	淡灰	一面No.1329	疑格子(平行)	10	10	—	内面ハケ目1.6cm	
120	BCF	1	黒灰	一面116-22-16	疑格子(平行)	10	12	7.4		
121	ABC	1	茶灰	一面116-22-19	疑格子(平行)	10	10	6.1	内面押しは浅い	
122	ABCF	1	灰	灰層116-23-15	疑格子(平行)	10	13	5.9		
123	BCF	1	灰	一面116-22-17	疑格子(平行)	10	11	5.3	内面ハケ目1.3cm 当て具割れ	
124	BCF	2	灰	灰層111-24-25	疑斜格子(平行)	6	10	6.0	内面ハケ目0.8cm	
125	BC	1	黒灰	二面115-24-5	疑斜格子(平行)	7	15	6.2		
126	ABCF	2	淡灰	灰層112-25-1	疑斜格子(平行)	7	11	5.0		
127	BC	1	暗灰	一面116-22-16	疑斜格子(平行)	7	12	4.5	内面細かいビッチ	
128	BCF	1	灰	二面No.45	疑斜格子(平行)	7	24	5.2		
129	ABCF	1	灰	灰層113-24-17	疑斜格子(平行)	7	20	7.0		
130	BCF	1	灰	灰層111-25-2	疑斜格子(平行)	7	29	6.8	内面ハケ目2.7cm	
131	BC	2	灰	一面116-23-15	疑斜格子(平行)	6	16	6.4	内面一部の当て具にキズ	
132	ABCF	1	黒灰	灰層114-24-14	疑斜格子(平行)	7	21	8.9	内面横方向ナデ 外面押しは深い平行	
133	ABCF	2	灰	一面114-24-2	疑斜格子(平行)	7	25	6.1		
134	BCF	1	黒灰	一面113-23-22	疑斜格子(平行)	7	10	7.7	内面押しが深く平位は軽を持つ	
135	ABCF	1	灰	灰層116-23-15	疑斜格子(平行)	8	18	7.4		
136	ABCF	1	灰	灰層114-24-21	疑斜格子(平行)	8	15	7.2	内面横方向部分的にハケ	
137	BCF	1	黒灰	灰層112-24-24	疑斜格子(平行)	8	11	8.9		
138	BCF	1	茶褐	一面115-23-15	疑斜格子(平行)	8	16	7.8	外面横位のナデ	
139	ABCF	2	暗灰	灰層114-24-25	疑斜格子(平行)	8	18	6.0		
140	BCF	1	淡灰	一面116-24-12	疑斜格子(平行)	8	—	有	外面押し深く平行後部分的にハケ目	
141	ABCF	1	灰	二面113-24-3	疑斜格子(平行)	8	16	4.8		
142	BCE	1	白灰	灰層115-23-13	疑斜格子(平行)	8	13	7.8	内面細かい青海波文148と同一か?	
143	C	2	淡灰	二面113-23-23	疑斜格子(平行)	8	22	有		
144	ABCF	2	淡灰	一面114-24-6	疑斜格子(平行)	8	8	—	内面ハケ目2.0cm	
145	BCE	1	青灰	灰層115-23-19	疑斜格子(平行)	8	10	—	内面ハケ目2.3cm	
146	BEF	2	灰	二面115-23-23	疑斜格子(平行)	6	8	—	内面ハケ目3.8cm	
147	BCF	1	灰	灰層116-23-23	疑斜格子(平行)	8	8	—	内面ハケ目2.2cm	
148	ABEF	1	青灰	灰層111-25-5	疑斜格子(平行)	8	13	7.8	内面押しが浅い	
149	ABCF	1	灰	灰層114-24-20	疑斜格子(平行)	7	9	—	内面ハケ目2.0cm	
150	BCF	1	黒灰	灰層115-24-25	疑斜格子(平行)	8	15	—	内面ハケ目2.2cm	
151	BCF	1	淡灰	灰層114-24-15	疑斜格子(平行)	9	10	—	内面無文・ハケ目2.3cm	
152	ABCF	2	乳白	一面No.338	疑斜格子(平行)	9	13	—	内面ハケ目1.7cm	
153	BCF	1	黒灰	灰層116-23-24	疑斜格子(平行)	8	14	有	内面青海波文の後ハケ目1.3cm	
154	ABCF	1	紫灰	灰層111-25-2	疑斜格子(平行)	8	16	有	内面青海波文の後ハケ目1.8cm	
155	ABCF	2	暗灰	一面114-24-4	疑斜格子(平行)	9	12	6.0		
156	ABCD	3	黄褐	一面114-24-3	疑斜格子(平行)	9	11	6.9		
157	ABCF	1	暗灰	一面115-23-19	疑斜格子(平行)	9	9	6.4		
158	ABCF	1	青灰	灰層112-25-1	疑斜格子(平行)	9	11	6.8	内面青海波文の後ハケ目0.8cm	
159	BCF	1	黒灰	灰層114-24-20	疑斜格子(平行)	9	22	8.7		
160	ABC	1	青灰	一面116-23-10	疑斜格子(平行)	9	14	7.5		
161	BC	1	紫灰	一面113-24-4	疑斜格子(平行)	9	24	5.7		
162	BCF	1	暗灰	一面116-23-10	疑斜格子(平行)	9	19	5.2	外面幅1.2cm程の横方向ハケ目	
163	ABCF	1	青灰	一面116-22-16	疑斜格子(平行)	9	14	7.2		
164	BC	1	灰	一面116-22-19	疑斜格子(平行)	9	10	—	内面無文当て具	
165	ABCF	1	灰	灰層115-24-3	疑斜格子(平行)	9	11	7.0	内面青海波文の後ハケ目2.3cm	
166	BC	1	灰	一面113-23-24	疑斜格子(平行)	9	13	6.0	外面幅1.3cmの横方向ハケ目	

番号	胎土	焼成	色調	出土位置	叩き種類	縦(本)	横(本)	当て具	備考
167	BCE	1	黒灰	トンチ113-24-13	縦斜格子(平行)	9	11	有	
168	ABCF	1	灰	一面113-24-5	縦斜格子(平行)	10	13	有	
169	BCEF	1	灰	灰原115-23-22	縦斜格子(平行)	11	13	5.5	
170	BC	1	紫灰	一面116-22-24	縦斜格子(平行)	10	15	有	内面青海波文の後ハケ目2.0cm
171	ABCF	2	灰	一面116-22-17	縦斜格子(平行)	10	13	5.7	
172	ABCF	2	灰	灰原110-28-5	縦斜格子(平行)	10	14	6.8	内面青海波文の後部分的ハケ目
173	BC	1	暗灰	一面114-24-17	格子	7	9	6.0	二種の叩き具使用
173					縦斜格子(平行)	10	11	6.0	
174	BCF	1	黒灰	一面No1366	縦斜格子(平行)	10	10	5.8	
175	ABCEF	1	黒灰	灰原113-24-12	縦斜格子(平行)	10	11	7.7	内面青海波文の後部分的ハケ目
176	BCEF	2	灰	一面115-23-19	縦斜格子(平行)	10	10	6.1	内面青海波文の後部分的ナデ
177	BCF	1	茶灰	灰原115-23-19	縦斜格子(平行)	11	16	5.0	内面青海波文の後ハケ目2.1cm
178	BC	1	茶灰	灰原112-24-22	格子	7	8	5.6	二種の叩き具使用
178					縦斜格子(平行)	11	13	5.6	
179	ABCF	1	茶灰	灰原114-24-16	格子	7	9	5.9	二種の叩き具使用
179					縦斜格子(平行)	11	16	5.9	
180	ABCF	1	茶灰	灰原111-25-25	格子	7	9	5.9	二種の叩き具使用
180					縦斜格子(平行)	11	16	5.9	
181	ABCF	1	紫灰	灰原111-25-12	縦斜格子(平行)	12	16	有	内面重弧状で中心が見られない
182	BCF	1	黒灰	一面113-24-7	格子	4	7	有	
183	BC	2	淡褐	一面115-23-24	格子	4	7	6.2	
184	ABCF	1	黒灰	一面No3012	格子	6	8	8.0	内面押しは深い
185	BCF	3	褐灰	一面113-24-4	格子	4	8	6.8	
186	BCF	2	淡褐	二面115-23-23	格子	6	8	6.6	
187	ABF	1	青灰	二面113-23-17	格子	6	8	6.6	内面押しは深い
188	ABCF	1	淡灰	一面No1447	格子	7	8	有	
189	ABF	1	黒灰	灰原114-24-25	格子	7	8	7.0	
190	ABEF	3	褐	一面116-22-17	格子	7	8	5.1	
191	ABCF	1	黒灰	灰原116-24-9	格子	7	9	6.4	内面青海波文の後部分的ハケ目
192	BC	1	赤茶灰	トンチ116-24-9	格子	8	8	6.1	内面青海波文の後部分的ハケ目1.6cm
193	ABCF	1	黒灰	一面No1399	格子	8	8	6.6	内面押しは浅い
194	ABCEF	1	黒灰	灰原115-23-18	格子	10	11	6.9	内面押しは浅い
195	BCF	1	茶灰	一面No1745	格子	8	8	有	内面青海波文—格子当て具
196	ABCF	2	灰褐	灰原115-24-18	平行+ナデ	7	—	有	内面—彫指ナデ
197	ABCF	2	黒灰	灰110-25-20	平行+ナデ	8	—	—	内面木葉痕
198	ABCF	3	淡灰	灰原115-24-16	平行+ナデ	10	—	—	内面端部格子当て具
199	BC	1	黒灰	灰原116-22-24	平行+ナデ	—	—	—	内面格子当て具
200	ABCF	1	黒灰	灰原114-24-18	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
201	BCF	1	灰	灰原113-24-22	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
202	ABCF	2	青灰	灰原112-25-7	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
203	ABCF	1	暗灰	灰原110-25-25	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
204	ABCF	1	黒灰	灰原115-24-17	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
205	BCF	1	青灰	灰原113-24-24	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
206	BCF	1	青灰	灰原112-24-22	平行+ナデ	—	—	—	内面格子当て具
207	ABCF	1	灰	トンチ115-11-24	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
208	BCF	1	灰	灰原113-24-22	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
209	BCF	1	灰	トンチ116-24-13	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
210	BCF	1	青灰	灰原113-24-24	平行+ナデ	10	—	—	内面格子当て具
211	ABCF	2	黒灰	灰原115-24-16	平行+ナデ	11	—	—	内面格子当て具

襷底部 (第200~204図)

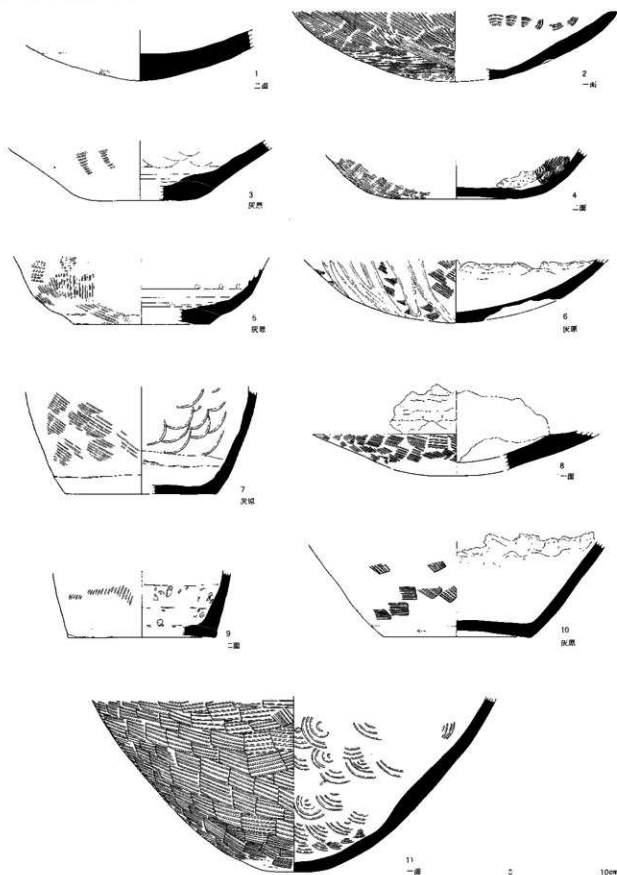
襷の底部の総破片数は256片で灰原出土遺物の中に占める割合は0.7%である。灰原から200片、一面から54片、二面から2片である。総重量は38,598gで灰原

出土遺物の中に占める割合は1%である。灰原から

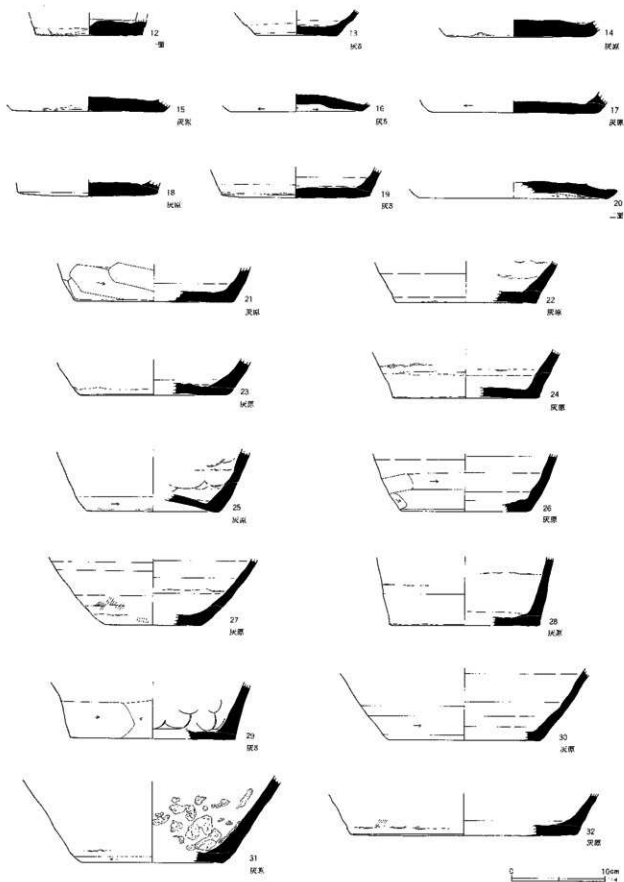
27,406g、一面から10,517g、二面から675gである。

襷の底部には図示したように丸底と平底が検出された。1、4、9、20は二面からの出土である。2、8、

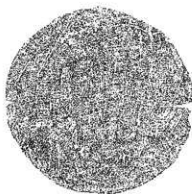
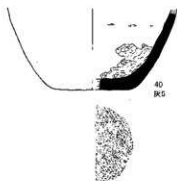
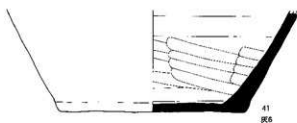
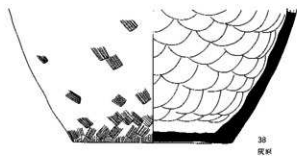
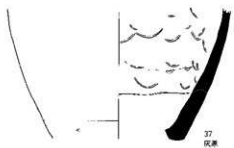
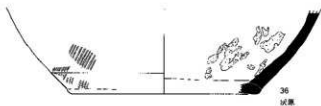
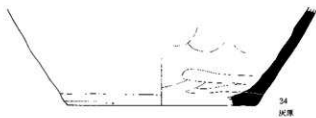
第200図 灰原跡出土墓53



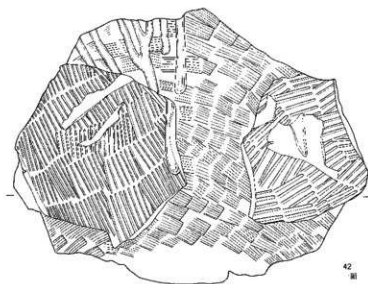
第201図 灰原跡出土遺物



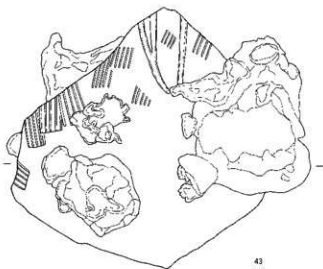
第202図 灰原跡出土壺65



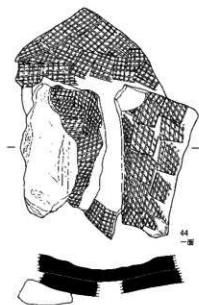
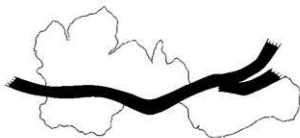
0 10cm 1:4



42
裏



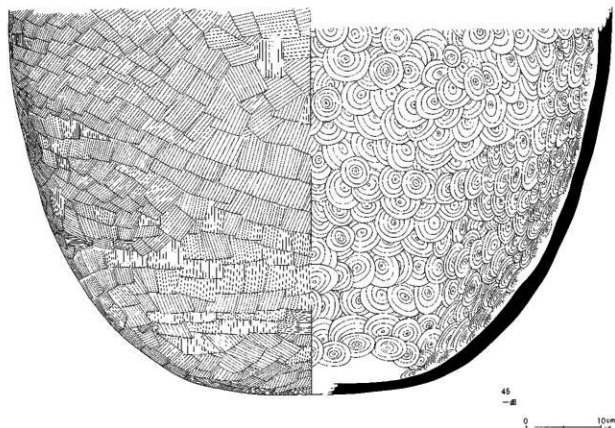
43
裏



44
裏



0 10cm



11、12、39、42、44は一面からの出土である。その他は、灰原および灰原5からの出土である。

1～4、6、8、11は丸底である。いずれも外面全体に叩きを施す。内面には青海波文が残る。1は器肉非常に厚い。2は外面に平行叩きを施し、下端に刷毛を巡らす。内面は底部に釉が附着している。5は平底の底部である。胴部の形態がやや歪み開いている。6は丸底である。内面はタール状の溶解物が付着している。外面は釉が流れている。外面の剥離部分は支えにした焼き台をはがす際に割れた痕跡と考えられる。7は外面に細かな平行叩き、内面に無文当て具が残る。底部外面は未調整で内面はナデを施している。8は内面に溶解物が付着している。9、10は平底である。内面には釉、溶解物が付着している。11の外面は平行叩き、焼き台の剥離した痕跡が2ヶ所みられる。剥離部分は甕の胴部破片の痕跡が認められる。

12～40は平底である。いずれの胴部内面は無文当て具による成形である。13は糸切り離しが残る。14～16

は上げ底である。外周がやや高く、回転ヘラケズリ調整を施し、中心部は未調整である。内面は胴部との接合部分を指ナデ調整する。15の底部裏面は離れ砂が附着している。21は外面に手持ちのヘラケズリを施す。胴部下端をヘラケズリ。25は内面無文当て具。29は胴部外面にヘラケズリ、内面に無文当て具、底部外面は周囲ヘラケズリを施す。32は焼成やや不良で酸化焰焼成に近い。色調は橙灰色。33は粘土緑巻き上げにより胴部を引き上げる。その際に、内面の変換点部分を指ナデする。その後、外面には平行叩き、内面には無文当て具を使用している。底部外面は手持ちのヘラケズリを施す。底部は器肉薄く、胴部やや厚い。34は内面の無文当て具を縦方向に1掌にナデ消している。焼成段階で内外面に自然釉が付着し、色調は光沢のある暗灰色である。38は底径16.8cm、胴部外面には3cm当たり15本の細かい平行叩きを施す。底部下端までおよぶ。その後、叩きをナデ消している。内面は無文当て具を縦方向のナデによって消す。底部内面も一定方向の輻

2.0cm前後のナデを丁寧に施す。底部外面は木調整である。底部内面に「十」印状の黒斑がみられる。火澤の可能性が考えられる。39は内面に無文当て具が細かく移動して当たっている。外面は平行叩きを施す。40は小型甕の底部であると考えられる。41は底径19.7cm、胴部外面はクロコナデ成形されている。底部下端は回転ヘラケズリを施す。内面は指頭による横方向のナデを施す。底部外面は丁寧なヘラケズリ調整を施す。38

と同様に底部内面に「十」印状の黒斑がみられ胴部内面におよぶ。火澤の可能性が考えられる。

42～43は甕の底部に甕胴部破片が貼り付いている。43では窯壁片も貼り付き、44は中央左側に甕の胴部破片と石が貼り付いている。丸底の大甕を窯体内に肯定する際に転倒を防ぐための焼き台であると考えられる。甕の焼き台については破損した甕胴部の破片や周辺にある窯壁片、石などを利用していた可能性が高い。

第30表 灰原跡出土甕観察表 (第200～204図)

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕		5.3		ACDF	1	灰	20	一面115-23
2	甕		7.2		ABCF	2	灰	20	一面114-24-9
3	甕		6.3		ACDF	1	黄灰	30	灰原112-24-21
4	甕		5.2		CD	1	灰	20	二面115-23-19
5	甕		7.1	(14.1)	CD	1	灰	30	灰原114-24-15
6	甕		6.6		ABC	1	灰	30	灰原115-24-18
7	甕		11.3	(16.0)	ACDF	1	黄灰	5	トレンチ116-24-15
8	甕		8.0		ABCD F	1	灰	30	一面Na180
9	甕		7.0	(15.7)	BCD	1	灰	10	二面Na180
10	甕		10.0	(15.3)	ABC	1	灰	30	灰原115-24-18
11	甕				BC	1	灰	30	一面116-22-18
12	甕		1.7	(11.4)	CD	1	灰	20	一面113-24-18
13	甕		2.7	8.4	ABCD	1	灰	30	灰5 112-23-17
14	甕		1.9	15.6	ACDF	1	灰	30	灰原111 25-3
15	甕		1.5	(16.0)	ACD	2	灰褐	20	灰原116-23-24
16	甕		1.8	(14.0)	ACF	1	灰	20	灰5 Na2739
17	甕		2.3	(18.1)	ACD	1	灰	30	灰原113-24-21
18	甕		1.7	(14.8)	CDE	1	褐灰	30	灰原112-24-22
19	甕		3.2	(15.8)	ACDEF	2	灰	10	灰5 112 23 21
20	甕		1.7	(20.0)	CD	1	灰	20	二面116-25
21	甕		3.9	(17.0)	ACDEF	2	灰	20	灰原115-24-18
22	甕		4.4	(14.9)	ACDF	1	灰	20	灰原115 24-12
23	甕		3.8	(15.8)	CDF	1	灰	10	灰原113-24-19
24	甕		5.2	(15.6)	ABCDE F	1	灰	20	灰原115-24-7
25	甕		6.5	(14.1)	CD	1	灰	30	灰原114-24-19
26	甕		6.1	(13.9)	ACDEF	2	灰	10	灰原116-23-5
27	甕		7.1	(10.1)	C	1	灰	10	灰原112-24-22
28	甕		7.3	(16.0)	CDF	1	灰	20	灰原110-26-5
29	甕		6.0	(17.5)	CD	1	灰	30	灰5 113-23 6-11
30	甕		7.6	(16.0)	AC	1	灰	20	灰原112-24-21
31	甕		8.5	(15.1)	CDF	1	灰	20	灰原115-24-21
32	甕		4.5	(24.0)	CDEF	2	黄灰	20	115 21-22, 24-6
33	甕		7.8	(19.9)	CDE	1	灰	20	灰原112-24-18
34	甕		10.4	(20.0)	ACDF	1	灰	20	灰原115-24-24
35	甕		9.1	(18.3)	ACDE	2	黄灰	20	灰原114-24-25
36	甕		9.0	(20.1)	CDE	1	灰	20	灰原110-25 9
37	甕		13.9		ACD	1	灰	5	灰原116-24-8
38	甕		15.1	16.8	ABC	1	灰	30	灰原111-25-17
39	甕		7.9	(21.7)	ACD	2	黒灰	20	一面116 23-10
40	甕		8.5	(8.4)	ABF	1	青灰	30	灰5 111-24-24
41	甕		10.6	19.7	BCFG	1	青灰	50	灰5 112 23-22, 112-24-1
42	甕				ABC	1	略灰	30	一面Na3357
43	甕				ABC	1	灰	30	灰5 113-23-10
44	甕				ABC	2	灰	30	一面115-24-1
45	甕		25.4		ABCE	1	茶褐	30	一面113-24-10他

m 環・皿・高台付環・高台付皿(第205～207図1～61)

東側灰原から出土した平安時代の環・皿・高台付環・高台付皿である。第205～207図1～61に図示した。検出された位置については、第44～47図に示した灰原断面図による第4b層から出土したものが主体である。この4b層は第5号窯跡の灰原層を微妙ではあるが上層に堆積し、同一層とは考えられず、やや後層の可能性があるのである。このことは調査区の北側にこの時期の窯跡が存在し、その窯の灰原遺物とすることができる。加えて、灰原一面および二面の一部からも少量ではあるがこの時期の遺物が検出された。出土状況の分布図は第48～50図に示した。第5号窯跡と異なる窯跡の遺物であると推測する。先の第51～62図1～296の環・皿・高台付環は、第5号窯跡の灰原から検出したものであり灰原5として取り扱って掲載した。

遺物計量において4b層検出遺物も灰原5として扱ってしまったために併せて記載したが、灰原5出土破片数計量表および出土遺物重量表によれば115～22～24グリッド、116～22～24グリッド、117～22～24グリッド出土遺物は第5号窯跡ではなく谷部北側に存在するであろう窯跡の遺物であることが予想される。

また、破片数でみると、一面から出土した遺物は、総破片数1,889片で平安遺物に占める割合は4%である。環1,308片、皿110片、高台付環442片、蓋29片である。二面から出土した遺物は、総破片数137片で平安遺物に占める割合は0.2%と極少量である。環101片、皿6片、高台付環30片であった。重量でみると、一面から出土した遺物は、総重量34,035gで平安遺物に占める割合は6%である。環14,395g、皿2,834g、高台付環16,177g、蓋629gである。二面から出土した遺物は、総重量2,203gで平安遺物に占める割合は0.4%と極少量である。環1,194g、皿200g、高台付環809gであった。

灰原出土の遺物実測をした個体は環22個、皿14個、高台付環22個、高台付皿3個である。出土遺物は、器種ごとに形態的特徴を観察し分類した。分類にあたっては環か100点、皿28点、高台付環95点を対象とした。

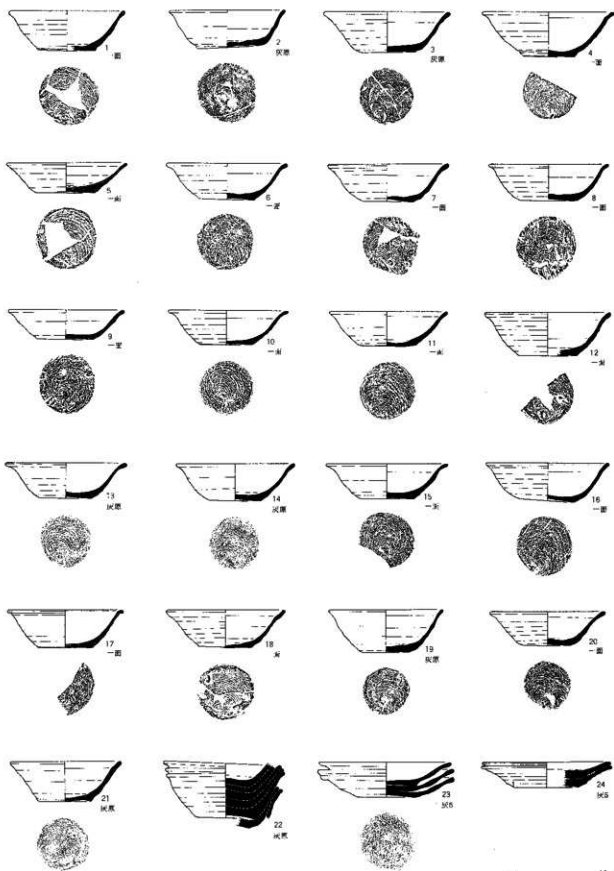
この中でまず、環100点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。Aは円柱が糸切り離しの際に台状に残るタイプで22点、Bは底部糸切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで25点、Cは底部糸切り離し後、体部が直線的に立ち上がるタイプで8点、Dは底部の糸切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで36点、Eは底部と体部との境が弱く体部が丸みをもって立ち上がるタイプで9点であった。形態は、いずれも、底部から体部の立ち上がりは緩やかな湾曲をもち、内湾気味に外傾に立つ。口唇部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプと、直線的に立ち上がりほぼ同じ器肉かややもすると器肉の薄いタイプが存在する。この違いは、口縁端部の調整を指で内外面押圧する際に外面を押さえ込む手法の違いによるものと判断できる。

皿28点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。基本的な分類基準は環と同様である。Aは円柱が糸切り離しの際に台状に残るタイプで2点、Bは底部糸切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで13点、Cは底部糸切り離し後、体部が直線的に立ち上がるタイプで5点、Dは底部の糸切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで4点、Eは底部と体部との境が弱く体部が丸みをもって立ち上がるタイプで4点であった。形態は、底部から体部の立ち上がりには緩やかな湾曲をもち、内湾気味に外傾に立つ。口唇部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプと、底部から体部の立ち上がりは外反気味に外傾に立ち、口唇部は外方に開き器肉をやや膨らませるタイプがある。

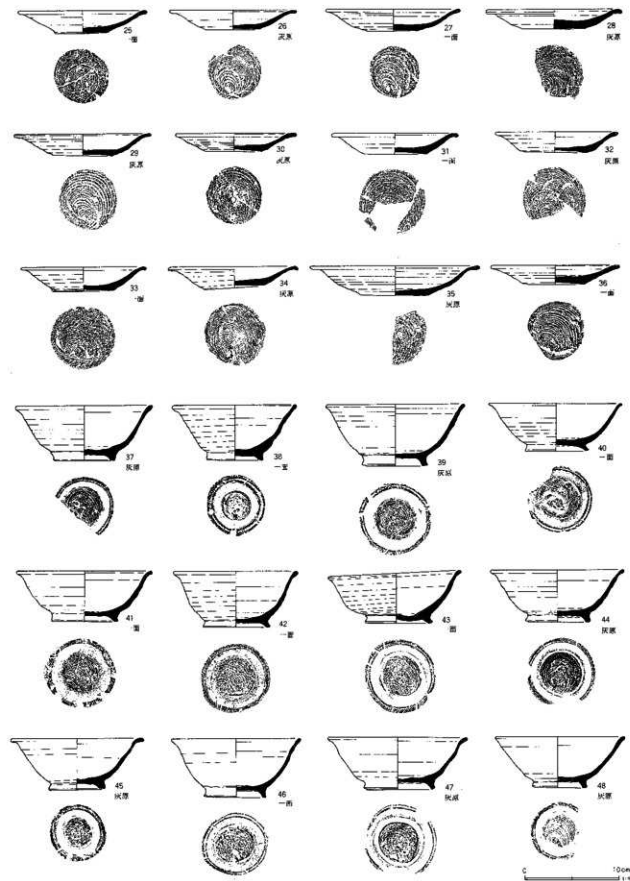
高台付環95点を高台部の形態によって分類した。第一分類は高台の全体的形態でAは直線的なタイプで13点、Bは押圧によりややつぶれて外側に膨らむタイプで51点、Cは箱形に突出するタイプで20点。

環、皿、高台付環の窯詰め焼成方法については、同一器種を正位の状態で重ねていることが判断できる。

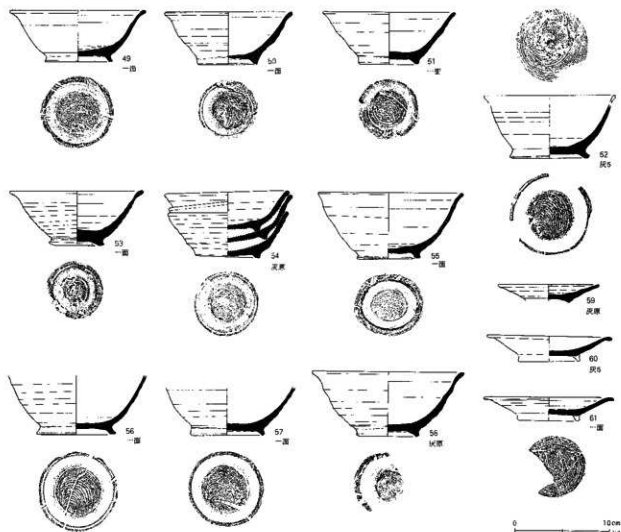
第205図 灰原跡出土・皿・高台付皿(1)



第206图 灰原跡出土环・皿・高台付环(2)



第207図 灰原跡出土坏・皿・高台付坏(3)



第31表 灰原跡出土坏・皿・高台付坏遺物觀察表 (第205~207図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.3)	4.2	6.2	CDE	1	灰褐	70	一面114-24-17
2	坏	(12.2)	3.9	6.5	ADEF	1	灰白	70	トレンチ116-24-13
3	坏	13.4	4.3	5.7	ACDEF	2	灰	100	灰原115-24-17
4	坏	(14.0)	4.7	5.5	ABCDF	1	灰	30	一面116-22-24
5	坏	(12.8)	3.2	6.2	CDE	1	灰	60	一面111-24-16-18, 112-24-6
6	坏	12.9	3.8	5.8	CDEF	1	灰褐	75	一面114-24-17
7	坏	12.8	3.9	5.5	CDEF	1	灰	95	一面113-24-18
8	坏	(12.7)	3.9	6.2	CDEF	1	灰	50	一面114-24-17
9	坏	(12.3)	3.1	6.2	BCDEH	1	灰	60	一面112-24-20
10	坏	12.8	3.6	5.7	CE	1	灰	70	一面112-24-19
11	坏	12.6	3.6	6.0	ACE	1	灰	50	一面112-24-20
12	坏	(13.4)	4.5	(6.0)	ABCDF	2	黄灰	40	一面112-24-20
13	坏	(12.4)	3.7	5.6	ABCEF	1	灰	60	灰原113-24-25
14	坏	12.4	3.9	5.4	ACEF	1	灰	100	灰原113-24-25
15	坏	13.0	3.7	5.9	CE	1	灰	50	一面114-24-17
16	坏	(13.1)	4.0	6.8	CF	1	灰	30	一面112-24-16
17	坏	(12.3)	4.0	(5.9)	CE	1	灰	30	一面112-24-16
18	坏	(12.6)	4.0	5.8	CDE	1	灰	50	一面113-24-18

番号	部 種	口 径	器 高	底 径	胎 上	焼 成	色 調	残 存 率	備 考
19	坏	(12.1)	4.5	5.1	ACE	1	褐	60	灰原116-23-19
20	坏	(12.2)	3.6	5.0	ADEH	1	黄灰	70	一面116-23-24、No3369
21	坏	11.5	4.2	5.4	BEH	2	灰黄褐	100	トレンチ116 24-13
22	坏	12.6	4.7	6.5	CDEF	1	灰	80	灰原115-24-12七枚重
23	皿	14.1	2.2	6.4	ABEF	1	青灰	80	灰3109-26-8
24	皿	(13.9)	2.3	(6.8)	BCEF	1	灰	20	灰5フク十二枚重
25	皿	(13.7)	2.5	5.7	CEF	1	灰	50	一面112-24-18
26	皿	13.5	2.1	5.9	ACDEFH	2	灰	85	灰原114-23-18
27	皿	14.3	2.3	5.4	ACFE	1	灰	75	一面113-24-18
28	皿	(14.4)	2.1	(6.7)	CDEF	1	灰	50	灰原115 24-10
29	皿	14.5	2.3	6.3	CD	1	灰	75	灰原113-24-25
30	皿	12.8	1.9	6.0	ACDEF	1	褐灰	75	灰原115 24-7
31	皿	(13.5)	2.2	6.6	CDE	1	灰	70	一面111-24-16
32	皿	13.0	2.1	6.8	CD	1	灰	70	灰原116-23-19
33	皿	13.3	2.5	6.6	CDF	1	灰	95	一面111-24-17
34	皿	13.8	2.2	6.5	ACDEF	1	灰	70	灰原113-24-24
35	皿	(18.0)	3.1	(7.1)	ABCE	1	灰	25	灰原113 24 21
36	皿	(13.6)	2.0	6.1	ACDE	1	褐灰	40	一面114-24-17
37	高台付坏	(14.5)	5.8	(6.6)	CDEF	1	灰	40	灰原116-23-19
38	高台付坏	13.2	6.8	6.0	ADH	1	暗灰	75	一面116-23-24
39	高台付坏	14.7	6.5	7.0	CDEF	2	褐灰	70	灰原109-24-25
40	高台付坏	14.1	5.0	6.7	ACD	1	灰	70	一面112 24-20
41	高台付坏	(14.4)	5.3	7.1	CDEF	1	灰	50	一面112-24-18
42	高台付坏	13.2	5.9	7.1	CDE	1	灰	80	一面112-24-20
43	高台付坏	(14.1)	5.8	7.2	CDF	1	灰	60	一面112-24-20
44	高台付坏	(14.0)	5.5	6.9	ACD	1	灰	40	灰原116-23-20
45	高台付坏	13.7	5.4	6.0	BCEF	2	灰白	90	灰原113 24 22
46	高台付坏	13.7	6.2	6.6	ACFE	1	灰	80	一面116-23-24
47	高台付坏	(14.8)	5.5	7.5	ACDE	1	褐	60	灰原116 23 19
48	高台付坏	(13.5)	5.3	5.8	ACE	1	黄灰	60	灰原113-24-22
49	高台付坏	(14.4)	5.4	7.1	ABCDE	1	灰	70	一面116-22-24
50	高台付坏	13.6	5.6	6.3	CDEF	1	灰	80	一面114-24-17
51	高台付坏	(14.1)	5.8	5.8	ACDEFH	1	褐	50	一面116-23-24
52	高台付坏	(13.8)	(6.6)	8.6	ABFG	2	橙褐	60	灰5112 23 10-18、No3729
53	高台付坏	(14.1)	5.5	6.3	ACDE	1	灰	40	一面116-22-25
54	高台付坏	12.8	4.6	6.9	BCDF	1	灰	100	灰原113-24 22三枚重
55	高台付坏	15.4	7.0	6.7	CE	1	灰	75	一面112-24-19
56	高台付坏		6.2	8.4	ACDEH	2	橙	50	一面112-24-18
57	高台付坏		5.0	7.9	ABCDEH	1	黄橙	60	一面112-24-20
58	高台付坏	(15.9)	6.8	(6.7)	ABCDEF	2	灰黄褐	40	灰原113-24-25
59	高台付皿	(10.8)	1.7		ABCEF	2	橙	50	灰原114 24 13
60	高台付皿	(13.2)	2.1	6.0	ABCF	1	青灰	50	灰5111-25-1
61	高台付皿	(13.7)			ACDF	1	灰	60	一面111-24-16

n 瓦・瓦塔

瓦 (第209～214図1～51)

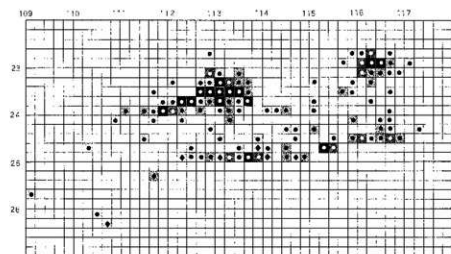
瓦は、第209～214に図示した。また、出土状況は第208図に示した。検出した瓦は平瓦が圧倒的に多く、22の1点のみ丸瓦であった。平瓦はいずれも粘土紐一枚造りである。成形をみると、1～32、49～51は凸面ナデ調整である。凹面は布目をそのまま残す。33、34は凸面に斜行し叩きを施す。35～38は凸面に格子叩きを

施す。35は格子の5個の影り込み距離は横6cm、縦4.8cmであり、格子は長方形である。37、38も同様である。

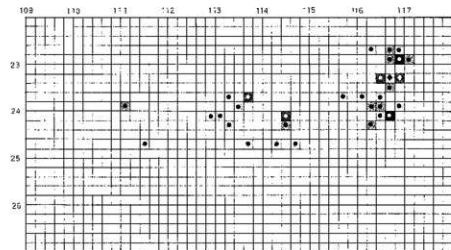
また、36は格子の隆線が細く、格子の5個の影り込み距離は横4.2cm、縦4.4cmであり、格子はほぼ正方形である。凹面は糸切り雕した後、布目が付く。39～45は細かい縄叩きを施す。縄は3cm単位当たり8本を数える。46～48はやや粗い縄叩きを施す。縄は3cm単位当たり4本48は不規則な縄文様である。

第208図 灰原跡瓦・瓦塔出土分布図

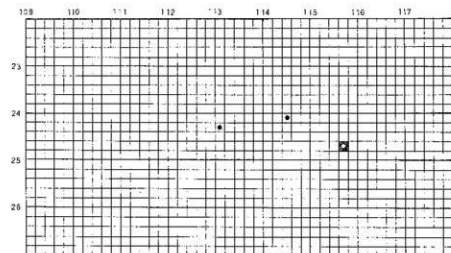
灰原5・灰原



灰原一面

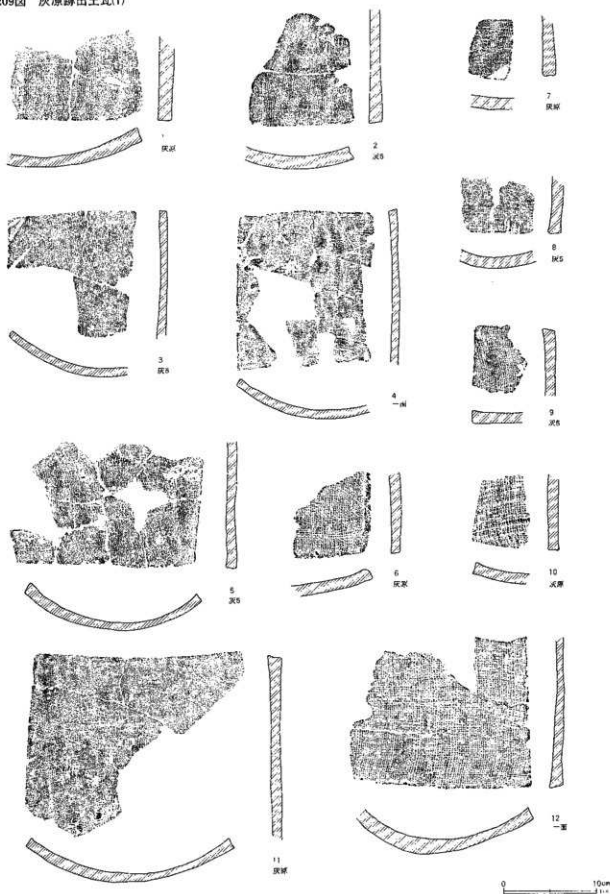


灰原二面

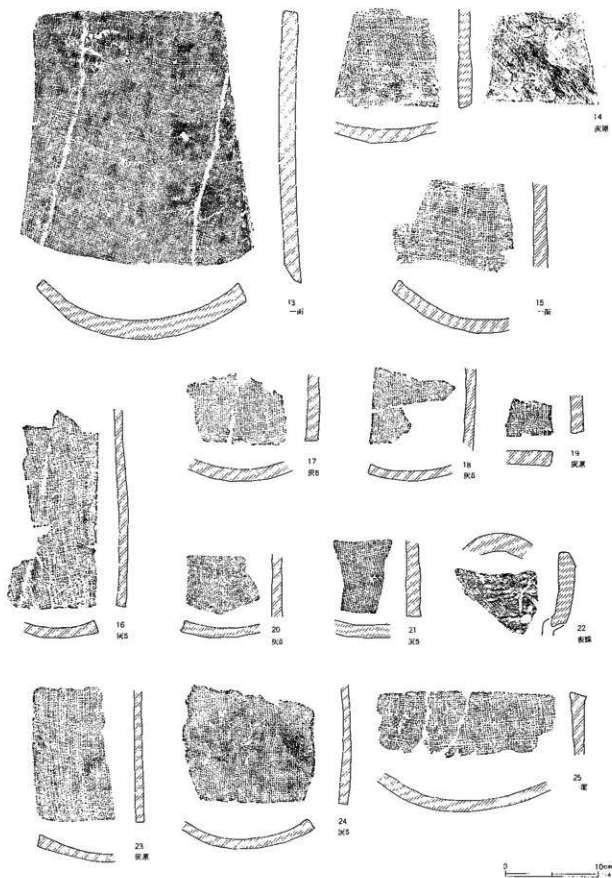


- 瓦
- 瓦塔
- 1
- 2
- 3
- 4個以上

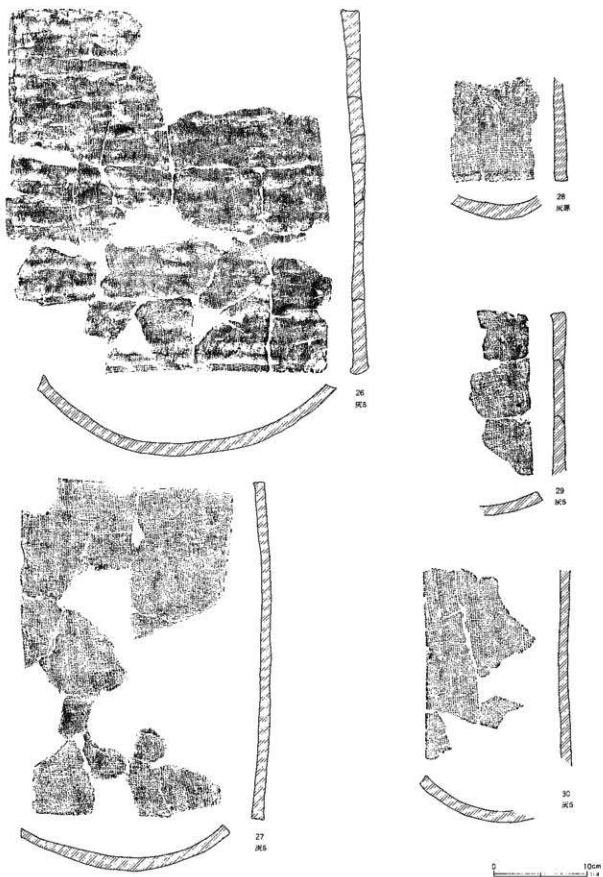
第209团 灰原跡出土瓦(1)



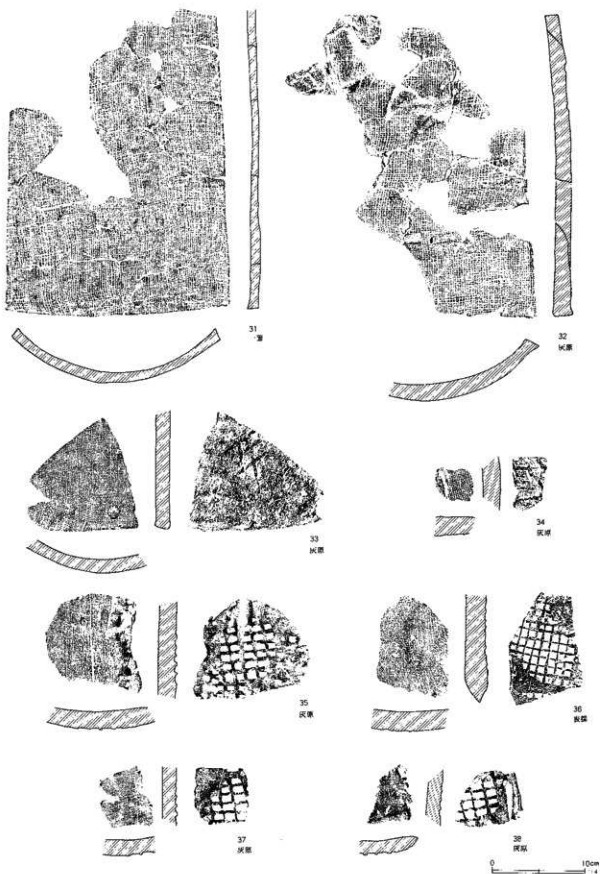
第210号 灰厚跡出土瓦(2)



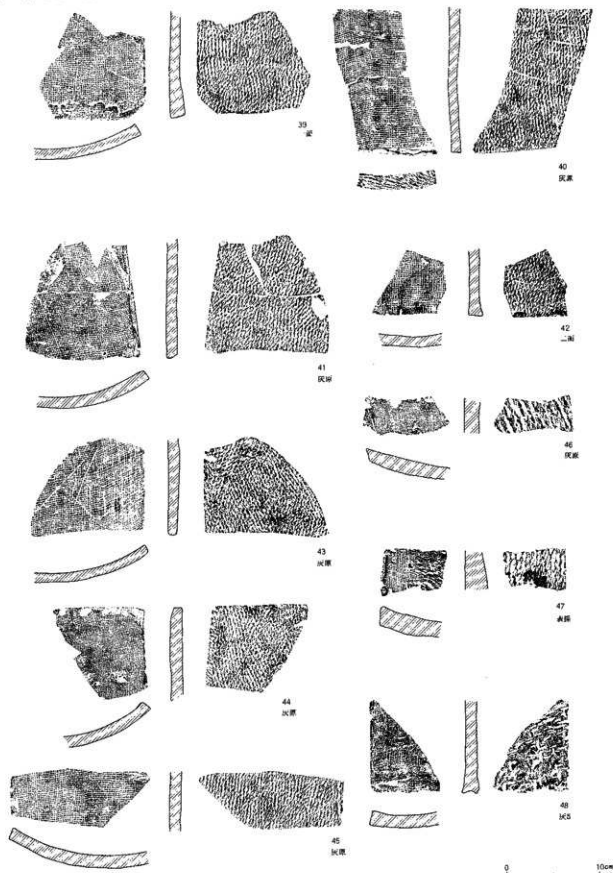
第211図 灰原跡出土瓦(3)



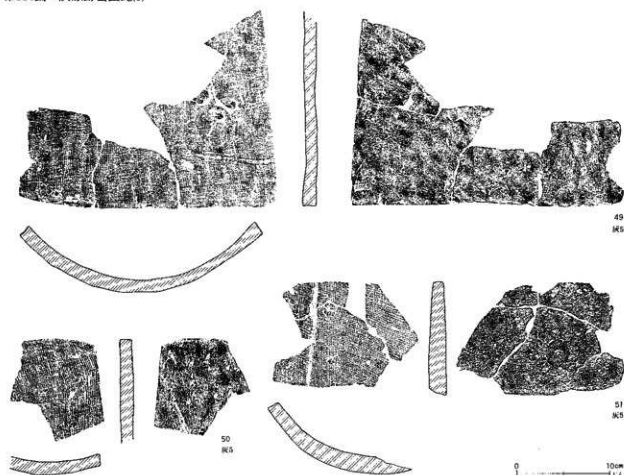
第212図 灰原跡出土瓦(4)



第213图 灰原跡出土瓦(5)



第214図 灰原跡出土瓦(6)



第32表 灰原跡出土瓦観察表 (第209~214図)

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	布目(縦)	布目(横)	備考
1	平瓦	(8.8)	(14.5)	1.0	ABFG	2	黒灰	37	16	灰原115-24-17他
2	平瓦	(11.9)	(11.6)	1.3	ABEF	2	灰	32	27	灰5 111-23-25他
3	平瓦	(13.6)	(12.7)	0.9	ABF	2	褐灰	35	28	灰5 112-23-20他
4	平瓦	(16.4)	(14.1)	0.9	ABCF	2	灰褐	32	30	一面No293・304・305・337他
5	平瓦	(13.3)	18.9	0.9	ABF	2	灰	31	27	灰5 No3732他
6	平瓦	(8.3)	(7.7)	1.2	ABF	3	灰	16	13	灰原115-24-17
7	平瓦	(6.4)	(4.7)	1.3	ABEF	1	灰褐	20	27	灰原5 111-23-25
8	平瓦	(5.7)	(8.2)	1.2	ABEF	2	淡灰	22	21	灰5 113-23-11他
9	平瓦	(7.1)	(5.3)	1.1	ABF	2	黒灰	20	15	灰5 No3778
10	平瓦	(7.9)	(5.7)	1.1	ABCF	2	灰	22	14	灰原114-24-25
11	平瓦	(18.8)	22.2	0.8	BC	2	灰褐	30	26	灰原113-24-25
12	平瓦	(15.5)	(18.9)	1.7	ABDEF	2	灰	20	15	一面114-24-9他
13	平瓦	(28.5)	22.3	2.0	ABDF	1	灰	18	19	一面No3362他
14	平瓦	(10.4)	(11.0)	1.3	ABC	2	灰	20	13	灰原116 23 5
15	平瓦	(8.9)	(12.6)	1.4	ABC	2	灰	18	13	一面No3418
16	平瓦	(20.9)	(7.8)	1.0	ABF	1	暗茶灰	20	13	灰5 112-23-24他
17	平瓦	(7.0)	(11.1)	1.3	ABEF	2	灰	16	20	灰5 No1047・3583
18	平瓦	(8.7)	(9.0)	1.0	ABF	1	黒灰	18	15	灰5 No1026他
19	平瓦	(3.9)	(4.9)	1.3	ABF	1	青灰	18	15	灰原112-24 9
20	平瓦	(6.5)	(8.5)	1.0	ABF	1	灰	19	15	灰5 No3744
21	平瓦	(7.9)	(6.0)	1.3	ABF	1	灰	18	16	灰5 112 23-15
22	丸瓦	(6.8)	(7.4)	1.9	ABC	3	褐			表探

番号	種類	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	布目(縦)	布目(横)	備考
23	平瓦	(13.9)	(8.3)	0.8	ABF	2	灰	19	15	灰原114-24-14
24	平瓦	(12.1)	(14.2)	1.2	ABFG	2	灰	18	14	灰5 No3875
25	平瓦	(6.5)	(18.6)	1.2	ABC	2	灰	15	12	一面No72・3135他
26	平瓦	38.3	31.7	1.8	ABEF	3	褐灰	16	17	灰5 No3346他
27	平瓦	35.9	22.2	1.4	ABCF	3	茶褐	18	14	灰5 No1312・1314・1351他
28	平瓦	(10.9)	(9.8)	1.5	ADG	3	褐	14	17	灰原117 22-21
29	平瓦	(16.8)	(6.1)	1.1	ABEF	3	橙褐	17	13	灰5 No3577・3775他
30	平瓦	(20.6)	(12.0)	1.1	ABF	2	黒灰	17	14	灰5 No1278他
31	平瓦	(31.9)	22.2	1.1	ABF	2	黒灰	17	14	一面No760他
32	平瓦	31.8	(16.0)	1.8	ABF	3	褐灰	16	11	灰原116-24-14他
33	平瓦	(11.7)	(13.0)	1.4	DF	3	乳灰	18	26	灰原
34	平瓦	(5.7)	(3.9)	1.8	BDF	3	淡褐	21	22	灰原113-24-15
35	平瓦	(10.2)	(11.6)	1.9	ABCF	2	灰	23	23	灰原117-24-7
36	平瓦	(9.1)	(7.9)	2.1	BC	1	灰	21	23	E区表探
37	平瓦	(6.1)	(5.7)	1.6	ABEF	2	褐灰	24	22	灰原116-24-1
38	平瓦	(5.9)	(6.2)	1.5	ABF	2	淡灰	30	21	灰原115-25-5
39	平瓦	(11.3)	(11.4)	1.1	ABF	1	灰	16	16	一面116-24-4
40	平瓦	(15.3)	(8.6)	1.3	BCF	1	灰	16	17	灰原113 23 23他
41	平瓦	(12.1)	(12.1)	1.2	ABC	1	灰	17	19	灰原115-22-24他
42	平瓦	(6.8)	(6.8)	1.1	BCF	1	灰	15	17	一面14層
43	平瓦	(10.1)	(12.2)	1.0	ABF	1	灰	14	17	灰原115-24-17
44	平瓦	(9.0)	(8.5)	1.2	ABD	1	灰	22	19	灰原116-24-11
45	平瓦	(6.3)	(14.9)	1.2	ABF	1	灰	15	17	灰原116-24-8
46	平瓦	(3.6)	(8.9)	1.3	ABF	1	灰	20	22	灰原116-24-16
47	平瓦	(4.2)	(6.4)	1.7	ABF	1	灰	18	23	灰原表探
48	平瓦	(9.7)	(7.4)	1.3	ABF	2	灰	20	16	灰5 No3671
49	平瓦	20.5	26.0	1.4	ABDF	1	灰	33	33	灰5 108 26 19
50	平瓦	10.9	9.3	1.2	ABCF	1	灰褐	35	30	灰5 108-26-9
51	平瓦	11.9	16.4	1.8	BEF	2	淡白	18	20	灰5 109-25-16

瓦塔 (第215・216図1～16)

灰原跡から検出した瓦塔破片は16点である。すべて屋蓋の部分であり、軸部に相当する破片は出土していない。いずれも成形、調整、表現などの点において共通性が認められる。しかし、大別して焼成が還元焼成され青灰色に焼き上がった須恵質のもの(第215図1～10)と、酸化還元焼成され暗褐色の土師質のもの(第216図11～16)がある。両者には若干の相違点が存在する。

まず、両者とも、成形は粘土盤をもってベースとし、瓦部分に若干の粘土を貼り足す。丸瓦は竹管状工具で引き出し、須恵質の瓦塔は軒先2.2～3.0cmで節を刻む。土師質の瓦塔は3.4～3.8cmで節を刻む。丸瓦の幅は須恵質が0.65cmに対し、土師質は0.7cmと微かな違いが見られる。なお、丸瓦と丸瓦との間隔は幅0.3cmほどあり、この種類の瓦塔の中では、比較的幅が広い。

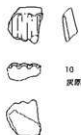
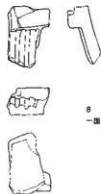
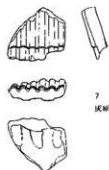
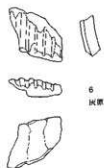
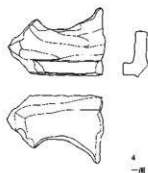
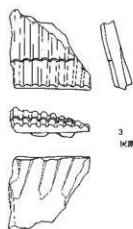
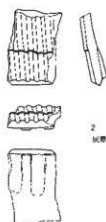
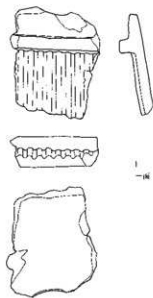
つまり、それだけ工具に厚みがあることになる。丸瓦の間隔が離れているために、視覚的には、あたかも平瓦と組み合っているかのような見方もできる。

軒裏は一軒である。はじめにヘラ状工具で垂木の位置を刻んで割付け、その後、おそらく彫刻刀状の工具を使って一気に削りだしている。垂木の幅や長さは須恵質に比べて土師質の方が大振りである。間隙では土師質のものは扇垂木風に斜めに作られている。

胎土は赤色粒子や白色の微粒子を含み、焼成の違いに関わらず共通している。従って、双方とも使用した粘土は同じものと判断される。

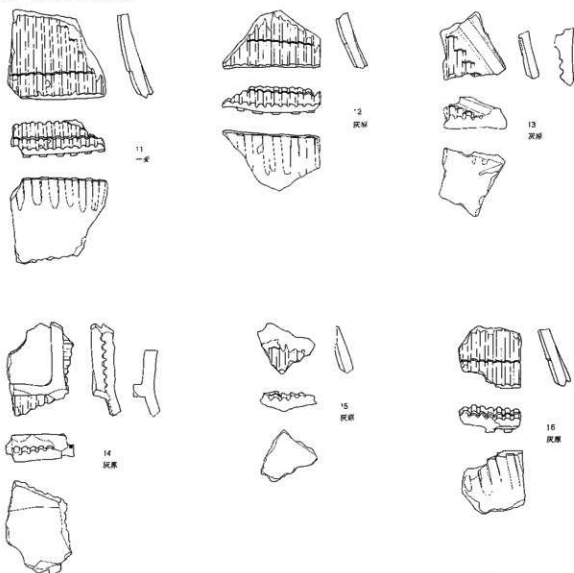
これら16点の破片は大局的に見れば同一の作り手による製作と考えられる。ただし、焼成の異なる二種類の瓦塔は単に焼け具合の違いではなく、微かな差異をみせることから、各々、別の個体とみられる瓦塔の破片である。

第215图 灰原跡出土瓦塔(i)



0 10cm

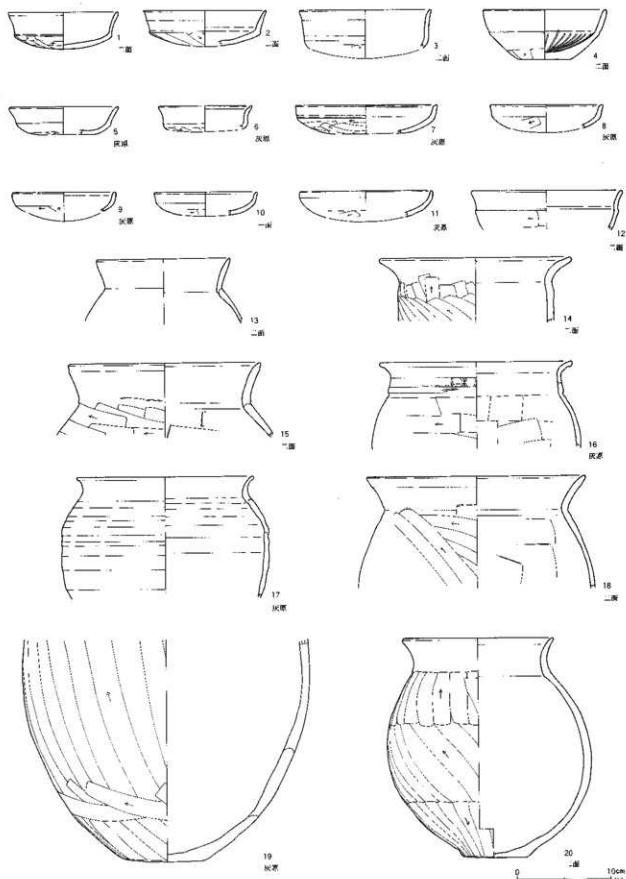
第216図 灰原跡出土瓦塔(2)



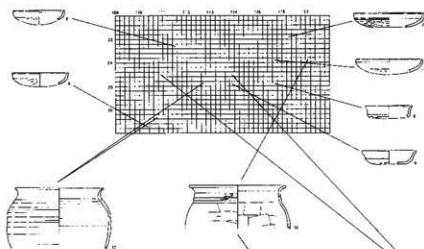
第33表 灰原跡出土瓦塔観察表 (第215・216図)

番号	器種	丸瓦幅	丸瓦高さ	粘土	焼成	色調	備考
1	瓦塔	0.7	0.3~0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋天井部 一面116-23-10
2	瓦塔	0.7	0.3~0.4	CE	1	灰色	屋蓋 灰原111-25-9
3	瓦塔	0.7	0.3~0.4	CE	1	灰色	屋蓋軒先 トレンチ116-24-14
4	瓦塔			CE	1	灰色	屋蓋天井部 一面116-23-10
5	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋天井部 灰原114-24-24
6	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋軒先 灰原115-24-16
7	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋軒先隅部 灰原116-23-14
8	瓦塔	0.7	0.3	CE	1	灰色	屋蓋隅部 一面116-23-10
9	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋軒先 灰原111-25-9
10	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋軒先 灰原116-24-16
11	瓦塔	0.7	0.3	CE	1	灰色	屋蓋軒先 一面No.3390
12	瓦塔	0.7	0.3	CE	1	灰色	屋蓋軒先 灰原110-26-9
13	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋隅部 灰原115-24-16
14	瓦塔	0.7	0.4	CE	3	暗褐色	屋蓋 灰原114-24-21
15	瓦塔	0.65	0.35	CE	3	暗褐色	屋蓋天井部 灰原113-24-20
16	瓦塔	0.65	0.35	CE	3	暗褐色	屋蓋 灰原112-24-22

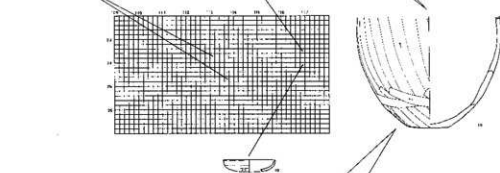
第217図 灰原跡出土土師器



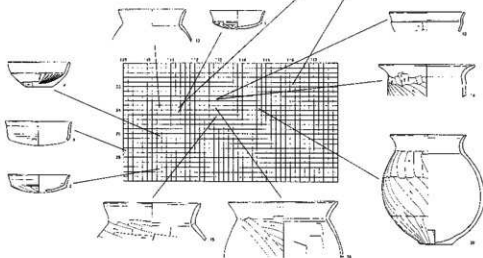
灰坑 5 - 灰坑



灰坑一室



灰坑二室



第34表 灰原跡出土土師器観察表 (第217図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(11.7)	3.8		EG	2	橙褐	50	二面No256
2	土師器杯	(13.0)	(3.7)		DEGH	2	橙褐	30	二面110-26-13
3	土師器杯	(14.0)	(5.1)		BCF	1	褐	5	二面109-25-16
4	土師器杯	(12.6)	5.2	5.4	ABCD	2	橙褐	40	二面110-25-3
5	土師器杯	(11.4)	(2.9)		BDFH	2	暗褐	10	灰原113-24-25
6	土師器杯	(9.8)	(2.7)		DG	1	赤褐	5	灰原115-24-24
7	土師器杯	(15.0)	(3.0)		BEFG	1	赤褐	20	灰原116-22-22
8	土師器杯	(11.9)	(2.9)		DEF	2	橙褐	10	トレンチ110-26-17
9	土師器杯	(10.7)	(3.0)		BDEH	2	橙褐	10	灰原111-23-8
10	土師器杯	(10.9)	(2.5)		CE	2	橙褐	10	一面116-24-5
11	土師器杯	(13.3)	(3.5)		BDEFH	2	橙褐	20	灰原115-23-24
12	土師器鉢	(15.8)	4.2		ABDG	2	暗褐	10	二面112-23-15
13	土師器鉢	14.0	6.8		BCE	2	淡褐	20	二面No258
14	土師器甕	(20.0)	6.8		ABD	1	褐	20	二面112-23-15
15	土師器甕	(20.0)	7.6		BDEGH	2	褐	10	二面112-24-10
16	土師器甕	(20.0)	9.1		BDEF	2	黒褐	20	一面No3070、灰原117-23-21
17	土師器甕	(18.6)	12.6		CDE	2	黒	40	一面113-24-19、No425・437、灰原110-26-9、112-24-24
18	土師器甕	(13.0)	11.7		BCDEH	2	橙褐	10	二面112-23-25
19	土師器甕		23.5	8.4	ABCD	2	褐	40	トレンチ110-24-15、113-24-15、一面116-22-19、二面No173、195、203、255
20	土師器甕	15.7	23.0	6.9	ABDG	2	褐	70	二面114-23-24

○ 土師器 (第217図1～20)

土師器は第217図に示した。出土状況については図示した。出土量は極めて少量であった。灰原跡の各面から検出されており、層位の大まかな様相が土師器においても推測できる。

1～11は土師器杯である。1～4は須恵器杯蓋の模倣杯である。いずれも、灰原二面からの出土である。

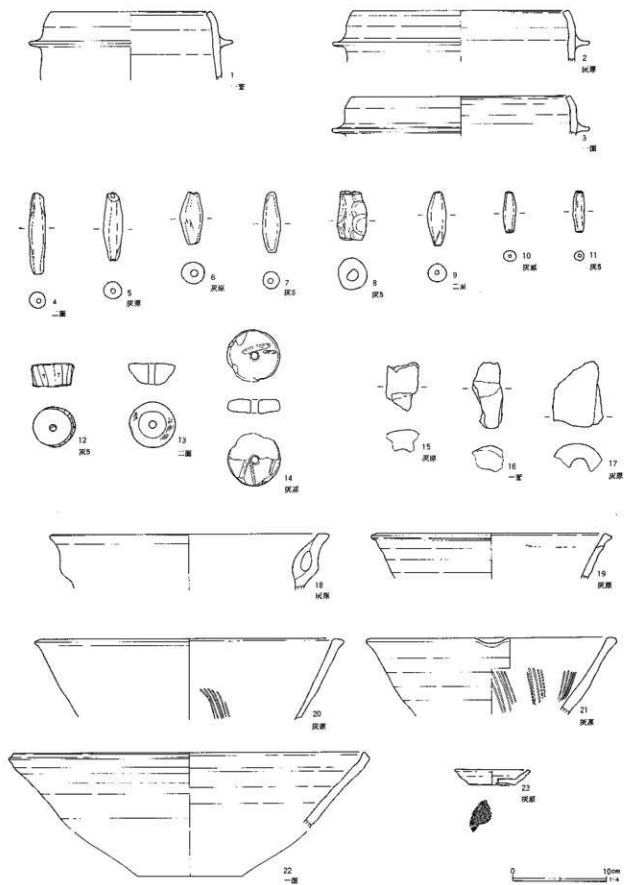
1は推定口径11.7cm、器高3.8cmである。底部は丸底で、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は逆「ハ」の字状に開く、2は口縁部分を二回にわたって横ナデを施す。その際に、上段の横ナデはやや器形を広げ弱い段をつける。二重口縁の形態である。推定口径13.0cm、器高3.7cmである。3は2に比較し口縁部分が長く器高を深くする。口縁部の形態は類似し、二重口縁である。4は製作途中の土師器の可能性が大きい。内面には放射状暗文が施文されている。口縁部は横ナデされ稜をもつ。しかし、底部は平底で、体部下端を軽く横ナデするだけの調整である。5は推定口径11.4cmとやや小型の模倣杯である。6は口縁部の破片である。推定口径9.8cmと小型の比企型杯である。器面の内外面に赤彩を施す。7、8は口縁部横ナデ、口唇部内側に

面をもち浅い沈線が巡る。体部は丸底で口縁部分まで横ナデが及ぶ。9～11は北武蔵型杯である。いずれも丸底で口縁部は内湾するが上方に立ち上がる。

12、13は鉢である。推定口径15.8cmである。13は小型の丸底の形態と推測される。胎土はきめ細かく粉っぽい。

14～20は甕である。14は器肉厚い。形態は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部で外傾に大きく開く。調整は口縁部横ナデ、胴部外面が斜め方向にかき上げるヘラケズリを施す。胎土は砂粒子多く器面がざらつく。15は胴部が球形に貼る丸甕である。口縁部は上方にやや外傾に立ち上がる。口唇部はつまみ上げられ、細く尖る。胴部外面は斜め方向のヘラケズリを施す。16は「コ」の字状口縁甕である。口縁部は指頭厚底を残す。胴部外面は横ヘラケズリを、内面は横ナデを施す。17は内外面黒色である。器面はクロロ目状の凹みがみられ、回転の弱いクロロ仕上と考えられる。18は15と同一個体の可能性もある。形態、焼成はほとんど近似する。20は底部平底で、胴部は球形に張りをもつ。胴部外面は中位と上位を上方に、下位を下方にヘラケズリしている。口縁部は外反に開き横ナデを施す。

第218図 灰原跡その他の出土遺物(1)

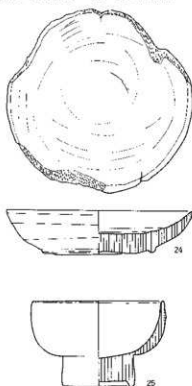


Ⅱ その他 (第218図1~23 第220・221図1~11)

1~3は羽釜である。形態は口縁部で内径に立ち上がる。鋳は水平方向に伸び先端は細い。4~11は土鍾である。8は太く粗い指ナゲ調整により形態がほかの異なる。12~14は紡錘車である。12と14は土製で須恵器と同様還元焼成されている。13は滑石製である。15~17は羽口である。17は須恵質である。

18~25は中世の遺物である。18は内耳鍋である。耳は口縁部から取り付く。内外面とも煤けており使用されていたものと考えられる。19~22はすり鉢である。20、21はすり目がみられ、21は片口部分が残存する。23はかわらけである。底部糸切り離しのロクロ成形である。推定口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.0cmである。24、25は木製品である。24は挽物皿である。底部は低い高台が削り出される。口径19.8cm、器高4.6cm、底径12.0cmである。25は漆碗である。器面には黒色漆が塗布されている。口径13.8cm、器高8.9cm、底径7.5cmである。2.6cmほどある非常に厚い底部は外面に短い高台部をもつ。

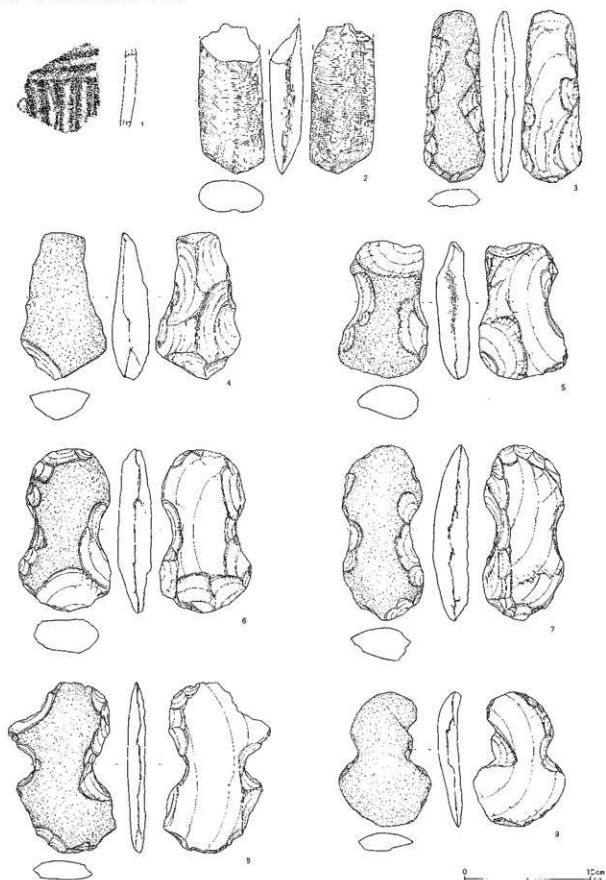
第219図 灰原跡その他の出土遺物(2)

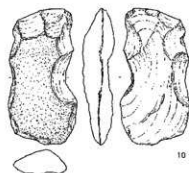


第35表 灰原跡その他の出土遺物観察表 (第218・219図)

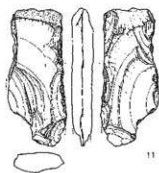
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	羽釜	(17.0)	7.2		ABD	2	黒褐	5	一面No.1279
2	羽釜	(22.8)	5.4		BCD	1	黒褐	5	灰原114-24-15
3	羽釜	(23.2)	4.2		CD	1	黒褐	5	一面115-24-6
4	土鍾	残存長8.6、幅1.75、口径0.5cm、重量24.38g						100	二面115-23-19
5	土鍾	残存長7.1、幅1.95、口径0.45cm、重量22.55g						100	灰原111-25-17
6	土鍾	残存長5.5、幅2.4、口径0.8cm、重量24.8g						100	灰原115-23-16
7	土鍾	残存長6.3、幅1.8、口径0.6cm、重量18.15g						100	灰5112-2-23-22
8	土鍾	残存長5.2、幅3.1、口径1.3cm、重量49.6g						100	灰5112-23-10
9	土鍾	残存長5.7、幅1.95、口径0.45cm、重量19.32g						100	二面114-23-24
10	土鍾	残存長4.3、幅1.35、口径0.35cm、重量6.78g						100	灰原116-24-10
11	土鍾	残存長4.4、幅1.0、口径0.4cm、重量5.6g						100	灰5113-23-16
12	紡錘車	口径4.4、径4.0、口径0.7、厚さ2.4cm、重量54.0g						100	灰5110-24-24
13	紡錘車	口径4.9、径2.9、口径0.75、厚さ2.2cm、重量69.47g						100	二面114-23-24
14	紡錘車	口径5.6、径5.3、口径1.0、厚さ1.5cm、重量39.0g						70	灰原フタ土
15	羽口	残存長5.1、幅3.4、口径2.6cm、重量27.41g						5	灰原113-24-19
16	羽口	残存長7.0、幅3.2cm、重量37.88g						10	一面No.242
17	羽口	残存長6.8、幅5.2、口径2.1cm、重量37.06g						20	灰原110-25-25
18	内耳鍋	(29.4)	5.9		CDE	2	黒	20	灰原115-24-25内外面煤付着
19	片口鉢	(25.4)	4.7		ADE	2	褐	5	灰原117-22-21
20	すり鉢	(32.8)	8.3		DE	2	褐	10	灰原117-24-11
21	すり鉢	(26.2)	7.9		CDE	3	褐	30	灰原116-24-20、117-24-7
22	すり鉢	(37.4)	7.9		ABDF	2	灰褐	10	一面116-22-25
23	かわらけ	(8.0)	1.6	(5.0)	BCD	2	橙	20	灰原116-24-15
24	挽物皿	19.8	4.6	12.0				80	北斜面
25	漆器碗	13.8	8.9	7.5				80	北斜面

第220図 灰原跡その他の出土遺物(3)





10



11



土器 (第220図1)

1～11は縄文時代の遺物である。1は縄文時代中期の上器で曾利系の深鉢の破片である。

石器 (第220図2～11)

石器は磨製石斧(2)、打製石斧(3～11)がグリッドから出土した。

2は、磨製石斧である。上半部を欠損する。研磨は全面に施され、横断面はレンズ状を呈している。刃部は再生によるためか、直線的で尖るようになっている。材質は点紋緑泥片岩で、大きさは長さ11.4cm、幅5.0cm、厚さ2.6cm、重さ277.95g、117-24-16グリッド出土である。

3～11は、打製石斧である。打製石斧はいわゆる短冊形、撓形、分銅形がみられる。3・11はいわゆる短冊形を呈している。

3は刃部の形状は円刃で、表面に磨耗痕が観察できる。調整加工は正面に原石面、裏面に分割面を大きく残り、周辺からの剥離によって整形している。材質は砂岩で、大きさは長さ13.3cm、幅4.9cm、厚さ1.7cm、重さ141.67g、116-23-20グリッド出土である。11は刃部を欠損する。外形は両側縁が概ね平行し、僅かに刃部に向かって広がっている。正面の基端部に原石面を残し、両面に分割面と思われる剥離を大きく残している。調整加工は周縁的に施されており、石材は砂岩で、大きさは長さ10.7cm、幅4.5cm、厚さ1.6cm、重さは107.99g、グリッド出土である。

4は撓形を呈している。正面の原石面からの剥離によって、横断面が厚手で藩錐状になっている。作りは粗く、表面の風化が進んでいる。材質はホルンフェルスである。大きさは長さ11.5cm、幅6.7cm、厚さ3.0cm、重さは213.94g、114-24-16グリッド出土である。

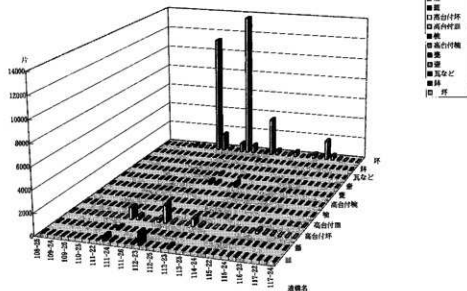
5～10は基部に挟りの入る、いわゆる分銅形打製石斧である。製作方法は、正面に原石面に裏面の分割面を大きく残り、調整加工は周縁的である点が共通する。基部の形態は、挟りの浅い5～7・10と、挟りが深い8・9があり、刃部側と基端側がほぼ同じ大きさの6～8・9と、刃部側が大きくなる5・9がみられる。刃部は平面形が概ね円刃となり、整形加工は正面に原石面・裏面に分割面で構成される5・9・10、両面に面的剥離が施される6、両面に周縁的剥離によって整形している8がみられる。石材は6・7・10がホルンフェルス、8・9は砂岩である。大きさは5が長さ10.7cm、幅6.9cm、厚さ2.6cm、重量は213.45g、113-24-12グリッド出土、6が長さ12.8cm、幅7.2cm、厚さ2.7cm、重さ302.30g、114-25-5グリッド出土、7が長さ13.7cm、幅6.3cm、厚さ2.7cm、重さ292.33g、粘土採掘坑群出土、8が長さ13.3cm、幅8.0cm、厚さ1.4cm、重さ196.81g、110-25-15グリッド出土、9が長さ10.4cm、幅7.2cm、厚さ1.5cm、重さ114.76g、115-24-11グリッドのトレンチ出土、10が長さ10.6cm、幅5.5cm、厚さ2.4cm、重さ156.99g、表採である。

第36表 灰原5出土遺物破片数計量表

(片)

遺物名	坏	皿	蓋	高台付坏	高台付皿	碗	高台付碗	甕	壺	瓦など	鉢
108-25	29	0	0	9	0	0	0	7	2	0	0
108-26	20	0	0	3	0	0	3	2	0	4	0
109-24	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
109-25	51	3	0	15	1	0	0	6	0	1	0
109-26	15	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0
110-24	173	7	2	41	0	0	0	7	1	0	0
110-25	129	9	6	24	0	0	0	4	0	0	0
110-26	56	6	23	12	0	0	0	51	12	0	1
111-22	40	1	0	6	0	0	0	4	0	0	0
111-23	11,296	438	189	1,052	2	0	0	0	0	0	0
111-24	1,592	125	6	331	0	0	0	0	0	0	0
111-25	170	32	14	94	1	0	0	0	0	0	0
111-26	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0
112-22	819	148	0	273	0	0	0	22	11	0	1
112-23	13,717	970	76	1,590	1	0	0	340	193	0	28
112-24	710	39	16	146	3	0	0	231	22	0	0
112-25	19	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
113-22	126	2	0	11	0	0	0	1	0	0	1
113-23	3,556	170	29	674	0	0	0	423	109	0	2
113-24	404	42	17	155	1	0	0	3	0	0	0
113-25	14	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0
114-23	143	4	1	29	0	0	0	10	0	0	0
114-24	423	21	19	72	1	0	0	0	0	0	0
114-25	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
115-22	93	10	1	20	0	0	0	0	1	0	0
115-23	369	14	2	75	0	0	0	0	18	0	1
115-24	213	15	15	64	0	0	0	1	0	0	9
116-22	1,839	51	6	270	0	0	0	0	1	0	0
116-23	386	23	11	125	0	0	0	0	0	0	1
116-24	130	14	6	84	0	0	0	0	0	0	2
117-22	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
117-23	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
117-24	4	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
灰原5破片数	36,547	2,148	442	5,193	10	0	3	1,112	370	5	46

灰原5出土遺物破片数計量表

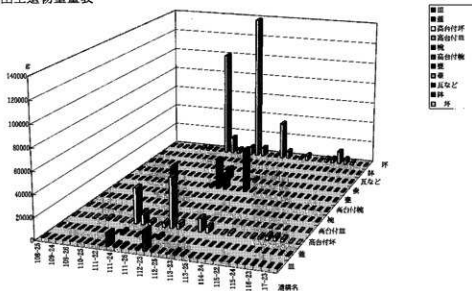


第37表 灰原5出土遺物重量表

(g)

遺構名	坪	土	土	高台付坪	高台付土	土	高台付土	土	土	瓦など	鉢
108-25	344	0	0	324	0	0	0	135	45	0	0
108-26	166	0	0	55	0	0	40	20	0	975	0
109-24	40	0	0	245	0	0	0	0	0	0	0
109-25	672	130	0	517	46	0	0	501	0	404	0
109-26	129	272	0	132	0	0	0	0	0	0	0
110-24	1,852	115	28	1,687	0	0	0	107	282	0	0
110-25	1,893	355	145	815	0	0	0	115	0	0	0
110-26	922	80	92	470	0	0	0	16,390	505	0	15
111-22	374	30	0	172	0	0	0	182	0	0	0
111-23	100,823	10,906	2,612	32,381	220	0	0	0	0	0	0
111-24	15,607	1,810	100	9,246	0	0	0	0	0	0	0
111-25	3,650	1,580	790	3,070	80	0	0	0	0	0	0
111-26	50	50	50	30	0	0	0	0	0	0	0
112-22	7,537	1,460	0	3,963	0	0	0	2,705	785	0	105
112-23	139,194	17,558	2,460	45,563	15	0	0	27,683	10,385	0	960
112-24	8,613	1,750	262	5,045	40	0	0	14,755	376	0	0
112-25	328	55	45	5	0	0	0	0	0	0	0
113-22	1,145	15	0	220	0	0	0	340	0	0	5
113-23	35,472	2,128	167	12,046	0	0	25	40,132	2,570	0	15
113-24	7,065	1,304	489	5,038	60	0	0	1,105	15	0	0
113-25	129	40	0	60	0	0	0	0	0	0	0
114-23	1,514	109	10	705	0	0	0	430	0	0	0
114-24	4,850	447	349	2,107	100	0	0	0	0	0	0
114-25	30	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0
115-22	760	190	5	420	0	0	0	0	60	0	0
115-23	3,132	239	9	1,125	0	0	0	0	393	0	45
115-24	3,755	667	315	1,948	0	0	0	310	0	0	767
116-22	11,931	636	25	3,748	0	0	0	0	10	0	0
116-23	4,627	837	185	3,602	0	0	0	0	0	0	95
116-24	2,416	559	130	2,450	0	0	0	0	0	0	215
117-23	35	0	0	120	0	0	0	0	0	0	0
117-24	52	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0
灰原5重量計	358,707	43,322	8,268	137,366	561	0	65	104,910	15,426	1,379	2,252

灰原5出土遺物重量表

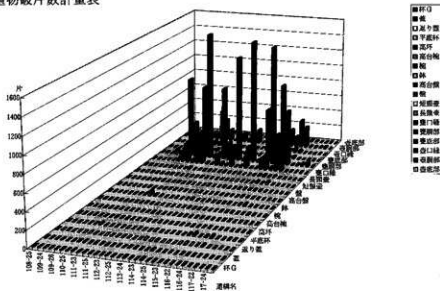


第38表 灰原跡出土遺物破片数計量表

(片)

遺構名	杯G	蓋	蓋り蓋	平底杯	高杯	高台陶	碗	鉢	高台盤	盤	短頸甕	瓦甕	甕			甕		
													口縁	胴部	底縁	口縁	胴部	底縁
108-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	1	0	1	0
108-26	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	1	1	0
109-24	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	0	4	0
109-25	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	37	1	1	0	0
109-26	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	36	0	3	17	0
110-24	4	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	31	142	4	6	30	1
110-25	0	5	3	14	0	1	0	2	3	4	0	0	135	979	10	25	51	2
110-26	7	5	0	0	1	0	0	5	1	6	2	2	74	424	4	14	61	1
111-23	0	0	0	0	0	0	0	47	0	0	0	1	31	300	15	48	371	21
111-24	3	4	0	2	0	0	3	12	1	0	0	13	84	891	5	34	259	15
111-25	0	0	0	0	0	0	0	5	2	6	0	0	193	1,569	22	25	132	4
111-26	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	8	26	0	0	6	0
112-23	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5	60	0	3	32	1
112-24	4	3	2	1	0	0	0	5	0	1	1	0	97	895	12	18	105	3
112-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	27	208	2	1	30	1
113-23	0	6	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	14	173	1	7	69	0
113-24	6	2	8	8	1	2	0	10	4	6	0	5	169	1,293	12	33	162	2
113-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	23	0	1	3	0
114-23	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	13	156	0	5	12	2
114-24	10	9	0	4	0	1	2	7	3	4	0	3	147	1,505	7	30	171	25
114-25	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	1	0	3	17	0	0	6	0
115-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	44	0	1	5	0
115-23	1	2	3	10	0	0	0	5	2	5	0	5	130	672	44	32	68	8
115-24	4	0	9	25	2	0	1	5	0	3	1	8	181	1,457	26	30	203	16
116-22	1	1	5	5	4	0	0	1	9	6	18	13	31	369	0	18	120	17
116-23	1	3	4	10	0	1	0	7	5	5	8	6	123	992	8	46	337	18
116-24	5	0	12	19	0	1	0	15	1	8	25	10	122	674	25	26	256	13
116-25	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	6	0
117-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	12	0	1	5	0
117-23	0	0	2	2	0	0	0	0	0	1	0	0	7	29	1	4	11	0
117-24	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	7	51	0	5	19	2
トレンチ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	6	0	0	2	0
計	50	42	51	107	9	6	6	134	32	57	58	69	1,651	13,077	200	418	2,553	152

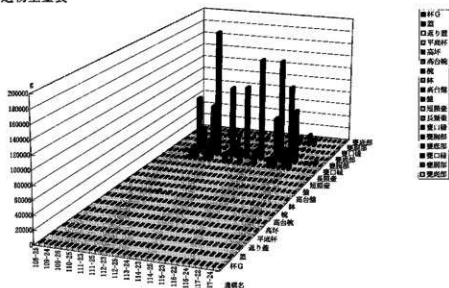
灰原跡出土遺物破片数計量表



(g)

道橋名	杯C	差	返り重	平込尺	高杯	高台幅	橋	鉢	高台壁	壁	短梁金	長頭金	壁			表		
													口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
108-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	320	18	0	41	0
108-26	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	781	0	150	42	0
109-24	0	0	40	0	0	0	0	0	0	0	25	0	250	0	0	0	80	0
109-25	7	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63	2,683	25	30	0	0
109-26	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	420	2,316	0	95	662	0
110-24	51	0	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	3,004	7,889	296	178	800	35
110-25	0	145	33	202	0	17	0	355	129	197	0	0	15,788	89,168	1,315	1,252	1,877	110
110-26	428	100	0	7	0	0	0	915	40	204	20	104	9,245	40,805	765	470	1,905	15
111-23	0	0	0	0	0	0	0	2,593	0	0	0	15	1,760	14,175	1,510	1,285	12,009	2,362
111-24	155	110	0	20	0	0	40	405	30	0	0	835	10,990	78,539	795	1,525	6,514	1,095
111-25	0	0	0	0	0	0	0	1,485	300	335	0	0	35,760	195,995	4,161	1,660	6,695	305
111-26	0	0	0	0	0	0	0	80	50	0	0	0	700	2,080	0	0	339	0
112-23	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	345	4,315	0	70	715	110
112-24	219	70	50	140	0	0	0	510	0	95	110	0	15,388	110,230	2,300	960	4,718	450
112-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	365	5,015	26,630	335	5	1,395	55
113-23	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,020	10,265	30	105	1,272	0
113-24	85	90	212	93	45	80	0	491	165	125	0	383	19,921	113,596	1,745	1,166	6,284	75
113-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	200	2,315	0	22	173	0
114-23	0	0	15	0	0	0	0	75	0	0	0	0	2,355	15,800	0	120	265	70
114-24	182	225	0	65	0	140	195	535	80	70	0	20	19,949	158,396	1,085	1,632	6,218	1,253
114-25	0	0	15	10	0	0	0	25	0	0	35	0	200	1,875	0	0	445	0
115-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	155	0	215	4,610	0	43	105	0
115-23	10	40	90	240	0	0	0	160	26	207	0	235	14,025	69,120	4,665	1,567	2,259	212
115-24	90	0	340	678	70	0	25	375	0	70	55	190	19,235	158,945	4,173	1,776	10,920	961
116-22	10	10	152	55	70	0	0	25	194	129	460	280	2,015	21,245	0	730	2,910	610
116-23	25	96	100	266	0	5	0	253	212	162	667	178	20,374	119,783	1,420	2,665	17,311	1,695
116-24	258	9	244	525	0	40	0	1,182	45	245	2,292	295	15,022	83,674	2,533	1,432	10,700	1,333
116-25	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	400	360	0	0	200	0
117-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	725	2,390	0	320	210	0
117-23	0	0	25	13	0	0	0	0	0	25	0	0	755	2,740	235	495	615	0
117-24	6	0	0	92	0	0	0	0	0	0	0	0	275	5,940	0	390	910	240
トレンチ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	30	370	0	0	65	0
計	1,532	958	1,318	2,459	207	282	260	9,476	1,271	1,881	3,819	2,920	215,218	1,347,800	27,406	20,143	98,638	11,161

灰原跡出土遺物重疊表



第40表 一面出土遺物破片数計量表

(片)

遺構名	杯G	蓋	返り蓋	平鉢	高杯	高台	碗	鉢	高台盤	盤	短頸蓋	長頸蓋	壺			甕		
													口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
108-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	1	2	0
108-26	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	13	0	0	4	0
109-25	2	0	2	5	1	0	0	2	1	0	0	2	21	291	0	9	53	0
109-26	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7	101	1	8	27	1
110-25	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	44	17	1	14	0
110-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	9	0	0	0	0
111-23	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	12	97	0	4	8	0
111-24	1	1	0	2	0	0	0	0	0	2	0	3	15	174	0	10	42	6
111-25	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	15	0	0	3	0
112-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	23	0	1	6	0
112-23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	23	0	5	6	0
112-24	3	0	1	1	0	0	1	1	1	4	1	1	30	254	3	20	53	2
113-23	5	2	0	5	0	0	3	5	8	7	5	1	94	833	0	8	86	2
113-24	11	0	2	1	0	0	0	11	3	8	5	9	202	1,174	2	33	200	4
114-23	4	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3	13	173	0	2	20	0
114-24	10	3	3	8	0	0	3	10	2	17	18	16	185	1,540	9	47	216	2
115-22	1	0	0	0	0	0	1	0	2	4	3	2	33	273	0	3	16	0
115-23	7	5	3	5	0	0	0	3	9	9	8	8	254	1,735	2	31	169	2
115-24	6	0	0	0	0	0	1	2	0	4	2	1	70	511	0	12	71	0
116-22	14	2	10	13	1	0	0	2	8	9	8	14	231	1,624	5	29	216	3
116-23	0	1	1	16	1	0	1	7	3	5	9	6	108	916	11	36	172	9
116-24	1	1	1	5	0	0	0	2	2	0	1	3	18	158	4	9	39	4
117-22	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	12	0	1	3	0
119-23	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	8	0	0	1	0
計	67	16	24	64	3	0	11	48	41	71	62	69	1,309	10,010	54	270	1,427	35

第41表 一面出土遺物重量表

(g)

遺構名	杯G	蓋	返り蓋	平鉢	高杯	高台	碗	鉢	高台盤	盤	短頸蓋	長頸蓋	壺			甕		
													口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
108-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	870	0	25	60	0
108-26	150	0	0	0	0	0	0	25	0	0	0	0	0	575	0	0	205	0
109-25	30	0	10	183	113	0	0	90	15	0	0	125	1,670	14,775	0	435	2,235	0
109-26	0	0	0	58	0	0	0	0	0	0	0	0	675	5,950	270	220	582	30
110-25	35	0	0	0	0	0	0	10	0	10	0	20	305	2,210	2,320	365	430	0
110-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	420	770	0	0	0	0
111-23	0	0	15	0	0	0	0	0	40	15	0	0	1,095	6,613	0	173	280	0
111-24	10	7	0	40	0	0	0	0	0	25	0	85	856	9,385	0	903	1,645	395
111-25	0	0	0	0	0	0	0	60	0	0	0	0	1,020	1,700	0	0	70	0
112-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0	0	540	2,080	0	40	265	0
112-23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	430	1,404	0	179	240	0
112-24	27	0	30	20	0	0	45	80	16	60	100	10	3,960	20,269	1,970	950	2,366	150
113-23	73	45	0	95	0	0	110	755	1,360	387	225	30	15,870	77,643	0	335	2,904	100
113-24	417	0	337	12	0	0	0	583	130	348	350	250	27,901	118,821	1,210	2,028	7,429	203
114-23	20	10	0	3	0	0	0	0	0	0	35	60	3,120	15,460	0	70	575	0
114-24	214	105	35	178	0	0	75	265	250	610	1,730	583	24,933	155,093	1,980	3,411	8,576	90
115-22	65	0	0	0	0	0	30	0	115	170	100	60	6,625	44,110	0	260	570	0
115-23	77	282	115	85	0	0	152	790	327	235	1615	38,729	244,450	460	2,444	7,728	563	0
115-24	145	0	0	0	0	0	20	140	0	155	67	20	16,310	77,805	0	700	3,385	0
116-22	217	45	343	325	20	0	0	360	421	352	154	571	47,640	233,875	520	2,310	9,615	225
116-23	0	30	80	202	20	0	165	310	105	116	1,343	105	23,930	113,314	1,137	1,963	7,756	523
116-24	70	40	55	105	0	0	0	31	95	0	120	145	2,341	15,854	215	940	1,788	305
117-22	0	0	0	0	0	0	0	344	0	0	0	0	1,155	10,340	435	262	325	0
計	1,550	564	1,020	1,306	155	0	445	3,135	3,347	2,600	4,499	3,641	218,645	1,173,566	10,517	18,146	59,169	2,496

第42表 二面出土遺物破片数計量表

(片)

遺構名	杯G	蓋	蓋り蓋	平底杯	高杯	高台碗	碗	鉢	高台盤	盤	短頸甕	長頸甕	甕			壺		
													口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
108-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11	0	0	4	0
109-25	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	4	30	0	1	2	0	0
109-26	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	15	0	1	1	0	0	0
110-23	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
110-24	2	0	2	0	1	0	0	1	0	0	0	8	42	0	0	9	0	0
110-25	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	16	0	1	0	0	0	0
110-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0
111-23	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	12	1	1	2	0	0
111-24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
111-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	1	0	0	0
112-23	2	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	23	144	0	5	9	0	0
112-24	1	1	1	0	0	0	3	0	7	0	4	53	392	0	13	43	1	1
113-23	2	1	0	0	0	0	1	0	5	5	0	83	478	0	9	26	0	0
113-24	2	0	1	0	1	0	0	2	1	4	0	47	275	0	5	39	0	0
114-23	2	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	13	165	0	1	23	0	0
114-24	2	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	18	93	0	8	28	0	0
115-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
115-23	3	1	2	0	0	0	1	0	7	0	5	48	473	0	16	53	1	1
115-24	0	0	0	2	0	0	1	0	1	0	1	54	266	0	8	45	1	1
116-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0
116-23	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	4	21	0	0	2	0	0
116-24	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0	0	10	72	1	1	18	0	0
計	19	7	6	2	6	0	15	7	29	11	10	369	2,538	2	70	305	3	3

第43表 二面出土遺物重量表

(g)

遺構名	杯G	蓋	蓋り蓋	平底杯	高杯	高台碗	碗	鉢	高台盤	盤	短頸甕	長頸甕	甕			壺		
													口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部
108-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	1,320	0	0	100	0
109-25	0	0	0	0	0	0	0	0	150	30	0	495	2,490	0	140	30	0	0
109-26	0	0	0	0	0	0	145	0	0	0	0	0	1,195	0	10	45	0	0
110-23	0	0	0	0	0	0	0	0	12	153	0	0	0	0	0	0	0	0
110-24	10	0	35	0	20	0	100	0	0	0	0	0	300	1,330	0	0	255	0
110-25	0	0	0	0	0	0	225	0	0	0	0	0	1,075	0	35	0	0	0
110-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	120	1,110	0	0	0	0	0
111-23	0	0	0	0	0	0	0	55	0	0	0	60	350	500	40	60	0	0
111-24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	75	0	0	0	0	0
111-25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,080	0	0	30	0	0
112-23	10	90	0	0	0	0	45	0	0	0	0	0	1,571	7,820	0	235	203	0
112-24	10	160	10	0	0	0	75	0	295	0	90	4,045	32,585	0	945	1,697	30	0
113-23	90	50	0	0	0	0	20	0	180	245	0	9,805	43,090	0	325	720	0	0
113-24	72	0	20	0	90	0	0	75	45	315	0	7,165	26,870	0	445	1,480	0	0
114-23	10	0	0	0	0	0	0	270	20	0	0	3,090	14,340	0	20	585	0	0
114-24	30	10	0	0	70	0	0	185	20	0	0	2,930	11,555	0	640	1,707	0	0
115-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90	0	0	0	0	0
115-23	75	5	55	0	0	0	100	0	280	0	90	4,150	60,698	0	1,035	1,868	50	0
115-24	0	0	0	45	0	0	95	0	50	0	30	8,035	27,483	0	345	2,400	95	0
116-22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,231	0	0	0	0	0
116-23	40	0	0	20	0	0	28	0	15	0	0	1,385	5,386	0	58	530	0	0
116-24	0	0	0	140	0	0	80	0	0	0	0	1,350	9,806	175	62	760	0	0
計	347	315	120	65	320	0	913	585	1,067	743	210	44,511	250,979	675	4,335	12,470	175	175

V まとめ

1. 生産器種と生産量

生産器種

末野遺跡の東側灰原跡からは大量の須恵器破片を検出した。このうち古墳時代末～奈良時代にかけての東側灰原跡からは、小型製品として、坏G、坏Gの蓋、平底坏（坏Aを含む）、かえり蓋（平底坏の蓋）、高坏、高台付坏（坏B）、碗、鉢、高台付盤（高台付盤・高盤）、盤、短頸壺、長頸瓶等である。大型製品として甕、壺が検出された。また、平安時代の第5号窯跡の灰原5からは坏、皿、高台付坏、長頸壺、壺が検出された。

東側灰原跡とした地点は「末野遺跡Ⅰ」（福田 1998）の古墳時代の窯跡である第1～3号窯跡の灰原を西側灰原跡と呼称した。これに対応して谷筋を変える本調査区の灰原跡を東側灰原跡とした。この東側灰原跡は、調査の際に層位によって分層発掘を試みた。その際に遺物を第5号窯跡の灰原層を「灰原5」とし、この層とは明瞭に区分できる灰原層の上層にあたる第6層に対応するものを「一面」、下層の第9層を主体とした層を「二面」とした。

生産された器種の中で、特徴的な器種について層位と各器種にみられる特徴を整理してみる。

まず、坏類については、第222図に示した様相が見られた。灰原跡からは坏G、坏A、坏Bが検出された。坏Gについてみると、二面出土の坏Gの調整はヘラ切り磨きママのものと、その後の底部調整に軽いナデを施すもの、外縁部を手持ちのヘラケズリ調整を施すもの、さらに、全体を手持ちのヘラケズリ調整するものが存在する。いずれも、未調整もしくはナデのものは小型で口径は、9.6～9.8cmである。手持ちヘラケズリのものは口径を測れるものが存在しないため不明である。底部の大きさや形態を比較すると、前者は、底径5.0～8.4cmで、丸底の形態を強くする。後者は6.2～9.9cmとやや大きく、平底の形態を意識している。

こうした傾向は次の一面の段階で新たな展開をみせ

る。ここには方向性が明らかに存在し、小型丸底気味の坏は古相と捉えられ、平底化した坏は新相としての要素がみられた。しかし、調整技法は二面でみられた手法に加え全面回転ヘラケズリという手法が加わり、いわば大型化した坏の調整技法としては、元に戻ったといえる。

灰原の段階ではさらにこれまでの調整技法に加え外周回転ヘラケズリ調整の坏が見られる。このことは従来の考えて示せば灰原層が純粋に時期を示唆するものでないことを暗示しており複合的な灰原の混合と言える。大きく全体の変化の方向性を見るに留まる。

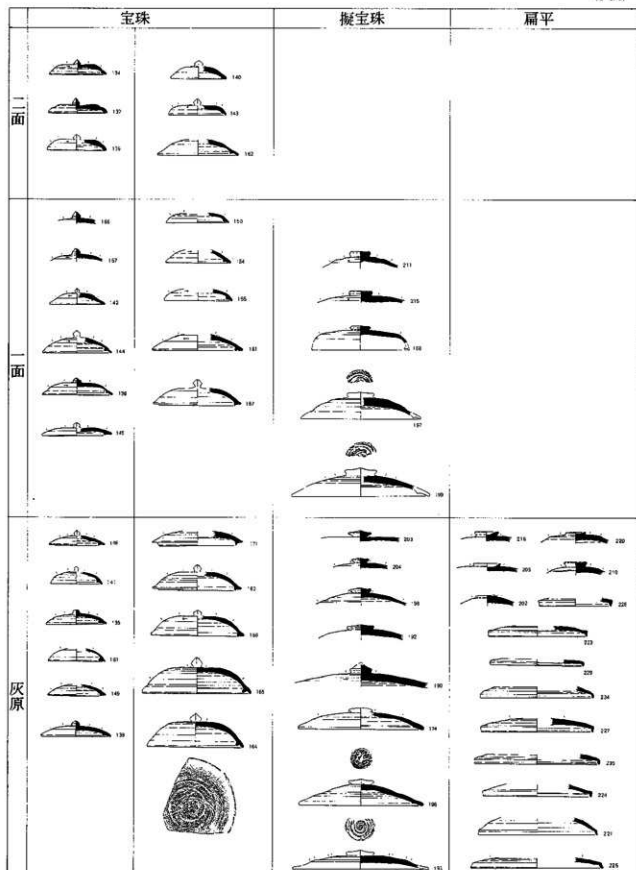
次に、蓋類については、第223図に示した様相が見られた。灰原跡からは坏Gの蓋、かえり蓋、無かえりの蓋が検出された。坏Gの蓋はいずれも宝珠形のつまみの付く蓋で「宝珠つまみ」と呼称される。二面から出土した蓋はいずれも法量が小さく、口径は、134と143が9.0cm、137と139が9.2cm、140が9.6cmである。かえりは短く口縁端部より内側に入る。天井部分に張りをもち、外面は回転ヘラケズリを施している。162は推定口径12.6cm、かえりの位置は口唇部から1.2～1.3cmとやや短いところにつく。かえりの形態は三角型でシャープである。

一面から出土した蓋は二面と同様小ぶりの蓋とやや法量を大きくする蓋が存在する。142は口径8.6cm、150は9.9cm、154は10.2cmで、かえりは短く口縁端部より内側に入る。天井部分に張りをもち、外面は回転ヘラケズリを施す。144、155は10.7～10.9cmとやや大きくする。かえりはやや長く口縁端部より内側に入る。また、口縁端部からかえりまでの幅がややある。天井部分に張りをもち、外面は回転ヘラケズリを施す。167はかえりが下方を向き、口径は13.9cmである。器種の大形化したものがあると考えられる。

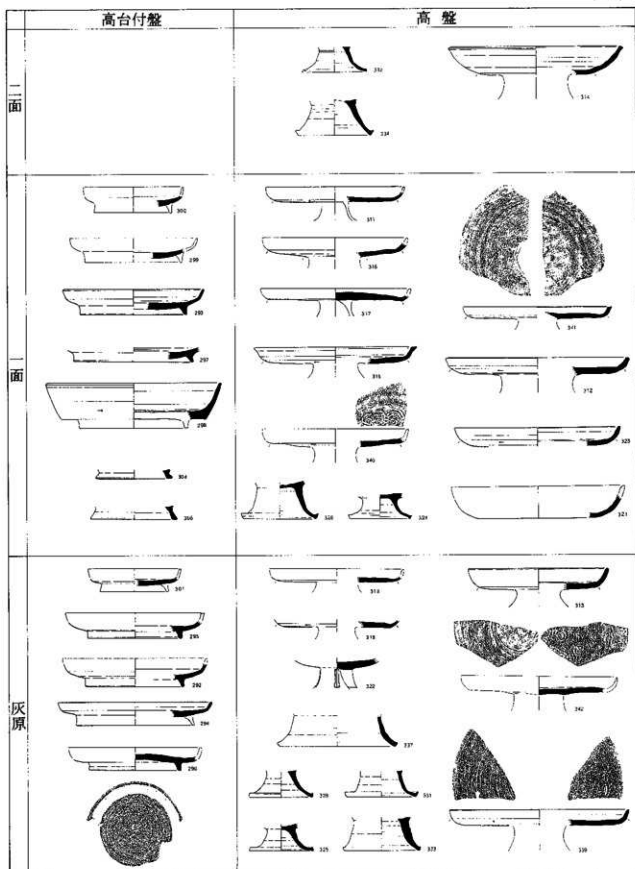
二面と大きく異なる点は擬宝珠つまみが見られることである。しかも、つまみの貼り付け方に「カキヤブ

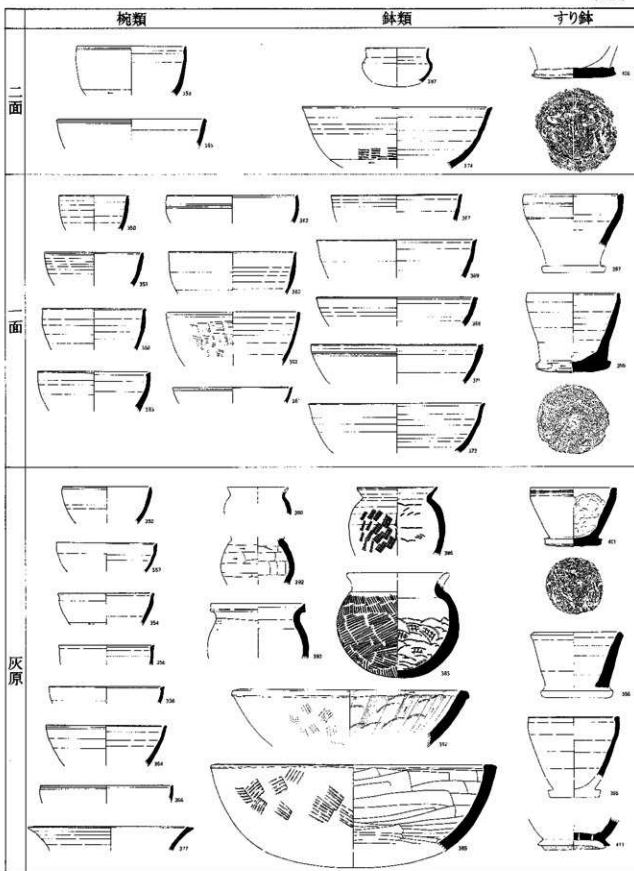
		ヘラ 起し			糸 切 り
		未調整	ナ デ	(外周)手持ちヘラズリ(全面)	(全 面)回転ヘラズリ(外 周)
二面					
					
					
					
一面					
					
					
					
灰原					
					
					
					
					
					
					
					

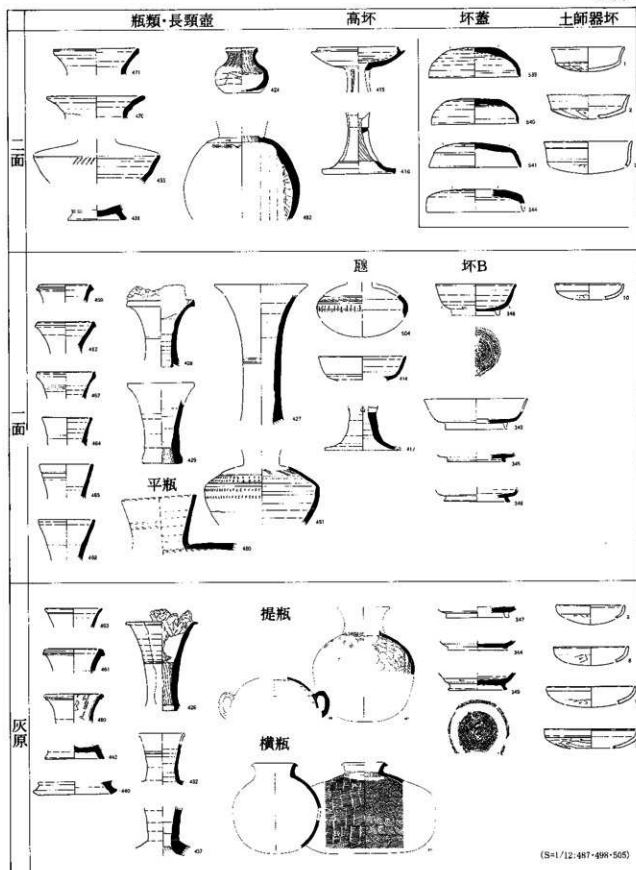
※生産器種(1)～(6)の遺物は、発掘調査時の出土層位にしたがって、そのまま図に掲載した

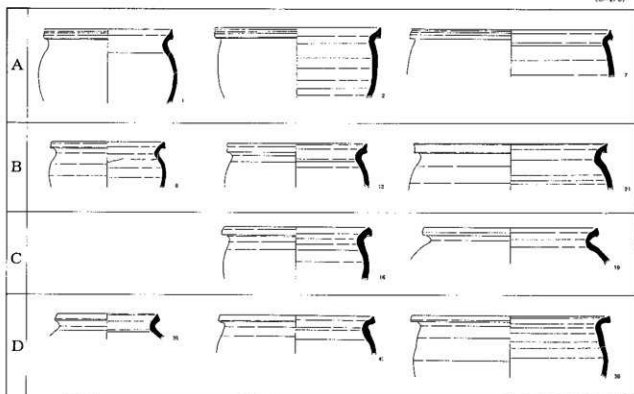


	回転ヘラケズリ	その他
一 面	 242	 243
	 244	 245
	 246	 247
一 面	 248	 249
	 250	 251
	 252	 253
	 254	 255
	 256	 257
	 258	 259
灰 原	 260	 261
	 262	 263
	 264	 265
	 266	 267
	 268	 269

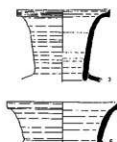








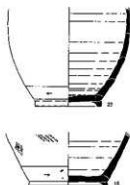
長頸壺



壺



甌



瓦



鉄鉢



リ」という手法を用いていることである。この手法は蓋の大井部外面にヘラによる切り込みを加え接着面を多くし貼り付ける手法である。

灰原から出土した蓋は、トレンチ出土の135と149である。135は、口径が9.5cmと小型でつまみは乳頭状である。かえりは短く口縁端部より内側に入る。また、口縁端部からかえりまでの幅がややある。天井部分に張りをもち、外面は回転ヘラケズリを施す。149は、口径が9.2cmでかえりは短く口縁端部より外側に出る。138は口径11.0cmとやや大ぶりである。宝珠つまみが残る。165は、口径17.5cm、天井部までの器高4.2cmと最も高い。天井は張りをもち口縁部は湾曲しながら伸び、わずかに外側に開く。口縁部の接地面よりかえりはわずかに内側に取り付く。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、大型化した蓋である。また、擬宝珠つまみはつまみ径を大きくする。192が4.3cm、203が3.5cm、204が2.6cm、205と209が4.0cmである。さらに、灰原で検出された202、206、216には、外周部分が高くリング状になり中心はナデつけられ平坦な扁平つまみが見られる。また、かえりをもたない無かえり蓋が検出された。この変化の段階は灰原層が重層的であることから極めて判断しにくい。口径が大型である点からして、全面回転ヘラケズリの環の出現時期と相関性があると考えられる。221は天井にやや張りがあり、口縁部の折り返しは爪先立ち状である。223は口唇部の折り返しは断面三角状でシャープである。224、225は口唇部爪先立ち状である。229、234は折り返す屈曲点は丸みをおびている。環と蓋のセットとしてのいわゆる「環蓋」の関係が環Gにおいても認められる。この関係は平底の環Aにおいても継続的にみられ、本来、環Bにみられる環蓋の関係とは明らかに異なる。木野遺跡において環Bの存在は、明らかに客体的である。ここに、工人あるいは製作集団の伝統性が残されている可能性を指摘できる。

盤の調整は口縁部から内面はナデを施す。底部外面は、環と同様の調整方法がとられている。大きく4種類に分けることができる。第一はヘラで切り離したマ

マの状態のもの、第二はナデ調整のみのもの、第三は手持ちヘラケズリを施すもの、第四は全体を回転ヘラケズリ調整するものがある。図示したものでみると、43点中二面からはママが2点、ナデが1点、手持ちが1点、回転が8点、一面からはナデ1点、手持ち7点、回転11点、灰原からはナデ3点、手持ち2点、回転5点であった。

形態は器高が浅く平底の大きな底部から体部に腰をもち短い口縁部が外傾に直線的もしくは内湾気味に立ち上がる。口唇部の上端には幅5mmほどの面をもつ。この形態は微妙に様々であり、法量の口径は、最小で260の12.0cm、最大で推定口径ではあるが254の36.0cmである。器高は244で2.1cm、275で4.1cmである。法量分化の存在はあると考えられるが、出土資料がいずれも小破片であり、推定口径にとどまり実体が不明瞭である。

高台付盤の形態は、盤に「ハ」の字状の低い高台を貼り付けたものである。調整は、底部回転ヘラケズリを施した底部外面に同心円状に切り込み(カキヤブリ)をつけて高台を貼り付ける。高台部は、ナデツケにより底部のやや内側に位置したところに貼り付けられている。形態もこのときに同時に整えると考えられる。

高盤の形態は、盤に「ハ」の字状のやや高い円筒形の脚部を貼り付けたものである。調整は、底部回転ヘラケズリを施した底部外面に高台を貼り付ける。高台部は、ナデツケにより底部の中央に位置したところに貼り付けられている。339、340、342を見ると底部内面に幾重もの背海波文の痕跡が認められる。底部外面は回転ヘラケズリを施す。

高台付環としたものは、いわゆる、環Bと呼称されている器種である。木灰原跡からの出土状況は第96図に示したとおりである。出土点数は極めて少なく生産器種としての存在は認められるものの、定量の生産とはいえない。木野遺跡の特徴として捉えることができる。

碗は、いずれも口縁部分の小破片である。碗としたものの多くは口唇部の外面に沈線をもち、体部の形態

が内湾気味に立ち上がるものである。

鉢に分類した器種は様々な形態が存在する。碗よりも法量の大きな鉢、灰原5からの出土である鉄鉢型土器、こね鉢、短頸壺とすべき小型丸底の鉢、平底の大型鉢などが出土している。

長頸瓶は、第106・107図に示した。口縁部形態には426に見られるような直線的に開いて立ち上がる素口縁のタイプと428に見られるような直線的に開いて立ち上がり口唇部に緑帯をもつタイプが存在する。

瓶類は459～478に掲載したがいずれも小片であるため全体の形態が不明瞭であった。口縁部には長頸瓶と同様に緑帯に沈線が巡るものと素口縁のものが存在する。

このほか平瓶、横瓶、提瓶などの器種も出土している。二面のガラスの最下層からは539～544の坏壺が出土し谷の開始時期を示唆させ、共存する土師器環は模倣環である。一面からは土師器環10の器高の浅い北武蔵型環が出土する。灰原からも北武蔵型環が出土する。

第227図は平安時代の生産須恵器である。鉢は口縁部の形態からA～Dの4種類に形態分類した。A類は、口縁部の側面の上端が凹み下端が膨らむタイプであ

る。B類は、口縁部の側面が全体に凹み口唇部の端部が下方に垂れず頸部から直線的に伸びている。C類は、口唇部の側面が全体に膨らむタイプである。D類は、口唇部の側面が平坦なタイプである。灰原5からはAとB類が多く検出されC類は少なく、D類の存在は認められなかった。一方、灰原からはBとD類が多くCは少なく、A類が認められなかった。このことはB類は共通性があるが、AとD類の関係は異なり、補完的関係性としてとらえ共生の存在とも考えられるが、時間的な形態変化として捉えることもできる。このほか灰原5・灰原からは長頸壺、壺、甕、鉄鉢型土器、瓦、瓦塔が出土している。

生産量

末野遺跡の東側灰原跡から検出した小型器種・壺・壺の総破片数は35,654片、総重量は3,569,390gであった。灰原出土遺物の全体量の中に占める割合は、小型器種が破片数で1,209片(約3%)、重量で53,333g(約1%)と極めて少量の生産である。壺も破片数で5,055片(約15%)、重量で226,740g(約6%)と極めて少量の生産である。これに対し、甕は破片数で29,210片(約82%)、重量で3,289,317g(約93%)と

(片)

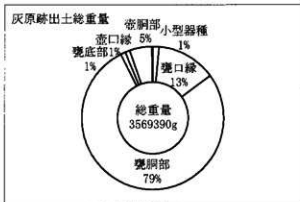
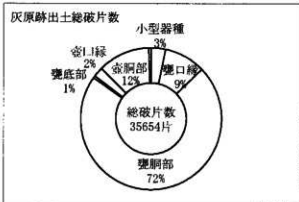
第44表 灰原跡出土遺物総破片数計量表

遺構名	小型器種	壺口縁	壺胴部	壺底部	壺口縁	壺胴部	壺底部	合計
二面	112	369	2,538	2	70	305	3	3,399
一面	476	1,309	10,010	54	270	1,427	35	13,581
灰原	621	1,651	13,077	200	418	2,555	152	18,674
総破片数	1,209	3,329	25,625	256	758	4,287	190	35,654

第45表 灰原跡出土遺物総重量表

(g)

遺構名	小型器種	壺口縁	壺胴部	壺底部	壺口縁	壺胴部	壺底部	合計
二面	4,685	44,511	250,979	675	4,335	12,470	175	317,830
一面	22,262	218,645	1,173,566	10,517	18,146	39,169	2,496	1,504,801
灰原	26,386	215,218	1,347,800	27,406	20,143	98,638	11,168	1,746,739
総重量	53,333	478,374	2,772,345	38,598	42,624	170,277	13,839	3,569,390



圧倒的に多量の生産がある。

甕は、東側灰原跡から出土した須恵器において総破片数の約82%、総重量の93%を占めた。甕の形態は大甕の破片が多く見受けられる。甕を中心とした生産が継続的に行われていた可能性が考えられる。

検出した遺物を層位ごとにみると、第44・45表のとおりである。下層の二面はいずれの器種も少ない出土で破片数は3,399片(約10%)、重量で317,830g(約9%)。中層の一面はいずれの器種も出土量が多く、破片数で13,581片(約38%)、重量で1,504,801g(約42%)。上層の灰原は小型器種・甕・壺の占める割合は多く破片数で18,674片(約52%)、重量で1,746,759g(約49%)である。ただし、二面、一面、灰原各面から出土した小型器種の占める割合は約3%といずれも同じであり、各灰層において、遺物の器種構成における生産比率の失敗率を同じと仮定すれば、どの段階においても同等の生産比率を保っていたものと考えられる。

一方、木野遺跡では古墳時代の須恵器を生産した第1～3号窯跡およびその西側灰原層から検出した須恵器を分析したところ総点数16,303点のうち甕が

91.5%を占めた。小型器種は提瓶1.36%、坏壺1.21%、壺・身不明の坏0.99%、坏身0.72%、甕0.36%、壺0.31%、不明1.19%などである。甕の生産量が圧倒的に多く認められ、報告者は甕の時期判断が不明で奈良・平安時代の遺物も灰原から出土しているため該地の所産の破片も多分に含んでいる可能性を指摘した上でその多くは古墳時代の可能性を考えている。また、甕の破片は大甕であることから占有率が高くなることは否めないとしながらも、生産における甕の優位性があると指摘している。

石川県湯屋古窯跡(木立他 1985)の分析によるとAⅠ支群では小型器種28%、甕63%、その他9%であった。口縁部計測法によれば甕は18%と少なく、小型器種の割合は82%である。AⅡ支群では小型器種38%、甕48%、その他14%であった。口縁部計測法によれば甕は10%と少なく、小型器種の割合は88%である。これに先行する時期のB支群1号窯跡も個体数の算定を行っており、個体識別法によると小型器種92%、甕8%であり、口縁部計測法によると小型器種90%、甕10%であった。

また、東京都多摩ニュータウンNo.342遺跡の第1号

第46表 灰原跡出土小型器種破片数計量表

遺物名	杯G	甕	返り蓋	平底杯	高杯	高台杯	碗	鉢	高台盤	盤	短頸壺	長頸瓶	小型器種小計
二面	19	7	6	2	6	0	0	15	7	29	11	10	112
一面	67	16	24	64	3	0	11	48	41	71	62	69	476
灰原	30	42	51	107	9	6	6	134	32	57	58	69	621
総破片数	136	65	81	173	18	6	17	197	80	157	131	148	1,209

第47表 灰原跡出土小型器種重量表

遺物名	杯G	甕	返り蓋	平底杯	高杯	高台杯	碗	鉢	高台盤	盤	短頸壺	長頸瓶	小型器種小計
二面	347	315	120	65	320	0	0	913	585	1,067	743	210	4,685
一面	1,550	564	1,020	1,306	155	0	445	3,133	3,347	2,600	4,499	3,641	22,262
灰原	1,532	958	1,318	2,459	207	282	260	9,476	1,271	1,884	3,819	2,920	26,386
総重量	3,429	1,837	2,458	3,830	682	282	705	13,524	5,203	5,551	9,061	6,771	53,333

灰原跡出土小型器種破片数



灰原跡出土小型器種重量



窯跡では周辺から出土した須恵器片を含めて総点数7,432点を数え、多種多様な器種が生産されている。器種別の割合は甕が3,136点で全体の40.20%。無台坏身・坏が1,542点で20.75%、坏蓋・蓋が1,440点で19.38%で全体の80%を超える。その他の小型器種が17.67%である。

東側灰原跡の小型器種については、第46・47表のとおりである。小型器種としたものは、坏G、坏Gの蓋、平底坏（坏Aを含む）、かえり蓋（平底坏の蓋）、高坏、高台付坏（坏B）、碗、鉢、高台付盤（高台付盤・高盤）、盤、短頸壺、長頸瓶である。小型器種の総破片数は1,209片、総重量は53,333gであった。

各器種の割合はグラフに記載したとおりである。破片数でみる限り、坏類は、坏G11%、平底坏（坏A）15%、であるのに対し、高台付坏（坏B）は0.5%と極めて少ない出土量である。蓋類は坏Gの蓋5%、かえり蓋（平底坏の蓋）7%、である。高坏は1%、碗は1%で、鉢は17%である。高台付盤（高台付盤・高盤）は7%、盤は13%である。短頸壺は11%、長頸瓶が12%である。明らかに、末野遺跡東側灰原跡から出土した須恵器は新器種の製品であり、律令的土器様式の

所産として捉えられる。この様相はこれまで調査されている一般的な集落ではあまり見られず、限られた遺跡への供給を指摘することができる。

また、末野遺跡の調査において第5号窯跡と灰原5とした第5号窯跡の灰原から大量の須恵器を検出した。灰原5から出土した遺物は総破片数と総重量を計量し第48・49表のとおりである。坏36,547片・358,707g、皿2,148片・43,322g、蓋442片・8,268g、高台付坏5,193片・137,366g、高台付皿10片・561g、高台付碗3片・65g、壺370片・15,426g、瓦5片・1,379g、鉢46片・2,252gであった。計量にあたっては、休部破片が坏、皿と高台付坏の区別が不明瞭であるためいずれも坏に分類し計量を試みた。このため坏の数値が圧倒的に多くなってしまった。

長頸瓶・壺は、破片数は370点、重量は15,426gである。平安出土遺物の中に占める割合は破片で1%、重量で3%であった。

鉢は、破片数は45点、重量は2,252gである。平安出土遺物の中に占める割合は破片で0.1%、重量で0.3%で極少量の生産である。このほか、灰原から瓦、瓦塔を検出している。

第48表 平安出土遺物破片数計量表

(片)

遺物名	坏	皿	蓋	高台坏	高台皿	碗	高台碗	壺	壺	瓦など	鉢	平安計
灰原5	36,547	2,148	442	5,193	10	0	3	0	370	5	46	44,764
一面	1,308	110	29	442	0	0	0	0	0	0	0	1,889
二面	101	6	0	30	0	0	0	0	0	0	0	137
平安総破片数	37,956	2,264	471	5,665	10	0	3	0	370	5	46	46,790

第49表 平安出土遺物重量表

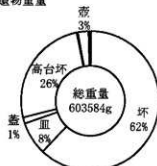
(g)

遺物名	坏	皿	蓋	高台坏	高台皿	碗	高台碗	壺	壺	瓦など	鉢	平安計
灰原5	358,707	43,322	8,268	137,366	561	0	65	0	15,426	1,379	2,252	567,346
一面	14,395	2,834	629	16,177	0	0	0	0	0	0	0	34,035
二面	1,194	200	0	809	0	0	0	0	0	0	0	2,203
平安総重量	374,296	46,356	8,897	134,352	561	0	65	0	15,426	1,379	2,252	603,584

平安出土遺物破片数



平安出土遺物重量



2. 口縁部形態に見る変化—甕・壺を中心として—

甕は多様性があり、バリエーションがみられ、法量、形態、成形、胎土、装飾などの点において様々である。甕は、口縁部の破片を第138～172図1～320に図示した。

口縁部の形態を基に分類し、18種類にわたる。分類の対象となった資料は636点におよび、二面出土資料が73点、一面出土資料が260点、灰原出土資料が263点、灰原5出土資料が19点、灰原跡トレンチ出土資料が21点である。この内、実測掲載資料は320点である。本分類は、甕の口縁部分類と共通性が多く認められる。焼成はいずれも良好で、胎土も緻密なものが多い。

分類基準について簡単に示すと、緑帯部分の両端に沈線が2本巡る「沈線上下二本」。緑帯部分に沈線2本を巡らす「沈線二本」。口唇部が丸く緑帯部分に沈線を1本巡らす「沈線一本丸型」。口唇部が四角く緑帯部分に沈線を1本巡らす「沈線一本角型」。緑帯部分から凹む「凹型」。口縁部外面に粘土紐を貼り付けた隆線で突帯

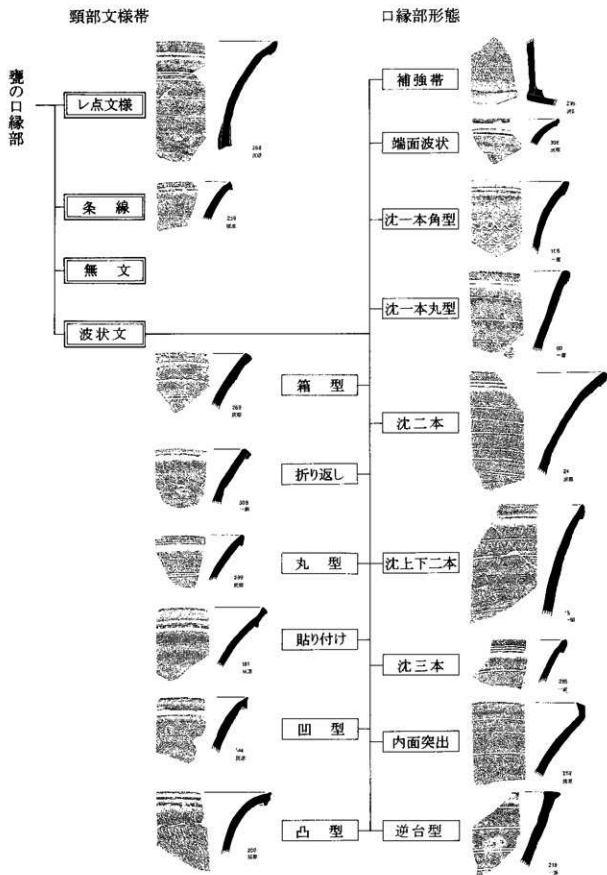
風である「貼り付け」。緑帯部分が膨らみ上下の指頭正痕により突出する「凸型」。口唇部先端が断面扇状に開き端部に平坦面をもつ「逆台型」。頸部に断面四角い補強帯をもつ「補強帯」。頸部に縦方向の櫛歯きの装飾を施す「条線文様」。口唇部が内傾に内湾する「内面突出」。頸部に「レ」点文様の装飾をもつ「レ点文様」。口唇部が角柱状になっている「箱型」。緑帯部分に沈線3本を巡らす「沈線三本」。口唇部が丸い「丸型」。口縁部の緑帯部分に波状文様を施す「端面波状」。口唇部が外側に折り返されている「折り返し」。その他の形態である「その他」。以上の甕の口縁部は波状文をはじめいずれかの文様を装飾している。

形態分類した甕の口縁部の出土破片数は、灰原5、灰原、一面、二面の各層位ごとに甕の口縁部形態分類表に示した。出土状況および接合関係については第131～137図に示した。形態と出土層位を比較してみるといくつかの傾向があることに気づく。第一は、多く

第50表 甕口縁・壺口縁部形態分類表 (破片数)

形態	二面	一面	灰原	灰原5	トレンチ	合計
補強帯装	0	4	0	2	0	6
条線	4	3	6	0	2	15
「レ」点文様	1	2	9	1	1	14
端面波状	0	0	1	1	0	2
沈一本角型	26	54	38	6	2	126
沈一本丸型	7	40	14	1	2	64
沈二本	12	42	20	3	3	80
沈上下二本	5	17	14	0	1	37
沈三本	3	7	4	0	0	14
内面突出	3	1	4	1	0	9
逆台型	2	17	16	0	0	35
箱型	2	14	11	0	1	28
折り返し	1	6	3	0	0	10
丸型	2	21	27	1	3	54
貼り付け	1	10	33	0	4	48
凹型	0	17	42	1	0	60
凸型	1	2	18	2	2	25
その他	3	3	3	0	0	9
三角型	0	0	0	0	0	0
沈一本凹み	0	0	0	0	0	0
合計	73	260	263	19	21	636

形態	二面	一面	灰原	灰原5	トレンチ	合計
補強帯装	0	0	0	0	0	0
条線	0	0	0	0	0	0
「レ」点文様	0	0	0	0	0	0
端面波状	0	0	0	0	0	0
沈一本角型	2	6	3	0	0	11
沈一本丸型	7	18	11	2	0	38
沈二本	2	12	6	1	1	22
沈上下二本	0	5	3	1	0	9
沈三本	0	0	0	0	0	0
内面突出	1	0	5	0	2	8
逆台型	0	0	0	0	0	0
箱型	0	11	9	0	2	22
折り返し	0	0	0	0	0	0
丸型	10	28	23	0	3	64
貼り付け	0	0	0	0	0	0
凹型	4	12	21	2	2	41
凸型	2	2	6	3	0	13
その他	0	6	4	1	0	11
三角型	4	7	34	0	1	46
沈一本凹み	1	2	7	0	2	12
合計	21	57	95	6	8	187



第51表 壺口縁部形態と段数・沈線の関係表

(片)

計	不明	6段	5段	4段	3段	2段	二面	一面	灰原	0本	1本	2本	3本	不明	計
6	6	0	0	0	0	0	輪強母線			0	0	5	0	1	6
12	12	0	0	0	0	0	矢線			0	0	11	0	1	12
12	10	0	0	1	1	0	「レ」点文様			2	0	8	0	2	12
2	2	0	0	0	0	0	輪面波状			0	0	1	0	1	2
56	34	1	2	7	9	3	沈一本(角型)			12	37	6	0	1	56
27	20	0	2	2	2	1	沈一本(丸型)			7	16	3	1	0	27
35	24	2	3	1	5	0	沈二本			9	20	5	0	1	35
17	13	0	2	2	0	0	沈上・下二本			5	9	1	0	2	17
5	5	0	0	0	0	0	沈三本			0	4	1	0	0	5
6	5	0	0	0	0	1	内面突出			0	3	2	0	1	6
24	21	0	0	2	1	0	逆古型			1	11	10	1	1	24
14	14	0	0	0	0	0	箱型			9	3	1	1	0	14
3	2	0	0	0	1	0	折り返し			3	0	0	0	0	3
18	15	0	1	1	1	0	丸型			11	1	5	0	1	18
31	29	0	1	1	0	0	貼り付け			13	10	3	0	5	31
28	20	0	1	3	3	1	凹型			18	6	3	0	1	28
12	10	0	2	0	0	0	凸型			11	0	0	0	1	12
3	2	0	0	1	0	0	その他			0	1	0	0	2	3
311	244	3	14	21	23	6	計			101	121	65	3	21	311

の形態が壺の口縁部形態と類似性がある。しかし、壺の口縁部形態にみられない沈線三本、逆古型、貼り付け、折り返しの形態が存在する。第二は、沈線一本丸型、沈線一本角型、沈線二本は二面および一面に多く検出し、灰原面がやや少ない出土である。この傾向は口縁部に沈線を加えることが古相としての伝統的な要素を含んでいる可能性が考えられる。第三は、凹型、凸型、貼り付けは二面、一面よりも灰原出土が多い傾向の見られるものであり新相としての要素を含んでいる可能性がある。

壺はかなりのバリエーションがみられる。法量、形態、整形、装飾など様々である。そこで、口縁部の形態を基に分類し、12種類にわたる。焼成はいずれも良好で、口縁部が開くことから自然釉が口縁部内面に付着するものが多い。

形態分類した壺の口縁部の出土破片数は、灰原5、灰原、一面、二面の各層位ごとに壺口縁部形態分類表に示した。形態と出土層位を比較してみるといくつかの傾向があることに気づく。第一は、いずれの形態も壺の口縁部形態と類似性がある。しかし、最も出土点数の多い三角型は壺の口縁部形態には存在しないことである。第二は、丸型、沈線一本丸型、沈線一本角型、沈線二本は二面および一面に多く検出し、灰原面がや

や少ない出土である。この傾向は口縁部を丸く作ること、さらに沈線を加えることが古相として要素を含んでいる可能性が考えられる。第三は、三角型、凹型、沈線一本凹型、凸型は二面、一面よりも灰原出土が多い傾向の見られるものであり新相としての要素を含んでいる可能性がある。製造りと壺造りの問題でもある。

次に、壺の口縁部の形態と沈線や波状文の構成による文様帯の段数について観察する。段数は2段から5段までの構成要素をもっていた。この中で仮に3段区画が構成的な構成要素と考える。これは、先の「末野遺跡Ⅰ」の分析結果として区画は2本の沈線によるもので長い口縁は3区画、短い口縁は2区画が最も多いと指摘している。この基準に立てば3段区画を中心に前後の様相を比較してみる。

末野遺跡東側灰原跡から検出した壺の口縁部311点について段数の構成を分析してみた。その結果、口縁部から頸部まで残存し段数の構成が確認できたものが67点であった。これらは、2段から6段までの存在が見られ、2段が6点、3段が23点、4段が21点、5段が14点、6段が3点であった。先に示したとおり、古墳時代の壺の口縁部が3段を主体とすることから形態別に3段を規範の中心として考えると、3段構成が主体となる形態は「レ」点文様・沈線二本である。また、

第52表 頸口線の形態と櫛歯の関係表

(4)

分 類	0本	1本	2本	3本	4本	5本	6本	7本	8本	9本	10本	11本	12本	不明	計
補強帯	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	2	6
条線	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
「レ」点文様	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
端部波状	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
沈一本(角型)	3	1	1	7	3	7	15	10	5	1	2	1	0	0	56
沈一本(丸型)	2	0	1	2	7	3	3	3	2	3	0	0	0	1	27
沈二本	0	1	1	4	2	8	7	4	2	4	1	0	0	1	35
沈上下二本	2	1	1	1	1	1	2	3	1	1	1	1	1	0	17
沈三本	0	0	0	2	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	5
内面突出	2	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	6
逆台型	0	0	0	4	6	6	2	2	0	3	0	0	0	1	24
箱型	1	0	2	2	3	2	2	1	1	0	0	0	0	0	14
折り返し	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	3
丸型	1	0	4	2	7	0	1	0	0	1	1	0	0	1	18
貼り付け	1	0	0	2	1	1	6	3	6	3	3	0	0	5	31
凹型	2	1	1	2	2	1	6	4	6	0	1	1	1	0	28
凸型	1	0	0	0	0	2	0	1	6	2	0	0	0	0	12
その他	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3
計	27	4	11	28	33	35	46	33	30	19	10	3	2	12	293

3段構成を持ちながら2段あるいは多段の構成要素を持つものは、凹型・沈線一本角型・沈線一本丸型である。さらに、3段構成を持ちながら多段の構成要素を持つものは、丸型・逆台型である。そして、3段は認められず4・5段の多段の構成要素を備えるものは、沈線上下二本・貼り付け・凸型である。

このことから、明らかに形態差により段数の変化のあるものが捉えられた。一方、沈線一本(角・丸型)や沈線二本などに見られる5・6段はその多く17点中16点が沈線区画をもたない装飾による段構成である。2段構成のものは区画線を持つものが6点中4点で見られる。これは、これらの形態が長期にわたって連続的に生産されていた可能性が指摘できる。

次に、頸の口縁部の段を区画する沈線について観察してみる。口縁部の頸部には波状文などの文様を装飾する。その際に、沈線によって区画を施すが、その沈線が1本区画なのか、2本一単位、あるいは3本一単位であるのかを見た。その結果、311点中、290点について観察し、区画線を持たないものが101点、1本線による区画が121点、2本が65点、3本が3点であった。これらを、形態ごとに見ると、2本を主体とするものは、「レ」点文様・条線文様・端部波状・補強帯としたものである。1本を主体とし0本・2本が認めら

れる形態は沈線一本角型・沈線一本丸型・沈線二本・沈線上下二本である。1本を主体としながらも2本をもつ形態は沈線三本・内面突出・逆台型である。また、沈線区画をもたない0本を主体とし1本・2本をもつ形態は箱型・丸型・貼り付け・凹型である。さらに、0本のみの形態は凸型・折り返しである。

このことは2本の区画線を一単位とするものを占相とし、1本を中間的介在要素とし、0本が漸相とすることができ、層位による出上率がこうした方向性を示していることと共通性がみられ形態分類と沈線区画の本数と相関関係がはっきりと見て取れる。

さらに、区画の中に、装飾される波状文の櫛歯の本数を観察した。その結果、311点中297点について観察し、区画の中に文様を施さない0本が40点、櫛歯1本が4点、2本が11点、3本が28点、4本が33点、5本が35点、6本が47点、7本が34点、8本が30点、9本が20点、10本が10点、11本が3点、12本が2点であった。櫛歯の本数は1～12本まで存在した。櫛歯の平均的な本数は6本となり、その前後が4～8本の範囲に約70%が占める。これを分類した形態別に見ると主体となる本数に偏差が認められた。まず、平均的な6本を主体とする形態は沈線一本角型である。前後の7・5本の様相は、7本を主体とする形態が沈線上下二本と

折り返しである。5本を主体とする形態が沈線二本・内面突出・逆台形である。この逆台型は4本にも同数の主体をもつ。また、4本に主体をもつものは、丸型・逆台型・沈線一本丸型・箱型である。一方、8本に主体をもつものは、貼り付け・凹型・凸型であった。

さらに、注目すべき点は各形態の中に1～12本の歯を全てもつ形態の存在と、ある本数部分の歯に集中する形態が存在することである。全ての歯を所有する形態は沈線上下二本である。また、1本が12本といった一部の歯をもたない形態としては、凹型、沈線一本角型・沈線二本が存在する。一定の本数に集中するものは凸型である。

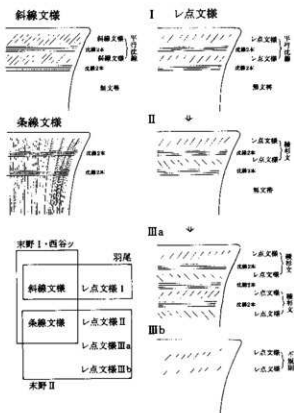
以上、甕の口縁部形態と段数、区画沈線の単位、そして、波状文様の歯の本数との関係について検討した。これらの類型を比較した結果、条線および「レ」点文は古い要素を残した形態とすることができた。次いで、段数が3段から4段へと変化の方向を持ち、区画線の本数も2本から1本へ、そして0本へと変化していると考えられる沈線一本（角・丸）、沈線二本、沈線三本は二面から灰原層に至るまで検出されている。このことから長期にわたり生産されその中で甕口縁部の構成要素を変化させたものと考えられる。最も新しい要素としては区画線をもたず、5段構成のみられた凸型である。この間に形態の多様化が認められ中間期の古相としては沈線上下二本、逆台形が存在し、新相としては箱型、丸型、貼り付け、凹型が存在する。

以上、甕の口縁部形態についての様相について捉えた。各要素が時間軸の中でどの程度の幅と変化の方向性に妥当性があるのかはまだ十分識別することができなかった。しかし、末野遺跡東側灰原跡から出土した甕の分析を通して得た結果である。

ここで、レ点文様とした甕について検討を加えてみる。この種の甕は、14点検出した。その文様構成をみると、沈線二本区画綾杉文・無文帯が変化する。

陶邑MT85号窯跡には粗い斜め方向のへら描きが同じ左下がりの方向に二段施文されている。TK312号窯跡、TK116号窯跡、SIN上層灰原などでも同様

第230図 レ点文様の変遷図



の手法がみられる。湖西窯跡群の加賀山第2地点2号窯の灰原からは斜め方向のへら描き文様と粗いハケ目文様が検出されている。陶邑や東海地域でへら描き文様が認められた。埴下県内では羽尾窯跡から12のへら描き（斜線文様）と13のレ点文様が出土している。注目すべきは両者が共存することであるが、それに加え、同じ左下がりの方向に二段施文され三段目は無文帯である。そして、区画線は2本一単位の沈線区画をもつことである。これと全く同じ文様帯をもつ甕が坂戸市西谷ッ窯跡から出土している。そして、「末野遺跡I」からは小破片であるため同じ文様帯をもつか不明であるが同じ左下がりの方向に二段施文され、2本一単位の沈線区画をもつ甕が出土している。

「末野遺跡II」からはへら描き文様の甕は検出されず、レ点文様とした文様帯である。これは、267が異なった方向の綾杉状に二段施文され三段目は無文帯である。266は綾杉状に四段施され頭部最下端の無文帯は喪失している。いずれも、沈線2本区画の中に左下がりの右下がりの順に綾杉状のレ点文が施文されている。

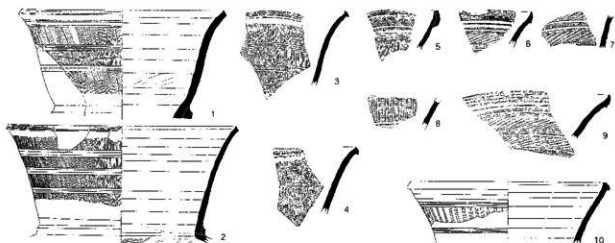
さらに、263、265は沈線区画が消失し、レ点文の施文帯が乱れて方向性を失い、259は右下がりからの施文である。羽尾窯跡出土の13の釜にみる文様帯は末野遺跡IIにおいて大きく変化していることが理解できた。

条線文様についてみると陶器TG17号窯跡、KM28号窯跡、6世紀前半から後半にかけて静岡県袋井市衙門坂3・4号窯跡をはじめ埴輪を併焼している。条線文様の施文構意はハケ状工具の条線を縦方向に器面全

体に施文しその後、横方向の2本一単位の沈線区画を施す手順である。こうした施文手順は2本一単位の沈線区画で割り付けただ中にレ点文様や波状文様といった装飾文様を施文する手順とは異なり、円筒埴輪の施文手順と共通性を伺わせる。須恵器製作の文様帯にみる沈線区画を守りながらも刷毛の手法を取り込んだ構造をここにみることができる。大量に検出された大甕の生産は古墳時代からの伝統的な製作方法を忠実に表現

第231図 甕の口縁部文様(I)

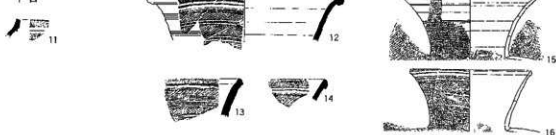
末野 I



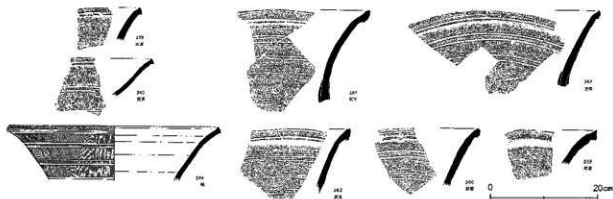
羽尾

西谷ッ

平谷



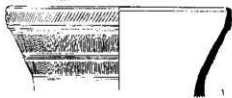
末野 II



第232図 甕の口縁部文様(2)

陶邑

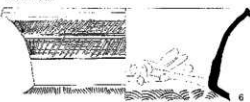
KM28-1号窯



TK312号窯



MT85号窯



TG17号窯



SIN F. 層灰層



牛頸窯跡群

後田 46-1号窯



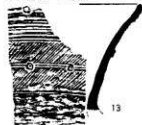
小田浦 40-1号窯



平山 E-1号窯

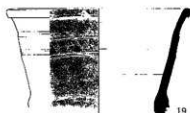
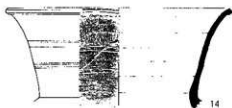


小田浦 38-1号窯



湖西窯跡群

西笠子第64号窯



加賀山第2地点2号窯(灰原)



0 20cm

した初期の段階から古相的手法を残しながらも頸部の接合法に装飾的な補強帯をもたず、ナデツケ接着優先の技法に変化し、また、頸部の文様構成に変化を与え、口縁部の形態も多様化させた。そこには、大甕の量産と伝統的な工人集団の様相を越えた多勢による生産活動が展開された可能性がある。

さらに、大甕が当時の律令社会の整備において必要不可欠のシンボリックな存在であったと考えられる。

3. 平安土器のくせ（形態的特徴）

東側灰原跡からは平安時代9世紀後半の須恵器を大量に検出した。これは、第5号窯跡で生産された須恵器とその灰原である灰原5とは別の窯によって生産された遺物の灰原である。つまり、出土した平安時代の須恵器には第5号窯跡、灰原5、灰原の三者の遺物が存在することになる。そこで、本項では、まず問題点として、1～5について考えてみる。第1点は5号窯出土遺物と灰原5出土遺物の整合性について、第2点は先に指摘した三者の様相について、第3点は他の遺跡出土遺物との比較について、そして、第4点は末野遺跡第5号窯跡の位置付けについて、第5点は平安時代の須恵器生産のあり方についてである。

これらの問題を解明する手法として、調査時における出土遺物の原位置を基として、第5号窯跡、灰原（灰原・一面・二面）とした出土状況を重視する。ここでは平面的分布と灰原の堆積層を考慮することから、遺物の種別を分離し、遺物個々に帰属を明らかにすることが比較の第一歩とした。

さらに、個々の遺物の形態を分類し、形態差の存在を位置付け各遺跡出土遺物の量比をみることにした。その結果、形態差がどのような意味をもつか吟味し、その存在形態を探ることによって製作技術の問題へと深めることとする。そこには、底部円柱糸切り技法の妥当性とこの技法によって生じたと考えられる底部形態の差を分類し、問題点の分析手法とした。

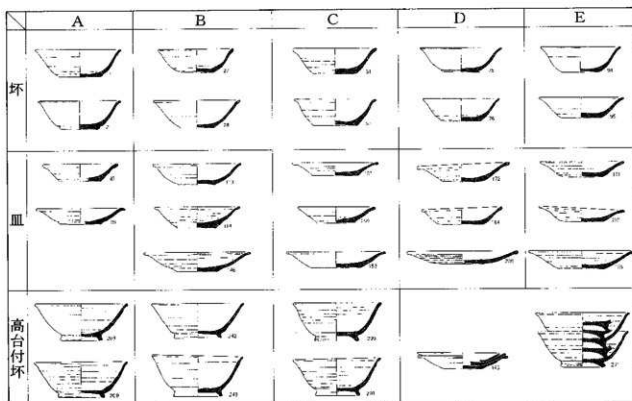
灰原5出土遺物は、第51～62図に示した。実測した個体は坏96個、皿109個、高台付坏91個である。出土遺物は、器種ごとに形態が特徴を観察し分類した。分類

の当時、堅穴住居跡からの検出例は少なく、使用の目的は、在地首長層が新たな地域社会の編成と集約を淘汰する一つのステイタスとして存在し、この大甕に象徴されていたと考える。新たな計画村落の出現、官衙整備の開始、郷里制の支配機構、条里制の施工と開墾など大甕の所有そのものが首長としての象徴であったのではないだろうか。

にあたっては坏が1,027点、皿557点、高台付坏1,107点を対象とした。

この中でまず、坏1,027点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。Aは円柱が糸切り離しの際に台状に残るタイプで149点（第51図1～20）、Bは底部糸切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで352点（第51図21～第52図48）、Cは底部糸切り離した後、体部が直線的に立ち上がるタイプで152点（第53図49～60）、Dは底部の糸切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで303点（第53図61～第54図88）、Eは底部と体部との境が弱く体部が丸みをもって立ち上がるタイプで71点（第54図89～96）であった。坏の口径は最小9.8cm、最大15.6cmであった。最大のピークは12.6～12.8cmであり、前後11.2～14.4cmである。底径は最小4.0cm、最大8.4cmであった。最大のピークは6.2cmにあり、前後5.2～7.0cmである。

皿557点をA・B・C・D・Eタイプの5種類に区分し傾向をみた。基本的な分類基準は坏と同様である。Aは円柱が糸切り離しの際に台状に残るタイプで20点（第55図97～100）、Bは底部糸切り離しの後、体部への立ち上がり部分が逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプで245点（第55図101～第56図150）、Cは底部糸切り離し後、体部が直線的に立ち上がるタイプで60点（第57図151～154）、Dは底部の糸切り離しの際粘土の始末が外側にはみ出し、ちりめん状にギザギザするタイプで129点（第57図155～178）、Eは底部と体部との境



第53表 灰原5底径別個体分析表

灰5坏	A	B	C	D	E	計
4.6	1	1	0	2	1	5
4.8	3	3	0	2	1	9
5.0	2	11	0	2	1	16
5.2	8	18	0	12	4	42
5.4	10	25	3	19	0	57
5.6	13	24	3	29	5	76
5.8	23	59	8	44	8	142
6.0	19	58	18	45	8	148
6.2	24	50	27	32	7	160
6.4	18	31	27	36	8	120
6.6	17	23	14	21	9	84
6.8	5	20	19	9	7	60
7.0	2	13	11	5	3	48
7.2	3	7	6	1	2	24
7.4	1	3	3	3	0	9
7.6	0	3	3	1	2	9
7.8	0	3	3	1	2	9
8.0	0	0	1	2	0	3
8.2	0	0	0	1	0	1
8.4	0	0	1	0	0	1
8.6	0	0	0	0	0	0
8.8	0	0	0	0	0	0
9.0	0	0	0	0	0	0
計	149	362	152	303	71	1027

灰5皿	A	B	C	D	E	計
4.6	0	1	0	1	0	2
4.8	0	1	0	0	1	2
5.0	0	0	0	2	1	3
5.2	3	7	0	2	1	13
5.4	2	5	1	3	1	12
5.6	0	12	3	5	1	21
5.8	3	30	3	18	3	57
6.0	2	36	10	22	3	73
6.2	2	39	2	12	10	65
6.4	2	25	3	15	8	53
6.6	2	26	5	15	8	56
6.8	2	18	5	14	17	56
7.0	0	9	7	8	11	35
7.2	0	6	6	6	7	31
7.4	0	8	2	1	5	16
7.6	1	8	7	0	8	24
7.8	0	4	3	3	10	20
8.0	1	2	2	0	1	6
8.2	0	1	0	1	4	6
8.4	0	1	1	0	1	3
8.6	0	0	0	1	1	2
8.8	0	0	0	0	1	1
9.0	0	0	0	0	0	0
計	20	245	60	129	103	557

図53 灰原5底径別個体分析

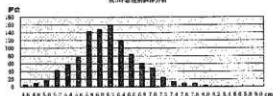
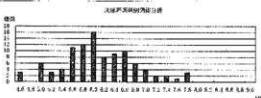


図54 灰原5底径別個体分析

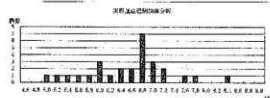


第54表 灰原底徑別個体分析表

灰原底	A	B	C	D	E	計
4.6	2	0	0	0	0	3
4.8	0	0	0	0	0	0
5.0	0	2	0	2	1	6
5.2	1	0	0	2	0	3
5.4	1	0	0	3	0	4
5.6	2	4	0	4	1	11
5.8	6	1	1	4	0	12
6.0	2	3	2	8	1	16
6.2	2	2	1	2	1	8
6.4	1	4	1	1	2	9
6.6	2	2	2	3	1	10
6.8	0	3	0	2	1	6
7.0	0	2	0	1	1	4
7.2	0	0	1	1	0	2
7.4	0	1	0	1	0	2
7.6	0	0	0	1	0	1
7.8	2	1	0	0	0	3
8.0	0	0	0	0	0	0
8.2	0	0	0	0	0	0
8.4	0	0	0	0	0	0
8.6	0	0	0	0	0	0
8.8	0	0	0	0	0	0
9.0	0	0	0	0	0	0
計	22	25	8	36	9	100

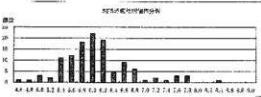


灰原底	A	B	C	D	E	計
4.6	0	0	0	0	0	0
4.8	0	0	0	0	0	0
5.0	0	1	0	0	0	1
5.2	0	0	1	0	0	1
5.4	0	0	0	1	0	1
5.6	0	1	0	0	0	1
5.8	0	1	0	0	0	1
6.0	0	2	1	0	0	3
6.2	0	0	0	1	0	1
6.4	0	1	1	0	0	2
6.6	1	0	0	1	0	2
6.8	0	6	0	1	0	7
7.0	0	1	1	0	1	3
7.2	1	0	0	0	1	2
7.4	0	0	0	0	0	0
7.6	0	0	0	0	1	1
7.8	0	0	0	0	1	1
8.0	0	0	0	0	0	0
8.2	0	0	0	0	0	0
8.4	0	0	1	0	0	1
8.6	0	0	0	0	0	0
8.8	0	0	0	0	0	0
9.0	0	0	0	0	0	0
計	2	13	5	4	4	28

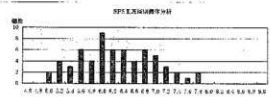


第55表 SF 5 底徑別個体分析表

SF 5 底	A	B	C	D	E	計
4.6	1	0	0	0	0	1
4.8	0	0	0	1	0	1
5.0	0	3	0	0	0	3
5.2	0	1	1	0	0	2
5.4	2	5	0	3	1	11
5.6	3	2	3	4	0	12
5.8	4	6	2	5	1	18
6.0	3	8	4	7	0	22
6.2	2	8	5	3	1	19
6.4	0	1	1	3	0	5
6.6	0	6	2	0	1	9
6.8	0	3	3	0	0	6
7.0	0	0	0	0	1	1
7.2	0	1	1	0	0	2
7.4	0	1	0	0	0	1
7.6	0	2	1	0	0	3
7.8	0	1	0	2	0	3
8.0	0	0	0	0	0	0
8.2	0	0	0	0	0	0
8.4	0	0	0	1	0	1
8.6	0	0	0	0	0	0
8.8	0	0	0	0	0	0
9.0	0	0	0	0	0	0
計	15	48	23	29	5	120



SF 3 底	A	B	C	D	E	計
4.6	0	0	0	0	0	0
4.8	0	0	0	0	0	0
5.0	0	1	0	1	0	2
5.2	0	3	0	1	0	4
5.4	0	2	0	1	0	3
5.6	0	2	0	3	1	6
5.8	0	3	0	1	0	4
6.0	0	5	0	4	0	9
6.2	0	3	0	3	1	6
6.4	0	4	1	1	0	6
6.6	0	2	0	2	0	4
6.8	0	3	0	1	2	6
7.0	0	4	0	1	0	5
7.2	0	1	0	0	2	3
7.4	0	2	0	0	0	2
7.6	0	1	0	0	0	1
7.8	0	2	0	0	0	2
8.0	0	0	0	0	0	0
8.2	0	0	0	0	0	0
8.4	0	0	0	0	0	0
8.6	0	0	0	0	0	0
8.8	0	0	0	0	0	0
9.0	0	0	0	0	0	0
計	0	38	1	19	5	63



が弱く底部が丸みをもって立ち上がるタイプで103点（第58図179～205）であった。皿は、坏に比較して口径、底径ともに大きく、浅い。

高台付坏1,107点を高台部の形態によって分類した。第一分類は高台の全体的形態でAは直線的なタイプで152点（第59図206～214）、Bは押圧によりややつぶれて外側に膨らむタイプで747点（第59図215～第61図272）、Cは箱形に突出するタイプで208点（第62図273～269）であった。高台径は最小5.2cm、最大10.2cmであった。高台は高台端部の形状と高台の接地面の位置によってさらに細分類をおこなった。

これらの分類の結果を第53～55表にまとめた。底部径と底部形態の関係は第5号窯跡、灰原5、灰原を比較するといずれも近い分布を示し灰原5と第5号窯跡の関係は相関性がみられ、灰原は坏・皿において底径の大きいものが存在する。さらに、正龍寺窯跡と桜沢窯跡の資料と比較すると、正龍寺窯跡は坏はほぼ近似した値をとるものの皿はわずかに大きめの7.4～8.2cmのものにやや偏る傾向にあるが灰原5の範囲と判断する。しかし、桜沢窯跡は坏が6.0cm以下の値をとり、皿も6.8cmが1点あるが、6.2cm以下で5.2・5.4cmにピークをもつ。新しい要素として位置付けられる。

いずれにせよ、第5号窯の底径にみた形態のくせはA～Eに分類でき、坏・皿に共通して認められた底径6.0cmを中心径の基準としたが円柱からの糸切り難しによる須恵器生産が考えられる。これこそが工人のくせの可能性がある。この段階は1基による操業であり本窯跡の東側と西側の調査区域外に同時期の窯跡の存在が確認されており、一窯に対して、一工人が使用していた可能性が考えられ、このことは末木氏が指摘している末野窯跡産の須恵器にはヘラ記号の少ない要因とも考えられる。つまり、窯内の製品は個人の製作物であることが自ずと判断でき他工人との区別の必要性が無いことから識別のためや数量の把握はヘラ記号による必要がないと判断できた。

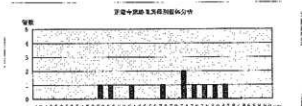
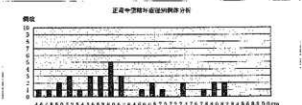
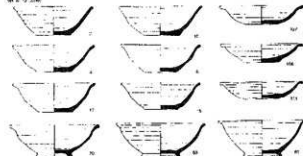
第234図 桜沢窯跡出土遺物

(S-1/6)

第1号窯跡



第2号窯跡



4. 末野遺跡の様相と編年的位置

7世紀代の土器の様相についてはこれまで古墳時代側からの連続的位置付け、あるいは、奈良・平安時代からの位置付けといった立場からの編年研究が多く、7世紀そのものの編年的位置付けがほとんど定まっていない。特に、坏Gに代表される土器群の出現期の問題は、前後の関係の中で序列が位置付くものの土器様相の変化を示すまでには至らず、年代的定点をもたない。このような現状で、近年、小山窯跡(鶴間 1993)、石出窯跡(渡辺 1995)、赤沼古代瓦窯跡(渡辺 1997)の報告がなされている。また、末野遺跡周辺の露梨子遺跡(井上 1997)や、中宿遺跡(鳥羽 1995)、滝下遺跡(宮本 1997)、岡部条里遺跡(平田 1998)、熊野遺跡(埼玉県 1984)など末野窯跡群が位置する榛沢郡の中心地域の調査が進み、成果が明らかになりつつある。また、これまで知られていた、八幡太神南遺跡、立野南遺跡、今井遺跡群などの資料があり、『末野遺跡Ⅰ・Ⅱ』によってこれら周辺遺跡との関係を理解し、7世紀における地方窯跡の様相と位置付けについて検討する。

末野遺跡は、末野窯跡群の中の第5支群に位置する。調査区は末野窯跡開窯時期の様相を示唆すると考えられる(註1)。

『末野遺跡Ⅰ』は古墳時代の坏Hを主体として生産する第3号窯跡から開窯し、第2号窯跡→第1号窯跡と展開する。いずれも、坏Hを生産し、坏Gは伴わないと考えられる。一方、『末野遺跡Ⅱ』は谷筋を変え坏Gを主体とし、坏Hを伴わない須恵器生産を行っていたものと考えられる。

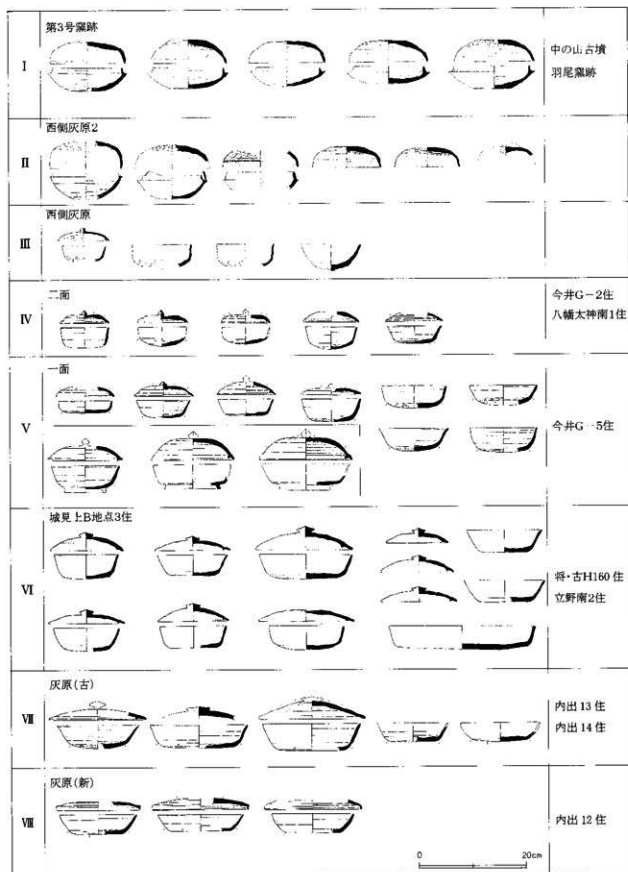
これまで見てきたようにここでは前述の「生産器種と生産量」、「甕の口縁部形態の分析」の検討をふまえ末野遺跡の様相と編年的位置について若干の検討を加えてみる。須恵器編年は形態や調整法に変化が多く認められる坏、蓋が常に時間軸の指標とされる。本稿でも、坏、蓋を中心として検討し、末野遺跡全体の編年的位置付けの試論を示したい。

末野遺跡出土遺物を第Ⅰ期から第Ⅷ期に段階設定し

た。まず、『末野遺跡Ⅰ』の報告された、第3号窯跡が最も古いと考えられ、大型の坏Hを生産する。第Ⅱ期は口径がやや小型化した坏Hである。坏蓋は大井部回転ヘラケズリのものと手持ちヘラケズリが認められる。坏身は口径が小さいものの器高が深い。第Ⅲ期は西側灰原内の新しい要素をもつ土器群を抽出した。乳頭状つまみをもつ坏Gの蓋である。天井部外面には軽い手持ちヘラケズリを施す。第Ⅳ期は東側灰原から出土したもので生産の場がこれまでの西側から東側の谷筋に移り小型の坏Gを主体として生産する。第Ⅴ期は第Ⅳ期に比べ法量がやや大きく変化する坏Gを焼成する。第Ⅵ期は器種分化が認められる。この段階の資料が灰原内からは明確に検出されず、再び窯場の地点を移した可能性も指摘できる。この段階の資料としては、城見上遺跡B地点第3号住居跡の資料が考えられる。甕のつまみは宝珠から擬宝珠に変化し法量分化がみられる。第Ⅶ期は大型の坏蓋の生産に変わり、坏は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリがみられ、蓋は擬宝珠でまだ返りが残る。第Ⅷ期は糸切りがみられ、底部外周ヘラケズリ調整を施す坏と無かえりの蓋が出現する。

ここで坏についてさらに調整法を検討する。東側灰原から出土した第Ⅳ期から第Ⅷ期の坏は第222図に示し、出土層位に沿ってそのまま掲載した。灰原層がかなり重層的になっていることが指摘できる。その際に底部外面の調整法について分類した。坏の底部は、ヘラ起しママのa類、その後を軽くナデを施すb類、外縁部のみを手持ちヘラケズリするc類、全面を手持ちヘラケズリするd類、全面回転ヘラケズリするe類、そして、中心部に糸切りを残し外周回転ヘラケズリするf類である。これら、a～f類について検討すると、第56表のような状況を示し、ママ・ナデ→外周手持ちヘラ→全面手持ちヘラ→全面回転ヘラといったおおむね変化の方向性はつかめる。この点について、八幡太神南遺跡の第1号住居跡、今井遺跡群G地点2号住居跡、今井遺跡群G地点5号住居跡、立野南遺跡2号住

第235図 末野遺跡編年図



居跡出土の坯の底部調整について検討した。この遺跡の関係は、以前、「北武蔵型環」の上師器の検討を行った際（赤熊 1985）の編年的位置付けと同様であり、今井G-2住→八幡太神南1住→今井G-5住→立野南1住である。こうした序列は肯定でき、今井G-2住と八幡太神南の段階はむしろ近い時期の可能性が指摘できる（註2）。この段階が「末野遺跡灰原」二面に対応するものと考えられ「末野第Ⅳ期」とした。組成に大きな変化をもつ段階は今井G-5住に大型の蓋と坯Bの存在がみられる。この段階が「末野第Ⅴ期（灰原一面）」に対応するものと考えられる。立野南2号住居跡は末野産器種が非常に少なく胎土から判断して、圧倒的に群馬産の須恵器の供給を受けている。群馬では検出例がないため窯跡の存在が不明である。この時期窯業生産を行っていると考えられる児玉古窯跡群からの供給も想定できるが不明である（註3）。この段階が「末野遺跡灰原古相」に対応するものと考えられ「末野第Ⅵ期」とした。立野南2住以降はむじな塚3号住居跡、将監塚・古井戸遺跡64・66・76・144号住居跡や内出遺跡13・14号住居跡である。須恵器の法量分化は消滅し、大型環と蓋の組成に変化する。この段階が「末野遺跡灰原新相」に対応するものと考えられ「末野第Ⅶ・Ⅷ期」とした。

蓋をみると、二面では宝珠つまみをもち返りが短く、端部からの距離も短い、天井部は回転ヘラケズリを施す。口径は9.0～9.6cmのものが主体を占める。一面では口径9.9～11.0cmと大きくする。灰原面は天井に張りをもつ口径14.1～17.0cmの蓋と法量分化のある蓋の段階と口径の大型のものが主体となり、かえりの位置が内側に入り退化した形態の段階が含まれる。また、無かえりの蓋も伴い「時間幅」が存在する様相である。

これらの土器群を段階的に分け、『末野遺跡Ⅰ』の第3号窯跡からの変遷を加え第235図のような変遷を想定した。

周辺の遺跡と比較すると、寄居町用土北沢遺跡からは底部ヘラ起しの坯Gと体部を手持ちヘラケズリ調整の坯が出土している。こうした調整は城見上遺跡A区からも出土し手持ちヘラケズリが調整法としてかなり

使用していたことをうかがわせる。城見上B地点3号住居跡出土の須恵器は法量分化が見られる。坯の底部調整は回転ヘラケズリ、ヘラ起しママ、ヘラ起し後体部下位を手持ちヘラケズリの三名の調整法がみられ、城見上B地点5号住居跡はヘラ起し1点、手持ちヘラケズリ3点、回転ヘラケズリ2点である。城見上B-3住・城見上B-5住とともに今井G-5住と立野南の中間に位置づけるものと考えられる。器種分化がみられ、城見上B-5住と近い様相をもつ。

さらに目を広げると、南比企窯跡群では、石田第1号窯跡出土の坯Gに見られる底部調整は手持ちヘラケズリである。このほか、高台付坪、盤、高盤、円面碗、すり鉢、壺、甕などが検出されている。

赤沼古代瓦窯跡の灰原出土の坯Gに見られる底部調整は回転ヘラケズリ調整が2点、手持ちヘラケズリが2点である。ここでは、回転と手持ちが同量の検出を認める。口径は推定径で9.8～11.1cmである。また、盤の底部調整は全て回転ヘラケズリであった。蓋はいずれも擬宝珠つまみである。

舞台遺跡出土遺物を検討すると、舞台遺跡では従来から指摘されているように大きく3段階が想定でき、第1号住居跡の段階、第2号窯跡および第A-74号住居跡の段階、第1号窯跡の段階である。ここで、注目すべきは舞台遺跡の年代的位置づけである（註4）。第2号窯跡およびA-74号住居跡では坯Hの焼成段階で坯Gの焼成は認められない。陶色TK79焼成の坯Hに形態、法量が比較的類似するが、坯Gを併焼する点異なる。また、第1号窯跡検出の坯Gは坯底部外面に手持ちヘラケズリ調整を施す。蓋も天井部外面に手持ちヘラケズリ調整を施す。口径は口径9.0～9.6cm、器高3.8～4.3cmであり、底部の形態は丸味をもつ。ヘラケズリは上師器坯の調整法に極めて近い。蓋はいずれも、宝珠つまみである。

『末野遺跡Ⅱ』出土遺物の特徴は坯Hを合併しないことである。須恵器生産の拡散性は器種組成において地方窯跡のあり方が一様ではないと考えられる。特に、本県における坯Hと坯Gの併焼は今のところ認められ

ず木野Ⅲ期にその可能性を残す。須恵器工人や須恵器生産のあり方が時間軸の中で変容して地方に存在すると考えられる。

埼玉県内の7世紀代の窯跡みると、比企丘陵では羽尾窯跡、平谷窯跡、舞台遺跡、根平遺跡、西谷ツ窯跡などが7世紀代の窯跡群である。また、7世紀末には石田窯跡が存在する。木野窯跡群は「木野遺跡Ⅰ」（既報告書）・「木野遺跡Ⅱ」（本報告書）によって明らかに、また、児玉古窯跡群が知られる。

窯跡成立の背景には、地域における在地首長層の個別的な民間招聘と国家的なレベルの官招聘が存在するのではないだろうか。羽尾窯跡、平谷窯跡、舞台遺跡は前者の様相であり、石田窯跡、小山窯跡、木野Ⅱ窯跡などが官的様相をもつ窯跡群として開窯するのはないだろうか。さらに、武蔵国としての国的窯跡として南比企窯跡群は位置付くのではないだろうか、この影響によって木野窯跡群はこれまでの官整備レベルの役割を終え、国整備レベルの南比企窯跡群へ主体的生産活動の移行を認め、結果として生産量の減少をまねいたものと考えられる。本坂原検出遺物を見て取るように8世紀第2四半期から第3四半期にかけての生産はほとんど見られず、熊野遺跡、南共和遺跡や将監塚・古井戸遺跡の集落でも明らかなように県北部の本来木野窯跡群の供給圏であった地域でも南比企窯跡産の須恵器が主体となる。しかし、底部外周ヘラケズリ調整を施す8世紀第4四半期に生産の増加が見られ、9世紀代には生産活動が回復し、供給圏を再び広範囲にもつ。【木野遺跡Ⅱ】が示す様相はまさに、武蔵国における窯業生産の変化を凝縮している。

年代的位置については、第Ⅰ期の第3号窯跡はTK 209段階と同様の形態と考えられ、本窯は中の山古墳の須恵質塩輪を焼成している。次に、第1号窯跡掘り方からは第18図8・9の土師器環を出し土師器編年からみると概ね、7世紀中葉段階に位置付けられる。この土師器が掘り方に存在することから第1号窯跡の石組煙道をもつ時期はこの時期もしくは直後と考えられる。そして、年代的定点として小敷田遺跡出土3号木

第56表 坏G底部調整法個体数

遺構	調査方法		手持ちヘラ		回転ヘラ		合計
	ママ	ナデ	外周	全面	全面	外周	
木野二面	3	1	1	5	0	0	10
木野一面	5	6	3	10	6	0	30
木野灰原	2	5	1	8	11	3	30
八幡太神南1住	2	0	1	1	2	0	6
今井G-2住	1	2	1	0	1	0	5
今井G-5住	0	1	1	2	1	0	5
城見上B-3住	1	0	1	0	1	0	3
城見上B-5住	1	0	0	3	2	0	6
立野南2住	0	0	1	2	20	0	23

簡の解説から大宝令施行時に限りなく近い時期の資料と分析された(宮瀧 1991)。このことから木簡出土の第96号土壌から出土した共存遺物の年代が示される。さらに、坂野氏は樋の上遺跡の報告書で第96号土壌と木野産城見上B地点3号住居跡出土土器群との関係を分析し、同時期であることを指摘した。この時期を大宝令(701年)施行前後と捉えられ、木野第Ⅵ期と考える。さらに、内出遺跡(鬼形 1986)の報告の中で飛田野正佳氏は第14号住居跡からは和銅開珎が検出され、铸造年代が708年であることから第14号住居跡出土遺物はこれ以降の年代観が考えられ、遺構の重複関係から第14号住居跡より古い第13号住居跡は708年以前と指摘した。このことは木野第Ⅶ期に相当する。以上、木野産須恵器の年代指標が指摘できる。これらから、木野第Ⅲ期は7世紀中葉、第Ⅳ期は7世紀第3四半期、第Ⅴ期は7世紀第4四半期、第Ⅵ期は7世紀末から8世紀初頭、第Ⅶ・Ⅷ期は8世紀第1四半期となる。

まとめ

7世紀は、須恵器生産の様相が大きく変化する。これまで、陶器窯跡を中心とした古墳時代の須恵器生産体制が地方に拡散する。さらに、7世紀の須恵器生産は古墳時代の生産器種の古相から仏教伝来によってもたらされた金属器を写した生産器種の新相へと変化する時代でもある。

問題は、地方窯跡における古相(坏H)から新相(坏

第236图 周边遺跡分布图



G)への変化の組成とその時期を明らかにすることである。福島県善光寺窯跡、長野県石附窯跡、福岡県牛頸窯跡などの報告資料の様相と、畿内(陶邑、飛鳥・藤原地域)の様相を比較することは不可欠であるが、決して、同じ関係ではないと考える。

埼玉県内の窯跡は7世紀に入ると滑川町羽尾窯跡、平谷窯跡、東松山市根平遺跡、舞台窯跡、坂戸市西谷ツ室跡は単発的様相ではある。しかし、寄居町木野窯跡は連続的操業の様相がみられる。これらの窯跡では「工人の系譜が様々であり東海の様相や在地の様相、また、畿内の様相の混在もみとめられ様ではない。環Hと環Gの共存は木野窯跡では木野Ⅲ期でみるように今のところ認識できない。また、同時期と考えられる舞台窯跡第2号窯では環Hの生産が認められるが、第1号窯跡では環Gのみの生産である。近接した地域ではあるが環Hが残る点、また、転換後の併焼が認められない点に地方窯跡としての共通点が見出される。また、畿内の様相とは異なり環Gの生産時期も7世紀の後半になってからであると考えられる。

今回の調査は木野窯跡群の解明に大きな成果を上げた。生産された須恵器は7世紀から8世紀前半の様相をもち器種組成、各器種の形態や技術的特徴が明らかになった。また、第5号窯跡は9世紀後半の窯跡であった。このほか、第238図に示したように城見上遺跡A・B区からは粘土探掘坑Ⅰ・Ⅱ群を検出し、木野遺跡C・D区からは住居跡と粘土探掘坑Ⅲ・Ⅳ群を検出した。そして、本報告の木野遺跡E区からは住居跡をF区からは窯跡および灰原跡を検出した。これら、居住空間と作業空間が近接していることがわかる(註5)。

生産物の供給においては、古墳時代後期には荒川流域を中心とした地域と、県北部地域にまでおよび、周辺の古墳群に製品の供給を行ったと考えられる。また、さきたま古墳群の中の山古墳に供給した加輪壺が木野遺跡第3号窯跡内から出土した。7世紀後半になるとこうした供給圏は武蔵国の各部、特に、荒川流域と北部地域を中心として供給していたようである。このような様相は前代からの供給圏を踏襲したものと考えら

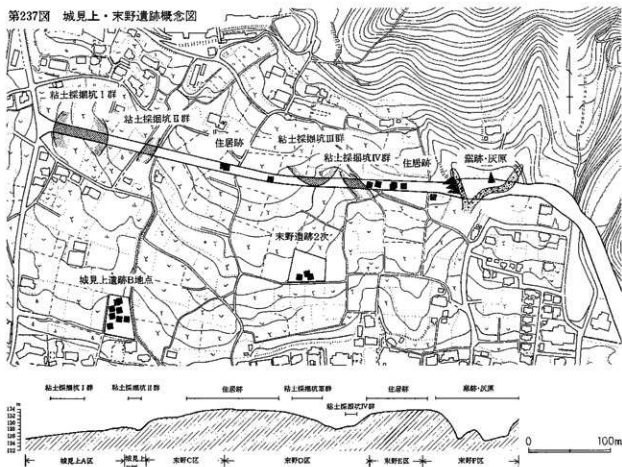
れる。部を越えた供給圏をもち律令期整備段階の地方窯として役割をもっていたものと考えられる。

いずれにしても、木野窯跡は北武蔵では最も古い窯跡群であり、7世紀において中核となる窯跡であった。その後、南北企窯跡群の開窯とともに操業の継続性、製品の供給圏など大きく変化した。現在寄居町によって木野遺跡の隣接地点を調査しており窯跡を8基検出した。今後、残された多くの問題解決にこれらの調査成果が期待される。

註

- (1) 瀬瀬方之氏は小前田古墳群第1号墳出土(中小前田6号墳 寄居町史)の有蓋高環・甕・平甕・提瓶が木野窯跡群の最も古い須恵器とし、6世紀末～7世紀初頭とされた。寄居町1984『寄居町史』・瀬瀬方之1986『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集。
- (2) 大塚・栗岡内氏は築道下遺跡のSX9号遺構出土資料を分析し「結論4 北武蔵型環の系統について」の中で今井G-2住、八幡太神南1住、特監塚・古井戸H-160住を分析し、環の系統関係を鮮明化し特監塚・古井戸H-160住段階で土師器の定量化が成立しこれ以前は小・中・大はあるものの数量的に一定していないと指摘された。
- (3) 鈴木徳雄氏から児玉古窯跡群では環G、甕などの須恵器生産が小規模ながら行われているとご教示をいただいた。
- (4) 富田和夫氏は舞台窯跡の資料に著Hし、A-74号住居跡出土遺物には、在地土師器の北武蔵型環、統比金型環、有段口縁環がみられ、第2号窯跡の環Hが伴うとの指摘をご教示された。このことは土師器によって環Hの年代的平行関係をみることができる。また、築道下遺跡SX-9からは在地土師器の北武蔵型環、統比金型環、有段口縁環がみられ、西産座の環Hが共存している。いずれも同時期と考えられ、しかも、八幡太神南1住との平行関係が示唆される。土師器環によって三者の関係がうかがえた。
- (5) 城見上遺跡A・B区および木野遺跡C・D区の調査結果は、西井幸雄 1999『城見上/木野Ⅲ/花園地区/箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第211集による。

第237図 城見上・末野遺跡概念図



引用・参考文献

- 赤熊 浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 井川 達雄・宮下万貴子他 1985 『三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団
- 石塚 三夫 1994 『中小前田1遺跡』寄居町遺跡調査会報告第1集
- 石塚 三夫・田代 康宏 1994 『薬師台遺跡・大正寺南遺跡』寄居町遺跡調査会報告第2集
- 石塚 三夫 1995 『町内遺跡2』寄居町文化財調査報告第13集
- 石塚 三夫 1996 『用土前奉遺跡』(第2次・第3次)寄居町遺跡調査会報告第8集
- 石塚 三夫 1996 『末野元宿遺跡』寄居町遺跡調査会報告第9集
- 石塚 三夫 1996 『中小前田1遺跡(第2次)』寄居町遺跡調査会報告第11集
- 石塚 三夫 1996 『川土北沢遺跡』寄居町文化財調査報告第16集
- 石塚 三夫 1997 『中小前田2遺跡(第4次)(第5次)・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集
- 磯崎 一 1997 『古墳時代の土器編年と集落について』今井川越田遺跡Ⅲ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 井上 尚明・石塚 三夫 1995 『東伴場地遺跡(第5次)』寄居町遺跡調査会報告第3集
- 井上 尚明・石塚 三夫 1995 『普光寺東遺跡(第2・3次)』寄居町遺跡調査会報告第4集
- 井上 尚明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 井上 尚明 1996 『むじな塚遺跡(第4次調査)』寄居町遺跡調査会報告第10集
- 井上 尚明 1997 『露梨子遺跡』寄居町遺跡調査会報告第12集
- 井上 尚明 1997 『灰田原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第13集
- 井上 肇他 1978 『舞台(資料編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集
- 井上 肇・水村 孝行他 1979 『舞台(本文編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集
- 井上 肇・石塚 三夫 1994 『町内遺跡1』寄居町文化財調査報告第12集

- 井上 肇・井上 尚明 1996 『甘粕原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第7集
- 今井 宏 1982 『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 今関 久夫 1990 『むじな塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第8集
- 岩田 明広 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 内山 敏行 1997 『律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県』『東国の須恵器』古代生産史研究会
- 江浦 洋 1995 『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 大川 清・金井 渡次 1964 『長野県中野市草間窯業遺跡』『信濃』16(11) 信濃史学会
- 大谷 徹也 1986 『奈良地区遺跡群発掘調査報告IV 熊ヶ谷東遺跡』奈良地区遺跡調査会
- 小沢 国平・柳田 敏司 1960 『古墳調査報告書』大里郡・熊谷市・深谷市・古墳調査 埼玉県教育委員会
- 鬼形 芳夫・飛田野正佳 1986 『内出遺跡』内出遺跡調査会
- 関東古瓦研究会 1997 『関東の初期寺院』
- 木立 雅朗・滝上 秀明・花塚 信雄 1985 『飯口町湯屋古窯跡』石川県飯口町教育委員会
- 木津 博明・松岡 正信・友城 哲也 1991 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』-関越自動車道(新羽線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第36集-(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第117集
- 木本 元治・福嶋 雅彦・中山 正彦・西谷 勉 1988 『善光寺遺跡』『国道113号バイパス遺跡調査報告書』IV 福島県文化財調査報告書第192集
- 木本 元治・松崎 真・中山 正彦 1989 『高田遺跡』『国道113号バイパス遺跡調査報告』V 福島県文化財調査報告書第211集
- 京都大学文学部考古学研究室 1982 『丹波岡山窯址』真陽社
- 群馬県 1986 『群馬県史 資料編2』
- 恋河内昭彦 1995 『南共相・新宮遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第6・7集 児玉町遺跡調査会
- 国際古代史シンポジウム実行委員会 1996 『飛鳥・白鳳時代の諸問題I』
- 古代生産史研究会 1997 『東国の須恵器』
- 古代の上器研究会 1992 『古代の上器研究-律令的土器様式の西・東-』
- 古代の土器研究会 1993 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東2 須恵器-』
- 古代の土器研究会 1997 『7世紀の土器 古代の土器5-1(近畿東部・東海編)』
- 古代の土器研究会 1997 『7世紀の土器 古代の土器5-2(近畿西部編)』
- 古代の上器研究会 1997 『古代の上器研究-律令的土器様式の西・東5 7世紀の上器-』
- 後藤 建一 1989 『湖西古窯跡群の須恵器と窯構造』『静岡県窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』資料編2 原始・古代
- 埼玉県 1984 『熊野遺跡』『新編 埼玉県史』資料編3 古代1
- 埼玉県 1987 『写真集 荒川』
- 埼玉県立歴史資料館 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井 清治 1981 『房総における須恵器生産の予察(Ⅰ)』『史館第13号』P1-24 史館同人
- 酒井 清治 1984 『台耕地(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集
- 酒井 清治 1989 『古墳時代の須恵器生産の開始と展開-埼玉を中心として-』『研究紀要第11号』埼玉県立歴史資料館
- 酒井 清治 1991 『関東』『古墳時代の研究第6巻 土師器と須恵器』雄山閣出版
- 酒井 清治・伊藤 博幸 1995 『須恵器集成図録第四巻 東日本編Ⅱ』雄山閣出版
- 酒井 清治 1997 『古墳時代の須恵器-須恵器研究の視点-』『古墳出土の須恵器』高崎市観音塚考古資料館
- 坂戸市 1992 『坂戸市史・古代史料編』
- 塩野 博・小久保 徹 1975 『黒田古墳群』埼玉県花園村黒田古墳群発掘調査会
- 末木 健・宮澤 公雄・柳原 功一編 1990 『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』敷島町教育委員会
- 高橋 一夫 1977 『比企郡鳩山町の須恵器』『埼玉考古第16号』埼玉考古学会
- 高橋 一夫 1980 『羽尾窯跡発掘調査報告書』清川村教育委員会
- 高橋 一夫 1982 『寄居町馬場の内庭寺』『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室
- 竹原 孝 1991 『石附窯址群』III 佐久市埋蔵文化財調査報告書第3集 佐久市教育委員会
- 谷井 彰他 1974 『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集
- 龍瀬 芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
- 高木 義和 1981 『稲荷窪遺跡』寄居町文化財調査報告第5集
- 田口 一郎他 1979 『正観寺遺跡群(Ⅰ)』高崎市文化財調査報告書第11集
- 田辺 昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

- 田辺 昭三 1983 『須恵器大成』角川書店
- 田中 広明 1993 『掘強帯のある大塚の生産と流通』『埼玉考古第30号』 埼玉考古学会
- 鶴間 正昭 1993 『多摩ニュータウンNo.342遺跡 平成3年度第5分冊』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第15集
- 鳥羽 政之 1995 『中宿遺跡 推定・桜沢部止倉跡の調査』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第1集 岡部町教育委員会
- 富田 和夫・赤熊 浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁山・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中村 倉司 1980 『飯沼神社南遺跡・…本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告書第39集 埼玉遺跡調査会
- 中村 浩 1980 『陶邑Ⅰ～Ⅳ』大阪府文化財調査報告書第29輯 (財)大阪文化財センター
- 中村 浩 1991 『和泉陶邑窯の研究』柏書房
- 中村 浩(編) 1995 『須恵器集成図録第一巻 近畿編Ⅰ』雄山閣出版
- 中村 浩・森原 学(編) 1996 『須恵器集成図録第二巻 近畿編Ⅱ』雄山閣出版
- 中沢 良一・丸山 良一 1996 『猪俣南古墳群・丸山遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第8集
- 野部 徳秋・高木 義和 1977 『本野窯址(花園支所)発掘調査』文化財報告第2集 寄居町教育委員会
- 野上 丈助 1980 『陶邑Ⅴ』大阪府文化財調査報告書第33輯 大阪府教育委員会
- 畑中 英二 1995 『大通寺古墳群(本文編)』滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会
- 坂野 和信・富田 和夫 1996 『飛鳥時代の関東と畿内』『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会
- 坂野 和信 1997 『日本仏教導入期の特徴と東国社会』『埼玉考古第33号』P105～160 埼玉考古学会
- 坂野 和信 1998 『種の上ノ皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集
- 平田 重之 1998 『上宿遺跡』埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第7集 岡部町遺跡調査会
- 辻間 孝志・宮 昌之・森原 高志・木戸 春夫・赤熊 浩一・高崎 光司 1991 『北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅰ～Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要
- 辻間 孝志 1994 『桜沢窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第143集
- 養田 哲郎 1996 『須恵器の承継』歴史発掘10 講談社
- 福田 聖 1998 『本野遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集
- 福島 正美 1985 『那谷金比羅山窯跡群』昭和59年度県営地場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』石川県立埋蔵文化財センター
- 福永 伸哉・北条 芳隆 1991 『桜井谷窯跡群2-23号窯跡』大阪大学桜井谷窯跡群調査団
- 森原 学・鍋島 敏也 1974 『千早古窯跡群』
- 藤原 高志 1982 『平谷窯跡』埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県泉福さん室
- 舟山 良一・松本 敏三・池田 榮史(編) 1996 『須恵器集成図録第五巻 西日本編』雄山閣出版
- 水村 孝行 1980 『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
- 増田 一裕・佐藤 好司・井上富美子 1988 『旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅰ』一宮場1～9号墳一本庄市埋蔵文化財調査報告第12集 本庄市教育委員会
- 丸山 修 1991 『往来北遺跡発掘調査報告書Ⅰ-県営畑地帯総合整備事業上里南部地区に伴う発掘調査報告書Ⅰ-上里町教育委員会』
- 宮瀧 交二 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 宮本 直樹 1997 『滝下遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第2集 岡部町教育委員会
- 宮本 直樹 1998 『岡部条里遺跡』埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書第3集 岡部町教育委員会
- 望月 精司・宮下 幸夫 1990 『二ツ梨東山古窯跡・矢山野向山古窯跡』石川県小松市教育委員会
- 望月 精司 1993 『須恵器窯構造から見た7世紀の西側』『北陸古代土器研究第3号』北陸古代土器研究会
- 寄居町 1984 『寄居町史』寄居町教育委員会
- 吉田章一郎 1984 『大里郡寄居町本野の窯址調査』『考古学雑誌 第40巻1号』日本考古学会
- 若松 良一 1989 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1988-92 『鳩山窯跡群Ⅰ～Ⅳ』鳩山窯跡群発掘調査報告書第1～4冊 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1995 『竹之城・石山・里沼下遺跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告第17集 鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1997 『町内遺跡Ⅰ』-県指定史跡赤沼古代瓦窯跡灰原範岡確認調査報告書-鳩山町埋蔵文化財調査報告第18集 鳩山町教育委員会

附 編

1. 末野遺跡出土須恵器の胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

目 次

- 1 実験条件
- 2 実験結果の取扱
- 3 X線回折試験結果
 - 3-1 タイプ分類
 - 3-2 石英-斜長石の相関について
- 4 化学分析結果
 - 4-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について
 - 4-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について
 - 4-3 K_2O - CaO の相関について
- 5 まとめ

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は上器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV,
Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°
計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示されており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

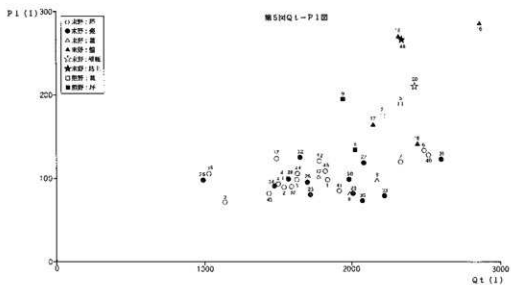
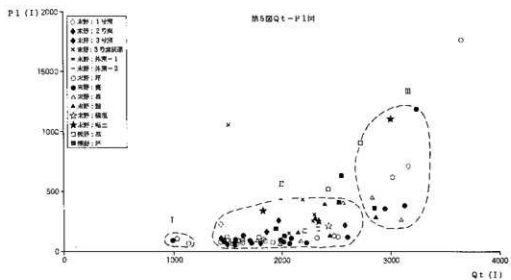
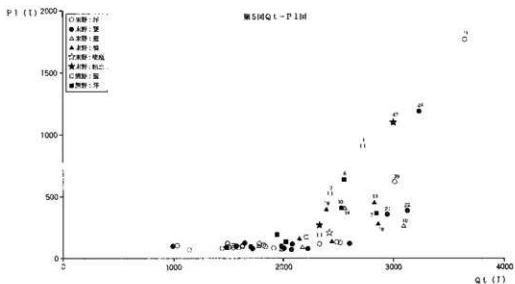
1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1-13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは Mont/Mont+Mica+Hb * 100でパーセントとして求め、同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1-4は Mont, Mica, Hb



の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、

c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト(Mullite)は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラス

の単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c) 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には平成10年度末野窯跡出土須恵器とともに平成9年度に分析した末野窯跡出土須恵器、熊野遺跡出土須恵器が記載してある。

第3表に示すように土器胎土はA～Gの7タイプに分類された。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。組成的にはBタイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Dタイプ：Mica, Chの2成分を含み、Mont, Hbの2成分に欠ける。

Eタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Fタイプ：Mont, Micaの2成分を含み、Hb, Chの2成分にかける。

Gタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。須恵器は高温焼成のために鉱物が分解してガラスに変質している。そのために4成分が検出されない。

分析した須恵器のほとんどが高温で焼成されているために4成分が検出されないGタイプとなっている。次いで、Eタイプの4個、AタイプとCタイプの各3個、BタイプとFタイプの各1個となる。DタイプとFタイプは末野窯跡から採取した粘土である。

3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

土器胎土に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作ると言うことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおおの同有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図Qt-Pl図に示すようにI-IIIの3グループと「その他」に分類された。

Iグループ：石英(Qt)の強度が900~1200の領域にあり、末野窯跡の坏と甕が共存する。

IIグループ：石英(Qt)の強度が1400~2800の領域にあって、末野窯跡主体部を構成する。末野窯跡の須恵器と熊野遺跡の土器の一部

が共存する。末野-46の粘土も共存する。

IIIグループ：石英(Qt)の強度が2800~3400の領域にあって、斜長石(Pl)の強度が200~1200の広い領域にある。このグループの須恵器は焼成温度が低い。末野-47の粘土も共存する。

「その他」：末野：3号灰原-15と末野-11はともに斜長石(Pl)の強度が1000以上と高く、異質である。焼成温度が低く、斜長石のガラス化が進んでいない。

4 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、平成10年度末野窯跡出土須恵器とともに平成9年度に分析した末野窯跡出土須恵器、熊野遺跡出土須恵器を化学分析した。

分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃図、第7図Fe₂O₃-MgO図、第8図K₂O-CaO図を作成した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すようにI-IVの4グループと「その他」に分類された。

Iグループ：SiO₂が54~64%、Al₂O₃が18~26%の領域にあって、末野窯跡の主体部を構成するもので、97末野窯跡(6~7℃)と98末野窯跡(7~8℃)の窯跡から出土した須恵器が集中し、熊野遺跡の須恵器も共存する。器種による明白な分類は認められない。末野-46の粘土が含まれる。

IIグループ：SiO₂が56~60%、Al₂O₃が20~25%の領域にあって、末野：3号窯灰原の須恵器が集中する。

IIIグループ：SiO₂が62~65%、Al₂O₃が22~25%の領域にあって、末野：外窯-1号の須恵器が集中する。

IVグループ：SiO₂が64~68%、Al₂O₃が18~22%の領域にあって、末野：1~3号窯と外窯-2号の須恵器が共存する。

「その他」：末野-25の甕と末野-47の粘土はSiO₂

が55%以下と少なく、異質である。

4-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について

第7図 Fe_2O_3 - MgO 図に示すように、I～IIIの3グループと“その他”に分類された。

Iグループ： Fe_2O_3 が6～13%、 MgO が0.4～1.3%の領域にあって、木野窯跡の主体部が集中する。熊野遺跡の須恵器も共存する。木野-46の粘土も共存する。

IIグループ： Fe_2O_3 が9～13%、 MgO が1.5～2.0%の高い領域にあって、熊野遺跡の須恵器が集中する。

IIIグループ： Fe_2O_3 が14～17%の高い領域、 MgO が0.8～1.0%の領域にあって、木野窯跡の3号窯灰原の須恵器が集中する。

“その他”：木野-17と19の甕と熊野遺跡-4の蓋は Fe_2O_3 が5%以下と小さく、異質である。

4-3 K_2O - CaO の相関について

第8図 K_2O - CaO 図に示すように、IとIIの2グループと“その他”に分類された。

Iグループ： K_2O の値が1～1.8%の低い領域にあって木野窯跡の1～3号窯と外窯-1と2の6～7℃の古い須恵器が集中する。

IIグループ： K_2O の値が2～4%の領域にあって、木野窯跡の7～8℃の新しい須恵器が集中し、熊野遺跡の須恵器が共存する。

“その他”：木野-25の甕と46の粘土はともに木野1～3号窯の領域にあり、異質である。

5 まとめ

1) 土器胎土はA～Gの7タイプに分類された。須恵器は高温で焼成されているために鉱物がガラスに変質し、そのほとんどがGタイプである。Eタイプは4個、AタイプとCタイプは各3個である。木野-46はFタイプ、木野-47はDタイプとともに土器と同じものではない。

2) X線回折試験に基づくQt-Pt相関では石英(Qt)

の強度が低い領域に木野窯跡主体部で焼成温度が高い須恵器が集中し、焼成温度の低い須恵器は石英(Qt)の強度が高く、斜長石(Pl)の強度が0～1500の高い強度の範囲で分散する。焼成温度の高い領域には木野-46の粘土が共存し、焼成温度の低い領域には木野-47の粘土が共存し、2つの粘土は異なるグループに属する。熊野遺跡の須恵器は焼成温度の低い領域と焼成温度の高い領域に分散し、2タイプある。

3) 化学分析結果では木野窯跡の須恵器はIグループの主体部とIIグループの3号窯灰原、IIIグループは外窯-1、IVグループは1～3号窯の須恵器と分類される。主体部をなす須恵器は SiO_2 が55～65%の領域に集中し、 Al_2O_3 が20～30%の広い領域で97年度分析の木野窯跡の須恵器と98年度分析の木野窯跡の須恵器が共存する。この領域の中での坪、蓋、甕などの異なる器種は独自の領域に集中するのではなく、全体に各器種は分散し、この領域全体で1つの胎土として各器種を共通する粘土で製作しているようである。熊野遺跡の須恵器はこの主体部の中に集中し、関連性は高い。

Fe_2O_3 の値が高い領域に木野窯跡の3号窯の灰原の須恵器があり、異質である。 Fe_2O_3 の値が5～12%の領域には木野窯跡主体部の須恵器と熊野遺跡の須恵器が集中する。 K_2O の値が低い領域に木野窯跡の1～3号窯の6～7℃の古い須恵器が集中し、 K_2O の値が高い領域に木野窯跡の7～8℃の新しい須恵器が集中し、両者は明瞭に分類される。後者の領域には熊野遺跡の須恵器は共存し、関連性が窺われる。このように見ると、木野窯跡の1～3号窯の6～7℃の古い須恵器と木野窯跡の7～8℃の新しい須恵器は基本的な化学組成、すなわち、 SiO_2 と Al_2O_3 の領域においては広い意味で同じ領域にあるが、

K_2O と CaO の領域においては異なる領域に分布することから推察して、本来の粘土は同じもので、水簸などの処理の工程の違いから微妙に分類される要素が生じたのではなかろうか。

第1表 胎土性状表(末野遺跡)

試料No	タイプ分類	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物															Au	ガラス	備考	
		Mo-Mt-Hb	Mo-Ch-Mt-Hb	Mont/Mica	Ilb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qtz	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	98							
末野97-1	A	5	20			63		1436	232	84	41									土師器環	1号窯7CE		
末野97-2	G	14	20					1587	69	399	165						163			須恵器環	1号窯7CE		
末野97-3	C	7	20			134	75	3166	709	81										土師器環	1号窯7CE		
末野97-4	G	14	20					1496	70	753	120						104			須恵器環	2号窯6CL		
末野97-5	G	14	20					1556	95	742	171						201			須恵器環	2号窯6CL		
末野97-6	G	14	20					2585	221	262	141						109			須恵器環	2号窯6CL		
末野97-7	G	14	20					1804	73	368	118						91			須恵器環	3号窯6CL		
末野97-8	G	14	20					1973	266	596	69						73			須恵器環	3号窯6CL		
末野97-9	G	14	20					1550	82	419	89						90			須恵器蓋	3号窯6CL		
末野97-10	G	14	20					1860	161	313	120						106			須恵器蓋	3号窯6CL		
末野97-11	G	14	20					1444	96	305	139						146			須恵器長須恵	3号窯6CL		
末野97-12	G	14	20					1658	123	531	81						68			須恵器環	3号窯6CL灰原		
末野97-13	G	14	20					2291	264	123										須恵器環	3号窯6CL灰原		
末野97-14	G	14	20					2303	314	111										須恵器蓋	3号窯6CL灰原		
末野97-15	G	14	20					1506	1060	502	36									須恵器蓋	3号窯6CL灰原		
末野97-16	E	8	20			63		2196	435	97							82			須恵器蓋	3号窯6CL灰原		
末野97-17	G	14	20					2050	152	124	44						145			須恵器環	3号窯6CL灰原		
末野97-18	G	14	20					1471	76	774	133						127			須恵器蓋	外窯-1		
末野97-19	G	14	20					1469	91	814	155						142			須恵器環	外窯-1		
末野97-20	B	6	20			61	65	1837	348	134										須恵器蓋	外窯-1		
末野97-21	G	14	20					1800	109	369	140						120			須恵器環	外窯-2		
末野97-22	G	14	20					1696	75	377	153						190			須恵器環	外窯-2		
末野97-23	G	14	20					2029	440	896	116						113			須恵器蓋	外窯-2		
末野-1	G	14	20					1838	98	122	119						113			須恵器環	7-8CE		
末野-2	G	14	20					1543	90	142	58						140			須恵器環	7-8CE		
末野-3	G	14	20					1140	72	118	142						154			須恵器環	7-8CE		
末野-4	G	14	20					1504	94	157	135						191			須恵器環	7-8CE		
末野-5	G	14	20					1628	99	145	76	141					155			須恵器環	7-8CE		
末野-6	G	14	20					2488	134	285	138						127			須恵器環	7-8CE		
末野-7	G	14	20					2330	120	168	100						104			須恵器環	7-8CE		
末野-8	G	14	20					1989	82	239	76						78			須恵器蓋	7-8CE		
末野-9	G	14	20					2176	99	175	80						131			須恵器蓋	7-8CE		
末野-10	G	14	20					3093	271	129										須恵器蓋	7-8CE		
末野-11	E	8	20			169		3649	1769	90							70			須恵器環	7-8CE		
末野-12	G	14	20					1779	103	163	75						84			須恵器蓋	7-8CE		
末野-13	G	14	20					2831	456	146										須恵器蓋	7-8CE		
末野-14	G	14	20					2563	413	181										須恵器蓋	7-8CE		
末野-15	G	14	20					2324	270	158	69						66			須恵器蓋	7-8CE		
末野-16	G	14	20					2865	286	127	64						109			須恵器蓋	7-8CE		
末野-17	G	14	20					2148	165	177	81						81			須恵器蓋	7-8CE		

試料 No.	タイプ分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														造 路 名	
		Mo-Mn-Fe	Mo-Ox-Mn-Fe	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au		
木野-18	G	14	20						2445	142	224	78				160		須恵器高台付盤	7-8CE
木野-19	E	8	20		214				2397	401	140							須恵器高盤	7-8CE
木野-20	G	14	20						2426	211	148					104		須恵器積板	7-8CE
木野-21	G	14	20						2944	359	124	61				111		須恵器環	7-8CE
木野-22	G	14	20						3126	389	131					98		須恵器環	7-8CE
木野-23	G	14	20						1723	81	233	134				165		須恵器環	7-8CE
木野-24	G	14	20						3236	1190	122							須恵器環	7-8CE
木野-25	A	5	20			63			1706	96	150	163				148		須恵器環	7-8CE
木野-26	G	14	20						1573	100	135	200				174		須恵器環	7-8CE
木野-27	G	14	20						2085	119	186	76				83		須恵器環	7-8CE
木野-28	G	14	20						993	99	134	262				218		須恵器環	7-8CE
木野-29	G	14	20						2009	83	148	179				226		須恵器環	7-8CE
木野-30	G	14	20						1985	99	121	111				118		須恵器環	7-8CE
木野-31	G	14	20						2603	123	169	130				149		須恵器環	7-8CE
木野-32	G	14	20						1651	125	212	107				186		須恵器環	7-8CE
木野-33	G	14	20						2222	80	304	189				246		須恵器環	7-8CE
木野-34	G	14	20						1480	92	166	224				233		須恵器環	7-8CE
木野-35	G	14	20						2075	74	155	161				211		須恵器環	7-8CE
木野-36	A	5	20			77			1030	106	178	201				175		須恵器環	7-8CE
木野-37	G	14	20						1492	124	139	135				107		須恵器環	7-8CE
木野-38	G	14	20						1596	90	142	80				130		須恵器環	7-8CE
木野-39	G	14	20						3014	622	182							須恵器環	7-8CE
木野-40	G	14	20						2523	128	154	82				74		須恵器環	7-8CE
木野-41	G	14	20						1915	85	143	74	123			151		須恵器環	7-8CE
木野-42	G	14	20						1786	121	150	88	141			93		須恵器環	7-8CE
木野-43	G	14	20						1442	82	133	217				223		須恵器環	7-8CE
木野-44	G	14	20						1633	106	163	139				121		須恵器環	7-8CE
木野-45	G	14	20						1826	109	348	84						須恵器環	7-8CE
木野-46	F	10	17	362	115				2335	267				89				粘土	7-8CE
木野-47	D	8	8		143		183	100	3002	1103								粘土	7-8CE
熊野-1	E	8	20	148					2728	910	105							須恵器環	8CE
熊野-2	G	14	20						2211	175	198	67				59		須恵器環	8CE
熊野-3	G	14	20						2431	522								須恵器環	8CE
熊野-4	G	14	20						1549	101	991	206				170		須恵器環	8CE
熊野-5	G	14	20						2332	190	208							須恵器環	8CE
熊野-6	C	7	20		71	50			2554	638	118							須恵器環	8CE
熊野-7	G	14	20						2848	365	135		217					須恵器環	8CE
熊野-8	G	14	20						2027	134	228	97				92		須恵器環	8CE
熊野-9	G	14	20						1944	195	137	119				118		須恵器環	8CE
熊野-10	C	7	20		188	90			2529	415								須恵器高台付環	8CE

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射, Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Crist: クリソベラライト

Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫輝石

第2表 化学分析表

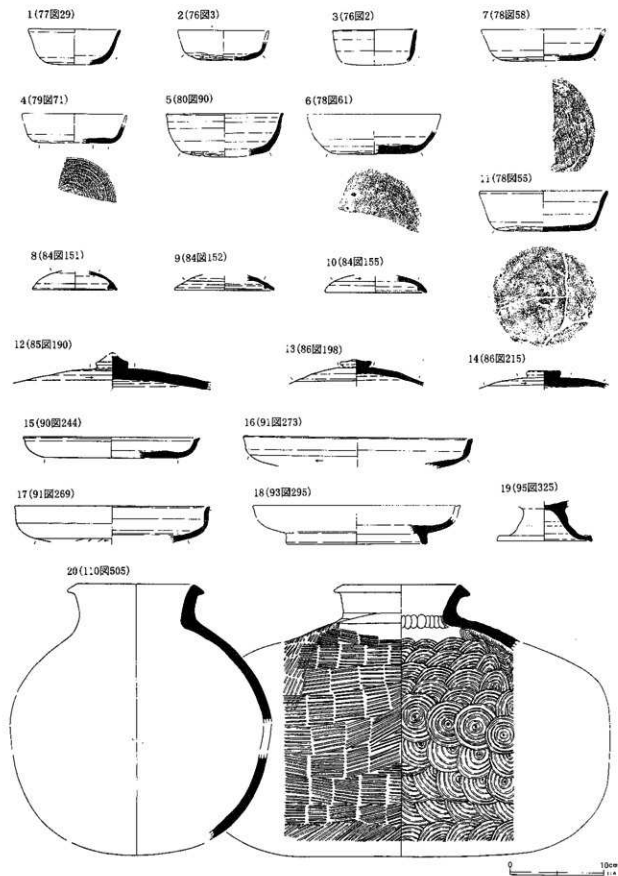
试料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備 考
未野7-1	0.94	3.18	32.20	33.73	1.01	0.99	2.51	1.35	24.09	0.00	100.00	1号室7CE
未野7-2	1.27	0.49	21.02	65.61	1.07	0.60	1.30	0.43	8.15	0.07	100.01	1号室7CE
未野7-3	1.04	0.26	25.20	57.63	2.55	1.66	1.83	0.00	9.83	0.00	100.00	1号室7CE
未野7-4	1.07	0.80	24.34	58.37	1.30	0.54	1.39	0.24	11.70	0.25	100.00	2号室6CL
未野7-5	1.49	0.80	25.46	61.85	1.58	0.51	1.54	0.31	6.42	0.03	99.99	2号室6CL
未野7-6	1.78	0.64	21.00	66.98	1.33	0.67	1.12	0.24	6.24	0.00	100.00	2号室6CL
未野7-7	1.84	0.79	21.02	66.89	1.16	0.63	1.57	0.04	9.36	0.09	100.00	2号室6CL
未野7-8	1.68	0.81	23.22	59.93	1.75	1.39	1.22	0.26	9.74	0.00	100.00	3号室6CL
未野7-9	1.62	0.86	20.29	65.35	1.70	0.40	0.84	0.00	8.93	0.00	99.99	3号室6CL
未野7-10	1.49	0.89	21.29	62.63	1.42	0.60	1.55	0.42	9.49	0.21	99.99	3号室6CL
未野7-11	1.19	0.71	20.83	67.14	1.31	0.50	0.98	0.00	7.33	0.00	99.99	3号室6CL
未野7-12	1.26	1.05	23.10	57.97	3.20	0.33	1.41	0.00	11.49	0.20	100.01	3号室6CL
未野7-13	1.02	0.82	24.18	60.31	1.53	0.29	1.35	0.31	10.07	0.12	100.00	3号室6CL
未野7-14	0.99	0.78	20.77	59.03	1.46	0.48	0.90	0.08	15.52	0.00	100.01	3号室6CL
未野7-15	1.33	0.87	21.77	57.77	1.35	0.51	1.61	0.10	14.68	0.00	99.99	3号室6CL
未野7-16	0.90	0.86	23.30	56.10	1.20	0.48	1.05	0.26	15.85	0.00	100.00	3号室6CL
未野7-17	0.88	0.77	17.98	63.59	1.19	0.49	0.44	0.01	14.64	0.00	99.99	3号室6CL
未野7-18	1.24	0.58	24.38	63.18	1.16	0.74	1.13	0.00	7.41	0.17	100.00	外壁-1
未野7-19	0.85	0.63	24.50	61.66	1.41	0.37	1.44	0.33	8.50	0.11	100.00	外壁-1
未野7-20	0.53	0.77	25.74	63.69	1.30	0.36	1.16	0.29	6.17	0.00	100.01	外壁-1
未野7-21	1.38	0.76	21.05	65.13	1.15	0.42	0.90	0.00	8.70	0.52	100.01	外壁-2
未野7-22	1.31	0.59	18.90	69.41	1.26	0.64	0.94	0.00	8.89	0.05	99.99	外壁-2
未野7-23	1.12	0.47	24.55	64.32	1.32	0.37	1.39	0.00	6.46	0.00	100.00	外壁-2
未野-1	1.28	1.26	12.56	41.02	3.02	0.5	1.44	0.98	9.05	0.00	100.00	7-8CE
未野-2	1.35	0.83	24.23	57.15	3.71	0.49	1.33	0.81	10.09	0.99	99.99	7-8CE
未野-3	1.42	0.79	25.25	59.15	3.46	0.52	1.32	0.76	7.36	0.99	99.98	7-8CE
未野-4	1.26	0.88	24.78	60.72	2.75	0.47	1.05	0.43	7.54	0.13	100.01	7-8CE
未野-5	0.8	0.94	24.58	57.18	3.68	0.42	1.32	1.04	10.05	0.00	100.01	7-8CE
未野-6	1.23	0.77	20.59	55.75	2.5	0.43	1.55	0.23	6.45	0.09	99.99	7-8CE
未野-7	1.22	1.04	25.28	60.07	2.95	0.41	1.18	0.44	7.2	0.2	99.99	7-8CE
未野-8	1.1	0.89	28.33	56.49	3.06	0.42	1.46	0.37	7.96	0.99	99.98	7-8CE
未野-9	0.79	0.47	21.97	63.33	3.1	0.52	1.22	0.26	8.26	0.09	100.01	7-8CE
未野-10	1.04	0.92	25.73	57.77	3.09	0.46	1.51	0.87	8.62	0.00	100.01	7-8CE
未野-11	0.64	0.79	28.29	57.42	2.41	0.55	1.19	0.49	8.01	0.21	100.00	7-8CE
未野-12	1.3	0.94	23.47	62.12	2.78	0.39	1.08	0.55	7.22	0.15	100.00	7-8CE
未野-13	1.18	0.88	26.43	55.55	3.03	0.49	1.45	0.79	10.23	0.10	100.00	7-8CE
未野-14	2.64	0.42	21.98	60.48	2.2	0.42	1.1	0.83	9.7	0.23	100.00	7-8CE
未野-15	2.99	0.54	24.52	61.03	2.49	0.64	1.14	0.42	6.21	0.01	99.99	7-8CE
未野-16	1.08	0.74	26.33	59.24	3.44	0.43	1.15	0.42	7.13	0.06	100.02	7-8CE
未野-17	4.4	0.43	24.35	62.22	2.63	0.63	1	0.24	4.11	0.00	100.01	7-8CE
未野-18	1.41	0.82	22.18	57.56	2.43	0.5	1.05	0.62	13.01	0.42	100.00	7-8CE
未野-19	0.72	0.13	28.53	61.37	2.34	0.48	1.25	0.23	4.66	0.29	100.00	7-8CE
未野-20	1.56	0.69	24.02	57.56	2.27	0.51	1.18	0.51	11.66	0.04	99.99	7-8CE
未野-21	1.45	0.46	23.57	59.76	2.31	0.39	1.14	0.33	10.37	0.02	100.00	7-8CE
未野-22	1.72	0.43	23.66	62.21	2.63	0.49	1.02	0.51	7.63	0.00	100.00	7-8CE
未野-23	1.83	0.78	21.35	59.5	2.44	0.6	1.14	0.63	11.37	0.15	99.99	7-8CE
未野-24	1.48	0.96	26.91	59.39	2.96	0.4	1.39	0.22	6.26	0.03	100.00	7-8CE
未野-25	0.99	1.71	31.36	51.04	1.67	0.64	1.23	1.06	10.3	0.00	100.00	7-8CE
未野-26	1.74	0.85	25.57	59.22	3.02	0.57	0.98	0.63	7.11	0.3	99.99	7-8CE
未野-27	0.83	0.81	27.07	56.47	3.05	0.51	1.72	0.63	8.63	0.28	100.00	7-8CE
未野-28	1.43	0.98	23.75	61.38	3.09	1.11	0.94	0.68	6.34	0.3	100.00	7-8CE
未野-29	1.39	0.78	23.65	57.45	2.36	0.55	1.2	1.05	11.56	0.99	99.99	7-8CE
未野-30	1.9	0.81	21.69	62.77	2.75	0.52	1.22	0.35	7.94	0.06	100.01	7-8CE
未野-31	1.75	0.86	24.18	60.87	2.5	0.7	1.07	0.68	7.39	0.00	100.00	7-8CE
未野-32	1.37	1.02	23.36	57.88	2.79	0.58	1.04	0.92	10.65	0.37	99.98	7-8CE
未野-33	1.59	0.78	22.22	63.01	2.19	0.83	1.04	0.61	7.73	0.00	100.00	7-8CE
未野-34	1.9	1.07	20.62	61.95	2.38	0.64	1.16	0.73	9.48	0.07	100.00	7-8CE
未野-35	1.67	1.17	24.18	57.62	3.01	0.7	1.22	0.99	9.23	0.22	100.01	7-8CE
未野-36	0.81	0.82	25.63	60.33	2.93	0.47	1.45	0.71	6.84	0.03	100.00	7-8CE
未野-37	1.31	0.83	23.11	59.3	3.13	0.59	1.45	1.2	9.09	0.00	100.01	7-8CE
未野-38	0.82	0.92	25.08	58.94	3.65	0.58	1.17	0.71	8.01	0.12	100.00	7-8CE
未野-39	1.27	0.89	25.69	57.44	3.14	0.54	1.22	0.63	9.19	0.00	100.01	7-8CE
未野-40	1.18	0.9	24.23	59.31	3.16	0.47	1.33	0.74	8.49	0.18	99.99	7-8CE

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備 考
水野-41	0.77	1.03	24.5	59.01	3.31	0.51	1.13	0.74	8.93	0.05	99.98	須恵器杯 7-8CE
水野-42	1.13	0.71	26.75	58.26	2.78	0.53	1.21	0.6	7.53	0.51	100.01	須恵器杯 7-8CE
水野-43	1.16	1.124	24.58	58.92	2.92	0.48	1.41	1.17	8.6	0	100	須恵器杯 7-8CE
水野-44	1.63	0.79	23.18	61.42	3.68	0.68	1.3	0.65	6.67	0	100	須恵器杯 7-8CE
水野-45	0.92	0.86	23.87	58.86	2.8	0.43	1.18	0.85	10.03	0.17	99.99	須恵器杯 7-8CE
水野-46	0.16	1.14	26.74	57.06	1.38	0.68	1.12	0.7	10.76	0.05	99.99	粘土 7-8CE
水野-47	0.69	1.03	26.31	52.46	2.73	0.67	1.74	1.21	13.06	0.99	99.99	粘土 7-8CE
熊野-1	0.36	1.07	27.94	56.94	2.5	0.56	1.17	0.81	8.2	0.43	99.98	須恵器蓋 8CE
熊野-2	1.35	1.93	23.68	56.47	2.84	0.52	1.2	1.21	10.77	0.02	99.99	須恵器蓋 8CE
熊野-3	1.82	1.55	23.63	56.19	2.03	0.39	1.5	0.9	11.79	0	100	須恵器蓋 8CE
熊野-4	0.66	0.43	26.64	63.89	2.05	0.37	1.22	0.46	3.95	0.34	100.01	須恵器蓋 8CE
熊野-5	1.1	1.12	24.97	58.29	2.67	0.79	0.97	0.66	8.94	0.49	100	須恵器蓋 8CE
熊野-6	0.56	1.01	25.49	58.44	3.1	0.5	1.51	1.18	8.22	0.02	100.03	須恵器杯 8CE
熊野-7	0.51	1.126	98.57	23.372	0.49	1.43	0.78	7.76	0	100	須恵器杯 8CE	
熊野-8	1.25	0.77	25.19	59.28	2.71	0.59	1.23	0.51	8.33	0.14	100.01	須恵器杯 8CE
熊野-9	1.34	0.87	24.97	58.2	2.76	0.69	1.58	0.71	8.56	0.32	100	須恵器杯 8CE
熊野-10	0.3	1.05	27.73	54.94	2.41	0.99	1.17	0.87	10.31	0.24	100.01	須恵器高台杯 8CE
											0	

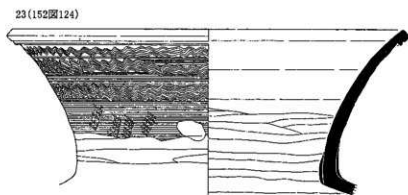
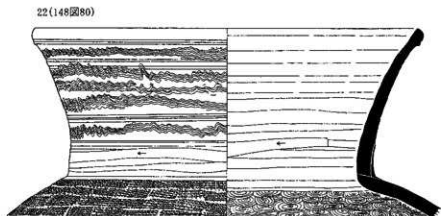
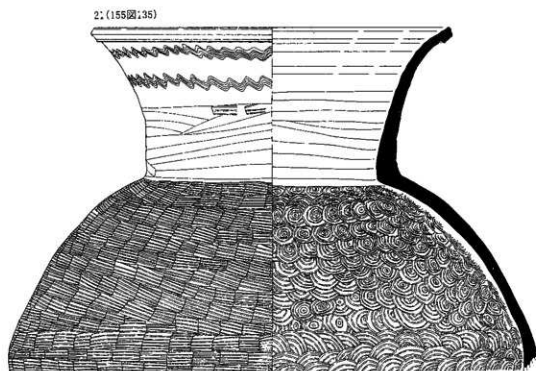
第3表 タイプ分類一覧表

試料 No	タイプ分類	備 考	試料 No	タイプ分類	備 考
水野97-1	A	土師器杯 1号室7CE	水野-9	G	須恵器蓋 7-8CE
水野-25	A	須恵器蓋 7-8CE	水野-10	G	須恵器蓋 7-8CE
水野-36	A	須恵器杯 7-8CE	水野-12	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-20	B	須恵器蓋 外窯-1	水野-13	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-3	C	土師器蓋 1号室7CE	水野-14	G	須恵器蓋 7-8CE
熊野-6	C	須恵器蓋 8CE	水野-15	G	須恵器蓋 7-8CE
熊野-10	C	須恵器高台杯 8CE	水野-16	G	須恵器蓋 7-8CE
水野-47	D	粘土 7-8CE	水野-17	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-16	E	須恵器蓋 3号室6CL灰原	水野-18	G	須恵器高台付盤 7-8CE
水野-11	E	須恵器杯 7-8CE	水野-20	G	須恵器横板 7-8CE
水野-19	E	須恵器高盤 7-8CE	水野-21	G	須恵器蓋 7-8CE
熊野-1	E	須恵器蓋 8CE	水野-22	G	須恵器蓋 7-8CE
水野-46	F	粘土 7-8CE	水野-23	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-2	F	須恵器蓋 1号室7CE	水野-24	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-4	G	須恵器杯 2号室6CL	水野-26	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-5	G	須恵器蓋 2号室6CL	水野-27	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-6	G	須恵器蓋 2号室6CL	水野-28	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-7	G	須恵器杯 3号室6CL	水野-29	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-8	G	須恵器杯 3号室6CL	水野-30	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-9	G	須恵器蓋 3号室6CL	水野-31	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-10	G	須恵器蓋 3号室6CL	水野-32	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-11	G	須恵器長頸壺 3号室6CL	水野-33	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-12	G	須恵器杯 3号室6CL灰原	水野-34	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-13	G	須恵器杯 3号室6CL灰原	水野-35	G	須恵器蓋 7-8CE
水野97-14	G	須恵器蓋 3号室6CL灰原	水野-37	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-15	G	須恵器蓋 3号室6CL灰原	水野-38	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-17	G	須恵器蓋 3号室6CL灰原	水野-39	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-18	G	須恵器蓋 外窯-1	水野-40	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-19	G	須恵器杯 外窯-1	水野-41	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-21	G	須恵器杯 外窯-2	水野-42	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-22	G	須恵器蓋 外窯-2	水野-43	G	須恵器杯 7-8CE
水野97-23	G	須恵器蓋 外窯-2	水野-44	G	須恵器杯 7-8CE
水野-1	G	須恵器杯 7-8CE	水野-45	G	須恵器杯 7-8CE
水野-2	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-2	G	須恵器蓋 8CE
水野-3	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-3	G	須恵器蓋 8CE
水野-4	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-4	G	須恵器蓋 8CE
水野-5	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-5	G	須恵器蓋 8CE
水野-6	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-7	G	須恵器杯 8CE
水野-7	G	須恵器杯 7-8CE	熊野-8	G	須恵器杯 8CE
水野-8	G	須恵器蓋 7-8CE	熊野-9	G	須恵器杯 8CE

第9圖 胎土分析資料(1)



第10圖 胎土分析資料(2)



0 10cm
1:1

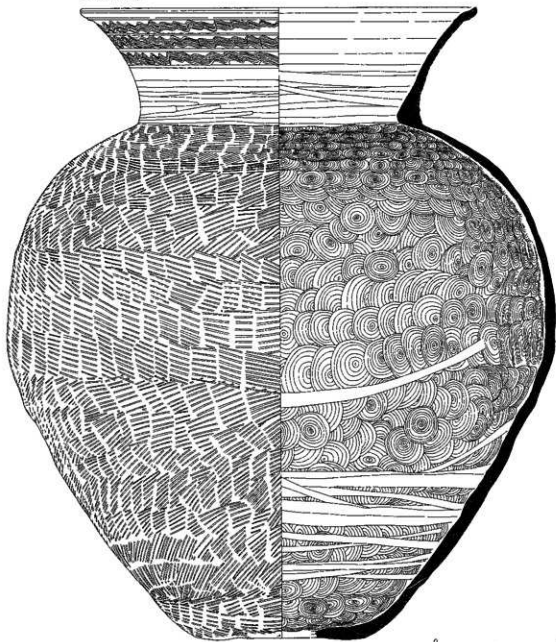
第11圖 胎土分析資料(3)

24 (146圖74)



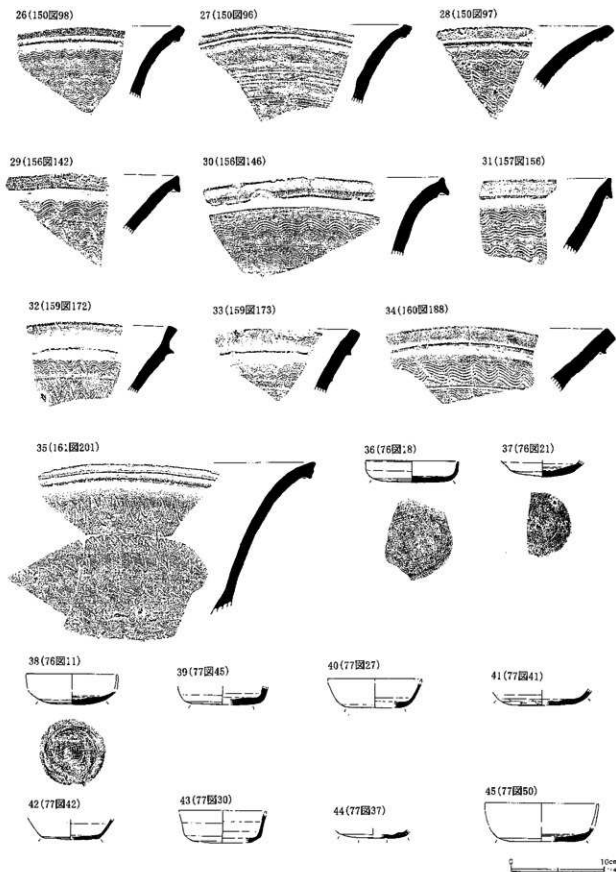
0 10cm

25 (147圖76)



0 20cm

第12圖 胎土分析資料(4)



2. 末野東灰原出土炭化材の樹種

パブリコ・サーヴェイ株式会社

はじめに

末野遺跡は、荒川右岸の山地緩斜面～河岸段丘上(寄居面)に位置する。堀口(1986)によれば、河岸段丘は荒川扇状地を侵食して形成された侵食段丘で、立川面に対比されている。今回の発掘調査により、平安時代の須恵器窯が検出され、燃料材などの一部と考えられる木材や木製品などが出土している。そのうち、須恵器窯の燃料材と考えられる西灰原出土材については、すでに樹種同定が行われており、アカガシ亜属を中心とした種類構成が認められている(未公表資料)。

今回は、西灰原よりもやや新しいとみられる東灰原から出土した炭化材の樹種を明らかにするとともに、前回の同定結果と比較を行い、用材の変遷等について検討する。

1. 試料

試料は、東灰原から出土した炭化材5点(試料番号1～5)である。各試料の詳細については、同定結果とともに、表1に記した。

2. 方法

各試料の木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

同定結果を表1に示す。炭化材は、いずれも広葉樹で5種類(ブナ属・コナラ属コナラ亜属クスギ節・コ

ナラ属アカガシ亜属・カツラ・カエデ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ブナ属(*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は大型で対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔環部は1～4列、孔環外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものから複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射状方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものから複合放射組織とがある。柔細胞は結晶を含む。

・カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または複合して散在し、分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞高、1～30細胞高。

表1 東灰原出土炭化材の樹種同定結果

番号	出 土 位 置	時代・時期	樹 種
1	東灰原 112-23-14 灰原	8世紀初頭	カツラ
2	東灰原 113-23-11 灰原	8世紀初頭	コナラ属アカガシ亜属
3	東灰原 111-23-15 一面	7世紀末	カエデ属
4	東灰原 112-23-15 二面	7世紀後半	ブナ属
5	東灰原 113-23-21 二面	7世紀後半	コナラ属コナラ亜属クスギ節

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

4. 考察

東灰原の炭化材は全て広葉樹材であるが、樹種は全て異なっていた。この結果から、様々な種類の広葉樹材が燃料材として利用されていたことが推定される。このうち、クヌギ属、アカガシ亜属、カエデ属は、西灰原でも確認されている。とくにアカガシ亜属は、西灰原から出土した炭化材の中で最も多く確認された種類である。これは、鳩山窯跡群で確認された種類構成

(鈴木ほか, 1993) とも一致する。これらの点から、東灰原でも基本的にアカガシ亜属などを中心とした用材が行われていた可能性があるが、試料数が少ないため、その時期差等の実態については、いまのところ不明である。

今回確認された種類のうち、ブナ属については、現在の植生や生態を考慮すると、他地域から搬入された可能性がある。今後さらに資料を蓄積するとともに、出土遺物等から想定される物の流通状況などを考慮して、改めて検討したい。

引用文献

- 堀江萬吉 (1986) 埼玉県 の地形と地質, 「新編埼玉県史 別編3 自然」, p.7-80, 埼玉県, 鈴木三男・渡辺 一・能城修一 (1993) 埼玉県比企郡鳩山窯跡群 (8-9世紀) 出土炭化材の樹種と燃料材の用材, Ann. Sci. Kanazawa Univ., 30, p.65-88.